

竜と龍の血を継ぎし者
～英雄と狩人の証～
モンスターハンター
×僕のヒーローアカデ
ミア

アママサ二次創作

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モンスター。それは大自然にただ生きるものたち。

ハンター。大自然そのものであるモンスターと戦い、人々を守る存在。

その身に、異なる世界の生物、モンスターの人格と力を宿した少年、百龍呼人。彼は人格を獲得したモンスターたちに導かれ、成長しながら、かつてモンスター達と敵対した、『ハンター』と呼ばれる人間たちの心を追い求める。

彼らは何故強大な自分たちへ命を賭して立ち向かったのか。何故、自らの命を他者のために捨てたのか。何故、立ち向かうにも関わらず自分たちと手を取ろうとしたのか。

人格を持ったと言っても、モンスターはモンスター。だから、人間の心の全てはわか

らない。少年はそれを知るために、ヒーローという職業の門をたたく。

*本作は、ヒロアカの世界で個性らしきものとして『モンスターになる力とモンスター各種を擬人化した人格』を持った少年が、英雄高校で活動する物語です。

主人公の動機は作内でも書きますが、ヒーローへの憧憬でも、ヒーローになりたいからでもありません。むしろヒーローは目指してはいますが、緑谷みたいな強烈なあこがれは無いです。

本作は作者のヒーローとハンターの違いに関する疑問を内容として含みます。

主人公の宿したモンスターは基本的にゲームに登場する全種、ですが、力の扱いが困難という関係上禁忌だったり特別な古龍、またフロンティア系の一部なんかはほとんどできません。ただし人格は会話の相手としてでてきたりします。

主人公はモンスター達とのイメージ交換（言語を用いた会話ではなくイメージの交換）の中で、モンハンの世界を深く知っており、また人間的にも年齢相応以上に成熟しています。

後作者はモンハン狂ではありませんがヒロアカの読み込みは足りずまた最新話まで読んでいるわけではないので、変な所あったら教えて下さい。

最後に

*この作品については、一切の二次創作の二次創作（三次創作）を許可します。他サイトへの転載は、ハーメルンが許可していることを確認した上で、転載先のサイトも許可している場合にのみ許可します。

全文丸パクリの転載をハーメルン内で行うことは許可できませんが、作者の展開やセリフの言い回しが気に入らないときにはご自由に随意の場所だけ書き換えるなどして投稿して構いません。その場合の他の部分の一致は許可します。

三次創作を行う場合には、原作者の許可を得ている旨をあらすじに明記するように気をつけてください。

目次

| | | |
|------|-------------|-----|
| 第1話 | モンスターを宿す少年 | 1 |
| 第2話 | 入学試験 | 9 |
| 第3話 | 体力テスト1 | 26 |
| 第4話 | 体力テスト・2 | 41 |
| 第5話 | 実戦演習・1 | 51 |
| 第6話 | 実戦演習・2 | 68 |
| 第7話 | 百竜呼人の個性検証記録 | 83 |
| 第8話 | 学級委員長 | 93 |
| 第9話 | USJ襲撃事件・1 | 109 |
| 第10話 | USJ襲撃事件・2 | 124 |
| 第11話 | USJ襲撃事件・3 | 135 |

| | | |
|------|-----------|-----|
| 第12話 | USJ襲撃事件・4 | 147 |
| 第13話 | そして体育祭へ | 155 |
| 第14話 | 放課後訓練・1 | 167 |
| 第15話 | 放課後訓練・2 | 179 |
| 第16話 | 雄英体育祭・1 | 189 |
| 第17話 | 雄英体育祭・2 | 203 |
| 第18話 | 雄英体育祭・3 | 214 |
| 第19話 | 雄英体育祭・4 | 229 |
| 第20話 | 雄英体育祭・5 | 244 |
| 第21話 | 雄英体育祭・6 | 257 |
| 戸 | 百竜VS芦 | 257 |
| 第22話 | 雄英体育祭・7 | 269 |
| 第23話 | 雄英体育祭・8 | 269 |
| | 百竜VS常 | 269 |

| | | | | | |
|--|----------------------|-----|--|----------------|-----|
| | 閨 百竜VS爆豪 | | | | 281 |
| | 第24話 雄英体育祭・8 百竜VS轟 | | | 35 救助訓練レース・2 | 490 |
| | | | | 第36話 上鳴の向上心 | 506 |
| | 第25話 雄英体育祭終了『神に背いた男』 | 299 | | 第37話 期末試験直前 | 525 |
| | | | | 第38話 期末試験・1 | 537 |
| | 第26話 職場体験・0 | 344 | | 第39話 期末試験・2 | 555 |
| | 第27話 登攀訓練 | 363 | | 第40話 期末試験反省会 | 570 |
| | 第28話 職場体験・1 | 379 | | 第41話 模擬戦 | 587 |
| | 第29話 職場体験・2 | 394 | | 第42話 それぞれの決意 | 611 |
| | 第30話 職場体験・3 | 412 | | 第43話 それぞれの成長 | 633 |
| | 第31話 職場体験・4 | 427 | | 第44話 本気の発露 | 648 |
| | 第32話 職場体験・5 | 441 | | 第45話 ヒーローと社会 | 663 |
| | 第33話 職場体験・6 | 458 | | 第46話 呼人の過去と可能性 | 681 |

| | | | | | |
|------|-----------|-----|--------|--------------|------|
| 第47話 | 黒く蝕み地を染めん | 697 | 第60話 | 異国の少女とモンスター | |
| 第48話 | 宙を舞うは黒き翼 | 711 | 909 | | |
| 第49話 | 逃避行 | 730 | 第61話 | 死穢八齋會 | 923 |
| 第50話 | 帰還 | 745 | 第62話 | その男、生命を踏みにじり | |
| 第51話 | 神王寺という男 | 763 | 939 | | |
| 第52話 | 入寮 | 775 | 第63話 | 可能性の獣 | 950 |
| 第53話 | 必殺技とは | 790 | 第64話 | 文化祭へ | 966 |
| 第54話 | 自主訓練 | 805 | 第65話 | やってみよう | 978 |
| 第55話 | 対B組個人戦 | 820 | 第5話IF | (呼人が自重しない性格 | |
| 第56話 | 轟・awaking | 846 | だった場合) | | 994 |
| 第57話 | 仮免試験 | 860 | 第66話 | 個性とは | 1008 |
| 第58話 | ビッグ3 | 879 | 第67話 | 文化祭・1 | 1022 |
| 第59話 | 計画 | 898 | 第68話 | 文化祭・2 | 1035 |

| | | |
|------|------------|------|
| 第69話 | New Style | 1054 |
| 第70話 | — | 1080 |
| 第71話 | A組B組対抗訓練 | 1095 |
| 第72話 | A組B組対抗訓練・2 | 1108 |
| 第73話 | 圧倒するは竜 | 1124 |
| 第74話 | 竜の息吹く世界 | 1138 |
| 第75話 | 竜の力 | 1153 |
| 第76話 | あくまで訓練 | 1164 |
| 第77話 | 組織 | 1178 |
| 第78話 | — | 1194 |
| 第79話 | — | 1212 |
| 第80話 | — | 1230 |

1250 番外編：モンスターと個性訓練・1

第1話 モンスターを宿す少年

感じたのは、破壊的な爆発音と、その心地よさ。まだ幼い頃の、少ししか残っていない記憶。初めて彼らの力を借りた時の記憶だ。

『ラー、ガルルガ、また喧嘩してんの？』

』

目覚めてすぐに、頭の奥が騒がしいので思考に潜ってみると、またいつもの2頭が喧嘩をしていた。いつものことなので呼人は軽くしか注意しないし、周りの奴らも呆れた様子で見えて見ぬ振りをしている。老齢の連中の中には今すぐにでも止めに入りたそうにしている者も居るが、自分たちが参加したら2頭が余計ハッスルするだけだとわかっているの黙っている状態だ。

むしろ今にも混ざりたそうにしている他の喧嘩っ早い連中を抑えている方が良くと

判断している連中もいるが、とても止まりそうにない。

頭の奥で喧嘩したままの2頭から送られてくるイメージを意図的に遮断して、呼人は寝室からリビングに出る。カナダで生活していたときとは比べるべくもない広さの部屋だが、呼人にはあまり気にならない。むしろカナダの頃の家でも狭いと言えば狭いし、ここでも広いと言えば広い。

「グツモーニン、ミスターモンスター。昨晚はよく眠れたか？」

「その呼び方やめてくれって神王寺さん。呼人で良いよ」

「じゃあコールマン？」

おちやらけた様子でそう言う神王寺明博、同居人に、呼人は軽くため息をつくことしか出来ない。彼が自分の事を気遣ってくれようとしているのがわかるからだ。なにせ今日は呼人の人生始めての受験の日。なんなら学校という場所に行くことすら初めてである。

その直後、冷蔵庫から天然水のペットボトルを取り出した呼人が顔をしかめたのを見て、神王寺が興味深そうに尋ねる。

「どうした？」

「ラーとガルルガが喧嘩してるところに今オドと他何頭かが参戦した」

「それはまた、派手だな」

いつにもまして大規模なその喧嘩に、神王寺も苦笑いする。大抵は若い2頭が喧嘩していて老齢の連中にたしなめられるか、年寄連中が喧嘩していて周りから冷めた目で見られて恥ずかしくなってやめるかなのだが、今日に限っては戦火が拡大したのである。『ゾラ、喧嘩してる奴らのイメージ切つとくから何か言つてたら教えて』

『――』

竜たちの中でも温厚で皆の親父分とも言えるゾラに頼むと、心よく了解してくれた。というかゾラに沈めてもらえば一応止まるには止まるのだが、日本に戻ってからハッスルさせられていないためうまく息抜きしてもらわないと困るのである。

「思いつきり動ける場所がありやあな」

「流石にここじゃあ無理だ。北海道とか東北の山奥ならまだ大丈夫だろうが」

「はあ……憂鬱だ」

こんなので学校生活やっていけるのかと。そもそも受かつてはいないのだが、それは神王寺も呼人も気にしてはいない。少なくとも呼人の感性や実力、そして個性は、神王寺の母校でも通用すると神王寺はわかっていた。

この世界で呼人と竜たちの他に唯一彼らの事を知っているのが神王寺なのだ。神王寺しか知らないのはいくつかの理由があるが、彼の個性が特例特殊であり、個性研究の第一人者たる神王寺をして『これ研究しても意味ないわ』と言わしめた上に、研究でき

ないとわかっていても利用したいと思うぐらいには有用な特性を持つていることが大きな理由の一つである。

個性。それは超常の力。

首が伸びる、体の一部が変質する、水を操るエトセトラ。

かつては超能力、異能の力などとも呼ばれていたようなそれらは、ある時期を堺に多くの人間に普及し、今ではある種の、『髪が黒い』や『薬指が人差し指より長い』と言った個性と同等のものとして扱われるようになり、正式名称として“個性”という名を関するに至った。

そんな超常の力は、当然の如くそれまでの身体能力と言った差異とは一線を画した影響を社会にもたらした。

当然の話しはあるが、個性を使用できない頃の人間の身体能力は機械に到底及ばないものであるし、筋力以外のエネルギー発揮の手段を持たないため、身体を鍛えた警察と警察組織にのみ許された銃火器によって簡単に制圧しうるものであった。

だが、個性が全てを変えた。ものによっては原理不明。ものによっては物理法則を突破。ものによってはオーバーテクノロジー。ものによっては――。

研究した所で明確な法則が見つからず、それ故本人以外には制御が出来ないどころか本人ですら制御できないことがある。

そんなものが悪事に利用されれば――。

そうして、《ヴィラン》と《ヒーロー》という存在が現れた。前者は、犯罪者の中でも一般に禁止された個性の悪事への利用をする者として。そして後者は、そうしたヴィランを始めとした脅威から市民を守る存在として。

ただヴィランの対としての存在ではなく、災害救助、医療、復旧活動、果ては料理など、要するに個性をもって市民に寄与する存在がヒーローと呼ばれる。

「俺はしばらく出てくるけど、何か必要なものはあるか？」

「どこ行くの？ 自然あるところ？」

「まあそうだな。今回は沖縄まで行ってくる」

「ん、じゃあ現地の写真と海水のサンプルよろしく」

「飽きねえなお前も」

「俺じゃねえって」

神王寺が出張で各地に赴く度に、呼人はこうして現地の自然を感じられるものを要求

する。これは何も呼人が必要としていたのではなく、呼人の中に宿るモンスター達が、その魂に染み付いた大自然への渴望を満たすために要求しているのだ。そもそも彼らの力を借りなければただの人間である呼人が、各地の海水のサンプルなんてもらっても意味が無いのである。

先に神王寺が部屋を出る。借りているのは都内の通常のアパート。支払いは呼人と神王寺の半々だ。外見はただの部屋だが、内装、とくに呼人の自室に置かれているものは、特殊な材質で作られたものばかりが置かれている。

『わかってるってジョー。ちゃんと飯食うから。喧嘩は終わった？』

『そうか。ありがと』

食事にうるさい、というよりは神経質なジョーの伝えてきたイメージに、呼人もいつものように答える。ジョーや他の連中と交わってきたイメージによると、彼女の種は身体的に常時空腹かつエネルギーを補給しなければ死んでしまうという存在であったため、生前は延々ととにかくを食べていたらしい。そんな彼女だから、食事をしっかり取ることにはうるさいのだ。

それだけでなく神王寺の個性はエネルギーを多量に消費する。相当量食べることが

必要なのである。

ちなみに実体を持っていた頃は小型モンスターや竜どころか龍の連中すらも畏れていたジヨードだが、空腹になることが無くなった今はかなりおとなしくなっている。というより他に喧嘩っ早い連中が多すぎて目立っていない。まあ今でもおいしい物を呼人が食べると味覚を共有して楽しんではいるのだが。

「ごちそうさまでした」

ざつと5人以上。それを食べるのに20分もかからない。この辺り、基本的に大型で大食らいな竜達とたくさんイメージを交わしてきたため、呼人の感覚はおかしくなっている。

出掛けの準備を終えた呼人は、今日のためだけに神王寺が用意してくれた学生服を着用し、鏡の前に立つ。

両親から受け継いだ黒髪を短く切りそろえ、今日の目の色は暗い赤。口を軽く開けると、その犬歯が牙のように顎まで伸びた後もとに戻る。

「よし、それじゃあ、行ってきます」

返事が無い部屋へと向かって、それでも呼人は声をかけて家を出る。自分を人間の世界へと縛り付けるために。

これは、狩人と英雄の物語。龍と竜の血を継いだ少年の、狩人の心をたどる、物語である。

第2話 入学試験

受験会場である雄英高校。そこに到着した呼人は、人間の群れを抜けて指定された大教室へと移動する。

ずっと自然の中でただ神王寺とだけ接してきたため、人間がこうも大量に居るといふ状況には慣れていない呼人だが、そこはゾラやジエンなど、人格を獲得した際に経験豊富な老人となつた龍たちから心構えを教えられているので、特にこれといった問題は無い。

時間に余裕を持たせるために少しばかり早く来すぎたため、常に2、3冊携帯している書籍を開く。今読んでいるのは、アフリカという地域の自然に関する本だ。竜達からたくさん自然についてのイメージをもらった呼人はこの世界の自然にも興味を持っており、また呼人の中に居る竜や龍たちの中でもそういった好奇心が強い者たちは呼人の目を通して書籍を楽しんでいたりするのだ。

まあ時々呼人より読むのが遅いモンスターがついていけずに凹んでいたりするが、様式美というやつだ。

呑気に書籍を開いて読んでいる呼人に周囲の一部は奇異の目を向けるが、それを感じ

ながらも呼人は気にしない。明確な殺意は感じないからだ。せいぜい感じるのは苛立ち、焦り、あるいは不安。害が無いとわかっているのに不必要に反応はしない。下手にちよつかいをかければ痛い目を見るのは己。野生の掟である。まあ腹が減ったジョーや、普段のガルルガにラー辺りは目があっただけで喧嘩を売ったりするわけではあるが。

やがて時間となり、前から一人の人間が部屋に入ってくる。

『リスナーのみんなあー！ 今日俺のライブへようこそー!!』

部屋に入って一番にそう奇声を上げた人物に対する皆の反応は、反応しない、というものであった。無反応な理由はそれぞれあるうが、入ってきた人物はめげずに説明を始める。というよりそこまで織り込み済みだったのだろう。

『オーケー、オーケー！ それじゃ早速説明を始めるぜ！』

そう言つて男は説明を始める。ちなみに彼はボイスヒーロー『プレゼント・マイク』。プロヒーローでありながらラジオ番組をやったり教師をやったりと何かと忙しい男である。

『早速だがこの後は、入試要項通りに『模擬市街地演習』だ!! 持ち込み自由だから持つてくの忘れんなよ!!』

その言葉を聞きながら、呼人は配られたプリントに目を通していく。

試験時間は10分。

演習場には4種類の仮想敵があり、そのうちの3種類にはそれぞれポイントが割り振られている。それを倒してポイントを獲得、その点数を競い合うといったものだ。

また4種類目の仮想的にはポイントが割り振られていないようだが……おそらくは乱入といったところであろう。モンスター達の中には、ハンターと他のモンスターが戦っている場所に乱入した事があるものも大勢いる。

そういうことから考えると、倒す必要もなく邪魔なだけの敵が紛れ込んでくる、というシチュエーションを示しているようだ。

「質問よろしいでしょうか！ プリントには4種類の敵が記載されています！ これに関する説明が無いということはこれは誤植でしょうか！ そうであればこの高校として恥ずべき痴態！ 説明を求めます！」

（凄いやつが居るな）

叫ぶように呼人が推測した事をマイクに向かって尋ねる男に対して、呼人はそんな感想を抱く。この衆人環視の環境でよくやる、と言ったところか。モンスター達との交流によってコミュニケーションに難は無い呼人だが、目立つのはまた別の話だ。所謂くそ度胸というやつである。

続けてその男……少年が何か別の受験生に向かって言っていたが、暇を持て余した呼

人の意識は開かれたままの書籍に戻っていた。その後のマイクの説明も正に予想通りのものであり、注意を払うには値しない。

気をつけるとすれば、4種類目の仮想敵の規模。ポイントが割り振られている3種類はポイント順に性能差があると考えられるが、4種類目は基準が無い。

ドスジャギイの狩猟において、ジャギイが来るのかイビルジョーが来るのかというのは大きな問題だ。

が。

なるようになる。そう考えた呼人は、無駄に悩むことをやめた。

説明が終わった後、受験生はそれぞれの試験会場に向けて指定されたとおりに分かれる。それぞれが動きやすい服装となり、また各自の個性を活かすための道具を持つものは持った上での集合だ。

すぐに着替えるなら学生服いらねーじゃん、などと呼人がモンスター達にぼやいたのは秘密だ。ついでにゾラやダレン、ジェンと言った常識的な龍達に場に合わせるという事を改めて教えられてしまった。

雑談、準備運動、瞑想に深呼吸、各自が各自の行動をする中、呼人もまた目を閉じて他の感覚に集中する。

音、そして何より嗅覚に。

それに合わせて呼人の耳と鼻が変形する。耳は形が無くなってただ赤黒い何かに覆われた穴へと変わり、鼻は狼のような、それでいてより鋭い物へと変わる。

と。その肩がポンポンと叩かれる。

「ん？」

近づいてくる気配には気づいていたが、戦場となるエリアへと素敵を伸ばしていたので反応しなかったのだ。そちらを振り返ると、何故か服が浮いている。

「ね、ねえねえ、耳大丈夫なの？ 血出てない？」

そう言われて、呼人は自分の状態を考える。言われてみれば、このモンスター、オドガロンの体表は赤黒く、見用によっては固まったあとの血である。そして構造上、人間と同じような外に見える耳は持たない。遠くから見ればもげているようにも見えないだろう。

「いや、個性だこれは」

そう言つて耳を人間とオドガロンの間で行ったり来たりさせると、透明人間の少女も納得した様子で何度も頷いていた。

「そっか。早とちりしてごめんね！」

ありがとう。そう返そうとして、呼人は人差し指を口にあてて、静かにするように促す。

「えっ?」

(なんだこの音は……。耳障りな……。モスキート音か?)

それと同時に、再び顕現させた呼人の鼻が、独特の匂いを嗅ぎ取る。オドガロンの慣れた腐臭でも生物の匂いでもない、機械の匂い。

「来る」

そう呟いた呼人は、透明人間の少女に背を向けて臨戦態勢に入る。足の筋繊維をモニターのものへと作り変え、体の構造も四足歩行に合わせたものへと変わる。そして――

『ハイッ!』

スタートオオオオ! と続くプレゼント・マイクの声を後ろに聞きながら、呼人は狩場へと突っ走る。獲物を感じた惨爪竜は、止まることを知らない。

スタート地点、戦場への入り口から視野に入らない位置にいた仮想敵に、呼人は一瞬で接触を果たす。純粹な走る速度で言えば、他の種を差し置いて上位にあるのがこのオドガロンというモンスターだ。狼をそのまま大きくした体躯に、特殊な筋肉。その走力

は、例え人間サイズにダウングレードしても、人間のかなうものではない。

『ブッコロス!』

数字を記された仮想敵、ロボットは、いささか物騒な事を言いながら呼人に迫るが、呼人はそれを意に介さず接近して、腕を叩き込む。

ただの腕では無い。四足歩行にも使用した、赤い剥き出しの筋肉に強靱な刃の如き爪を備えた腕だ。それは普段の鍛えてある呼人の腕よりも一回り大きく、1と書かれたロボットの頭を軽く吹き飛ばした。

「ちっ、胴体は……」

すぐさま次の獲物を定めて走り続ける呼人は、小さくそうつぶやく。

強靱な筋肉と爪を持つオドガロンだが、他の竜が持つような甲殻を持たない。そのため、力と重さで叩き潰すという戦法を取るには、人間大の大きさと剥き出しの肉の柔らかさはいささか不十分と言えた。それを頭部への攻撃で痛感した呼人は、戦い方を考える。

何も、むやみにぶん殴るのが戦い方ではない。モンスター達だって、相手の甲殻に指を差し込んで引つ剥がす、尻尾を引きちぎる、力を制御する部分を切り落とす、相手の柔らかい部分を殴るなど、戦い方を知っている。何より、見た狩人たちから学んで、それを呼人に教えていた。

突つ走る呼人の腕、その手に広がるように伸びていた二段階の爪が、大きく広がった鉤爪上から、拳の上から一本伸びるような巨大な刃となる。それを呼人は、ロボットの関節に問答無用で突きこんだ。

機械の、油の匂い。それを切り裂けばロボットはまともに機動しない。動かないように数力所潰す。そして複数体の間を縫うように駆け回りながら、各部位を破壊。大規模な破壊はいらない。動くためのパーツがなくなれば、人間だろうとモンスターだろうと、そして機械だろうと動かない。

最後に残った2Pの敵の足元に飛び込み、くぐり抜けながら脚部の関節部を切り裂く。そして5本目の足、尾を地面に押し付けて飛び上がると、首部分の装甲の隙間から、装甲の端ごと敵を切り裂いた。

(あれ、斬れる……。装甲が薄いのか)

鋭く形状変化させたとは言えオドガロンの爪では装甲は斬れないと呼人は判断していたが、受験生に破壊させるといふ目的もあって、仮想敵の装甲はそれなりのものに抑えられていた。それでも鉄剣ではとても斬れるようなものではないのだが、モンスター達の住んでいた世界では鉄というのは人間が容易に扱えるものの大抵の大型生物の持つ甲殻や爪と比べるとかなり劣った性能を持つものでしか無いのだ。

「次だ」

続けて、次の獲物を探すために呼人は走り出すと、走っている最中にその体表の様子が変わり、走る速度が落ちる。

赤黒い筋と肉のようなものの代わりに、黒く光を鈍く反射する鱗と、その隙間から毛が生え揃う。

身に宿すモンスターをオドガロンから変化させたのだ。この場合はテストの場であるのだが、呼人はそれを、高校でももに使用する予定の自分の能力と練度の再確認にあてようとしていた。

ちなみにその頃脳内ではモンスター達が人の体になって組手を始めていた。いつもの日課であるので、これを気にする事なく呼人は狩りを続ける。

試験時間が7分を過ぎた頃、70ポイント程を稼いだ呼人は、市街地に存在するビルの屋上からエリアを見下ろしていた。

(4種類目の敵がいらない)

エリア内を駆け巡りながら確認しておいた所、70ポイントを獲得している自分より戦闘のポイントを獲得しているものはいない様子であり、ポイントをそれ以上稼ぐ必要

は感じなかったので、4種類目の敵を探していたのである。

(もしかして、超小型か?)

確か、あのうるさい解説者は『おじやま虫』と言っていた。そうであれば、相手は虫のような大きさの可能性もある。モンスター達の記憶でも、戦闘中に小型の虫がハンターを麻痺させたりしている場面があった。そうであれば、高速で走り回っている自分が被害を受けない事もうなずける。

そんな呼人の考えは、非常に的を外していた。

直後、呼人の立っているビルからいくつか離れたところの建物が崩壊し、下から巨大な機械が出現する。その姿は4種類目の、『おじやま虫』のものであった。

「ブナハブラじゃなくてラージャンとかイビルジョーだったか」

はた迷惑にもハンターとモンスターの戦闘の場に殴り込みをかけていたイメージを何頭かから見せられていた呼人は、呆れたようにそう呟く。ターゲットの3種類より明らかにでかく、強い。それが4種類目の敵、おじやま虫の正体だった。

ビルと同じぐらい、あるいは大きいほどの大きさを持つおじやま虫に立ち向かう受験生はおらず、見える範囲で全てのものが逃げ惑っている。

だが、呼人は違った。

(あの人らは、こんなのに生身で挑んだのか)

それは、モンスターたちから伝えられたイメージに度々出てくる、人間たちの姿。ただモンスター達に狩られるのでも蹴散らされるのでもなく、時には4人一組で、そして時には1人で、災害そのものである古龍にすら挑んできた人間たち。彼らはどんな思いであつたのだろうか。

それを知りたい。

そんな時。

「あっ!？」

呼人の耳が、一つの悲鳴を捉える。匂いを辿つてみると、服が地面に倒れ込んでいるのが見えた。そしてその足があるであろう場所には、大きめの瓦礫。その場所は、巨大な仮想敵の正面、進行方向。

これは試験だ。大怪我をさせることはない。不慮の事故で怪我をしても大丈夫な何かしらが用意されているはずだ。そうでなければ入学試験として不適切である。

そんなことは百も承知。だが彼らなら、きつと走り出す。

それを見た瞬間呼人は体を赤黒い筋肉質なものへと変化させ、ビルの壁面を駆け下りていた。

そして、仮想敵が迫る中、服の背中中の辺りを啜えて放り投げ背中中で受け止める。

「きゅっ!？」

「捕まってる」

狭いビルの間で、背中に人を背負ったまま巨大な仮想敵の足元をくぐり抜けるのは危険を伴う。ならば敵をまいて、放り出す。幸いまだ建物は相当数残っており、視線を切るのは難しい話ではない。

仮想敵に背を向けた呼人は、逃げるついでに頭上から瓦礫に飲まれようとしていた少女をもうひとり啜えて背中に乗せると、仮想敵から視線の切れる、ついでに近くにまだポイントつきの仮想敵の残っている場所まで走り抜ける。

そしてそこに背中中の2人をそつと下ろすと、建物の合間を縫って巨大な仮想敵のもとへと駆け戻る。

『
』
「なんとかやってみるさ」

無茶するなよ、と呼びかけてくるモンスター達にそう答えると、体表を黒い鱗と毛へと変え、より登ることに特化した四肢を使って巨大な仮想敵の足元から背中を駆け上る。

機械にも人間の目に類する器官があり、それらは、電気、モンスター達の言うところの雷属性に多大な影響を受ける。

ならばまずは、その器官を潰す。

おおかた頭部の穴がカメラになっていたのであろうと見定めた呼人は、黒々とした幅広い尻尾だけを人間の大きさからは逸脱した、本来の大きさに近いものに戻し、さんざん動いたおかげで溜まった雷エネルギーを放出しながら仮想敵の顔面に叩きつける。

それを受けた仮想敵はセンサー類が一気にスタンし、体勢を大きく崩した。更に呼人は再び赤黒い形態に戻ると、姿勢を崩した仮想敵の関節や隙間などに爪から派生した刃を突き刺していく。流石に相手のサイズ故に人間用の刃では斬れない部分もあるが、剥き出しの部分が切断できただけでも御の字だ。

更に壊れていない部分を切り開いて壊そうと呼人が試みたところで、終了のアナウンス。

『終了おおおお!!』

実技試験、終了だ。

雄英の試験官達、すなわち雄英高校ヒーロー科の教員であるプロヒーロー達は、巨大なモニターで試験の様子を見ていた。7つのブロックで同時にやっていたために一度に見切れるものではないため、一つ一つの映像や記録を、順に皆で精査しているのであ

る。

「YEAH! やるじゃねえか!」

「うん。まさかあれを壊すものが2人もいるなんてね」

彼らが注目しているのは、2つの映像。それには、2人の少年が映し出されていた。

一方は、試験会場の前でおどおどして転びそうになる様子が記録されており、説明会場で同じ受験者からダメ出しを受けていた緑髪の少年。

——その少年は、1人の少女の危機へと飛び出し、そのまま文字通り、正面から巨大な仮想敵を“ワンパン”したのだ。しかも装甲が部分的に損壊するだけでなく、派手にぶっ壊している。

そんな少年の映像を改めて1から流しながら、試験官達は少年の成績の凄まじさを口にする。

「まさか敵Pが0……“救助活動P”だけで合格か。前例が無いな」

「全員がライバルな中で、彼は助けるために動いた。しかも、そのための実力は示した。ある意味最もヒーロー……英雄らしいとも言えるな」

職業としてのヒーローではなく、文字通りのヒーロー。それに求められる滅私奉公の姿を、少年は一瞬とはいえ示していた。

その姿を見るための、受験者達には示されていないPがある。それが“救助活動P

“。文字通り人助けにポイントを割り振ったものだ。緑髪の少年、緑谷出久は、その救助活動Pだけで、総合成績全体の8位を獲得していた。

「最初から最後までだめな動きをしてみると思ったら、最後に思い切ったわねえ」

「YEAH！　だがこいつの方がやべえな！」

そうプレゼント・マイクは言い切ると、リモコンを操作して映像を切り替える。そこには、1人の少年が映っていた。黒く短く切られた髪に、精悍な顔つき。その目は深く閉じられている。

そんな彼が腰掛けているのが、撃破された、4種類目のOPの仮想敵。試験直後の彼の姿だ。疲労困憊でしゃがみこんでいると言うよりは、まるで足元のロボットが動き出さないか監視している様子である。

実際リカバリーガール、試験直後に治療活動を行っていた彼女によると、彼は息すら切らしていなかったそうだ。

「百竜呼人——敵P76、救助活動P70の総合1位、ね。嫌味なぐらいに出来るわね。敵Pで僅差で2位、救助活動Pでも1位だわ。しかも救助した相手を適当に放り出すんじゃないくて、まだ敵の残っている近くに降ろしてる。配慮も十分ね」

緑谷出久と呼人の救助ポイントの差は、状況がどれだけ危機的だったか、や、自己のおかれた状況、どう救助活動を行ったか、などを加味したものとなっている。

試験官達が見つめるモニターの中では、手足を変化させ、流れるように仮想敵を無力化していく呼人の姿が映っていた。

「手足、そして尻尾を変化させ、こども器用に使うか」

「随分と戦いに慣れてる様子ね」

「……耳や鼻も人間より優れたものに変えられるようだ」

「試験開始前に他の受験者に話しかけられていたにも関わらず、スタートの合図に反応したな。こいつは」

戦闘能力も申し分なし。情報収集も注意力もかなりのものをすでに持っている。

「——個性の扱い方がうまいですね」

皆がその個性の強さについて話していると、それを見かねたかずと黙っていた黒装束の男が不意に呟く。

「どういう事?..」

「この映像見てください」

普段の様子からは珍しく多弁な男が示す映像には、最初の1Pの敵の頭を吹き飛ばした時の様子と、その後の駆け回って複数の敵を倒した時の様子が比較できるように映されていた。

そこに男が矢印で注目する点を移すと、全ての試験官からうめき声上がる。その両

腕に最初に生えていた爪が、次見たときにはより鋭利な刃状のものになっていた。

「これは……」

「おいおい！ こいつは『獣化』系統の個性じゃねえのか!？」

そう言われた男は更に異なる映像——巨大なOPの仮想敵を攻撃した時の電撃の映像を写しながら話す。

「極めつけがこれだ。こいつは個性の扱いに慣れてる」

それを見た試験官達がざわつく中、少し高い声で1人のネズミが話し始める。

「彼は色々と特殊なんだよ。詳しい話は『ジ・アドベンチャー』から聞いているから、みんなに後で共有するよ」

その言葉に、全員が黙る。そのヒーローの名前に、そして特殊と言われる理由があるのだと言うことに、彼には何か理由が明確にあることを理解したのだ。

それを見ながら、ネズミ——雄英高校の校長はため息をつく。詳しい話と云つても、ジ・アドベンチャーから聞いたのは『わからないことがわかった』ということと、『彼の状況には前例がなく、ヒーローとして見れば強力だが敵となれば、あるいはただ制御されていないだけで絶望的だ』ということだけなのである。高校側にも一応として能力が登録されているが、あくまで一応の登録であり、実際には全貌不明であるということなど、共有した所で議論を巻き起こすのはわかりきっている。

第3話 体力テスト1

入学試験から数日後。呼人が日課のモンスター達とのトレーニングしていると、一通の封筒がポストに落とされる音が響いた。

確認すると、雄英高校からの封筒だった。

「届いたか……」

中に入っていたのは、用紙が2枚と、何かの機械。それを机の上に置いて上面のボタンを押すと映像が投影され、日本の世俗に疎い呼人でも見たことだけはあるオールマイトと呼ばれるヒーローの姿が映し出された。

『私が伝えに来た！』

そう騒がしく言うのは、彼の有名な言葉、『私が来た！』をもじったものだろう。

そう言い切ったオールマイトは、直後に改めて頭を下げる。

『と言つても、君は私の事を知らないだろうから自己紹介をしておこう。私はオールマイト。ナンバー1ヒーローと言われている者だ。君のことはジ・アドベンチャーから聞いている』

そう言われて、アドベンチャーが以前、自分のことを雄英高校の人に教えていいかと

尋ねてきた事があるが、それが彼のことだったのだとここで気づいた。

(有名なヒーローでも職員になるんだな。後進の育成が大変なのか?)

そう考える呼人をおいて、オールマイトの話は進む。

『さて、なぜ私がこうしてメツセージを入れているかだが、それは私が来年から雄英の教師として務めるからだ。それじゃあ、ここからはまきで君の成績について説明しよう！』

そうオールマイトが言つて体を傾けると、後方にホワイトボードが見え、そこにいくつかのことが書かれていた。

『君の敵Pは76で、これだけでも十分合格ラインだが、私達はそれに加えて、救助活動“”についても見ていた。ヒーローとして、どんなときでも人を助けるといふのは大切なことだ。そのポイント、君は70ポイントで1位だ。合計146ポイント。どうどうの入試1位だ。文句なしの合格さ』

その言葉を聞いて呼人は小さくガッツポーズをするが、オールマイトの言葉には続きがあつた。

『さて、教師として、先達としてこんな事を言うのは恥ずかしいが、君には他の生徒を引つ張るだけの実力がある。勿論、まだまだ足りないこともあるだろう。だが、君のその力で、皆を引つ張ってくれると嬉しい』

笑顔から真剣な顔になったオールマイトのその言葉に、呼人はつい頷いていた。

『では、雄英で待っているぞ！ 君と話せるのも楽しみにしている！』

その言葉を最後に、映像が消える。その投影機を、呼人は丁寧にも机の中にしまった。もう一度見れるのかはわからないが。

オールマイトにはああ言われたが、呼人がヒーローを目指しているのは、その方が個性を持つての生活で都合が良いだろうことと、社会的地位を築くことで障害を防ぐこと、また力の制御の訓練に当てられる時間を増やすなど、ヒーローとしての活動への意気込みよりは、実益面が大きい。神王寺、ヒーロー名《ジ・アドベンチャー》に望まれてもいる。後は個人的に、ヒーローという存在に興味があるというのもある。

そのためそれほどの意気込みは無かったのだが、オールマイトに頼まれたことで、しばかりしっかりと見極めて取り組もうという気が起きていた。

そのまま神王寺に合格した事を連絡するが、電話ではなく簡単なメールで済みます。彼も呼人の合格は確信していたし、どうせそのうち帰ってくるのだ。

『わかってるって、ちよつと待てよ』

途中で訓練をストップされたラージャンが焦れて早くしろとせつつき始めた。あまり焦らすとまた怒って、というよりすねて大変なことになる。考えるのはもう少し後に

なりそうであった。

「今日は唐揚げ2000円分ご褒美に食べるか」

雄英高校入学式初日。呼人は初めて着る学生服というものに身を包む。

「ん、学ランよりは動きやすそうだけど動きにくいな。なんでこんなもの着るんだ？」

「お前みたいにいっつもスポーツウエアでいる人間の方が珍しいからな。ここはアフリカの僻地じゃなくて日本だぞ。所属を示したりある程度まとめるためには制服ってのは結構有効なんだよ」

「……あー、たしかに」

そう言えばハンターたちにも、同じような一式をまとった人たちがいたな、と。アレも仲間意識と言われれば仲間意識である。

「うん、似合ってるじゃねえか」

「どうも」

呼人の身長は165センチ。そうとうに鍛え込んであるが、筋骨隆々というよりは細く引き締まったような体つきになっているので肥大した感じは感じられない。身長

はこれからに期待といったところか。

「行つてくる」

「行つてらっしゃい」

これからジ・アドベンチャーである神王寺は、しばらくこの辺りでヒーロー活動を行うらしい。拠点を構えているわけではないので扱いとして出向になるらしいが、もともと拠点を構えずに海外をうろろしていたためいつものことであると言えた。

ちなみに研究の方は一段落しており、正直そのへんの個性研究しているより呼人の個性の研究した方がわからないとはいえ楽しくはあるので、学校側と連携して呼人の様子を観察することになっている。呼人も神王寺ならばと納得していた。

歩いて、電車に乗って学校までは20分ほど。

教室の扉が異様に大きいのが、呼人は気にせずに手をかける。個性の中には、呼人のように完全な人間形態を取るのが困難な「異形系」と言われる、通常の人間とは違う体躯を生むものがある。それらを持つ者にも配慮した、一種のバリアフリーの産物である。室内から話し声は聞こえないが、人間の鼻の内側で機能部分だけ変化させている呼人の鼻は、すでに10人以上の生徒が来ている事を示していた。

扉を開けた呼人へと皆の視線が集まる。話し声が聞こえなかったのは、皆にらみ合いい、もとい探り合いをしていたからだ。初対面の相手ばかりの中でいきなり仲良くなれ

る人間は少ない。

それは呼人にも言えることで、視線を集めながらも呼人は一切気にせず、自分の席につくと本を開いた。

(食料が少ない時期の寒冷地みたいだ)

来ていないのはあと8人ほど。まだ時間まで40分ほどあり、真面目だなという印象を呼人は受ける。神王寺から聞いた話によると、学校というのはもつとフランクな、言ってみれば良い意味で緩い場所だと聞いていたのだ。

実際は今日が初日であるというだけであるが。

『お前らが泳げるような規模かな。結構広いみたいだけど、流砂は少ないみたいだぞ』

アフリカの自然の中の、サハラ砂漠という砂漠の写真を見ると、一緒に読んでいたジエンとダレン、ジアが少しばかり嬉しそうに泳げるなら泳いでみたいと伝えてきた。彼らは超巨大な体躯を持ち、巨大な砂漠の流砂の中を泳ぐようにして生活する龍であった。だが、この世界でそんなことが出来る場所はない。

ちなみに以前能力の確認のために訪れたオーストラリアの砂漠では、3頭の姿になって思う存分転がったりしてみたが、泳ぐことは出来なかった。後で『謎の地震?』みた

いなニュースが流れていて、神王寺と2人で肝を冷やしたのは秘密である。

そんな事をしていると2つの匂いが近づいてくるのを感じ、続けて右肩を突かれながら声をかけられる。

「ねね、耳の無くなる人だよね」

そちらを振り返ると、気配と匂いはそこにいるのに、何故か服だけが存在し人間の姿が無い。

「……試験の時の透明人間さん？」

「そうそう！ 試験の時たすけてくれたよね」

「あー……そんなこともあったな」

正直忘れていた。そんな呼人を気にせず透明人間は続ける。

「あのときはありがとう！ 私ずっとお礼言いたくて」

「どういたしまして」

「あのとき敵の残つてるところに放り出してくれたっしょ？ あれ助かった」

そんな答えをしてみると、もう一人の少女が話しかけてきた。

「ああ、もう一人の。流石に好き勝手連れ回して勝手なところに放り出すのは悪いと思っただけだから」

2人を救出しながらも意識は巨大な仮想敵に向かっていたので、どんな人を助けたか

は覚えていなかった。ただ放り出す場所は選んだのは覚えている。

「あんな偉いね。私は耳郎響香。よろしく」

そう言つて差し出される手を呼人は一瞬何事かと見るが、モンスター達に『握手しろ』と急かされて、慌ててその手をとる。

「百竜呼人だ。よろしく」

「私は葉隠透だよ！　よろしく！」

そう言われて呼人が手を差し出すと、今度は向こうから手を取つてくれた。流石に見えない手と握手するのは困難なので、向こうからしてもらえて助かった。

そのとき紫の団子頭をした少年から凄まじい敵意を向けられたが、理由がわからなかったために呼人は身構えながらも無視した。

「それ、何読んでんの？」

「ん、これ？　アフリカの自然の写真とか説明とか書いてる本」

「アフリカ？　海外旅行するの？」

個性というものが現れてからこちら、海外旅行といったものはかつてよりもその人気を落とした。それは単純な話で、海外なんかよりも個性の方がよっぽど刺激的で、ヒーローの活躍を見たりしていたほうが目新しいものが見れるからだ。後はヒーローという職業が人気になったことで、海外への憧れというのが弱まったのも理由に上げられ

る。

「なんか大自然って良いよな、って思ってる」

呼人が知っているのは、モンスター達に教えられた、この世界のそれよりも遥かに雄大でエネルギーに満ちた大自然だが、とはいえこの世界で体感出来るのはこの世界の大自然だけだ。今でも時々楽しむのが主な理由でモンスター達から彼らの記憶に眠る大自然を見せてもらったりしているものの、自分の目で見てみたいという思いもある。

「ふーん、アフリカってどんなのがあったっけ」

「そうだな……」

耳郎と葉隠は、その後も呼人にいろいろな話を振ってきたので、呼人も少しずつだが話すのに慣れて答えていった。

そうこうしているとやがて教室の入口が騒がしくなり、生徒ではない見た目の男が教室に入ってくる。けして悪い意味ではない。

「静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君らは合理性にかくね」

（気配が薄いな。ナルガみたいなタイプか？）

その男からは僅かな匂いはするが少しばかりモンスターに寄せているはずの呼人も気配に気づくことが出来なかった。そのことから、《闇夜の狩人》と呼ばれた、奇襲を得意としたモンスターの思い浮かべる。

男は自分が担任であり、相澤消太という名前であることを名乗った後、布袋のような塊からジャージらしきものを取り出した。

「早速だがこれ来てグラウンドに出ろ」

(自前のより伸びねえな。これ破れねえか?)

周りが唾然としている間に着替えてグラウンドに出た呼人だが、懸念事項はジャージの性能である。呼人が普段使っているものは、見た目はただのジャージだが神王寺の研究のためという建前で耐久性、伸縮性ともに相当高いものを用意してもらっている。それと比べて学校指定のジャージの耐久力が物足りなく感じるのだ。

一番に外に出てきたとあってグラウンドは教師の男しかない。
少しすると皆外に出てきた。

「個性の把握テストをやる」

「個性の把握テスト!?!」

「入学式とかガイダンスは?」

教師の言葉に皆が驚きの声を上げる中、教師は特に笑うでも真剣になるでもなく軽く

言い切る。

「雄英は自由が校風。それは『こつち』も然り。ヒーローになるならそんな非合理的な行事やつてる時間はないよ」

（あ、入学式つてやつぱり非合理的だったんだ）

周りが唾然とする中で呼人の感想はこれだった。正直制服の理屈は理解は出来たのだが入学式という行事の理屈が理解できなかったのだ。

「中学の頃からやつてるだろ？ ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、握力、持久走、反復横跳び、長座体前屈、上体起こし」

それに皆が疑問の表情を浮かべると、教師の男は呼人を呼んだ。

「とりあえず見せたほうが早い。入試一位は……百竜、前に出てこい」
「はい」

とりあえず呼ばれた呼人は前へと出るが、入試一位と聞いた瞬間、周囲から敵意にも似た視線が向けられる。呼人からすればそよ風のようなものであるが。

前に出た呼人の手に、相澤から少し機械の匂いのするボールが投げ渡される。

「ボール？」

「ソフトボール投げだ。今からやるのは体力テスト。ただし、個性の使用は自由だ」

——個性の使用は自由。

相澤の言葉に、他の生徒がざわめき始める。

現在は、街中での個性の無断使用は禁止されていた。中学時代のテストも、『差を産まないため』などといった理由で個性の使用は当然禁止。

全くもって非合理的だ。

「中学の体力テストは個性使用『禁止』。全くもって非合理的だ。ヒーロー目指すなら個性は使いこなしてなんぼ。……百竜、やってみろ。ちなみに、中学時代の記録は？」
 本当に非合理的なことが嫌いらしく、端的に必要なことだけを説明すると呼人の方へと目を向ける。

ここで変な事を言うほど呼人も空気が読めないわけではないのだが、ここは空気を読まざるをえない。

「……外国にいたので記録はとってません」

「……そうか。まあ中学男子で高ければ60〜70ぐらいはいく。それを踏まえて……百竜、個性を使つて投げてみる。全……はよ」

それに相澤は微妙そうな表情をするが、すぐに続けて指示を出す。『全力で』とは相澤は言わなかった。言いかけてやめたのかもしれないが、それなら呼人も適度に投げるこ
 とが出来る。

指示を受けた呼人は円の中に入ると、両手両足、そして力を受け取る各部の関節や内

部を変化させ始める。

(人の形からはみ出さないように細かく……)

その手と、僅かに覗く足の変化に他の生徒も気づき始めた。形はほとんど変わっていないものの、明らかに色味が人の肌ではない。

「手足が、変化しているのか……!」

「なんだあの個性?!」

チャラ男と鳥頭——常闇と上鳴がその変化する四肢に思わず声を上げ、それを皮切りに他のメンバーもそこを見始める。その変化は口にまで及んでいるのだが、呼人が顔を下げているのでそこに気づくことの出来るものはいなかった。

もとあった肌を包むように、あるいは順々に置き換わるように変化していく四肢。やがて変化の終わった呼人は、力を思い切りためてボールを放った。

』
』

『喧嘩するなお前ら』

放たれたボールは、到底人間の手から放たれたとは思えない勢いで風を切り、見えなくなる。その行く先を目視で捕らえていたのは、目を変化させた呼人だけだった。

(ラージジャンの力じゃあ飛びすぎるし風を使うのは目立つ。オドガロンの筋肉はやはり

丁度良いな)

一分もしない後に相澤が持っていた機械が飛距離を知らせる。

「998. 3 mだ。——というわけで、まずは自分の最大限を知れ」

そう言った相澤は生徒の一人に計測器を渡すと、少し離れたところまで呼人を引きずっていく。

と。離れていく2人の後ろで、他の生徒のはしやく声が響いた。

「個性使つていいって、すげえおもしろいな！」

「ほぼーキコ……個性を使つてもそんなに飛ぶかどうか」

「個性使用自由つて良いね！ さすがヒーロー科だよ！」

相澤が離れたことで縛りが外れたかのようにはしやくクラスメイト。それに相澤の足が止まった。

(あ、この人苛ついてるよこれ。合理的でもイラつきはするんだな)

これまで経験してこなかった個性の『自由使用』に浮かれるのはわかる。だが、この教師の前では、何より個性を『武器』として活動するヒーロー科では、まずい。

「面白い、か。ヒーローになるための3年間、そんな腹づもりで過ごす気なのか？—

——なら、トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分しよう」

沈黙。直後に爆発。相澤の言葉に叫ぶもの、啞然とするもの。ただ誰ひとりとしてそ

れを納得していないのが見て取れた。

なにせ、雄英高校はヒーロー科を持つ高校の中でも最難関と言われる。

その圧倒的倍率を勝ち抜き、入学初日に除籍処分。

驚愕しなければ嘘というものだ。中には、自分は除籍にはならないと冷静なものもあるが。

「生徒の進退は教師の自由。それが雄英高校ヒーロー科だ。わかったら早くやれ」
そう言いはなった相澤は、改めて呼人を連れて少し離れたところへとやってきた。

第4話 体力テスト・2

「……個性の制御に難があると聞いている。お前は力を制御できるようになれ。個性を使いこなせないやつはいらん」

「……はい」

恐らく相澤は、呼人の個性について詳しいことは聞いていない。ジ・アドベンチャーも伝えていないのだろう。だから教師として言える事をいったのである。普通の生徒であれば、個性は『伸ばす』ものである。少なくともこの段階において個性が制御できないならまだしも、制御できないほど強力なものはまだだ。

呼人はそのまれな例だと、相澤は聞いていた。

「……戻るぞ」

そう言った相澤は、先に戻り始める。

『』——『』

「疼くなよお前ら」

珍しく力を発揮できる機会に、モンスター達が騒ぎ出す。そのつぶやきは、かすかに相澤にも届いていた。

一種目目は50m走。

通常の体力測定は大人数で同時にやるためにいくつかの種目に分かれてめぐるようにやることが多いが、ここではクラス人数が20ほどであり、また個性を自由に開放するという特性上1つずつの種目を皆で順に行うことになっている。

呼人の記録は2秒80。ジャージが破けないように四足形態となつて走つた。

「いんももんか」

体操服を無視して完全な犬型になればもう少し更新できるだろうが、オドガロンの筋力でのこの形状ではこれぐらいが限界である。

「くつ、速さで負けた……い」

どうやら個性がエンジンという人間がいるらしく、その彼に速度で勝つたことに皆驚きの目を向けていたが、呼人は自分の体との語り合いに忙しかった。

二種目目は握力。

なのだが、呼人は相澤に体操服を損耗する許可を取つて、肩までまくりあげた上で肩

から先を作り変える。結果記録は900kgとなった。こと筋力の発揮という意味では、モンスターの中でも秀でた筋肉構造を持つオドガロンの力は群を抜いている。服はなんとか破れずにすんだらしい。

他のクラスメイトでは、障子という腕を複製できる個性を持った大柄な少年が筋力十分な腕を複製し、それを用いて540という記録を叩き出した。

「握力500とか900って、ゴリラどころの話じゃないだろ!? ってか障子はまだしも、もう片方はなんだ?」

その2人の記録に周りが騒ぐ中、障子が呼人に話しかけてくる。

「凄い筋力だな」

「ああ、ありがとう」

「握力は自信があつたんだが……百竜はどういう個性なんだ?」

個性の話をするのは、現在では割と普通の事になっている。言ってみればプライバシーのようなものなのだが、ここはそれを主に扱う場所であるし、社会的にもそれほど問題になる行動ではない。

「……まあ獣化みたいなもんだ」

呼人の言葉に、障子も、周りで聞いていたクラスメイトも疑問を浮かべる。見た目とその大きさから、呼人の個性がなまじの獣と思えなかつたからだ。それに呼人は、曖昧

な笑みを浮かべる。

「説明すると長い。体を別の生物に変化させる個性だと思ってくれ」

どんな生物だよ！ というツツコミがあったが、それに呼人が答えることはなかった。

【立ち幅跳び】【反復幅跳び】【ボール投げ】と種目を続ける中で、呼人の記録はほとんどトップクラスだった。流石に相性が抜群な個性を持った者（反復横跳びの峰田や幅跳びの麗日）にはかなわなかったが、それ以外の中では常にトップである。

そのせいか、クラスメイトから注目を受ける中でも特に「敵愾心」とも言えそうな視線を一つと、ライバル視するような視線、そして観察するような視線を感じるようになる。

それぞれ、爆豪、八百万、轟という名の生徒だ。

爆豪は明らかに自分が一番でなければ気に入らない、傍若無人という少年だったため、敵愾心も領ける。八百万の視線は少々強すぎるくらいはあるものの、他のクラスメイトからも感じられるものだ。

だが、轟という少年の目線だけ、観察する様子にも関わらず好奇心というのとはいささか違う執念のようなものが見て取れた。まるで全てを暴いてやると言わんばかりの。

周りが呼人を観察する一方で、呼人も目だけでなく嗅覚や聴覚、果てはピット器官まで使つて確認しているのだ。

「障子」

「なんだ？」

「あれはどういうあれだ？」

近くにいた障子にそう尋ねる。ほとんど会話をしていない呼人にとつては数少ない言葉を交わした相手だ。ちなみに葉隠と耳郎もそうではあるが、そちらはたいてい誰かと話しているので話しかけづらかったのである。

「恐らくライバル視だろう。爆豪はああいう性格だし、八百万と轟は『推薦組』だそうだ。だから一般組ながらそんな成績を出せるお前が気になるんだろう」

「……推薦つて、何？」

その呼人の言葉に、障子だけでなく周囲のクラスメイトが揃つてずっこけた。相澤が厳しい目をしている気がしたが、呼人は無視する。睨まれている気がするが、無視するのだ。

「なんと言えば良いか……。通常の枠とは別に、優れた実力を持つものを自発的な受験ではなく、ヒーローによる推薦によつてのみ受験できる場で判断するのだ」

雄英高校ヒーロー科の推薦入試。そこには、やがてはトップクラスのヒーローになる

と期待され、すでに高い実力を持つもの達が集まる。その中から合格した彼女は、この雄英高校を持ってして優れていると判断されたということである。

「なるほど。プライド？」

「そういうことだ」

「ふーん」

そんな中、緑谷という少年、ここまで全ての種目でほとんど最下位を取っている少年がソフトボールを投げる番がやってきた。一度目の記録は46m。その後、何か相澤から注意を受けていた。

「あー、個性を消したのか」

「ん？」

ポツリと呟いた呼人の言葉に障子が反応するが、呼人は個性の使用が認められたからとばかりに、あらゆる感覚器官を変化させて緑谷の様子を観察する。

彼から感じるの、動揺、怯え、そして——焦り。

おかしな話だ。ここまでの彼の成績を見れば、自分が出来ないということ把握しているか、もしくはは出来ることだけに特化しているはずであり、あれほど強い“焦り”なんて感情は生じないはずなのである。

「百竜、それは……」

ん？ と呼人が彼の方を向き直ると、それを正面から見た障子が息をのんだ。

赤黒く変化した鼻先に、目元まで黒く覆われた鼻。口からチロチロと見えるのは先が割れた舌で、その目はよく見ると人間のそれではなく、まるで昆虫の複眼であるかのように見える。

「いや、悪いな。周りがこつちを観察してくるなら俺も、と思つて観察していた」

そう言う呼人の顔は、すでに人間のものに戻っている。

「……驚いたぞ」

「見た目が良くないからな」

そんな事を言っている間に、緑谷の二投目が始まる。その瞬間、呼人の顔はまた、奇妙なものに変化していた。

「あ、飛ぶぞ」

「ん？」

言われた障子がそちらに注目した瞬間、緑谷の手から放たれたボールが、まるで矢のように空へと消えていった。

「彼の個性はしつかり発揮できているのか。しかし……ならばなぜ」

「個性がうまく制御出来てないんだろ。今の、指が折れてる」

それがわかったから先生も止めたんだろうな、と呼人はこともなげに言うが、障子と、

反対側で起きていた言い合いを避けて近くに来ていた葉隠と耳郎が驚いた顔で近づいてくる。

「え、どういうこと?」

「指って、自分の個性で?」

「理由は知らないし緑谷が隠したいことかも知れないからあんまり吹聴はしたくないが、投げた瞬間に指が折れていた。多分とてつもない力がかかったんだろうな」

言ってみれば、人間の体の限界である。

「てか、百竜は良く気付いたね」

「観察してたからな」

「観察?」

知り合いがいないから周りの様子が気になって、と呼人ははぐらかす。それを見ていた障子は何事か言おうとしたが、彼にも隠したい理由があるのかもしれないと言及するのをやめておいた。

「ちなみに除籍は嘘ね」

テスト終了後の相澤のその言葉に、皆ほっとしたような、あるいは驚愕したような表情をしていた。

「当たり前ですわ……」

八百万だけは最初から嘘だと悟っていたようである。また轟や爆豪に至っては嘘でも嘘じゃなくてもどうでもいいという雰囲気を感じられた。

(見どころ見せたからな)

成績最下位は緑谷であった。結局あのボール投げ以外は個性を活かしきることが出来ず成績は最下位になったものの、ちゃんと出来るところは見せた。仮に彼が記録を見せていなかったら、相澤は問答無用で除籍していただろう。

そんな匂いが、彼からはした。

「行くぞ百竜。教室で説明があるようだ」

「おう」

友人がいないことを見てくれたのか、障子が声をかけてくれた。それに答えて呼人も教室へと戻る。途中で葉隠と耳郎も合流してきた。彼女らも個性を全力で開放したことで少しばかり興奮しているようだった。呼人は神王寺の監視のもと世界中の辺境の地である程度個性を全開にしていたが、日本ではそんな機会はほとんどないのだ。

——ちなみに。

体力テスト、1位、百竜呼人。

圧倒的なスコアとその得体のしれなさから、クラスメイトからの興味を買うのであった。

第5話 実戦演習・1

体力テストの翌日。

意外なことに、前日のガイダンスで言われたとおり通常の授業がすぐに始まった。数日に現代文に英語。至って普通の高校授業だ。

ちなみに呼人は学問においては高校レベルは全て、一部学問においては大学レベルまで修めているので、全く苦労することはなかった。これは呼人の頭がよく回るといってもあるが、一瞬目を通すぐらいのスピードで読めば知識に飢えた龍連中が記憶し解釈し、脳内でのイメージで呼人に教えてくれるからである。脳内でのイメージ交換や活動は速度の束縛を受けないので、そこで学習すれば普通の何倍もの速度で学習が出来るのである。そういうスピードで思考をしていると呼人には疲労が早く貯まるのだが、それも訓練の一環である。

昼食時には、席がすぐ近くの耳郎に驚かれながらも特大の弁当と、学食でのクックヒーローの美味な料理を2人前ほど安価で食べた。

ここまでであれば、普通の学校生活。

だが、ヒーロー科はここからが違う。午後からは、ヒーローになるための学びの時間。

「わーたーしーが!! 普通にドアから来た! H A H A H A H A!」

このカタカナではなくアルファベットが似合いそうな勢いで笑っているのが、午後の授業、〃ヒーロー基礎学〃の担当講師、オールマイトである。

彼の登場にクラスメイトは大盛り上がり。呼人は彼の伝説を知らないものでそれについていくことはできないが、彼のことは神王寺から聞いていた。曰く

『野生の竜じゃあ、そうは勝てんだろうな。古龍共は知らねえよ』

野生の竜。それはオドガロンやトビカガチなど、モンスター達の世界でも強力な生物を指す。そんな竜達に、オールマイトはタイマンで、しかも素手で殴り勝つという。その力は、この世界では驚異的なものであるといえる。

「オールマイトだ! 本当に先生やってくれるんだ……!!」

「銀時代のコスチュームだ……! やばい鳥肌が……!」

呼人がこっそり体内を変化させてオールマイトを観察している中、オールマイトはどんどん先へと進む。

「ヒーロー基礎学、今日の訓練はこれだ!」

そう言つて彼が突き出した板には、『B A T T L E』と書かれていた。すなわち、戦闘訓練。その文字に皆が目を輝かせながらも身を引き締める。

「ヒーロー基礎学はヒーローになるための様々な訓練を行う課目だ! 今日早速それ

を体感してもらおうぞ！　そして——これ！

オールマイトがそう言うのと、壁際の装置が機動して壁から収納棚が飛び出してくる。

「入学前に送ってもらった「個性届け」と「要望」に沿って作った戦闘服だ！」
コスチューム

「うおおおおお!!」

戦闘服の登場によって、クラスのボルテージも最高峰に上昇する。

「では、皆着替えてグラウンド・βに集合だ！」

オールマイトの言葉に皆力強くうなずき、それぞれが着替える。コスチュームとは、ヒーローの証、その証明でもある。それを纏ったものは、授業を楽しみにしながらグラウンドへ向かった。

「まあわりと、悪くないか？」

呼人の戦闘服。それは、モンスターたちの世界で『新大陸のレザー装備』と言われた装備と見た目を同じにしていた。

人格を獲得したモンスター達だが、その過程で、彼らの世界の人間側の知識をかなり獲得していたようで、武器や防具に関する知識があるのである。その過程で自分たちが人間からどう認識されていたかを知ったモンスター達の間には一混乱あったのだが、それはまた別の話だ。

呼人のコスチュームは、具体的には茶色のベストに焦げ茶のジャーキン、そして腕甲

にフィンガーレスグローブ、ブーツとそのすべてが呼人から提供されたレザー、すなわちモンスターの革で出来ている。もともとは大自然の中で探索や戦闘、キャンプなど全ての活動をするための装備であるので、戦闘用の重厚な装いではなく行動しやすそうな見た目をしている。

「にしても、ちよつと浮くなこれは」

周りがヒーローチックな、現代的なコスチュームばかりであるのに対し、自分のファンタジーチックなデザインに少し後悔する呼人であった。神王寺と一緒に大自然を巡るには問題の無い装備ではあるのだが、街中でこれは浮く。

（制服着るのもそういう理由かな）

人間の常識を様々教えられた呼人だが、こうしたレベルでの常識は教えられる時間が無かったため、これから学ぶ必要があった。

「百竜くんのコスチューム、ファンタジー風だね！」

「正直見た目はどうでも良かったから適当に決めただけど、ちよつと浮いてるから後悔してる」

「確かに浮いてるっちゃ浮いてるけど、目立って良いんじゃない？」

周りに浮くコスチュームに否定的な呼人であったが、耳郎は意外と肯定的であった。ヒーローのコスチュームは実用面もそうだが見た目がよくてなんぼということ

もあり、そういう意味では奇抜なものや古風な鎧武者のようなコスチュームを持つプロヒーローもいる。

「……コスチュームは利便性だけでなく、そのヒーローを示すものが求められる」

そう言う障子は、肩口、彼の触腕が展開する部分が自由に稼働できるようなコスチュームを身にまといている。

耳郎はほとんど軽装だが、靴だけが通常のものとは違って彼女の個性に合わせた能力重視。

葉隠は正直透明なので見ても何がどうなっているのかわからない。透明なのに普通にコスチュームを着ているところを見ると、防御力重視だろうか。

「なるほど。その背中のは動きを妨げないためか」

「そういうことだ」

その後互いのコスチュームのこだわりの点や、希望と違った点など話していると、やがてオールマイトと、何故か相澤がやってきた。

「さあ有精卵共!! 戦闘訓練のお時間だ!」

授業の担当はあいも変わらずオールマイトのようで、彼が説明を担当する。

生徒の質問に答えて曰く、現代凶悪な敵が出現するのは路上よりも屋内が多く、それを想定してヒーローとヴィランの組にわかれて、2対2の屋内戦を行うとのことだ。

したがってルールは以下の通り。

- ・制限時間内に『核兵器』とされるターゲットを確保すればヒーローの勝ち。
 - ・制限時間までターゲットを守備、あるいはヒーローを全員確保すれば敵の勝ち。
- 要するにターゲットを奪い合いながら敵を叩きのめせという話である。

場所は広大なグラウンドβ内の訓練用のビルで行うとのことだが、メンバー決めの段階になって初めて相澤が口を開いた。

「百竜。お前は一人チームで2回やれ」

そう言った相澤に皆が疑問を浮かべると同時に、オールマイトが相澤を責めるように振り返るが、彼はそれを気にしない様子で呼人の方を見る。

「わかりました」

相澤が非合理的なことが嫌いなたちだ。わけのわからぬ生徒を受け持つぐらいなら、その能力を明らかにしたほうが良いとの判断だろう。そう言ってくれば説明ぐらいはするのに、と呼人はため息をついたが、もう皆の前で決まってしまった。

結局ペア決めにおいて一人になってしまった呼人は皆から遠巻きに見られてしまい、1人で戦闘開始を迎えることになる。

「1試合目はAチームがヒーロー！ Dチームが的だ！ その他の皆はモニター室へ行くぞ！」

第1回戦はAチーム：緑谷&麗日VS Dチーム：爆豪&飯田である。

爆豪は個性把握テストのときから緑谷を過剰に意識していたようであるし、とうの緑谷はあのボール投げでの個性の発揮以降も不安げな様子が見て取れ、非常に安定しない。何か問題になりやしないかと密かに心配する呼人であった。

勝ったのは緑谷のチーム。

緑谷と爆豪がタイマン、というより爆豪の一方的な私怨で緑谷と戦っている間に麗日が核に接近し、核を守っていた飯田と対面。一時膠着するが、爆豪と激しい戦闘を展開していた緑谷が高威力の攻撃で階下から麗日を援護。

その隙に麗日が核を確保した。

『爆豪が勝手にしなければ、な』

『緑谷達の対応としてはあれしかないだろう。訓練なら、な』

呼人は試合を見ながら、脳内のモンスター達と高速で意思疎通をして分析を行っていた。ちなみに血気盛んな連中は分析するのではなく『そこだ!』『ぶん殴れ!』、なんて言っているの頼りにならない。ラーとガルルガとミドガあたりはもう少し落ち着け。直後の分析においては、八百万が呼人の分析と同じくあくまで訓練だからこそ出来た戦法であり、それぞれ修正すべき点がたくさんあると指摘した。

「次は場所を変えて……ヒーローサイドがBチーム! 敵は百竜少年だ!」

その指示に、周囲がどよめく。呼人の対戦相手は轟と障子。特に轟は推薦組の1人であり、個性把握テストでも高い記録を出していたのだ。

「……負けるつもりはない」

「おう。かかってこい」

複数の腕を持つ彼との格闘戦は少しばかり燃えそうだ。そう考えていた呼人であった。

ピルの最上階にはハリボテの核が置いてあった。こんなわかりやすい核があるもの

かよとも思うし、敵が自爆する可能性もあるのだろうなどと考えた呼人だが、まだそこま
でを求めないということだろう。

訓練開始までには互いに作戦タイムが設けられており、少しばかり呼人は暇である。

そして、戦闘開始。

直後。ビル全体を氷が覆った。

その光景の一部始終を見ていたのが障子、そしてモニター室にいたクラスメイト。そ
の光景は衝撃的すぎて、誰もが轟達の勝利を確信する。

「凄まじい……全てを無傷で確保するとは……！　この中では敵も満足に動けまい……
！」

「無茶苦茶じゃねえか！」

「相澤先生があんなこと言うからどんな戦いになるかと思っただけ……これじゃあ勝負
にならないね」

ただ、事情を一部知る教師を除いて。

「ふん、便利な個性だな」

そう呟きながらも咄嗟に飛び上がって体が氷にとらわれるのを避けた呼人は部屋を
出る。相手はド派手に能力ぶっぱで来たが、こちらは搦手でやらせてもらう、と。

「……核の部屋にいない」

「いない……?」

廊下を歩く障子が、呼人が核の部屋にいないことに気づく。そこはターゲットが存在する部屋であり、例えば氷から抜け出したとしてもそこからいなくなることは考えられない。

2人を追っていた他の者も、それに気付いて一斉に探し始める。

「ゾハッ!」

「さっきまでそこにいただろー!」

皆が探す中、2人は核の部屋へとまっすぐ進んでいく。

そして、彼は現れた。

階段の上にもちらりと黒い尻尾が除いた直後、身構えた2人がいきなり耳を抑えた。障子に至っては複製に複製していた耳を消してしまっている。

「何、どっ!」

「あ、あそこ!」

そんな中呼人の姿を、発見したのは芦戸三奈という、酸を放出する少女だ。他の場所を探すクラスメイトと違って2人の写るカメラを中心に見ていたためである。

呼人がいた場所。それは、まさに階段に差し掛かるうとしていた2人の頭上、階段の

手摺を挟んだ先の天井に張り付くようにぶら下がっていた。そして2人が耳を塞いでいる間に、2人の後方の頭上へとゆっくり移動する。

「何をやってるんだ？」

「何かの準備かしら」

やがて、モニターで見ているものにはわからないなにかから耳を覆っていた2人が手を離し、少しして障子が耳を再び複製する。直後。

「――！ 上だ！」

そう言いながら障子が上を向き、遅れて轟が上を見上げる。その轟が顔を上げきるかどうか、と言った所で、四肢を変化させた呼人が彼に向かって飛びかかっていた。

「くっ！」

「轟！」

彼の方に障子が手をのばすが、その時には轟の首には確保テープが巻き付けられていた。

「くっ！」

一瞬で轟を沈めた呼人に障子は身構えるが、突っ込んできた呼人に殴りかかった腕を容易くかわされ、その首に確保テープを巻かれてしまった。

『ヴィランチーム！ WIIIIIIIN!!』

あつという間に決まっちゃった勝負に、見ていたクラスメイトは理解が追いつかない。

「百竜君はいつた何をしたんだ！ 轟君が氷でビルを包んで有利かと思つたら百竜くんは問題にしていなくて、あつという間に2人を捕縛したのか！」

「やべえ!! 轟は見るからにやべえけど百竜は何をしてるのかわからねえ！」

「なんで才能マンの轟に勝てたんだ!? 何やったのかわからねえよ！」

皆を代表するかのように、飯田、切島、上鳴が叫ぶ。他の者もあつという間の展開に目を奪われ、プライドの塊である爆豪や轟と同じ推薦組の八百万ですら啞然とする。

「……………んな……………」

「……………くそつ、何しやがった」

八百万も爆轟も、周りから1つ飛び抜けた才を持つ。その2人ですら驚愕させられた轟の実力。それを呼人は大した戦闘にすらせずに捕縛してしまった。

勝てない、というより、意味がわからない。

そんな中オールマイト、相澤も驚いていたが、相澤はオールマイトと目が合うとすぐにそらしてモニター室から出ていってしまった。今ので十分に満足したのだろう。

「さて、反省だ!! 何かわかった人!!」

オールマイトの問いかけに、八百万ですらが手を上げない。何が起きたのか、いまだに理解できていないからだ。

「うむ!! 私も音がなければわからなかったと思う!! 百竜君、何をしたか説明してくれ!!」

そう言われて並べられていた3人の中で、百竜の背中をオールマイトが押す。

「……氷を回避した後、2人が来るであろうルートに罠を張りました。2人の索敵手段はそれぞれの目と、障子が複製した耳だと思ったので耳を塞ぎ、その間に後ろを取って捕縛しました」

「罠とは、どんな罠ですか? お二人が耳を塞いでいましたけど……」

八百万に尋ねられた呼人は、腕の辺りから一枚の鱗を引き抜く。それに呼人が息を吹きかけた直後、みな同時に耳を塞いだ。高周波の咄嗟に耳を塞ぎたくなる音が響いたのだ。

「これだ」

「これなら耳をふさげる、と呼人は言う。

「うむ!! ではそれを踏まえて、今の戦闘の反省、分かる人!!」

今度は八百万が手を上げた。

「ヒーローチームのお二人の油断と、それに付け込んだ百竜さん、でしょうか」

「うん、その通り!! 轟少年は強力な個性だけど、裏をかかれる可能性を忘れ無いように！」

先程の戦闘の評価とは打って変わって自信なさげな八百万に、オールマイトは力強く頷いてみせる。彼女は間違えていないので自信を持っていい、と。

「さあ、次に行こうか！」

オールマイトが次の試合の抽選を始め、皆の注目がそちらを向く。そんななか、呼人は障子を呼んで部屋の間の方に寄る。

「障子、何か自分で反省点思いついたか？」

「……油断した」

「それ以外。具体的な行動で」

「……轟が凍らせた直後に索敵を怠ったせいでお前の居場所を見失った」

「それは直下以外じゃあ意味が薄いな。俺は足音や息なんかの活動音を殺せる」

「……教えてくれ」

呼人がやろうとしているのが答え合わせだと気付いていた障子は、答えが見つからなくなつてから尋ねる。

「まず、耳が塞がれた瞬間に目を複製すべきだ。索敵担当が索敵手段を塞いだら負けだぞ。後は俺に気付いた後の反応。自分のほうが先に気づけたんだから、轟の反応が遅れているなら突き飛ばすなりしたほうが良い。まあそこは連携と相手次第だが。俺に気付いてないふりしてカウンターしようとする味方なら余計なことはしないほうが良い。で、後は格闘戦を磨け。索敵能力が高いとは言え、お前の個性は格闘戦に向いている。体格も良いしな」

「……わかった」

「悪いな。同じクラスメイトなのに教師の真似みたいなことして」

「いや、それは構わない。だが……お前はそれを考えながら訓練をやっていたのか？」

「ああ。お前らと比べて戦闘には慣れてるからな」

「……お前は……一体……」

その問いかけに呼人は曖昧な表情で答える。何に答えれば良いのか。ものによっては答える事もするが、曖昧な問いかけではわからない。

「百竜」

「あいよ」

2人の会話が切れた所で、轟が百竜に話しかけてきた。

「どうやって氷を避けた？」

「足元が凍る瞬間にジャンプして氷の上に着地した」

その答えに、轟が微妙な表情になる。まさかそんなやり方で自分の氷を避けられるとは思っていなかったのだ。

「視界外の相手への攻撃は、確認する手段が無いなら当たっていないつもりで行動しろ。油断しすぎだ」

「——わかつている」

悔しげな様子の轟だが、しっかりと次への糧に活かそうとしている。

「後はお前も、氷を使えない環境下での格闘戦も鍛えたほうが良い。なんならナイフの一本ぐらいは持つておけ。俺がヴィランだったら、2人とも体と頭がさよならしているぞ」

そう言いながら、呼人は首を落とすジェスチャーをする。そのためにあえて首にテープを巻いた。首を切り落とす暇があつたぞ、と。

「……考えとく」

個性を敵も味方も使用している環境下で従来の武器を使うものは少ない。だが個性次第では、ナイフ格闘術他の格闘術は身につけておくと護身に、個性のきかない相手にと、何かと使える場面は多い。なんだかんだ言つて、刃渡りの良いナイフは人の手ぐらゐなら軽く切り落とすし人間に致命傷を与えることが出来るのだ。

ただ、ヒーローの目的は制圧であって殺害ではないため、呼人のアドバイスは少しずれているのだが、まだ現代社会の常識に疎いところのある呼人は今はそれに気づかなかった。

その後離れていった轟を見送って、呼人と障子は他の組の対戦を見ながら過ごした。

第6話 実戦演習・2

呼人の二戦目の相手、というが、簡単な話、組の数が奇数であるのでどこかのグループが複数回戦う必要があったのである。見方を変えればどこかで2対3をしておけばよかったので、実際には相澤の意向が多分に反映されたペアづくりであった。

「最終試合はヒーローサイドがGチーム、敵が百竜少年だ!!」

再びの呼人。その出番は一番最後に回ってきた。対戦相手は音を操る耳郎響香と、電気を放つ上鳴電気だ。先の轟ほどぶっ飛んだ出力は無いだろうが、攻撃に索敵にと使い勝手が良い個性に違いはない。

「……どうする？ 音はともかく、上鳴は……」

「電気はあいつの専売特許じゃないさ」

「何っ……!」

事も無げに答えて立ち上がる呼人に、障子は思わず振り返る。

「電気も……!?!」

一体あいつの個性は何だと。障子を大きな混乱が襲っていた。

先程同様に建物に侵入した呼人は、今度はビル内を歩き回ってから核の存在する部屋に入る。

今回持つて来たのは……水だ。それを思い切り地面に撒き、一箇所だけ、自分の立つ場所ではなく、部屋の隅の方だけ濡れていない場所を残しておく。そして、他に持つてきた道具で室内と、廊下に細工をする。

「さてと。こんなもんでOKか」

今回呼人は、相手の音の索敵や電気を潰すつもりは無かった。勿論そうする事もできる。だが、障子の耳とは違って、彼女らのそれは換えが効かない。であれば、潰すのはある意味彼女らに最も相性の悪い敵が当たるといふシチュエーションを示しており、それはいささかやりすぎな気がする。

こんな事を戦闘訓練でも考えている呼人だが、それは仕方ない話でもある。なにせ、呼人の持つ教師の数と経験は現役プロヒーローを持つてしても膨大といえるものからあるのだ。真面目に戦うというよりは相手の弱点に気づかせるといふ形を取りでもしなければやっていられない。

やがて耳を済ませていた呼人は、断続的な電気の反応を感じる。電気を潰さないとは

言ったが、電気を探知しないとは言っていない。大方、耳郎が音で探知をしている間に暇になった上鳴が手遊びぐらいのつもりで電気を放っているのである。どうせならその辺りに導電性の高い金属でも仕込んでみたかったが、無かったので仕方がない。

「んー、こりや一番だな」

そう言うと、呼人は立ち位置の頭上にぶら下がっているひものうち一つを引っ張る。すると遠方からガランガランという音とともに、

「うおっ!？」

「きゃっ!？」

と悲鳴が聞こえてきた。なにせ上鳴が定期的に電気を流してくれるので、いる場所がわかりやすい。それに合わせて目の前に落ちるようにトラップを作動させただけだ。

「百竜さんは何を？」

「トラップかしら。変な事をするのね」

「今度は何するつもりだ!？」

モニターで今度ははっきり映ったままのそれぞれのチームを見ながら、互いに意見を

言い合っている。

「障子い！ お前あいつと話してただろ!? 何か言ってなかったか？」

何に焦れたのか、峰田が障子の方へと近づいてきてそう話しかけてくる。

「……どうした」

「先にわかつて教えたら女子にもてるかもしれないだろ!？」

峰田はどこまでも峰田であった。

「……先の試合の反省をしていただけだ」

「最後まで話するか話してなかったか？」

近くで話を聞いていた尾白に指摘されて、障子は澁々ながら呼人の言葉をそのまま伝える。

「……『電気は上鳴の専売特許じゃない』と言っていた」

「はあ!? あいつあんなこと出来る上に電気まで使えるのかよ!？」

大きな声で叫んだ峰田に、障子は内心で呼人に『すまん』と謝罪を送っていた。そして、呼人に『お前の会話はどこまで話して良いのかわからない』と言ってやらなければ、と覚悟を固めていた。

峰田の言葉に女子陣も反応しそうになるが、その前に戦闘が動いた。

「響香ちゃん達が到着したよ!」

その声に、皆がモニターに注目する。映像内では、室内を後方から唱えたカメラに背を向けて並ぶ耳郎と上鳴と、それに相對する呼人の姿が映っていた。

「百竜！ あの不ぎけたトラップは何?！」

なにかに気付いた耳郎が上鳴の肩を叩くと同時に、イヤホンを足のスピーカーに指して大音量でその心音を流す。それに呼人は、思わず耳を塞いだ。その間に耳郎は、所定のポイントまで走ると叫ぶ。

「今！」

「喰らえ俺の全開!」

そう言つて振り上げられた上鳴の両腕は電気を発して激しく輝いていた。慌てた呼人が残つたトラップの紐を引くが、耳郎は引かない。

「バケツなんてきかないっつもの!」

そう言つてバケツを弾こうと両耳のイヤホンを伸ばした耳郎に、バケツが動くとき、大量の水が降り掛かってくる。

「え、水? やばっ、上鳴ストップ!」

トラップの与えた結果に頓着せず、呼人は天井部分まで跳び上がった剥き出しの天井にぶら下がる。直後、上鳴の電気が、地面に撒かれた水を通して炸裂した。

「ううっ!!」

それで倒れたのは、耳郎ただ一人。

「えっ、まじっ!?! なんてだよ——」

自分の攻撃の結果に焦った上鳴が慌ててそちらに駆け寄ろうとすると、その足元に向かって数本の巨大な針が放たれ、上鳴をそれを慌ててよける。複数回に渡って飛ばされた針は、その全てが足元を狙っていた。

「あつぶね! 才能マンかよ百——」

思わず文句を言いながら顔を上げた上鳴は目を疑う。そこに百竜は、いなかった。

「はっ? どこ——」

先程の呼人と轟らの戦闘を見ていた上鳴は慌てて頭上を見上げる。

「はずれだ。良く索敵しろ」

その瞬間、近くの柱の影から飛び出した呼人が上鳴の首に確保テープを巻いていた。

耳郎は上鳴の放電で気絶したままだ。

『ウィランチーム、WIIIIIIIN!!』

授業の最後になってもWINのIの字すら減らない。元氣過ぎるぞオールマイト。

そう呟いた呼人は、まだきよんとしている上鳴を促して気絶した耳郎を起こし、クラスメイトの待つモニタールームへと向かった。

「はい！ 今の戦闘、分かる人!!」

オールマイトの質問に、今度もまた八百万は手を上げない。ある程度はわかっているが、自分の気付いていない何かがあると考えてしまったわけだ。代わりに手を上げたのは、切島だった。

「はい。百竜が上鳴の電気をわざと撃たせて自爆させた、って感じっすよね」

「うん！ 大正解！ けど、百竜少年がしかけたのはそれだけじゃないぞ！」

「バケツの落ちてくるトラップ、っすか？」

「それもああるし、他にもああるぞ！」

そう言うオールマイトに、皆考え込む。

「それでは切島少年!! 百竜少年が廊下にしかけていたバケツトラップは、何のためだと思っう？」

「え、攻撃のため、っすか？」

「ノンノン！」

切島の答えを否定するオールマイトに、今度は戦闘に参加していた耳郎が手を上げた。

「うちらにバケツが落ちてくる」って思わせるため、つしよ？」

耳郎の答えは、最後は呼人に向けての問いかけだった。それに呼人は頷いて答える。

「そうだな！ 耳郎少女、あのバケツが落ちてくるトラップをどう思った？」

「……ふざけてるのか、って思いました。てか苛つきました」

「うん！ 私もそう思った！ でも苛ついた瞬間こそ冷静に、だ。百竜少年のトラップは、最後の水の入ったバケツまでが1つのトラップだった！ そして上鳴少年！」

「は、はいっす！」

「味方を攻撃しちやって焦るのはわかるけど落ち着いて！ それも敵の思うツボだ！」

「了解です！」

その後、オールマイトが全体を軽く講評して授業が終了となった。

授業が終わった後、皆が思い思いに教室に戻る中、呼人のところに耳郎が近づいてくる。

「百竜、あのトラップって全部狙ったやつ？」

「苛ついて視野狭窄になるところまで狙い通りだった。ちなみに部屋に丁寧に水撒いた

のも俺だ」

「……完全に『罨』にハマった、ってことね。やられたわ」

「難しいところだけだな。ほんとに馬鹿なヴィランもいるだろうし。けど警戒して損は無いだろ」

「うん、ってかオールマイトと言ってる事一緒じゃん」

「あの人はちゃんと見えてるからな……上鳴！」

その途中で、呼人は前を歩いていった上鳴を呼ぶ。

「なんだよ百竜、この策士め！」

そう言いながら完全に嫌がっているという感じではなく、少しふざけた感じの言い様だ。見た目のチャラ男という印象は全く間違えていない。

「何で最後上向いた？」

「そりゃあ轟と障子が上からやられたからさ。また上から来るんじゃないかと思ったんだよ」

「だから俺は下から行った」

「え、まじ？ あれ狙って上向かせたの？」

「足元に攻撃が来て、『下向かされてる』って思っただろ？」

呼人の間に、上鳴は完全に驚いた表情で頷く。足元に複数回の攻撃を来てそれを全部

見ながら避けて、直後『上から来たらやられる!』と思ったのだ。

「思った思った! んで慌てて上向いたら下から来た!」

「そういうことだ。ちなみに、今日俺がやった戦いは個性が無くても出来る戦い方だ。そして、もし俺が敵でこれを使っていたら——」

そう言つて呼人は、腰から特注のナイフを引き抜く。ヒーローの装備にふさわしくな
いと言われたが、救助の際に服を破いたりするからと作つてもらつたのだ。

「お前の頭は体とサヨナラしてる。急所を簡単にさらすなよ」

「お、おう。怖ーなお前」

「そう言えば、何でうちの時は障子達の時のあれ使わなかったの? あれ、あのうるさいやつ」

ナイフを軽く持ちながらぞつとする事を平気で言う呼人に上鳴が若干引く一方で、耳
郎は訓練中から感じていた疑問を尋ねる。

「今回は奇襲を仕掛けるつもりは無かつたからな。まあ攪乱という目的で言えば使つて
も良かったが、使われたらお前困るだろ」

「そりゃ困るけど?」

「そんな相性最悪の相手との訓練なんかいきなりやつても意味がない。後上鳴」

「おん?」

「お前は手持ち無沙汰だからって電気パリパリ流して遊ぶな。相手によつてはばれるぞ」

「げっ、気付いてたの？」

「それを頼りにバケツ落としてたからな——」

「才能マンやだ……って言いたいけど才能マンか？」

「あとお前核がある場所で電気ぶつ放すか、普通」

そんな反省会を、途中からやってきた障子や葉隠を含めてしながら教室へと戻る呼人であった。

「すげえな百竜！ 轟に勝つなんてよお！」

「凄いね！ あの氷はどうやって避けたの？」

下校時間となった百竜の周りには、なぜか何人かのクラスメイトが集まっていた。

「獣となる力……だが個性把握テストの時の力は見せていない……」

「あの身体能力で暴れたらどっちの試合ももつと楽に勝ってたわね」

「しかし、一体どういう個性なんだ？」

切島、芦戸、常闇、蛙吹、砂藤、障子、耳郎。個性豊かなクラスメイト達が集まってくる。皆雄英高校のヒーロー科に集まってくる以上向上心の高いものばかり。だからこそ、雄英高校の推薦組である轟を倒した呼人の話を聞きたがっていた。一部のものは、呼人があえて個性をほとんど見せなかったにも関わらず、その正体を知りたがっていた。

「轟は氷でビルを覆って完全に油断しきってたからな。障子も味方に圧倒されてた」「あの障子ちゃんと轟ちゃんの後ろで止まってたのは何かの準備？」

「……いや、いつ障子が気づくかな、と」

「……耳を消した代わりに目を出していればすぐに気付けた……不覚」

訓練直後に呼人に説明されたことだが、改めて言われたことで障子がそれを思い出して落ち込む。

「気づかれてたらどうしたんだ？」

「普通に正面から捕縛テープ巻く。2人の個性の感じと体の動かし方は個性把握テストで観察してたからな」

「観察、つてずっと見てたのか？」

切島の問には答え、砂藤の問には障子には見せたことのある索敵時の顔つきになる。

「わっ、すごいね！」

「うおっ!？」

「すごい顔ね」

「ちよつと怖いよそれ」

ひどい言われようだ。とはいえ、呼人はそう言われるのも普通だと思っていたので特に何も思わない。

「複眼とピット器官、微弱な電気を感知する器官、音を感知する耳と舌、それに鼻で観察していた。身のこなしや動いた時の心音、体の温まり方、匂い……感覚は情報だ。慣れれば相手のことが手にとるようになる」

「すげえ、そんなことまで考えてんのか」

「みんなからかなり見られている気がしたからな。俺もお返しに、と思っただけだ」

勝手に観察していたことに、呼人は少し申し訳無さそうにする。野生の癖である、や、周りからも見られていたから、などと言いつつ訳は色々あるが、あまり好ましく無い事をしたのは自分でもわかつている。

「ところで百竜ちゃん」

「なに、蛙吹さん」

「梅雨ちゃんと呼んで。結局あなたの個性ってなんなのかしら」

「う、それ気になる?」

「「気になる」」

意外に皆食いつきが良い。が、呼人としては積極的に吹聴するつもりはない。理由は単純で、相当に異質であるため全てを説明するといらぬ問題を呼びかねないし、かと言つて部分的に説明して騙していると、いつかはばれるときが来てそのときにいらぬ疑いを生むからだ。

「まあ、俺の個性は秘密だ。育ててくれた人あまり喧伝すると言われてる。訓練で見られる分には仕方ないけどな」

「まじか〜」

「気になる言い方だな」

ついつい思わせぶりになつてしまふ呼人の言い方に、他の皆より交わした会話が多い障子と耳郎は苦笑いだ。何かしら言いたくないことがある呼人は、ああ言う言い方しかできないのである。

「訓練で見せたのは聞けば教えてくれんの？」

「それぐらいなら」

耳郎に呼人が答えた途端、皆こぞつてあれは何だ、と尋ねてくる。尋ねてくるのは、轟と障子の耳を塞いだ、あの音の正体。

「あれは鱗だ。ほら」

そう言つて呼人はまくつた腕から複数鱗を発現させ、それを皆に見せる。

「触つても良いかしら」

「毒は無い……多分」

「多分つて。まあそう言うつてことは大丈夫なんでしょ？」

そう言つて耳郎が率先して鱗を手にとると、皆興味深そうにそれを見る。

「鱗から音が出るとは奇怪な……」

「中に音が響く構造があつて息を吹き込むとそれに反響、共鳴してあんな音が出る。ちなみに特定の周波数の音をぶつけると激しく共鳴して弾け飛ぶ。障子に使つたのはそつちだ」

へーと興味深そうにしている皆がある程度観察した所で、鱗を消す。

「獣化して出したものは消して回収しないとエネルギーを回収できないんだ」

おかげで食費がかさんで困る、と苦笑いする呼人に、皆意外と接しやすいやつなんだなど、彼に対する認識を新たにしていた。

「おっと、そろそろ相澤先生に呼ばれてるんだ」

「え、先生に？」

「ちよつと行つてくる。多分時間かかる」

第7話 百竜呼人の個性検証記録

呼び出しの話はその場を逃れるための言い訳に映るかも知れないが、しつかりと事実である。

「相澤先生」

「……来たか。ついてこい」

そう言うや否や、相澤は面談室の一室へと向かう。必要の無い説明はしない。非合理的なことが嫌いな相澤の性格がよく現れていた。

「オールマイトから話は聞いた。が、どれも曖昧なものばかりだ。ジ・アドベンチャーがついていたなら、何か記録があるだろう」

仮にも研究者を名乗るならば、と、相澤にそう言われ、呼人は鞆から一枚のディスクを取り出す。

「アドベンチャーから、担任の先生かオールマイトが詳細な情報を求めてきたら渡せと言われています」

「中身は？」

「アドベンチャーと実験した際の映像記録だと聞いています」

「……オールマイトと見ておく。担任の先生とオールマイトということは、他の教師には見せるな、ということか?」

「そこには普段は隠している強力な能力がたくさん記録されています。どれも危険だったり利用価値が高いものだったり、あまり知られると都合の良いものばかりです」

「……ひとまず校長には共有する。その上で、場合によってはお前の許可を得た上で他の教師にも共有する」

「わかりました」

そのものわकारいの良さに、相澤は違和感を持つ。

「なら何故初めから提出しなかった」

「隠せるのであれば全貌は隠しておくつもりでした。使うにしても中堅ぐらいの能力にしておこうと」

今も、クラスメイトはあくまで少し不思議な獣化、あるいは異形系の個性だと思っただろう。オドガロンとトビカガチ以外のモンスターの力は、不自然に思われない程度にしか使うつもりは無い。特に強力な大型モンスターや古龍に関しては、見せるつもりはまったくないと言っている。

「教師である以上、生徒のことは把握しておきたい。特に危険と言われてしまえばな」

「わかっていきます」

「ならいい。今日の授業では無駄に目立たせた。次からは普通にやれ」

あんたが言うな！ とは言えない呼人であった。

その夜。

「わたしが来た!!——さて相澤君、緊急の用とは何だい？」

「かっこつけて力まなくて結構です。……百竜から、百竜の個性をジ・アドベンチャーが記録した映像を受け取っています」

「！ 本当かい！ アドベンチャーの言い様だとあまり広めないようにとのことだったが」

「俺とあなたには把握しておいてもらった方が良いそうです。つけますよ」

無駄な問答を省いた相澤が、早速ディスクをプレイヤーに挿入して再生を始める。2人のいる場所は、雄英高校内の視聴覚室。すでに生徒は帰宅している時間であり、2人が用があるということでの場を借りて使用しているのだ。

『やあ、俺は神王寺明博。ジ・アドベンチャーという名前でヒーローもやってい

る。これを見るということは、呼人の担任かオールマイトだな？ まあ早速で悪いが最後まで見ていってくれ。ビビるなよ？」

ゆったりとしたチェアに座った男が、映像を見ている2人に向かって話しかけてくる。わざわざこのために撮った映像なのだろう。

そして映像が切り替わる。

『よし、それじゃあ百竜呼人の個性検証第1回だ。今日はジャギイという小さなモンスターになってもらう。彼の書いてくれた絵によるとこんな感じらしい』

そう言って画面の前に、小さな恐竜の絵が示される。

『これを見せてくれるために絵を随分と練習してくれたらしい。可愛いやつだ。よし、それじゃあ変身してくれ、呼人』

神王寺が話し終えて画面から離れると、画面の中央に一人の少年、というより子供が残される。まだ非常に小さい。そして何故か裸である。

そして彼がコクリと頷いた直後、その体が変わり始める。人間の肌が、橙と紫の鱗に覆われていき、その姿勢が前傾へ。そして四肢も大きく変わっていく。10秒後、そこには小さな恐竜のような生物がいた。

『本当に変化した。じゃあ呼人——』

続けて神王寺に指示されるままに、様々な行動をこなしていく。恐竜になっ

が人間の意識を持つているようだ。

そして映像が切り替わる。

『ここからはまきで行くが、基本的に体を動かすのに問題は無いそうだ』

まるでアイキャッチのように神王寺の映像が挟まると、次の映像へと変わる。

『百竜呼人の個性検証第二回だ。前回の後呼人と話したんだが、どうやら彼が宿している数多のモンスター達にはそれぞれ人格があるらしい。しかもそれぞれが人間の体を持つて生活していたり戦う練習をしていたり、呼人くんにイメージを使って語りかけてくるそうだ。子供としては精神が成熟していると思つたが、どうやら100人以上の彼らと現実を遥かに超えるスピードで対話しているかららしい。よし、それじゃあ今日はこれとこれ——』

『百竜呼人の個性検証第4回だ。呼人の中にいるモンスター達についての新情報だ。どうやらそいつらは、ここじゃない世界で実際に生きていたらしい。それと問題が発生。モンスター達が大自然の中の野生を生きていたせいで、呼人君にモンスターの常識が備わってしまう可能性がある」と彼の中のモンスターの長老格が教えてくれた。俺が人間の常識を教えてやらないといけない。さて、それじゃあ今日は——』

『百竜呼人の個性検証第18回。よし、それじゃあ今日から真正正銘の大型モンスターと呼ばれるモンスター達に移っていく。それとモンスター達の人格についての新情報

だ。呼人君に教えた知識は、全部モンスター達の中でも聡明な者たちが理解、解釈して呼人君に意識内で教えてくれているようだ。どおりで学習が早いわけだ——。さて、今日のモンスターはこいつ、オドガロンというらしい。他のモンスターたちと比べて物理的な力しか保たないため安心だそうだ。物理以外の力ってなんだ？ まあ行くか』

そして、呼人が変身を始める。全身が筋肉のような赤黒い筋に覆われていくとともに、その四肢が、胴体が発達し、巨大な獣の姿へと変わっていく。その大きさは、隣に立った神王寺の身長を有に超えている。

『すげえ……よし、呼人、おすわりだ』

その神王寺の指示に、呼人であったモンスターは首を横に振る。激しく嫌そうだ。

『ありや、流星に嫌だったか。しかし大型モンスターになっても暴走はしないみたいだな』

『百竜呼人の個性検証第19回。前回のモンスターを見て呼人の中のモンスター達に聞いてみたんだが、やはりと言うべきかあいつらは人間をかなり殺しているらしい。というより、彼らの世界では人間はあくまで自然の一部として生存競争をしているそうだ。そいつに、呼人にそれを染み付かせないようにお願いしないといけない。よし、それじゃあ今日は、トビカガチというこの個体だ。大きめの体躯に加えて、発生させた静電気を毛と体内器官に蓄えて利用するらしい。どうやらそう言う力をそいつらの世界で

は属性というようだ。さて、それじゃあ——』

『百竜呼人の個性検証第35回。今流している音楽は呼人が作曲したものだ。老齡の龍と協力して、モンスター達のかつての姿と、それに対峙する人間の姿を曲にしたそう。モンスター達は、人格と人間の知恵を持ったせい自分たちと戦った人間に興味を持っている。いやはや、こんなモンスター達と個性もなく剣や弓で渡り合った彼らの世界の人間、ハンターたちには頭がさがるな。さて、それじゃあ今日は、リオレウスという——』

『百竜呼人の個性検証第79回。さて、今回は前回言った通り、火山にやってきた。予想以上に早く機会が巡ってきたわけだが……どこの火山かは秘密だ。後で怒られたくないからな。さて、モンスター達の話が本当だとすると——いや、色々言わずにやってみよう。今日のモンスターはイヴェルカーナ、というらしい。綺麗でかっこいいな』

このあたりまで来ると、呼人の絵はまるで写真のような精度になっていた。

『は、ははっ。まさか、まさか本当にマグマが——』

『百竜呼人の個性検証第123回。どうやら呼人の個性は、ただ変化するだけではないらしい。と言っても、まだ不確定のものだが、彼とモンスター達が言うには、モンスターの形にならずともその体の特徴を持てるらしい。つまり、オドガロンの体を人間の形状で再現したり出来る、ということだ。呼人君がハンター達のイメージを再現しようとし

たときに判明したそうさ。ハンター達はモンスターの鱗や甲殻を使った防具や、爪や牙を使った武器を使っていたらしいから、それが別の形で発現したんだろう。モンスター達は力を発揮することしかしない。それが制御できるとなれば——」

映像が進むごとに、それを見ている相澤とオールマイトの顔が厳しくなっていく。

そして3時間ほどで視聴終了。かなりの部分を神王寺がカットし、必要な部分ばかりを繋いでいてくれたからこそこの時間ですんだ。

「……あなたなら止められますか」

「大丈夫！ 私が来た！……と言いたいところだが、ワイバーン達はともかく、ドラゴン、古龍達はわからないな。ワイバーンの中にも強力な個体はいるそうだし……しかも彼は、野生だったモンスターの力を鍛え、戦い方や力の使い方を洗練させている」

「そうです。それに、これだけの力がありながら百竜は力をほとんど使わずに今日のような戦いをしました」

ヒーローとなってくれればこれほど頼もしいものも無いが、彼が敵にならずとも人間であることをやめたら——。

「ジ・アドベンチャーは、雄英高校で彼をヒーロー側に引き込めと言っているのかな？」
「おおむねそうですね。少なくとも百竜は、敵側の人間でもない。あるいは弱肉強食というのが本来の性質かも知れませんが、人間の社会では通用しないとわかってくれて

「No」

「……私達が教える必要あるのかな。彼は、モンスター達と——」

「特別扱いは出来ないでしょう。あいつには力の開放よりも制御を意識するように言っています。後はドラゴンクラスの力は使わないように強調しておきましょう」

全く非合理的だと、相澤は呟く。今の日本のヒーローの規則では、ヒーロー科の高校に通った人間でなければ正式なヒーローライセンスを取得できない。つまり、ジ・アドベンチャーが自ら育てた百竜呼人であれど、ヒーローとしての資格を獲得するためには学校に通うしか無い。

「しかし、彼ならヒーローにならなくても生きていけるだろう。実際——」

「それは誰にでも言えることですよ。とにかく、あいつもうちの生徒です。面倒を見てやる必要がある」

相澤のその言葉に、オールマイトは静かに考える。と、そこに来客があつた。

「やあ、2人とも！ 深刻な顔をしてどうしたのさ？」

「校長先生……いえ、お伝えしておくべきことがあります」

ドアを開けて入ってきたのは、この学校の校長であるネズミ。彼は、個性を獲得して人間以上の性能となったネズミという、類まれな経歴を持つ。前例がないという意味では、彼こそが、呼人が今後おかれる状況を最も体感してきたとも言える。

そんな彼に、2人は映像を示しながら説明を初めた。

第8話 学級委員長

「でかいっすねあの人。すごいガタイしてる」

『オールマイトの授業はどうか』というマスコミの呼びかけに、呼人はそれだけ答えて校内に入る。実際感想がそれぐらいしか思いつかない。凄い人だとは聞いたが、まだその力を見たわけではないのだ。

校門を抜けて歩いているとすぐに、教師とすれ違う。

(そう言えば神王寺がマスコミってめんどくさいとか言ってたな)
マスコミへの印象がその程度の呼人であった。

「学級委員長を決めてもらう」

「「学校っぼいの来たー!!」」

いくつかのお小言の後に、相澤が言い出した言葉。何やらまた至急のことだと不穏な事を言い出したのだが、その一言で皆の不安は払底された。

まさに学校扱いそれ。

しかし普通の学校と違って、ここでは皆が自己推薦していた。

ヒーロー、特に上を目指す者にとってはリーダーシップというのは、集団を導く力、トップヒーローに必要な力として皆が望む役割なのだ。

そんな中呼人の頭の中には、今朝方の神王寺の言葉が響いていた。

『学級委員長とか隊長とか、そう言うのは絶対やらないほうが良いぞ。なんでつて……めんどくさくね?』

神王寺の、渾身のありがたいお言葉であるが、それではこの状況の説明がつかない。

『――』

『まあ、あいつは人に合わせるとか足並み揃えるとか苦手そうだな』

正に呼人と龍達に言われているとおりで、神王寺は基本的に人に合わせるということが致命的に苦手な人間なのだ。というよりは、自分本位を抑えられないというべきか。

集団で戦闘をしている、途中で面白そうな相手がいるとそつちにふらふらつといなくなったり、流石に救助の最中にいなくなることはないが、指示を無視して自分が助けたいところに行ったりと、とことん自分の考え優先なのである。

そのためか、あるいはそれもまた自分がしたいなにかだったのか、神宮寺は雄英高校を卒業した直後、プロヒーローになって数年のうちに日本を出て、世界中を巡っては現

地の住民を手助けしたり個性に関する研究をしたり世界中の自然を巡ったりしていた。

そんな神王寺がリーダーの役割に良い思いをしているわけがないし、そんなノウハウもまったくないのだ。曲がりなりにも呼人を育てた分、子育てのノウハウの方がまだあると言えた。

「静粛にしたまえ！」

そんな中、飯田と言う、いわゆるクソ真面目（悪い意味ではない）な少年が声を張る。「多を牽引する責任重大な役割だぞ……！ やりたい者がやるのではなく、皆に『この人ならば』と、認められ、選ばれた人間がやるべき仕事だ！ そのためにも、皆で投票を行うべきだ！」

男飯田、ここ一番で決めた。最も公平である手続き多数決を提案したが。

そんな彼の手もまた、綺麗にそびえ立っていた。

「お前もそびえ立ってんじやーねか！」

「日が浅いのに信頼も何も無いわ飯田ちゃん」

「だが……だからこそ、この中で2票でも3票でも獲得した者が、相応しいと思わないか！」

その飯田の言葉に、皆考える。確かに、ここで複数の票を獲得できた人間は本物だ。

(リーダーシップなんちゃあ、今持つてるものじゃなくて身につけてくものだろうに)

そう呆れた様子で考えている呼人。すでに斜め前とかから視線を感じるが、ガン無視で下を向いている。ついでに、耳の良い斜め前の少女が聞き取ってくれるように『やりたくないやりたくないやりたくないやりたくない——』と言い始める辺り、結構めんどくさそうなことは嫌いである。

その後八百万が用紙を作成して配り、即興の投票が開始される。ばんばん隣とか後ろとかから視線が刺さるが、全部無視。ついでに自分の紙に『飯田』と書いてこれみよがしに机の端に置く。これは自分以外の名前であれば何でも良かったのだが、その中でも場が見えていた飯田に伸びしろを感じたためである。

そして、結果発表。

大半のものが自分に投票する中、名前が無いものが数名、そして、3票を獲得したものが1名と2票を獲得したものが1名。

緑谷と、八百万だ。

「え!? 僕に3票!」

「あと1票でしたのに……」

結果が決まる中、場は一時騒然としたもののなんだかんだ落ち着き、緑谷が委員長、八百万が副委員長になった。

そんな中、自分に投票しなかった一人である飯田は、何故か自分に入れられた1票を呆然とした顔で見つめていた。

「誰が……一体……」

先程はああもぶち上げた飯田だが、自分が到底その本物足り得ると思っていなかった。だが、誰かが認めてくれた。それが嬉しくもあり不思議でもあり、その誰かが一体誰なのかと。飯田は気になっていた。

ちなみに百竜に視線をガン無視された障子と耳郎、葉隠は、耳郎が2人に示し合わせて百竜に入れてやろうとしたものの、障子が首を横に振ったため耳郎のみの1票で終わる。その結果に、百竜が耳郎の方を見ると少しばかり不機嫌な、有り体に言えばふてくされた彼女がいた。

「百竜、食堂に——と、弁当があるのだな」

「うわっ、何が入ってるのその弁当」

「わ、大きいお弁当だ」

昼休みになって百竜が卓上に取り出したのは、巨大な弁当箱。しかも2段重ね。呼人

の席の近くにやってきていた障子、耳郎、葉隠の3人は、それを見て思い思いの声を上げる。

「米と肉と野菜。食堂行くなら席取つといてくれないか?」

「え、それ以上食べるの?」

「太るよ?」

「個性の関係上大食いなんだ。これでも足りないが、流石に持つてくるのが面倒だからな」

そのサイズで、と明らかに自分の3食と張り合いそうな弁当を2つ重ねている呼人の言葉に耳郎が少し引いた直後、サイレンが鳴り響く。

『緊急警報発令。緊急警報発令。セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へと避難してください——』

緊急警報。その言葉の意味を理解したクラスメイトの顔色が変わる。

「セキュリティ3、とはなんだ……?」

「ちよつ、そんなこと言ってる場合じゃないって。早く避難しないと!」

「でももうすごいパニックだよ!」

葉隠の言う通り、廊下はすでに走り出した人間でいっぱいである。緊急警報だけでなくもうなるものなのか。ヒーローはこういうのを助ける仕事なのだが、その大変さがよく

わかる。

『3は“侵入者”が校内に“入った”事を示すはずだ。このセキュリティを抜けるか……』

「侵入者なら早く逃げない！」

「つて、ちよつと、何障子も百竜も落ち着いてんの！」

「むつ、しかしパニックに飲まれては意味が無い……」

「そもそもこの廊下のはつつめ具合でどう逃げるんだ。相手がヴィランなら数集まってる方が危険だろ。俺達は単独で狙われても他の科の人間よりは逃げ切れるしな」

だから落ち着けと。わたわたと慌てる葉隠と、少し焦った様子の耳郎を障子と2人がかりでなだめていると、別の放送が入った。

『やあ皆さん！ 避難しなくて大丈夫！ 侵入者は礼儀のなつてないマスクミです。後は先生たちが対処するので、皆さんはクラスに戻つて連絡を待つていてください。おつと、校長の根津でした。言い忘れるところだったね。それでは』

少しばかりユーモラスに、あえて落ち着きを取り戻させるような校長の放送を聞いて、何より先生方、すなわちプロヒーローが出ると聞いて、廊下の喧騒も次第に落ち着いていく。

「マスコミかあ。びっくりした……」

そう安心する葉隠と耳郎に呼人がなんとも言えない表情をしていると、障子が触腕から口と耳を伸ばして他に聞こえないように話しかけてきた。

「何かあるのか？」

「たかがマスコミがここのセキュリティを抜く実力も度胸もあるとは思えないな」

「……そういうことか」

呼人の言葉に納得した障子が、触腕を戻す。

「何、2人で何のひそひそ話？」

「え、ひそひそ話してたの？ だめなんだよ仲間はずれ」

女子2人のその言葉に、呼人が障子の方を見ると、首を横に振っていた。言わない方が良いという意味なのか、バレた以上言えという意味なのか。

「いや、慌ててる2人なんか可愛いなと思って」

「は？」

「え？」

『おいゲリヨス。大ハズレじゃねえか』

『』

しよぼいナンパ師みたいな人格のゲリヨスのアドバイスを聞いたらこれだ。そもそも呼人はまだ感覚的には人間の美醜がわかっていない。なにせこれまでの女性に関わることと言えば、“炎王龍”が鬼嫁の美しさを語ってきたり、“火竜”が一回り小柄な妻の可愛さを語ってきたり、“角竜”が気が立つてる時期の奥さんなんか良いとか伝えてきたりと、モンスターの惚気話ばかりだ。

「すまん、冗談だ」

呼人がそう言うのと、2人が安堵したような、何故かがつくりとしたような反応をする。「……それは無いぞ、百竜」

「お前が俺に任せたんだが。首振られるだけじゃどうすりや良いかわからねえよ」

「普段からお前に聞いたことを勝手に話していいか悩んでいる俺の気持ちを知ってほしくてな」

「そういうのははっきり言え」

障子と言い合いをした呼人は、女子2人の方を見て説明する。

「不安にさせるかも知れないけど、マスコミがこのセキュリティを抜いて侵入する実力も度胸もあると思えなくてな。その事を少し話してただけだ」

呼人がそう言うのと、何故か葉隠が呼人の目の前まで近づいてくる。

「百竜くん」

「ひゃい」

そして、口もとを掴んで左右に引っ張られた。

「そういうのは軽々しく言っちゃいけないだよ」

「ふあい、こふえんなふあい」

後でゲリヨスはスキュラに締めてもらう。ついでにスキュアにも締めてもらう。

『――!』

抗議は受け付けない。

「はあ、あんた隠すのとか明らかに下手なんだから、隠してもわかるんだよ」

「まじで?」

「まじで」

解放された頬をさすっていた呼人に、耳郎が言う。つまり言った瞬間にはバレていた。

「……もつとポーカーフェイス練習する」

「そういうことじゃない」

2人に小言をもらった呼人は、クラスメイトが教室に集まってくる中昼食を食べそこねる訳にはいかないと、3人が話している前であつという間に弁当を平らげる。

「そうじきみたい……」

失礼な。ちゃんと味は味わっている。じゃないとジョーに怒られる。その後待機は、安全が放送されるまで続いた。

「百竜君！ 少し話を聞かせてもらってもいいだろうか」

「ん、ここじゃまずい話か？」

「できれば2人がありがたい」

食事を終えた後、いつものように本を取り出して読んでいた呼人に飯田が声をかけた。先程の4人で食堂で食べそこねた愚痴を兼ねて話し合っているところに来たので、皆の前では駄目なのかと尋ねると、彼は2人が良いと伝えてきた。

そして場所を変えるために、2人は廊下に出る。教室と違ってその場に留まる人間がないので、話を聞かれても断片的にしかかなりえない。

周りの人気切れた所で、早速とばかりに飯田が尋ねてくる。

「さっきの投票、僕に投票してくれたのは、君か？」

「……どうした急に。それを聞かないための無記名投票だろ？」

呼人がそう答えると、飯田は苦渋の表情で少し黙った後、答える。

「そうだが……気になっていたんだ。それに少し嬉しかった。僕は自分でも、自分が学級委員長に相応しいとは思っていなかった。だが、誰かが投票してくれた……！　だから、僕に投票してくれた人に聞きたかったんだ」

そうしてクラスみんなに聞いていると、呼人が『飯田』と書いた紙を持っていたという情報を聞いた。

「君が、僕に投票してくれたのか！」

「……そうだよ。俺はお前に投票した」

「……教えてくれないか？　何故俺を選んでくれたのかを」

飯田の言葉に、呼人は小さくため息をつく。それに飯田がシヨックを受けた表情を見せるが、呼人が構わずに続けた。

「少し長くなるぞ」

「！　ああ、構わない！」

「まずは……そうだな。俺は、お前の『今他の者に選ばれるものがいれば、それは本物だ』って論理は、間違えてると思ってる」

飯田が何か言い返してくるかと思ってみるが、呼人の言葉の続きを待っていた。

「こう言うのはあれかもしれないが、リーダーの実力なんてのはこれから『鍛えて』いくものであってすでに身につけているものではないし、今少し素質がある程度で『相応し

い』なんていうものじゃない」

「……確かに……！　僕はリーダーに拘りすぎるあまり、視野狭窄に陥っていたということか……！」

「そんな中お前は、他の連中には悪いが、お前だけが『まとめる意思』を見せた。リーダーには色々ある。穏やかに皆の意見をまとめる者、恐怖と力で支配する者、カリスマで引つ張る者。だがそのどれも、リーダーになるならまとめる『意思』が必要になる。そういう意味では、お前の伸びしろが一番あるように感じた」

それだけだよ、と呼人は飯田に言う。話の途中から飯田は下を向いて何やら深く考え込んでいる様子だったが、やがて顔を上げて、思いつめた表情で口を開く。

「……僕は、なれるのだろうか……！　オールマイトや兄さんのような、皆を引つ張っていけるリーダーに！」

「さつきも言ったが、それはお前がこれから何を身につけるかだ。だが、自分が目指すリーダーの形は考えておいた方が良い」

「リーダーの……形？」

「そうだ。オールマイトは、カリスマで引つ張る典型だと思う。彼自身に皆を引つ張るつもりがなく、またそのための方策を張っていないくても、彼が言えば、皆がその背中を見る。皆がその背中に従う。そういうタイプのリーダーだ」

ある種の化け物だな、と呼人は呟く。こんな事を呟くと怒られるかも知れないが、そう言わずにはいられない。

「しかし、僕に彼のようなカリスマは……」

「何もカリスマだけがリーダーになる手段じゃない。言っただろ。いろんなタイプのリーダーがいると。例えば、全体に適切なタイミングで適切な方針を示し、個人個人の性格を適切に把握した上で役割を振る。あるいは、背中を後押しする。リーダー、導く者とは言うが、別の見方で言えば、個人個人が自分の事を見る中でただ一人集団の行く末のために行動するのがリーダーだとも言える」

「背中を……後押しする、か。僕に出来るだろうか……」

「さあな。だがそっちは、先天的なカリスマとは違う、技術として身につけられるものだ。個性が出現する以前の、リーダーシップや経営に関する書籍をいくつも読んで分析してみると良い。それも、リーダーの仕事だ」

「……何か、君からヒントをくれないだろうか。具体例でもなんでも良い」

食い下がる飯田に、呼人は少しばかり彼への目を改める。あんな真面目な感じを出しているが、彼もまた貪欲に目指す者なのだ。

「……爆豪は、あんな性格だ」

「ああ」

「オールマイトや他のプロヒーローなら、アイツを抑え込もうとするだろう」

「それは、そうだ。彼は周りが見えていない」

「だが、あいつの強さには光るものがある。なら下手に抑え込まずに、あいつに割合自由にやらせて、それを他のみんなでサポートする、という手もある」

「……！ それは！」

「あくまで一例だ。だが、そういう風に、集団にとって、そしてそこに所属する個人にとつて何が最適か、というのを様々な情報から判断し、そのために行動するのもまたリーダーだ。今ので言えば、爆豪に最低限のルールを徹底させたりとか、爆豪をメインに回すことに不満の声を上げる他のメンバーに丁寧の説明したりとかな」

「……」

「俺で良ければ、家にいくつか本がある。それを貸すよ」

「本当か！」

呼人の言葉に、飯田が顔を跳ね上げる。そこに彼は鬼気迫るものを感じた。

「言っておくが、リーダーは誰をとつても同じやり方の者はいない。皆それぞれ違いはある。だから、それを全部真似るんじゃないやなくて参考にして考えるんだ。何が、自分が目指すべき、あるいは目指したいリーダーなのか、つてな」

「ああ！ 本を貸してくれ！ 僕は——！」

「わかった、わかったから離れてくれ。暑苦しい」

その後、興奮した飯田をなだめるのに少し時間がかかったが、無事落ち着いた。

更に驚くべきことに、飯田の行動に感銘を受けた緑谷が彼に委員長を譲るという一幕があった。

その後、呼人から本を借りては読んでいる飯田が、呼人に話しかける機会が増えたのは言うまでもない。

第9話 USJ襲撃事件・1

「今日のヒーロー基礎学だが……俺とオールマイトともう一人、計3人で担当することになった。内容は昨日までとは一新。災害水難火災等の状況下における『人命救助訓練』だ」

オールマイトの代わりに教室にやってきた相澤の言葉にクラスがざわめくが、
「まだ途中だ」

という言葉に静かになる。

「今回はコスチュームの使用は各自の判断に任せる。コスチュームによつては活動が制限されるだろうからな。その辺りを考えるいい機会だ」

コスチュームによつては燃えやすかったり濡れたら機能が失われたりと、ヒーローにも得意な環境不得意な環境は存在する。それを踏まえてのコスチューム使用自由という言葉だ。

「移動はバスで行う。少し離れた場所にあるから準備に時間かけすぎるなよ。以上、準備しろ」

説明を終えると、相澤は一人先に外に出る。急ぐもはしやぐも生徒次第。ただしは

しやぎ過ぎたら容赦しない。

それを悟ったか、会話はあるものの皆素早く準備を終えて集合場所へと急ぐのだつた。

「百竜、今日の放課後なんだが……」

外に出てバスを待つ間本を読んでいた呼人に、障子が話しかけてきた。呼人は基本的に人と仲良くはするが、積極的に話しかけることがあまりないのでこうして話しかけられる機会が多い。

「ん、何かあるのか?」

「訓練を手伝ってくれないか? ヒーロー科の学生には、放課後に屋内演習場の使用が許可されているそうだ」

「ああ、それなら俺も使ってるぞ。ほんとは屋外練習場が使いたいんだけどな」

「……すでに使っていたのか」

「まあ、家と違って多少ぶつ壊しても怒られないし、な」

「うちらも誘ってくれば良かったのに」

そう愚痴るように言うのは耳郎だ。後ろでは葉隠が『おそらく』何回も頷いている。

「葉隠は何で手足のコスチュームはステルス素材にしないんだ？」

「あ、違うよ。これは手袋と足以外脱いでるんだよ」

「脱いでる？」

すなわち裸ということ。堂々とそう言った葉隠に、思わず百竜はじつと見つめてしま
う。

「ちよつと百竜、いつまで見てんの」

「ん、いや、それで人命救助大丈夫かなと思っただけだ。別に裸を見ようとしたわけじゃ
ない」

「大丈夫って、どういうこと？」

「……剥き出しの肌が危ない、ということか？ 確かに火事や水難ならば……」

障子が、百竜の言葉の意味を汲み取って代わりに答える。以前の障子なら気づかなか
ったかも知れないが、入学してからの百竜と一緒にいることの多い障子は、色々なこ
とに対して自分なりに考える癖を身に着け初めていた。

「障子の言う通り、人命救助って火事の現場とか水難の現場とかだろ？ 裸じゃあ要救

助者より先に体力を消耗してしまうし負傷する可能性も高いだろうと思つてな」

「うーん、確かに。でも服着ちゃうと私の個性ほとんど意味ないし、今日はこのまま行つ

てみるよ」

「確かに火事とか危ないかも。気をつけてよ葉隠。火傷してるかもこっちはわからないんだから」

「うん！ みんなありがとう！」

皆に心配してもらって葉隠は嬉しそうだ。だが、呼人にはまだ心配することがあった。

後から体操服でやってきた緑谷がいい例だが、普通負傷した場合、外からその様子が伺える。常闇のように闇で覆われていたとしても、倒れていれば何か異変が発生しているのだと判断することが出来る。

だが葉隠が負傷、昏倒した時、彼女がグローブと靴しか着用していないとすると、索敵能力の無いヒーローではそもそも気づくことが出来ないし、索敵能力があっても気づくか怪しい。場合によっては、昏倒したまま火災現場に取り残されたり、人のいる前で気づかれぬまま息絶えてしまったりする可能性もある。

少し酷かもしれないがその事を呼人が伝えようとした所で、頻繁に怪我をする男でおなじみ緑谷と麗日という少女が近づいてきた。

「あの、百竜君！ それと、えつと……」

「障子目蔵だ。よろしく」

「あ、そう言えば緑谷とこうやって話すの初めてなんだ。こつちばかり知ってるつもりになってた。うちは耳郎響香。よろしく」

「見えないと思うけど私は葉隠透だよ。よろしくね」

「透ちゃん、また脱いでるんだ……」

「うん！」

緑谷が名前がわからずに戸惑っていることに気付いた障子に続いて、耳郎と、そして恐らく気づかれていなかったかも知れない葉隠が自己紹介をする。

「あ、ありがとう！ よろしく、障子君、耳郎さん、葉隠さん！」

持ち前の挙動不審を發揮する緑谷であるが、すでにこれまでの学校生活でその挙動不審っぷりはクラスみんなが知るところとなっているため、みな何も言わない。

「俺もよろしく、緑谷」

「あ、よろしく！」

他の3人の自己紹介で完全に空気になっていた呼人が自分の方に視線を取り戻すように言う。

「それで、あの、百竜君の演習の映像を見せてもらったんだけど……」

「ぜんぜん、何してるかわからなかった！」

「……だから説明をしてほしい、と？」

呼人の問いかけに、緑谷はコクリと頷く。

「でも緑谷と百竜の個性は系統が違うっしょ？ 聞いても参考には——」

「なるだろうな。百竜のやり方は、個性関係なく活用できる考え方を持っている」

「うん、私も参考にしようと思って何回か見てるもん！ わかんないけど！」

「まあ、そうっっちゃそうなんだけどさ」

耳郎としては、別にわざわざ百竜に聞かなくても先生も解説してくれたじゃん、と言いたいところだが、流石に話を遮り続けるのは悪いと口を閉ざす。

「僕、みんなと違って全然個性を扱いきれなくて……」

そう言いながら、緑谷は手を開いたり閉じたりする。その様子を見ると、数日前の演習でした怪我は治っているようだ。演習直後の数日は保険医のリハビリガールの個性でも治しきれなかったのか腕をつったままで、その後数日も添え木は取れたものの腕を気にしていたのを覚えている。

「だから、百竜君の戦い方を参考に出来たらと思つて。百竜君以外の人の戦い方も参考にしてるんだけど、百竜君はすごく考えてるって、みんなが教えてくれたから」

そう言う緑谷の後ろで、麗日が笑顔で頷いている。彼女はどうかやら、緑谷が頑張っているのが嬉しいようだ。

だが、それに対して百竜はあまり良い顔をしない。緑谷のヒーローや個性の分析への

熱意を知っているのだが、呼人のそれは戦い方というよりは人間の心理的隙間だったりと、あるいは戦闘の推移の予想だったり、まあ一言で説明できるものではない。そして、恐らく緑谷はそれを知りたがるだろう。

「わかった。あの戦闘の解説は、時間があるときになるけど、しよう。映像はまだ見られるのか？」

「オールマイトが、事前に言ってくれば許可は出せるって」

「わかった。けど先に言っておくが、あれはみんなが油断してくれていたから出来た戦い方だ。警戒されていたらああはうまくいかない」

「うん。——でも、何かの参考にはなると思うから」

緑谷の、その静かな言葉に、皆それぞれ感じるものがあつたのかその場が静かになる。個性を扱いきれていないと落ち込む緑谷をどうにか励まそうとは思つたが、彼はそんなものなど必要としないぐらい、自ら前へと進もうとしている。

そこに飯田の声がかかる。

「みんな、バスに乗った順に奥から座ってくれ！」

到着したバスの前で、学級委員長らしくまとめようとしているらしい。呼人から借りた本の内容を絶賛実践中だ。

その声に、皆バスに向かって歩き出し、最後に呼人も続こうとする。

「百竜」

そんな呼人に、後ろから轟が声をかけてきた。

「次は負けねえ」

どうやら、以前の演習で負けたのを今日取り返すと言いたいようだ。

それに呼人は、淡々と返す。

「勝ち負けそのものには興味はない。だが、お前に言っておきたいことはある。戦闘の場で、目の前の敵以外の事を考えるな」

「なんだと……」

「たかがヒーロー科一年のこの場で勝敗を競つても意味はないだろ。だが、もう一度言う。戦闘の場では、絶対に関係の無い事を考えるな。それは仲間だけじゃなくお前を殺すぞ」

「……そうか」

やはり。轟の目には、百竜の姿は映っていない。まるで、もつと別の何かと戦っているかのように。

一度ボコボコにすればこちらを見るだろうか。だが、演習での勝敗ならともかく、圧倒的な力を見せつけるなら、クラスのみんなにも見られてしまう。それはまだ避けておきたかった。

話は終わったとばかりに、呼人はバスへと向かっていく。別段腹が立ったわけでもないが、彼が見ているのは目の前の障害物であり、呼人ではない。話しているだけ無駄だ。バスに乗り込み、耳郎の隣に座る。

「何してたの？」

「轟と話してた」

「……轟がああも意地を張るとは思わなかったな」

「そうだな」

彼は、もっとクールなものかと思っていた。例え負けん気はあったとしても、それはつきりと表に出す人間ではないと。だが、違った。負けず嫌いの、一人の少年だ。

やがて、他の皆も乗り込みバスが出る。

おのおのが自由に会話をする中で、蛙吹の一言が響いた。

「緑谷ちゃん」

「えっ!? あ、えと、蛙吹さん？」

「梅雨ちゃんと呼んで。私、思ったことは口に出さずにはいられないの」

「う、うん……」

そう、わざわざ前置きをしてから、彼女は――

「あなたの『個性』、オールマイトみたいね」

「えっ、そ、そんな、いや、そうかな。で、でも別に、普通の——」

緑谷の挙動不審っぷり、特に女子相手は割といつものことなのだが、それがいつにもまして一段と拍車がかかっていた。だが、本人が意図してか意図せずしてか、それを助けるように切島が話に参加する。

「でもよ梅雨ちゃん。オールマイトは自分の個性で怪我なんてしねえぞ。増強型の似た個性つてだけだろ。しかし増強型の個性はシンプルでかつこよくていいよな！俺の『硬化』は強えつちや強えけど対人戦だけなんだよな。しかも地味だし」

「でも、僕は凄いと思うよ。かつこいいし、プロでも通用するし」

「まあなー！けどやっぱヒーローは人気商売つてところあるだろ!? 通用するだけじゃあなあ」

切島の乱入に、緑谷は落ち着いたようで自分の以外の事を話す。

その、『人気』という言葉に、この中で最も『輝かしい』個性を持つ男が反応する。それはもう、物理的に眩しいという意味でだ。

「僕のネビルレーザーは強さも派手さもプロ並みだね」

「お腹壊しちゃうのはだめだよ?」

そして芦戸に撃墜された。

見るからに顔色が沈んでいる。それでも笑顔絶やさないのは、輝かしさを意識する

彼故か。

そして、話は個性の「派手さ」と「強さ」の両立へと移っていく。

「派手さと強さなら、やっぱり爆豪と轟だよな！」

「あんたも電気出せるなら、派手だし強いんじゃないの？」

「俺は電気出せるけど、2人みたいに操作出来ないしキャパシティーも少ないからな。もつと、こう電気を自由に曲げたり出来たらかつこいいんだけどさ」

そんな上鳴の個性の話を聞いて、前回の演習時百竜の事を気にしていた八百万が、そのとき気になった事を思い出す。

「そう言えば百竜さん」

「ん？ はい、何？」

名前を呼ばれて、話に参加せずに本、というより風景の写真を眺めていた呼人は、本を閉じて顔を上げる。

「前回の演習のとき、『電気はあいつの専売特許じゃない』って言っていましたけど、百竜さんも電気を使えるのですか？」

「げ、聞いてたの、と思わず呟く百竜に、周りが騒ぎ立てる。実際使わなかったので説明しなくてもいいかななんて思っていたのだ。

「まじかよ!? お前電気も使えるのか!？」

「グワツ！ 完全に俺の上位互換じゃん」

「……思わせぶりな事ばかり言うからだ」

当の言葉を言った相手である障子にまでそう言われ、百竜はがつくりとする。

「じゃあじゃあ、上鳴君の電気が当たってもきいてなかったってこと？」

「百竜君隠していることばかりでずるいんだ」

芦戸と葉隠の言葉に、皆の視線が呼人へと注目する。

「……見てろよ」

呼人がそう言って、籠手を外して肘から先を露出させる。するとそこが赤い肉と黒い毛に覆われていく。そして百竜がそこを5秒ほどこすると、パチパチと青白い電気が毛の間を飛び交っているのが見える。

「わあ、ほんとに電気だー」

「……けっ」

「すごい、ですわね」

口々に皆がそう言うので、呼人は少し声をはり上げて説明する。

「これは別に電気を操ってるわけじゃないぞ。この毛が電気を溜める役割を持って、静電気の発生率が異常に高いっただけだ。上鳴みたいに自分で発電したり放電したりするのは無理だよ。それにあの時は毛を纏ってなかったから、食らってたらバツチリ

「ビリビリしてる」

その説明に、電気の扱いを得意とする上鳴が食いつく。

「マジ？　じゃあちよつと電氣流してみても良いか？」

「良いぞ」

じゃあお言葉に甘えまして、と上鳴が百竜の手に触れ、そこに電氣を流す。すると、先程を大幅に超える電氣が毛の間にたまり、それを受けて眠っていた毛が逆立って白い光を帯び、まるで臨戦態勢のようになる。

「おお、すつげ！　なあ百竜、この毛って何かに使えねえのか？　ほら、コスチュームとか」

「使おうと思えば使えるぞ。俺のコスチュームも似たようなもんだからな」

「マジ？　なんかに使えそうだから、毛刈ってくれねえか？」

「ちよつと上鳴」

非常に正直に言う上鳴を耳郎がたしなめ、呼人が苦笑する。ド直球が過ぎるというものだ。だが、呼人にとっては別に不都合な提案じゃない。

「飯をおごってくれるなら良いぞ。出したものを戻さないとその分のエネルギーを消費したまんまになるから腹が減るんだ。ただ、ちゃんと考えてからな」

「マジ!?　じゃあなんか考えてみる！　ありがとな」

そう嬉しそうに言う上鳴に、葉隠と耳郎が羨ましそうな目を向けていた。気付いたものは皆無であったが。

「あの、百竜さん、私にも少しいただけませんか？ サンプルとして解析することができれば、私も再現できます」

そう言う八百万の個性は、分子構造、原子構造のレベルで知っている物体を、自分の体から作り出すというものだ。作り出すと言っても体をちぎったりするのではなく、体から生えてくるというのが近い。そのため彼女のコスチュームは非常に露出が多いものとなっており、特に使いやすくするためか太ももとか胸とかが際どい。そのせいで主に峰田とか峰田とかが息を荒くしていたこともある。

「わかった。確かに八百万なら、わかれば再現できるからな」

彼女の個性は強力であり、その実態はすでにクラスに広まっているので呼人も観察の結果ではなく事実として知っている。彼女の個性であれば、神王寺お墨付きで『原理的にはありえるけどこの世界に存在する物質じゃない』と言われたそれも再現できる可能性が高い。

「ありがとうございます！」

「言つとくけど、これは本当に電気をためるだけだからな。これで作った服とか着てたら電気が溜まったもの身につけると同じだし、実際俺も変化してないとこがバチバ

チしてるからな。電気を防ぐ性能はないぞ」

「それでも、何かの役にきつと立ちますわ」

ならいい。今度なんか入れ物もつてきてくれ。そう呼人が答えようとしたところで、相澤の放送が響いた。

「もうすぐつく。はしやぎすぎるなよ」

そう言う相澤の目は、だが、外から見てはわからないが優しさがこもっていた。

第10話 USJ襲撃事件・2

『USJかよ?!』

広大な敷地に、主に水難とか火事とかで鮮やかな色が散らばる光景は、そう、まさにあの――

「USJってなんだ?」

「有名な遊園地。あんた休みの間に日本巡りしたほうが良いんじゃない?」

もうその百竜の常識知らずには慣れたとばかりに耳郎が即答する。人間としての常識とかはちやんと叩き込まれた百竜のだが、今風の流行りなどにはかなり弱い。なにせそれを教えられる神王寺からして日本を離れて相当の期間が経っている。実際彼が日本を離れた頃には、USJは軽く廃れていたのだ。

『USJなのかよ!』

呼人と彼に説明していた3人は、もう一人の授業担当のヒーロー『13号』の説明にクラスメイトが叫んだ言葉に、前を向き直す。

スペースヒーロー『13号』。宇宙服のようなコスチューム、というよりヒーロースーツをまとうており、敵制圧ではなく災害救助において大活躍の、人気ヒーローだ。当然、

そんなヒーローの登場に、緑谷初め数名のテンションはうなぎのぼりだ。

「13号、オールマイトは来てないのか？」

「それが実は……（すでに制限時間ギリギリまで——）」

飛び込んできたその相澤と13号のヒソヒソ話に、呼人は慌てて耳を人間に戻す。今のは恐らく、聞かない方が良い類の話だ。今までは問題なかったが、こうなってくると耳を変化させておくのは考えものだ。

「……始めるぞ」

「それでは僕から、まずはお小言を1つ2つ……3つ……」

『増えるのか……』

1つから始まって何故か増えていく小言の数に、クラスの皆が心の中でツツコミほのぼのとした空気が漂うが、続けて13号が話し始めたのは重たい話だった。

「知っている人もいると思いますが、僕の個性は文字通りの『ブラックホール』。吸い込んだものを塵にする個性です」

「その個性で、火や土砂を吸い込んで人を救ってるんですよね」

「はい。ですが——」

「間違った使い方をすれば、簡単に『人を殺せる』個性です」

その13号の言葉に、暖かかった空気が一瞬で凍る。

「皆さんの中にもそういう個性を持った人はいるでしょう。個性の出現以降社会は、そんな『個性の使用』を厳しく規制し、そのおかげで平和な社会が成り立っているように見えます。ですが、一歩間違えれば安易に人を殺せる『強力な力』を一人ひとりが持っている事を覚えておいてください」

体力テストでは、『個性』という力の強力さを。

実戦演習では、それを人に向けることの危険性を。

そしてここでは――

「この授業では、これまでと切り替えて『人命救助』のためにどう個性を使えば良いかを学び、考えましょう。『個性』は、けして傷つけるためだけの力ではない。君たちの個性は、救うためにあるのだと、実感して帰ってくださいね」

「ハイッ!!」

「ステキー!!」

13号から、例え命を奪える力であつても、救うための力であると教えられ、重たかつ

た空気は盛り上がっていた。

その直後。

「——相澤先生、後ろ！」

いつになく鋭い呼人の声に、皆が何事かとそちらに振り向く。

頭部の順番が回ってきていたのは幸いだった。なぜなら、おかげでいち早く気づくことが出来たから。

呼人の言葉に後ろを確認した相澤は、即座に指示を出す。

「全員！ 一塊になれ！ 13号、そっちは任せる！」

「っ！ はい！」

相澤に遅れて13号も気づき、生徒たちの前に出る。だが、クラスメイトの大半は何が起こっているのかと疑問に思いながらも呑気な様子だ。

「なんだあれ？ また入試の時のはじめってるパターンか？」

「動くな!!! あれは——《ヴィラン》だ!!」

初めてゴーグルを装着した相澤の激しい言葉に、皆驚きながらも集団になる。

「なんでこんなところにヴィランがいるんだよおお?」

「バカだろ!! ここは雄英のヒーロー科だぞ!!」

生徒が騒ぎ出す中、相澤と13号はその原因に思い当たっていた。

それは先日のマスコミ騒動。まさに呼人が言った通り、あの出来事はマスコミではなく、ヴィランという、敵が引き起こしていたのだ。

「あれ、オールマイトがいない……子供を殺せば……出てくるかな？」

そう言ったのは、先頭に立っていた異質な男。顔含めて全身を手のひらが掴んでい
る。ヴィランの、リーダー格だ。

「先生！ 対侵入者センサーは!?!」

「ありますが、反応していません！」

「センサーが反応しないってことは、向こうにそういう『個性』がいるってことだ。学校全体ならあつちも気付いてくれるだろうが……どっちにしろ、馬鹿だが間抜けじゃねえぞ」

「きつちり用意して来やがったってか」

八百万、轟、爆豪。クラストップの実力者達が事態を把握し確認しあう中、相澤がヒーロー《イレイザーヘッド》として動き始める。

「13号、避難を急がせろ。それと学校への連絡だ。上鳴も持つてるなら電話試せ」

「——っす！」

相澤は、指示に2人が返答したのを確認すること無く下の広場、ヴィランの集まるそこへと飛び出そうとする。それに、ヒーローとしての彼を知っている緑谷が声をかけ

た。

「先生！ イレイザーヘッドの個性を——！」

あつさりといレイザーヘッドの能力をばらそうとした緑谷の口を、百竜が慌てて塞ぐ。その百竜にクラスメイトが驚きの視線を向けるが、今はそれどころではない。

「ヒーローは一芸だけじゃ務まらない。早く避難しろ。13号！」

「わかつてます！」

13号の返事を受けながら相澤がヴィランに飛びかかっけていき、13号は生徒を誘導し始める。前か後ろか。この場合は、生徒に道を示すために前に立つ必要があった。

「皆さん固まって！」

指示に従いながら、呼人はトビカガチの尻尾を展開し、上下に振り始める。

「百竜？」

「……あの黒い靄は転移系だ。ならこっちまで敵が来る可能性がある」

「何ッ!？」

だから、敵が送られてきても片つ端から蹴散らす準備をする。だが、来たのは呼人の予想からも外れた相手だった。

『させませんよ』

突如として集団の前に現れたのは、黒い靄。まさかの転移させたご本人の登場だ。ま

さかそれがヴィランそのものだとは思っていなかった呼人は、動きが一瞬固まってしま
う。

『我々は“敵連合”。そして我々が、このヒーローの巣窟に僭越ながら侵入いたしました
たのは、平和の象徴——』

“オールマイト”に死んで頂く、ただその一念のためにごさいます。

その言葉に、クラス全員の理解が追いつかなかった。

平和の絶対的象徴。ヴィランの天敵。悪への抑止力。

警戒が厳しくヒーローが多数いる場所に侵入したのは、その彼を殺害するため。

そんな、“ありえない”状況に。

一人理解を放棄してどうするべきかを模索していた呼人は、いつでも攻撃できる体勢
を取る。相手が新手を露から出してきた瞬間に攻撃する。

『本来ならば彼がここにいる筈なのですが……私の役目はこれですの——』

露のヴィランが言い切る前に、呼人は尾から『棘』をばらまく。ヴィランの行動は察
知できないが、13号の攻撃用意を見て取っていた。

「13号！」

ほとんどの棘が飛び抜ける中で、いくつかの棘が“何か”に直撃する。

『ナニッ!!』

(当たる何か……核があるのか!)

モンスター達との戦闘訓練では相手にしない類の敵だが、すぐに考え始める。モンスター達も手伝ってくれる。

「お見事です!」

急襲で動きの止まったヴィランに13号が攻撃をしかけようとするが、それよりも早く2つの影が飛び出した。

切島と爆豪。ヴィランの隙を見て素早く反応したのだ。だが、今はそれが裏目に出る。

「2人ともどきなさい!」

2人がその声に振り向くが、すでに遅い。

「全員、近くのやつを掴んで群れを作れ! 一人になるな!」

殺し方のわからない敵を一か八か狙うより、クラスメイトを集団にして孤立させないようにする。あの敵が霧を広げたということは――。

2人が前に飛び出した瞬間、呼人はそう叫んでいた。

呼人の声を聞いて、咄嗟に動いたものが数名。障子、緑谷、耳郎、多分葉隠。

近くの人間の腕を掴み、引き寄せて離れないようにする。孤立している者がいないことを見て取った呼人は、唯一危険とさとしてか後ろへと跳んでいたために孤立してし

まった尾白と合流する。

『あぶないあぶない……やはりここは優秀な卵の集まる場所』

——散らして、罠り殺させていただきます。

尾白が呼人の腕をつかんだ直後。男の言葉が終わると同時、黒い靄が、皆を飲み込んだ。
だ。

「わっ！」

「おっ、とと」

地上2メートルほどの位置に放り出された呼人と尾白は、空中で体勢を整えて着地する。

「火災エリアか」

「なに、もしかして、俺達が、ワープされた？」

「そういうことだ」

呼人が答えた直後、周囲からぞろぞろとヴィランが現れる。

「ほんとに来たぜ」

「ヒヤッツホオウ!! 獲物だー!!」

2人が放り出されたのはヴィランの集団の真っ只中だった。

「尾白、しばらく保たせられるか? 倒さなくていい」

背中を合わせた呼人の端的な問いかけに、尾白は特に疑問の声を上げずに静かに答える。

「! ……相手によほどの個性持ちがいなければいけないよ」

「大方火炎系統だろ。尻尾の耐熱性は?」

「結構高いよ」

「じゃあ少しの間1人で保たせておいてくれ。一暴れしてくる」

呼人の依頼に、尾白は少しばかり不敵に返す。確かに呼人は入試では1位の実力者であるし実戦演習でも1人で2人相手に二度勝利した実力者だが、だからといって保たせることしか出来ないと見くびられるのは癪だった。

「俺の方に来た数が少なかったら、倒せるかやってみるよ」

「……無茶はするなよ。ナイフは使えるか?」

「俺は素手の方が良い」

「オーライ!」

直後、背中合わせになっていた2人のうち尾白は比較的ヴィランの数が薄い方向へと

飛び出していき、呼人はその場で変身が始める。四肢が赤黒い肉に包まれ、コスチュームがそれに溶け込むように消えていく。頭部も完全なオドガロンのそれではないが、人間のものではなくなり、わずかに前傾姿勢になる。体格も一回り大きくなっていった。

そして、咆哮。

——狂暴なる捕食者が牙を剥く。

第11話 USJ襲撃事件・3

『GHYAAAAAN!!』

その咆哮に、ヴィランの数名が思わず後ずさる。純粹に脅威を感じたのではなく、その見た目と鳴き声から不気味さを感じたのだ。だが、他の者達はそれを脅威とは見て取らず、好き勝手に話し始めた。

「はっ、獣化しやがったぜ！ 獣は火でしつけてやらねえとな！」

「獣だろうが燃えんだろ！」

「ああ、良いわあ。その自信満々な顔、燃やして上げたい」

そこに、呼人が飛びかかっていった。一番前の敵が反応できない速度で走りより、突き倒す。そして下敷きになった男の顔の上で、これみよがしに口を発達させ、それを大きく開くとよだれを垂らし始めた。そして顔を男の顔へと次第に近づけていく。

「ひっ！ た、助けてくれ！」

「野郎、調子に乗ってんじや——ねえぞー！」

横合いから炎が放たれたが、呼人はそれを大きく跳び下がって回避した。

「た、助かった……！」

今まさに『食われかけた』と本人が思っているヴィランは、立ち上がったって味方の所へ下がったが顔色が悪い。目の前で、その無機質な瞳と大きく開かれた口を見せつけられたのだ。本能的な恐怖は得てして理性を上回る。

「火の壁作れ！ そっから丸焼きにしてやる！」

「おらっ、燃えろ燃えろ！」

ヴィランの1人が呼人の足元を指差すと、そこが熱を持ち始める。それを察知した呼人が跳び下がった直後、足元が発火した。

さらに、跳び下がった呼人に向かって、周囲のビルで燃えていた火が飛んでくる。それに対して呼人が大きく尻尾を振り払って撃ち落とすものの、四散した火に囲まれる。

「燃えろ畜生が！」

そして、最後に放たれたのは火球。2発のそれが呼人に迫り、着弾して火炎を撒き散らした。

「ヒヤッハハ！ 燃やしてやつ——」

直後。火球を放つために両手を上げていた、
“集団の中程にいた”男の手から、血が吹き出す。

その右手の、手首から先が無くなっていた。

「ハッ、うあああああつ!？」

その原因は、男の後ろに立っていた。その口元には、人間の手のひらを咀嚼し始める。そしてそれは、人間の手のひらを咀嚼し始める。

「ひっ!?!」

「く、食ってやがる……!」

「馬鹿な! 火を突破したってのか!?!」

「ば、化け物!?!」

ヴィランが固まっている中。手を咀嚼し終えた獣人の体表に赤い光が走り、その口から多量の蒸気が漏れ始める。

『H A R R R R R R』

不気味な唸り声が響く。

「ひ、た、助けてくれ!」

ヴィランの1人が、堪えきれずついに上げた悲鳴に、尾白の方にいたヴィランの多数がこちらへとやってくる。

「なんだなんだ、情けねえ奴らだ——」

そう言おうとした男は、言葉の途中に地面に叩きつけられ、沈黙した。

「こいつやべえ! 学生なんかじゃ——」

「燃やせ! 獣化だろうが火なら——!」

「ヒジャの火の壁を越えるんだぞ!」

浮足立つ男たちに、半人半獣となった呼人が襲いかかる。凶器である爪や、爪を変化させた刃、そして牙は消してしまい。肉弾戦によってあつという間にヴィランの集団を殲滅してしまった。

「……腹減った」

「ほんとに凄いな。俺なんて2人で精一杯だ」

完全に人間の姿になった呼人のもとに、自分の相手を倒してしまった尾白がやってきた。5人相手にはヒットアンドアウェイで攻撃を受けないように立ち止まっていたのだが、呼人の方へと数名のヴィランが流れた直後の乱れをつき、2人のヴィランを無力化していた。

「十分だろ一年でその戦果。ちよっと待っててくれよ」

「ここから離れないのか?」

「1人手首を切断したんだ。そのままにしていると失血死する可能性がある」

呼人はそう言うのと、最初に手首を奪った男に近づいて、腰のポーチから取り出した縄でその両手を締め付け止血する。

「うわっ……それは、何で斬ったんだ? ナイフ?」

「いや……食いちぎって、そのまま食っただけだ」

「は？」

何を言っているのかと思わず聞き返した尾白に、呼人は改めて言う。

「食ったんだ」

「……凄いな。人間の肉ってまずくないのか？」

「舌も獣化させたからな。人間の状態で食うほどまずくはない」

食った、という言葉だが、その言葉に尾白は一瞬顔をひきつらせたものの、それ以上何も言わなかった。呼人は知らないが、彼はクラスの中ではかなり、戦闘に勝つ、のではなく、戦い傷つく可能性に対する考えがしっかりしている。そのため戦闘で出血することもあるだろうと気にしなかったのだ。

「これからどうするんだ？ とりあえずここから出るとして……。入り口まで逃げる？」

「いや、心配なところを助けに行く。尾白」

話は変わるが、と、呼人は尾白に話しかける。

「何？」

「俺は今から、本当の獣の状態に変身する。怖いとは思いますが、信じてくれ」

「………わかった」

尾白が顔を引き締めて頷くと、呼人は少し離れて変身を始める。先程は、変化したも

ののあくまで人間の形に留まっていた肢体。それが人の形を離れ、巨大な獣の形へと変わっていく。

「すげー……」

『背中に乗って、尻尾を絡めて落ちないようにしてくれ』

完全なオドガロンへと変化した呼人から、くぐもったやや低い声が響く。

「喋れるんだ……」

『人間の声帯を残したままにしてるからな。乗ってくれ。移動するぞ』

「わかった」

尾白は、特に躊躇いなく呼人の背中に飛び乗ると、その胸に尻尾を絡める。

『前傾姿勢になつてろ。風がきついで』

「……良いよ」

『よし』

四肢が地面を蹴り、力強く加速する。その速度は、チーターのそれを遥かに上回る。

「速っ。風が気持ちいいな」

『……怖がらないな』

「ホラー映画は結構得意なんだ」

『……ふっ、なるほど』

モンスター達の中でも、特に不気味な見た目をしているのがオドガロン。その見た目は、他の畏怖を感じさせるようなモンスターとも一線を画す。だが、確かにゾンビ映画なんかのそれを見慣れていけば、いくらか不気味さへの慣れも出来るだろう。

「これからどうする?」

『援護に向かいたい奴らがいる』

「……わかった。俺もついていく。でもなんで?」

『助かる。そこだけ前衛がいらないんだ。相手次第では非常に不利になる』

「あの一瞬でそこまで確認したのか……本当に凄いな百竜は」

『尾白も落ち着いてくれているからやりやすい』

「心を沈めるのも、武道の目指す所だ」

武道を嗜んでいる尾白は、その戦闘技術だけでなく、心のありようや沈め方を学んでいる。そのため、この緊急事態でも落ち着いて行動が出来ているのだ。

「……百竜。なんで相手の腕を、”1人だけ”食べたんだ? 他の敵には切り傷すら無かった」

『……相手に恐怖させるためだ。そうすればお前よりも俺を脅威に見てくれると思つた。腕を食つたのはそこが一番無くなつても死にくいと考えたからだ』

「なるほど。確かに足や胴体じゃあ死ぬ可能性が高い、か」

『ヒーローは殺してはいけなからめんどくさい』

「物騒だよその言い方」

火災エリアの中でも中央付近に放り出されていた2人だが、オドガロンの強力な移動能力によってあつという間にエリアから離脱する。

「どこにいるかわかってるのか?」

『匂いか声が届けばわかるが……っ! 降りろ!』

「えっ?!——わかった!」

急に言葉を荒げた百竜に尾白は戸惑うものの、急停止した呼人の背中から急いで飛び降りる。直後、人間に戻った呼人は、右手を大きく変形させると、そこから風の塊を高速で打ち出した。

撃ち出した方向には水が広がっている。水難エリアだ。

少しして、呼人は安堵したようにため息をはいた。

「乗ってくれ」

「何かあったのか?」

「あつちで蛙吹が何かまずいことになってそうだったから、ヴィランを狙撃して止めた」

「っ! 助けにいかないと!」

「いや、オールマイトが来てくれたみたいだ」

そう言った呼人の耳は、大きな翼のような構造へと変わっていた。それが周囲の音を探るようにせわしなく動いている。

「来てくれたのか……!」

『あつちは彼に任せておけば大丈夫だ。ヴィランの注意がオールマイトに向いてる。俺達は別の方に行こう。やはり……心配だ。俺達の相手が弱かっただけかもしれない』

呼人は再び尾白を乗せて走り出す。

「オールマイトが来てくれたなら大丈夫じゃないか?」

『……相澤先生がやられていた。敵にも手練がいる』

「っ!? 本当か!? 先生は個性を——」

『消しても意味が無い相手がいたってことだ。場所がわかった。こっちだ』

まっすぐ走っていた呼人は、方向転換をして山岳地帯へと走り出す。

「誰がいるんだ?」

『おそらく……上鳴と耳郎、八百万の3人がいるはずだ』

「確かに、前衛がいないか」

その3人の個性を思い出した尾白が呟く。3人とも、ある意味支援、補佐的な扱いが主な能力であり、爆豪や切島、飯田のように格闘戦を得意としているわけではない。また、轟のように広範囲制圧が出来るというわけでもない。

『急ぐぞ』

「——ゲームオーバーだ。……帰ろつか」

まるで、『遊び疲れたから帰ろう』、とでも言うかのような、ヴィランのリーダーの言葉。

「た、助かるんだ俺達!」

峰田ちゃんは喜んでいられるけれど、私は気味が悪くて安心することが出来なかった。

「あすつ、つ……ゆちゃん。どう、思う?」

「気味が悪いわ」

「だ、だよね。こんなことをしておいて簡単に引き下がるなんて……」

「けどその前に」

——ヒーローとしての矜持、へし折っておこう。

反応出来なかった。気付いたときには、気味の悪い男の手のひらが目の前にあった。
(あつ)

恐らく何かの個性。相澤先生の肘を壊していた。けど、この距離じゃあ――。

男の手のひらがスローモーションに見える。緑谷ちゃんが私の方を振り返るのも、
でも――。

「うっ……!」

直後。男が大きく体勢を崩し、視界が開けた。僅かな風が頬を撫でる。同時に、緑谷ちゃんが男に向かって飛びかかった。

「蛙吹さんから、離れろ!」

S M A S S H !!

凄まじい音の一撃。でもその一撃は、巨体のヴィランの、壁のようなお腹で止められていた。

「え……?」

「へえ? でも俺をふつとばしたのは君じゃないね。まあ良いや、オールマイトのファンだろ? 君。脳無」

緑谷ちゃんの啞然とした声。私もあんなことは言つたけれど、『殺せる用意があるから』なんて言つたけれど、まさか本当に今みたいな攻撃を受け止めるなんて、思わなかつ

た。

呆然とした様子の緑谷ちゃんの腕を、巨体のヴィランの太い腕がつかむ。緑谷ちゃんを取り戻さないで。そう思っ舌を伸ばす。

そして。

バァンン!!

扉が破られる音。

「もう大丈夫。私が来た」

ヒーロー英雄が、来てくれた。

ゆらりと振り返ったヴィランの声が小さく響く。

「……コンティニューだ——」

第12話 USJ襲撃事件・4

オールマイイト
救世主の到着を知った2人は、山岳地帯へ向かって走っていた。

「百竜は、どこでその戦い方を？」

『……海外にいた間、ずっと日本の元プロヒーローに育てられてたんだ』

「そういう、ことか。通りでヒーローについて詳しくないのに強いわけだ」

『そういうことだ。少し口を閉じていろ。舌を噛むぞ』

尾白が黙ったのを確認して、山岳地帯の岩壁を駆け上がる。オドガロンはその生活域の関係上、厳しい高低差を上り下りしていた。この程度の岩肌なら、登るのは造作もない。

そして少しの後に開けたところに飛び出す。そこからは、50メートルほど先に耳郎と八百万、そしてそれに正対するヴィランと人質に取られた上鳴の姿が見て取れた。

「っー」

駆け出していきそうになる尾白を、呼人は尾をひっかけて制する。

「（飛び出すなよ。俺達がばれたら意味がない）」

そう言うと、呼人は腕を淡い桃色の鱗のついたものに変化させると、そこをこすつて

シャボンが発生させ、その中に何かを吹き込む。

「何やってるんだ？ さつき撃つたのは使えないのか？」

「さつきので確実に無力化するなら、頭を撃つて殺すしかなくなる。だがこっちは時間さえかければ、眠らせることが出来る。中途半端に手や足を撃ち抜くだけじゃ駄目なんだ」

「(だが……)」

「(危なくなつたらすぐに撃つ。だから待つてくれ)」

呼人が生み出した複数のシャボンは、静かに目的の場所へと漂い始める。

それをじれつたそうに見ている尾白に、呼人は自分の考えを話す。

「(それに——)」

「(それに?)」

「(恐怖を感じ、死地に臨んだとき、人は大きく成長する。そんな機会はそうそうあるものじゃない)」

呼人のその言葉を理解した尾白は、血相を変えて呼人の胸元を掴む。

「なっ! —— (だから3人を危険に晒すのか!?)」

「(絶対に殺させない自信はある。戦士としての成長には絶対に必要なことだ)」

その言葉に尾白は拳を振り上げるが、それを振り下ろすことが出来ない。呼人の目

が、冷めているのでもふざけているのでもなく、真剣なものだったからだ。「殺させないと約束する。それでも許せないなら、今すぐヴィランを撃つ。お前が決める」

そして、決断を迫られたのは、尾白自身だった。

今すぐ、仲間を助ける。仲間を信じる。仲間の未来を考える。そのどちらも、天秤にかけるには重すぎるもので。直後、どちらの選択をする必要も無くなった。

「な、につ……」

ヴィランが両腕から血を吹き出しながら後ろへと倒れ込んだのだ。

「尾白、3人を避難させろ！」

「百竜は!？」

「どの顔を見せられるんだ。ここから見張っておく」

あんなことを真剣な顔で言っておきながらも、終わったらその選択を恥じる。彼も自分の選択が正しいとは思っていないかったのに、仲間の将来のためにあの決断をした。

そう思えば、尾白の呼人への不信感と怒りは薄れていた。

「貸しーっだぞ」

「……でかい貸しになりそうだ」

その答えを満足そうに聞くと、尾白は岩山を走り抜けていく。彼の機動力は、直線よ

りもここのような足場の悪い場所において本領を發揮する。

(ついでに足をもらっておくか)

尾白の背中を見送った呼人は、変化させた左腕を構え直すと、2度、弾を放つ。直進した弾は、それぞれ身を起こそうとしていたヴィランの太ももを撃ち抜いた。

』

『心配するな。もうほとんど制御できてる』

そのまま男に照準を定めていた呼人に、3人と合流した尾白が尻尾を振って3人に気付かれないように合図をしてくる。そしてそのまま4人で岩山を下っていた。

それと時を同じくして、大きな破壊音が鳴り響く。

そちらに目を向けると天井に大きな穴が空いていた。オールマイトが、敵の巨体のヴィラン、脳無を吹き飛ばしたのだ。

それを確認すると、呼人もまた4人の行く先にヴィランがいないことを確認しながら下山していった。

(あー、ちと効いたなこれは)

その口からはわずかに血が溢れていたが、それを乱暴に拭って入り口への道を急ぐ。自分の未熟さ故の負傷など、人に見せるつもりは無かった。

その後、オールマイトに続いて到着した英雄の先生たち、現役のプロヒーローによって全てのヴィランが制圧、拿捕された。唯一逃げた、リーダー格の男と黒い靄の転移能力の使い手を除いて。

プロヒーロー達の間には、残されたヴィラン達のあまりに軽いチンピラ具合とその目的の大きさのギャップに、今後起きることへの大きな不安が残ったが、それを生徒達に知ることはなかった。

「はっはっは。それで久しぶりに自傷したのか。難儀なもんだな」
「もう治った」

ヴィラン集結事件の後、色々な手続き、処理などを経て帰宅した呼人は、まだ早い時間だが肉や野菜を買って帰って適当に料理し、凄い速度でそれを食べていた。更に家にあつたカツパ麺や食パンなども、食い合わせをあまり考えずに口に放り込む。

能力を使った際に損傷を負い、それを回復させるためにエネルギーが必要となったの

だ。

「それにしても、『鋼龍』は限定的な変化なら制御できてるんじゃないのかい？」
「いや——ほとんどオドガロンのまま司る部分だけ変化させて、そのまましばらく能力を使い続けたからな。体が堪えきれなかった」

故の自傷。

呼人が自分の個性の制御を重視している一因が、この『自傷』である。強大過ぎる力を外界への影響を及ぼさないように制御、利用しようとする、その反動や影響がどこかへと漏れ出すのだ。そしてそれは時折、個性を使っているはずの呼人に牙を剥く。

今回は非常に小規模な能力の使用と変化だったため傷も浅かったが、それでも制御しきれなかったことには変わりない。

何より今回のそれは、突発的に無茶をしたというわけではなく以前から訓練してきた方法だったため、それを完璧に出来なかったのが問題であった。

「ごちそうさまでした」

「また凄い量食ったな」

「とつとと治したかったから、米を炊いてる時間ももつたいなかった」

おかげで食費がなかなか馬鹿にならない。それほど金には困っていないが、それでも重度の金食い虫であるのが呼人の個性だ。基本的に個性を使う使わないに関わらず必

要とするエネルギー量が相当に増え、また個性の使い方次第で更に消費するのだ。

「それにしても——『敵連合』か。なかなか気合の入った集団だな?」

「にしては実力がちやちやかった。オールマイトの戦った相手は相当だったみたいだけど」

「ふむ。諜報活動は専門外だが……少し調べてみるか」

「そもそもあんたちゃんとヒーロー業できてるのか?」

呼人がそう尋ねると、神王寺はニヤリと笑いながら大きな本を鞆から取り出す。

「ヒーローのすすめ、だとき。いやはや、色々と進歩していてなかなかおもしろえよ。まあやることは変わってない。ヴィランをとっちめたり、ヴィランから市民を守ったりするだけだ。後は事故の救助活動。近くのヒーロー達との意思疎通はなかなか難しいが、まあ『適応』するだろ」

「おっさんは合わないって?」

「あくまで俺は名前の売れてないよそ者だからな。向こうは俺が何を出来るかわかってないし、俺も他のヒーローが何を出来るかわかってない。なるべく血は使わないですむように気をつけるけどな」

神王寺の個性はそれほど派手なものではないのだが、彼の体、正確には彼の血に宿る力だと判明しているが、それが、まあ特異な性質を持っている。そのため、特に救助活

動においては救おうと思えば死にかけの人間ですら救えるのが、彼なのだ。その分副作用が大きいため大段的に使えるものではないが。

「よし、それじゃあ走りに行ってくる」

「行つてらっしゃい」

個性によつてモンスターの力を利用できる呼人だが、人間の体を鍛えることは怠つていない。

『まだ時間が早いだろ。今日は帰ってくるのが早かつただけだから。みんなで先にやつてくれ』

早く日課をやるぞと言うモンスター達をなだめて、呼人は外に出た。

第13話　そして体育祭へ

ヴィラン侵入による臨時休校が明けて翌日。

「八百万、これ帯電性の毛のサンプル」

「ありがとうございます。本当は私が容器を用意しなければいけませんでしたが」

いつもどおり早めに登校した呼人は、後から登校してきた八百万に先日の約束どおり毛のサンプルを渡す。それを八百万のところに来た耳郎も見ていた。

「別に良いよ。同居人の関係でいっぱい余ってるんださういうの」

「同居人、ですか？」

「うん。まあ気になるなら容器だけ後で返してくれたら良い」

「わかりました」

八百万は所謂お嬢様であり、こういうところを丁寧にしたがるのだ。

「ねえ百竜。うちにもなんかさういう使いそうなのない？」

「何かって？」

「その、戦うのに使えるものっていうか……」

さう言つて2人は、先日ヴィラン襲撃の際の自分たちの戦いの事を話し始める。誰

も近接戦が得手じゃなかったために囲まれて危なかったこと。上鳴の電気で一気に蹴散らしたこと。最後は電気の効かない相手に上鳴が人質に取りられて危なかったけど先生が助けてくれたこと。そしてその後合流してきた尾白と一緒に脱出したこと。

「うち、ほとんど何も出来なくて……」

そう言う彼女は、いつもの快活な様子がなりを潜めていた。更に、隣の八百万も同じ様子である。

「音かあ。この前の鱗なんて耳郎にとつては自爆だろうし、破裂させたら使い捨てだからな。耳郎の場合は、自分の戦い方を見直してコスチュームを改造していくことを考えた方が良いんじゃないか？」

「例えば？」

食い下がる耳郎だが、呼人に音の利用に関するノウハウはあまりない。高周波の叫び声で人の脳を揺さぶるか、巨大な咆哮で威嚇、あるいは物理的にぶつ飛ばすか、ということぐらいしか出来ないのだ。音の調整も少しは出来るようになったのだが、使いでないということとで訓練の内容からはかなり前に外している。

「例えば……今思いつくのは、音流すやつの周波数変える装置ぐらいかな。そんなのできるかわからないけど」

「周波数を変えてどうするんですの？　百竜さんのように高い音を出すのはあまり

……」

「物質には固有周波数って言うってその周波数の音を浴び続けると共振して破壊されるっていうのがあるだろ？ あれで色んな物質の固有周波数覚えとけば……と云ってもあんまり実用的じゃないな。物質の固有周波数って凄いまちまちだから、ヴィランと戦う時に一番変わらないことって言ったら相手が人間ってことだけど……」

「だけど？」

「人間相手に使うってことは相手が破裂するってことだからな」

その様子を想像した耳郎と八百万が若干引いた顔をする。若干というかかなり引いている。

「うわっ……百竜あんたえぐいよ……」

「そういう事も出来るって話だ。あ、でも耳郎のコスチューム見て思ったことはあるぞ」

「まじ？ 改善点とか？」

「うん。あれ、何でスピーカーは足につけたんだ？ 足につけるよりも手につけたほうが向ける先も自由になるし相手に悟られにくいだろ。後振動を飛ばして使うつもりなら、空気を伝わせるよりも直接相手に触ったりして伝えたほうが破壊力が高いぞ」

身振りをして、足からの射線と腕からの射線を示しながら呼人は思ったことを説明する。

「空気は音を伝達する物質の中では、たしかに一番伝達速度が遅い、ですわね」

「空気を媒介にした衝撃波より、固体を媒介にしたほうがダメージは大きい。なんなら、棒か鞭みたいなのを使って相手に直に衝撃を流したらどうだ？ 耳のは切られるとまずいだろうけど、武器なら切られても大丈夫だし」

八百万と呼人の説明を聞いた耳郎は、少し考え込む。

「……そう言えば、うちあんまり音のこと知らないんだよね……。音楽とかは結構好きなんだけど。勉強したら何か思いつくかな」

「耳郎さんの音と言えども、結局は物理現象ですわ。それなら、物理現象として学べば何か発見があるかも知れません」

「……うん。ちよつと勉強してみる」

耳郎が納得した一方で、八百万もまた呼人に尋ねる。

「百竜さん、私は何か、もつと戦いに強くなる方法はありませんか？」

「うーん……。耳郎にも言えることなんだけど、あまり俺に頼らない方が良くぞ」

急に消極的な呼人の言葉に、2人は疑問を浮かべる。

「え、何で？ てか確かに頼り過ぎか」

「それは、そうですが……」

「ヒーローとしてやっていくなら、自分でやっていかないと行けない。それはもちろん

個性の使い方もな。答えがずっとあるわけじゃないからな。それに、俺の考えは相手はどう倒すかってことに特化してる。それじゃあ思いつかない発想もあるだろうし、自分で考えてみてほしい」

「それは……もちろんです。でも、見識の広い百竜さんにもお聞きしたいですわ」

耳郎が知らず知らずのうちに百竜に頼ろうとしていた一方で、八百万はそれをしっかりと認識していた。もともと彼女は自分の個性を活かすために自分で学習してきた部分が多い。そのため、百竜の言葉も参考にしようと思っただけなのだ。

「まあそういう事なら、俺の『敵を倒すため』の考えなんだが」

「はい」

「もつと体術磨いた方が良いんじゃないか、とは思うな。ただ時間は相当かかるけど」

「体術、ですか」

「そう、体術、というか色々な武器を使う術かな。俺が八百万の個性を使えたとしたら、相手に合わせて武器を作り変えたり、戦闘中に武器を切り替えたりしながら戦うと思う。あとは攻撃を受ける瞬間にそこに金属の鎧を出すとかな。ちなみに、出せるものの条件はどんな感じなんだ？ 機械も行けるのか？」

「機械はまだほとんど勉強中ですわ。特に電子回路が……電氣を使用しないからくりなら少しは」

「なら、それは作れるようになるとして、やっぱり格闘戦とか武器での戦闘技術を鍛えた方が良いと思うな。八百万の個性って、轟みたいにその個性で一気に制圧出来るものじゃないだろう？」

「……はい。それは、確かに……」

轟の名前を聞いた瞬間、八百万の表情が僅かに曇る。同じ推薦組である轟を八百万が気にしている一方で、轟は八百万の事をあまり見ていない。更に演習での実力なども見て、彼には敵わないのではないかと思ってしまうているのだ。

「どしたのヤオモモ」

「いえ……」

「別に、だから轟の方が凄いつて言ってるわけじゃないからな。むしろ他のメンバーと連携するとしたら、絶対八百万の方が向いてる。そういう意味では、あいつがソロメイソンの対して八百万は連携がメインだ。でも、その上で1人で戦う方法って言うなら、俺は作った簡単なものを使うすべを磨くべきだと思う」

「でも……いえ、そうですね。負けたと思っいては駄目ですね。それで、簡単なものを使う術、というのは……」

八百万の問いに、そこまで教えてしまつて良いものかと呼人は悩むが、彼女の本領はやはり連携にある。ならば、個人の戦闘力は、ヒントを言つても考えることを放棄する

ことにならないかも知れない。

「あくまで、あくまで個人で戦うとき、の話だからな。例えば、耳郎を例に使わせてもらうけど、耳郎と戦うとき、音を封じる、あるいは音が通用しないようにしたら、強さは半減するだろう？」

「まあ、そうだね。うちはまだ百竜の言ってるみたいなのはできないし」

耳郎はただ音を出すだけでなく耳から伸びる2本のプラグを自在に伸ばしたり縮めたり、あるいは動かして振り回したり出来るのだが、それも百竜の言うレベルに到達しているとは思っていないかった。

「ありがとう。けど、八百万と戦うときは違う。音を封じたら電気が出てきて、電気を封じたら爆発物が出てきて、それ全部封じたら色んな武器や兵器が出てくる。それ全部使えたら、めちやくちや厄介だろ？」

「確かに……そうですわ」

「そんな相手、考えたくないかも。ヤオモモと演習で当たるの嫌だな」
「そのときはちゃんと耳栓しますわ」

八百万の耳郎対策に、耳郎は嫌そうな顔をする。

「まあ、その対応力、多様さが八百万の武器だつてことだ。それをどう活かすかは、自分で考えてみてくれ」

「……はい、ありがとうございます——」

「おーい、百竜！ おはよー」

3人が話しているところに、始業間際になって上鳴が登校してきた。朝から元気が良い。

「あれ、話してるところだった？」

「いえ、私達の話は終わりましたわ」

目線で良いのかと尋ねる呼人に、八百万は小さく頷く。彼女には、あのヒントで十分だったのだろう。耳郎もまた、図書館行ってみようかな、と自分の出来る事を考えようとしている。

「じゃあ、ちょっと百竜借りてくぜー！」

そう言われて百竜は、上鳴の机まで連れて行かれる。

「昨日一日考えてみたんだけどよ。俺、ヴィランと戦った時全く駄目だったんだよな。触れたらスタンガンみたいには出来るけどそもそも触れないし……だから、百竜のあの毛使って何か出来ないかって考えたんだ」

そう言つて上鳴が取り出したのは、一冊のノート。彼がそれを開くと、たくさんの走り書きの中に、いくつかの道具が書かれていた。

「やっぱ、剣とかナイフとか、何か電気を流せるものが欲しいなって思ってた」

やはりそう来たかと、呼人はスマホを取り出し、一枚の画像を上鳴に見せた。

「これ見たことあるか？」

「警棒？」

「警棒型スタンガン——ようするに棒の形したスタンガンだ」

「スタンガ、え、マジ？」

それと自分のアイデアを見比べて、上鳴は素つ頓狂な声を出す。

「マジだ」

「マジかあ……俺のアイデアじゃやっぱ駄目かあ」

「別にそういうわけじゃないだろ。ただ、お前の能力を活かすのは別に俺の毛を使わなくても科学で簡単に出来るってことだ。お前科学技術をなめるなよ？俺の帯電性の毛の使いみちなんで、繊維に織り込んでも電気をためられることぐらいだ。電気を溜めることぐらいならバッテリーでも出来るからな。それに、お前の場合は自分で電気を通電できるから、金属さえあればいくらでも電気を相手に届けられる」

「お、おう。お前急に饒舌だな」

「田舎暮らしの俺にとつちやあ、日本の科学すげえだからな」

海外、それも山奥や辺境の地など科学技術と縁遠い場所で長い事過ごしていたため、

呼人は科学というものの素晴らしさを身にしみて実感していた。

「まあ確かに、お前の場合は電気を『どう』相手に届けるか、って問題がつきまとうだろうから、その辺りは機械に詳しいやつに聞いた方が良いと思う。もちろんそのスタンガンみたいに近接で、つてのも良いけどな。でもそれだったら、棒より鞭の方がリーチ良くないか？」

「確かに……でも鞭使うのって難しいだろ？」

「剣とか棒も、ちゃんと練習すればめっちゃくちや難しいぞ」

「うぬぬ……」

そう言つて少し考え込んだ上鳴は、呼人が紙をペラペラめくつていると、ぽんつと手を打ち鳴らして顔を上げる。

「相澤先生のある、どうだ？ あ……何ていうんだあの布みたいなの」

「名前は俺も知らないが……まあ、剣よりは利便性が高そうだとは思うぞ」

「だよな！ 後で先生に……聞いてみたいけど怖そうだな」

「先生は真面目な奴にはちゃんと対応してくれるだろ。後、お前もちゃんと電気のこと勉強しろよ」

「勉強つて？」

「電気つてのはあくまで物理現象だからな。お前が放電するのは個性の力だけど、放電

された電気は物理法則に従うんだ。だから、そういうのをちゃんと勉強したら、何か使えそうな発想があるかもしれないぞ」

「その口調、さてはお前、何か思いついてるだろ。教えてくれよー」

思わせぶりの百竜の言葉に上鳴はその首元を掴んでがつくんがつかんと揺さぶり始める。

「じ・ぶ・ん・で——考える癖をつける。ふう、苦しかった」

「まあ、確かにお前に全部聞くのもなんか違うなとは思うんだけどさ」

「わかっているならそうしてくれ」

あやっぱり？ あはは、と明るく上鳴が笑っていると、始業時間が迫ったことで飯田が皆に席につくよう促し始める。そして——

『相澤先生復帰はええ!!』

教室の扉を明けて入ってきたミイラ男、もとい包帯で雁字搦めの相澤先生への皆の第一声がそれだった。

先日、ヴィラン制圧後に警察に聞いた話では、両腕の粉碎骨折に顔面骨折エトセトラと、かなりの大怪我だったはずである。雄英高校にはリカバリーガールという、人の傷を治してしまう保険医がいるが、緑谷の腕が一日で治らなかつたところを見ると、何か

条件があるのだろう。

「俺の怪我は良い。それより。まだ戦いが残ってる」

その言葉に、皆の表情が固まる。すわまたヴェイランが来るのかと。

だが。

「雄英体育祭が迫ってる」

『また学校っぼいの来たああああ!!』

皆の緊張は興奮へと変わる。

——まさに学校っぼいそれ、再び。

(体育祭ってなんだったかな)

第14話 放課後訓練・1

「ヴィランが来た後なのじゃんのかよ!？」

皆のテンションが上がるほど学校っぽいそれだったわけだが、当然懸念の声もある。状況を正確に指摘したのは峰田だ。

先日は、いつもどおりの警備の中でヴィランに侵入された。だが、体育祭——それも雄英のものとなると、一般人や報道関係など万単位の間人が校内に入る。先日よりも格段に襲撃がしやすいのは確実だ。

だからこそ、やる。

「あえて開催することで、雄英の危機管理体制が万全だと世間にもヴィランにも示す……ということだ。警備は例年の5倍以上……それに、ウチの体育祭は“最大のチャンス”になる。たかが敵で中止していいものじゃねえ」

体育祭が“最大のチャンス”。その言葉に、皆の目の色が変わる。

かつてスポーツにおいて個人の研鑽を示す祭典であったオリンピックピックは、“個性”の出現とともにその権威を失った。個々人が同列に立たないことが“個性”によって明確になってしまい、既存のスポーツそのものが権威を失ったのだ。

だが、その代わりになるものが現代にはある。

それが、『雄英高校体育祭』。それはただ一校の体育祭であれど、規模はもはや体育祭どころか地方競技会の域に及ばず。巨大なスタジアムに広大な会場、万単位の観客。そして全国生中継。まさに『現代のオリンピックピック』。

そしてそれを見に来るのは、何も一般人の観客だけではない。

「例年体育祭には、多数のプロヒーローが観戦に来る。しかもその目的は、ただの見学ではなく、スカウト」だ。当然、名のある事務所に入ったほうが経験も人気も得られる。ここで見込まれれば、それで将来が拓けるわけだ」

その言葉に、耳郎と上鳴がヒーローになるための道筋について話す。

高校卒業、すなわちヒーローの資格取得後、まずは一人で活動するのではなくすでに活動しているヒーローの事務所に『サイドキック』という立場で所属するのが定石だ。そしてそのサイドキックは、ほとんどがスカウトから選ばれる。

「……そういう事だ。チャンスは毎年一回の最大3回。ヒーロー目指すなら外せないイベントだ。お前ら——時間を無駄にするなよ？」

相澤の言葉に、皆はただその表情で答える。不敵に笑うもの、落ち着き払うもの、緊張を示すもの。だが、全員が体育祭への意気をにじませていた。

皆が体育祭への興奮を語り合った昼休みを超えて放課後。

以前の約束を果たそうと障子と呼人が屋内演習場に向かおうと合流したところに、尾白がやってきた。

「百竜、障子も。前、屋内演習場に行くって話してたよな？」

「ああ。百竜に戦い方を教えてもらおうと思ってる」

「俺も一緒に行ってもいいか？」

「俺は構わないが……」

そう言って障子と呼人の方へと目を向けてくるので、呼人は頷く。協力を請われて手伝うのはやぶさかではないし、何より尾白がここで一番百竜の個性を知っている。特に気にする必要はない。

「入り口が騒がしいな」

「ん、他のクラスの人が様子見に押し寄せているらしいな」

聴覚を強化した呼人と触腕から耳を生やした障子は、席にいながら廊下の様子を聞いている。

やがて、爆豪が廊下に出ていって暴言を吐いたことで場が騒然となった。

「よし、行くか」

「え、今行くのか？ もう少し待ったほうが……」

「今ならヘイトは爆豪に押し付けられる。すつと抜けようすつと。目立つのは苦手なんだ」

「……クラスで一番目立っている男が何を言う」

「障子の言うとおりで」

「うっ。目立ちたくて目立ってるわけじゃないぞ」

そんな事を言い合いながらも、3人は連れ立って教室の出口へと向かう。扉をくぐる
と、まだ相当数の人間が集まっていた。

「お、宣戦布告の」

「は？」

集団の中に見えた横顔に、呼人は思わず呟いていた。

「……なんだあんた」

「A組の生徒だ」

「それは知ってる」

「いや、さっきの宣戦布告を聞いてたからな」

後ろの2人には悪いが、思わず声をかけてしまった。強い決意、それに、憧憬。その

細身の男からは、なかなか勇ましい気配がする。

「それで？ あんたも自分たちの方が上だつて笑うか？」

「いや、笑うつもりはない。ただ——強くなりたいのなら、出来る限りの事をしろ。その体つきじゃあ俺は本気だと感じないぞ。そういう個性だったら悪いな」

「……恵まれた奴らに言われてもな。俺は俺のやり方で勝つ」

「……上がつてこい」

そう言うのと、呼人は男に背を向けて廊下を歩き始める。後ろでは、教室から出た飯田が他のクラスの生徒に道を塞がないように頼み始めていた。

「……あんな事を言つて良かったのか？」

「爆豪もだけど百竜も喧嘩売つてるよな」

「……あいつからは、強い憧れを感じた。本気で狙つてくる。だからアドバイスしたかっただけだ」

そう、それはあるいは、このクラスの誰よりもなお強い、ヒーローそのものへの憧れであるかのように。

「目立ちたくないとは？」

「ぐっ」

「目立たない気ないだろ」

「ぐぐつ」

「……今日は障子と尾白もか」

「はい」

3人が連れ立ってやってきたのは職員室。ヒーロー科の生徒には屋内演習場の使用が許可されているとはいえ、管理の都合上利用する際には担任の教師に言いつて許可証をもらわないといけない。

そのため、代表である障子だけでなく呼人と尾白も職員室へと入っていた。

「……待ってる、鍵を持ってくる」

そう言うのと、朝よりは包帯の取れた相澤は校長室へと向かって歩き出す。校長の根津は学校の校長であるだけでなくヒーロー科での強い権限を持っているため、呼人の演習場利用を知っている相澤がこんな状況でも許可を出しているのか相談していたのだが、その数が増えたため一応の報告と、そこに保管されている鍵を取りに行ったのである。

相澤が席を離れた後、その場に残されたのは手持ち無沙汰な3人。それに興味を持つ

たのか、ある教師が近づいてきた。

「あなたたち、1年A組よね？」

そちらを振り返った3人の目に映ったのは、学校で見るにはあまりに、その、いわゆる「エロい」コスチュームを纏った女性。

——18禁ヒーロー、ミッドナイトだった。

「校長先生、屋内演習場の利用許可を……」

校長室に入った相澤がそう言うと、校長の根津が鍵を持って近づいてきた。

「相澤くんその怪我でお疲れ様なのさ。今日も彼が来たのかい？」

「それと……後2名ほどうちのクラスの生徒が」

「ほうほう。一応名前を教えてもらってもいいかな？」

「尾白猿夫と障子目蔵です」

「なるほどなるほど。それじゃあこれが鍵なのさ！　ちゃんと怪我しないように伝えるのさー」

根津は相澤の体調を気遣いながらも、合理的な問答で必要な情報を引き出し鍵を渡

す。

「ありがとうございます」

礼を言つてペコリと頭を下げた相澤は、そのまま校長に背を向けようとする。その背中に、根津は声をかけた。

「百竜君が良い影響を与えているのさ？」

「……百竜の影響ではあるでしょうが、あいつは戦うことに重きを置きすぎています」

「他の道も示すのが我々の役目なのさ！」

「……はい」

改めて校長に頭を下げ、相澤は校長室を出る。席まで戻ると、待っていた3人とミッドナイトが話しているのが目に入ってきた。

「1年A組の障子目蔵です」

「同じく1—A百竜呼人です」

「尾白猿夫です」

授業でしか顔を合わせていない教師に3人がそれぞれ名前を名乗る。一方生徒の方

は、全員彼女の名前を知っていた。彼女はヒーローとしてかなり有名であり、後はクラスの変態担当峰田と、ノリの良い上鳴が話している中でよく名前が上がっているのが彼女なのだ。

「あなたが百竜……」

思わずと言った風にミッドナイトは呟くが、百竜以外の2人が怪訝な表情をしたことで話を変える。

「3人も、どうして職員室に来たの？」

「……相澤先生に、屋内演習場の利用許可をもらいに来ました」

「ああ、そういうこと。頑張ってるのね」

そうして少しの間他愛のない会話をしていると、相澤が戻ってきた。

「相澤先生、真面目ない子たちね」

「……ありがとうございます。障子、3人分の許可証だ」

相澤が手渡してくる許可証と鍵を受け取り、3人は職員室を後にする。

「相澤先生、この段階で屋内演習場を使いたがる生徒って例年いた？」

「……珍しいですね」

「誰のおかげかしら」

いかにも、わかってるでしょ？　と言わんばかりの目線。それを相澤は、意図して無

視する。

「……今年は除籍にしなくてすみそうです」

「……そう。仕事に戻るわ」

望む回答が得られないとわかったのか、ミッドナイトは自分の席へと戻っていった。

「百竜、こないだの形態が何なのか、詳しく教えてくれないか？」

「こないだのって、お前を乗せた時の？」

「うん」

コスチュームに着替えて屋内演習場に入ってそうそう、尾白がそんな事を言い始めた。

「あれか……」

「見せた分は説明してくれるんだろ？」

「そうは言っただけだな……」

確かに呼人はそう言った。それは、一気に個性を全部説明するという、めんどくさいし全部明かすのは避けたいしという2つの理由で、呼人がみんなに提案した条件で、皆

もそれを汲んでくれて見たもの聞いたもの以上には聞かないでいてくれる。

「……こないだの形態とは何だ？」

「USJのとき、一緒に飛ばされた先で百竜が見せてくれたんだ」

「……俺も興味があるな」

更に障子までこんな事を言い始めた。正直別に障子に見せる分には嫌な事は一つもない。気にするとすれば、耳郎や葉隠など女子に見せる場合だ。女子の方がオドガロンを見た際の生理的な嫌悪感や恐怖は大きいだろう。

その点障子は、男子の中でも肝が座っているように見えるため問題は無さそうである。

「まあ良いけど。障子、お前グロテスクなの……ゾンビとかいけるか？」

「苦手ではないぞ」

「そうか。ならまあ大丈夫か。じゃあ少し離れててくれ」

そう言つて距離を取る呼人を障子そのまま見ていると、尾白がその腕を引いて少し距離を離してくれた。

それを確認した呼人は変身を始める。四肢が赤黒く変化すると共に肥大化し、コスチュームが肌に飲まれる。その顔も変化し、人間のものからかけ離れた——獣へと変わる。

10秒の後、2人の目の前には巨大な獣が立ち、その顔を2人の方に向けていた。そしてそのまま、2人の様子を伺うように円を描いて歩き始める。

「っはっ——。正面から見ると迫力が段違いだ」

「……」

そしてその獣——呼人が変化したオドガロンは、2人の前に座り込んだ。

第15話 放課後訓練・2

『どうだ?』

「やっぱり、迫力が凄いな」

その異様を以前見たことのある尾白も、正面から正対し、目を向けられて改めて、その巨大さを知る。

「……触っても、良いか?」

『良いぞ。背中とか尾は尖ってる部分があるから気をつけろよ。後爪と牙は切れるからだめだ』

「ああ」

感想を述べる前に、障子はオドガロンの体に触りたいと言う。オドガロンの肉体は多少体温が高い程度で触って害があるものでもないため、呼人も許可した。

恐る恐るではあるが障子が、続いて尾白がその体に改めて触れる。

「硬い……」

「……」

尾白がその肉肉しい質感とのギャップに驚く中、障子は脇腹だけでなく背中や尻尾、

足先など様々な部分を観察する。

「……かつこいいいな」

「え？」

『ん？』

つぶさにオドガロンの体を見ていた障子が、そう呟く。

「……俺は怪獣や、モンスターが好きなんだ。人に言ったことはないがな」

『ありがとう、と言っておくべきか？』

「俺の方こそ礼を言いたい。この目でこんな怪獣を見れて、良かった」

そう言いながらも、障子はオドガロンの体を仔細に観察する。やがて、障子が満足して離れたところで呼人は人間の姿に戻った。

「……これがお前の個性か」

「まあ、な」

「あれ、けどそうすると、あの黒い毛は？ 電気を溜めるって言ってただろ？」

「……あれはまた別のモンスターだ。俺がなれるモンスターは一種類じゃない」

その言葉に、尾白と障子が目を見開く。

「個性を複数、か？」

「いや、モンスターになるってことは変わらないから、『モンスターになる』っていう個

性なんだろう。まあ、正直な所はつきりしたことはわかってないんだ。それに全容は俺にもわかってない」

「え、それじゃあ個性届は？」

「個性学の研究者に『研究の結果わからないことがわかった』って書いてもらった。学校には今のモンスターと黒い毛のモンスターの2つだけ提出してる」

先程ミッドナイトが百竜の名前に反応したのも、それが理由だ。個性の正体はつきりしない生徒など、前代未聞なのである。

「……凄まじい個性だな。それで、別のモンスターというのは」

「それは明日以降だな。お披露目会をしてると訓練する時間が無くなるぞ」

怪獣が好きだという障子が、いつになく前のめりで尋ねてくる

「だな。そろそろ、本題に入ろう」

もともとここに来たのは、訓練のためである。途中で話がそれってしまっただけだ。

「障子と百竜は、どういう訓練をする予定だったんだ？」

「……：以前の実戦演習の際、百竜に格闘戦を鍛えろと言われた。確かに体は鍛えているが、戦う練習をしたことが無い。だからどう鍛えれば良いのかと教えてもらおうと思っただ」

「あー、そういうことか。近接戦なあ」

そうやって呼人は静かに考え込む。呼人の格闘戦のそれは、武道のように人間が積み重ねてきたものではない。百竜の中にいる竜達。彼らが人格と人の姿を獲得し、己を鍛えるという行為の実践の過程で見つけてきた戦い方なのだ。そのため、体系だつて教えるのが非常に困難である。

「俺は訓練の相手は出来るけど、俺自身が体系的に学んでないからあまり教えるのに向いてない。尾白は武道をしてるなら、そういうのに詳しくはないのか？」

「俺も、正直好きで武道はやってるけど実戦のレベルに無いと思う。むしろ、百竜や障子とそう言う訓練ができれば良いと思つてついでにさせてもらつたんだ」

互いに教えることの出来るレベルには無い。ならば、簡単な方法がある。

「よし、動画を見よう」

「動画？」

「Itubeで？」

「ああ。個性出現以前には、武道や格闘技がかなり流行つていたらしい。個性が出現してからはそれほど流行つてないみたいだが、もともと戦うための技術だから参考になる」

そうやって呼人は、鞆からタブレットを持つてくる。普段は本の方を好む呼人だが、とある用途のために持ち歩いてた。

「例えば……格闘技にはたくさん種類があるんだが……これとか、どうだ？」

「武道にはほんとに色んな種類がある。多分格闘技にも、戦い方そのものが違うものがたくさんある。一つに絞らずに色々見て、自分に合ったのを探すと良いと思うぞ」

呼人が再生したのは、ボクシングの初歩の動画。それだけでも、戦うということに慣れてこなかった障子には新しい情報が多かった。

「なるほど……拳の固め方から考え方があるのか……」

「無茶苦茶にグーにして殴ると自分の手を痛めるからな。俺も昔はよくやった」

懐かしそうに尾白が言う。今の時代武道はかなり廃れており、彼が武道を志してもそれを学べる場所が近くには無かった。そのため、小さい頃むやみやたらと武道の真似事をしたときはよく怪我をしたのだ。

「……学ばないと行けないことが色々ある、か」

「後で俺のおすすめの武道をメールで送っておく」

「感謝する」

しかし、そうなると障子が訓練をすることが出来ない。訓練以前に学ばないといけないことが多いのだ。

「とりあえず障子は、今日のところは普通のパンチを練習したらどうだ？ 体術は繰り返し返して体に染み込ませないと意味がない。それに、調べたり動画を見たりするのは家で

も出来るだろう?」

「……そうだな。せっかく来てもらったのに悪い」

「いや、俺もあんま力になれないで悪いな。とりあえず動きだけは見れるから」

その後、動画を参考にしながら2人から教わった障子が拳を固めてパンチを空に放つ一方で、呼人と尾白は格闘戦の訓練をする。

「……いい動きだ!」

「そつちこそ!」

尾白は四肢に加えて尻尾を使って。一方呼人は、一切個性を使わずに己の実力でもつて。特に重たい尻尾の攻撃は受けるのに苦勞するが、経験は呼人の方が多く、それが有利となっている。

そして、互いに互いの拳を外に弾いた所で大きく跳び下がった。

「少し休憩にしよう」

「そうだな」

屋内演習場の一角を使ってかなり激しめに動き回っていた2人は、一息つくために障子のいる部屋の端の方へと来る。障子は、ひたすらに前に向かって拳を放っていた。

「障子、少し休憩しないか?」

「む……2人が休憩するなら俺もそうしよう」

壁際に座り込んだ3人は、それぞれに持ち込んだ水分を取る。

「百竜、俺の戦いはどうだった？」

「正直に言っつていいか？」

「ああ」

「動きはそれなりに良いと思う。ちゃんと体の動かし方が身についている。でも、動きが『多分こう来るだろうな』って思う通りに来るから予想しやすい。あと、尻尾と比べて手足が貧弱に感じるな」

尻尾があつて戦うとすれば、多分こう来るのだろうな。この蹴りの次は、こう来るのだろうな。それが、わかりやすい。俺ならそうする、と思つたとおりに来てくれる。あの意味しつかりしているのだが、それ故にわかりやすいのだ。

「わかりやすい、ね。それは尻尾の話？」

「尻尾も、手足も、つて感じだな」

「そつか……手足も結構鍛えてるんだけどな」

尾白は苦笑いをするしかない。ただ尻尾があるだけという、言つてみれば没個性だと自分自身でわかっているからこそ昔から体を鍛え続けてきた。尻尾だけじゃなく手足もかなり鍛えている。にも関わらず、それを貧弱だと判断された。確かに普段は大きめの体操服やブレザーを着ているのであまり目立たないが、呼人の体の太さは尾白のそれ

よりも一回り上に見える。そんな彼から見れば、まだ鍛え方が足りないのかもしれないのかもなかった。

一方、尾白の言葉が気になった障子はそれを尾白に尋ねていた。

「手足を鍛える意味は、あるのか？ 尾白の場合は尻尾が個性を発現させているから、そちらを鍛えたほうが……」

「いや……俺の尻尾はそれだけで勝てるっていう個性じゃない。むしろ手足に絡めて使う、言ってみれば3本目の腕で、3本目の足だ。身体能力はそのまま出来ることに直結する」

「む……そうか。確かに個性次第、といったところか」

「まあ、轟みたいな相手にはどっちにしる歯が立たないけどな」

そう、尾白は悟ったように言う。それは、この個性社会の常識。強力な個性に、従来の人間の体は勝つことが出来ない。増強系の個性に対して、違う系統の個性を持つ人間が体で挑もうとしても意味がない。

それが、呼人には理解できなかった。

「別に敵わないわけじゃないだろ」

「え？」

「……轟や爆豪の個性は、無理ではないか？」

そう言う2人に、呼人は1つの事実を伝える。

「さつき俺が変身したモンスターだけだな」

「ああ」

「うん」

「あれに、個性無しで、剣や弓だけで戦いを挑み、討ち取った人間がいる。たった1人でな」

「なにっ?」

「人と戦った事があるのか?」

呼人の唐突な言葉に2人は驚きの声を上げるが、

「俺が、じゃないぞ。元のモンスターが、だ。そんな人間がいると聞いて、個性の関わりない体を鍛えても意味がないと思うか?」

「……確かにそれを聞けば、出来ないことはないのだろうか」

「そこまで強くなるのは大変だね」

「最高のヒーローになるために、出来ることは全部やるんじゃないのか?」

その言葉に、2人ははっとした表情になる。

自分たちは、何をしていた? 無意識に出来ないと言いつつ、その理由を常識に求め。そして大変だからと、出来ないと言いつつ張る?

冗談ではない。自分たちは、最高のヒーローを目指す。

その道に、妥協はない。そのはずだ。

「……ひたすらに鍛えるしか、無いのだからな」

「俺も……もう一回一から鍛え直しだよ」

そう、宣言した2人に、今度は呼人も笑顔を見せた。

第16話 雄英体育祭・1

——2週間。

百竜、障子、尾白の3人は、毎日放課後に演習場を訪れては、組み手や体を鍛えるトレーニングなど、個性だけでなくその地力を鍛え続けた。

始めは個性への無意識の信頼があつた障子や尾白も、改めて自分の個性と向かい合い、何が出来るか、何に使えるかということを一つずつ確認し、それを体に叩き込む。それは演習場での活動だけでなく、下校時間になつた後は反省会をしながら帰り、帰つたらしっかりと栄養のある食事をとつたり追加のトレーニング、あるいはイメージトレーニングなどに励むなど、2人の己を鍛えることへの考え方は、以前とは大きく変わつていた。

それに付き合つた呼人も、以前よりも更に人間状態での戦闘に注力していた。モンスタ―に体を一部変化させた際も、人間形態を取るのであれば格闘戦の都合は変わらないう。そういう意味では、イメージの中にある動きを実際に外に出してみる、というのは個性の活用ではなく、正に個人の地力を鍛えるのに最適であつた。

ちなみに、その間にトビカガチを見た障子がテンションを非常に高めたのは言うまで

もない。

背中に乗せてくれと頼まれたときには尾白と違って掴む手段が少ないため『振り落とされる可能性がある』と危惧したのだが、触腕の先に更に腕を複製してリーチを伸ばし、それを体に巻き付けるようにして体を固定したため、呼人もそれなりの速度で走つてみせた。

呼人の思っていたのとは違う歓迎のされ方だったが、それはそれで、悪い気はしなかった。

——そして体育祭当日。

雄英高校を一人の男が訪れていた。

「さてと、一年生の会場は……」

初めて見る場所、更に事前の調べをしてこなかった男は、周りの流れに乗るしか無い。と、その中で見知った顔を見つける。

「おー、シンリンカムイクくんじゃないか」

そう言つて男が声をかけたのは、他のヒーローと話していたシンリンカムイという人

気ヒーローである。街中を歩いていけば人々に声をかけられるような彼だが、今日ここに来ていた人間たちは『体育祭』を見に来ているため、周りにヒーローがいても声をかけることがほとんどない。彼が首にかけている警備員の証のネームタグもその一因だ。

「ジ・アドベンチャー、何故あなたもここに？ 警備に名前は無かったと思うが……」

「今日は応援だよ。知り合いが体育祭に出場するからな」

「……今日は観客として、ということか」

まだここでの活動時間が短いジ・アドベンチャーだが、同じフリーのヒーローということもあってシンリンカムイとは少しばかり話したり、食事を一緒にしたこともある。

「だから一年生の会場がどこか教えてほしいんだ。どこかに案内付きのパンフレット無いか？」

「二年生ならあつちだ。あの奥の角を曲がると大きな看板がある。パンフレットは入り口で受け取っていないのか？」

「無くても行けるかと思った」

あつけからんと言うアドベンチャーにため息をつき、シンリンカムイは自分の分のパンフレットを渡す。

「ならこれを使え。我は今日は警備だ」

「お、悪いね」

サンキュー、と、呑気な声を上げながらアドベンチャーが去っていく。その背中を見送るカムイに、一緒にいたヒーロー達が話しかける。

「誰ですか？ 今のフランクなおじさん」

「ヒーローだ。最近俺達のエリアで活動し始めたフリーの」

「あー、なんか新しい人がいるって言ってましたけど、あの人なんですね」

「實力は？」

「……わからん。あまり主だって活動しようとしんない。避難誘導か現場の隔離ばかりやってる」

「……」

シンリンカムイの微妙な評価に、他のヒーローが戸惑った顔をする。ヒーローというのは成果主義的な一面もあり、活躍したものほど認められる。そして成功するために人気もその要素となる。

その中で避難誘導や現場の隔離ばかりというのは……言ってみれば、警察とやっていることは変わらない。それを積極的にするヒーローというのは、珍しいのだ。

だが、シンリンカムイは彼が實力を隠していることに気付いていた。避難誘導など裏方の仕事をしていながらも、常に何かあったときにいてほしい位置にいるのだ。回数が重なるるとそれはまぐれにも思えず、個性が強力ではないにしても、慣れがあるのだろう

と感じていた。

この体育祭では、ヒーロー科とその他の科の公平性を期すためにコスチュームの使用は禁止されており、全員が体操着を着用しなければならない。そのため、A組の面々も体操着を着て控え室にいた。

「お前は……こういうときでも読書か」

「暇な時間は作らない主義なの」

「らしいなほんと」

呼人は、障子と尾白と3人で控室の隅の方に座っていた。普段こういうときに一緒にいる耳郎は八百万や上鳴と2週間の成果の確認や緊張を解すための会話を、葉隠は緊張しているのか一人で深呼吸を繰り返して芦戸達に笑われている。

「少しは緊張しろ」

「ルーティーンって知ってるか？」

「百竜が言うど嘘っぽいけどな」

あくまで読書はルーティーンだと、そう言い張る百竜だが、絶対『読みたい』が強い

と2人は看破する。が。

「いや、選手宣誓があるからほんとに緊張してる」

「……そう言えば、入試の1位だったか」

「こそ。人前に出るのはいんだけど流石に大勢に話しかけるつてのはな。慣れてないからちよつと緊張する」

そんな事を話していると、やがて飯田が皆に用意を伝え始める。

「そろそろ入場の時間だ！ 皆用意してくれ！」

パタリと本を閉じ、それを控室の棚に置く。普段のコスチュームとは違って、本を保持しておくポケットが体操着には無い。

そして立ち上がり、入場の準備をする。この2週間、呼人にとってはいつもどおりの訓練付の毎日であったが、障子と尾白にとっては、初めて明確に意識して訓練をした。それが、彼らの雰囲気を変えていた。

と。

「緑谷。あと百竜、ちよつと良いか」

そう、轟に名前を呼ばれる。緑谷と轟は少し離れたところにいたので、2人に断つて呼人も彼らの所へ移動した。

「緑谷。今の段階じゃあ実力は俺の方が上だが、お前——オールマイトに目をかけら

れてるよな」

その言葉に、緑谷の表情がかすかに強がる。だがクラスメイトはそんなことに気づけ
無いぐらいに、続く轟の言葉に圧倒された。

(そりゃあ同じ気配がする。まるで歴戦と幼子のそれだが……同種には違いない)

「別にそれを詮索するつもりじゃねえが、お前には勝つぞ。——百竜、お前にもだ。お
前が勝つつもりがあっても無くても関係ねえ。勝つのは俺だ」

堂々の、宣戦布告。それにクラスのムードメーカーである切島が反応する。

「おお!? 轟がNO。ー宣言か!」

実戦演習や体力テストでは百竜が勝ったが、その実戦演習で見せた戦い方故に百竜が
轟よりも優れていると思っている人間は少ない。あくまで同格。むしろ可能性として
は轟の方が抱えている。

「入場前にケンカ腰でどうした!? やめろって——」

そして、轟を制止に入った切島を、呼人が止める。

「なんだよ百竜」

「こういうのは、本人が答えないと意味がない。俺も、緑谷もな」

「仲良しごっこじゃねえんだ。少なくとも今日はな」

当事者2人の言葉に切島も制止するのをやめ、覚悟を持った表情で見つめる。

そして、もう一人の当事者、緑谷は、拳を握りしめ、勇気を振り絞っていた。

「そりゃあ、僕よりはみんなが……轟くんだけじゃなくてみんなの方が実力は上だよ。客観的に見てほとんどの人に敵わないと思う。でも!!」

覚悟を決めた表情で緑谷は前を向く。

「——他の科でも本気でトップを狙ってる人がいる。僕だって、負けるつもりはない。

——本気で獲りに行くよ!」

自らを最弱と認めた上で、挑むという発言。そういうの、呼人は結構好みである。人間が、人間だけが唯一持つ、「研鑽」という概念。それに何より感動したのは、その概念を持たなかったモンスター達であり、そして呼人だった。

緑谷の言葉にクラスメイトが歓声を上げる中、轟は静かに頷く。

「ああ……それでも俺が勝つ。で、百竜。お前はこれを聞いても、勝とうとは思わねえのか?」

轟の目的は緑谷にもあったのだろうが、百竜にもあった。そしてそれは、あのときの、ヴィラン襲撃事件直前の会話の、再確認となる。それをクラスで聞いたことがあるのは障子だけだった。

わかりやすいその挑発に、呼人もまた答える。轟は、名実ともに一位になりたいのだろう。だからこそその、挑発。それに呼人もまた、己の意思で答える。

「……………前にも言ったと思うが、俺は現段階の勝ち負けに意味があるとは思っちゃいない」

その百竜の言葉に、皆がどよめく。短い間だが、誰よりも真剣にことに臨んでいるのが百竜という男だと、皆思っていた。

だが、呼人の言葉は、更に先を、あるいは、ヒーローになるという目的すら越えた、最大の目標を示すものですらあった。

「今日はあくまで、どれだけ自己を研鑽できたか、どれだけ自分の個性と体を使いこなせているか、を確認するための場だと思ってる。ゴールは3年後——いや、俺の人生が終わった時、どれだけ俺が俺に満足しているか。だが——」

——だからといって負けてやるつもりはねえぞ。

不敵な笑みとともに放たれたその言葉に、轟の表情がわずかに変わる。

笑った。目の前の男が、自分と同じステージに立ち、競いあうのだと。そして、自分はそれに挑み、勝ちたい。その、『己の意思の発露』。

——束縛からの解放は近い。

「……………勝つのは俺だ」

「言ってる。個性の差が戦力の決定的差じゃねえと教えてやる」

互いに、バチバチと火花を散らす3人。

そこに、飯田から入場が告げられた。

3人はそれぞれに別れ、呼人はクラスの集団の後方にいる2人のところへと戻る。

「……あれがお前の覚悟か」

「見ているものが違い過ぎるな。……でも、あんま上ばっかり見てると、足元掬うからな？」

「俺は足腰が一番頑丈なんだ」

「そういう意味ではない」

あえて軽く返した呼人と突っ込んだ障子に、3人の中に笑いが起きる。この2週間をともにしたこと、3人の間には他のクラスメイト以上の関係が出来ていた。

そして入場。まだ入場しないうち、通路で待機しているところに、プレゼント・マイクの声が響き渡る。

『年に一度!! ヒーローの卵たちが全力でぶつかり合う大バトル!! ぶつちやけお前らの目的はこいつら! 敵の襲撃を見事乗り越えてみせた最高の新星ども!!』

——ヒーロー科一年、A組だろお!!?

『ウオオオオオオオ!』

プレゼント・マイクの声を合図に入場したA組を迎えたのは、それまで以上の、爆発するような歓声。会場にいる万を越える人間、その全ての注目がA組に集まっていた。天下の雄英高校へのヴィラン襲撃事件は、それだけ大きな話題となったのだ。

『続いて、俺達も負けちゃいねえ!! ヒーロー科B組の入場だ!! 更に普通科——』
プレゼント・マイクの放送を聞きながら、全ての生徒が会場に集結する。それが終わると、宣誓台に一人の女性が上がった。

ヒールにガーターベルト、ボンテージスーツ、そして鞭。呼人曰く『いわゆるエロい見た目をした』ヒーロー、『ミッドナイト』だ。

「相変わらず凄い格好だね」

「ん、あの格好は目立つのか?」

「目立つっていうか……恥ずかしくないのかなって。まあ先生は慣れてるんだらうけど」

『18禁だからこそだろお!?!』

何やら峰田がいらぬ事を言っただけで女子に睨まれている。エロいのが好きなのは理解したから少しは隠せ。

そこに鞭の音が響く。

「静かにしなさい！ 選手宣誓！ 選手代表——A百竜呼人!!」

その言葉とともに、呼人の背中を障子が押す。前に並んでいた尾白も通る呼人の背中を押した。

台上に上がった呼人は、ミッドナイトの、そして会場全員の視線を受けながらマイクの前に立つ。

普通の宣誓はするつもりがなかった。

「先日普通科の人に、自分が体育祭で優勝すると宣言された」

突如話始めた呼人に、困惑の視線が集まる。

「俺はそれを笑うつもりはない。あいつは誰よりも、本気の目をしていた」

それは、ヒーローなどではない。人間であることの、証明。

——俺は、ここにいて、と。俺にも目指す先がある、と。

だから呼人は、それに答える言葉を口にする。

「この場にいる全員が、それぞれの目標を持っていて。そのための努力を惜しむ人間はここにはいない。ならば、挑んで——勝ち取れ」

それを聞いた『宣戦布告をした生徒』、心操人使は、わずかに下を向く。ああ、そうだ。

俺は、必ず勝ってヒーロー科への編入を勝ち取る、と。

「ヒーロー科だからと驕るな。ヒーロー科でないからと逃げるな。今日は、ここにいて

全員がライバルだ」

個人としての百竜呼人の決意ではなく、ここに集まる全ての『今日持つべき決意』を代弁する。

——今日を、最高の日にしてやろう。

その言葉に一拍遅れるようにして歓声が上がリ、ヒーロー科以外からも確かな熱気が溢れ出す。

『やってやろうじゃねえか!!』と。

その言葉を、あるいは不機嫌そうに、あるいは無表情にそれぞれの生徒が受け取るが、それは確かに、全員の胸に響いていた。

(……誰が相手だろうと負けるつもりはねえ)

(モブ共が！俺が全員蹴散らして1位になる！)

「百竜はいつも新しい考え方を教えてくれるね」

「……あれがあいつの強さの理由、か」

「うちだつて、負けるつもりはないし」

「私も、負けないよ！」

そして、それは会場にも伝播する。見に来ているプロヒーロー達こそ冷めた目で見れど、一般客はその言葉に、意気の溢れる言葉と上昇する熱気に歓喜する。

今年は凄いものが見れるかもしれない、と。

「熱が冷めない内に早速始めるわよ!! 第一競技はこれ!!」

ミッドナイトが手にする鞭で指すモニターに、競技名が映る。

第一種目【障害物競走】

第17話 雄英体育祭・2

「最初の種目は障害物競走よ！ 全一クラスによる総当りのレース!! コースはこのスタジアムの外周4キロ！ そして、コースさえ守れば何をしたらって構わないわ！ ほら、スタートは早いもの順よ、急ぎなさい！」

鞭を向けながらのミッドナイトの説明に、皆が大挙してゲートに押し寄せる。人数に對してそれは、圧倒的に狭い。スタートする前から勝負は始まっている。

呼人は、そんな人達の中程に立っていた。

（前に急がなくても、長距離のスピードじゃあまず負けない。それに、どうせすぐに動き始める）

人間として鍛えた肉体だけでなく、オドガロンの力を借りれば、まず普通の人間に速度で負けることはない。負ける相手がいるとすれば、飯田か、爆風を利用した爆豪か。だが、この競技は障害物競走。【障害物】があるのであれば、立体機動にも長けた自分にも分がある。

だが、呼人はこの競技で極力個性を使うつもりがなく、それに何より、この種目には、絶対というほどには、勝つつもりが無かった。

それぞれがそれぞれにスタートダッシュの準備をする。

そして、全てのランプが——点灯した。

一斉に飛び出す生徒。そしてその全員がもれなく、詰まった。それはもうみっちり。明らかにキャパシティオーバーな人数がゲートに詰めかけたのだ。

前方は少しずつ人が抜けていくが、全員が抜け切るには時間がかかる。

そして、それを悠長に待ってやるほど、あいつらは優しくない。

「止まってろ」

「どけモヤモブ共!!」

前方の、すでにゲートをくぐり抜けた選手たちから悲鳴や怒号が響き渡る。

「きゃっ!?! 足がっ!」

「冷たっ! 凍らされた! ちくしょう!」

「あいつやりやがったぞ!」

周りを巻き込んで足を凍結させながら走る轟だが、狙うは緑谷と呼人含めたクラスメイト。だが、前方から飛び出した緑谷は他のヒーロー科のメンバーの中に見えるものの、まだ他科の集団に埋もれている呼人の居場所をつかめなかった。

「あいつ、どこに消えた?」

そしてその隙を、こいつらは見逃さない。

「そううまく行かせるかよ半分野郎!!」
爆豪が。

「甘いですわ轟さん!」

八百万が。

「一回見せてもらったからね!」

尾白が。

「うおっと危ねえ!」

「轟のウラをかいてやったぜ!」

「溶かせば大丈夫だもんね!」

そしてクラスの皆が。

一瞬仕留めに戻るか躊躇った轟に追いつがる。

「お前らなら当然だろ」

だが、それは轟にとつては予想の範疇。この程度で『自分の』クラスメイトが脱落するとは思っていなかった。誤算があるとすれば、予想以上にB組や他の科の生徒の反応が良かったこと。そして、百竜の位置が把握できていないこと。

だが、勝つためにはそこに拘ってはならない。まだ先頭にいる轟は、足場を凍らせて利用しながら走り始めた。

『やっぱり抜けてきたなA組イ!! 担任としてどうだ “ミイラマン”?』

『……休ませろ』

一方その頃の実況席では、プレゼント・マイクと無理矢理につれてこられた包帯ぐるぐる巻の相澤が並んで座っていた。

『このレースの様子は各所に設置されたカメラロボがきっちりお届けするぜ!』

プレゼント・マイクはただ会場内での実況だけでなく生放送向けの解説も交えるため、少しばかり忙しいが、その合間にもきっちり実況をしていた。

一方後方集団の呼人。轟がいなくなったことではようやく飛び出すことが出来るようになった後方集団が続々とゲートから飛び出し、呼人も続いて飛び出す。

この体育祭では体操着やシューズの着用が義務付けられているため、グリップ力のある爪を使ったり、体操着に収まらないほどの人獣形態に変身して走る事はできない。

だが、完全に人間の状態でも走る速度で負ける気はしない。

「もつと気合入れて走れ!」

そう周囲に叱咤しながら、綺麗なフォームで走り抜けていく。個性をあえて使ってい

ないためその速度は人間の範疇に収まるものではあるが、4キロを走らなければいけない事を考えると相当に速い。

「あいつ、ただ走ってあのスピードか!？」

「なんかの個性使ってるんだろ!？」

「個性使ってあんなんじゃあヒーロー科の首席になんてなれないでしょ?。」

「じゃ、じゃああいつ、ただ足が速いのか?。」

それを見た普通科や経営科の生徒達も奮起した様子で走る。だが、呼人との距離はどんどん開いていく。

一方の呼人は、すでに前方に先行した集団の背中を捕らえていた。

その頃の前方集団。

『最初の関門、第一の障害物は“ロボ・インフェルノ”オオ! ヒーロー科の入試で出てきた敵代わりのロボットだ!』

コース上に出現した入試の仮想敵、しかもOPの大型の大群に進路を塞がれていた。

「一般入試用の仮想敵ってのはこれのことか」

「ヒーロー科はこんなのと戦ったってのか!？」

「無理だあ、勝てるわけがない!。」

プレゼント・マイクの放送と轟の眩きに、周囲の他科の生徒が反応する。

『ただの長距離走じゃねえぞ、障害物競争だ!! どんな障害物が出てくるか、油断するなあ!! 第一関門の始まりだリスナー達よお!!』

「戦ったけど戦ってないよ! あの時は逃げただけ」

「私は助けられただけ。でも今は、自分で切り抜ける!」

「あの時は恥ずかしい姿見せちゃったからね」

他科の生徒が心折られる一方で、ヒーロー科の生徒たちの意気は強い。入試の時は、ただ逃げ出すだけだった。だが、今ならば、と。

やはりと言うべきか、最初に動き出したのは轟だった。

「どうせならもつとすげえもん用意してくれ」

地面に手をついた彼の手から氷が走り、正面の巨大なロボットを凍りつかせる。ロボットは機械で駆動しているため凍結に弱い。その完全に機能停止したロボットの足元をくぐり抜けて轟は先へと進む。

「ロボットが止まった! 今なら……!」

そして、それに便乗しようとするものも現れる。当然以前は逃げる対象だった仮想敵が障害として現れたとはいえ、何も地力で倒す必要はない。ただ、障害は障害らしく切り抜ければ良いのだ。

だが。

「適当に凍らせたからすぐ倒れるぞ」

凍りついていたロボットが大きく体勢を崩し、便乗しようとしていた生徒の頭上へと倒れ込む。

『A組轟！ 攻略と妨害を一度に決めたあ!! こいつは——』

プレゼント・マイクの言葉の最中。他の生徒の頭上へと倒れ込もうとしていたロボットの倒れる向きが変わり、後方のロボットへと突っ込む。

それを為したのは、遅れて到着した勢いのまま後方から飛び出した呼人。ロボットの支えとなっていた足元に衝撃を与え、角度をずらしたのだ。

「倒す方向考えろよな！」

前方に行く轟にそう叫ぶと、呼人もまた先へと足を向ける。

『轟の妨害を同じくA組百竜が突破ア!! ヒーロー科入試1位の实力は伊達じゃねえ！

だが今回は、OPをぶっ壊すのはお預けかこの野郎オ!!』

『……壊せば良いものじゃないだろ』

そして、その先行を許さないのが、A組の生徒たち。

「先に行かせるかよ！」

爆豪が爆風を利用してロボットの群れを上から突破し、似た機動力をもつ宵闇と瀬呂

がそれに続く。

「前は任せるぞ尾白」

「ああ、任された！」

尾白と障子もまた、2人で連携して突破しようとしていた。前に出た尾白が前面の敵を押しつけ、目を複製した障子が最適なルートを探る。

A組全員が思考を止めること無く、それぞれのやり方で前を目指そうとしていた。

『さあ盛り上がってきた障害物競走!! 一抜けすんのはどいつだ “ミイラマン”!!』

『……勝負は最後までわからん』

『模範的な解答センキュー!!』

盛り上がる放送と観客席を尻目に、先行する轟とそれに追いつきそうな爆轟が二つ目の障害物に到達する。

『最初の関門はちよろかったか!? なら今度は何もなんたのはどうだ!? もちろん地面もない、つてなわけで第二の関門は『ザ・フオオオオオール』!!! 奈落に落ちたら即アウトの綱渡りだ!!』

2つ目の関門。先程と違って『地面すら無い』障害が、選手たちの目の前に広がっていた。

一方その頃、観戦している教師陣。今日の体育祭においては教師のすることはそれほど無いので、手の空いている教師は集まって競技を観戦していた。

「飛び出すのはA組の子たちですね」

「他の科やB組も決して悪くはない！ だがやはりA組は——」

「立ち止まる時間が少ない、ですね」

13号とオールマイト。あの敵連合襲撃事件を生徒たちと一緒に突破した2人が話していると、セメントスも話に参加してきた。

「良い方向に作用してくれて幸いでした」

「うん……」

全体を見ながらもオールマイトの目は、定期的に緑谷の方へと向く。2人の関係上当然のことだった。

「しかし、先頭の2人は予想通りの活躍として、3番目の彼、百竜くんは何故個性を使わないんでしょうか」

「確かに。彼の個性ならもっと早く走れるだろうね」

セメントスと13号の会話に、オールマイトは先日基礎学の授業後の百竜との会話

を思い出す。

相澤と校長と共に検証記録を再現させてもらったと伝えた後、自分は気になったことを尋ねる。

『百童少年はすでに制御できてるものも多いだろうに、何故全力で使わないんだ?』

他の生徒に聞こえても問題ないようにぼかして尋ねた自分に、彼は答えた。

『人間って、個性なんてなくても凄いですよ。ただ剣や弓だけで、俺がなれるようなモンスター達と戦って、討ち取ってきた。だから、個性が強くなければ駄目だっていう風潮にケチをつけてみたいだけです。ただの人間でも、個性が弱くても、戦い方を工夫すれば、たゆまぬ努力をすればこれぐらいのことは出来るんだ、って。今は廃れちゃってるけど、個性が出てくる前の格闘技とか、武道とか、ホントに凄いです。まあ俺のくだらないこだわりなんで、使う時は使いますよ』

他の教師にその答えをそのまま伝えてしまうのは、彼の個性が秘匿されている以上はばかられる。だがオールマイトは、その答えをとて美しいものだと感じていた。

「彼は、人間が凄いいろことを他の生徒達に見せつけてやりたいそうです」

「人間が凄いいろですか?」

「ええ。『個性が強くなければ駄目だ』という風潮にケチをつけてやりたい。ただの間でも、個性が弱くても、たゆまぬ努力をすればこれぐらいのことは出来るんだと見せ

つけてやりたい』と言っていました。個性が出てくる以前の武道や格闘技についても詳しいようですから、彼は『個性を除いたただの人間』の可能性を、示そうとしているんだと思います」

「……それを、彼のような個性の持ち主が言っているのが面白いですね」

まだまだ制御する余地を残した個性。それを持つ彼が、個性の無い人間の可能性を謳う。そんな大きな矛盾を孕んだ理想。

「思えば、私達は個性が出現して以降個性を効率的に使うことばかり考え、それまで培ってきたものを失っています。彼は、それが気に入らないんでしょう」

それはおそらくは、モンスター達と対等に渡り合ったという人間の「強さ」を知っているから。だがそれは、まだ彼らには秘密だ。それでも、オールマイトにはそれが少し嬉しかった。

自分はヒーロー足らなければならぬという自負がある。だが、彼の理想は、『人間はヒーローなんていなくても強く生きていける』というものだ。人々を愛するオールマイトだからこそ、そんな自分には無かった考えが、新しく、少し嬉しかった。

第18話 雄英体育祭・3

『さあ先頭の轟とA組爆豪が『ザ・フオール』を突破したあ!! 他の選手はどうだ!?』
続いて器用に綱を渡っていくA組蛙吹と蔓で体を支えるB組塩崎! そのすぐ後ろには、
腕力だけで綱を渡っていく百竜!! —— 流石に疲れたかペースが落ちてるぞ!!』

百竜は、綱に両手でぶら下がったと、そのまま両手を交互に前へ出してどんどん進んでいた。

綱渡り、というのは一応したことがあるのだが、如何せん滑りやすい靴でやったこと
はない。ここまで『個性の使用無し』で走ってきた呼人は、それを貫くために腕力で渡
り切るという選択をした。

本当はもつとやりやすい方法があったのだが、いちいち綱を切断しないと使えない手
なので断念した。妨害行為で失格は嫌だった。

「はっはっふう。……流石に疲れてきた」

呼人は体を鍛えた結果相当の筋肉がついて体が重いために、距離が長いと疲れる。跳
躍で渡れそうなどは無理して跳躍で渡ってきたので残りはわずかになっているが。

そうこうしている間に、先に行っていた蛙吹他数名が突破した。

「よしつ、行くか!」

呼人も再び綱にぶら下がり、先へと進んでいく。

その頃先頭の2人は、すでに次の障害へと到達していた。

『早くも最終関門! 一面ただのグラウンド! しかしその実態は一面全部『地雷原』!!
『怒りのアフガン』だ!! 地雷の位置はよく見ればわかるようになってるぞ!! 注意
力を無くすなよ!!』

先頭を行く轟は足元を一つ一つ確認しながら抜けていくが、爆発の利用で宙に受ける爆豪がその隣を抜けていこうとする。

「宣戦布告する相手を間違えてんじゃねえぞ半分野郎!!」

『ここで先頭が変わる——!! 確かにこの障害は爆豪の方が有利だが轟も食い下がる!!
終盤に来て熱い展開だああ!!』

爆豪が空中から突破して行こうとする一方、轟がその腕をつかんで活かせまいと妨害し、先頭の2人の侵攻ペースが下がっていた。

そして少し後。後方での巨大な爆発音と共に2人の頭上を一人の選手がすつ飛んできた。

「地雷原……爆発しても怪我はしなさそうだな。ちょっと衝撃と音がうるさいぐらい……なら強行突破だ」

およそ10番目に『怒りのアフガン』に到達した呼人は、すぐにどんな障害かを確認すると地雷原へと突っ込んだ。そして、きっちり地雷を踏み抜いた。

爆発によって体にかかるとそれに逆らわず、転がるようにして前に進んですぐに立ち上がる。その流れをよどみなく繰り返し、前を行く選手たちとの差を埋めていく。

『後続も追い上げてきたあ!! 追いついてきた百竜は爆風の中を強行突破中!! しかし速えなおい!! だがやはり引つ張り合いながらも前に行くこいつらが速え!』

(流石に個性を移動に使えるやつは速いな)

直後、後方から大きな爆発音がして頭上を何かが吹っ飛んでいく。呼人の目は、爆風で視界があちこちへと跳びながらもそれをしっかりと見据えていた。

それ。すなわち仮想敵の装甲板。

(うまい手を使いやる!)

上空を吹っ飛んでいくそいつは、おそらく呼人がやっていることを大規模にやり、その一撃で大幅な飛距離を稼いでいるのだ。

『後方で大爆発!! しかもこいつはわざとだA組緑谷爆風を利用して猛追している——
—!!?』

プレゼント・マイクが叫んだ瞬間、歓声が盛り上がり、更に緑谷がもう一度爆発を利用して最終関門を一番に突破した瞬間、それは爆発した。

装甲板で爆風を受けきれないと判断した緑谷は、普通は忌避するはずの地雷をあえて集めて起爆させ、その爆風を受けて一気に加速していた。

『見たかよりスナー達この大逆転劇!! 一番にこのスタジアムに戻ってきたのはこの男!! 誰が予想できたか緑谷出久だあ!! 更に轟、爆豪!! 少し遅れて百竜が戻ってきた!! お前のクラスは一体どういう教育をしてんだイレイザー・ヘッド!』

『俺じゃねえよ。あいつらが勝手にたきつけあつてんだろ』

結局4着で戻ってきた呼人は珍しく前傾姿勢になって項垂れていた。酷使していた肩と背中を休ませているのだ。少し休めば回復するが、連続使用では疲労は溜まってしまふ。

「1位は緑谷か。個性は使わなかったんだな」

緑谷は個性を使う度に暴発させて故障している。だが今負傷していないとなると、今回の競争を個性抜きで突破したことになる。それは、呼人がやってみせようとしたことを地力で上回ったことをしめしていた。

「俺がやらなくても良かったな」

個性抜きでの勝ちを取りたいと思っただが、それは他の選手に達成されてしまった。自分の体の鍛え具合もしっかり確認できた。恐らく明後日ぐらいには更に背中や腕が成長しているだろうが。

「ぬおー負けた。意外と悔しいなこれは」

勝ち負けには興味は無い、なんて轟には言ってみせたが、いざやってみるとこれである。競うというのは、存外楽しいものなのだと実感していた。

「結果がモニターに表示されるわよ！　しっかり見なさい！」

モニターに突破した順に42名分の結果が表示される。42名。それが予選通過を果たした選手の数だ。A組は個性の使いすぎでお腹が非常に痛そうな青山を含めて全員が通過している。

そしてこれはまだ終わりではない。本選はここから先――

「落ちちやった人もまだ見せ場は用意されているわ！　安心しなさい！　そしてこれからがいよいよ本選！」

そうミッドナイトが宣言すると、モニターの表示が切り替わる。

「第二種目は、騎馬戦よ！」

『騎馬戦』。人間で騎馬を組んでその上に騎手役が乗り、はちまきを奪い合う種目。本選が個人戦ではないことに選手がざわつく中、ミッドナイトは説明を始める。

・1チームの人数は2〜4人で固定ではない。

・ルールは通常の騎馬戦に準拠。

・ただしハチマキを奪われても崩されても負けにはならず組み直して良い。

・ハチマキはただ枚数ではなく順位に応じたポイントがそれぞれに割り振られる。

・悪質な崩しは禁止。違反した場合は一発退場。

「んーつまりハチマキ奪って回ればオーケーってことか？」

「まあそういうことだね。でも一人じゃないから、好き勝手に動き回っちゃ駄目だけど」
「それまた難儀な」

ハチマキを奪おうが崩そうがチームが減らない以上、奪われたチームは一切の守りを捨ててハチマキを奪いに来る。ただ奪うだけでなく、戦略が重要になってきそうだ。

そして、さらなる爆弾は最後に投下された。

「ポイントは下から5ずつ増えていくわ！ だけど1位だけ別格の1000万ポイントよ！」

「えっ——」

その言葉に皆耳を疑うが、ミッドナイトは繰り返す。

「1位のポイントは1000万ポイント。上に行く者には大きな受難を。もう何度も聞いてきたでしょう！ これがPlus Ultraよ！」

ミッドナイトの言葉に、その場の全員が殺気立った目を緑谷へと向ける。

そんな中呼人は、隣にいた尾白に小さな声で話しかけていた。

「これ如何に1000万に関わらずにいいところ取りするかじゃないのか？」

「……確かに、それもありかもしれないね」

2人が静かに意見交換する中時間を追うことに周りの殺気は増大。殺伐とした空気が漂い始め、緑谷の冷や汗が凄いことになっていた。

「チーム決めの交渉時間は15分！ 今からスタートよ！」

「じゃ、また戦場で」

「戦場って。それじゃあ、試合場で会おうか」

と言って別れたものの。正直呼人は組む相手がない。障子と尾白は、むしろここで

は対戦しようという話になったため別々のチームを組むために離れている。最悪、誰でも良いので肩車乗ってくれるやつがいれば――

そう考えていた所で、声をかけてくる者があつた。

「あんた、入試1位だったんだな」

「ん？ 宣戦布告の――」

かけられた声に振り返り、見覚えのある顔に答えようとした瞬間、呼人の意識は体を離れ、気がつくとモンスター達の前にいた。

「あれ、俺何でここにいるんだ？」

「」

「まじか。そんな個性があるんだな」

モンスター達に推測されることを説明をされた所で、モンスターの中でも先生役であるクツクに強烈なデコピンをかまされ、呼人は目を覚ます。

「あー効く。お前の個性エグいな」

顔を上げると、驚いた顔の宣戦布告の生徒が立っていた。

「……何で目覚めた？」

「知り合いが——」

再び意識が体を離れ、そして再び引き戻される。

「おい普通に話してんのに個性使うなよ」

「……わかったよ。で、何であんた効かないんだ？」

「……秘密にしるよ？」

宣戦布告の生徒が頷いたのを確認して、呼人は情報をはぐらかして説明する。

「個性の都合上か俺の中には別人格があるんだ。そいつに叩き起こされてる感じだ」

「……そういう相手にはきかないのか」

「さあな。まあ俺は効くけど叩き起こされてすぐに戻ってこれる。で、悪いけど後ろの

そいつもお前がひっかけてるのか？」

後ろのそいつ。ぼうつとした表情の尾白を指差して呼人が尋ねると、宣戦布告の生徒

は小さく頷く。

「なら一回起こすぞ。話はその後聞く」

「……話ってなんだ」

「騎馬組もうって話じゃないのか？」

そう当然のように聞き返す呼人に、彼は驚いた表情を見せた。これまで彼の個性を知った人間は、皆それを忌避してきたのだ。

「洗脳かけたのに、協力してくれんのか」

「俺もどっちにしる騎馬組まなきやならんからな。それに個性を使うのはありなんだろ」

「……」

その生徒が衝撃を受けている間に、呼人は尾白を起こす。自分がされたように強烈なデコピンをお見舞いすると尾白も目を覚ました。

尾白が目を覚ました所で、改めて呼人は男——心操人使に説明を求めた。

「……2人ぐらい洗脳して騎馬になってもらおうと思っただけだ」

心操は障害物競走も、その『洗脳』という個性を使つて複数の選手を洗脳して足場代わりなどに使つて突破していた。

「なんで普通に頼まなかつた？」

「頼まれても知らない相手なんて断るだろ」

「まあ確かに、組むなら知ってる人が良いね」

心操の個性によつて洗脳をかけられていたことを呼人から聞いた尾白は憤慨したが、

個性を使うのが当然だという呼人の言うことも理解できたので、少し許せないところはあるものの、とりあえず話を聞くことにしている。

「俺は別に組んでも良いけどな。誰と組みたいとか無いし。というか10000万から離れてうまく稼げる相手に乗ってくれば誰でも」

「百竜……身も蓋も無さすぎだ」

極論誰が上に乗ってもやることは変わらない！ と堂々と言い放つ呼人に、尾白が苦言を呈する。

「……あんだ、変わってんな」

「何がだ？」

「こんな個性、卑怯でヴィラン向けのそれだぞ」

そう静かに言った心操の胸元を掴み、呼人は彼を引き寄せる。隣で尾白が制止していたが、無視した。

「なんか遠慮してると思ったら、お前自分の個性が嫌いなのか」

「そういうわけじゃない。離せよ」

「ならなんでそんな言い方をする」

「それは事実だろ。ヴィラン向けだったのは」

「それは嫌ってる言い方だろうが。てめえがてめえを好きにならねえでどうする。お前

はその個性でヒーローになるんだろうが」

声を抑えた呼人の叫び。その言葉に、心操は目をまたたかせた。

「……ああ。俺はこの個性でヒーローになる。だから離せ」

「……よう」

心操が言ったことを理解はした様子を示したので、呼人は手を話す。これ以上の問答は時間が足りないし、納得するのは心操自身のするべきことだ。

心操は、呼人の言葉をすぐには認められなかった。自分の個性はこれまでずっと、周りにからそう言われてきた。だから自分は、なりふり構わずにヒーローを目指すのだと。だが、その個性を否定しないやつが現れた。

「……それでどうするんだ」

「俺はお前と組む。尾白は？」

少しの沈黙の後、心操が口を開く。それに間髪入れずに呼人は答えた。一方尾白は苦笑いをしている。

「話聞いている間にみんなチーム決まっちゃったからね。俺も組むよ」

「なるほど」

「半分ぐらい百竜のせいだからな」

そう茶化すように言った後、尾白は真剣な顔で心操の方を見る。手を組むことは決め

たが、まだ許したわけではない、と。

「でも、これだけは言っておきたい。同じチームとして活動するのなら、利用するんじゃないやなくて信頼してくれ。そうすれば俺達も心操の信頼に答える」

騙すのは、卑怯な手にかけるのは敵だけ。味方とは信頼しあい、互いの事を知り、力を合わせる。それがチームのあるべき姿だ。

「……考えたことも無かったな」

心操にとつて、味方とは利用するものであつて信頼するものではなかつた。

「じゃあ今から考えてくれ」

「……わかつた」

「使うと言つても、洗脳して無理やりやらせるだけが使うじゃないからな。味方をうまく乗らせてやる気にさせた方が遥かに効率が良い。そういうもんだ。だから結局、信頼して信頼させるのが一番効率が良いんだよ」

「……あなたは、俺よりもたちが悪いな」

せつかくの尾白の良い話の後にろくでもない事を言う呼人に、心操も少し引いている様子だ。

「うるさい。それよりとつとと作戦会議だ。どうせお前が騎手だろ？ 一番貧弱だし」

「あんたに言われてから鍛えた。けど、流星にあんたらよりは弱いから上に乗せてくれ」

「百竜言い方」

尾白に咎められるが、呼人は少し心操を見直していた。あのときああは言ったが、それをすぐに実行してくるとは思っていなかったのだ。よく見てみると、心操の貧弱だった腕には少しだがトレーニングの跡が見えた。

「……すごいなお前」

「あんたらと違って個性使った訓練は出来ないからな。出来る事をやっただけだ。それより作戦だが、一応考えてる。というより状況見て動かすから聞いて動いてくれ。もともと洗脳した相手は動きがしょぼくなるから、それに合わせるように考えてる」

「具体的には？」

信頼する、の言葉通り、心操は自分の個性の一端を明らかにした。だから、尾白と呼人も真剣にそれに答えることにする。

「後半だ。前半は適当に流して、後半、特に最後に他チームの騎手を洗脳してうまいことハチマキをもらう」

このルールでは最終局面にどれだけハチマキを持っているかが重要になり、途中で大量に所持している事は意味をなさない。それを理解しての作戦。心操は、頭の回転においては相当のものがあつた。

「わかった。なら俺が後ろだね。後ろからくる攻撃を尻尾で弾ける」

「作戦は理解した、が、どうだろうか。俺はA組じゃあ少し目立ってる。順位も4位になってるし、狙われるんじゃないか？」

そう呼人が懸念を口にするのと、心操がその目を正面から見返す。微塵も笑っていない、そして卑屈さなどかけらもない、ただ何が有効かを考える、策士の目。

「それぐらいいなしてくれるんだろ。信頼してるぞ」

信頼しろって言っただろ？ と、そう心操は言う。それはもはや信頼ではなく脅しだ。『俺はお前がやれると思ってる。だからやれよ』と。強力な信頼は、時として一番大きな重圧となりうる。

だが、それに呼人はニヤリと笑って答えた。

「当たり前だろうが。俺と尾白が思い通りに動けるならしので見せる」

「だから目立つなよ。あんた目立ちたがりだから心配だ」

「確かに……」

「おい尾白納得してんな」

作戦は決まった。

即席だが、悪いチームではない。仲が良いというわけではないが、確かな協力関係が構築されていた。

第19話 雄英体育祭・4

時間となり騎馬を組み始める中で、心操が2人に新しい指令を伝える。

それは、絶対に指示に従うこと。例え『ハチマキを取られそうになつたとしても』。

尾白は反論しかけるが、心操の信じろの言葉に自分の言葉を飲み込む。チームのブレインは心操だ。そう、チームで決めた。なら、それを聞くのが自分のすべきことだと、そう尾白は確認する。

呼人のように割り切れるわけじゃない。洗脳をかけられたのは許せないし、洗脳はずるいと思う。でも、呼人が言ったとおり、それは彼の個性なのだ。自分が尻尾を使うように、呼人がモンスターに変身するように、彼は人を洗脳する。呼人との短い会話からでも、彼が何か鬱屈した感情を抱えているのがわかった。

だが、それらは今は関係ない。チームを組み、彼に上を託したから彼に従う。そうあるべきなのだ。自分たちは仲良しゲームのためにここにいるわけじゃない。

「よし、行こう百竜、心操」

「おう」

「……当たり前だ」

騎馬を作っている最中から互いに戦力の見定めは始まっている。やはり注目を集めるのは、1位緑谷の騎馬。騎手として緑谷が乗り、その下に麗日、常闇、サポート科の発目が騎馬を組む。

そして2位轟と3位爆豪も騎馬として3人揃え、最大人数の4人騎馬。それもA組のメンバーばかり集めて、連携の出来る戦力を揃えてきている。

そして2チームが狙うのは当然1位の緑谷、1000万ポイント。

「ぶっ潰すー！」

「全部俺が取る！」

その意気込みや十分。緑谷の騎馬だけでなく、他も圧倒して優勝する気満々だ。

「百竜は———どういふことだ？」

一方、皆の注目を別の意味で集めたのは、4位、百竜の騎馬。いや、正確には百竜の騎馬ですら無い。上に乗るのは、ヒーロー科ではない人間。彼の实力を考えるとあまりに不自然な人選で。

それが周囲の疑念を掻き立てた。

「百竜が普通科を乗せてる？　なんかあるね」

「あのチームからは目を離さないでね！」

耳郎と葉隠は、百竜の普段を知るゆえに。

「百竜さんは油断出来ませんわ」

「ああ。だが都合だ。あいつが下にいるなら潰せる。頼んだぞ上鳴」

「ああ、才能マンには負けねえ！　百竜に効かなくても他の2人に効けば騎馬は止まるぜ」

轟と八百万は、得体の知れない相手として。

それぞれに警戒する事を念頭に置く。

一方、それを良いチームを組むことが出来なかったのだと侮る者たちもいた。

「4位は脱落、と。早い段階でハチマキをもらっておこうか」

「ああん？　4位のやつがらしくねえこととしてやがるぞ！　良いのは威勢だけみたいだなー！」

そして当の心操騎馬の面々は、少しばかりの誤算を感じていた。

「あんた、思ってた以上にヘイト高いな」

「いやー、個性使ってないのに調子乗って走ってたら4位になってたんだよ。こういうルールってわかってたらもう少し順位落としたんだけどな。まあ、身体能力の限界値も

試したかったし」

「……やっぱあんたすげえよ」

「は？」

百竜の疑問に答えず、心操は内心笑う。自分の個性は、とてもヒーロー向きなものではないと思っていた。だからその個性をさながらヴィランのようにすら使っても、『なりふりかまわず』ヒーローになつてやると。

だがこの百竜というやつは、個性を全く使わないで、鍛え抜いた自分の体だけで、化物ヒーローの卵共が集まるこの体育祭で個人種目4位を取ったという。諦めていた自分を笑うかのように。

「……序盤はばれない程度に情けないふりをしろ。ついでにハチマキも取らせる」

「あいさーリーダー！」

「演技、苦手なんだよな……」

また難しい注文を、と尾白が引きつった笑みを見せる。それならまだ、必死に逃げ回つて捕まるなという指示の方がやりやすかった。

「バレたつて問題ない。細かいやり方はそっちに任せる」

心操は、『完璧に演技で騙せる』などとは思っていない。ただ、騙されるやつと騙されないやつ、意識するやつと意識してないやつ、それを見定めるのが自分の役目だ。

(俺は——ヒーローになる)

『行くぜエビバデイ!! 一瞬たりとも目を離すな!!? ——スタアアアアト!!!』

プレゼント・マイクの、試合上での合図に合わせた放送とともに、第2種目、騎馬戦が幕を上げる。

最初はうまく動けないふりに徹するため個性を使用せず、尾白とともに適度な速度で試合上の端の方でフラフラしている。それが心操の指示通りの動き。外縁からどのチームの連携が良いか、そしてどのチームが何ポイント持っているかを、逐一把握していく。

刻々と変わる戦況に、だが心操の頭脳はその全てを把握しようとしていた。

一方試合上の中央付近では、すでに試合が大きく動き始めている。狙われるのは当然

「実質その奪い合いだおらあ!!」

「はっはっはっ——! もらっていくよ緑谷くん!」

開始直後に至近にいた2チームが、緑谷の騎馬へと群がる。これを、緑谷達は急いで

引き離さないとまずい。

「右方向に逃げるよ!」

「承知。ムツ——!?!」

「足元が沈んでる!?!」

その原因は、緑谷を狙っている騎馬の一方、鉄哲の騎馬の一人。B組の推薦組——すなわち轟や八百万と同格の“骨抜”の個性。

緑谷チームの足元が、ぬかるみにハマったように沈んでいく。

「あの人の個性! 麗日さん、発目さん顔そらして!」

直後。麗日の個性によって軽量化された緑谷の騎馬が、まるごと空を飛んだ。

サポート科発目の開発した『ベイビー達』だ。

「どうですか私のベイビーは!?!」

非常に楽しそうである。下からの攻撃は、全方位を防御可能な常闇の個性がカバーする。

だが、着地した緑谷チームにまだ追手は迫る。彼らを狙っているのは、何も最初の2組だけではないのだ。

一方そういったもろもろを、試合上の端からのんびりと観戦している心操一行。狙い

やすい相手が来たと行く先々で近くの騎馬に狙われ、すでにハチマキは残り一つになっている。

「あんたら、というかとくにあんた、知り合いであんたをはつきり警戒しているやつはいるか？」

残り一枚のハチマキを守り、他の騎馬に追手をなすりつけながら観察を続ける心操が前側の騎馬の呼人に尋ねる。

「轟、というより八百万が警戒しているな。轟は俺に負けねえと宣言してたから見ているだろうが、警戒という意味では少し薄い。後はあの透明の騎手がいるところと、でかい男が一人いるところは——」

「障子と葉隠だな」

わかりやすいようにあえて特徴で説明した呼人に、心操はあえて名前で答える。ちゃんと名前ぐらいは覚えてるから心配するな、と。

「そういうことだ。特に障子は俺と尾白が組んでるから警戒すると思う。一応組まないようにするって約束だったからな」

「なるほど」

端的に返した心操は、頭の中で今から駆け抜けるルートを策定する。近づきすぎず離れすぎず、多くのチームに百竜を見せつけてどれぐらい反応するか。

「にしてもあんた、背が低いな。乗りにくい」

「コンプレックスだ黙ってる馬鹿野郎」

騎馬が2人ということもあって、心操はしゃがみ込んでバランスを取っていた。

「よし、一旦中央に突入するぞ。指示のとおり動いてくれ。周りの出方を見たい」

「オーケー」

「流石にちよつと飽きてきた」

「目立つのは禁止だ。なんなら最後の一枚もくれてやって構わない。10メートル左に移動してからまつすぐ突入だ」

心操の指示するままに、2人は横へと移動していき、ちょうど空白地帯になっているところへと突入する。

それに対する反応は様々だ。その突入に気づかないか、あるいは目すら向けられないの。

気付いて目を向けるものの気にする価値なしと目を外すもの。

そして、その突入に反応し、距離を取るように動き始めるもの。

(流石に中から全部見るのはしんどいな)

外から観察しているときと違って、内側へと突入したために視界が遮られ、心操の状況把握も困難になる。だが彼は、的確に移動ルート指示していった。突入する前にすで

にルートは定められており、後は『動いた敵』に合わせて少しずつ変更するだけ。全体を見なくても大丈夫なのだ。

そして残りハチマキ一枚で、どこにしかけるでも無くウロウロと戦場を動き回っている心操騎馬に目をつけたものが数名。

「障子、今なら百竜の騎馬取れるって！ 後一枚しか無いぞあいつら！」

「あと一枚なら必死に守ろうとするんじゃないかしら」

「違えだろ!? あと一枚ってことは、爆豪や轟たちがこっちにいるのに取られてるってことだろ!?!」

「しかし——」

「それもそうね障子ちゃん。どうせ私達も残ってないし、狙ってみましょ」

気づかぬ内にハチマキを失い、すでに失うものが無くなった障子、蛙吹、峰田の騎馬が、近づいてくる心操騎馬に狙いを定めて動き始める。

だが、その前に心操騎馬に襲いかかる別の騎馬があった。

「3時から4時、回避！」

「オーケー」

「背を向けよう！」

フラフラと中に侵入した心操騎馬に狙いを定めたのは、B組学級委員長拳藤の騎馬だ。

「チツ！」

接近される直前に気づき、尾白の尻尾を守りに逃げに回ったものの何か宇宙を飛んで遠距離攻撃をしかけてくる。更に、それをしやがみ込んで腕ではねのけようとしていた心操の体が、何故かその場に止まって騎馬が動けなくなった。

「個性にはめられた。迎え撃つぞ」

「あいよ！」

心操の指示のもと、騎馬を反転して相手を迎え撃つ。と。それを行動に移した瞬間。

後方から伸びてきた何かに、最後のハチマキを持つていかれた。

「10時方向に進め」

だが、ハチマキを取られても心操は動揺することなく次の指示を出す。そしてそれに、呼人も尾白も捨て台詞を吐きながら従う。

「くそつたれ！」

「やられた……！」

ハチマキを取ったのは、拳藤の騎馬に遅れて接近してきた障子らの騎馬。射程距離の長い蛙吹がいるため、距離が離れた位置からでもハチマキを狙うことが出来た。

「やったぜ！ ハチマキゲツト！ 障子、早く囲んでくれ！」
「ん、ああ……」

峰田の言う通り、障子が触腕を広げて背中に乗せた2人を囲う。騎馬1、騎手2。それが体格差を生かした障子達の騎馬の作戦だった。

「障子ちゃん、浮かない顔ね」

「……ああ。百竜が、何か狙っている」

「は!? あんな簡単に取られてるのにかよ!?!」

「峰田ちゃん、この競技は最後にハチマキを持つてれば勝ちなのよ」

どこを指すでも無くフラフラと。まるで何かを「観察している」かのよう。離れていく騎馬が、とても「負けそうな」騎馬には見えなかった。

「……もうあの騎馬には近づかない方が良い」

心操騎馬がフラフラと観戦している頃、他の場所でも大きく動き始めていた。

『1000万に群がる騎馬を轟が一蹴！ まるで取るのは俺だと言わんばかりの所業だ

!!』

『上鳴の放電で動きを止めてから凍らせたな……障害物競走で避けられたのをきっちり活かしてる』

『ナイス解説!! さあ追い詰められたぞ緑谷チーム!!』

プレゼント・マイクの言うように、1000万ポイントをまだ保持したままの緑谷の騎馬に群がる他騎馬を、轟の騎馬が一掃した。

上鳴の放電で痺れさせてからの、轟の氷での固定。

その間に緑谷の騎馬は逃げようとするが、先頭に飯田を据えて機動力を確保した轟の騎馬の方が速い。

動きを止めた騎馬からハチマキを奪ったことで轟は十分なポイントを獲得していたが、狙う手を休めることはない。

「獲るぞ緑谷!」

「なんとしても1000万こは守り切る! みんな行くよ!」

一方、緑谷、轟騎馬同様1位を獲得するために1000万を狙っていた爆豪騎馬だったが、途中で方向転換して厄介な相手とぶつかっていた。

「ぶっ殺す!」

「わお、怖い怖い。まるでヴィランに襲われてるみたいだ」

爆豪の相手をしていたのは、B組物間の騎馬。漁夫の利を狙って1000万を取ろうとする騎馬のハチマキを奪って回っていた彼らだが、物間の煽りが爆豪にクリーンヒットしたために爆豪騎馬と相対することになっていった。

だが、物間は余裕を崩さない。なぜなら、自分が個性で“負けることは”無い。

「よし、そろそろ行くぞ」

残り時間は一分を切っていた。緑谷、轟騎馬は、轟の囲った氷の中で1対1のバトルを繰り広げており、観客の目もそこに釘付けた。

序盤にはまだ注意を集めていた百竜だが、存在感を消すことに徹していたおかげで完全に注目は他へとそれていた。もはや心操騎馬を見る相手はいない。

「大丈夫なのか？」

「ポイントが良い具合に集まっている。大丈夫だ」

そして、心操の合図で騎馬が動き始める。すでに狙いは定めた。後はきつちりはめるのみ。

足音を立てすぎないように、そして警戒されすぎないように、着実な足取りで側面か

ら狙う騎馬へと接近する。

そして心操が、声をかけた。

「なあ鉄つぽいあんた」

「あ？」

躊躇なく心操の声に答えた目的の騎馬の騎手、鉄哲は、あっさりと心操の洗脳にかか
る。

「かつこいい個性だな。そこの蔓つぽい個性のあんたも、良い個性だ」

「？ ありがとうござい——」

「先頭のアんたはものを柔らかくする個性か？」

「教えると思——」

「後ろのアんたは、どういう個性だ？」

「お前、なんでそんなに話し——」

狙ってくる気配の無い心操騎馬に、警戒はするもののその問答に、騎馬の塩崎、目抜、
泡瀬も答えてしまった。そして全員が心操の洗脳下に入り、動きを止める。

「よし、近づけ」

「ほんとに初見殺しだよ心操の個性は」

説明を受けた時点で、そして自分が問答無用で洗脳下におかれていたために尾白は彼

の個性の厄介さを認識していたが、改めて見るとその凄まじさを実感する。ほとんどの
ヴィランは、彼に声をかけられた時点で終わりのようだ。

そんな彼が、普通科にいる。試験の形式仕方ないとは言え、それが尾白には不思議
だった。

そして、終了のホイッスル。

『TIME UP!! 試合終了だ!!』

第20話 雄英体育祭・5

『早速上位4チームを見ていくぜ!!』

時間切れで皆が動きを止める中、プレゼント・マイクの放送が響く。

『1位は1000万をゲットした轟チーム! 2位爆豪チーム! 3位鉄てじゃねえ、3位心操チームウ!!? ずっと最下位付近にいたんじゃねえのか!? そんなで4位、緑谷チーム!! 1000万は奪われたが見事4位! 以上4組が最終種目に進出だああ!』

そのアナウンスに、尾白と呼人は拳を打ち合わせる。そして2人が心操の前に拳を出す。嫌そうな顔をしながらもそれに自分の拳を打ち付けてくれた。

「結局、どういう作戦だったんだ?」

「……決勝は例年1対1のトーナメントだ。だからトーナメントの人数、8じゃ少ないから16人が本選を突破できる。後はそれに合わせて、ポイントを稼いでる騎馬を確認してた。轟と緑谷つてところの騎馬がポイント持ち逃げして引きこもってくれたから数えやすくなった」

「数えるつて、それぞれの奪い合いを全部見てたのか!?!」

「おおよそだ。どうせ裏返されてるハチマキの数字なんか見えねえが、枚数とポイント

ならなんとなくは把握できる。まあ、もっとポイントが散らばってたら、もっと早めに動いてたけどな」

つまり、序盤にハチマキを失ったのも、最後まで動き出さなかったのも、全ては戦況を判断してのこと。それだけ心操は、戦場を見ていた。戦場が、見えていた。

「あんたらも、使いやすかつたぜ」

呼人の言葉の意趣返しのように言う心操に、呼人は思い切り笑ってみせる。

「だろ。人を使うなんて別に悪いことじゃねえよ。ただ雑に使ったら反感買うだけだ。最大限にうまく使えば良い」

「俺は、あんまりその言い方は好きじゃない。でも確かに、司令塔にとっては、部下は駒なんだな」

「……普段は、あんたらみたいな使いやすい味方なんていない。決勝で当たらないように祈ってる」

そう言うとき心操は、背を向けて2人から離れていく。個性がバレている相手と今やつても、通用しない。それは心操自身が一番、わかっていた。

（百竜呼人。俺は——個性だけじゃなく、俺の全てでヒーローになる。俺の個性を初めて破ったあんたに教えられたのは癪だがな）

「何か、凄いやつだったな」

「お前最初は、あいつの個性をずるいつて思っただろ？」

去っていく背中を見送りながらの直球な呼人の問いに、尾白は苦笑いを見せる。

「最初は。でもよく考えたら、百竜や轟もよっぽどずるだ」

「まあ、そういうことだ。あいつは多分、強くなる」

目がギラついていた。そして呼人が、はつきりと道を示して見せた。後は、そこを突き進むばかり。

「やられたな。最後に狙っていたのか？」

2人が退場口へと歩いていると、後から追いかけてきた障子と蛙吹が合流する。

「一応俺は、選手宣誓とか障害物競走とかでそれなりに目立ってたからな。あと悪いな。

結局俺らだけ組んで」

「……尾白もお前とは戦いたがっていた。何か理由があるんだろ？」

「まあ、話してらうちに騎馬組む相手がいなくなってた、つてただけだな」

「どうせ百竜がなにかしたんだらう？」

「それは待てどういう意味だ」

いつもの、周りは見えているくせに割とよく周囲を巻き込んだり思いつきを実行した

りする呼人を知っている障子は、どうせ尾白よりも原因はお前だろうと当たりをつけていた。あながち間違いでもないし尾白が周りを巻き込む人間ではないので消去法でそうなるのはわかるのだが、だからといって釈然としない。

「百竜ちゃん尾白ちゃんちよつと良いかしら」

「何、蛙吹さん」

以前蛙吹からクラスの皆に『梅雨ちゃんと呼んで』と言われたことがあるが、尾白はぶれない。というより、女子の名前をちゃんづけで呼びきれない。

「騎馬戦の作戦は2人が考えたのかしら」

その2人が聞かれたくないところをついた問いに、尾白と呼人は顔を見合わせる。それが心操の成果である以上、彼に無断で彼の実力を教えてしまうのは気がひけた。とはいえ、嘘をつくわけにもいかない。

「上に乗ってた普通科の人に考えてもらった。頭が俺達より良かったからな」

「そう。最後あんな綺麗に取ったのは、あの人の個性かしら」

「……それは答えられない。俺達だけの戦果じゃないんだ」

「……そうね。不躰だったわ」

尾白は答えはしなかったものの、蛙吹にとってはそれで十分答えである。何より、2人の個性にそんな力は無かった。

結局、騎馬戦後の注目は全て激戦を繰り広げた緑谷、轟、爆豪の騎馬に集まっていた。心操、尾白、百竜の騎馬の動きを追っていたものはおらず、後から見返そうにも生放送もそこを撮っていないかったため、実質見返したのは、相澤やオールマイト、プレゼント・マイクなど少数の教師陣だけであった。

特に相澤とマイクは、百竜の不可解な活躍が気になったため、昼食そっちのけで映像を見に来ていた。

「おいおいこいつは——」

「……データを送ってもらった。やはり合理的じゃねえなああの試験は」

だが、2人の注目は百竜からすでに別の生徒へと変わっていた。

相澤が隣で驚愕の表情を見せるマイクに見せたのは、一枚の用紙。

心操人使のデータだ。

ヒーロー科入試と普通科入試を両方受験。ヒーロー科は不合格となり普通科に通っているが、その個性は特異。個性だけで言えば、確実にヒーロー科に在るべき人材である。

「お前、放送でこの個性のことはつきりとは言うなよ」

「OH、確かに知られた時点でアウトな個性だな。口が滑らねえように気をつけるぜ」
気をつけるが言わないとは言っていない。もしそっちの方が盛り上がると判断したら、それを選びかねないのがプレゼント・マイクというヒーローだ。

当のプレゼント・マイクは、心操の映像から目を外して、今度は百竜を改めて見始める。

「しかし、百竜は何でいまだに個性を使わねえんだ？」

「……使ったら服が破けるだろ」

「いやあいつなら破けない程度に抑えて変化させられるだろうが。お前何か知ってるのか？」

「……さあな」

こうなつた相澤は、ここでも口を開かない。それを知っているマイクは、深々とため息をついた。

「実況しづれえ奴が多いな今回は」

プレゼント・マイク。彼はノリよく話すことが多いため、うまく隠しながら話すというのが少々苦手であった。

昼食休憩を挟んでの午後の部。

午後の部はまずレクリエーションから始まるのだが、その前に本戦の種目発表が待っている。

峰田と上鳴に騙された八百万が女子全員をチアリーダーの格好に着替えさせてきたり、それで男子の一部が色んな意味で盛り上がったりと一悶着はあったが、ミッドナイトの説明が始まった。

「それじゃあ、組み合わせのくじ引きをするわよ。けど、その前に。上位4チームからの本戦進出者は全部で15名。1チーム3人で進出してるからね。けどこれじゃあとーナメントが組みづらいので、5位の拳藤チームから一人だけ、本戦への進出を認めます」その説明に、予想していたものは頷き、予想していなかったものは驚きの声を上げる。もともと、どれだけのチームが進出となるかは最初は決まっていなかった。ただ人数を鑑みてそれが決められたただけであり、例えば2人のチームばかりであれば、進出するチーム数は変わっていたのだ。

当の5位、拳藤チームだが、その説明を聞いてなんとも男前な事を言った。

「そう言う事なら……まともに動けなかった私らより、な？」

チームメイトに問いかける拳藤に、彼女のチームメイト全員が頷く。彼女らは確かにポイント的に5位ではあるが、途中で轟に足を凍らせられた1チームであり、試合の後半をほとんど動けないまま過ごしていた。それで活躍したと、彼女たちは考えていなかった。

「最後の方まで上位キープしてた、鉄哲チームの方が良いんじゃない？ めっちゃ頑張ってたし。馴れ合いとかじゃなくて、フツーにさ」

「お、お前らああー！」

その言葉に、鉄哲チームリーダー鉄哲が雄叫びとともに泣き崩れた。彼もまた、情に熱いタイプの人間だった。

結果、鉄哲チーム内の相談で鉄哲の繰り上がりが決定。ミッドナイトもこれを認め、16名の決勝進出者が出揃った。そして進出者によるくじ引きにより、組み合わせが決まった。

第1試合 緑谷VS心操

第2試合 轟VS瀬呂

第3試合 上鳴VS尾白

第4試合 飯田VS発目

第5試合 芦戸VS百竜

第6試合 八百万VS常闇

第7試合 鉄哲VS切島

第8試合 麗日VS爆豪

「芦戸か。嫌だな強酸」

対戦相手を確認して一番、呼人はそう呟いた。芦戸の個性相手だと、特に腕に触るのが難しくなる。救いといえば、芦戸が体操服を壊さないように全身からの放出を出来ないであろうことと、オドガロンの皮膚は人間のそれと比べれば酸に強いということぐらいであろうか。

もともと酸の海がある場所で生活していたオドガロンは、少しではあるがそれに耐性があった。

「よろしくね百竜！」

そう声をかけられてモニターから視線を外すと、隣に対戦相手の芦戸が来ていた。見ると、進出者の一部は対戦相手と話したりしている。対戦相手とはいえ敵ではない。互いに力を尽くし合うライバルなのだ。

その差し出された手を、呼人もまた掴む。

「よろしく、芦戸。本番じゃあ手は触れないけどな」

「ぶーぶー、触ってくれてもいいのに」

いや強酸は痛そうだからいやだ、と呼人は返しながら、芦戸の戦い方を思い出す。彼女はただ溶解性の粘液を放出するだけではなく、その粘度や溶解度も自由に変更し、地面を滑るのに利用していたりもした。単純なように見えてその使いみちは高い。

「それ良い格好だな」

「峰田たちに騙されただけだからね!?　　というかそれ言うともモチちゃんがショック受けるから!」

峰田と同じクラスにいて、段々と人間の女子の可愛いが理解でき始めている呼人であった。

レクリエーションがあると云えど呼人達進出者は不参加の自由があり、呼人含めてかなりの人数がレクリエーションには参加していない。呼人自身は普通に他のクラスメイトと一緒に観戦をしていたが、参加していない選手の大部分はそれぞれにそれぞれのやり方で時を過ごしていた。

不参加を選んだものの、大玉転がしや借り物競走など、自分の知らなかった競技がそれなりに面白そうだったので、来年はレクリエーションにも参加しようと呼人は心に決めた。

そんな呼人の前に、轟がやってくる。

「百竜。ここまで手を抜いてるのか知らねえが、そのままなら俺が優勝もらうぞ」

「……他の連中は警戒しないのか？」

「……俺は負けねえ」

まるで、対戦相手のほとんどは眼中に無いとばかりの轟の言葉。それが呼人には少し腹立たしかつたが、それをわざわざ言うほど馬鹿ではない。

「あっそ。随分と遠い遠い何かを見つめてんだな」

ただ、皮肉を言わないほど賢くはなかった。

「……！ お前に何がわかる」

「知るかよ。お前も俺の過去なんて対して知らねえだろ」

「……ちゃんとした親がいるお前に、俺の気持ちはわからねえよ。俺は、優勝する。優勝して、あの糞野郎を見返す……！」

そう宣言すると、轟は会場から出ていった。その様子を見ていた耳郎と葉隠が、チアガールの格好のまま呼人のところへとやってくる。

「百竜、大丈夫？」

「ん、ああ、何が？」

そう答えると、見えない手におでこの辺りを触られた。葉隠だ。

「ここ、凄いいしわになってるよ」

「ああ、まあちよつと腹が立つたぐらいだから大丈夫だ」

「そっか。けど、あんま無理しないでよ？ あんただでさえ良くわからないんだから」
「無理はしない。ありがとな」

そう言つて笑う呼人に、2人もほつと安堵の息を吐く。呼人とは仲が良くなった2人だが、それでも何でも出来る呼人とはどこか遠さを感じていた。そんな呼人だからこそ、自分たちの知らないうちに無茶をしてしまうかもしれない。友達として心配だったが、自分で『無理はしない』と言つてくれた。

そんな2人を目の前に、呼人は戦う意志を新たにしていた。

応援してくれる仲間がいる。個性の全てを解放しない、人間の可能性を示す、というのは呼人が自身に課したこだわりであり、枷でもある。それを完全に外す気はない。外すことは出来ない。だが、学校に伝えているところまでは出しても良いかも知れない。残念ながら、体操服が破れるのでその全力もまた出せはしないのだが。

だが、そのために、これまでモンスター達の力を制御する練習をしてきた。例え服と

いう枷があっても、やりようはある。

「強くなりたい、じゃなくて、勝ちたい、ってのは、初めてかも知れないな」

第21話 雄英体育祭・6 百竜VS芦戸

レクリエーションが全て終わり、最終種目が幕を開ける。

『頼れるのは己だけ!! 持つてるもん全部で駆け上げれ!! ガチンコ対決の始まりだ!!』

次に試合に出る選手以外は好きな場所で待機していて良い決まりになっているため、呼人は障子や尾白、耳郎、葉隠、八百万と集団になって座っていた。

「一回戦は緑谷さんですね。対戦相手は、百竜さんと尾白さんと組んでいた……」
「普通科の心操ってやつだ」

呼人が答えた直後、放送でも同じ名前が告げられた。

「百竜と尾白から見てどっちが勝ちそうなの？」

「緑谷には悪いけど、俺は心操が勝つと思う。強さとかそういう次元の話じゃないからな」

「けど心操の個性にも相性はある。実際俺は自力で抜け出したぞ」

「は? そんな方法があったのか?」

先程は伝えなかった呼人の告白に、尾白が驚きの目を向ける。心操の個性は受けてし

まえば終わりだと思っただけからだ。

「特殊な体質だな。それさえ突破できれば——」

「ちよつと待って、なんの話してるの？ 心操って人の個性の話？」

「見てればわかるし、わからないなら秘密だ。八百万はまだ試合が残ってるしな」

そんな話を話していると、試合が始まった。

最初は心操の方から緑谷へと話しかける。

そして直後、緑谷の動きが止まった。

『おつと緑谷が動かねえ!! なんて個性だ心操人使!! 実力差なんて関係ねえ!!』

そして心操が近づいて何事か告げると、そのまま緑谷が背を向けて歩き始めた。その

後ろを少し離れて、心操もついていく。

「案の定ぶっ刺さったな」

「あの個性は、二度とくらくいたくないよ」

すでにそれを経験している2人が静かに話している中、緑谷の奇行を見た他のクラス

メイトは落ち着いてはいられない。

「緑谷さんはどうしたんですの!?!」

「まっすぐ場外に向かつてるよ!」

「何あれ、ちよつと百竜! あんたなんか知ってるでしょ!?!」

耳郎に首元を掴まれてがっくんがっくん揺さぶられている呼人は、『やくめくろく』と間延びした悲鳴を上げていた。

だが、直後状況は変わる。後少しで場外という位置にいた緑谷が、突然巨大な衝撃波を放ったのだ。それを受けて、距離を詰めていた心操は大きく吹き飛ばされる。

(くっそ、イレギュラーが重なるもんだ……！)

これまで一度として突破されたことのない個性だが、今日はすでに百竜に突破されている。そのため、その焦りはあまり無い。

だが、いざという時のために距離を開けないようにしていたにも関わらず衝撃波で引き剥がされてしまった。

「指動かすだけでそんな威力出せるお前が羨ましいよ！」

だが、警戒して緑谷は動かない。原理はわからないが、心操と話すことで自分の体が勝手に動く状態に陥ると気付いていた。

「俺はこんな『個性』だから、お前らみたいな恵まれた人間と違ってまともにスタートも切れてねえ。でもな……！」

「負けるつもりはねえ！」

そう叫んで、心操は自分から走り出す。警戒された以上、ただ話しかけているだけで

は答えてくれるか怪しい。だが、動揺してくれば気を抜くかも知れない。慣れない拳で思い切り殴りかかりながら、心操は話し続ける。

「お前、ヒーローになれるだろ!? そんな個性持つてんだから! だけど俺には、これしかねえ!」

「ああああああ!」

思い切りぶつかって外へと押し出そうとする心操の腕を、緑谷が掴んで外へと投げ出した。投げ出された心操は、場外の地面に背中を強かに打ち付ける。

(くっそ、やっぱ届かねえか……)

負けるつもりはないと言ったが、結局届かなかった。百竜に言われて体を鍛えてきたが、たった2週間じゃ焼け石に水。結局個性すらまともに使い切れなかった。

自分の負けが宣言されたあと、中央で緑谷が話しかけてくる。

「心操くんは、何でヒーローに……?」

「……憧れたんだ。目指すしか無いだろ」

とはいえ、負けは負け。もともと自分の個性はヴィラン向けの個性。それに実力でも、個性をまともに使ってない相手にあっさり負けた。

だが、見ていた者たちの感想は違った。

「かつこよかつたぞ心操!」

「おつかれ心操！ 障害物競走1位の奴といい勝負したじゃねえか!!」

それは、想像もしなかった言葉。自分は、誰になんと言われようと、なりふりかまわずヒーローを目指す。それが、認められるとは思っていなかった。

クラスメイトからの歓声だけではなく、プロヒーローたちが自分を認める声も聞こえてくる。

そしてそこに、別のクラスから百竜もやってきた。

「どうだ心操。なれるだろ？ お前も。——ヒーローに」

ああ。なれるとも。なってみせるとも。人を笑顔に出来るような、最高のヒーローに。

そして心操は、後ろに立っている緑谷を振り返る。

「——結果次第で、ヒーロー科への編入も検討してもらえ。今回は負けたが俺は諦めない。ヒーロー科に行つて資格とつて、絶対にお前らを超えるヒーローになつてやる」

そして、上から満足そうに見下ろしている百竜の方を見上げる。

「お前もだ百竜。俺は絶対お前を超える」

「上がつてこいよ。はやくしないと先に行くぞ」

楽しんで笑う百竜から顔をそむけ、今度こそ心操は会場から退場した。

——心操人使、一回戦敗退。

だがこの体育祭は、彼の未来に大きな影響を与えた。

続く轟と瀬呂の試合は、轟が巨大な氷で瀬呂を氷漬けにしたため一瞬で終わった。轟を場外に押し出そうと頑張ったものの圧倒された瀬呂には、観客席から大きなドンマイコールが送られていた。

第3試合は上鳴VS尾白。この試合は凄まじい消耗戦となったが、結局尾白が勝利した。

試合の流れとしては非常に単純で、上鳴が個性の放電をぶつ放してはそれに尾白が耐える、という展開だ。尾白にもばつちり放電は聞いて体は痺れていたのだが、尻尾の耐久性は本体のそれを大きく越えており、最後まで尻尾が元気を失わないまま上鳴がキヤパオーバーのウェーイ状態になったため尾白の勝ちとなった。

そして第4試合は、試合とは言いながらも飯田をうまく使った発目の開発物の展示

ショーとなり、最終的に発目が降参してショーはお開きとなる。あれは断じて試合などではない。

「さて行きますか」

「百竜、芦戸に怪我させたら許さないからね」

「わかつてますよ、つと」

芦戸との試合に当たってモンスター達の中でも女性の人格をもった奴らが呼人に言ってきたのは、『女の子には怪我させないで勝ちなさい』という、なんとというか、俺の扱い酷くないだろうかというものだった。まあ相手が芦戸とは言え、服の部分には触れるのだから——と思っていたが、胸や尻を触るのは絶対に駄目らしい。それは以前から言われていたので覚えていたのだが、戦う際にも駄目だそうだ。

「あいつ、今敬語使わなかった？」

「使ったね」

「……耳郎の迫力が凄かったのではないか？」

「は!?!」

モンスター達に念入りに注意されて話していたために、咄嗟に敬語が耳郎相手にも飛び出してしまったのだ。

そして呼人は、プレゼント・マイクの放送とともに入場する。

『続いている選手はこいつらだ！ 可愛い花には棘がある、ならぬ酸がある!! ヒーロー科A組!! 芦戸三奈!!』

『そして個性無しでここまで突破!! 入試1位の實力は如何に!! 同じくA組!! 百竜呼人!!』

『おい……』

個性なし、と、彼の個性を知らない人間からすれば知り得ない情報をあつさりとばらしたプレゼント・マイクに相澤が制止をかけるが、すでに遅く場内は騒然とする。

「百竜くん個性使ってなかったの!？」

対面した芦戸も、驚愕した様子でそう尋ねてきた。

「ここまでは適度に勝てばよかったからな。けどここからは、全部勝つ必要がある」

『それでは!! —— 試合、スタアアアアアアトオ!!』

そしてプレゼント・マイクの合図で、百竜は芦戸に向かって飛び出した。

人間の足で、全力疾走。そして途中でオドガロンの力を混ぜ、速度を変える。加速した呼人に、芦戸は慌てて酸を放ってきた。だが、彼女の放つ酸にはそれほどの速度はない。

酸を難なく回避して懐まで入り込んだ呼人に、芦戸は酸を放出した腕で殴りかかる。その腕の先、袖と、芦戸の胸元の服を掴むと、足払いをかけて一気に投げ飛ばす。

そして背中から地面に落ちた芦戸の眼前に、オドガロンをまとわせて爪を発達させた手を突きつける。

「まいったか？」

「——ま、だ！ 負けてない！」

『芦戸が百竜の剥き出しの腕を掴んだ!! 酸まみれの腕で掴まれるなんてゾツとするぜ!!』

呼人の降伏勧告にそう叫び返した芦戸は、両手で呼人の手の露出している部分を掴んでいた。

「手には触りたくないんですよ！」

そして、強力な酸を分泌。その酸に、呼人の腕の、オドガロンの鱗と皮膚が溶け始める。

だが、呼人は芦戸の袖を掴んでいる腕を離さず、顔に突きつけている腕も引つ込めない。どころか、突きつけている腕をさらに変化させ、完全に人間のそれを逸脱した、オドガロンの前足と同じ形状にして、再び芦戸の眼前へとそれを突きつけた。

「まいったか？」

「な、何で!! 酸は!!」

「——まいったか？」

呼人の問いかけに、芦戸は苦悶の表情を浮かべるが、答えない。目の前に突きつけられている呼人の腕。その爪が少し触れるだけで、自分の顔を切り裂かれる。酸も、何故か効いていない。

でも、諦めたくない。

芦戸がそんな考えから動けずにいると、有利であるはずの呼人が手を離して大きく跳び下がった。慌てて起き上がってそちらを見ると、呼人の赤黒い腕が大きくただれているのが見える。

酸は効いていないわけじゃなかった。ただ、呼人がその強靱な腕で激痛に堪えていただけ。

『百竜の腕が溶けたあ!! やっぱり酸がやべえ!!』

プレゼント・マイクはそんな事を言うが、芦戸は百竜の方がやばいと思う。肉を溶かされる痛さは、想像を絶する。それに百竜は少しの間とは言え堪えたのだ。そしてそれだけの時間があれば、自分を倒すことも出来ていた。

でも、そう、百竜は、自分を倒すことが出来ていたにも関わらず倒そうとしなかった。

「百竜、本気でかかってきなよ!」

芦戸がそう叫ぶと、百竜はかすかに笑う。

「なら、本気を出させてみる」

そして、突進。今度は最初からオドガロンの力を使ったダツシユ。一瞬で芦戸の眼前に出現する。しかし、今度は芦戸は手を出さず酸を撒きながら下がることには徹する。

狙うのは呼人ではなく、その足元。弱い酸を足元にまくと、滑つてまともに走れなくなる。

だが呼人は、それを四足歩行に移行することで突破した。

コンクリートの地面に爪を突き立てて地面を捉えると、先程まで以上の速度で回り込む。芦戸も慌ててそれを追うが、足を止めたために自分の足元に足止め用の酸が到達してしまった。

そして、先に足を滑らせたのは、芦戸だった。

「わっ!？」

自分の酸でわずかに体勢を崩した芦戸に呼人は飛びかかると、すぐさま人間に戻つてその頭を掴み軽く揺さぶる。

その一撃で意識を刈り取られた芦戸の体が、酸の上へと倒れ込みそうになるが、それを呼人は優しく腕で受け止めた。正面から受け止めたことで柔らかい膨らみに触れることになってしまったが、不可抗力だ。頭の中で怒る瞬間を今か今かと待ち構えている彼女らには、それで納得してもらうしか無い。

「芦戸さん戦闘不能!! よって勝者は百竜くん!!」

その言葉に、歓声が巻き起こる。

「先生、担架を。一応気絶してるだけですけど」

「そのまま担いで行きなさい。勝者の役目よ」

いや一応気絶してるんですけど……という呼人の声は無視された。ミッドナイトには、呼人の攻撃が全く害の無いものだと思われていた。

そしてそのまま、芦戸を背負って退場する。少女の人格を持つキリンとキリアがお姫様抱っこなるものを提案してきたが、嫌な気配がしたので却下した。名前からしてアウトであろう。

『勝者百竜!! 芦戸を背負って退場!! 意外と紳士じゃねえかこの野郎!!』

マイクのふざけた放送に、会場に笑いが響き渡る。

その頃客席では、何故か不機嫌になった耳郎と葉隠に障子が首を捻っていたという。

第22話 雄英体育祭・7

気絶している芦戸を空きの控室へと運んできた。予備の控室であるため、ここには誰もいない。

「おいてつたらまずいよな」

流石に気絶した相手を置いていくほど呼人も鬼ではない。ただ、いつも何らか携行している本を置いてきてしまったため手持ち無沙汰ではある。

そのため、普段はそれなりの感覚で続けている訓練を高速で行うことにする。

それは、体の一部をモンスターのものへと変化させては戻す訓練。ただ一種類だけでなく、例えば足の骨はオドガロン、腕の骨はイヤングアルガ、背骨はまた別のモンスター、と言ったように、様々なモンスターの力を同時に、そして好きな量だけ制御できるように訓練し続けているのだ。

人間に戻せば全て元通りになるという個性の特性上やっつけられる修行でもある。ただ、昔は骨を変化させた時に足の筋肉を傷つけたり、内臓を変化させた時に接続が崩れたり大変なことになっていた。それをモンスター達の協力を受けて、出来るようにならしているのだ。

普段は命に関わるような場所は避けているものの、ある意味命がけな訓練であることに間違いはない。だが、それだけ呼人は、モンスター達の力を制御しきろうと努力していた。

と。しばらくしたところで芦戸の息遣いが変わったことに気づく。だが、彼女は目を閉じたままだ。そこで呼人は、わざとらしい口調で独り言を言う。

「電氣流してみるか。そしたら目覚ましそうだし」

そう言つて音を立てて立ち上がると、芦戸が大慌てで立ち上がった。

「起きてる起きてる、百竜起きてるから！」

「寝た振りは感心しないぞ」

「あはは、何してるのか気になったからつい聞き耳立ててた！」

いつもよりも更に明るい芦戸だ。

「何か、気になってるのか？」

「え？」

静かに聞いた百竜の言葉に、芦戸は素で疑問の声を出していた。

「いや、いつもよりも明るいからな。何か考えてるんだろうと思つたんだ」

それだけではなく、匂いや動悸、他色々。それで人を探つてしまうのは、呼人のあまりよろしくない癖だ。

「あー、まーそうだね。……うん。気になってる」

そう言うつて深呼吸をすると、芦戸は話し始めた。

「百竜は、さっきの試合本気出してた？」

「……いや」

「だよ。絶対本気じゃなかったもん。でも……私は、歯が立たなかった」

そう言う芦戸の表情は、いつもの底抜けに明るいそれではない。

今にも泣き出しそうな、少女の顔だった。

それを見た百竜は、ガシガシと頭をかく。確かに自分の個性や過去は秘密にはしておきたいものである。だが、人を、友人を泣かせてまで全てを隠し通すべきだとは思わない。

「あー、芦戸？」

「……何？」

「俺の個性の話なんだけどな。昔は今みたいに人間の形にしたり、自分の好きな部分だけ変化させたりとか出来なかったんだ」

悔しいと。そう泣きそうになる芦戸に、呼人は自分の言葉で説明する。こういうときに限ってモンスター達はだんまりを決め込んでいた。

呼人は腕を、まだ溶けた跡の残っている赤黒いものへと変化させる。

「うすうす気付いてると思うけど、これは普通の動物じゃない」

「うん。だってそんな動物、私知らないもん」

「で、昔一回、個性が出たばっかりの頃に制御できもせずに変身して、色んな物を壊したんだ」

「色んな物、って?」

「それはまだ秘密だな」

「何だよ、という顔で芦戸が見てくる、というか実際に口に出しているが、呼人は続きを口にする。」

「その後、多分3歳ぐらいの頃から日本のプロヒーローやってた人に手伝ってもらって、自分の個性で出来ること把握したり、個性の制御したりする練習をずっとしてる。今も、この瞬間もやってる」

「この瞬間、って、今話してるのも?」

「そう。基本的に常時、だな。寝る時は流石に出来ないけど。例えば今右腕、中の筋肉が半分ぐらい変化してる。左足は足の腱。右足は骨。で左腕は皮膚と血管。そんなのを、ずっと繰り返ししてきた。個性を少しでも自分のものにするために」

「そんなの、ずっとって一年が365日で一日寝るのが8時間ぐらいだから???」

その飛び抜けた内容に、芦戸が混乱を来したので呼人は一旦落ち着かせた。

「それで、流石にこうやって人間の形に抑え込むと、完全に変化したときと比べるとどうやっても力が落ちる」

「それは、うん」

「だからただ強くなりたかった俺は、個性を調べるのを手伝ってもらい初めてすぐに、戦うのも鍛え始めた。体はどう鍛えると良いか、どんな技を使ってくる相手とはどう戦えば良いか、とかな。それは流石にずっと練習出来るわけじゃないけど、家に帰ったら毎日やってるし、本読んでる間とか暇な時間とかはずっと頭の中でイメージトレーニングしてる」

「ずっと……」

まあだから、と、呼人は頭をかいて言いたかった事を伝える。

「これで負けてたら俺の10年以上は何だったんだって話だからな」

お前が負けるのは仕方ない、と。とても慰めようとしているとは思えない呼人の言葉に、芦戸はつい吹き出してしまった。

「百竜、それ慰めるつもりあるの?」

「んや……正直なんて言えば良いかわからないし俺は相当鍛えてきた自信あるから『次やったら勝てるよ』とか言いたくはなかったし、なら素直に言ったほうが良いかなと思ってる」

何も出来なかったと悔しがる相手に、俺はこれだけ鍛えたんだから実力差があつて当然だ、とは、普通言えるものではない。

だが、今回はちやんと、芦戸に届いていた。

「でも、そっかー。百竜みたいな人つて上鳴が言うみたいに『才能マン』なのかと思つてたけど、めっちゃ『努力マン』だったんだね」

「大体、個性を使わなくても生半可な相手には負けたくない、つて思つて鍛えてるからな」

「個性無しで障害物競走4位と騎馬戦突破は馬鹿だと思つう」

「そりゃひどすぎるだろ」

だが実際、誰が聞いて信じるだろうか。雄英高校の体育祭で、個性を使用せずに上位に居座る。まるで、個性を忌避しているかのように――。

なぜ、個性を使わない？

「もう一個だけ聞いても良い？」

「答えられることならな」

「そこは良いぞ、つていうところなんだけどな……で、なんで百竜はそんなに個性を使わないことにこだわるの？ 制御できてるんなら別に使つても良くない？」

「くだらないこだわりだぞ？」

「良いから早く」

はあつ、と百竜はため息をついて話し始めた。

「俺のこれ、そのまんま変身したときは、全長13メートル、体高4メートルぐらいのモンスターになる。待てそんな見たような顔をするな。今変身すると体操着が悲惨なことになる。次の演習か何かでだ。……そんな化け物に、個性無しで、ただ剣とか弓で戦いを挑んで、倒してしまうような奴らがいたんだ」

「倒すつて、百竜を？」 百竜「ここにいるじゃん」

「俺が変身できるモンスターのそのもとなつたモンスターだ。で、まあそんな奴らがいるつて知つたら、憧れるだろ？」

「……まあ、たしかに凄いような気はするけど」

「だから俺は、個性の訓練もいつでも使えるように続けるけど、人間としての自分も鍛え抜きたい。そんな凄い奴らみたいにはなれないかも知れないけどな。でも、自分の限界は自分で決めたくはない。まあこんなこと言つてたら、教えてくれてたヒーローにも『戦うことに重きを置きすぎだ』つて言つて怒られるんだけどな」

そう言う百竜は珍しく、子供みたいに笑つていた。まるでその凄いものを自分のもののように自慢するかのよう。

「なんか、百竜つて凄いね」

「そうか？」

「うん。……私はヒーローになりたいんだ。でも、何で、って言われたら……はつきり答えられるかわかんない。でも百竜は、ちゃんとあるって言うか、なんか良くわかんないけど……」

うまく言葉にできない。でも本当に、凄いと思った。何を考えたら、常時訓練し続けたり出来るのだろうか。何を考えたら、そんな強くなるかと頑張れるのだろうか。

自分はきつと、ここに来ていなかったらこんな風にヒーローを目指して努力なんてしていない。

でも百竜は、きつとどこにいたとしても、延々と自分を鍛え続けるんだろう。

「……私、頑張るからね」

「……ああ」

百竜の慰めはとて不器用な言葉だったが、芦戸の悔しさは、たしかにやる気へと変わっていた。

元気を取り戻した芦戸としばらく話した後共に客席へと戻ると、皆が出迎えてくれ

た。主に芦戸を。女子陣が酷いことをされなかったかと。そう芦戸を取り巻いていた。会場へ目を向けるとちようど轟VS緑谷の試合、すなわち第2回戦の一戦目が終わったところであり、すぐに次の試合が控えているために呼人はトンボ返りで控室に戻るこゝとになった。その際、尾白と障子に一言二言言伝をしておく。すると、芦戸が後ろから声をかけてくる。

「百竜ー！ 負けちゃ駄目だからね！」

「無茶を言う。まあ、できるだけやってくる」

この格好じゃあ全力が出し切れない事は言っただろうに。それに、世の中には多分、10年分の、あるいはモンスター達との脳内組み手なんかを含めれば数十年分以上の修行なんか、軽く蹴散らすような奴もいる。轟や爆豪はきつと、その類だ。だからと言って負けるつもりはないが。

「芦戸、百竜となにかあったの？」

「んー、秘密！」

耳郎の問いかけに芦戸はシシシッ、と、いつもの笑顔で笑う。

「あ、ほら試合始まるよー！」

何を話していたのかと問い詰めたかった耳郎と葉隠だったが、芦戸がそう言っただけで試合場に目を向けてしまっただけは無理に聞くことも出来ない。

第2回戦の第2試合では、尾白と飯田が向かい合っていた。個性の能力と鍛えた蹴り技で高速戦闘をする飯田。尻尾を加えた5本の手足で近接戦を得意とする尾白。どちらにしろ、互いに近づいてからの攻撃が主体となる。

そして、プレゼント・マイクの開始の合図。

2人が、激突した。

控室へと舞い戻った呼人は、そこで自分の左手をじっと見つめている轟を発見した。

「……百竜か」

「今やってるのの次、試合だからな」

俺が来てもおかしくはないだろう。そう答える呼人に目を向けることなく、轟は何やら考え込んでいる。

「お前、負けたのか？」

「……見てなかったのか？」

「野暮用でな」

「……負けてはねえ」

だが、勝つてもいない。いや、そんなことはどちらでも良い。そんな顔をしていた。「まあ、どっちでも良いが」

そう言うと呼人は、轟の前まで歩いていく。

「勝つ気がないなら、俺が優勝はもらっていくからな」

「——俺のセリフだそれは」

そう答えた轟は、いつもの無表情に戻ると控室の出口へと向かう。と、わずかに振り返って話しかけてきた。

「……百竜」

「何だ？」

「俺は今お前より……緑谷が怖え」

「何も怖くなりたいたいと思つてやってねえよ」

むしろ逆だ。なるべく力を抑え込んで、人間の社会でも生きていけるように。そのためになるべく低い力でなるべく上手く戦う。呼人の目的はどちらかというところだ。

「……そうか」

轟が怖いと言つたのは、そういう意味ではない。ただ、全力で人を助けるために、内面にまで踏み込んでくるその様が。怖かった。

それ以上何も言うことはなく、轟は控室から出ていった。

「あんな迷った顔で何が出来るんだ全く」

その無表情がまるでどうすれば良いかわからない子供のように見えて、呼人は大きなため息を吐いた。

第23話 雄英体育祭・8 百竜VS常闇 百竜VS爆豪

飯田と尾白の試合は白熱したものとなったが、最終的に尾白の場外で飯田の勝利となった。尾白は尻尾を積極的に生かして近接戦で対抗したものの、飯田を捕らえた尾をそのまま掴んで場外まで投げ出されてしまった。ダメージ的には尾白が勝っていただけに、飯田が上手く勝ち筋を見つけ出したと言える。

そして第2回戦第3試合。

『次の試合はこいつらお互いにモンスターを飼う2人の対決だ!! 常闇踏陰VS百竜呼人!!』

俺それまだほとんどのクラスメイトにもまだはつきりとは言ってないんだけどな……と呼人はぼやくが、プレゼント・マイクは当然知っているわけだし、オドガロンとトビカガチの全容は学校への個性届けで提出されている。それを放送で使わないわけがない。

「お前も、獣を宿すものか……」

「まあ、な。そっちの影ほど便利じゃないが」

2人が短く言葉を交わした直後。

『試合開始!!』

ミッドナイトの合図によって、試合が始める。

最初に動き出したのは呼人だったが、攻撃が到達するのは常闇の方が早い。常闇の個性は、その体に宿した伸縮自在の影のようなモンスターだ。それを自在にあやつって、遠距離から近距離まで攻撃や防御、移動などあらゆることに活用してくる。

それを見た呼人は接近を諦め、常闇の攻撃の回避に専念する。見極めるのはその性能。

いくら常闇の個性が万能に近いとはいえ、その能力に限界値は存在するはずだ。それがどこか。射程距離はオドガロンの力を使っても一足以上、パワーは高い。更に耐久力は未知数。少なくとも人間状態のオドガロンで壊せるものではないようだ。というかそもそも物理的存在なのか不明。

2分ほどかけての結論、常闇の個性の撃破は現状では不可能。

だが、距離をある程度とつての調査でわかった穴もいくつかある。まずモンスターだが、動きは非常に良いとは言え百発百中ではない。当然ながら呼人の動きについてこれず避けられたり、見てから避けることも可能であったりする。

そしてその伸びる速度も、一瞬ではない。少なからず伸び切るのに時間がかかる。

ならば後は、時間との勝負。

「よし、行くか」

極力オドガロンとしての出力を温存して人間の身体能力で交戦していた呼人は、常闇の個性『黒影』ダークシャドウが正面から攻撃を仕掛けてくるのにタイミングを合わせて全身を人間の形状を保ったままオドガロンのそれへと作り変える。

そして正面からの攻撃に合わせて、一気に姿勢を下げてスライディングで黒影の下をすり抜ける。そしてその低い姿勢のまま四足歩行へ移行。黒影が追いつけない速度で走り、回避しようとする常闇の首元を捕まえ、そのまま引きずって二足歩行でダッシュする。

「ぐ、おお……！ 場外を狙う気か……！」

「壊せないものわざわざ相手にするか！」

だが、常闇の事を捕まえ二足歩行に移行したことで当然の如く呼人の速度は低下し、黒影に追いつかれる。追いついてきた黒影は呼人に体当たりをしたりその腕に噛み付いたりして常闇から呼人を引き離そうとするが、幾度も体勢を崩され進路を変えられながらも、呼人はその腕を離さなかった。

そして、場外付近。

「行って来い!!」

常闇の首元を掴んだままの呼人は、掴んだままの左手でスローイングをするように常闇を場外に向かつてぶん投げる。怪我しないように丁寧に投げるなどという発想はない。そんななまっちよろい投げ方では、常闇は簡単に復帰してくる。

そして自らは場外へと引きずり出されないようにと、大きく変化させた右腕を地面に突き立てた。

「クツッ！ つかめダークシャドウ！」

その呼人の体を、常闇から伸びたダークシャドウが掴む。が、常闇が黒影を引っ張ることはあつても、その逆は起こらない。かといって相当距離ぶん投げられた状態では、黒影に自分を弾かせて復帰することも困難である。

結果、黒影が呼人の体を掴んで引っ張り呼人の爪がステージの地面を大きくえぐることになるが、放り出された常闇の体が先に場外の地面へと接触した。

『常闇くん、場外！ よって勝者は百竜くんよ！』

『ヒヤッハア!! すげえなイレイザーお前の生徒は!! どっちもすげえ!! どういう教え方してんだ!?!』

『俺は何もしてない。あいつらが互いに学んで成長してるだけだ』

相澤は、生徒への過度な干渉はほとんどしない。むしろ少し干渉が少なすぎるぐらいである。それはただ、生徒の自らの成長を願っており、また信じているからであった。

そんな中、ステージの中央に常闇と呼人が戻ってくる。

「まさか……そんな攻略法があるとは……不覚」

「伸び切ったあとの動きから、追いかける癖が強いんじゃないかと思っただ。突破した俺を追いかけるとは……」

「むう……精進せねばな。ダークシヤドウ」

負けてしまつて意気消沈していた黒影が常闇の言葉に答え、力強く頷く。

「百竜、お前の中には、どんな獣が？」

「……次の演習か何かでみんなにも紹介する。流石にいつまでも隠しておくわけにもいかなないからな」

「……そうか。楽しみだ。我が獣との対面も……」

2人がそんな会話を交わしている一方、観客席のプロヒーローは百竜の個性について意見を交わしていた。

「あいつの個性はいつたいたいなんだ？ 増強系なのか？」

「増強系なら障害物競走や騎馬戦での戦果と目立たなかつたことの説明もつくが……」

「それで入試1位が取れるものなのか？ 轟や爆豪がいる中で」

「どちらにしろ、あいつが一番得体が知れないな。他の生徒はサイドキックにほしい奴

ばかりだが……」

そしてまた、2人と同じA組の中でも、今の試合の感想が飛び交っていた。

「常闇くんが光も無いのに負けるなんて……」

「うん。百竜くんめつつちゃやばいね！」

「だが百竜くんは、常闇くんのダークシヤドウを無視したのではないか？」

「ケロ——常闇ちゃんの個性が、強すぎたからかしら」

「う、うん。多分そうだと思う。常闇くんの個性の強みは——」

治療から戻った緑谷、麗日、飯田、蛙吹は、騎馬戦で常闇の味方として、あるいは敵として戦ったために、その能力の万能性と強さが身にしみていた。

だが飯田の言葉に冷静さを取り戻した緑谷が、いつもの勢いで分析を始める。

一方八百万、障子ら比較的呼人と親しい者達や、芦戸、上鳴は呼人の見せた実力に見
いていた。

「あれが、百竜さんの言う体術……」

「あれ、百竜が最初個性使ってないってほんと？」

「多分ほんとだ。百竜は、なんて言うか……」

「……非常にうまい」

「そんな感じだ。強いというか、うまい」

そんな話をしている耳郎らの隣で、さつき呼人の話しを聞いた芦戸は一人だけ彼の話を知っている優越感にニヤニヤしていた。

「芦戸、なんでそんなにニヤニヤしてんの？」

「ほんとだ！ 三奈ちゃんなんかニヤニヤしてる！」

「えー、別にニヤニヤしてるけど！」

してるんかいと、突っ込んだのは耳郎だけではない。

「とても楽しそうです。何かあるのですか？」

八百万がそう尋ねると、芦戸は呼人から聞いた話をあんまりばらさないようにしようと思ひながら、自分の知っている中で一番みんなが驚くであろうことを伝えた。

「百竜、個性で変身しちゃうと服が破れちゃうから全力は出せないんだって！」

「変身すると服が破れる、ってあのいっつも手とか顔とか赤黒っぽくなるのは？」

「あれはそのモンスターを、こう、なんか制御してるって言うってた!!！」

それを聞いた障子と尾白は顔を見合わせると、どちらからともなく頷く。

「芦戸さん、そのとき百竜はなんて言うってた？」

「なんか『変身したら服が破れて大変なことになる』とか『周りを壊さないように力を抑えてる』って言うってたよ!!！」

最初は呼人の話を秘密にしておこうと思っていた芦戸だが、どんどん話すのでどんど

ん呼人の考えていることが皆にばれていく。

「それ、多分本気が出せないって言ってるんじゃないね。だってあいつ、『人間気絶させるぐらいなら人間の力で十分』って言うようなやつだから。多分、その場で出せる力の中で全力になろうとしているんだと思う」

流石にあれはね、と。尾白は障子と目を合わせて苦笑いをする。あの獣は、モンスターは、規格外だった。多分あれを出してしまうと、人を殺してしまう。だから呼人は、人間のまま力を発揮できるように訓練しているのだと。

「えー！ 2人は百竜の変身したの見たことあるの!？」

百竜が言っていたのはすっごく強そうだったんだから！ と芦戸は不満げだ。

「……恐らく、体育祭が終わったら皆にも見せるのではないか？ 見せる場面が無い、と言っていたから、体育祭の後に皆が聞けば見せてくれるだろう」

「あー、言ってた！ 次の演習かなんかるときにみんなにも見せるって!？」

「ほんとに!? 百竜くんの個性、また見れるんだやったー!？」

「葉隠そんな良く見えてないでしょ。あのとときめっちゃ速かったし」

ワイワイと、みんなに尋ねられた葉隠と耳郎が入試の時のことを話していると、切島と爆豪の試合が始まった。

その後試合の消化が進み、準決勝。呼人の相手は、切島を倒した爆豪だ。

「てめえ、なめプしてやがんのか？」

ステージに上った呼人に爆豪がかけたその一言目がこれである。この体育祭において爆轟は緑谷と轟に徹底的に煮え湯を飲まされており、警戒すると言えばそちらの方が強かった。だが、当然体力テストや実戦演習での呼人の見せた片鱗も覚えている。

「してない。個性を開放してはないが、それはお前もだろ。それぞれがそれぞれにセーブをかけて個性を使う。当たり前の話だ」

「……けつ。お高く止まりやがって。ぶつ潰す。てめえも半分野郎も、見る相手がちげえんだよ!!」

苛立たしげに言う爆豪の言いたいことに、呼人は気づく。轟は、緑谷と呼人に声をかけたが、爆豪に声をかけることは無かった。

「俺は自分しか見てねえよ」

あ？ と不機嫌そうな声を出す爆豪に呼人はそれ以上は教えない。だが、そう、たしかに対戦相手の動きは見るし、対処もする。だが、爆豪が言っている意味の見る、すなわち意識している、と言えば、呼人の場合はそれは自分に、あるいは自分の中のモン

スター達に、あるいはモンスターと戦ったハンター達になるだろう。

「お前も、対戦相手じゃなくて勝つ自分の事しか見てないだろ」

「はんつ。ならてめえも半分野郎もぶつ殺して優勝してやるよ」

「殺すはやめろ犯罪だから」

揚げ足を獲るかのような呼人の言葉に爆豪が何やら言い返そうとした、瞬間。

『試合開始！』

ミッドナイトの開始の合図が響いた。

直後、何やら言い返そうとしていたにも関わらず、その隙を一切感じさせない動きで爆豪が呼人へと飛びかかる。爆発を利用しての加速。ただ強大な個性をぶつ放すのではなく、その個性の特性を把握し出来る事を考える。他のクラスメイトには、まだ少し足りない考え方。

そんな道は、呼人もすでに通ってきた道だ。

正面から突っ込んでくる爆豪に答えるように、呼人もまた正面から突っ込んで行く。

そして接触。攻撃は、爆風を利用できる爆豪の方が速い。だが、その爆風はせいぜいが人間を吹き飛ばす程度に抑えられたもの。

惨爪竜の皮膚と鱗には、通用しない。

爆煙（爆炎にあらず）をぶち抜いて飛び出した呼人は、小手調べに綺麗なモーシヨン

の上段蹴りを放つ。

呼人の戦い方にはパターンがあつて、例えば筋肉や体表をモンスターに変えているけれど、形状は完全に人間になっているため人間の格闘術を多用する形態。他には、人間の形態なのだが、爪や牙を発達させることで、より獣に近い攻撃を繰り出す形態。エトセトラエトセトラ。

そんな色々な形態の中でもやはり、小手調べに、そして自分側の動きを悟らせないためには最も多彩に行動可能で人間の常識が通用する人間形態が都合がいい。

その攻撃を予想していたのかあるいは見てから避けたのか、爆豪は再び手のひらから爆発を起こして上げた方、左へと回り込む。

(上に飛ぶのは距離を開けることに繋がる。かと言って後ろに回り込むのは自分から視界を潰すようなものだ。だからこそその側面)

——わかりやすい。

が。まだ判断するのは早い。呼人は更に、左足を思い切り踏み降ろして右足の回し蹴りを放つ。それを爆豪は、小さな爆発の反動で地面を這うようにして回避した。回し蹴りが頭部を掠めるが、爆豪は一切ひるまない。そして返すかのような爆発。それを呼人は跳び下がって避けた。

それで、わかる。

（避けてるのは完全に反射神経。読まれてるわけじゃない。というか向こうもこつちを見定め中か）

呼人が爆豪のスタイルを見定めようとしているように、爆豪もまた、彼にとつては得体の知れない呼人を見定めようとしている。違いと言えば、その中での攻撃意志。

回避して下がる呼人に追いつき、爆豪は更に複数の爆風を叩き込む。一方の呼人は、蹴りや拳の風圧で爆煙を払いつつも攻撃はしめない。やがて、呼人がいくらか払って散っているとは言え、ステージの上が煙に包まれて見えなくなっていた。

現在の、およそ30%オドガロンの呼人の攻撃には、緑谷のそのように風圧でこのステージの全ての煙を打ち払うような出力はない。いや、恐らくオドガロンの筋肉では、100%の人間形態でも一撃では無理。

だからと言って、人間相手に不十分なわけではない。

煙幕の中風の匂いではなく音と風から爆豪の位置を悟った呼人は、爆豪の仕掛けたであろう罠へと自分から飛び込んだ。

それは、爆豪の体操服の上着。奇しくも、麗日が爆豪にしかけたトラップと同じ、いる場所を錯覚させるという狙いをもった罠だった。そして呼人がそれに接近した瞬間。側面から爆風が放たれる。その威力は先程までの小手調べの比ではなく、ステージに散っていた煙が一瞬で吹き散らされた。

「はっ、ちったあ効いたか獣野郎！」

どうやら爆豪の中では、呼人の呼び名は獣に決まっていたようだ。まあ轟の半分なんかよりはマシだろうか。男子の中では小柄な方ではあるが、チビにならなかったのは峰田がいたからだ。

一方爆風をもろに受けた呼人は、体勢を低くしていたこともあって地面に爪を突き立てるのが間に合い、5メートルほど吹き飛ばされた位置で堪えていた。当然人間に堪えられるものではなかったので、全身の筋肉と体表はオドガロンのものへと変化させている。

それでも、大きな衝撃波と熱風でそれなりに傷を追っていた。

だが、モンスターというのは得てして人間よりも遥かに強い。それはこの世界でも同じ。人間は、同じサイズの動物相手には個性以外の身体能力ではとても敵わない。筋力、敏捷性、生命力。

人間にとつては大怪我であっても、モンスターの体を持つ呼人にとつては動くには損傷のない、せいぜいがちよつと深い切り傷擦り傷程度の怪我でしか無い。当然痛いのは痛いし、その傷を修復するにはエネルギーを相当量消費してしまうのだが。

だが、野生では動かなくなつたものから死ぬ。足を、止めるな。

地面から爪、というよりは吹き飛ばされる勢いにたえる内にめり込んでいた腕を引き

抜き、爆煙から飛び出す。

それを爆豪もまた当然の如く予想していて、爆風の両手でもって迎え撃った。

しかし、その顔が好戦的に笑っているながらも、腕の出が遅いのと手が震えているのを呼人は見逃さない。

（おそらく、いまのが爆豪の最大火力。近場か掴まれて撃たれてたらずかつたが——！）

爆発する爆豪の手のひらを、真つ向から掴む。流石の爆轟もそれには虚を突かれた顔を見せる。そして呼人は手のひらに爆発をくらいながらも爆豪の脇腹を横向きに蹴飛ばした。

それと同時に手を離す。連続的に爆発を受けたことで、手のひらの鱗と皮膚がズタボ口になってているが、この手のひらも人間のそれとは比にならないぐらい皮が厚い。元来前足であるからだ。

吹き飛んでいった爆豪は、よろめきながらも手をつけて立ち上がる。流石に頑丈、か。体力テストの頃から思っていたが、かなり体が鍛えられている。あれだけの自尊心、才を持ちながら、努力を怠らない。

化け物だ。

「調子に——乗ってんじゃねえぞこらあ!!」

凶暴な笑みを浮かべた爆豪は、雄叫びを上げて腕を大きく振りかぶる。やつの最大火力は先程受けきったそれのはず。あれ以上の攻撃は――

（身を削れば簡単に出来る――！）

爆豪は振り上げた腕を振り下ろすと、爆発の反動で呼人の方へと飛来する。そして、空中で爆風を利用して回転を始めた。恐らく、彼最大の一撃となるはず。

それに対して呼人は、逃げるのではなく耐え抜く道を選ぶ。大きく変化させた爪で靴を履いた足が引つかかる場所を作るとそこに両足を突き込み、腕を大きく広げて爆豪に背中を見せた。

――
榴弾砲着弾。
ハウザーインパクト

爆発を放った爆豪自身もまたその爆風で吹き飛び、はるか後方で起き上がる。

あの瞬間、百竜は背中を向けたが逃げる姿勢は取らなかつた。

そしてその爆風の中から――呼人は現れた。

爆風から庇つた体の前面や、すでに人間のそれに戻している顔は無事。だが腕を広げていたために両腕の外側や、爆風をもろにくらつた背中は大大きく損壊し、堅牢であるはずの背中鱗と皮膚を一部貫いたか血が流れ出している。

だが、呼人は立っていた。爆豪の全力を受け止めてなお、よろめくことすらなく。

「まだ――生きてやがんのか……！」

そして、起き上がろうとする爆豪へと四足歩行でダッシュ。爆発の衝撃やそれまでのダメージで動きの鈍い爆豪の服の首筋を喰えりと、場外へと走り出した。

「お前、待てこの野郎！ 逃げんじゃねえ！」

爆豪はそう言っていて、ほとんど自由に動かない左腕を上げて爆風を呼人の傷口である背中へと放つが、位置関係上その距離は先程の大爆発と背中との距離よりも更に遠い。先程の爆風に呼人が堪えられたのも、近かったとは言え完全な接触状態での攻撃ではなかったからだ。その攻撃にはまだ爆豪自身が耐えることが出来ないし、また勢いをつけているために距離感を見誤った。

そして呼人はそのまま、爆豪を場外へと放り出した。爆豪は爆発を使つて戻ろうとするが、腕が思うように動かずに失敗、場外へと落ちる。

『爆豪くん場外!! よって勝者!! 百竜君!』

爆豪が顔を上げると、百竜が自分の方を見つめながら天に拳を掲げていた。その赤黒い腕を、血が僅かに伝っている。

「歩けるわくそが！」

近くに救急ロボットが近づいてきたが、爆豪は怒りの声をあげて立ち上がる。

真正面から全力を叩きつけて、勝てなかった。相手は回避したのでも、爆豪に全力を出させなかったのでもない。

出させた上で、凌ぎきった。

それでも自分の方が強いと胸を張れるほど、爆豪は弱くはなかった。

だが、それと腹が立つのとは別の話。徒歩で退場した爆豪は、一暴れして発散した後はいつもの爆豪へと戻っていた。

一方の呼人。救護を断って歩いて退場すると、予備の体操服を受け取ってから、用意してあった大量のカロリーメイトやゼリーを食っていた。

会場では赤黒い皮膚に血が目立たないのを良いことに平気なふりをしていたが、少なくとも人間のサイズで扱っていた部分には大きな怪我を負った。オドガロン本体にしてみればそれは小さな怪我に過ぎないのだが、それでも大きな怪我の直後にはかなりのエネルギーを消費する。そのためにひたすらに、次の試合まで食っては飲んでを繰り返して、消費したカロリーメイトは20箱以上、ゼリーは30を越えていた。しかもそれで修復がされるのではなく、怪我直後に個性によって消費されてしまうエネルギーを補うに過ぎない。

オドガロンは甲殻を持たないため、内部へのダメージが大きい。すなわち皮膚が傷つきやすく、更には攻撃を受ける瞬間だけ人間大に制御したそれではなく、オドガロン本体のそれを展開した。厚さ、硬さともに人間形態を遥かに凌ぐ。それで、あのダメージ。オドガロンを相手にした場合に確実に致命傷になるとは言えないが、小さくはない傷

を与えたことになる。

「化けもんかよあいつは」

火竜種の火球を一発ぐらい食らっても、ここまでの傷の大きさにはならない。勿論堪えきろうとした呼人もまた悪いのではあるが。吹き飛ばされていれば、ここまでの傷にはならなかった。

だが、あいつには堪えてやろうと思っていた。お前が全力を叩き込んでも吹き飛ばない相手もいるのだと。

第24話 雄英体育祭・8 百竜VS轟

呼人のためのしばしの休息兼互いにぶっ壊しまくったステージの修理のための時間を経て、最終戦。

「百竜、あいつ怪我は治ったのかな」

「でも退場するときの百竜くんピンピンしてたよ！」

「私の酸も全然効いてなかったし！」

「ええ。あれほどの爆発、正直信じられません……」

女子陣が大丈夫だと話している一方で、障子は難しそうな顔をしている。

「(何か気になることが?)」

「(……百竜だが、爆豪の最後の一撃をあえて受け止めた後、あちこちから出血していたように見える)」

「(……何か違和感があると思っただらわざと受け止めてたのか。でも保健室には行っていないよな?)」

「(おそらくは。獣化と言えど体が傷つけば修復が必要となるはずだが……)」

女子陣を不安がらせないように小さな声で話している尾白の隣に、荒々しく一人の生

徒が座り込む。個性の使用でイカれかけてた腕と、呼人の蹴りで一本持つていかれた肋骨をリカバリーガールに治癒してもらった爆豪だ。

「おつかれ爆豪」

「……はんっ」

不機嫌さを声に出した爆豪は、まだ修復途中の会場を睨みつけていた。そして、少しして口を開く。

「……尻尾。獣野郎の個性はなんだ」

その爆豪の問いに、尾白と障子だけでなく耳郎達も驚いて振り返るが、爆豪はステージを睨みつけたまま目を合わせない。普段一切周りを顧みない彼が、周囲を気にした。

そんな爆豪に、尾白と障子は頷き合うと、障子がスマホを操作して手渡す。

「詳しくは知らないが、その写真に映ってるものだ」

その写真を見た爆豪が、苛立たしげに顔を上げる。

「てめーの写真じゃねえか」

「後ろに立っているのがいるだろう」

そう言われた爆豪は、改めて写真を見る。写真に映っているのは、わずかに目尻が緩んでいる障子と、大きな怪獣の模型か何か。

「なんの話してんだ」

「これだよこれ」

そう言いながら尾白が指差したのは、人間の数倍はある、怪獣の模型。

「あ、？ 何言ってるやがる」

ふざけているのかと、爆豪は更に不機嫌さを増していく。一方障子は、それを覗き込みに来ようとする芦戸や葉隠をせき止めていた。2人がぶうぶうと不満をたれていたが、それが呼人との約束だった。

『対戦後によほど知りたがっているやつか、俺の個性とか戦い方で凹んでるやつだけにしてくれ。後は自分で見せたい。まあ別に絶対じゃ無いけどな。そのへんは任せる』

そう言われているので、元氣一杯、に障子には見える彼女らには我慢してもらっている。涙の1つでも見せれば違ったかも知れないが。

「障子、動画はあるか？」

「……ああ、探して良い」

障子の許可を取った尾白が爆豪の持っているスマホを操作すると、先程の怪獣が動き出し、カメラの方を睥睨しながら歩くと、大きく足を踏ん張って口を開く。音量を0にしているので音は聞こえないが、さぞ不気味な鳴き声で鳴いているのだろう。

「……化けもんじゃねえか」

思っていた系統と全く違うその個性に、爆豪は怒りをそがれてつい呟く。

「百竜いわく、人を平気で食う化け物だ。だから個性を制御してる。だってさ」

その大きさは、とても人間のそれとは思えないもので。それを百竜は人間の大きさに抑え込み、さらに形状を人間のそれに完全に合わせていた。

戦闘中に見えた顔も腕も、その怪獣の凶悪なそれとは全く違っていた。

「……化けもんかよクソが」

爆豪にとつては、非常に相性が悪かった。というより、モンスターを出現させた呼名の強みは、そのモンスター由来の生命力。人間の形状のパワーでは当然緑谷の爆発的なものには大きく劣っているし、爆豪のようは攻撃性も轟のような広範囲制圧力も、モンスターによってまちまちではあるがそこまで自由に操るのは容易いことではない。

だが、生命としての頑丈さはピカイチだ。きつちり負傷させて止めるなら、人間相手であれば軽く殺してしまうぐらいの攻撃を加えなければピンピンしている。なんなら内臓も多少持ってかれたぐらいでは、しばらくは割と元気に動く。

「尾白ー！ 私達にも見せてよー！」

「そうだそうだ！ 爆豪くんだけずるいんだ！」

「……百竜にそう頼まれた。後は自分で見せたい、と言っていたぞ」

そう、百竜自身の思いを言われてしまつては、芦戸達も強行に言うことが出来ない。だがそこで引き下がる芦戸ではない。ならば自分が聞いた事をばらしてやろうと。ど

うせ言つちや駄目とは言われてないし、と。

なぜそうなった。

「ふ、ふーん！　良いもん、私百竜から秘密聞いたからねー！」

「秘密って何？　芦戸がさつきニヤニヤしてたの？」

「そー！」

「あの、芦戸さん、流石に人の秘密を勝手に話すのは駄目ではありませんか？」

「でも百竜秘密とは言ってなかったよ！」

それでねあのね、と、芦戸は八百万の制止を聞かずに先程呼人から聞いた話をする。

「百竜、昔個性で暴れちゃって色々壊しちゃったらしくて、それで3才ぐらいからずっと個性を制御する訓練してらんだって」

「制御する訓練？」

「そうそう。なんか、百竜って獣になれるでしょ？　いつもこうやってるの」

そう言つて芦戸は、いつも呼人がやるように左腕を前に掲げる。不機嫌そうな爆豪含めて、そこにいたみんながそれに聞き入っていた。

「獣つて言つても生き物でしょ？　だから血管とか骨とか、筋とか、そういうのがあるん

だつて。だから授業中とかもずっと、外から見てばれないように右腕は骨、左足は筋肉、左手は血管、みたいな感じで、ずっと獣化させ続けてるつて言つてた」

「ずつと……?」

「うん。寝てる時は無理って言ってたけどそれ以外はずつとだと思う。後ね、それから強くもなりたかったから、その個性の訓練をしてくれる人に教えてもらったり調べたりして、3才の頃からずつと戦う練習もしてるんだって。家に帰ってからもするし、授業中とか本読んだるときとかも、時間があつたらイメージトレーニングしてるみたい」

芦戸の言葉に、そこにいた者達はそれぞれの反応を見せる。尾白と障子は納得したように、耳郎、葉隠、八百万は驚愕したように、そして爆豪は不機嫌そうに。

「だから私が負けても仕方ない、って慰めるふりして酷いこと言うんだよ!」

百竜慰めるの下手くそだ! と、結局そこに行き着くのかと言いたくなる芦戸の言葉。それを聞いた爆豪は、不機嫌そうに立ち上がると去っていった。

「百竜、そんなこと……!」

「……それならあの強さも納得だよ」

「……ああ。常にこちらの改善点を指摘してくるかと思えば、すでに通った道、か」

すでに放課後訓練で呼人の強さの一端に触れた2人は納得した表情をしているが、一方の女子たちはまだ理解が追いつかない様子である。

3才の頃から、文字通りずつと、など、英才教育とかそういうレベルの話ではない。それこそ文字通り、ただ個性を使いこなすためだけに、戦うためだけに生き続けているよ

うなもの。

有り体に言えば、常軌を逸していた。

「強さの求道者、いや、愚かなる道をいく者、か……」

突然響いたその言葉に、全員がそちらを慌てて振り返る。すると、爆豪が置いていったスマホを手にした常闇が立っていた。

「常闇か」

なら良かった、と言いたげな尾白に、芦戸が不満げな顔で叫ぶ。

「あー！ 私達には見せてくれないのにー！ 差別だー！」

大声で叫んでいる芦戸は先程から周囲の注目を集め始めている。尾白と障子は互いに顔を見合わせると、どちらからともなくため息をついた。

爆豪と百竜の試合直後。

「はいもしもし神王寺です。……はい、あ、いや今日は仕事じゃないんで仕事用のは家に置いてきてるんで……。はあ。……わかりました。すぐに行きます。あ、今雄英高校です。体育祭見てたんですよ。……あいあい。了解しました。すぐ行きますー」

どこかからの連絡を受けた神王寺は、席を立つ。呼人には伝えていない仕事。ヒーローを救うための役割。

それが神王寺の個性の使い方。

彼は、煙に覆われたステージを一瞥するとその場を後にした。

「氷の相手はちとつらいだろうが、まあ頑張れコールマン」

異なる世界のモンスター達を、呼ぶ男。それが神王寺の呼人に対するあだ名だった。

『待ちかねたぜ!! リスナー諸君準備は良いか!! 雄英一年の頂点を決める戦いもいよいよラスト!! 決勝戦はこの2人——轟焦凍VS百竜呼人!!』

プレゼント・マイクの放送に大きな歓声上がる。それを聞きながら呼人は、正面に立っている轟に話しかけた。

「轟」

「なんだ?」

「お前が個性でどれだけ悩んでるかなんて俺は知らないし、それを言えば俺も個性に悩んでる。ただそんなもんは関係なくて、戦った以上は後で言い訳をしてくれるなよ

「？」

「……………どういことだ」

「左側の何か。何かは知らないが、それを使おうが使うまいが、お前の決めた中での全力で来い。俺もお前と一緒に個性を全開放はしてねえよ」

個性でどう悩もうが、どんな個性であろうが、関係ない。自分の意志で戦うならば、自分の好きな力を使って戦え。そして戦った以上、結果が全て。後で出来るのは反省と後悔だけで。

言い訳などもつてのほか。

「……………お前も緑谷も、人の中にどんどん踏み込んでくるな」

「悪いな。長いこと人間と接してなかったから距離感がわからないんだ。なんならもう少し土足で踏み込んでやろうか？」

「……………やめてくれ。これは、俺が自分で向き合うもんだ。けど——」

—— お前の言う通り、今の俺が出来る全力で、お前に勝つ。

戦闘前にも関わらず、その体から冷気が溢れ出す。

（まじか本気になってんなー。しかも使うのか使わないのか余計にわからなくなった）

何を隠そう、オドガロンは氷に弱い。モンスター達によると物理的な氷以上に『属性エネルギー』なるものの方が更に効果的らしいのだが、とは言え氷、すなわち冷たさに

弱いことに変わりはない。

そのため左の何か、の方がまだましだとは思えるのだ。

会場にいる全ての人間はその左が何なのかを知っていたのだが、ただ芦戸と話してすぐに一人控室に戻った呼人だけが、誰からもそれを聞いていなかった。

戦闘開始のコールの前に、呼人は轟から距離を取る。氷を出す轟の個性は、範囲などなどで言えば呼人にとっても驚異的だ。

『試合開始!!』

そしてミッドナイトの合図とともに、試合が始まる。

直後。早速轟がぶっ放した。放つのは氷。瀬呂を氷漬けにしたのよりは規模の小さいそれが呼人の方へと伸びる。

それに対して呼人は、四足形態になると成長中の氷とすでに成長しきった氷を見極め、足をとらわれることが無いようにその上を飛んで氷の成長とともに上へと登っていく。

以前跳んで避けられた経験や体育祭序盤で大勢に回避された経験から、氷の中に成長の差を作って一度の跳躍での回避を不可能にした轟だが、これは呼人が一枚上手である。

だが、恐らく回避されるだろうと轟はわかっていた。わかっていたからこそ、手を緩

めない。更に氷を放ち呼人のを追い詰めていく。

一方呼人は、地面から生えた多数の氷をまるでそこが無数の木が生えている大森林を飛び回るかのごとく飛び回り、所々では氷の柱をその掴む力と蹴る力で砕いている。それでも、轟が大量に放つ氷は巨大な塔を形成し始めていた。

『こいつは凄え!! 何がどうなつてやがるイレイザー!!』

『轟の氷だ。百竜を捕まえようとしているな』

その高さは、すでに最低10メートルラインを越えて、もはや氷河である。

そしてその上層で伸びてくる氷と鬼ごっこをしていた呼人の頭上と四方を、一気に氷が囲い込んだ。

呼人に氷の成長を見切られている事に気付いた轟が、更に外側から氷をめぐらして囲い込んだのだ。

それで四方が完全に封鎖され、呼人の動きが観客から見えなくなる。そして少しの間。呼人が氷によって戦闘不能になったと判断したミッドナイトが声をかけようとした直後、一部の観客がどよめいた。

呼人が、轟とは反対側の氷壁から出現したのだ。

氷を避けるように飛び回っていた呼人は、その中で脱出口を作っておくために飛び回りながらも数箇所選んだ場所に対して、幾度も攻撃をして氷を削ったりもろくしておい

たりしたのだ。

普段の轟の水なら呼人でも削って脱出するしかないのだが、呼人を狙って断続的に生じさせた氷だけにその耐久力はかなり低くなっていた。

ド派手にぶつ壊すでもなく、いつそ大きめの石をゴロンと押し出すぐらいの弱い勢いで氷から脱出した呼人は、少しの間そこにぶら下がっていた。何も休憩がほしいわけではない。いや、確かに氷は辛いのだがその分動き回っていたので体も冷え切ってはおらず、むしろそういう意味ではここで止まっていることがまずい。

それよりも確かめたかったのは、安地。轟の攻撃が視認外のここや氷の上層まで届きうるのか。届くとしてそれは適当か正確か。また轟は適当だったとして盲撃ちしてくるタイプか。

だが、しばらくしても轟からの攻撃は無い。わずかな氷がパキパキと溶ける音と、崩れるような音。

直後。わずかな匂いと背筋に走る悪寒に、手を離して壁面を上へと駆け上がる。足は靴を履いているために解放できていないが、両腕があるのであれば登るのは苦ではない。

逃げたのは正解で、塞いだ穴から飛び出した氷がその穴を塞ぎ、外まで侵食していた。こども氷を自由に放出されると、その能力的にはモンスター、それも竜ではなく龍に

近いものがあるのではないかと感じる。勿論出力的には差があるのだろうが、こいつも天変地異みたいなものに変わりはない。

だが、氷はあくまで生成できるだけで生成した氷を操ることは出来ないようだ。

氷の上側に脱出し、上に飛び出した呼人を見た観客がどよめくが、呼人は索敵に集中していた。先程は轟の索敵ではなく攻撃の察知に気を張っていたため、轟が動いていることに気づかなかつた。だが今の穴から攻撃が来たということは、轟が中に入ってきた事を意味する。とは言え、中に入ってしまったえばそこは轟の庭だ。

だからこそ、突っ込む。

比較的層の薄い氷で出来ている側面をぶち破つて突入すると、今正にそのエリアから出ようとしていた轟を見つける。轟の方もまさかそのエリアに入ってくるとは思っていなかったようで、少し反応が遅れ、突っ込んでくる呼人に対して氷を伸ばしてくるが。

最初の攻防ずっと見ていたが、轟は氷を放出できるものの、その制御が甘い。あるいは、あえてぶつ放しているのかもしれないが、とにかく、規模が小さいものであれば避けるのは容易い。

下だけでなく上や横も足場として利用して氷を避けながら轟へと接近する。

そして、接触。轟の右側。氷を放ってくる側を掴み、そのまま轟ごと氷の薄い部分を

ぶち抜いてステージに飛び出す。もう半分以上が氷に覆われていて立つところに困るぐらいだが。

そのまま轟を場外へと投げ出そうとするが、案の定というべきか左側を掴んだ自分の腕から左半身が凍らされていた。投げようにも腕が曲がらない。体全体を使つて放り出すが、自分の背後に氷壁を作られて場外を回避された。

『百竜くん、動ける?』

「問題なし!」

ミッドナイトの言葉にそう答えると、左腕から左半身にかけてを意図的に膨張させる。人間の形で受けた氷は当然人間の形にしか穴が空いていないわけで。そこに内側から倍以上の体積に腕を膨張すれば、例え筋肉の圧縮があるとは言え圧に耐えかねた氷が瓦解する。

バガツ バガラ

と小気味いい音とともに氷が剥がれ落ちる。すでに膨らんだ体は元に戻しているが、何をしたかがわからないゆえにかそれを見た轟の表情は険しい。

一方呼人は、いい球が出来たとばかりに地面に落ちた複数の氷の塊を持ち上げて、連続して轟に向かって投げる。

ただ当てるように投げるのではなく、いくらか時間差、角度差をつけて、呼人が轟のところへ到達するところに襲いかかる数が多くなるように投げ分け、呼人自身もその氷の中を駆け出した。

ぶん投げた氷の下を走りながらも、呼人は轟の動きを注視していた。氷が多数飛んでくるのを見た轟は、左手を上へと上げると、何故かそこで戸惑った素振りを見せる。

まるで、なぜ自分が左腕を上げたのがわからない、というように。

そしてそのまま轟にぶつかつた呼人の体が、彼をステージから押し出した。

『轟くん場外！ よって勝者、百竜くん！』

怒涛のごとき歓声が会場を包む。プレゼント・マイクが何やらいつも以上のテンションで叫んでいた。

そんな中呼人は轟を見る。

場外に押し出された轟だがその表情はいつもどおりの無表情で。負けた悔しさなど感じさせない。ただ、何故か自分の左腕をじつと見つめ、やがて両手を見つめている。

轟がステージ上へ上がってこないのが一方的に轟の所へ歩いていく、彼の前に手を差し出した。

それを見た彼は、少しの間の後自分で立ち上がった。

「結局、お前の左側は何が出来るんだ？」

「——エンデヴァーって知ってるか？」

退場しながら問いかけると逆にそう返され、呼人は記憶を一瞬漁る。

「確か有名なヒーローで火を使う、だよな？」

「……」

そう少しの間の後、知ってる限りの情報で答えた呼人に轟は珍しく笑った。

轟にとつてエンデヴァーというのは、まづもつて父親失格な人間であり、そしてそれにも関わらず常に自分と話す相手が出す相手でもあり。

とにかく、色々な意味で、轟の心中に占める割合の大きな相手だった。

それを、百竜はまるで知らないと言うように話す。何か、少し迷いが晴れた気分だった。

「俺はそいつの息子なんだ。こっち側……左側はそいつの力が入ってる」

「……個性つて左半身と右半身とで別れたりするようなんもんだったか？」

「右は……母さんの個性を引き継いだ。こっちはエンデヴァー。だから左は……使いたくなかった」

だが、それを緑谷に叩き壊された。全部お前の力だからと。それを使う事がお前の全力じゃないのかと。

「ま、使わないのはお前の勝手だろ。俺だって……使えるようにはしてるが、積極的には

使おうとは思ってない力もある」

「……お前のこだわりとは違うだろ。俺のは……」

「こだわりとはまた別に意味で使いたくない力もあるんだよ。トラウマってわけじゃないが……」

使おうとするとモンスター達に気を使われるし、当モンスターがめっちゃくちゃ謝ってくるし、何より幼かった自分へのいらだちが募る。

少しの沈黙の後、呼人は以前の轟の言葉に答えるように話し始める。

「お前、まともな両親が、って言ってたと思うが、どれだけいなくなっただけで欲しい両親でもいてくれた方が良くと思うぞ。別にいたって、距離を取ろうと思えば取れるからな」

——俺はもう、会いたくても会えねえ。会いたくとも思えないけどな。

「……どういう、意味だ？」

「まだ思考が確立出来てない子供の頃に、家と周辺の自然ごと消し飛ばしたらしい。まあ、それも覚えてないんだけどな」

生まれて始めて個性を使ったのは、モンスターになったのは、彼らから伝えられるには呼人が2才の頃。初めて変身したのは碎竜。

そして、モンスターの中でも早まった彼の伝えてきたイメージのままに、良くもわからぬまま周りの全てを消し炭にした。

その言葉に、轟は息を飲んだあと申し訳なさそうな顔になる。

「……………わりい。お前の事を知らねえで」

「俺もお前の事を知らないで好き勝手言ってるからおあいこだ。人によつては傷つくかもしれないから、気をつけたほうが良い話題ではあるけどな。まあお前は、もう少し周りに目を向けておけ」

世界は、お前とその家族だけで出来てるわけじゃねえんだから。

モンスター達から、広大な世界の、その圧倒的な広さについて聞いていた呼人だからこそその言葉。ただでさえ、轟は自分の世界に囚われている。だが、世界はとても広い。轟が臨んで引きこもっているならまだしも、外を知らないだけならば、知っておいた方が絶対に成長できる。

「……………そうだな」

その言葉に、轟は納得半分、それは出来ないという思い半分。

確かに、自分が辛いなら呼人の言うように離れば良い。だが、自分が傷つけてしまった大切な人がいるのなら。

だから、自分は彼が言うように逃げる事は出来ない。だが、少しは。外を、今いる仲間達を見なければならぬ。いや。見てみたい。そう、思えるようになった気がする。

「お前らは……………人の大事にしたもん簡単にぶち壊しに来るな」

「気に入らないものはぶっ壊すに限る。ちなみに緑谷には、何を言われたんだ？」
2人の話は、表彰式のアナウンスがあるまで続いた。

表彰式は比較的穏やかに終了した。1位百竜呼人、2位轟焦凍、3位爆豪勝己、飯田天哉。

何故か飯田が表彰式には出席していなかったが、それ以外はつつがなく。そう、本当につつがなく。爆豪が暴れるかと危惧したのももいたが、不機嫌そうに何かオールマイトに言っただけで暴れる事無く済ませ、無事に終了した。

その後相澤からちよつとした言葉があり下校となった後、いつもどおり訓練室に行こうとしていた呼人は障子と尾白、そして耳郎達に声をかけられた。

「百竜、この後ご飯食べに行かないか？」

「ご飯……何かの店か？」

「え？ まあファミレスだけで」

ファミレスか、マクドか、カフェか。そういう聞き方ならわかるのだが、呼人の聞き方は奇妙なものであり、皆が首を傾げる。

「ありがとう。ずっと外国……というか人里離れたところにいたから全くそういうのがわからないからな。変な疑問だったか？」

「人里離れたところってというのは？」

「尾白、それこそ行つてから話せば良いのではないか？」

障子に言われて、芦戸はそれもそうだと頷く。実は今日の集まりは、体育祭の反省会もあるのだが芦戸の口から少し明らかになった呼人のことについて聞いてみたいという者達の集まりなのだ。

呼人は学校でのコミュニケーションに問題が無いとは言え、その大部分は勉強の内容や訓練方法、あるいは個性の話であり、呼人自身のこと、つまり雑談を全くと言っていないほどしない。むしろその時間さえあれば本をめくっていることが多く、一日で数冊の本を読破していることもザラにあるほどだ。

「じゃあ、俺も一緒に行かせてもらいたいな」

その言葉に全員が笑顔で頷き、総勢7名でのお疲れ様会が決まった。

呼人自身が参加を決めた理由は、彼もまた、こういう機会があれば良いなど考えていたからだ。こういう機会、というよりはつまり、人間的な、『楽しむ』機会。それは呼人自身の意志だけでなくむしろモンスター達の総意でもあり、モンスター達の、特に人格を得る以前の行動原理や思考にかなり染まってしまっている呼人を、人間の社会に戻す

ための1つの手段でもある。

呼人はまだ、モンスター達とイメージを交わしたり戦って過ごした時間が、人間との関わりのそれを遥かに越えているのだ。

第25話 雄英体育祭終了 『神に背いた男』

皆に連れられて呼人が向かうのは近くのファミレスである。ちなみにクラスのひとつが電車通学であるのに対し呼人だけが自転車通学であるので、それを押して行くことになった。

「百竜、自転車で来てるってことは家近い感じ?」

「あー私もそれ気になるー!!」

「それなりに」

耳郎と芦戸の質問に答えると、尾白と障子が問答無用で頭を小突いてきた。

「いてえ」

その光景に見慣れない女子陣がぼかんとした表情をするが、ここ2週間で3人の間ではすでにありふれたものになっている光景である。

「百竜、前も言ったと思うけどお前の常識結構ずれてるからな」

「……30キロをそれなりに近いとは言わないぞ」

「30キロ!?!」

「それ自転車だと絶対遠いよね?」

「だからそんな良い自転車持つてるんだ……」

葉隠が言う良い自転車というのはあくまでロードバイクのことであり、呼人の乗っている自転車が別段高級品であるというわけではない。

「朝の運動に最適だからな。流石に徒歩で走つてると時間がかかりすぎるし」

「自転車でも結構かかつてると思うんだけどね」

尾白と障子は苦笑いだ。トレーニングの合間に別のトレーニングをしたり、あるいはいくつかを複合させたり、とにかく百竜という男は文字通りの休息というものを知らない。

「あの、百竜さんはそれで毎朝？」

「まあ、うん。自転車だどこでも行けるし電車の乗り方良くわからんし」

「なるほど……え？」

それも恐らく百竜の言う体を鍛える事の一貫なのかと、後半に聞こえてきた不思議な言葉に、八百万だけでなく皆が首を傾げた。それは所謂お嬢様である八百万ですら知っている、言ってみれば現代社会の常識というもので。

「言つただろ？ 外国いたから色々疎いんだつて」

「疎いってレベルじゃないよね!! 外国にも電車ぐらいいあるでしょ!」

「カナダの山奥にそんな文明的なものはない」

そう、本当でない。呼人が生活していた場所は文字通り辺境の地であり、周囲10キロ四方には民家すらない。だからこそ呼人の個性も結構存分に発揮して把握することが出来たのだが。

ちなみに船とタクシーは乗ったことがある。船は、呼人にとっては火竜か風漂竜か、とにかく飛行能力の高いモンスターに変身して背中に神王寺を乗せれば良いようなものだったのだが、一度目の大移動で懲りた神王寺に止められたのだ。何より二度目の移動先が海外だったために密入国がまずかったというのものもある。

「カナダの山奥に住んでたんだ……何でそんなところに？」

「生まれが向こうか生まれてからすぐ行つたのかはわからないけど、保護者代わりの人に拾ってもらつたのがそのあたりで、その人は世界中を回つてたらしいんだけどそこに腰を降ろしてくれたんだ」

そんな事を話しているうちに、最寄りではなく2番めに近いファミレスに到着する。例年ではあるが、この日は最寄りのファミレスは広いもののものですが席が埋まつてしまうのだ。

「よし、注文しよう！」

席につくと芦戸がそう宣言し、それぞれがメニューを眺め始める。何をすれば良いのかわかつていないのは呼人と八百万だけだ。

「ヤオモモも初めてだったよね。ここはね、この——」

耳郎が八百万に説明している一方で、呼人も尾白に説明してもらおう。

「——後はこのドリンクバーを注文しておけば、好きなだけドリンクが飲めるよ」

「なるほど？」

呼人はこのとき水にこんな金がかかるのかと思つたが、コーヒーのような飲み物もあるんだと一応納得した。この後呼人は、生まれて始めてジュースというものをのんでその美味しさに驚くのだが、それはまた別の話。普段食べることのある栄養ゼリーよりも更に美味しいと呟く呼人に、他のメンバーが驚きの目を向けていたのだが、それもまた別の話だ。

食事、と言つても夕食にはまだ早く、机の上には軽めのパスタやポテト、ピザ、からあげといった、話しながらかつまみややすいメニューが並んでいる。

やがて、話は体育祭からそれぞれの成果、そして一番の皆の疑問でもある呼人のことや彼の個性の話へと変わっていく。

「百竜さつきカナダで拾ってもらつた、つて言つてたけど、お父さんとお母さんは？」

そして当然話が呼人のことへと変わっていった以上、こんな悪意のない、純粹な疑問も飛び出してしまふ。予想出来たその質問だけに顔色を変えることはないが、呼人は少し言葉に詰まった。

保護者代わりの男の事を親だと言うのは嘘をついたことになってしまふし、かと言って黙れば結局訳ありだとわかってしまふ。ならば、正直に話した方が後腐れはない。

のだが。かと言って、話が重くなるのはわかりきっている。結局、呼人は皆に説明することにした。

「あー少し重たい話になると思うけど、良いのか？」

それを言っただけで、疑問の表情を浮かべる者は少なく、申し訳無さそうな表情、あるいは驚きの表情を浮かべたものの方が多い。僅かな間と、戸惑うような呼人の空気が、その場の全員にそれを悟らせていた。

「俺は、百竜が良いなら聞きたい。というか、もう何かがあるんだって、わかっちゃったし」

「……俺もだ」

「ごめん。話しにくいこと聞いちゃったみたいだね……」

「私は、お聞きできるならお聞きしたいですわ。百竜さんが悩んでいらつしやるようなら、お力にもなりたいです」

「……うちも、ヤオモモと一緒にかな。困ってるなら、なにかしたい」

「私も！ 百竜くん助けてくれたし！ 今度は私の番だよ！」

余計なおせっかいがヒーローの本質、とはオールマイトが轟と戦った後の緑谷を見て言った言葉だが、ここにいるのもまた、ヒーロー達であった。

それを見た呼人は、軽く息を吸うと話し始める。

「親の話、つて言ってもそんなに関係がこじれてるとかじゃないんだが……。まあなんというか、俺の両親は個性が発現したばかりの俺の個性で亡くなっただ。それを偶然通りかかった今の同居人が拾ってくれたって感じだな」

「……………え？」

呼人の告白に、皆が呆けた声を出す。割と呼人クオリティーに慣れて来た障子と尾白も、こればかりはぼかんとした表情にならざるを得ない。

得てして、子供の頃の個性というのは『弱い』。それは個性の性質、特徴として弱いのではなく、個性の熟練度、あるいは性能が育っていない、という意味での弱い、だ。

そのため幼年期の個性の事故というのは結構あることだとしても、それによる死者とこのはかなり少ない。はずなのだが。

直後。その様子を想像した芦戸が口元を抑える。耳郎達と違って、知っている。彼女、想像してしまったのだ。あれが、どう、事故を起こしたのか。呼人の両親を殺し

たのかを。

実際はやったのはオドガロンではなく砕竜の状態でありとんだとぼっちりではあるのだが、呼人は彼女にその事を伝えてはいない。

「あ、芦戸？」

その様子に気付いた耳郎が彼女に呼びかけるが、芦戸は目を見開いたまま固まっている。

「まあ、そういうわけで俺は個性を制御するように頑張っているわけだ。一応言っておくが、今暴走する事は無いからな。そのときはそもそも、俺の自我が確立されてなかったんだ。だから、赤ちゃんが遊ぶつもりでじゃれたんじゃないかな」

実際の所、その事件の詳細について呼人はモンスター達からも聞いていない。少なくとも影響力の強い古龍種や竜達は一様に知っているだろうにも関わらず、ただそういう事故があつたとだけしか伝えてこない。

「じゃれる、って……」

「あれにじゃれつかれたらどうなるか、わかるだろ？」

人間形態ならばともかく、完全に変化したオドガロンの体躯は人間のそれの比ではなく、なんなら象なんかよりも遙かに大きく遙かに頑丈で。よほどの強者が来なければ止めようが無い。

「百竜の個性って、結局なんなの？」

「この流れで聞いたら絶対後悔すると思うんだが」

な？　と云われて、障子と尾白もうなずかざるを得ない。その光景は、想像してしまえば並のヴィランなど可愛いもので。ただ捕食のために暴れるオドガロンなど、恐怖の対象にしかなりえない。

「一応次の演習の時には実際使ってるのは見せようと思つてたんだけど……」

この様子じゃあそれもまずいかなと。呼人は咳く。が、耳郎達は止まらなかつた。

「後悔しても、今見たい」

「私も、だよ」

「……そうです。例え百竜さんの個性がどんなものであつても、私は後悔しませんわ」

そう言い切られてしまえば、ここで止める事は出来ない。が、それでも尾白と障子も懸念する。

「あんまり、食事の場で見ないほうが良いんじゃないかな」

「……俺も、そう思う。はつきり言つて、怖いだろう」

オドガロンは、何度でも言うが、他のモンスターたちと比べても見た目が少々異質である。他のモンスター達は、一部甲虫、甲殻系モンスターを除けば、恐ろしさの中にある種崇高なかつこよさとも言えるものがあり、生理的嫌悪感を生じない。

だが、オドガロンはどちらかと言えばおどろおどろしいかつこよさであり、生理的嫌悪に繋がる見た目をしている。

それでも、と。揺れながらも覚悟した表情を見せる芦戸以外の女子たち（多分葉隠も見せているのだろう）に、障子が以前撮影した動画を見せた。

爆豪に見せたものと同じ。

獲物を見定めるように睥睨しながら歩くオドガロンが、両足を踏ん張って大きく口を開けると、咆哮を上げる。

その口元にはライオンのそれすら可愛らしく見えるような牙が覗いており、足の爪は禍々しい形状をしている。

芦戸は自分の想像に恐ろしくなったのか、うつむいてしまっただけいつものその陽気さはない。

「……ヒッ」

怯えた声を出したのは、誰だろうか。映像が流れ終わったスマホを、呼人は回収する。「今のが、今日の体育祭で使ってたのだ」

少しの沈黙。尾白と障子は、絶句したとはいえ事前にオドガロンを見ていたこともあろうもう気を取り直している。何より、個性社会においては子供がいたずらで個性を使ったりまだ自我の確立してない子供が間違っただけ使ってしまうのは、割とよくあることであ

る。

呼人の場合は、個性が強力すぎただけ。彼に否はない。

「……見せてくれてありがと。ああ、どおりで百竜、あんまり見せたがらなかつたわけだ」

「怖いだろう？」

「怖くない……いや、怖いっちゃ怖いけど、でもそれを言ったら、どんな個性でも人を殺す可能性はあるんだと思う、から」

耳郎が言っているのは、道理の話。当然、この世のありとあらゆるものは人間を殺し得るわけで。個性なんか使っていない人間でも簡単に起こり得る。だから、呼人のそれもまたただの個性であつて、特段恐れるものではない。

「他の3人は？」

「私も、大丈夫ですわ」

「私も！ だつて助けてくれたし！ 怖くても大丈夫！」

「わ、私も大丈夫だよ！ ごめんね！ なんか話しづらいこと聞いちゃつて！」

3人の大丈夫という言葉に、呼人は少し嬉しかった。

確かに道理の話をすれば呼人の個性だけのことさら恐れるのはおかしい話で。けれど人間というのはそんな簡単なものではなく、同じ状況でも、見た目的に、あるいは感

情的に恐ろしいと感じてしまうものだってあるのだ。

例えば死体。一方は、電気のケーブルで首を絞められて殺されていて。

もう一方は腹を食い破られ、巨大な獣に食われたかのように体がバラバラになっている。

どちらがより恐怖を感じるかは、言うまでもない。

4人はその上で、大丈夫だと言ってくれた。

「ありがとう。正直怖いのも仕方ないと思うし、だから俺もそのうちそのうちって引き伸ばしてたんだ。馴染んでからの方が、怖がられないで良いかな、ってな」

呼人が軽くそう言うが、場の空気はまだ重い。それは恐怖に踏ん切りをつけたために、元の話に戻って呼人に申し訳ない事を言わせたという申し訳無さを感じていたからだ。だから呼人は、関係ない話をする。

「ちなみに、俺がなれるモンスターは一種類じゃなくて複数いる。こいつも、こいつも、体育祭の赤いモンスターとは別のものだ。ただ、こっちの黄色いのはこないだの鱗以上の使い方を学校でするつもりはないし、他のモンスターも危ないから基本的に使わないつもりでいる」

「えっ、個性が一種類じゃないの!?!」

「ほんとですの!?!」

バンツ、と机を叩く勢いで女子陣が呼人に詰め寄るが、呼人は落ち着け落ち着けとんだめる。

「俺の個性は『モンスターになる』っていう個性だ。多分。でその対象になるモンスターには、ちゃんと規則があるみたいだ」

「どういう規則？」

「それは言えない。まだ正確なことが判明してないからな。一応、ヒーローになるためには仕方ないし教師や友人なら少しは良いけど個性はあんまりひけらかすなって言われてるんだ」

「はー、じゃあ何でそのモンスターにしたの？ それが強いから？」

「強いと言うより、使いやすいからだな。赤いのも黒いのも、基本的に身体能力に優れたモンスターだ。普通に身体能力に還元されるこいつらは使い勝手が良い。黒い方は、赤い方よりも木とか建物の間を飛び回るのが得意だから、この二種類を使って学校に通おうと決めた」

話の中でモンスターがまだいることは明らかにしたが、その正体は明かさないことにした。理由はいくつかあるのだが、説明に時間がかかりすぎるし、恐らく怖がられ、また下手に知れると利用価値があるために周りがうるさくなるとアドバイスを受けているなど、呼人が我慢出来ることから厄介なことまで様々にあるのだ。

「ねね、じゃああの赤いの、どんなのか説明してよ！」

「説明？」

「そうそう！ 黒いのはまだ全部見てないけど、赤いのは全部見たから聞いたら説明してくれるんですよ！」

そう言えばそんな約束はしてある。葉隠はきつと、個性の話は聞いたしもつと隠しているものがあつたのもわかつたけど、だから 最初の約束通りで良いよと言ってくれているのだろう。

それに他のメンバーも頷いている。芦戸は……わかつているのか定かではないが。

「あのモンスターはオドガロンって言う名前だ。体表は鱗と硬筋っていう頑丈な皮膚で覆われてる。基本的な攻撃手段は爪と牙だな。後身体能力がかなり高い。走るのと、崖とかを登るのも結構得意だ」

「いつもはあの姿してないけど、なんか理由があるの？」

ちなみに、女子4人は、オドガロンの大きさを勘違いしている。呼人の話の細かい部分を忘れてしまった芦戸を含めて。だからそれが人間程度の大きさだと思っており、ならば普段から変身すればいいでは無いかと。

「便利さとパターンの使い分けの練習ぐらいかな」

「両方説明お願いします！」

楽しんでそう乗り出してくる（多分身を乗り出している）葉隠に皆が頷いているのを確認して、呼人は人間状態とパターンの話をする。

「人間の身体構造って、戦いの細かさっていう意味ではオドガロンよりだいぶ高いんだ。足と手を完全にわけけることで手が自由に行動出来るし、足も足で使える。オドガロンじゃあ、一本足で立ち上がって戦うなんて出来ないからな。あとは手がものを掴めるっていうのが大きい」

モンスター達の姿は確かに威風堂々としたものでその力も強大なのだが、その力の全てを余すこと無く使い切れているかというところではない。だからそれを、人間の姿で活用する。当然大きさが下がる以上パワーなどは大きく下がっているのだが、それを一点に集約できるのが人間の拳であり、足だ。

「パターンの使い分けっていうのは文字通りなんだけど、どんな形態だと相手が対応しにくいのか、あるいはどの形態からどの形態に変えらるとどう行動や攻撃のパターンが変化して、相手が混乱するか、っていう……」

うまく説明できないな、と呟いやいた呼人は、鞆からノートを取り出して簡単な絵を描き始める。簡単な絵と言っても、長年モンスター達の姿を絵にしてきたのだからその画力は半端なものではない。

「例えば、完全な人間の状態だと攻撃パターンはパンチとキック、後は関節技とかか。そ

して例えばここで腕をオドガロンの爪の生えた状態に変えたり、足をオドガロンの形を模したものにすると、人間の蹴りとかパンチとはまた違った攻撃が出来て、相手にどう対応すれば良いのか悩ませることが出来る、ってことだ。ただそれを完全に自由に作り変えてると俺の頭も混乱するから、なるべく多くのパターンを頭に叩き込んでおいて好きなきに使えるようにしてるんだ」

レベルで言えばただ爪を生やすとかではなく、腕を少し大きくして重心をそつちに寄せる、更に大きくして重心を更にそつちに回す、あるいは足を発達させて——そういうレベルの細かさで使えるように、呼人は鍛えている。

モンスターの姿になればモンスターの思考回路で制御できるし、人間の姿やそれに近いものであれば容易く行動できる。

だが両方の形から外れた途端、脳がバランスを取れなくなる。それを呼人は、モンスターたちとの対話で鍛えられた処理能力を使って使いこなしているのだ。

「絶対戦いたくない相手だね」

そう苦笑しながら言うのは尾白だ。

「そっなの？」

「強いけど轟君の方がすごくない？」

女子2人の質問に、尾白は自分の感想を述べる。

「人間は自然に自分のバランスを取れているんだけど、体が一部欠けてしまったり逆に増えるだけでバランスを取れなくなるんだ。例えば俺は尻尾があるから尻尾含めてのバランスを取ってて、尻尾が無くなると歩くのにも苦労するだろうし、逆にみんなに尻尾が生えてきたとするとそれに引つ張られる。でも百竜は、それを全部自分の脳で処理してしまってる。例えばそれを体を動かすことに回さなくても、それで戦況を把握して作戦を練られたらたまらない」

「流石にそれは買いかぶりすぎだ」

その尾白の褒める言葉に、呼人は苦笑するしか無い。

「全部体にしみつくまでやってるだけだ。頭はそんなに回らないぞ」

「……そうは思えないがな」

「多少回るとしても流石に尾白が言っているほどじゃないぞ」

そう答える呼人に、今度は芦戸が、耳郎が、葉隠が、八百万が、疑問に思ったことをどんどん投げかけていき、そこから更に話が皆の昔の個性にまつわる思い出話等に変わっていく。

(これが多分、楽しい、ってことなんだろうな)

胸の奥に灯るあたたかい感情に、呼人は初めて『楽しい』を実感した。

「……ジュースを飲み過ぎではないか？」

「ジュースまじうまい。やめられないかも知れん」

緊急の連絡を受けて体育祭を飛び出した飯田は、母に連れられて行った先で待っていた事実にも、動けずにいた。

兄がヴィランにやられたという連絡を受けたのは、体育祭の終盤だった。慌ててクラスメイトと教師に早退する旨を伝えて学校を飛び出し、向かった病院で待っていたのは、たくさんの医療器具に繋がれて横たわる兄の姿だった。

——あと手術が2分遅れていたら手遅れになるところでした。

そう告げた医者という言葉も、ただ音が耳を通り抜けていくだけで意味を理解できない。だが、兄の姿が。いつも凜々しく強い兄が横たわる姿が、兄に何が起きたのかを告げていた。

「ごめんな……天哉。……おまえが……憧れて……くれてん……のに……俺……負けちまった……」

その言葉に、後ろに立っていた母が衝撃に耐え切れず気を失うのを感じる。

と。自分がそれに反応出来ないにも関わらず、母の体を受け止める人物がいた。

「親御さんが来てんのか。後は俺がやっておくからあんた帰って良いぞ」

「いえ、私も結果確認を——」

「言い方間違えたな。個性使つてるところ見られたくねえから帰れ」

「……わかりました。しかし、このことは上に報告させて——」

「監視カメラなんか使つてんじゃねえぞ。もともと個性の利用に関しては最終決定権は俺にあるって約束だろうが」

丁寧に返す男の言葉を、粗野な口調の男が幾度も遮る。やがて、一人の足音が去っていくのが聞こえた。

「おい、あんた大丈夫か？」

そこに至つてようやく、天哉は何が起こっているのかと後ろ振り返つた。そこでは、分厚いコートを纏つた男が崩れ落ちた母を支えていた。

「あの、あなたは？　ここは——」

「一応ヒーローやつてるものだ。重傷のヒーロー一人治しに来た。お前、インゲニウムの親族か？」

「俺はインゲニウムの弟です。いえ、それより治すとは……？」

突然やってきた男の言葉に戸惑いながらも、天哉は必死に動揺を押しつけて男に答える。

「この女性、インゲニウムとお前の母親だろ？　ほんとは親御さんも目覚ましてるときに説明したいんだがな……」

そう言う男は、室内の椅子に天哉の母親と丁寧座らせ、医療器具に繋がれたままの天晴の元へと向かう。何をやる気かと天哉はそれを止めようとするが、男に手で抑えられる。

「こいつに目を通してくれ」

そう言う男は天哉に複数の用紙を渡すと、怪我で声を出せないまま目だけでそちらを追っていた天晴に話しかける。

「答えないで良いから黙って聞け。俺はあんたを治すよう言われてきた。俺の個性を使ってな。ただし、治す以上代償や副作用は存在するし、こちらから条件の提示もある。だから今から言う条件を聞いた上で答えてくれて構わない」

そう言う男は、男は己の個性の結果生じる事を説明し始める。

「俺の個性を使えば、あんたの傷は完全に治る。その代わり、寿命が恐らく2年ほど縮まる。老衰寿命だがな。その前に事故なんかで死ねば関係ないが、肉体の衰弱が本来のそれから早くなるってことだ。そしてこの先のあんたの個性の成長が著しく低下する。

すでに獲得している分は変化しないが、例えばエンジンの出力をあげようと訓練をしてもそれ以上ほとんど上がらなくなる。あんたの個性の限界値がどこにあるかはわからないが、それが今のラインよりほんの少し上に引き下げられると考えれば良い。そして体の方だが、恐らく俺の個性で治せばあんたの体はほんの少しだが斬撃に対する耐性と出血に対する耐性を獲得する」

それは、天哉が読んでいる用紙にも書かれていた。そしてそこには、今男が言わなかった事も書かれていた。

「待ってくださいー！ 兄が、もうヒーローを続けられない怪我だというのは本当ですか！？」

そう、渡されていた用紙には、一枚目に男の個性による治療に関する契約書。そして2枚目に書かれていたのは、天晴の正確な怪我の内容。

「そういう診断結果だ。だから俺が呼び出された。俺の個性を使えば怪我自体は完全に治り健全な体に治る。ただし、今言った通りの代償が必要となる。わかったら兄と相談してどうするか決める。時間は10分しかやれんぞ。怪我してからの時間が開くほど代償がでかくなる可能性が上がる」

男はそう言うのと、天晴の立っているベッドから少し離れた。退出するほどの時間は与えない。だからここで決めろ、と。

母親は氣絶しているが、インゲニウム自身が決定を下すのであれば、すでに成人して独り立ちしている以上問題ない。

男が下がった後、天哉は動揺しながらも兄天晴に声をかける。兄は話すのも絶え絶えな様子で、その言葉を聞いていた。

「兄さん、僕は……何が……」

だが、いざ天晴に向き合おうと、なんと声をかければよいのかわからない。

「兄ちゃんの、怪我は……治らないのか?」

途切れ途切れに尋ねた天晴に、天哉は言葉に詰まる。確かに、男から渡された用紙には診断結果が端的に文章で書かれていた。だがそれを天晴に告げるのは、あまりに酷過ぎた。

その弟の表情から悟った天晴は、力ない表情で笑う。

「あの人を……呼んで……くれ……」

「兄さん!? でも……!」

寿命が縮まる、と。そして個性の成長が無くなる、と。それが何よりも、天哉に男の個性による治療を躊躇わせていた。

もちろん、憧れる兄がもうヒーローを出来ないなど、とても信じられない。だがそのために、兄が自らの寿命を削っても良いのかは——わからなかった。

だが、兄の続く一言が天哉の心に刺さる。

「俺は……まだ、ヒーローで……いたい、んだ」

天哉にとって、兄はヒーローそのもので、兄こそがヒーローだった。

緑谷達がオールマイトに憧れを抱く中、天哉は兄に憧れていた。

その兄が、まだヒーローでいたいと言っている。それを止める事は、天哉には出来なかった。

そしてそれを見計らったのか時間が経過したのか、男がちやうど天晴のすぐそばまで歩いてきた。

「どうする?」

「あなた、を……頼れ、ば……まだ、ヒーロー……を……」

「そのために来たって言ってるだろ」

「……お願い、します……」

「兄を、お願いします!」

涙を拭って天哉は、男に向かって叫ぶ。兄はヒーローだ。自分も、彼にはヒーローでいて欲しい。誰よりも憧れた存在だ。彼が望むのならば――。

「オーケーだ。なら手伝ってくれ」

そうやって男は、兄の酸素吸入装置を外す。

「お前はインゲニウムの口を開けておいてくれ」

「何を……いえ、わかりました」

天哉が天晴の顎に手を添え、力の入らない兄に代わってその口を開かせる。

すると男は、コートのポケットから小さなナイフを取り出し、それを自分の手のひらに当てると、鋭く切り裂いた。

ジャツ、という音とともに手のひらに大きな傷跡が刻まれ、そこから血が溢れ出し、1秒後には血は止まっていた。その手のひらにたまった血を男が天晴の口の中に垂らすと、天晴の体がどくんと跳ねる。

「兄さん!？」

天哉が悲鳴のような声を上げるが、男は構わず天晴の口元に酸素吸入装置を被せ直す。

「5分もすれば全快する。後はその契約書に名前書いて判子押して担当の医師に提出しておいてくれ。書いてある通り俺の個性の事は守秘義務がある。母親にも『個性で治療してもらった』とだけ言っておけ」

そうやって男は、天晴の回復を待たずに退出しようとする。

「待って——」

「ああそれと」

そして、声をかけようとした天哉の言葉を遮る。

「体育祭、なかなかいい活躍だったぞ。飯田天哉。けどまだまだだな。仲間と切磋琢磨しろよ」

「え？」

呆けた声を上げる天哉に振り向かないまま手を挙げると、男は部屋から退出していった。

わけもわからぬまま嵐のように去っていた男に天哉は理解が追いつかず、復活した兄が声をかけてくるまでその場で固まっているのだった。

第26話 職場体験・0

2日間の休みが明けて登校日。

この2日間の休暇は基本的にいつもと変わらず訓練やパソコンの使い方^に習熟して作業を始めたりと忙しく過ごしていたのだが、初めて神王寺が食事に連れて行ってくれた。どうやら本人は用事で見ていなかったが、呼人が優勝していたことを知っていたために、これまで連れて行っていなかったこともあって、ということであった。

いつもどおりの速度で、学校に向かって自転車を飛ばす。人通りの多い通りでは無茶をすることはないが、雄英の直近には民家は無い。そのため、家からある程度離れたところからとばし放題になるのだ。

ちなみに呼人が人間状態で本気で漕いでも壊れないように自転車はそれなりにちゃんとしたのをネットの情報から調べて買っていた。ついでに言う^と神王寺は口コミよりも役に立たなかった。

「あ、ねえあの人って……」

「え？ 雄英高校の人？」

「うん、あの人、あの一番の人に似てた気がする」

「一番つて？」

「見てないの？ あのね——」

そんな会話が信号を待っている呼人の後ろではされていたのだが、信号が変わった直後に呼人が離れていくので子どもたちは声をかけることが出来なかった。

例年、雄英体育祭が全国的に見ても一大イベントということもあつてこの時期は雄英生、特にトーナメントに残った雄英生は一般人の注目を多分に集める。そのため特に電車通学など公共交通機関を利用してゐる生徒は大変な目にあうのだが、自転車で通学している呼人はその大変な目に合わずにすんでいた。

だが他のクラスメイトは違う。教室に入ると、すでに登校してきている者達が集まつて話していた。

「来る途中めっちゃ声かけられた！」

「私も！ みんな見てるからなんか恥ずかしかった！」

「俺なんて小学生にドンマイドンマイ言われたぜ」

「ドンマイ」

「梅雨ちゃん言わないで！」

やはり、特に葉隠や芦戸のように見た目から目立つ者や、瀬呂のように、様々な意味でだが、強烈な印象を残した者は一般人から色々と声をかけられている。

「あー、百竜おはよー！ 百竜も声かけられた？」

「おはよう。自転車とぼしてたから声かけようとしてた人はいたみたいだけど全部スルーしてた」

「鬼だ！ せっかく人気になったのに！」

「そうなのか？」

芦戸や葉隠が言ってくれるが、呼人にはあまりよくわからない。ヒーローとは人々に応援されてなんぼというところもあり、またそれが力になるものでもあるので人に応援されて喜ぶのが普通なのだが、英雄が^{ヒーロー}そうあるべきものなのかと考えている呼人には少し理解し難い考え方でもあった。

その後、詳しくないという呼人に葉隠や後から来た尾白がヒーローと人気の話をしてくれ、ビルボードチャートという順位のようなものもあると教えてくれた。そしてその上位にいることはヒーローの誇りであり、またヒーローの人気の証でもあると。

ちなみにオールマイトは長年1位を保持し続けており、それもまた彼が伝説たるゆえんだとも教えてもらった。

「今日のヒーロー情報学、ちよつと特別だぞ」

3日ぶりに見ると無事包帯が取れていた相澤が、教室に入つて早々に告げる。入学しからの期間で色々な目に合わされてきたために、クラスメイト達、特に『抜き打ち小テスト』をくらうと補習確実な芦戸、切島、上鳴らの顔は既に軽く強張っている。

とくにヒーロー情報学は他の一般課目と比べてもその内容が『ヒーロー、及びその活動に関する法律など』とかなり重く、苦手な者が多かった。だが。

「ヒーロ名、『コードネーム』の考案だ」

『胸がふくらむのきたああ!!』

ガッツポーズをして思わず立ち上がる生徒ばかりの中、相澤は注意する事無く続ける。彼のやり方が分かっているクラスメイト達は、一瞬で静かになった。

「でも、何でこのタイミングなんですか?」

「体育祭の日に話した『プロからのドラフト指名』で必要になる」

耳郎の質問に答え、相澤は先日そういうものがあると言っていたプロからのドラフト指名について説明する。

「指名が本格化するのとは2、3年からだ。その時期になれば経験も積んでいるし即戦力として見えるからな。だから今回の“指名”はあくまで将来性への“興味”という色合いが強い。卒業する段階でその興味が削がれていた場合には声がかからなくなると

「いうのはよくある話だ」

「勝手過ぎる……!」

「つまり、頂いた指名が現在の自分の指標、乗り越えるべきハードルとなっていく、という事ですわね」

八百万の言葉に相澤は頷く。

「そうだ。そしてその集計結果がこれだ」

相澤が示す先には、それぞれの生徒に来た指名の数がグラフ上にして示されていた。

一番数が多いのが轟の3782件。続いて爆豪の1984件。呼人は3番目に多い934件であった。

「例年ならもつと散らばるんだが今年は3人に偏った」

「あ、ー差がひどい!」

「無かったな緑谷! やっぱ怖かったんだ」

思い思いの感想を上げる中で、隣席の瀬呂が何かに気づき呼人に話しかけてくる。

「あれ百竜、お前少なくてね?」

「んーそうか? 体育祭で一番印象に残ってるのってなんだ?」

「何って……なんだろうな一番って言われてもわからねえけど、やっぱ俺は凍らされたのかな」

轟に瞬殺された瀬呂が答えると、それが何か関係あるの？ と瀬呂の1つ前の耳郎も尋ねてくる。

「いや、目立つし轟とか、後は爆豪の個性は強力だから将来性が凄いつてことだろ。逆に俺のは身体能力が少し高くなれば出来ることだし」

「……はんっ」

くだらねえ、と言いたげに爆豪が苛立った声を上げるが、呼人の推測はおおよそあっている。つまり、見ていて明らかにやばいのが轟や爆豪であり、呼人ののは頑張っている、言ってみれば戦い方を工夫してその程度か、と思われるようなものだったのだ。そのためこの指名数の差となった。

「轟と爆豪の差も結構あるな」

「暴言と面だろ」

「プロがビビってんじゃねーぞ！」

ちなみに爆豪と轟の差においてはそのイメージが大きな影響を与えていた。

「……指名の有無関係なく、みんなには職場体験に行ってもらおう。プロの活動を体験して現実に触れ、今後の訓練をより実りあるものに行おうってことだ。お前らは先に接してしまっただがな。そのためのヒーロー名。一応仮のものにはなるがあまり適当にする
と——」

「後で恥ずかしいことになっちゃおうよ！」

相澤の言葉を引き継ぐようにミッドナイトが教室に入ってくる。

「この時決めた名前がそのままプロ名になってる人も結構いるからね！」

「……そういうことだ。俺はその辺のセンスが無いからミッドナイトさんに来てもらった」

相澤はミッドナイトに場所を譲ると、教室の端で寝袋に潜り込む。それで良いのか高校教師。

生徒からそんな突っ込みをもらいながらも相澤は最後の説明をする。

「名前をつけることで、将来の自分のビジョンを明確にする。そしてそれに向けて努力を重ねる。それが『名は体を表す』ってことだ」

—— “オールマイト” とかな。

（ヒーロー名、一応考えておいたけど……実際どんなもんなんだろうか）

神王寺から『ジ・アドベンチャー』という彼のヒーロー名や、他のヒーローも本名以外に活動するための別名を持っていると聞いていたため、呼人も一応考えていた。というか、ヒーローを志す生徒にとっては、自分のヒーロー名を考えるとというのは、誰もがニヤつきながら通る道である。

「それじゃあそろそろ、出来た人から発表していこうか！」

やがてそれぞれがそれぞれに考えた15分間の後に、ミッドナイトがなんと発表形式でそれぞれ紹介するように指示を出す。

(発表すんの!?)

(恥ずかしいから誰とも話してないってのに……)

(おしつ、度胸決めろ俺!)

それぞれが発表するという少し気恥ずかしいことに尻込みしていると、クラス内でも轟とためをはって全く別の方向に何を考えているのかがわからない男、青山が率先して立ち上がる。

「輝きヒーロー I cannot stop twinkling!」

『短文じゃねえか!』

初っ端から大喜利のような青山のヒーロー名にクラスメイトの声が揃う。だが、本人は至って真面目だ。

改めて言おう。至って真剣である。

「少し長すぎるからIを無くしてcannotをcantに省略した方が呼びやすいわね」

ミッドナイトもそれに突っ込むこと無く真面目にアドバイスをするものだから、教室内には更に変な空気が漂う。

（あれは流石に例外、か？ ジ・アドベンチャーにオールマイト、イレイザーヘッド、プレゼント・マイク、ミッドナイト、13号……冠詞がのつてるのも神王寺だけだし。と
うか英語と仏語混ぜるなよ……）

否定語なんてものがついてるようなヒーロー名は、現役ヒーローに対する知識が少ない人は聞いたことが無かった。というか、一般的に短文をヒーロー名にするヒーローは存在しない。

大喜利の青山に続いて芦戸がエイリアン・クイーンという、有名な映画のエイリアンキャラクターの名前を自分のヒーロー名にしたが、あまりにもヒーローらしくない、というか元ネタが怖すぎると却下される。

だが続いて蛙吹が可愛らしいヒーロー名を紹介したことで場の空気が変わる。

「私、小学生の頃から決めてたのよ」

そう言つて彼女が出したボードには、『梅雨入りヒーロー“フロッピー”』という、可愛らしい名前が書かれていた。

「カワイイ!! とても親しみやすいわ!!」

ミッドナイトの講評に、蛙吹はケロケロツと少し恥ずかしげにしながらも笑う。

そして空気が変わったことで尻込みしていた他のクラスメイトも続々と発表を始めた。

「じゃあ次俺！ 烈度頼雄斗！」

「うちは『イヤホン』ジャック」

「……触手ヒーロー『テンタコル』」

そんな中、呼人も自分の考えていたヒーロー名を発表する。

「『ノーマン』」

「どういう意味で決めたのかしら」

「いや、なんか響きがかっこいいかなって。最初はコールマンって思ってたけどまんま過ぎますし」

神王寺は呼人を良くコールマンと呼ぶが、『呼ぶ人』で『コール（呼ぶ）マン（人、男）』というのはあまりにまんま過ぎる気がした。そんな中で『ノーマン』という言葉の響きの良さに気づき、それをヒーロー名と決める。その名の意味も、自分にぴったりだった。

ノーマン。No man. i am NOT a huMAN. 『人（man）にあらざる（No）者』。だからそれを、自分の名前にしようと。

席に戻った呼人に、斜め前の耳郎が話しかけてくる。

「（ねえ、ホントはどういう意味なの？）」

「（ほんとして？）」

「(あなたのことだからなんか考えてるんでしょ)」

「(……まあ、一応あるけどな。秘密だ)」

流星に自分の口からは言いきく、と。そう答えると、耳郎は少し考えこむようにしていた。

その後も順調に発表が進み、最後に残ったのは緑谷、飯田、爆豪。爆豪に関してはしっかり決めて発表したのだが、『爆殺王』とあまりにもヒーローっぽくなかったのでミッドナイトから却下された。

緑谷は普段爆豪からおそらくは揶揄混じりで呼ばれているであろう「デク」という呼び名を発表する。彼の性格と普段の行動から考えると、それは爆豪へのあてつけというよりは、爆豪の言葉すら糧にして、むしろそう呼ばれる自分の不甲斐なさを自分に戒めるといふような意味合いがあるように思えた。彼の説明によると、誰かの言葉でその呼び名への見方が変わる出来事があったらしい。

飯田はかなり悩んでいたが、まだ決めきれないと自分の名前、『天哉』で行くと発表。轟も名前をそのまま使っていたが、彼の方は『ショート』と一応ヒーロー名らしくカナナにしているのに対して飯田は完全に自分の名前である。

「正直……まだ自分がどういうヒーローになるべきか決めかねています。だからまだ、この名前を」

兄の、一時は活動継続不可能とすら思えた怪我と復活。恐れを抱いたというよりは、それだけのことを我が身に受けてもなおヒーローでありたいと願う兄の姿に、自分はどうあるべきなのかと、飯田は悩んでいた。

ちなみに最後まで残ったのは爆豪であり、ろくな名前にはならなかった。

それぞれのヒーロー名が決まった後には相澤から指名一覧をまとめた用紙が指名のあったメンバーに配られ、指名が無かった生徒には受け入れ先として学校が交渉した全国の事務所が職場体験先として選択可能だと指示された。

ヒーロー名決めが終わった後も時間は残っていたので、残り時間は職場体験先を考えることとなった。

のだが。

「ミミもわからん……」

指名があつた者がそれぞれに指名してくれた事務所の一覧に目を通し、指名の無かつたものが相澤の示した40箇所の受け入れ先から選ぶ中、呼人は誰が誰だかわからないその一覧を投げ出し、スマホでそれぞれの事務所について検索していた。

「……何をやってるんだ？」

「なんか百竜、力つきてない？」

「なんかいつもより元氣ない！」

早々と決めてしまい手の空いた障子と耳郎、葉隠が呼人の机へと集まってくる。前の席の爆豪もそのあまりの指名の多さに目を通すのに苦しんでいるようなのだが、呼人の方からはそれとはまた違う無気力が漂っていた。

「ヒーロー詳しく無さすぎて誰が誰なんだか全くと言っていいほどわからん」「え?」

「百竜くん、どんなところから来てるのか見せてもらっても良い?」

誰が誰なんだ、とうめく呼人を見かねたか純粹な興味か、後ろの席の緑谷も席を立つて近づいてきた。それに小さく頷いた呼人は、その指名一覧の書かれた用紙を渡す。障子達も興味があったか、緑谷の持つ用紙を覗き込みに行っていた。

「凄い! ベストジーニストにクラスト……」

「他にも有名なヒーローがいっぱいだあ!」

有名なトップヒーローばかりの名前に、それを見た緑谷が顔を輝かせ、他の者も感心した目を向ける。そこにやってきた上鳴も呼人の体験先が気になるようで、それを尋ねてくる。

「それで、百竜は結局どこ行くの?」

「……悩む以前にそもそもヒーローのこと全く知らないから誰がどんな事してるか全くわからないんだ」

そう正直に告白する呼人に、みんながまじかこいつという目を向ける。

「……ベストジーニストはNo. 4のはずだが……」

「知ってるのは俺の師匠ぐらだから、ほんとに誰が誰やら……」

調べてもスキヤンダルとかそんな話ばかりでどう調べたら良いかわからんよお、と
いつになく情けない様子の呼人にほほえみを漏らしながら耳郎が提案する。

「じゃあウチらで百竜にヒーローの説明する？」

「それ良いね！」

「緑谷くんは駄目だよ！ 絶對話長いもん！」

「ええ〜」

情けない緑谷の声に皆笑い声を上げるが、その提案自体は良いものだった。

「どうなさったのですか？」

そこに、自分も多くの指名に目を通した八百万がやってくる。彼女もかなりの数の指名をもらってはいたが、呼人ほど多くはなくまたヒーローに対する知識や自分のヒーロー活動の方向性もある程度考えていたため、かなり早い段階で決まっていた。

「あーそれがさ……」

と耳郎が呼人の事情を伝える。

「まあ、それは……大変ですわね」

「大変なんだよ。帰ったらしっかり調べてみようとも思ってるんだけど」

「特に有名な所だけ、百竜の指名の中から紹介すれば良いのではないか？ 全てを説明するほどの時間は無いだろう」

「それが良いと思う！ じゃあ緑谷くん、説明するヒーロー選んで！」

「あ、うん、わかった！」

ぐたつとしている呼人を放つて話がどんどん進んでいく。結局、緑谷が有名所のヒーローをピックアップし、皆がそれを説明してくれることになった。

後からやってきた尾白が呼人の肩を、ドンマイと言いたげに叩いていたが、呼人は頷くことしか出来ないのであった。

その放課後。流石に今日は訓練をしている場合ではないと教室に残り、協力してくれるみんなと一緒に職場体験先を決めようとしていた呼人は相澤に職員室まで呼び出されていた。

「少し遅れたがお前にもう一箇所指名が来てる」

連れられるままに職員室へと行くと、相澤はパソコンから一枚の用紙を出力して手渡

してくる。

「ありがとうございます」

ただ用紙を渡すだけ。それだけならばわざわざ職員室まで呼ぶ必要は無いはずで、合理的な相澤が職員室まで呼んだ以上はそれ以上の話があるに違いなかった。

「お前、そのヒーローは知っているか？」

手渡された用紙に目を通すと、何故か他の指名が『〇〇事務所』という名義で送ってきているのに対して、その用紙に書かれている指名先はただ『ミルコ』と、恐らくヒーロー名だけが書かれていた。

「いえ、知らないです」

そう正直に答えると、相澤は軽くため息をついてから呼人を睨む。

「お前、訓練するのは良いがヒーロー目指すなら今どういうヒーローがどういう場面で活動してるかぐらい調べておけ。参考にする必要も出てくるだろうしいざヒーローになったら独りでやっていくわけにはいかないんだ。情報収集もヒーローの仕事だ」

「はい。痛感しました」

他の生徒に集われて教えられていた呼人の姿は相澤も見ていたので、実際にわからないうことの不都合に気付いてはいるのだろうと相澤は考えていた。そのため、それ以上注意することはない。

「……やっておけ。そしてそのヒーローは、正に『一人で活動するすべを心得ている』ヒーローだ」

言葉足らずな説明に、呼人が眉をひそめると、相澤は改めて詳しい説明をする。

「ヒーローは基本的に事務所を構えたり相棒を持って活動する。だが中には、そのヒーロー『ミルコ』のように事務所も無く相棒も持たないヒーローもいる。彼女はその中でもトップクラスの成績を残している」

「だから俺の参考になる、ということですか?」

「……決めるのはお前だが、お前のひたすらに強さを求めるスタイルを考えればそうだ」
これ以上は教えないから後は自分で考えろ。そう言いたげな相澤に礼を言っ呼人は職員室を出る。

教室に戻ると、障子に緑谷、葉隠、尾白ら、放課後にまで手伝ってくれているクラスメイトが待つてくれていた。流石に情報学の時間ほどの人数はいない、というか、説明するのはそれほど人数が必要ないことがわかったので、相談してこのメンバーが残ってくれたのだ。

「あ、百竜くん!」

「おかえり百竜くん! なんで呼ばれたの? 怒られた?」

直球で尋ねてくる葉隠に呼人は首を振り、席についてから答える。

「ちやんと自分でも情報収集はしておけて怒られた。後、あと一箇所指名が遅れてきたから見ておけて」

「指名？ どこから来たの？」

興味津々な様子の子の緑谷と葉隠が見えるように、机の上に用紙を置く。

「ミルコって、あのミルコ!？」

「私も知ってる！ 凄い人でしょ！」

「……凄いな」

「彼女なら俺も師事したいよ」

それぞれに驚きの声を上げる3人から、代わる代わるミルコのことについて教えられる。彼女（ミルコとは女性のヒーローらしい）はヒーローに珍しく事務所やサイドキックを一切持たずずっと1人で活動しているヒーローであり、それでもトツプヒーローに名前を連ねる武闘派ということであった。

「相澤先生が、この人からは俺が学ぶべきことが多いって言った。1人でヒーローをやってるからだと言ってたが……」

どういう意味だろうか、と首を傾げる呼人だが、それに關しては他の4人も首を傾げる。ミルコはたしかにトツプヒーローだが、他のヒーローの活動方法と比べると異例と言ってもいいほどのものであり、学ぶにしては少し特殊過ぎるように感じる。

「ただ活動を見るためだけじゃない……ということは何か別の意味で学べるものがある。彼女独自のものと言えばまずは強さ。そして1人で活動しているということ。彼女のスタイルはヴィランの制圧が主だけでも——」

「緑谷落ち着け」

いつものようにブツブツと思考を回し始めていた緑谷を障子は諫める。

「じゃあ百竜くん、ミルコの所に行くの？」

「そうだな。一応他のヒーローも調べるけど、先生の言ってることは気になるしミルコのところに行ってみたいと思ってる」

「彼女も格闘戦が得意だから、百竜の動きを見て指名したのかもしれないな」

「なんにせよ、ミルコの事も調べないと行けないな、と、やることの多さに辟易する呼人であった。」

第27話 登攀訓練

ヒーロー名決めから週が明けて月曜日。久方ぶりのヒーロー基礎学の演習が行われる日である。今日の演習は登攀、つまり崖登りの訓練であり、コスチュームの着用が義務付けられていた。

「壁登りか……今日個性を見せるのか？」

「そのつもりだ。まあ一応見せろって言うってくる相手にはだいたい見られてるんだけど。ずっと見せないまんまってのも今後の授業で困るだろうし」

コスチュームに着替えて移動している最中に障子が声をかけてきた。

「ふむ……確かにそうだが……」

「というかそうでもしないとどう見せるのかがわからんままするいく可能性が高い」

「確かに一理ある、か。お前はあまり雑談したがるようなタイプではないからな」

「なんだろうな。自分から自分の事を話すのは不得手なんだ。聞かれればいくらでも答えるんだけど」

「そうか」

その後はちよつとしたトレーニングの話や組手の話をしながら歩いてみると、目的の崖を模した訓練施設、というか天然の崖を利用した訓練施設に到着する。広大な敷地面積を持つ雄英高校はその敷地内に森林や山などの自然すら内包しており、こうした訓練施設の一部には自然をそのまま利用したものも存在している。

「障子はどう登るんだ？」

「……腕を複製してリーチを伸ばしながら登るだろうな。複製した腕は腕力も高い」
「なるほど。そうなるか」

ヒーロー基礎学ではさすが雄英のヒーロー科だけあつてか、一般人なら全く知らないような知識もどんどん教えられる。例えば今回の登攀の技術もそうで、大抵の生徒はそれぞれ個性を活用した登り方を考えるように言われており、それが難しい生徒も通常の登攀方法を映像つきで教えられていた。

今後どんどん基礎訓練が入っていくのだが、演習の場では最初の戦闘訓練のようにあえて実戦に近い形を最初につつけて、その後そこから基礎的な部分に戻るといった形を取って講義が行われている。

「H A H A H A！ 私が来た!!」

生徒が全員揃った所で、オールマイトがド派手に空から落ちてくる。いや、着地してくる。教室ではただ入り口から元気よく入ってくるだけだが、こういう彼の力が発揮で

きる場所になると派手な登場の仕方を好むようだ。

また、先日のヴィラン襲撃以降の警戒態勢もあって、イレイザーヘッドも授業を見に来ていた。

降ってきたオールマイトのかつこいい着地姿勢に生徒が湧く中、オールマイトは早速授業を始める。

「今日は先日も言った通り登攀の訓練をするぞ！　と言つても初めての登攀訓練だから無理はしないでくれ！　無事に登つて降りてくる事を第一に考えてほしい！　最初に私がお手本をするから見ていろ少年少女！」

そう言うオールマイトは軽くしゃがみ込み、そこからぴよんと、ほんとにぴよんと言いたくなるぐらい軽いノリで、しかし勢いはドンツ　という音が聞こえるぐらいのもので崖の上へと飛び上がっていった。

そして崖の奥で何かを拾って、再び飛び降りてくる。

「このように崖の奥に棒を置いてるから、登つた後はそれを確保して降りてきてくれ！」生徒達の反応はポカンと言ったものだ。崖の高さは20メートルほどあるのだが、オールマイトはのぼるというか、軽くジャンプして上がって軽くジャンプして降りてくるといふ、まるでそこにあるのは壁ではなくただの石ころであるかのような動きをするのだ。

参考にならない、というか、それを言葉で説明すればそれで十分なのではないかと思いたくなるようなお手本である。真似できるのは爆風を利用できる爆豪と、足を壊す覚悟であれば緑谷ぐらいなものだ。

その後、生徒がそれぞれに分かれて、アドバイスや確認をしあいながら壁を登ってみる。といつても本当にいきなり難しい課題をぶつけているので、今回はオールマイトもいきなり成功させることは求めていないのだ。そのため、競争させるような形も取らない。

「落ちたらどうなるものかと思つてたけど、一応下にショック吸収用の装置があるんだな」

「……流石にいきなり下に何も無い崖は、使わないのではないか?」

「俺の常識はずれてるしヒーロー科の常識もわからんから気になつてた」

オールマイトの説明では、落ちそうになつたときには彼かイレイザーヘッドが必ず救出すると言つていた。その代わり全員一気にはなく、最大4箇所までしか同時に登つてはいけないと指示されている。

「下のマットは念の為ぐらいの扱いだろうね。オールマイト先生も相澤先生もスタンバイしてくれているし」

「尾白はどういうアプローチで?」

「俺？　俺は普通に登ってくるよ。これぐらいの崖なら登れるように鍛えてる」

武道を嗜んでいる尾白は、クラスの中でも特に体を鍛えるとともにその扱い方にも習熟している方である。そのため、壁を登るぐらいのことなら特に問題なく出来るのだ。

「呼人は？」

「前言った通りオドガロンで駆け上ってトビカガチで飛び降りてくる」

「あのぐらいの壁じゃあ役不足なんじゃないか？」

「……このまま見せないでいるとそのままする引きずって放置する自信がある」

「……自慢気に関係ない時に見せたくはないが、見せ所がわからないということだな」

「へタレだね」

「ずっと一緒にいた奴としかコミュニケーションしてない人間に期待しないでくれよ」

呼人だつて見せびらかしたくはないが、今後もずっと演習や基礎訓練などで個性を使った連携なども行っていくのだ。そのときに何が出来るのかがまったくわからないというのは問題である。あまり頼られるのは困るが、相手からすれば最悪こう言う暴れる手段もあるのだと警戒する必要がある。出てくるので訓練にもなる。

だから、全部を見せることは出来なくても使うつもりであるオドガロンとトビカガチの能力は見せておくべきなのだ。

そんな雑談をしていると、やがて順番が回ってきたので最初に尾白が登ることにして

壁に取り付く。

他の生徒も同時に登っており、他生徒の中ではやはり爆風による飛行が出来る爆豪や、足場を作れる轟、黒影の力を借りて体を支えることが可能な常闇に、蛙さながらに壁を登ることの出来る蛙吹などが秀でていているようだ。

そんな中尾白だが、轟や爆豪、常闇のような派手さと見た目の凄さは無いながらも、尻尾を重心移動や支えに活用してスルスルと岩壁を登っていく。鍛えた体の能力が十二分に発揮されているようだ。以前呼人は彼の手足を貧弱と言ったがあくまでそれは呼人と比較しての話であり、様々な活動をする事を考えると、大きすぎず弱すぎず、柔軟で十分な筋力であった。

「……器用だな」

「ああ。体の使い方がうまいな」

障子もまた尾白の登り方に感心していた。しばらくの間呼人たちとともに組手や訓練をしたことで、体を動かすことへの感覚ができて始めていた障子には尾白の凄さが理解できたのだ。

やがてまともに登れないクラスメイトが多い中ちゃんと登りきることに成功した尾白は、尻尾で棒を捕まえると壁を下ってくる。

その動きも登りと比べると遅いが、それでも着実に下まで棒を持って降りてきた。棒

の長さは80センチほどでとても手に保持したまま壁に手をかけられるようなものではなく、尾白の尻尾という5つ目の四肢が上手く機能していた。

「障子もあの手の使い方は参考になるんじゃないか？」

「……そうだな。四肢に加えて使えるパーツの多い俺達の利点だろう」

そう会話しながらも、尾白は触腕の先に腕を複製して尾白の動きを再現しようとしていた。体の動かし方に関しては先達を模倣した方が効率的な場合が多いのだと、呼人と尾白との組手や訓練を通して障子は学んでいた。

「ん、じゃあ次俺登ってくる」

戻ってくる尾白と入れ替わりに呼人は障子の元を離れて、壁から少し離れた位置に立った。

壁に取り付いている人がちようど途切れるタイミングを確認すると、瞬間的にオドガロンに変身して崖の上へと飛び上がる。20メートルの壁は人間にとっては大きな壁にはなるが、全長13メートルを誇るオドガロンにとっては少しばかり大きめの段差に過ぎない。

オールマイイトほど力強くというわけではないが、ストツとかるく崖の上に跳び乗ると、トビカガチへと変身して地面に立っている棒のうち一本を口にくわえ、崖から身を躍らせる。

そして地面直前で手足の間にある皮膜を広げて勢いを完全に殺し、人間に戻って手に棒を持ち着地する。

その一連の動作には、わずか10秒ほどの時間しかかかっていなかったが、クラスメイトは気付いたものからそれに目を釘付けにされていた。

一方周囲の目を集めた呼人は居心地悪そうに障子と尾白のところへと戻ってくる。

「……やっぱり目立つの好きじゃねえ。ワフツ」

居心地悪そうに戻ってきた呼人をねぎらうように、尾白が尻尾のもふもふの部分で顔をなでてきた。

「お疲れ様。やっぱりでかいな。この壁があの大きさの前じゃあ大した壁に見えなくなる」

「……次は俺の番だ」

「いってらっしゃい」

入れ替わるように障子が壁に向かっていき、呼人と尾白はそれを見守りながら2匹のモンスターについて話す。周囲では呼人に注意を持っていかれた他のクラスメイトがオールマイイトと相澤から注意を受けていた。

「黒い方、トビカガチだっけ？ 皮膜みたいなのがあると思ったらムササビに近いんだな」

「ん、気付いてたのか。そうだな。あれで滑空して木の間を飛び回る感じだ。大きさを人間に調整すれば街中でも使える」

そういう意味でも街中での機動力を考えて、トビカガチを常用しようと思ったのだ。自由に、というほどではないが、障害物が大きく多いほどトビカガチの移動力は高くなる。直線の無い路地なんかで言えば、オドガロンのそれを越えていくかもしれない。戦闘力に関してはそれほど高い方ではないモンスターだが、力の使い方を考えれば活躍する場所は十分にあるのだ。

「また背中に乗せてもらいたいな」

「……また、な」

USJの件では、尾白に乗せた状態でかなりの速度でダッシュした。あれが完全にフルスロットルというわけではないが、それでも生身で、またモンスターの躍動感を受けながらの移動は心地よかったのだ。

「お前は尻尾で支えられるから良いとして、他の奴に催促されると下手に乗せづらいらな。鞍が必要になる」

「一緒に個性を鍛えてくれた人がいるなら持つてるんじゃないのか？」

「家にはある。ただ持つてくるのが大変だろ」

大型のモンスターに乗せるための鞍ともなれば鞍単体の大きさが3メートル以上の

巨大なものになってくる。そんなものを持つてくるのは大変だし、何より持つてきても置いておく場所が無い。

「モンスターに変身しているときはコスチュームはどうなってるんだ？ 体育祭じゃあ

本来の大きさには変身できなかったんだろ？」

「コスチュームは全部俺が作った素材で出来てるんだ。モンスターの皮とか毛とかでな。だから変身するときには、俺の中に取り込んで、変身を解除するときにはまた外に出すことが出来るように訓練してる」

「それも訓練したのか」

「最初は一回取り込んだらまた素材に逆戻りだったからな……」

何回も外に出したものを少し加工しては戻して、また出すという事を練習し続けたものだ。コスチュームもそうなのだが、カナダで個性の検証や訓練をしている頃にはいちいち変身するのに素っ裸になる必要があり、日本に来るに当たってはそれを克服するために神王寺の親しい企業で呼人の提供した素材を元にコスチュームだけでなく普段の服なども作成してもらっている。

特に下着は基本的にそうした繊維から作ったものばかりだ。続いて優先しているのがズボン。シャツは最悪ふつとばしたとしても上半身裸になるだけでそれほど問題はないため、市販のものと専用のものが半々ぐらいだ。

「……ずいぶん注目されてるみたいだけど?」

「……こうなりそうだからあんまり見せたくないんだ。見せる度にこんなことになるとしんどい」

「そういう意味ではその2匹に制限してるのは良いのかもね」

憂鬱そうな表情を見せる呼人をよそに、尾白はおかしそうに笑う。強力な個性と高い実力を持つ呼人だが、その感性は割と普通の少年なのだ。たまにずれてることがあるので完全に、とは言えないのだが。

「障子は、2人ぐらい背負っても上り下りできそうだな」

「パワーが凄いからね。体も大きいし。後は技術さえ身につければ……」

モンスターの話の次に話題に上がる障子は、触腕を上手く使おうとしているものの登るのに苦労していた。確かに四肢が他のものより多く上手く活用しようとはしているのだが、好きなどころに手を伸ばすことが出来ない登攀に合わせる事が出来ていないのだ。そのため、増えた四肢を持て余しているとも言える。

「……あの個性なら、もつと良い登り方があると思うか?」

「……どうだろう。爆豪みたいに飛んだり出来ないだろうし……。むしろ障子はあれだけ手が増やせるんだから道具を持ってもいいと思うんだけどな、盾とかロープとかピッケルとか。同時に使える数も多いし」

「確かに。それはありかもしれないな」

障子の苦勞する姿を見ながら、2人はその個性の活用法について考察していた。個性にはそれぞれの特徴があるため他人の個性について考えても直接的な意味はないのだが、思考を柔軟に広げる練習という意味ではかなり効果的だ。また敵の個性で何が出来るのかという想定を立てる際にも必要となる能力なのだ。

「相澤先生はどうやって登るんだろう」

「……普通に登るんじゃないか？ 木でも生えてたらもつと早いかもしれないが、流石に壁面は捕縛出来ない気がするが……」

それこそ木が少しでも生えていればその間を捕縛布で軽く飛び回って登っていく。うなものではあるが、ただの壁面というのは邪魔なものがない分頼れるものもない。

「……むう、厳しいな」

登攀の途中で登れずに降りてきた障子のもとに、呼人と尾白は近づいてアドバイスをする。

「先に登れるルートを考えるんだ。1つ1つ届く所しか考えてないとつまるから。あと障子は腕を複製すればリーチが長いからその射程を把握するか、別の触腕で目を複製して手をかけられそうなところを探したりしてみた方が良いと思う」

「なるほど。……それは効果的かも知れないな」

登りながらの障子の様子を見てからのアドバイスを尾白が伝える。障子は触腕を複製して全部で6本の腕を複製して壁を登ろうとしていたのだが、体を支えるならば腕は触腕含めて3本もあれば十分であり、そのほかの触腕から常に腕を複製しておく必要はないのである。

それならばむしろ、視点を自由に移動できるといふ利点を活かして掴む先を確認した方が良かった。

「……もう一度登ってみよう」

「おう」

そう言って障子は再び壁に向き合った。まだ体を動かすことに慣れきったわけではないが、その片鱗は見せつつある。恐らくもう少しすれば、壁を登るような作業も簡単にこなすようになるだろう。

「百竜は、人間のままで登れるよな？」

「登れる」

「だと思った」

それぐらいは当然鍛えてある。変身するのはまた今度にするか、全員に動画を見せればよかったかなと若干後悔する呼人であった。

授業終了後。案の定、と言うほどにはクラスメイトに質問攻めにされることなく、むしろ若干遠巻きにされる呼人のところに、苦笑交じりの尾白と障子がやってくる。

「見事に怖がられたね」

「でかいからなー。それこそ犬ぐらいの大きさならあもならんかっただろうけど」

なにせ、人間が目のできる陸上生物の中で最大の種である象ですら、最大でも全長は4メートルほど。側面から見た時に正方形に近い体躯をしているために体高こそ近けれど、見た目の威圧感で言えばオドガロンやトビカガチの方が遥かに大きい。

「まあ、見せたい聞かれないなら聞かれないでそれも良しではあるんだけどな」

結局見せたものを聞かれたら答える

そうこう言っている内に、若干興奮気味の芦戸、葉隠と、それに引きずられるようにして耳郎が近づいてくる。いつも耳郎と一緒にいる八百万は、まだ授業の振り返りをしている崖の近くに立っているようだ。

「百竜！ あの大きいのはこの前見せてくれたの!? あんな大きいとは思わなかった

よー」

「芦戸には言ったと思うんだけど。全長13メートル、全高4メートル、つて言わなかつ

たっけ？」

「覚えてない！」

堂々と言い切る芦戸にため息をつく。あまりこんな事は言うべきではないと思うが、そりゃあ小テストで補習をくらいまくるわけだ。

「百竜くん！ もう一回見せて！」

「今変身したら怒られるだろ。変身したらめっちゃくちや目立つんだから」

「えー！」

芦戸と葉隠が揃って声を上げるが、見せれないものは見せれない。腕を変化させるぐらいならまだ許される、というか黙認してくれているのだろうが、実寸大のオドガロンになるとなると話が違ってくるのだ。絶対個性の無断使用で注意を受ける。

そんな中呼人は、いつも騒がしいというわけではないがそれでも話を傍観していると、いうわけではない耳郎が何も言わないことが気にかかったが、2人が更に尋ねてくるのでそちらに答えるために向き直る。

「じゃあじゃあ、黒い方の特徴説明してよ！」

「黒い方はトビカガチっていう名前のモンスターで、鱗と所々に体毛があるんだ。後は木を登るのが得意で——」

一瞬しかトビカガチの姿を見せなかったために説明にはその特徴の説明も要求され、

なかなか話すのに時間がかかった。

更に放課後には上鳴や切島、瀬呂ら、他のクラスメイトにも障子が撮影した映像を見せながら紹介することになってしまった。映像もLINEを通してクラスに拡散されたため、よく見ていなかったものも全員がそれを見ることになったのである。

ついでに、ヒーローオタクの本領を発揮した緑谷にしつこく尋ねられた呼人が緑谷に食事をおごってもらいながら長いこと話し混んだたのはご愛嬌である。

第28話 職場体験・1

日は流れて職場体験の日がやってくる。

これまでと特に変わわずに学習と訓練の日々を過ごしていた呼人だが、職場体験に向けて少しばかりヒーローについても調べていた。主に自分を指名してきた事務所とその事務所の有力なヒーローの経歴や活動について調べたり、ヒーローのランキングを調べたりと、相澤に言われたとおりに情報収集を。

これに関してはインターネットの利用に長けていない呼人よりもそういう分野をかなり得意とする神王寺が詳しく、たまに帰ってくる神王寺に調べ方について尋ねることでインターネットを利用した情報収集の仕方を教えてくれた。

「お、なんだヒーローに興味が出てきたのか？」

自分でも少しばかりヒーローについて調べてみた呼人は、あまり思っているほど詳細な情報が手に入らない、というよりは呼人の求めている戦い方などよりも所謂スキャン

ダルのような内容ばかりであったため、少しでも詳しい人間に尋ねようと神王寺にどのような情報を収集すれば良いかを尋ねてみた。

「もともと興味はある。ただ、実際にどういうヒーローがどういう場面で活動してるかは知らなかったからな」

「そりや言いたいことはわかるが急な話だな。なんかあつたか？」

普段は己を極めることにしか興味が無い呼人の珍しい質問に、神王寺は興味深げな反応を見せた。それだけ、呼人が外の具体的な個人に興味を向けるというのは珍しいことなのだ。

「神王寺はドラフト指名って知ってるか？」

「ドラフト？ いや、知らないが……なんかを選ぶのか？」

全く知らないといった様子の神王寺に、呼人はプロからのドラフト指名と職場体験について質問する。

「なんだ、そんなおもしろそうなものがあんのか。俺も誰か指名してみりゃあ良かったかな」

そう言う神王寺は、体育祭を見に来ていて最後の方だけ用事で抜けていたらしい。そのため、一応指名を出来る程度には一年生の動きを見てはいた。とはいえ、である。

「あんた教えられるほど今のヒーロー業界に精通してないだろ？」

「まあな。まだ戻ってから半年も立ってないし。けどずっと情報は拾ってはいたんだぜ？」

「あんた普通じゃ考えられない無茶するだろ」

呼人のじとつとした視線に、神王寺は心外だと言いたげに肩をすくめる。

「一応普通の常識も知ってるからな。教える相手によつてはちゃんと常識を使い分けるさ。お前にも一応最初は常識通りにやろうとしただろ？」

「覚えてないな」

今度は呼人が首をすくめる番である。神王寺は最初呼人を拾った時、普通の常識を教えながら育てようとしていたし、なんなら日本の孤児院にでも入れてやろうとはしてくれた。

ただ呼人がモンスター達と対話することが出来たために、普通の孤児院で手に負えるとは思えず自分の手で育ててくれたのだ。多分に呼人の個性に対する興味もありはしたが。

「まあ良いや、そういうことならネットの使い方を教えてやるよ」

そう言つて神王寺は自分のノートPCを持つてくると、合法的な情報収集の方法を呼人に教えてくれた。ちなみに呼人にはそういう技術があること自体教えていないが、神王寺は非合法的なネットを用いた情報収集、すなわちハッキングなども得手としてい

る。自分の個性が直接戦闘向けにも偵察向けにもならない事を知っていた学生時代の神王寺は、自分に来れることを、と情報収集の方法を模索したのである。

現代社会においてはそれらも個性を用いて行う者が多いのだが、神王寺はただ己の鍛えたハッキングスキルでそれを達成していた。

「お前はどこに行くのか決めてるのか？」

「いや……一応先生には一箇所進められたからそこを第一希望にしてみようと思ってる」

「お前の担任誰だっけ？」

「イレイザーヘッドっていうヒーローらしい」

そんな会話をしながらも、神王寺の手は止まらない。サクサクネットのサイトやページを巡って、情報収集に良さそうな場所を探していく。

「ちなみにその第一希望は？」

「ああ、第一希望は——」

職場体験当日には、それぞれが行く先が違っており、近場のヒーロー事務所で職場体

験をする者もいれば、遠方の、それこそ九州地方まで行く者もいるため、一度朝に駅に集合してからそれぞれに出発することになっていた。

いつもどおり早めに、とはいえ自転車を止めておくことが出来ないため神王寺に車で送ってもらった呼人は、数日分の着替えや自前の本などが入った鞆とコスチュームの入ったケースを持って駅へと到着する。職場体験を申し込んだヒーローから、移動を繰り返すので荷物は小さくまとめておくようにしろとの連絡をもらっていたので、それに合わせてスーツケースなどは使用せずにリュックサックだけを使っている。

「おー、百竜早いな来るの！ おはよう！ 俺一番のりかと思ってきたのに」

集合場所らしきところに最初に到着したのが呼人であり、次に来たのが切島だった。

「おはよう。遅れるのは嫌だから早めに来ておきたかったんだ。別にここに来ても本読んでもいいからな」

そう言つて呼人は、鞆から出した本を示す。

「お前、ほんとに真面目だな。学校でもずっと本読んでるし、結構訓練も頑張ってるだろ？ あんまこう言うの聞かない方がいいのかもしれないけど、なんでそんな頑張れるんだ？」

切島とはあまり会話をしたことが無かっただけに、ちようど良いとばかりに切島は疑問に思っていた事を呼人に尋ねる。高校からヒーローを目指そうと

「ん、いや……なんていうんだろうな。訓練も読書とか勉強で知識を蓄えるのも、自分を高めるのが普通というか……好き、なのかな。まあ他の楽しい事をほとんど知らないってのもあるんだろうけど」

「楽しい事をほとんど知らない、ってどういう事だ？ 映画とアニメ見たり、漫画読んだりゲームしたりはしないのか？」

切島の、ある意味当然とも言える質問に呼人は苦笑する。それは障子や尾白にも言われたことのある言葉だ。

「生まれてからずっと、自分を高めることばかりしてきたからあんまりそう言うのに詳しく無いんだ。時間が出来たらいつかやってみたいと思ってるんだけどな」

「生まれてからずっと、って……」

ひかれたかな、と思つて切島の顔を見ると、目を輝かせていた。

「凄いなお前！」

「お、おう？」

「俺も強くないといけないとは思うんだけどよ。どうしても友達と遊ぶのとか楽しくてそつちに行つてしまふんだよな」

「ああ、そういうことか。楽しいことがあるならやつておいた方が良いだろ。自分で言うのもなんだが、俺みたいにひたすら強くなる事しか考えないってのも異常なもんだと

思うぞ。なんにしろ、適度さが必要だと思う」

自分でも、呼人は自分が少しばかり人間として普通では無いのはわかっている。だが、普通に返ることも出来ないのだ。自分はそうあつてはいけないのだと。多くのことを知った自分は、ただただ己を鍛え続けなければいけないのだと。

それが、呼人が自分に無意識のうちに課してしまつた鎖である。

モンスター達もそれを懸念しているのだが、そもそも考えの前提からそれがある呼人に、普通の人間としての楽しみを、と言つた所で上手く理解することが出来ないのだ。だが。

「まあ、たしかにそうだけだよ。お前も強くなるのとか本を読むのが楽しくてやってるんじゃないのか？」

切島の言葉に、呼人は目をまたたかせる。

「そう、なのかな。楽しい……よく分からないけど……やってて嫌な気はしないけど、もうやってて当たり前っていう感じはあるんだよね」
でも楽しい、楽しいか。どうなんだろ。

そう言つて首を捻る呼人に切島は奇妙なものを感じながらも、それなら、と笑う。

「なら、これから楽しいこと色々やろうな！ 学校の行事とかクラスのみんなで遊んだりとか！」

「……ああ、そうだな。俺も、楽しいことをやってみよう」

呼人がそう言って笑うと、切島も満面の笑みを見せる。

「おうー」

まだまだ人間としての普通を知らない呼人だが、それはクラスメイト達との、仲間たちとの交わりの中で育まれていくのだ。

「そう言えば、百竜は職場体験どこ行くんだ？俺は仙台のフォースカインドのところに行かせてもらうんだけど」

「どこというか……ミルコの所で職場体験させてもらうんだけど、事務所持っていないから拾いに来るって言われてるんだ」

呼人の言ったミルコという名前に、切島は目を見開いて驚く。

「まじかよ百竜！ 凄いなお前！」

「相澤先生が、俺は一度一人で活動するミルコの活動を見ておいた方が良くって言うてくれたんだ」

「やっぱ優勝するとすげえヒーローから指名が入るんだな」

「数は轟にも爆轟にも負けてたけどな」

「いやそれでもすげえよ！」

呼人の職場体験先であるミルコというヒーローは、ビルボード・チャートにおいて

トップ10に入る有力なヒーローでありながら事務所やサイドキックを一切持たず、日本中を駆け回ってはヴィランを退治するという一風変わった活動形態を持つヒーローだ。その実力は相当に高く、また女性ヒーローの中で最高順位を持つという特徴もある。

スタイルは完全な武闘派でありながら個性をうまく活用して偵察や救助でも高い実績を持つ、言ってみれば1人で全ての事を出来るという、稀有なヒーローでもある。

「せっかく声をかけてもらえたんだから、ちゃんと勉強してこないとな」

「うおー！ 俺も負けねえ！」

「切島声が大い。場所を考えろ」

熱く決意を新たにする切島の叫びに、いつもどおりの静かな声が注意する。

「あ、相澤先生はぎーす！」

「おはようございます」

「おはよう。早く来るのは良いが、周りの迷惑にならないようにな。集まった人間が道のど真ん中に立っていると邪魔なもんだ」

「はいっすー！」

元氣よく答える切島を一瞥すると、相澤は近くの柱にもたれかかって静かになる。時間を見ると、集合時刻まであと30分となっていた。

「それにしても楽しみなな！」

「……そうだな。これも楽しみ、だな」

こういうのも楽しみになるのだなと、呼人はまた1つ学んでいた。

クラスメイトが全員集まった所で、相澤が話し始める。

「コスチュームはちゃんと持つてるな。こういう機会じゃなけりゃあ公共の場では使用禁止だ。落とすなよ」

「はーい!!」

「伸ばすな芦戸。くれぐれも失礼のないようにな。——よし、じゃあ行つて来い」

それぞれがそれぞれの職場体験先へと向かうために教師である相澤が同伴することは出来ない。そのため、ここから先は生徒だけで行くのだ。

尾白らと軽く言葉を交わした呼人は、新幹線や電車に乗らず、ミルコに指定された場所へと移動する。指定された場所といつても集合場所のすぐ近くの改札の前だ。ここから先どこに行くかは連絡されておらず、ただ『ここに集合!』とだけ言われていた。相澤が深くため息を付いていたのは、きつとそれが普通では無かったからだろう。

そこに移動して少し待っていると、人間の中に異質な気配を感じる。まるで野生動物のような、けれど獣性は感じず、ただただ強力な何かの気配。呼人自身も初めて感じる矛盾だらけの気配に戸惑っていると、その気配の主はまっすぐ呼人のところへと近づいてきた。

「よう！ お前が百竜だな！」

「あなたがミルコさんですか？」

呼人のところへとやってきたのは、ボーイッシュな服装をした女性。上は白のTシャツに黒系統のジャケット。下にはフレアパンツという裾の拾いパンツを履いており、その頭にはベースボールキャップを被っている。そしてそのベースボールキャップの上の部分からは、長いウサ耳が飛び出していた。

「そんな丁寧に話さなくて良いぜ。かたっ苦しいのは好きじゃねえ」

「じゃあ適度にするけど。あなたがミルコさん？」

「おう！ お前が百竜だよな」

「雄英高校1年A組百竜呼人です。よろしくお願いします」

「おう、よろしく！ それじゃあ早速行くぞ！」

ついてこい、とばかりに、ミルコは改札へと歩いていく。この数日の間に電車の使い方を学習した呼人もそれについていく。

「あの、どこに行くかまだ聞いてないんですけど?」

「あ? そういや言っただけじゃなかったっけ。私はあちこち行ってるだけだから。どこに、とかは特に決まってるねえんだ。とりあえず今からは、リューキュウの事務所に行く」
「なるほど」

リューキュウ。ビルボード・チャートのランキングトップ10にいたヒーローであり呼人も覚えているが、改めて後で調べておこうと呼人はミルコの隣に並んで立つ。そんな彼の方をちらりとミルコは見た。一応はランキング上位のヒーローである自分を前に特に萎縮することも興奮することもなく、至って自然体でいる様子だ。

「なんで行くのか、とかは聞かねえのか?」

「行けばわかるかなど。作戦行動っていうわけでもないみたいですし」

「ほう。鋭いなお前」

「ミルコさんもヒーロースーツは着てないみたいだから、まずは移動してから何かするんだらうと思ってます」

「あたりだ。そんじゃあたりついでに、説明しとかなきゃいけないこと説明しとくぞ」
そう言うミルコは、電車を待っている間に説明を始めた。それは、職場体験を受け入れる事務所、ヒーローに説明が義務付けられているヒーローの仕事としての基礎である。

ヒーローは派手なコスチュームを着てそれぞれに活動しているようだが一応は国から給料をもらっているために公務員扱いではある。ただ完全時給制ではなく成果に応じて給料が変化するため、他の公務員と比べて全く同じかと言われるとそうでもなく、かなり独特のものであるということだ。

更に、ヒーローが人気を重要視する職業である以上CMやテレビ出演といった副業も認められている。

ちなみにミルコは絶えず移動するため、連絡を受けてからのちよつとした取材ならともかく、積極的にCMに出たりテレビに出演したりはしていないようだ。調べた所本当に数日で地域を変えるためにそういうことは出来ないだろう。

「後は、私の活動形態だな。私のとこに來たからには知ってると思うけど、他のヒーローと違って私は事務所を持ってない。あちこちを移動しながら行った先行った先で活動してる。そういうときは大体行く先のヒーロー事務所にとめてもらうことが多い。だからそういうときは事前に連絡するようにしている」

ミルコは相澤からもらった呼人のデータにおいて、職場体験に対する備考として『百竜呼人は自己の強さ以外の周囲への興味が薄く、特に直接接触する人物以外の様々な情報収集を怠る癖があるため、ヒーロー活動において『1人であっても独りではない』事を学ばせる必要がある』ということを伝えられていた。すなわち、それを教えてくれと

いうことだとミルコは受け取っていた。

ちなみに事前に連絡をしているとは言っていたが、今から行くリューキュウのところなど比較的気心の知れた相手にはアポ無しか『行く』という連絡だけで行くことの方が多い。それこそ全く知らない相手ぐらいにしか丁寧な事前連絡はしてはいない。

「1人であちこち行くつつつても、行った先ではそのヒーローの話聞いて足りない部分を埋めたりしてるから、全部1人でやってるんじゃないんだぜ」

「なるほど」

「いくら興味が無いつつつても、それぐらいはちゃんと気を回せよ」

ミルコとて、あまり他のヒーローに興味がある方ではない。それでも実力の高いヒーローに関してはある程度の情報を集めているし、移動先で連携する可能性のある事務所のことぐらいは調べるようにはしている。好みと、最低限しなければならぬことはちゃんとわけているのだ。

「気をつけます。1人で活動してもあなたは独りじゃない、ということでしょう?」

「お前鋭いな。ご褒美に人参をやろう」

いや、結構です、と、人参を取り出そうとするミルコに伝えてそれを固辞し、相澤に言われたことを話す。

「強さを求めるのは良いが、ヒーローになるならちゃんと情報も集めておけ。1人では

ヒーローは出来ない」と相澤先生に言われました。その後あなたのことを『1人で活動しているヒーロー』と言っていたから、俺に言ったのは人数の1人つてことじゃなくて周りと関わらない孤独っていう意味での独りだったんだと思います」

「よし、乗るぞー！」

話の途中で電車が来たために、ミルコは呼人の言葉に反応を見せることなく電車に向かっていた。だが、言葉ちゃんと聞いていた。

（教師の言うことをきっちりわかってくれる優等生じゃねえか。てか、わかりすぎじゃねえか？ ま、強そうだからいっか）

職場体験はまだ始まったばかりである。

第29話 職場体験・2

「お前、さつきからずつと個性使ってるのか?」

電車に乗り込んで隣り合わせに席についてしばらくが立つ。説明が終わった後はミルコは特に何も話すことが無く、2人で並んで座っていた。呼人の方も何か話すべきかと考えたが、職場体験も長いしまあ良いかと本を開いていた。断じて、初対面の相手に話しかけるのが難しいとかそういうわけではない。

「俺?」

「お前だよ。なんかやつてるだろ? 知ってつか? ヒーロー科でも公共の場での個性の無断使用は禁じられてるんだぜ?」

「外から見るだけで気づかれたのは初めてですよ。何で気付いたんです?」

「お前の方から嫌な気配が強くなったり弱くなったりしてっからな。何やってんだ?」

鋭い目つきで見るミルコに、呼人はしばし沈黙する。笑ってはいるが、呼人のモンスターの勘が強烈な危機感を伝えてくる。それはミルコが意図したものでなく、ただその注意を呼人に注いでいる故のものであった。

「俺の個性のことは知ってます?」

「一応見といたぜ。すげえモンスターに変身するんだろ?」

「そうです。ただそのままじゃあ使い切れないから、変身する場所を制限する訓練をしています。モンスターと言っても体は筋肉とか骨とか、色々組織があるんで。だから外から見てわからない程度に、筋肉とか骨を変化させ続けて制御出来るように練習してる」

「そういうことか。だからずつと嫌な気配がしてんだな」

それならまあほつとくけど、あんまおいたはすんなよ。そう言われて呼人は言われるまでも無いと頷く。呼人が体内でばかり変化させているのは、それであれば一切の記録に残らず処罰も受けようが無いからだ。気付けるのはミルコのように何らかの個性で察知した者だけだろう。

「ミルコさんのそれは、兎の危機察知能力か何かですか?」

「兎の勘だ」

「兎に勘なんてあるのか」

「あるに決まってるんだろ」

勘というよりは危機察知能力とでも言うべきか、ミルコにはそれが備わっていた。

「後お前、せっかく職場体験させてやってんだから聞きたい事あったら聞けよな」

「……初対面の相手とのコミュニケーションに苦しんでるだけです」

「落ち着いてると思ったら人見知りなだけか」

呆れたように言うが、仕方ないといっても許されるはずだ。なにせ高校に入るまでは、名前を知っている相手が神王寺しかいないというレベルで人と関わって来なかったのである。おかげで、堅苦しくない程度に丁寧な話そうとして言葉遣いも落ち着かない。

「じゃあいくつか聞きたいことが」

「おう！ 何でも聞いてみる！ 私が答えられることならな！」

ミルコの許可を得て、呼人はいくつか思っていた疑問を話す。

「その帽子は、耳を隠すためですか？」

「おう！ 私は有名人だからな！」

別段人気を広めるような活動はしていないミルコだが、それでもランキングが高く、また女性からも男性からも人気のある見た目をしているため、そのまま街中に出るとその特徴的な耳も相まって騒ぎになる可能性が高い。そのため、私服の時は帽子を被るようになっていた。

「やっぱり街中とか歩いていると人に声をかけられたり？」

「まあな、正直めんどくせえけど応援してくれてんなら無碍には出来ねえ」

「なるほど。じゃあもう一つ。ミルコさんは何でヒーローに？」

呼人がそう尋ねると、ミルコは、おつ、と言いたげな顔をする。

「聞きてえか？」

「まあ、うん」

「私はな、強え奴と戦ったり話したりすんのが好きなんだよ。だからヒーローになって、悪い奴らをぶっ倒してる」

「思うんだけど」

「うん？」

「強い奴らと戦いたいなら、ヴィランになってヒーローと戦ったほうが楽しんじゃないのか？」

呼人がそう言うと、ミルコの表情が険しくなる。

「お前……本気か？」

「別に俺がやりたいわけじゃない。ただ、ヒーローって一体なんなんだろうかっていう疑問がずっと頭の中にある。だから聞いてみたかった。気を悪くしたなら謝ります」

そう答える呼人をミルコは軽く睨んだ後、ため息をつく。

「じゃあ良いこと教えてやる。私も戦うのは好きだ。でも好き勝手に他の人間を巻き込んだりはしねえ。それはやっちゃいけない悪いことだ」

「悪いこと、か。なるほど。ありがとうございます」

「お前は何でヒーロー目指してるんだ？ 今の言い方じゃあ、別にヒーローにすげえ憧

れてるってわけじゃないだろ？」

「……俺が人間社会で生きていこうと思うならヒーローかヴィランになるしか無い。ただヴィランは基本的に他人を傷つける存在だから、なるならヒーローが良いと思った。後はヴィランが基本的に気に入らないってのもあります」

「そういうことだろ。普通やりたいこととかよりも前にヴィランってのは嫌なもので悪だ。だから私もそちには絶対行かねえし、お前もヒーローになろうとしてる」

嫌なもの、と呼人は呟く。確かに、ヴィランのやっている事を自分は好きではない。でもそれは、自分だけでなく他の人間にとつても同じことなのだ。そして、だからヴィランになることを選ばない人間は、普通なのである。

「お前、今みたいな事も言うんじゃないぞ。ヒーローなら良い気はしねえからな」
「………わかった」

そうものわかりよく頷く呼人に、ミルコはため息を隠さない。

（ただ強えやつかと思つたら、なんか変なもん抱えてんな。めんどくせえ。けど、ちゃんとしてやらねえと）

戦うのが好きで、世間からは完全武闘派と思われがちなミルコだが、それは普段の彼女自身がそうであるだけで、周囲を気かけようと思えば出来るのである。ただ普段はめつたにそれをしないだけで。

「あーあともう一個聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「何で俺を指名してくれたんだ？ 爆豪とか轟の方が面白そうだよ」

「お前は強いからな！ それにまだなんか隠してそうで面白そうだったから指名した。期待してるぜ？」

「……善処します」

呼人の答えに、ミルコは小さく笑う。なんにしろ、面白いことになりそうだと。「よし、降りるぞ！」

「それで、ここに連れてきた、と」

「そうだ！ 演習場借りるぞ！」

突然雄英の1年生を連れて尋ねてきたミルコに、リューキュウは呆れた表情でため息をつく。急な話で来るという連絡はあったが、それが職場体験生を連れてくるとは思わなかった。そもそも、例年ミルコが職場体験生を受けていれているという話は聞かず、リューキュウもそれは想定していなかったのだ。

「今日は空いてるから構わないけど、1年生があなたと戦って大丈夫なの？　ちゃんと手加減しなさいよ」

「わかってるぜ！　お前も楽しみにしとけよ！　じゃあ借りるな。百りゆ、ノーマン！

20分後に着替えて演習場に集合だぞ！」

「あーい！」

遠くから返ってくるまだ幼さが残る声に、リユーキュウは何も起きないようにと静かに願った。

ミルコに連れられたやっってきたリユーキュウ事務所で、呼人は不思議な少女とであった。いや、絡まれていた。

「ねえねえ、なんでミルコと一緒に来たの？　ミルコのサイドキック？　でも雄英の制服来てるよね？　なんで？　不思議！」

「えーと、あなたは？」

「私は波動ねじれだよ！　雄英の3年生なの！　知ってた？」

「初めて知りました。雄英高校1年A組百竜呼人です。よろしくおねがいします」

なんでなんで？ 不思議！ と尋ねてくる少女、いや、先輩に呼人はペコリと頭を下げる。

「よろしくねー！」

彼女は波動ねじれ。雄英高校の3年生であり、リユークュウ事務所にはインターンシップ制度を利用してやってきている。インターンシップ制度は職場体験とは似て異なるものである。

職場体験はあくまで体験させてくれるだけで、言ってみればお客様である。一方インターンシップ制度を利用できる生徒は2年制以上、かつヒーロー免許の仮免を持っており、ヒーローとして活動する実力と資格が十分にあるものであり、給料をもらって卒業前からヒーローとして活動し実力を高める、という目的のもとヒーロー事務所で経験を積む制度である。

その制度を使ってトップヒーローのリユークュウの所で活動出来ている彼女は、それだけで実力が相当に高い事を示していた。つまり、彼女に関してはリユークュウが一人のヒーローとして十分以上に活動できると認めているということなのである。

ただ、おそらくは性格だろうが、様々な事を不思議がってはまるでマシンガンのように相手にぶつけてくる。

「ねえねえ——」

「あーいー！」

まだ自分の質問に答えていない呼人にねじれは不思議をぶつけようとするが、そこでリューキュウと話していたミルコに呼び出された呼人は、そっちに返事をする。

「すいません、呼ばれたので話すのはまたあとで良いですか？」

「うん！ 良いよ！ でも何でコスチュームに着替えるの？ 不思議！」

その勢いに押されながらも呼人は更衣室に案内してもらい、コスチュームに着替えた。

そして、ねじれにコスチュームに関する質問を受けながら地下演習場へと案内してもらった。

「何でそんなにポケットが多いの？」

「包帯とかナイフとか入れておきたいものがたくさんあります」

「何でゴーグルがあるのにつけないの？」

「サングラスなのでこの明るさでつけると見づらいです」

「なんで全部革で出来てるの？」

「個性の都合です」

「ねえねえ！ どんな個性なの！」

様々な事を質問してくるが、呼人もそれに最低限の回答で対応する。その様子を見た

リユーキュウは、何かおかしなものを見たかのような顔をしていた。一方いつになく回答がどんどん返ってくることに、ねじれは少しばかり機嫌が良さそうに見える。あくまで彼女と慣れ親しんだリユーキュウから見ると、という程度で、彼女の天真爛漫な様子は変わらないのだが。

「()が演習場よ」

案内された演習場は地下にあつた。

ドラグーンヒーロー・リユーキュウ。26歳ながら独立して事務所を持ち、トップヒーローに名を連ねるプロヒーロー。その事務所はまだ独立したため所屬している相棒は少ないが大きな戦果を残している。そして事務所に併設された演習場は、他の大手事務所にも負けない、なんならそれらより広いものとなっている。

なぜなら彼女の個性は、『大きなドラゴンに変身する』という個性だからだ。

その彼女が訓練できる演習場は、当然ながら飛行すら可能な彼女が暴れるのに十分な広さを有していて。だからこそミルコは、呼人をここに連れてきた。ただただ彼を変身させたかったから。

「おーい！ ヒャクリュー！ やるぞー！」

「いやあのまだ何するか聞いてないんだけど。演習するの？ 後俺ヒーロー名はヒャ

クリューじゃなくてノーマンだから」

「お前がどれぐらい出来るか見てやる！ とりあえず変身してみろ」

ワクワクという擬音がつきそうな表情で既に演習場に入っているのは、コスチュームに着替えたミルコだ。呼人から見ると防御力が心配になるコスチュームだが、機動力の高い彼女は必要としないのかもしれない。

というより、先日色んなヒーローの写真を見て感じたのだがコスチュームを鎧のように扱っている人間はほとんどいないようなのだ。もちろんただ重装甲の金属鎧を着ていれば良いというものではないのはこの世界の科学技術について学んでいるうちに理解したし、特殊繊維で作られたコスチュームであれば相当の防御力を有する。とは言え、ミルコにしろあるいは級友にしろ、体表を露出させるのはいかなものかという感想が大きい。

戦う人間としてはヒーローよりもハンターのイメージが強いだけにいささか信じられない呼人だったが、どうやらヒーローのコスチュームとはそういうものようだ。

「絶対変身したの見たかったでしょ」

「あたりだ！ 良いから変身してみろって！」

「地獄耳」

「兎だからな！」

ぴよんぴよんと、帽子を脱いで剥き出しになったウサ耳の前で手袋をした手を可愛らしく招いているが、とても兎のような可愛らしいものには思えない。なんとというか、襲ってくる狼の群れやライオンを平気で返り討ちにしてしまいうような、それこそ肉食の兎のような。そんな気配を感じる。

「じゃあ変身しますよ」

「早くしろよー!」

ワクワクという雰囲気隠す気すらないミルコはともかくリユーキューやねじれという先輩までが見ているのは気になるが、別にオドガロン程度であれば隠してもいいので見られても問題ない。

ミルコの指示通り通常のオドガロンに変身する。四肢が膨らむとともに体が前傾になつていき、四足歩行の構造へと変化する。更にコスチュームが体に飲み込まれて消え、変身が終わったときには原寸大のオドガロンがそこに立っていた。

「おー! かつこいいじゃねえか! じゃあ早速行くぜ!」

だから何を、という言葉を読み込み、呼人はかつ飛んできたミルコの飛び蹴りを回避する。

それはもう、文字通り矢のような勢いでかつ飛んできた。更に凄まじい音で壁に着地するとそこから再び飛んでくる。なんとというか、とんでもない脚力をしている。とても

ではないが、オドガロンの筋肉で人間の形態を取ったとしてもあんな威力は出ないだろう。

それに対して呼人は、オドガロン本来の姿から人間の形態に戻るとミルコの蹴りを交わし、お返しとばかりに拳を放つが躲される。兎という個性ゆえかその尋常ではない脚力を利用した蹴り技が多く、一方手での攻撃はほとんどない。

また飛び回るのが速いだけに、懐に入り込んで組み合うことも難しい。

ならば、カウンターで捉えるまで。飛び回っていたミルコの綺麗な踵落としに側面から裏拳を合わせて直撃コースからそらし、返すように思い切り踏み込む。その手は空中で身を捻ったミルコの手で弾かれた。

「やるなお前！」

「そりやどうも！」

手は使わないかと思っていたが、咄嗟の防御には使うようだ。

だが、まだ呼人の攻撃は終わっていない。手を弾かれたものの着地していないミルコは接地しているときと比べて隙だらけなので、その内に捉えてしまおうと逆の手を伸ばす。その手は囿で、弾こうと動かし手を捕まえるつもりだった。

が。

ミルコは、まだ着地していない足を思い切り振り回して呼人の顎を狙ってくる。直接

もらうとオドガロンの腕ですら折れてしまふ気がしていた呼人は、素早く手を引き戻して回避した。その間に着地したミルコは距離を取ってしまふ。

ミルコは楽しそうに笑っていたが、呼人は笑えない。なにせ彼女相手では取れる手段が限られる。純粋な打ち合いになった場合、回避能力や戦闘の巧みさで負ける気はないがミルコの足の生み出すパワーは尋常ではなく、抑え込むのも困難そうだし一撃でももらえば危険である。

かと言って普段の学校ならまだしもリカバリーガールのいないこの場所でどれだけのダメージを与えても良いのかがわからなかった。脚力が尋常ではないとは言え彼女の肉体はそれなりに強靱な人間のものに過ぎないのだ。下手に本気でぶん殴ると、どうなるかわかったものではない。

『ミルコ、十分でしょ。それ以上やってあなたが怪我させても責任取れないわよ』

「えー。もうちょっと遊ぼうぜ！ ヒャクリュー！」

「ノーマンだつてば。俺はもう満足。これ以上やったら絶対怪我するから。職場体験先のヒーローと組手して大怪我しましたって言いたくないし」

「なんだよノリ悪いなー！」

残念そうにするミルコだが、呼人はスピーカーから響くりューキューウの声に便乗して戦闘態勢を解く。これ以上やるなら殺り合いになる。それは避けたかった。

だからミルコが納得する前に歩いて演習場からの出口に向かう。ブーブー文句を言いながらも諦めてくれたミルコも、ぴよんと一飛びで呼人の隣までやってきた。

「お前、本気じゃなかっただろ？」

「当たったら殺しかねないから加減してただけだ。ミルコの足はともかく、腹とか顔は普通に急所だろ？」

「生意気だな！ 私だってプロヒーローなんだからな！」

「プロヒーローも人間だからな」

若干拗ねた様子のミルコにそう文句を言われるが、人殺しになりたいと思わない。実際に当たるかどうかはおいておいて、当たったらまずいような攻撃はしたくないのだ。

「いつか本気で戦えよ！」

「怪我させて良い時になら」

生意気どころか喧嘩を売っているようにすら思える呼人の言葉だが、ミルコはそれに関心を害する事無く勝ち気に笑う。

「私はお前と違って堅くはないからな。でも本気になっても当たってやんねえぞ！」

「頑張つて当てる」

ミルコは、変身した呼人の姿から、動物としての格の違いを感じていた。だからと行って負けるつもりなどないが、鬼の危機察知能力が早く逃げろとずっと言っていたの

だ。だから彼の大言壮語にすら思える言葉も、強者としての心地いいものと受け止めていた。

「百竜君、だったわね？」

そんなミルコと演習場から出た呼人のところに、リユーキュウとねじれがやってくる。なじれは早速とばかりにねえねえ、あの怖いの何？ 犬？ と質問をぶつけてくるが、リユーキュウが真剣な目で自分の方を見ていることに気付いた呼人は、先輩を無視してそちらに向き直る。

「そうです」

「……あなたがあの姿を体育祭で見せてくれていれば、指名していたわ」

「ありがとうございます」

「体育祭で変身しなかった理由を聞いても良い？」

「……相手を殺す力を無闇に開放するつもりはないです。だから必要な力に抑えて戦いました」

「……そう。目立たなかったのはわざとなのね」

「そういうことです」

リユーキュウは今回の指名においては、轟と常闇に指名をいれていた。一箇所のヒーロー事務所が指名できるのは2名までと決まっているため、最も有望そうな2人を指名

したのである。成績で言えば爆豪も高く個性も強力なのだが、その性格ゆえに扱いづらく感じた。だから、個性の強力さも成長の余地も申し分なく高い成績を残していた2人を指名した。結果どちらも来なかったわけだが、それ以上に呼人を指名しなかったことが失敗だったと、今は考えていた。

体育祭を見たリューキュウは、呼人が以前予想していた通り彼の限界を低いところに想像してしまったのだ。

「ねえねえ！　なんで目立ちたくないの？　恥ずかしがり屋なの？　私の友達にも恥ずかしがり屋な人いるよ！　一緒なの？　不思議だね！」

「とつても不思議！　と更に目を輝かせて尋ねるねじれを見て、リューキュウは一つの事を提案する。

「ミルコ。せっかくだし、一緒に食事はどうかしら」

「私は人参いっばいな！」

「残念ながらお弁当よ。じゃあ注文してくるから……ねじれ、応接室に案内してもらえら？」

「わかったよ！」

「まじで？」

「よし、ヒャクリュー行くぞ！」

「だからノーマン……もうヒャクリューで良いや」

「ねえねえ！　なんでノーマンなのにヒャクリューなの？　名前が2つあるの？」

超マイペースな人間が半分以上を締めているために場の空気はどんどんとカオスなものになっていく。リユーキユウに置いていかれてしまった呼人は、これどうするのと深い深い溜め息をつきたくなくなった。

第30話 職場体験・3

応接室に案内された呼人は、ねじれに質問攻めにされながらもミルコに今後のことについて尋ねていた。

「パトロールとかは行かなくて良いんですか？」

「私は一応フリーだからな！ 基本自由だ！」

「なるほど。そのあたりも自由なんですね」

「その代わりなんかあつたらすぐに跳んでくぞ」

行つた先の偵察もそうだが、ミルコはその跳躍力を生かした機動力で即座に事件の発生した場所に到達しそれを解決する事を得意としていた。そのため、こうやってどこかの事務所で待機しておくこともそれなりにあるのだ。

そして何かがあると、文字通り跳んでいく。個人での機動力がトップクラスに高い彼女だからこそ出来る方法である。

「もう少ししたら届くわ。それとミルコ、人参よ」

「サンキューリキューキュー！」

応接室に入ってきたリキューキュウは、何故か皿にに切つた生の人参を盛つたものを

持っていた。それを受け取ったミルコは、満面の笑みで人參をかじっている。

呼人がその様子をポカンと見つめていると、リユーキユウが説明してくれた。『なんでも人參だけ食べてるの?』というねじれの疑問への答えでもある。

「ミルコの個性は『兎』だから、人參が大好きなのよ。連絡があつた時に買っておいなの」
「……俺こんな凶暴な兎知らないんですけど。なんかライオンでも蹴り殺しそうな感じが」

その少しとぼけた呼人の感想に、リユーキユウはおかしそうに笑う。

「そうね。ミルコの強さは飛び抜けてるから。でもあなたもちゃんと戦えてたわね。誰かに師事してるのかしら」

実際はミルコは呼人に怪我をさせないように手加減をしていたのだが、それを指摘するほどリユーキユウは野暮ではない。それを教えるのはミルコの役目であり、雄英の教師の役割だ。

「……育ての親がプロヒーローだったので戦い方を教えてもらいました」

「なんていうヒーローなの? 親じゃないプロヒーローに育ててもらおうのって不思議だね!」

好奇心を隠そうとしつつも答えを待っているリユーキユウともはや隠すつもりが一切ないねじれに、呼人は内心苦笑する。節度を保っているリユーキユウはともかくねじ

れは人によつては嫌がりそうな勢いのだが、呼人にとつては別に嫌な気分がするといふわけではないので素直に答えることにする。モンスター達の人格の中には彼女と少し似た子がいるので慣れているのだ。

「ジ・アドベンチャーって言うんですけど、半年ぐらい前までずっと海外にいたのであんま有名じゃないと思います」

「……確かに、聞いたことないわね」

「私も聞いたことないかも！　ねえねえ、そのヒーローさんってどんなヒーロー？」

「ヒーロー活動の方は俺も詳しくは……ただ色々と器用な人ですね」

そのヒーローのことが気になつたリューキウは、ヒーロー独自の情報網を使ってそれを検索してみる。ミルコが手を使うこと無く手加減していたとは言え、呼人はそれに対抗してみせた。高校1年制の段階でそれだけの実力をつけさせたヒーローに興味が湧いたのだ。

「ねえねえ、ヒャクリューくんはなんでその人に戦い方を教えてもらったの？　小さい頃から？　不思議、ずっとヒーローになりたかつたの？」

ねじれの質問攻めは、終わる様子が無かつた。

「食事、ありがとうございました」

食事を終えた呼人とミルコは、リユーキュウとねじれに事務所の入り口まで見送られていた。2人は今日はそれぞれ事務作業と一応の休暇で合ったため、見回りに出る必要はないのだ。

「パトロール頑張つてねヒヤクリューくん！」

「がんばります。先輩も……」

「私は今日はほんとはお休みなの！」

「また明日から頑張ってください」

なかなか話が噛み合いづらい不思議ちゃんのねじれだが本人に悪意は無く、呼人もそれがわかったので振り回されながらも普通に話していた。

ねじれと呼人が話している少し離れた場所でリユーキュウとミルコも話していた。

「保須つてあれだろ、インゲニウムがやられた」

「ええ。そこから見回りの応援要請が来ているの。あなたは職業体験生を抱えているけど、一応知らせておこうと思つて」

2人が話しているのは、ミルコの活動先の話。自由に動けるミルコに、リユーキュウは他の街からの応援要請の話を伝えていた。自分たちも動こうと思えば動けるものの

拠点としている街の見回りもしなければならぬため、彼女にそれを依頼していたのだ。

「……行くなら明日以降だな。まだヒヤクリューがどれぐらいやれるかわかってねえ」

「そうね。それが良いと思うわ。私達も手が空けば向かうけど……」

近隣の保須市で有力なヒーローがやられたためか、ここ最近リューキュー事務所のある街でもヴィランの活動が活発化している傾向にある。大きな事件が起きていないが、それでも見回りの手は抜けないのが現状だ。

「また夜帰ってきたら教えてくれよな！」

「そうするわ」

「よし！ 行くぞヒヤクリュー！」

「ヒーロー名は『ノーマン』なんで外ではノーマンって呼んでもらえますか？」

結局、中途半端に敬語を抜いた話し方をするよりも適当に敬語を使うほうが良いと気づいた呼人はその話し方をミルコに対して使っていた。

「わかったわかった。ノーマンな」

「あ、そう言えばミルコ」

「ん？」

ミルコが入り口付近で話していた呼人の方へと行こうとしたところで、リューキュー

が待ったをかける。

「なんでさっきの組手で手を使わなかったの？」

それにミルコは少し考えると、ニヤリと笑って答える。

「手じゃあ負けると思ったから、つて言ったら驚くか？」

「……驚くわね」

足技が主体であるミルコだが、逆に言えば足技は強力すぎて並のヴィラン相手だと下手すると殺してしまう可能性が高い。そのためミルコは、腕で拘束する、あるいは組み討ちをする技術も高いレベルで身につけていた。

そんな彼女が、ただのヒーロー科の学生に負ける気がした、と言っている。兎の危機察知能力ゆえか彼女のそういう勘は非常によく当たる。

「戦うことに関してはいっつは結構強いと思うぜ」

「わかってると思うけど、職場体験生の個性の使用は——」

「原則禁止、だろ。けど市民の保護とか万一の場合には認められる」

「わかってるなら良いわ。楽しむのもいいけど、そういうところもちゃんと教えてあげて」

「おう！ ノーマン、準備出来たか！」

「もう出来てますよ」

ミルコと呼人は今晚はここに滞在することになっており、コスチュームとヒーロー活動に必要なもの以外の荷物は全て置いてきている。

「行つてらっしゃい！ 頑張つてねヒャクリューくん！」

「がんばります」

リューキュウとねじれに見送られ、呼人とミルコは事務所を出発した。本来なら一つの事務所でしか面倒を見てもらえないものだが、ミルコのもとで職場体験をしているおかげで呼人は2人のトップヒーローと交流が持つことが出来ていた。

「今日はとりあえず見回りだからな！ 勝手に個性使うなよヒャ、ノーマン！ まあお前はずつと使つてるけど！」

「名前覚えてくれてありがとうございます。正当防衛だったら使つて良いんですよ？」

「確かそんな法律があつたはず、と神王寺から教えられた話を呼人は思い出す。

「今は職場体験だから市民に危険が迫つてるときと正当防衛なら許されるぜ。けど、正当防衛にするためにヴィランに突っ込んでいくのは駄目だからな。私が怒られる」

「わかりました。なるべく手を出さないようにします」

「私の活躍を見とけよな」

職場体験に来ているとは言え、まだ学生でありヒーロー免許や仮免許、その他個性の

使用を可能とする免許類を持っていない1年生は、基本的には個性の公共の場での使用が許可されていない。だが正当防衛のための個性使用は限度を考えなければならぬものの一応許可されており、また職場体験という状況下であるため民間人の保護のための個性使用も許可されていた。

とはいえ、呼人の追従しているのはトップヒーローの中でも高い戦闘力を持つミルコである。例えばヴィランが出現したとしても彼女が倒してしまうだろうし、呼人のすることは避難誘導ぐらいなものになりそうだ。

いつもは事件を探し求めて飛び回ることが多いミルコだが、今日はまだそうした事件の報告が無く、また呼人を連れているために普通に道を歩いていた。

そのためか、道行く人々の注目を集めることになる。

「ねえ、あの人ミルコじゃない?」

「え? あ、ほんとだ。今ミルコここに来てるの!」

「うさぎさんだ!」

遠巻きにミルコを見て騒ぐものや、彼女の姿を写真に撮るもの、そしてミルコの耳を

見て兎だとはしゃぐ子供など様々いるが、それぞれが好意的な反応で受け入れている。あちこちを飛び回る彼女はヒーローの中でも神出鬼没な存在であり、ひと目見ようという人間は結構多い。

「凄い人気ですね」

「おーそうか？ でも応援してもらおうと元気であるんだぜ！」

ミルコの名前を呼ぶ子どもたちに、ミルコもまた笑顔で手を振っている。ヒーローは、ただ実力だけでなくこのように人気も必要となり、あるいは人々の心の拠り所として存在する。

（ヒーロー……やっぱり何か違うな。人々を助けるという意味では同じかもしれないが……すがっているのか？ いや、考えるのは後にしよう）

パトロール中だということが見てわかっているためかサインを求めてくる人は少ないものの、ミルコを遠巻きにしている一般人の数はどんどん増えていく。そのため、比較的に少ないとはいえサインを求める人の数は結局は多く、パトロールの足がほとんど止まってしまっている。

「ミルコさん！ サインください！」

「良いぜ！」

「ウサギさん、写真撮ってくださいますか？」

「おう！ こうやって手を上げる。そう、そんでぴよんぴよんって」
「ありがとうございます！」

凄い人数に囲まれているはずなのだが、ミルコは一切拒むことなく快く対応している。ただサインをするだけでなく、子どもたちにはしゃがんで応えてやったりと相手の事を考えた、非常に丁寧な対応だ。

（こういうの……アイドル？）

そんなミルコを少し離れた場所からぼんやりと見守っていると、呼人の足をツンツンとつつく者がいた。そちらを振り返ると、まだ小学校低学年ぐらいの男の子が3人立っており、

「どうした？」

「……お兄ちゃん、ゆーえーの1年生の人？」

「お前地味だったやつだろ！ 地味なのにずるしてゆーしよーしたやつ！」

「けんちゃん、そんな言い方したらだめだよ……」

どうやら3人は友達同士であり、呼人が体育祭1年生の部で優勝した事を覚えていて呼人に声をかけてくれてるようだ。爆豪や轟と違って目立つ個性も目立つ見た目もしていないのでどうせ誰も覚えていないだろうと思っていたのだが、以外と覚えてくれているものだ。

「ああ。俺が体育祭で優勝した奴だよ。ヒーロー名はノーマンっていうんだ。まだヒーローじゃないけどな」

子供達の視線の高さに合わせた呼人がそう答えると、悪口を言った子以外の2人の表情が輝く。悪口を言った子はつまらなそうだ。

「絶対氷の奴とか爆発の奴とかの方がカッコいいのに」

「けんちゃん、だめだつてばそんな事言ったら！ しょうちゃん、何か聞きたい事あるんじゃないの？」

3人のリーダー格というか、一番大人びているメガネの子が促すと、おどおどしていた子が恥ずかしそうに顔を上げる。

「あの、僕もヒーローになれますか？」

「しょうちゃんの個性じゃ無理に決まってるって」

「けんちゃん！」

どうも3人の仲は悪くはないようだが、口の悪い子は人を傷つける事を躊躇なく口にする子ようだ。

「まず、俺は君の個性は知らない。だから絶対になれる、とか絶対になれない、とかは言えない。でも、何個か良いことを教えてやる」

呼人がそう言うのと、3人が興味あるように顔を上げる。呼人はその3人に腰の後ろに

吊るしている大きな本（中は救護、サバイバル関係の知識が書かれていたり白紙になっている）を取り出すと、その白紙のページに手早く書き込みながら説明する。

「まずな、ヒーローって言ってもいろんな人がいるんだ。例えばオールマイトとか、あそここのうさぎさんとか——」

「お前がうさぎさんって言うな！ 恥ずかしいじゃねえか！」

「そういうヒーロー達は、とにかく悪い人を倒すんだ。戦うのが強いからな」

まだまだサインや握手、撮影を求める人並みが途切れ無さそうなミルコの突っ込みを無視して呼人は子どもたちへの説明を続ける。

「でもヒーローっていう仕事はそれだけじゃないんだ。例えば、地震とか火事の時に怪我した人たちを助けたり、悪い奴らが何かしようとしてないか探して見つけたり、色々あるんだ。だからオールマイトみたいに強くなれなくても、出来ることがあればヒーローにはなれる」

「でも一番強いやつがかっこいいじゃん！」

「違うぞ。一番かっこいい奴はな——」

——困ってる時に笑顔で助けてくれるやつだ。

呼人の言葉に、子どもたちはポカンとした顔になる。

「例えば、しょうちゃんが何か凄い怖い目にあつてるとする。例えばヴィランに追いか

けられたりとかな」

「う、うん」

「そのときに助けてくれて、『もう大丈夫だ』って笑ってくれる人がいたら、その人はしよ
うちゃんにとってはずごくかつこよくて、最高のヒーローだと思わないか？」

呼人がそう問いかけると、しよちゃんは少しうつむいた後顔を赤くしながら応えて
くれる。

「多分、かつこ良いと思う……」

「ヒーローは、強い人のことじゃないんだ。ヒーローは『助けてくれる人達』なんだ。そ
んなヒーローなら、人に優しくして、困ってる人に『大丈夫ですか？』って言ってるだ
けでなれるんだよ」

小難しい話はまだわからないという顔の子どもたちに、呼人はにこりと笑って3人の
頭を順番に撫でる。

「つまり、友達と仲良くして、困ってる人を助けて上げてたらその人はもうヒーローなん
だ」

そして最後に、と呼人は続ける。

「例えば個性が戦うのに向いてなくても、体を鍛えて戦う練習をしたら強くなれる。俺
は、個性を使わなくても一番になれた自信があるよ」

「えー！ ほんとかよ！」

「ほんとだよ。俺の腕、触ってみるか？」

そう言つて呼人は、二の腕の内側を示す。そこを触つた子どもたちは、その盛り上がりみつしりと引き締まつた筋肉に目を見開いた。

「すげー筋肉！」

「ムキムキだ……！」

「小さい頃から、たくさん体に良いもの食べて、たくさん走つて、たくさんトレーニングしてるんだ。そして、どうやったら強くなれるか？と考へてる。そうやって鍛えたら、結構強くなれるんだぞ」

もちろん、個性を全く使わないで、それぞれに個性を成長させた轟や爆豪、緑谷などに勝てるとは呼人も思っていない。だが、だからといって最初から無理だというわけではないし、全員が轟のように強力な個性を持つわけでも、呼人のように鍛錬をひたすら重ねているというわけでもないのだ。

「だから、まずは頑張ってみろ。たくさん体に良いもの食べて、たくさん走れ。そして高学年か中学生になったら、筋トレもするんだ。個性も使つてるとどんどん鍛えられて強くなるしうまく使えるようになるから、使えるなら家の中で練習しろ。たくさん、頑張れ。むちゃくちゃにやるんじゃないぞ。どう筋トレしたら良いかとか、どうやって個性

を強くするかとか、ちゃんと考えたり調べたりするんだ」

呼人がそう言って立ち上がると、子どもたちはそれぞれに恥ずかしそうにはにかみながら、あるいは嬉しそうにしながらも不機嫌を装って、その言葉に大きく頷いた。

「の、ノーマンさんも頑張ってるね！」

「おう。任せとけ。お前らも頑張れよ。あと勉強もちゃんとして本もたくさん読めよ。ヒーローは馬鹿だとなれないぞ」

呼人の言葉に元氣よく返事をする、3人はペコリと頭を下げた後、走っていく。

楽しそうに3人で走って行って、離れたところからまた手を振る3人を見送って、さあ自分も頑張らなければと、呼人はミルコのいる方を振り返る。そしてまだ子どもたちと記念撮影をしているミルコを見て、しばらくは動け無さそうだとため息をついた。

第31話 職場体験・4

「ミルコさん人気凄かったですね」

「あつちこつち行つてるから行ったことない場所だとめっちゃ人が集まんだよな。でも、応援してくれる人と話すと元気になるだろう？」

「まあ、多少は」

結局集まった人を捌き切るのに30分近くの時間がかかった。パトロール中ではあるが、人が集まろうが集まらなろうが事件が起きたときには駆けつければ良いし、例え順調にパトロールを出来たとしても少し見回しただけで犯罪を起こすであろうヴィランを見抜けるようなものでもない。

そのため、街中にヒーローが散らばつてどこで事件が起きてもすぐに向かえるようにする、あるいはヒーローがいると見せつけることで犯罪を抑制するという意味ではヒーローが歩き回るのは意味があるのだが、今のミルコのように大勢の一般人に囲まれていても、人が集まりすぎて道を塞いでしまうという以上の問題は「あまり」無い。特にミルコは人が集まった所で上から飛び越えて移動が出来るのだ。

そんな事を考えていると、ミルコの持つている端末が緊急を知らせた。

「おっ！ 行くぞヒャクリュー！」

「だからノーマン……！」

「座標送るからお前は後から来い！」

呼人の苦情には応えず、ミルコはメッセージアプリで場所を呼人に送信すると、すぐにビル群を飛び越えて事件のあった場所へと向かってしまった。『原則的に個性の無断使用は禁じられている』。すなわち、移動などへの個性の使用も禁止されている。

(これだけ建築物があれば……後で何か言われるのも嫌だから普通に行くか)

一応個性を使わないでも街中を駆け回る方法もあるにはあるが、ビルなどの屋上その他を通過して後で不法侵入だなどと言われたくないのでおとなしく陸路を走っていくことにした。

そして走って向かっている最中に、ミルコから連絡が入る。

『終わったからさつき指示した場所に来い』

「まあそうなるわな」

ラビットヒーロー「ミルコ」。兔の特性を活かし、常人にはありえない機動力と戦闘力を持つヒーロー。

先に行かれてしまったては、戦闘している場面すら目視出来ないのは当然だった。

「いや流石にこれはまずいんじゃないですか？」

「手え出してきたらぶつ飛ばすから心配すんな！」

断じてそういう問題ではない。と、呼人は心の中で断言しながら大きなため息をついた。

今呼人がいるのは、リユーキユウ事務所の仮眠室。そこが今晚の呼人の宿泊場所である。そしてそこには、呼人と同じく寝袋を広げたミルコもいた。

「ミルコさんいっつもこんな感じですか？」

「おう！ ホテルなんて泊まるのも探すのも面倒くせえしな」

リユーキユウのところは泊まらせてくれるってわかってたから来たんだぜ、と一応事前の確認もしている事は教えてくれたが、それにしても凄い毎日を送っているものだと呼人は感心した。

通常、事務所に所属するヒーローですら事務所の外に自宅や、あるいは短期の所属であればホテルを利用する。だが、より短期、それこそ短いときでは1日2日で拠点を移動するミルコにとつてはそれすらが手間であり、こうして他所の事務所の仮眠室や休憩室を借りて宿泊するのだ。

そしてどこの事務所も仮眠室が2つも3つもあるようなものではないため、同じくリユーキユウ事務所に泊まることになったミルコと呼人は同じ部屋で寝ることになった。

「走り込み行った後ここでトレーニングしても良いですか？」

「あ？ 今からか？」

「今からです」

17時にパトロールを終えて撤収し、夕食をしながらの簡単な反省会兼確認作業を終えシャワーもリユーキユウ事務所のを借りた現在は20時半である。ミルコ個人であれば17時でパトロールをやめるようなことはないが、慣れていない呼人の体力を気遣ってくれたものであるのはわかっている。

だが、その程度で体力を消耗するようなやわな鍛え方はしていないのだ。なんなら3日3晩走り続けるぐらいの事は出来るし、もっと長時間不眠で活動する事も可能ならいである。

「無理すんなよ？」

「日課だしまだあんま体力使っていないので行ってこようかなと」

「なら良いけどよ。体力余ってるなら明日からはもっと長くパトロールするぜ？」

「おまかせします」

「よし、絶対やる！ お前可愛くねえな！」

淡々と返す呼人にミルコは不満げな様子だが、いちいち驚いたり嫌な表情を見せるような性格ではない。色々と普段から予想を立てながら行動しているだけに、大抵のことが起きて『そういうパターンか』としか感じないのだ。

「じゃあ走りに行つてきます」

「個性使うなよ！」

「……ばれない程度に」

呼人の答えに、ミルコは何も言わない。個性の無断使用の基準は非常に難しい。例えば耳郎のイヤホンジャックは個性ではあるのだが動かすぐらいでは罪に問われない。更に異形系であれば存在そのものが個性のようなものだ。

そして呼人の場合は、基本的に体内器官に限定していると本人が説明しているため、使っていたとしても証明の手段が無い。そして体内を公共の場とするかという問題もある。そのため、だめ、とも言い切れないのだ。

ミルコが許可を出すと、呼人は外へと出ていった。ヒーロー事務所は基本的に年中誰かがいるため、扉が閉まっていることはないし明かりは灯っている。問題はないはずだ。

「さーて報告書か、面倒くせえなあ」

一人室内に取り残されたミルコは、携帯している小さなパソコンを開く。普段は報告書なども近くのヒーローにまかせてあまり書かない彼女だが、呼人を教える立場上この期間ぐらいはちゃんとしておくかという気になっていた。だが。

（あいつが見てねえなら私がやらなくても良いんじゃないかねえのか？ けどもうやるって言っちゃったし……あーくそヒャクリューのやつ好き勝手しやがって！）

本当なら、ヒーローの活動の1つとして重要な報告書について呼人に説明しながら作ろうと思っていたのだが、彼は出ていってしまった。そして走り込みをした上にトレーニングをしようかと言うからには、体力が余っているというのは本当なのだろう。

ヒーローの卵に色々教えてやろうと思いきや、来たのはヒーローの卵というのは妙に老成した奴で。実力、体力面など、事務手続きや心構えなどヒーローとしての活動に足りないことはあれど実働面ではミルコも『今すぐでもまあやれるんじゃないかねえのか』と思えるぐらいには優秀である。

優秀過ぎて面白く無いと言うべきか。

彼の担任である相澤から言われた情報収集を怠る癖というのも、相澤自身やミルコがある程度指摘したためかこの地域の他ヒーローについて調べているようではあるし、事件現場で合流したヒーローなどとのコミュニケーションも積極的に取っているように見える。

つまり、何も言わなくてもどんどん一人で吸収してしまうのだ。
「強くなるなーあいつ」

リユークユウに止められて少ししか戦えなかった演習での呼人の動きを思い出しながら書類作成をしているミルコのところに呼人が戻ってきたのは、1時間以上が経過した後のことだった。

『ヒーロー……ハンター達とは、なんか違う感じがするな』

』

』

』

『確かに、ハンターは別に目立つことが仕事でもなんでもない、か……』

人通りの少ない道を選んで走り抜けながら、呼人はモンスターたちと対話する。話しているのは、今日体験したヒーローとしての活動と、そこでさらされたヒーローに対する民衆の期待、態度、視線。それらから、モンスター達の知る英雄達と、ヒーロー達との違いを強く感じていた。

もともとは、彼らが何をもつてモンスター達に立ち向かったのか。何をもつて英雄となったのか。そんなことを知り、あるいは体験したかった。だが、ヒーロー目指し、この世界のヒーローというものに触れる内に、英雄とは、ヒーローとは一体何なのかという疑問が強まってきていた。

『――』

『ヒーローはちゃんと目指すぞ』

「ごちゃごちゃと考える呼人が今することを忘れないかと言ってくれるが、流石にそれを忘れることはない。今はヒーローを目指している。だからそれを全力でやるのだ。だが、考えることは止まらない。」

走り込みを終えて部屋に戻った呼人は、そのままトレーニングを始める。ミルコは呼人が戻ってきててもまだ報告書を作成していた。今日は小さな事件ばかりではあるが複数件飛び回って解決したために、それぞれで作成する必要があるのだ。

「うお！ どうしたヒヤクリュー急に脱いで。ミルコさんに欲情しちゃったか？」

「高校生にそういうこと言わないでください。違いますよ。トレーニングです」

ミルコの問いかけにそう答えると、呼人は上半身を大きく変化させ、岩状の甲殻を持つたものへと変化させる。その重量は人間どこかオドガロンのそれを遥かに越えて、凄まじい重量を呼人の体に与えてくる。呼人の提供した素材で作成したシャツなら脱がなくても良いのだが、あいにくと今着ているものはそうではなかった。

その様子を見たミルコが驚いたように近づいてくる。

「それ、何してんだ？」

「体の一部を変化させておもりにしてるんです」

その総重量は、恐らくトンはいかないまでも、500キロは確実に越えていた。その状態で呼人はスクワットを行う。それは人間の出せる力を確実に越えていた。その状態でスクワットと、そして体勢を変えて腕立て伏せ、腹筋など様々なトレーニングを行っていく。

「あ、でもお前の個性で変身できんのかってあの二匹じゃねえのか？」

「はつきりとわかってるのが二匹っていうだけで、まだまだいますよ。ただ詳細が調べられてないのでああ言う書き方になってるんです」

そうだったか？ とオドガロンとトビカガチの全体図ぐらいいしか見ていなかったミルコは首をかしげるが、彼女が受け取っていた百童呼人のデータにも確かに、呼人の個性に関する補足が記載されていた。

「それ何キロあんだ？」

「600キロぐらいのはずです」

正確な数字はちよつと……という呼人に、ミルコは驚いて目を見開く。

「それを人間の状態でスクワットしてんのか」

「そうです。モンスターの状態は鍛えても成長するものじゃないので」

普通の人間は、ミルコのように脚力を強化する個性でもなければそんな重量はとてもではないが持ち上げることが出来ない。呼人は人間の限界とは言うが、彼の体は既にもの域を飛び出しているのだ。

「無理すんなよ。それと手が空いたらこつち来い。報告書の書き方教えてやるから」

「ありがとうございます」

ミルコの指示に答えながらも、呼人はトレーニングをやめない。明らかに過負荷に思える負荷をかけながら、トレーニングを続けている。

「あーあと、お前のケータイがブーブー言ってたから連絡何か見とけよ。というか走んにケータイ置いていくな」

ヒーローは連絡があつたらいつでも出勤するもんなんだからな、とミルコは続ける。そのため、トレーニング中も、あるいはデート中も、映画館で映画鑑賞中も、連絡出来る端末の電源を切つたりマナーモードにすることは出来ないのである。

「ありがとうございます」

トレーニングを切り上げた呼人は、汗をタオルで拭いながらスマホを確認する。すると、障子、尾白、そして3人がなにかしていることに気付いて混ぜて欲しいと言ってきた葉隠の4人で作ったグループに皆からのメッセージが届いていた。届いたのは一時間以上前、恐らくちょうど呼人が走りに出た後のことだろう。

呼人を除く3人で話しており葉隠が何やら尾白に絡んでいるようであったが、呼人が返信しない時間が長くなっていることに少しばかり心配してくれているところのようだった。

そこで呼人も、話を断ち切る形にはなるがトレーニングをしていて気づかなかった旨を送信する。

『みんなお疲れ様。走り込みに行つてメッセージに気づかなかった』

呼人がそう返すと、それぞれがそれぞれにねぎらいの言葉をかけてくれる。

『お疲れ様ー！ こんな日にまで走つてたの!？』

『あまり疲れてないようだな』

『お疲れ様。ちゃんと連絡がいつ来ても反応できるようにスマホ持つていきなよ』

『ミルコにも怒られた』

『百竜君はどうだった？ 今日の職場体験!』

葉隠に尋ねられ、呼人は3人が話していたメッセージの履歴をたどる。それによると、どこもミルコ同様にヒーローの基本的仕事形態など重要な事の説明をしていたようだ。

『だいたいみんなと一緒だな。説明されてその後ミルコとちよつとだけ手合わせしてパトロールに出た』

『手合わせ？ ミルコとやりあったのか。どうだった？』

『ミルコと言えば、強力な脚力を使った足技か……』

『ええー!? 百竜君戦ったの!? 大丈夫だった!?』

『強いな。脚力が凄まじいから速度も速い。手加減してもらっていたが、本気で蹴られてたらオドガロンの腕でもへし折れそうだった』

恐らく最初は完全に小手調べで、その後の少しは多少は本気を出してくれていたようだが、技術はともかくパワーの差は明らかだったように思う。

『ランキング入りヒーローの実力は生半可なものではない、か』

『それに対抗する百竜もすごいよ』

『でも尾白君も褒められたんでしょ?』

『いやだからあれは——』

葉隠が尾白に絡んで尾白が慌てるというのはここ最近学校でも見られるようになって

た光景だ。それを呼人が少しほほえみながら見ていると、トレーニングは終わったのに一向に來ない呼人に痺れを切らしたミルコが彼を呼ぶ。

「おいヒャクリュー。なにやってんだ？」

「同級生と今日の感想を交換してました」

ミルコに答えながらも、ミルコに呼ばれているので今日はこれで連絡は終わりにする旨を送信して、皆のおやすみという言葉に返してアプリを閉じる。

「すいません、おまたせしました」

「遅いー！ けどまあ良いぜ。仲良い奴と話すのも大事だからな。そんじやあ報告書の書き方、つってもあんまこまけえことは教えねえけど教えてやる」

そう言つて呼人を招いたミルコは、明かりの下に出てきた呼人の上半身の傷を見て思わずと言つた風に言葉を漏らす。

「お前、その傷……なにやつたんだ？」

「あーこれは昔色々無茶やつたときの傷です。肘から先は露出するから傷が目立たないように整形してもらったんですけど、他はそのまんまで」

剥き出しになった呼人の体には、火傷の跡や切り傷、抉れた跡、その他何でついた傷かわからないような傷跡が大量に残されていた。全て個性を活用したり自分を鍛えようとするうちについた傷だ。今でこそそんなミスはしないが、例えば体表の温度が10

0度に近いようなモンスターに体の一部をなんの対策もなしに変化させれば当然周囲の皮膚や器官は火傷を負う。そんな事を試したり失敗して引き起こしたりした結果の傷跡が、呼人の体にはたくさん残っているのだ。

「お前、ヒーローは怪我する仕事だが怪我しちやあ駄目なの知ってるか？人を怖がらせちやいけねえんだぞ」

「気をつけます」

「はあ。まあ良い。それじゃあ説明するぞ——」

まだ職場体験は始まったばかり。この後に大きな事件が待ち受けているのだが、呼人はまだそれを知らない。

第32話 職場体験・5

「よし朝飯も終わって腹も膨れた所で、今日行くのは保須市だ。ほらヒャクリュー、保須と言えど何だ？」

「最近ヒーロー殺しが暴れたところですね。そして恐らくまだヒーロー殺しが潜んでいると思われる地域」

ちゃんと最新のニュースなどをチェックするように気をつけている。そしてそのニュースは最近ずつと記事や報道で取り上げられている話題であって、見逃すようなものではない。

「ちゃんと調べてんな。その通りだ。リユークュウ説明よろしく」

「ちよつとミルコ！ はあ……じゃあ私から説明するわね。ねじれも聞いておいて」「うん！」

元氣よく答えるねじれは、先日の私服姿とは違ってコスチュームを纏っている。今日は彼女も出勤する日なのだ。彼女のコスチュームは青系統を主体としたびつたりと体に張り付くボディスーツになっていて、普通の学生なら目のやりどころに困るかも知れないようなもののだが、ここにいるメンバーの殆どは女性だし、ただ一人の男性でも

ある呼人はそういうことには疎い。

「これまでヒーロー殺しは、17名のヒーローを殺害、22名のヒーローを再起不能にしているわ。そして出現したエリアでは少なくとも4人以上のヒーローに危害を加えているけど、保須市での被害はまだ1人だけ。だからヒーローの間では、まだヒーロー殺しは保須市にあらわれているという認識で一致しているわ。それに加えて、保須市からヒーロー殺しに触発されたヴィランの活動も活発化する可能性があるとして出動要請が来ているの。だから私達の事務所とミルコで連携を取って保須市に出張することにしたのよ」

「そういうことだ！ ヒャクリューもちゃんと連携を学べよ！」

「わかりました。がんばります」

いざ行かんとばかりに立ち上がるミルコを制止して、リューキュウはまだ残っている情報を伝える。

「私達の事務所もサイドキック含めて総出で向かうわ。それと市から聞いた話だけど、エンデヴァーも保須入りしてるらしいの。恐らく彼もヒーロー殺しが目当てよ」

「エンデヴァーも来んのか!？」

エンデヴァー。オールマイトに次ぐ、ナンバー2の呼び声高いヒーロー。それが来ていると聞いてミルコはテンションを高くしている。

「ええ。現地では百竜君、いえ、ノーマンはミルコと一緒に行動。ねじれは私とよ。実戦になったときはノーマンは後方で避難誘導をして——」

「いや、ノーマンではできるだけ私に付いてこい」

リユーキュウの指示を遮るようにミルコが呼人に指示を伝える。

「ちよつとミルコ。彼はまだ仮免も持つてないのよ。職場体験生には避難誘導をさせるのが常識よ」

「私の勝手だろ。大丈夫だ。こいつはちゃんと強い。危なくなったら逃げれる。ノーマン、お前は前線で避難誘導しながら私についてこい」

「アイサー」

「なんで呼人君が強い知ってるの？ 大丈夫なの？」

ねじれが心配してくれているが、それにミルコは笑顔で頷く。

「おう！ 昨日の夜満足行くまで蹴ったからな。だいたいわかった」

満足行くまで蹴った、というなかなか指導者としてはまずい説明にねじれは『えー！

呼人君大丈夫なの!』と声を上げるが、リユーキュウは慣れたことなのでため息を付いている。『蹴ってみればわかる』というのはミルコの口癖で、別に本気になって蹴ったわけではなく呼人の実力を試したということを示しているのだ。

「ミルコ、あなた勝手に——」

「良いだろ。それにノーマンは個性を使わねえでも私の蹴りを受け止めたんだ。実力は十分ある」

受け止めた、とは言うが、ミルコのちよつとだけ本気の蹴りをそらした際のダメージで呼人の腕には大きな青あざが出来ている。コスチュームを纏っていないければ皮か肉がそげていてもおかしくはないぐらいだ。だが、それでもミルコのちよつと本気の蹴りをしつかり受けきったというのは十分に評価に値する。

「ノーマン、危なくなったら個性使つてでも逃げろ。守つてやらねえぞ」

「了解です。俺はそれよりも置いていかれる事を忌避してますけどね」

「言うようになつたじゃねえか」

「元からです」

職場体験生である呼人を前線に出すことを懸念するミルコだったが、呼人とミルコの間で方針は決定されてしまう。連携をするとは言えもともと呼人は戦力の頭数には入っておらず、また助けも必要ないと言われてしまえば連携上の懸念を持ち出すことも出来ない。

「わかったわ。ノーマンのことはミルコに任せる」

「呼人君、怪我したら駄目なんだよ？ 勝手に個性使つても駄目！ 知つてた？」

その後、まだ朝早くにリユーキュー事務所及びミルコ、呼人は保須市へと移動した。まだ朝早い段階だが多くのヒーローが街中には出勤しており、あたりの空気がピリついている。完全な警戒態勢だ。

「それじゃあミルコ、連絡は厳にね」

「わかってるって」

「あなた先走るから言ってるの。ヒーロー殺しにはインゲニウムですらがやられてるのよ」

「私の方が強いからな。でも連絡はちゃんとするぜ」

「なら良いわ。ノーマンも気をつけて」

「わかりました」

「気をつけてねノーマン！」

「先輩もお気をつけて」

ミルコと呼人の返事に頷いたリユーキューは、自分のサイドキックの方を振り返る。サイドキック達は既に活動内容を把握しているため、リユーキューの指示でなめらかにチームに分かれて動き始めた。

「よし、こっちも行くぞ」

そう言つて歩き始めるミルコの言葉に、呼人も無言で頷いてその後ろをついていく。先日のようにミルコはファンに囲まれ、呼人も体育祭での活躍を覚えていた人々や子どもたちと話したりしながらもパトロールを続ける。ただ、ヒーローが多数いるという厳戒態勢に市民も気付いているためか、先日ほどの熱狂的な様子は無かった。

「ピリついてますね」

「こんだけヒーローが集まればなんかあるつてわかるだろ」

(逆に言えば、集まらないとわからない、か)

『』

『危機感の欠如は、どこから来てんだらうな』

モンスター達と対話しながら、呼人もまた周囲に目を光らせる。ヒーロー殺しの人相は、生き残ったヒーローからある程度伝わっている。その目立つ格好と服装故にそういう人混みの中に混ざっているとは思えないが、むしろ人を隠すなら人の中とも言ふ。それがわかっているために、どこを見るにも気が抜けない。

その後、特に事件が起きないままに昼を迎え、周囲のヒーローと時間をずらすために昼というにはかなり遅い時間帯に呼人とミルコは近くの喫茶店で休憩を取る。ちなみに呼人にとって日本の喫茶店という場所はここがはじめてだった。

「ノーマン、今日は夜通し活動するぞ」

「わかりました。ステインが夜の方が出現率が高いっていう情報ありましたっけ」
「あるぜ。私の勘が鳴いてやがる」

そう不敵な笑みを浮かべるミルコは、何か街のひりついた空気とは別のピリピリとしたものを感じていた。野生動物の危機察知能力、あるいは勘というものは人間の常識を越えている。

大気中の湿度から翌日の天候の荒れを予測するぐらいは可愛いもので、時には到底予測し得ないような災害などを予測して予め生息地を移したりする。そんな勘が、兎という個性を持つミルコにも備わっていた。

「行くか」

サインや握手を求めてくる一般人に真面目に対応していたミルコは、人の列が途切れたところで席を立った。

呼人達が喫茶店を出たのより少し遅い時刻。保須市で職場体験をしていた飯田もまた、プロヒーロー・マニュアルとともにパトロールをしていた。

「今日もいつもどおりパトロール。ごめんね、せつかく来てくれたのに代わり映え無く
て」

「いえ……ヒーローが暇なのは治安が安定している証です」

そう答えながら周囲に目を配っていた飯田に、マニユアルは彼が来ると決まったとき
から今日まで彼の事を見ていての疑念をぶつけることにした。

「……聞きにくいことなんだけど、君、ヒーロー殺しを追ってきたのか？」

「……いえ、そういうわけでは」

「それぐらいしかうちに来る理由が思い当たらないからね」

君ならもつと良いところから指名も来てるだろうし、自分で言うのも何だけどうちは
そんな有名な事務所じゃないからね、とマニユアルは続ける。

「来てくれた事自体は嬉しいけど、私怨で動くのはやめたほうが良い。それとも、何か
ちゃんとした理由があつてきてくれるのか？」

普段の人当たりのいい表情ではなく険しい表情のマニユアルに、飯田は少し考えた後
に自分が彼の事務所を選んだ理由を伝える。それはけして、兄の仇討ちでもヒーロー殺
しを自分で倒したいからでもなく、ただ、ヒーローに対する迷いの末の選択だった。

「……保須市という場所を一切考えなかつたとは言えませんが、ヒーロー殺しを探すた
めに来たわけではないのは断言できます」

「じゃあ何でうちに来たか、教えてくれるかい？」

「……ずっと、兄の、ヒーローとしての兄の背中を追いかけ、そのきらびやかな部分ばかり見てきました。そして自分もそうなりたいとただ憧れ、何が必要なのかも考えることなく……だから、兄が怪我をして、兄もまた人であると知った時にわからなくなりました」

——ヒーローとはどうあるべきなのか。自分がヒーローを目指している理由はこれでもいいのか。

年の離れた兄は既に相当数のサイドキックを抱える有名なプロヒーローで。規律を重んじ、人を導く、まさにヒーローたる存在だと思っていた。だが、大きな怪我をし、床に伏せ、そして起き上がった兄は確かにヒーローではあったが、彼が自分に語ったのは、人間としての兄が、必死にヒーローであろうとしているという事実だった。

幼い頃、あるいは兄に憧れた小学生、中学生の頃にも聞いたことのある言葉だが、その頃はただ兄への憧れと盲信ばかりが先行し、兄の言うことを理解できていなかった。

だが、高校に入って揉まれ新しい考え方に触れた今は、少しだが理解することが出来た。

確かに、兄が大きな怪我を負った保須市という文字が目にとまったのは事実だ。だが、マニユアル事務所を選んだのは自分の意志。兄に、親しい友人に恥じぬよう、改め

て己のヒーローに対する思いを見つめ直すとしたが故のことだった。

「兄の事務所や他の有名な事務所に行っても、恐らく俺はプロヒーローの背中をただ見つめるだけになってしまいます。だから、こういう言い方は失礼に当たるし申し訳ないと思いますが、あなたの事務所を選びました。俺自身が、自分のヒーローに対する思いを改めて見つめ直すためにです」

飯田のその真つ直ぐな言葉に、マニュアルは内心感心しながら頷く。はつきりと言われるとそれはそれで微妙な心持ちがするが、彼はヒーローとして進む道を再度見つめ直すために、あえて『たいしたことのない』自分の事務所を選んだのだ。有名なヒーローの元では、自分がただそれに従ってしまう可能性が高いと理解しているが故に。

「そうか……。俺こそ失礼な事を言っただけだな。すまない。だけどーっだけ言わせてもらっても良いかい？」

「はい」

「憧れも、ヒーローになるのに十分な理由なんだぜ。もちろんそれで自分で何も考えなくて良いとは言わないけど、理由はなんだって良いんだ。そこから自分がどういうヒーローになるか。その根本を自分で否定するなよ」

「……はい——」

飯田がマニュアルの言葉に力強く返事した直後。遠くから、大きな爆発の音が響い

た。

「先に行くぜノーマン！」

「了解！」

爆発の音が響いた直後。ミルコはそれに反応して地を蹴り空中へと飛び上がる。建物より上の高度に到達したことで、彼女はいち早く爆発の起きている場所を見つけ、そこに向かって建物の屋根の上を跳んでいく。距離にして2キロ以上。だが、本気の彼女にとっては大した距離ではない。

一方置いていかれることとなった呼人も、音のする地点に走って向かっていた。個性を使うことは出来ないが呼人の走る速度は生半可なものではなく、鍛えられた人間の全力疾走以上のスピードを保ってミルコの行った先へと向かう。もう少し小さな建物の多い場所なら屋根の上を跳んでいくほうが近いのかも知れないが、こうも大きなビルが多いと高低差が激しく登るほうが時間の無駄だ。

距離がそれなりにあるがゆえにミルコからは遅れることになるが、それでも常人には考えられない速度で目的地へと向かって駆け出した。

（この警戒態勢の中でヴィラン活動。暴れてるやつはよっぽど腕に自信があるのか馬鹿なのか……だがかなり大きな爆発音がした。とするとヴィランではなく爆弾を使ったテロ活動か？）

そう推測する呼人だが、最初の爆発ほど大きな音ではないが破壊音と人々の悲鳴はやまない。だから、一発限りのテロ活動という線は切って捨てた。

と、そこにメツセージが入る。

ミルコ、あるいはリユーキウあたりからの連絡かもしれないと確認すると、そこには緑谷からの、ただ住所を示しただけのメツセージが届いていた。その地点は呼人のいる地点からはかなり離れているものの、同じ保須市内であった。

「なんのつもり、ヴィランか？ こんな状況下で送ってくるということは」

恐らく、先程から響く破壊音からするとヴィランが暴れているのは一箇所ではなく、あちこちで出現している。その住所の方角からは破壊音は聞こえてこないが、何も大規模な破壊をもたらすだけがヴィランではない。それこそ、呼人達が保須市まで出張した理由でもあるヒーロー殺しも、ヒーローに危害を加えるだけで大規模な破壊など——

「ヒーロー殺しか……！」

予想の途中で、かなり悪い状況が想像出来て呼人はメツセージアプリでリユーキウに連絡を取る。内容は、『添付した地点において職場体験中の雄英生がヴィラン（ヒー

ロー殺しの可能性あり」と相対している可能性が高く、動ける人員がいるなら送ってほしい』というものだ。更に、緊急を知らせるために彼女に電話をかける。

『ノーマン！ 今は緊急——』

「メッセージの確認をお願いします！ ヴイランの情報です！」

『わかったわ。確認しておく』

「お願いします！」

その呼人の言葉に返答はなく、リユーキュウとの電話は切れた。話している間に破壊音や悲鳴が大きくなっていくところから、彼女もミルコ同様にヴィランが暴れている地点に向かっていっているのだということがわかる。

ヒーローが集まっている。まるで、導かれるかのように。

（陽動と本命……けどこれまでヒーロー殺しは単独で活動している。連携しているとしてもこんな派手に動く人間ではない。とすると、これが触発されたヴィランの活動という事か？）

そう考える間にも、呼人の足はミルコの向かった場所へと進んでいて、やがて開けた交差点へと飛び出した。

直後、呼人のいる方に向かって一人のヒーローが吹っ飛んでくる。その腕を掴み、呼人は自分の方へと引き寄せた。

「悪い、助かった！ くっそ痛え……！ あんた、ヒーローか!？」

「雄英の職場体験生です。ミルコをフォロワーしています。ここで避難誘導を手伝います」

「駄目だ！ 職場体験生は後方支援に回れ！」

自分の行動を伝えて未だ避難のすんでいない市民の方へと向かおうとした呼人の腕をヒーローが掴むが、それを手で引き剥がして呼人は叫び返す。

「前線での避難誘導がミルコの指示です！」

「なんつ、クソっ！」

悪態をついたヒーローは、すぐに他のヒーローが巨大なヴィラン、呼人は気付いていないが、USJ襲撃事件の際に相澤を圧倒しオールマイトに倒された脳無というヴィランに類似したヴィランに圧倒されているのを見てそちらに応援に向かう。

暴れている脳無もどきは2体で、そのうち一体には少し離れた所でミルコが対応、残りを他のヒーローが対応しようとしているが、脳無もどき以上の戦闘力をもっているミルコはともかく他のヒーローは複数名で取り囲んでいるにも関わらず全く止めることができない、どころか歯牙にもかけられておらず、脳無もどきは乗用車を持ち上げて投げ飛ばしたりと、好き放題に暴れている。

そしてその攻撃対象がヒーローから近くで座り込んで泣いていた子供に向かった瞬間

間、呼人は飛び出していった。

まだ避難誘導はすみきつておらず、脳無もどきとの戦闘に参加していないヒーローが周囲で負傷した人や気絶した人を運び出しているが、今その子供を助けられるのは、呼人だけ。

(個性の使用は禁止されてる。ならやれる限りは！)

「シッ！」

子供に向かって振り下ろされようとしている巨大な腕の前に割り込み、その腕を横から、以前ミルコの蹴りをそらしたときとは違って腕の勢いだけでなく全ての体重を込めて横にそらす。

結果、子供へと振り下ろされようとしていた脳無もどきの腕は、そのすぐ横のコンクリートを穿ち砕いて、肘のあたりまで地面へとめり込む。

脳無もどきがその腕を引き抜いている間に、呼人は泣いている子供を抱えて走り始めた。走る方向は戦闘が起きているエリアとは真逆。見る限り避難の終了していない市民はその子供が最後に、避難誘導を終えたヒーローが戻ってくる。

「君！ 大丈夫か！」

「大丈夫です！ この子供を後方までお願いします！」

そう言って抱えていた子供をヒーローに押し付ける呼人をそのヒーローは引き留め

ようとするが、呼人は先程同様の事を伝える。

「待て！ 君はヒーローじゃないだろ！ 避難するんだ！」

「自分は雄英の職場体験生です！ ミルコの指示に従って行動しています！」

「ミルコの!? ……わかった！ だが無茶はするな！」

「ありがとうございます！」

そのヒーローが頷いてくれているのを確認して、呼人はまたミルコらの戦っているところに戻った。そこに戻るとどうやらミルコの方の戦闘は終わったようで、今は他のヒーローが取り巻く中もう一体の脳無もどきと戦っている。

「さっきのより強えな！ けど私のが強えぞ！」

巨体の脳無もどきの攻撃を誘導しながら跳び回るミルコは、その攻撃を自分の方へと誘導し、振り下ろされる、あるいは繰り出される腕や拳に合わせるように自分の蹴りをぶつけ、それを跳ね返していく。恐らくミルコが本気を出せば、首をへし折るかあるいは頭を潰すか、いずれしろ殺してしまうことは出来るだろう。

だが、それはヒーローの所業ではない。だからこそ今もこうして動きを止める手段を模索しており、先程も殊の外時間がかかっていたのだ。

しかし先程までミルコが戦っていた細身の脳無もどきとは違って、現在ミルコの戦っている個体は爆発的な回復能力は持っていないようだ。現に呼人がえぐった腕の傷は

癒えておらず、今もまだ出血している。それにも関わらず腕を振り回しているのは既に理性が残っていないのかあるいは堪えているのか。

決着は、すぐについた。

第33話 職場体験・6

「ミルコ！ メッセージの座標に向かってください！ 恐らくヒーロー殺しが！」

「おう！ 行くぜ、ついてこいノーマン！」

叫ぶままに跳び上がるミルコを、個性を発動した呼人も地上をかけながらおいかけ、地を蹴り、壁を蹴り、その速度は先程までのそれとは比べ物にならず、上を行くミルコの速度になんとかくらいついていた。

（速いなほんとに！ 兎つてあんなか!?）

凄まじい速度で跳躍を繰り返していたミルコは現着した勢いのまま、空中に放り出された緑色のスーツを纏った少年をキャッチ、いな、かつさらって着地する。

同時、剥き出しの脳みそを穿たれた脳無もどきが地面へと墮ち、その隣に一人の男が着地する。全体的に赤い服装にごついブーツ、剥き出しの腕とそこに巻かれた包帯。

「ヒーロー殺し……！」

思わず呟いた呼人の声が聞こえたわけではないだろうが、脳無もどきの頭からナイフを引き抜いた男はその体勢のまま呟く。声を張ったわけでも、誰に話しかけたわけでもない。ただ、ポツリともらした、あるいは妄執としか思えないような言葉。

それはその音以上にその場に響き、そこにいた全ての人間の心胆を寒からしめていた。

「偽物の蔓延る世界も……いたずらに『力』を振るう愚か者も……肅清されなければならぬ。全ては——正しき世界の為に」

その言葉の間にミルコはキャッチした少年、緑谷を他のヒーローのところへ運ぼうとしていたが、その足すらが、男の、ヒーロー殺しの言葉によって止まっていた。

直後呼人やミルコとは反対側の路地から跳び出してきた男、エンデヴァーを見て、ヒーロー殺しが前傾していた体を起こし、ゆらりと振り返る。その動きはとても力など感じられない今にも倒れそうなもので、けれどその動きに、有力なプロヒーローたちを含めた全員が吞まれていた。

「お前は……偽物だ……！」

踏み出した男の足に、ヒーロー達が一步後ずさる。好戦的なミルコですら、耳を力なく倒して緑谷を抱えたまま後ずさっていた。

「正さねば……血を流し、『英雄』を取り戻さねば……！ かかってこい、紛い物ども……！」

——俺を殺せるのは、本物の英雄だけだ!!

男の放つ気迫、あるいは圧のような何かに押されるように、轟や飯田、その場にいた

プロヒーローの数名が後ろへと倒れ込む。まるで男の言葉に、物理的な圧力があつたかのように。

直後、近くの家屋を突き破つてまた別の脳無もどきが飛び出してきたが、ヒーロー殺しの気迫に押されたヒーロー達は反応できない。そのまま近くにいたミルコと緑谷に飛びかかるとする脳無もどきを、その後ろから飛び出した別のヒーローが地面へと叩きつけた。

足のエンジンを吹かし、既に傷ついていた脳無もどきを戦闘不能にする。やがてその脳無もどきを追っていた2人のヒーローも追いついてくる。

「むー！ インゲニウム速すぎ！」

「ヴィランは……止まったようですね」

波動を利用して建物の上を飛んできたねじれと、路地で個性を使うと被害を拡大させてしまうために彼女に運んでもらったリューキウが上空から降下してくる。

2人とインゲニウムは、エンデヴァーが戦っていた場所やミルコが戦っていた場所とはまた別の場所で脳無もどきと戦っていたのだ。

「お前、インゲニウムか？」

そうして脳無もどきを警察が来るまでの仮ではあるが拘束するインゲニウムに、ミルコが思わずといったように尋ねる。

「い、インゲニウム!? でも、ヒーロー殺しに、え?!」

そして茫然自失から復帰した緑谷も、有名なヒーローの1人であり友人の兄であり、そしてヒーロー殺しの被害にあったと聞いていた彼の元氣な姿に信じられないと目を見開く。

「久しぶりだなミルコ。そっちは……ヒーロー殺し!」

ミルコの言葉に途中まで答えようとしたインゲニウムは、その向こうに立っている男の姿を捉えて少年を抱えるミルコの前に飛び出す。かつての恐怖に冷や汗が背を伝うが、インゲニウムが逃げることはない。

しかし、インゲニウムの予想と違って男が攻撃をしかけてくることは無く、どこか顔を向けることすらない。

「何故動かない……? リューキュウ、少年の保護を頼む」

「わかりました。ミルコこっちに。ねじれ、インゲニウムの援護をお願いします」

「う、うん!」

後から来てヒーロー殺しの状態がわかっていないヒーロー達が身構える中、最初から見ていたヒーローの1人、グラントリノが思わずと言ったように呟く。

「気絶しとる、のか……?」

グラントリノの言葉に、止まっていたヒーロー達の時が動き出す。ヒーロー殺しはそ

のとき、たしかに重すぎる負傷によって気絶していた。

にも関わらず、直前の脳無もどきの襲撃に唯一人反応したのが彼で。彼の持つ異常とも言える執念を、その場にいたヒーロー達は体感していた。

「また随分とやられたな」

警察が到着するまで仮拘束した2体の脳無もどきとヒーロー殺しを見張ることになったため、呼人はミルコに許可を取ってその場にいた職場体験性である轟、緑谷、飯田と合流して話していた。それぞれの受け入れ先のヒーローもこの場に残っているため、3人は後詰めヒーローか警察が来るまで病院に行くことが出来ないのだ。

「百竜くん！」

「百竜君も保須に来ていたのか」

「ミルコに連れられてな。3人とも消毒するから傷を見せてくれ」

2人の質問に答えながら、呼人は腰のアイテムポーチから消毒液とガーゼを取り出す。

「そんなの持ち歩いてるのか」

「怪我は応急処置が大事だからな。あんまでかすぎる傷は処置できないが……」

そう答えてから3人にそれぞれ怪我した部分を聞き、消毒液とガーゼで最低限の処置をしていく。本当は傷を縫うための針と糸もポーチには入っていたりするのだが、人を治療するための免許は持っていないため緊急の場合か自分のときにしか使わないことにしていた。

「随分手慣れてんな」

「昔から生傷が耐えなかつたからな。治療が大事だつてのは身に沁みてる」

授業でも応急処置の知識などを扱ったとはいえ、まだ実践するような機会もそういう演習も行っていない。その中で呼人の呼人の手際の良さはなかなかのものだった。傷を処置せず放置していた呼人が人間の脆さをモンスターや神王寺から教えられ、1つずつ処置する事を覚えて一つ一つ丁寧に処置した結果の技術である。

「緑谷、靴……いや、脱がなくていい。上から消毒液ぶっかけとく」

「え、でも」

「脱がした衝撃で傷が広がる可能性がある。一応落ち着いてるみたいだし病院行くまでそのままにしよう」

「う、うん」

応急処置に集中している呼人は当然無口なのだが、3人も殆ど話さない。話したいこ

とはあるのだが、さらされた殺気が、そしてヒーロー殺しの執念が3人の心に重くのかかっていた。特に飯田は、別の事情もあってほとんど話さない。

「よし。とりあえず消毒と応急処置は終わりだ」

「ありがとう百竜君」

「君には世話になるな」

「……ありがとう」

「自前でも出来るぐらいの道具は持ち歩いておけよ」

治療を終えた後3人と話していた所で警察や搬送用の車が到着し、3人を含めた大きな怪我をしたヒーローとヴィランが搬送されていった。

「あいつらがヒーロー殺しを、か」

3人がいる間は話を聞くのに集中していたが、いざ3人が去ると話の内容に驚きが増える。が、今は考えるのはとっておくことにする。全く負傷していない呼人や軽度の負傷のミルコはまだしななければならないことがある。

「ノーマン行くぞ」

「了解です」

呼人を呼ぶミルコの声にも、いつもの威勢の良さが無い。動物の感性も併せ持つ彼女は、普通の人間以上にヒーロー殺しの狂気の影響を大きく受けていた。

「顔色あんま良くないですよ」

「ビビるのは帰ってからだ。今夜は夜通しパトロールするぞ」

「アイサー」

だがメンタルに大きな影響を受けた程度で活動を停止出来る仕事ではないのがヒーローの辛いところだ。

リユーキウ事務所は夜になるのに合わせて事務所のある街へと撤退していき、他に保須市に来ていた有力なヒーローであるエンデヴァーも職場体験生である轟の負傷の関係もあつてか保須市から撤退していった。

結果現在保須市で活動可能なヒーローの数は昼間のそれよりは遥かに少なくなっている。保須市に拠点を置くヒーローの多くが脳無もどきとの戦闘において大きな負傷を負ってしまった、活動の継続が困難になってしまったのだ。

インゲニウムの電撃復帰によってインゲニウム事務所は戦力を取り戻したものの、それで他の事務所の分まで補えるほど保須市は狭くはない。

結果、足りない穴を埋めるためにミルコと呼人は翌日の明け方までパトロールを行うことを余儀なくされた。そして運が悪いことに、ヒーローの頭数が減り復興が完全には終わっていない街の状況を好機と見てか、小物ばかりだが複数のヴィランが事件を起こしたためにその逮捕、引き渡しなどの手続きに時間がかかってしまい、結局リユーキウ

事務所に帰り着いたのは翌日の昼過ぎになってからだった。

「ミルコさんいい加減離してください」

「ミルコさんは可愛いのも結構好きなんだぜ〜」

呼人の文句も暖簾に腕押し。小さな姿に変身した自分を抱きしめて二度寝を敢行しようとするミルコの顔に、呼人は猫パンチを加えていた。

ありきたりではあるが言わせてもらいたい。

「どうしてこうなった」

——時間は9時間ほど前に遡る。長時間のパトロールを行っていたミルコと呼人は、翌日の昼過ぎになってようやく仮拠点であるリューキウ事務所に戻ってくることが出来た。そこでいつもどおりのランニング、は日が高く街中であるので諦めてトレーニングだけして眠ろうとしていた呼人が、いつもより少しばかり元気のないミルコを見たことに起因する。

プロヒーローでありたくさんのヴィランを見てきた彼女は、当然凶悪なヴィランと対

峙したことが何度もある。だが今日のヴィラン、ヒーロー殺しは、そうしたヴィランたちとも違う、彼女の初めて見るタイプの敵だった。

「思想犯の目は静かに燃えるもの」とは平和の象徴たるオールマイトの言葉だが、ヒーロー殺しの目の炎は、ちらりと見ただけではわからないほど静かなものでも、一度触れれば全てを焼き尽くすまで止まらない、そんな類の何かで。今どき個性を持って余して好き勝手に暴れたがるヴィランや自分の利益の為に個性を悪用するヴィランはたくさんいれど、そういう類のヴィランは稀なのだ。

「ミルコさん、なんか元気ないですね」

「あ？ 私はいつでも元気だぜ」

間髪入れずに呼人の質問に答えるミルコは、たしかに報告書作成も手際よく終わらせているし体調も悪く無さそうだが、モンスター達の勤で精神的に疲弊しているのがわかっていた。

『可愛いもん見たら元気になる？　そういうもんか？』

『わかったわかった。やってみる』

モンスターたちの中でも特に幼い人格を持つ3体から勧められるままに、呼人はミルコに元気になってもらおうと頑張ってみることに決める。

「ミルコさん、可愛いのが好きですか？」

「あん？ そりゃ好きだけ」

前提の確認をした呼人は、3人に勧められるままに彼らの世界のとある生物に変化する。

この生物は不思議なことに人格を持って呼人の中にいる他のモンスター達とは違って何故か生きていた当時の姿をしており、また個体も複数いるのだが、もともと人間と共生していた種であるためかモンスター達や呼人との意思疎通も少しばかり勝手が違うものの問題なく行えている。

その明るい声や暖かなイメージなどから皆に愛されているのだが、何より愛らしいのはその見た目であり、特に女性の人格を持つモンスター達や幼い人格を持つ子達によく構われて困っているのを呼人も何度も目にしていった。

その生物、名を「アイルー」という、二足歩行の可愛らしい見た目をした猫である。ちなみに成体の大きさはちよつとビビるぐらいには大きいので、あえて成長過程の姿に変身した。

「お……？」

突然猫に変身した呼人にミルコはきよとんと目を見開く。そして呼人が、アイルー達の行動を真似して軽く鳴いてみた直後、彼はミルコに抱えられていた。

「おー、猫じゃねえか！ お前ヒャクリューか？」

コクリと頷く呼人の頭をわしやわしやと撫でた後、PCを閉じたミルコはそのまま寝袋の上に飛び込む。ちなみにこの段階で嫌な気配がした呼人は逃げ出そうとしたのだが、呼人の行動に気付いた他の、大人の女性の人格を持つモンスター達総出で体をアイルーに明け渡すように怒られ、アイルーのうち一匹に体の主導権を明け渡してしまったのだ。

本来呼人の体は呼人のものであり、呼人が許可しない限り呼人の中に住むモンスター達が表に出てくることはない。わけではない。

実は、モンスター達も自由に表に出てくることが出来る。ただ、主導権争いをしたときに呼人の方が表に出る力が強いのだ。そしてなるべくモンスター達が勝手に飛び出さないように、特に協力的なモンスター達が外に出ようとするモンスター達に自分たちの外に出ようとする力をぶつけて相殺してくれているのである。これによって封印されている状態にあるモンスターもおり、実は呼人自体はかなり不安定な状態にあるのだ。そして特にこれは、10人以上に同時に負荷をかけられると突破されてしまうぐら

いのものでしかなく、この時も圧をかけられたので突破される前に大人しく明け渡したのだ。

『なんでアイリに任せるんだよ。別に俺でもいいだろ』

』

』

』

アイリとは呼人の中にいるイルーの中でも特に可愛らしい、ちよつと照れ屋な雌の個体である。

モンスター達が口々に言うところによると、どうやら呼人がラツキースケベとやらを起こす可能性があったために無理やり雌であるアイリと交代させたらしい。

つまり、ミルコに抱きかかえられるのが呼人であつてはまずいということだ。そんな事を言われても今もなお呼人の感覚は体とつながっている為に柔らかいなかの感覚なんかは普通に伝わっているのだが、それは不可抗力だそうだ。それ以上そのことについて言及すると、『じゃあ体の感覚がわからなくなるように私達と戦う?』なんて言われそうだったので遠慮した。こういうときの女性の人格を持つモンスター達は容赦がないのはよく知っている。

』

『まあ寝るのをアイリが立て替えてくれるならそれはそれで良いけど。じゃあ俺はその間組手でもしてくる』

体が起きている間でなければ、モンスター達の住んでいる空間でも呼人が個性を使つてその使い方の訓練を行うことは出来ない。体が目覚めて瞑想しているときなどは出来るにも関わらず、である。その事を以前神王寺に相談した所、『モンスター達の心は呼人の心に住んでいて、体は肉体に宿っているんじゃないか』と言われた。詳しいことはわからないので呼人もそう思うことにしているが、つまり現在の呼人はこの空間においてもただの人間としての自分の能力しか出すことが出来ないのだ。

そうして呼人は、勝手に体に戻らない事の監視として最初に呼人をそそのかした3体と一等怖い鬼嫁さんに見張られながら、眠りについての間中モンスター達とトレーニングをすることになった。いつもの力が発揮できないということでもハンター達と同じ条件で戦うことになった呼人にテンションを上げたモンスター達に何度か殺されたのはご愛嬌と言ったところか。人型であればモンスターの状態であれ、彼らが容赦ないのはいつものことだ。

そして、今の状態に至る。流石に解放してもらいたく、強気に行動できないアイリではミルコの拘束から抜け出せないので呼人が入れ替わったのだが、ミルコはアイルーが

話していることなんてお構いなしにとつつかまえたままであり、その状態でもう30分近くが経過している。

「俺も一応男なんですけど。胸が当たってます」

「猫は雄でも可愛いんだぞ〜」

「離さないと人間に戻りますよ」

「んー、許さん!」

普通であれば人間に戻って拘束を解くところなのだが、昨日のミルコの状態に覚えがあるために呼人も強気に出ることが出来ない。ステインのように思想犯というわけではないが、彼も狂気とも言えるほどの感情にさらされ精神を大きく疲弊させたことがあるのだ。相手はモンスターの中の一体だったが、そのときは半年ほど本体である呼人が表に出ることが出来ず、モンスターの中でも温厚な者達が表に出て神王寺にモンスター達の世界のことについて教えたりしていたのをあとから聞いた。

そのときの自分ほどミルコの心が弱かったとは思っていないが、その状態を知るだけに呼人は精神を参らせている相手には強く出づらいのだ。以前体育祭の後の対戦相手のケアに気をかけたのも、これが理由である。

そうこうしているうちに、2人がまだ部屋にいる様子だとサイドキックの1人から聞いたリユーキュウとねじれが仮眠室に入ってきた。リユーキュウの方は今日の勤務は

終わりだが、ねじれはこれから夜のパトロールに出なければならぬ。その前に少し顔を出した、というところなのだが。

「ミルコ、あなた……百竜君はいないのね」

「あれれ？ 呼人君はどこに行つたの？ 外には出てない、つて言つてたよ？ あつ！」

室内を見渡したねじれが、ミルコが抱えている毛の生えた物体に気付いて駆け寄る。

「なんで猫が事務所にいるの？ 拾つてきたの？ 不思議！ でも可愛いね！」

「おう！ 良いだろ！」

ねじれとミルコの言葉に、リユーキュウも近づいてきて上体を起こしたミルコが脇を持つて持ち上げた猫っぽい何かを見る。

「ミルコ、言われなくても普通猫なんて持ち込まないですよ。それに、何？ その……なんかおかしくない？」

「そうか？」

「足の形が——」

ねじれとリユーキュウの方へ向けていたイルーの体を自分の方に向けようとミルコが持ち替えようとした瞬間、その猫っぽい生物はミルコの拘束から逃れて距離を取つた。

そして、その姿を人間のものへと変える。

「助かった……」

モンスター姿の姿になっているとき、どこまで変化させるかにもよるが、基本的に身体構造やその耐久性はそのモンスターのものとなる。つまりアイルーになっている間は、その耐久力はアイルーのものであって、ミルコに抱きしめられると結構きつい。

もう人間に戻ったために痛みがあるわけではないのだが癖とまだ残る感覚に首筋を擦る呼人に、リユーキユウとねじれが目をまんまるにする。

「え、えー!? 呼人君猫にもなれたの!? あの気持ち悪いのじゃないの!? 不思議!!
ねえなんでなんで!」

「百竜君、あなた……」

「ミルコが精神的に参っていたようなので、もふもふしてたら元気になるかなと思って変身しました。俺の個性は『モンスターになる』っていうものなので、なれるのが一種類じゃないんです」

そう簡単に説明すると、ねじれが目を輝かせながら近寄ってくる。

「ねえねえ! 私もさっきの猫ちゃんみたいの! だめ?」

「ミルコは精神的に参ってる感じだったので気になっただけですよ」

「なんで? なんでミルコはよくて私は駄目なの? 私ももふもふしたい!」

断つても凹むでもなく、ただただ目を輝かせて迫ってくるねじれに折れた呼人は、『5

分までですよ』と言いおいてアイリを呼び出し、アイルーに変身する。

直後にねじれに頭を撫でられて抱えあげられるアイリ。彼女は恥ずかしさなどは無いものの人に体中を触られるのはあまり好きではない呼人とは違ってそういう風に扱われるのになれているため、彼女なりに可愛がられている。

アイルーとは、猫のような見た目をしていながら、ただ人に面倒を見られる猫とは違い、人と共に生き、時に助け助けられる仲間ではあるが、同時にその可愛らしい見た目から、やはりマスコットの扱いをよく受ける存在なのであった。

この後、なんとリユークユウからも頭を撫でられた呼人が、事務所にいる間は定期的なアイリに入れ替わることを要求されたのは言うまでもない。モンスター達の言う通り、女性は可愛いものが好きなのだと言得した呼人であった。

第34話 救助訓練レース・1

「オールマイトが出てくる前の時代が懐かしいぜ……あの時はもつと国全体に暴れた
いっつう衝動が広まったのによ」

「だから来たんだよ。まあ聞けよ」

小さな丸眼鏡をかけた、いかにも悪そうな事をやってますと言いたげな男の言葉に、
うなだれていた太った男が顔を上げる。

と。そこにもう一つ声が響いた。

「その話、俺にも聞かせてくれよ」

気配なく響いた男の言葉に、もともと部屋にいた2人の男が勢いよく立ち上がり入り
口の扉に目を向ける。そこには、一人の男が影に溶け込むような黒いコートを纏って
立っていた。

視線を向けられた男は、影から薄暗い明かりの元へと歩み出てくる。

「あんた、なにもんだ？」

腰から抜いた銃を向ける男に、男は端的に返す。

「ヒーローやってるもんだ」

——パアンツ

コートトの男の言葉の直後、発砲音が響く。丸眼鏡の男が躊躇いなく発砲したのだ。彼らの生業は完全に非合法の、ヒーローに見つかれば逮捕は免れないものである。

放たれた弾丸はコートトの男の頭を貫き、扉に直撃して落ちる。

それを意に介さずコートトの男は続ける。

「まあ聞けよ。何もヒーローとしてここに来たんじゃないよ」

確かに弾丸は頭を撃ち抜いた。男の顔の下半分や首元も、傷から流れた血で紅く染まっている。しかし、男は立っていた。そして笑っている。

「あんた、どうなってる?」

「そういう個性だ。俺は別にヒーローとしてここに来たわけじゃないぜ。ヒーローになつたのも一人で好き勝手やるのにフリーのヒーローつてのが都合が良かったからだ」

その言葉に、太った方が丸眼鏡の方をちらりと見る。これどうするんだよと言いたげな表情だ。丸眼鏡の男はそちらを見ること無く銃をおろして答える。

「わりいな、ヒーローは天敵なんだ。で、なら“ヒーローの資格を私用してる”つうあんたは何が目的なんだ?」

「単純な好奇心だな。どこでどういう組織が動いてるかつてのは知つてて損はねえだろ? 外国はつてがあるんだが日本はしばらく留守にしたもんでね」

ニヤリと口角を上げたままのコートの男をしばらく睨んでいた丸眼鏡の男は、しばらくしてため息をついた。銃を持ち出しても泰然としているということは、目の前の正体不明の男には銃が通用しないのだ。ならば下手に抗うだけ危険なのである。

「良いぜ。ただし、見返りをくれ。最低限、俺達をとっ捕まえねえこと、この場の情報をヒーロー側に漏らして俺達の利益を阻むことはしないこと。これぐらいは約束してくれや。後はあんたの名だな。お互い首根つこを捕まえあうつうことでヒーロー名だ。あんたが裏切れば俺達はあんたの今の言葉をバラす。あんたは俺達が裏切ればとっ捕まえる。対等だろ？」

「1つ目2つ目は約束してやる。けど3つ目は枷にはならんぞ。ヒーローには内偵つうヴィランの内部に潜入する仕事もあるからな。そんなかわり、何でもとは言わねえがあんたらの依頼を聞いてやろう」

太った男を置き去りに、丸眼鏡の男とコートの男の間で取引が行われ、やがてどちらからともかく席につく。太った男も慌ててコートの男の隣に少し腰がひけた状態ではあるが座り込んだ。

「そんなビビらんでも手は出さんよ。下手に殺すよりも情報吐いてもらったほうが有意義だろ？」

「そうは言ってもなあ。こっちは長年裏稼業やつてるから警戒するのは仕方ねえよ。俺

達はまともに法の庇護を受けられねえからな」

「ま、そうだけどな」

こちらの2人は、良くも悪くもそれぞれ裏側に詳しいために過度に警戒しすぎず親しみすぎず、適度な距離感の会話をする。ここに、当初2人で行われていた会話に3人目に参加することになった。

「この動画、見たことあるか？ 今いっちなばんアツイ動画だ。『ヒーロー殺し』、知ってるだろ？」

その2人に、丸眼鏡の男がスマホを見せる。そこには、あの日ヒーロー達を怯えさせた、『ヒーロー殺し』の姿が映っていた。

職場体験活動は1週間で終わりを告げ、翌日からはまた学校で勉学に励むとともにヒーローへの道を歩む学校生活が再開される。

「おはよう百竜。今日も早いな」

「おはよう！ 百竜くん！」

「おはよう」

「そっちはどうだった？ ミルコのところに行っただら？」

席について本を読んでいると、後から登校してきた葉隠と尾白が席にやって来る。2人は登校時間が被っているのか、最近よく一緒に教室へと入ってくる。

初日あたりはこの3人と尾白を加えたグループトークで情報交換をしていたのだが、それ以降はそれぞれに職場体験に合わせて日程が合わなくなっただけのため、今後の話は学校で会った時にしようという話になっていた。

「結構有意義だったぞ。ミルコが事務所もサイドキックも持たないと言っても、他のヒーローや事務所との連携なんかは普通にやる。そういうあたりが結構見れたな」

「なるほど……確かに、ヒーローの活動として大事な部分だね」

「ミルコも保須市の事件の時出勤してたってニュースで見ただけど、百竜くんもいたの？」「いたぞ。あの人ありえない速度で突っ走っていくから置いてかれたけど」

保須市の事件は全国的にもニュースになり、その中でヒーロー殺しと対峙した緑谷、轟、飯田の事は他のクラスメイトも知っていたが、その場に呼人もまたいたといことは皆知らなかった。呼人はそれをわざわざ言うような人間ではないし、後から駆けつけただけの彼は話題にはならなかったのだ。

「ミルコの戦いはどんな感じだった？」

自らも武術、体術を使う尾白は、近接戦を得意とするミルコの様子を尋ねてくる。

「強いけど、脚力ありきだから真似しづらい戦い方だったな。軽く手合わせもしてもらったけど、無茶苦茶なスピードで跳び回って蹴りを入れてくる感じだった」

「百竜くんミルコとの戦ったの!?! 怪我しなかった!?!」

「やられてない、だろ?」

「手加減してもらえたからな」

ミルコというトップヒーローと戦ったという話に葉隠が驚いて声を上げるが、呼人との手合わせをかなり繰り返し返している尾白はそう簡単にやられていないだろうと楽観的だ。

「でも本気で蹴られてたら、いつもの人間のサイズに収めた状態じゃ手足は軽く折れるだろうな」

「そんなに、だったんだね」

「まあ、な」

「そう言えば、百竜くんリユークュウのところに行ったんでしょ? リユークュウとは何か話した?」

「体育祭で本来の姿を見せてたら指名してたって言ってもらえた」

「良いな——。私のところはね——」

今度は自分の話の代わりに葉隠や尾白の経験話を聞いているとやがて障子も登校し

てきて、入れ替わるように葉隠が他の女子のところへと向かっていく。そちらを軽く見やると、何やら今までとは空気の変わっている麗日が力強い突きを披露していた。

「おはよう障子」

「おはよう2人とも」

「おはよ。障子はどうだった？」

「……格闘術は、奥が深いな」

「そりゃあね。生涯かけても1つの武術を極めることすら難しいって言われてるぐらいだよ」

障子は、当初は偵察、索敵などを主とする事務所を選ぼうとしていたのだが、呼人、尾白と相談して武闘派ヒーローの事務所へと希望を変更していた。

彼の個性の場合偵察、索敵というのはこれから当然の如く関わっていくものであって、むしろそのままいけば関わりそうにない戦闘に関して経験しておいたほうが今後の幅が広がると判断したのだ。

と、そこに上鳴の声が響く。

「けどやっぱ一番はお前ら3人だよな！ “ヒーロー殺し”！」

その言葉は、3人で机を囲んでいた飯田、緑谷、轟に向けられていた。

話題は当然、“ヒーロー殺し”のことである。

「心配しましたわ」

「ほんと、あんなの送ってきて心配したぜ。生命あつて何よりだ」

皆もそれは当然の如く気になっていたようで、話がそちらへと向かう。

「俺もニユースとかで見たけど、ヒーロー殺しって敵連合の仲間だったんだろ？ U S

Jに來て無くてよかったよ」

「でも確かに怖かったけど、動画見たらなんかつかいと思つちまうよな」

「か、上鳴くん！」

「え、あつ、わり！」

身内を怪我させられている飯田の前での配慮の足りない言葉であつたが、とうの飯田は気にした様子を見せずに首を振っている。

「確かに、彼は信念の男であつたように思う。究極的に言えば、どのような思想を持つことも自由なんだと思う。だが彼は、その結果人を傷つけ、法を犯すという間違つた道に走つた。それはしてはいけないことなんだ」

「お、おう。わりいな、なんも考えねえで」

「飯田君……」

身内を傷つけた相手と対面して、飯田は最初怒りを感じた。だがすぐに、ただ感情を吐き出すことは、リーダーとしても、そしてヒーローとしてもあつてはいけないこと

だと思い直した。

飯田が学び、身につけ始めている冷静な考え方が、ヒーロー殺しに対する自分の考えを確かなものとしていた。

兄を傷つけた。だがそれは他のヴィランも一緒であり、兄もその覚悟をしている。それを怒りに駆られて否定するのは、してはいけないことなのだと思う。

それに、幸いなことに兄は謎の人物の個性によって再度ヒーローとして立ち上がる事ができた。あの時兄が、インゲニウムがあの場に現れたことで、感情の高ぶりをまだ抑えきれずにいた飯田は落ち着くことが出来たのだ。

こうしてヒーロー殺しと対面していないクラスメイトもヒーロー殺しの言動について知っているわけだが、それは今現在、社会はヒーロー殺しの話題でもちきりになっていることに起因する。ニュースで取り上げられたのはあくまでヒーロー殺しがエンデヴァーによって捉えられたというカモフラージュの内容だけなのだが、そうした努力を1つの動画が全てひっくり返していた。

その動画は、あの時、肋骨が肺に刺さりながらも唯一人だれよりも速く動き、脳無もどきを殺害したヒーロー殺しの述べた、彼の信念を切り取り、拡散され、警察が動画の削除を行っているものの削除とアップロードのイタチごっこになっている。そのため、日本中の人間が、今となっては彼の言葉を知っているのだ。

「けど、あれは敵連合とは別物に思えたけどな」

「え？」

「何か、気になることがあるのか？」

盛り上がる他のクラスメイトを置いて、呼人の言葉を聞いた2人が振り返る。

「敵連合とヒーロー殺しは、毛色が全く違う気がする。むしろ敵連合なんて、ヒーロー殺しの抹殺対象に思えたんだけどな……そんな気がした程度でしか無いが」

「……信念の違い、ということか？」

「ああ。特にヒーロー殺しは強烈な信念を持つてた」

「だからこそ信念と対立する相手と手を組む可能性は低い、ってことだね」

「うん——」

そこで相澤が教室に入ってきて会話は途切れたが、呼人はただ一人、ヒーロー殺しから得た考えや情報に思いを馳せていた。

「私が来た、ってことでやっていくよヒーロー基礎学！」

「静かに入ったな」

「久々なのにね」

「パターンが尽きたのかしら」

いつもの勢いの良さと騒がしきの無いオールマイトの言葉に、生徒たちはかなり辛辣な感想を述べる。『H A H A H A！ 私のネタは無尽蔵だよ！』というオールマイトの言葉が強がりだろうということとはほとんどの生徒がわかっていたが、あえて指摘もしない。

気を取り直してオールマイトは横に広がるエリアを指し示す。そこには、通常の街並みではなく工業地帯らしいパイプやタンク、剥き出しの鉄骨などで構成された建物群が広がっていた。

（お、これは丁度いいな）

「職場体験直後だから、今回は遊びの要素を含めたレースをやろうかなと思ってね。名付けて『救助訓練レース』！」

「救助訓練ならU S Jでするべきではないんですか？」

「あそこはあくまで『救助』が主体の訓練をする場所だからね。今からするのは文字通り『レース』だよ」

今彼らがいる場所は『運動場Y』という、雄英高校の有する施設の1つである。コンセプトは『街以上に入り組んだ密集地帯』であり、複雑に入り組んだ細道がまるで迷路

のように広がっている工場地帯を再現している。

「4組に分けて訓練を行う。つまり一組5人！ 最初の組だけ6人になるね。私がエリア内のどこかで救難信号を出すから、そうしたら一齐にスタート！ 誰が私のところに一番にたどり着くか、つまり、誰が『要救助者のところに一番に助けに行けるか』の競争だ！ もちろん建物の被害は最小限にな！ 被害者に被害がないからって障害物全部ぶっ壊したら駄目だぜ！」

誰とは言わないけどね！ と言いながらオールマイトの指は爆豪の方を指差している。確かにこのメンバーの中だと一番大規模な破壊を引き起こしそうなのが彼であり、また障害物は薙ぎ払いそうなくらいの粗野さを外に出しているのも彼ぐらいだ。実際にやるかどうかは別にして。

その後組決めが行われ、呼人は緑谷、尾白、芦戸、瀬呂、飯田とともに一組目に決まった。

珍しく少しばかり訓練を楽しみだと感じている呼人が、こういう場で使うために用意していた道具を装備していると、それを見つけた障子が近づいてくる。

「何か、珍しくワクワクしているようだな」

「見てわかるもんか？」

「口角が少し上がっている」

そんなもんかね、と呼人が自分の口元を触ると、おかしそうに障子が笑う。

「何か楽しみな事があるのか?」

「職場体験の時は個性使えずに地面走ってちよつとフラストレーション溜まったからな。久しぶりに個性なしでも走れそうな場所に当たってちよつと楽しみなんだ」

「む……個性を使わずにやるのか」

「個性使ってならいくらでも練習してるからな。それこそカナダとかアマゾンとかの森の方がもつとごちやごちやしてるよ」

「……どういふ動きをするか楽しみにしているぞ。それを見ればある程度はわかるというものだが」

呼人が腕に巻き付けているものと、ポーチから出して腰のフックにぶら下げているいくつかの道具を見て障子は言う。それは彼も映画などで幾度も見たことがあるものだ。

「場所によつては、登るのが一番鬼門になるからな」

「移動ではなく、か?」

「ま、見とけよ」

やがてオールライトが救助される位置へと移動し、それぞれの生徒もスタート位置へとつく。ある程度は自由にスタート地点を選べるものの結局全員近いスタート位置を選び、その中で呼人は頂上に手すりのついたタンクの前からスタートする事を決める。

その向こうにはいくつもパイプや鉄骨が続いていておあつらえ向きだ。

35 救助訓練レース・2

一方、一組目以外の者は大型モニターの前で観戦しながらそれぞれの予想を言い合っていた。

「クラスでも機動力良いのが固まったね。2人はどう思う?」

「強いて言うなら緑谷さんが少し不利でしょうか。後百竜さんはどうなさるのかわかりませんわ。あの大きな状態だと確実に通れる場所が限られるでしょうし、かといってあの大きさを上を走るというのも……」

「百竜君あれで走ったら絶対壊しちゃうよね! どうするんだろ?」

「あーやつぱはその2人がよくわかんないよね。緑谷はいつも何かするたびに怪我してるし百竜は何が出来るのかわかんないし」

そう、八百万と耳郎、葉隠が腰を落として話していると、その後ろを先程まで呼人と話していた障子が横切る。それに気付いた耳郎が声をかけた。

「あ、障子。百竜と何か話してたけど、何か作戦とか言ってた?」

その問いに、障子は少し沈黙した後複製した口で答える。

「あいつは個性を使わねえって言ってたぜ、ケケケ」

本体の口と複製した口の性格が全く違うのも彼の特徴である。が、そんな事は気にならないぐらいその答えが衝撃的なものだった。

「まじ？　個性使わないって……まあいつも全力出してる感じじゃないけどさ」

「どうなさるんでしょうか。他の方の個性を使った速度にはとても敵わないと思います
が……」

「あ、ねえ、あの百竜くんが持つてるの何?」

葉隠の大きな声に、そこにいた4人だけでなく他のクラスメイトもそちらに目を向ける。全員の概ねの予想はテープを使って立体的な機動力のある瀬呂か飯田か、結局はこういう訓練をしていないためにこれまで見てきた姿から判断する事しか出来ないのだ。

皆が視線を向けると、画面の向こう側では百竜が手に手のひらと同じぐらいの大きさの何かを持っていた。その後ろから伸びる紐は、呼人の腕に巻き付いているように見える。

「なんででしょうか……あ、もしかして」

「何、ヤオモモ何か心当たりあるの?」

「あの形ははじめて見た気がします、この訓練で使うことを考えると鉤縄かもしれない
せん」

鉤縄を知らない生徒に八百万が説明している中、呼人の映像を見つめていた障子は、

彼の口元が先程と変わらず楽しそうに持ち上がっているのに気付いた。

（お前も、ちゃんと好きなことがあるじゃないか）

いつものクラスメイトとの関わりの中で彼が見せる友に向けた笑顔ではなく、己の好きなことに向ける笑顔というのを、障子ははじめて見た。妙に達観した普段の呼人を知っているだけに、それが新鮮に思えて、少しばかり微笑ましかったのだ。

そうこうしている内に、オールライトが開始の合図を叫ぶ。

『スタートアアトオオ！』

同時、それぞれの位置についていた一組目のメンバーがスタートする。

やはり一番に全員が注目するのはスタート直後に足のエンジンで急加速した飯田と、テープをとばして一気に空中へ舞い上がった瀬呂である。

「こんなゴチャついたところはやっぱり上行くのが定石だよな！」

「やっぱり対空能力のたけえ瀬呂が強えよ」

空中に飛び上がった瀬呂は次の足場を探すこと無く、更にテープをとばして先へと進んでいく。

「ちよーつとこのレース俺に有利すぎや——」

だが、断続的に大きな踏み切る音が響く。

ダンッ、ダンッ、ダンッ

後ろから響くその音に瀬呂が振り向こうとした瞬間、その横を高速で何かが通り抜けていった。慌てて視線をそつちに向けると見えたのは、先を凄まじい速度で跳躍を繰り返して進んでいく緑色の背中。

新しく会得した『フルカウル』の状態で上を駆け抜けていく緑谷の姿だった。

「うおおマジか緑谷!?!」

「そんな動き出来たのかよ!?!」

全員がどよめく中、工業施設の一番上の部分を次々と手や足で弾いて跳躍を繰り返す緑谷は止まること無く先に進んでいき、そしておつこちた。クラスメイトは驚いていたが、自分のルートを走っている呼人がそれを見ていれば『当たり前だ』と言っていただろう。

緑谷の速度、跳躍力には目を瞠るものがあるが、その動きはまだ未熟で不安定なものだったからだ。身体能力が高まった所で、事こういう動きに関しては経験と技術がものを言う部分が多い。緑谷にはそれがまだ足りていないのだ。

「綺麗なおつこちたね」

「ええ、大丈夫でしょうか……」

圧倒的先頭を進んでいた緑谷が落ち、やはり機動力においては瀬呂か飯田だろうと全員がそちらの映像に目を向ける中、一人呼人の動きを気にしていた障子が耳郎達に声を

かける。

「百竜が面白いぞ。………(こう)いうことか」

「え？ そう言えば百竜………は？」

「速い、ですわね………」

映像の中では、呼人が緑谷ほどのぶつ飛び具合ではないものの、パイプからパイプ、そして建物や露出した通路、手すりへと飛び移り、止まること無く建物や工場の屋上部分や、中腹あたりを走り抜けていく。

「え、あいつあれで個性使っていないの？ わつ、手すりの上に着地してる」

入り組んだパイプを半ば跳び箱のように手をつけて飛び越えた呼人は、その勢いのまま少し離れたところの手すりの上にピタッと着地すると、今度は通路ぞいに走り出し、適当な位置にある壁や手すり、パイプを蹴って建物と建物の隙間をもともせず前へ前へと進んでいく。その速度は、テープを利用して地形をほとんど無視している瀬呂にすら並ぶ程のものだった。

「うわ、百竜やべえ！ ってかあいつパルクールやってんのか!？」

その百竜の動きと似たものを見たことのある上鳴が思わずと言ったように叫ぶと、それを聞いた切島や峰田が彼に迫る。

「パルクールってなんだ？」

「教えろ上鳴イ！ あんな、あんなモテそうなの……！」

くだらない事を言いそうになった峰田はまた蛙吹の制裁を受けていたが、それを無視して耳郎たちも映像を見ながら上鳴の説明に耳を傾ける。

「街の中みたいな壁とか段差とかがあるところを跳んだり登ったり走ったりして進んでくパフォーマンズみたいなのもんなんだけどよ。壁とかパイプ蹴る動きがなんか似てんだよ百竜の」

「ふーん、てか上鳴もできんの？ あれ」

次郎の質問に上鳴は慌てたように首を振る。

「む、無理だつてあんなの！ そりやちよつと真似してみようつてやったことはあるけどよ。あいつ、さつきから狭い足場から狭い足場にばんばん跳んでくし、それなのに全然スピードが落ちてないんだぜ？ 緑谷もやばかったけど、あいつのあれもだいぶやべえよ。それに個性で身体能力上がってるんだろあいつ。緑谷とか砂藤なら出来るかも知れねえけど俺には無理だ

上鳴の言葉に、耳郎と障子は顔を見合わせる。すると、2人の目線での会話をガン無視した葉隠が先程聞いた事を思い切りよく口にした。

「でも百竜くん個性使つてないらしいよー！」

「え？ どういうことだよ葉隠」

「ねえ障子君!」

「……職場体験で思うところがムツ!? 飛ぶつもりか!」

説明の途中で珍しく口調を荒げた障子に、他の者も映像に視線を戻す。その中では、瀬呂を追い抜いた呼人が工場地帯全体の中でもかなり高い位置にあるパイプの上を全力疾走していた。その向こう側には同じ高さのパイプや建物は無く、飛び出してしまつては落ちるしか無い。

だが、全員が見守る中呼人は止まらない。そして勢いよく、胸の高さにあるパイプを飛び越え空に向かって飛び出した。その先にあるのはかなり低い位置に工場の屋根が1つ。そこに向かって綺麗な幅跳びのごときフォームで飛び降りた呼人は、空中で一回転した後足で着地すると前転して衝撃を殺し、そのまま立ち上がって走り続ける。

「まじか、百竜すげえ……!」

「あれで個性使つてないって絶対ウソだろ!」

「……本人が言っていたことだ。俺に言われても困る」

「そりや、そうだけだよ……」

上鳴や切島、障子はその動きに感嘆の声を上げる中、それをじつと注視していた轟や爆豪、八百万の目は険しい。それぞれに高い自尊心を持っていたり、他の生徒とは違つてこれまでの人生もヒーローを目指しての鍛錬に費やし、推薦入試という、ヒーロー科

の普通入試よりも遙かに狭く厳しい門をくぐって来たりしている彼らにとつて、例え個性が無くともこの程度は出来るのだと誇示するかのような呼人の行動は理解し難く、まるで見せつけられているかのように感じるものなのだ。

実際呼人は見せつけているわけだが、人生の殆どを神王寺以外の人間と深く関わらずに生きてきた呼人やモンスター達は、嫉妬や妬み、あるいは傲慢、奢りといった人間の負の感情に対して知識として以上に何も知らないため、自分がそういうものをこうも簡単に生み出してしまっているとは考えていないのだ。

モンスター達の中にはそうしたことに気付いている敏い者もいるのだが、呼人の人間としての成長の為にあえて口にしていない。それが、この3人を始めとした一部のクラスメイトの心に良くない影響を与えていた。

「あ、でも瀬呂くんが追いついてきたよー」

呼人が水平方向への移動能力に長けている一方で、瀬呂は垂直方向の移動能力、特に上方向への機動力に長けている。そのため、高低差が激しくなってきたオールマイト近辺に到達したあたりで壁の小さな出っ張りを掴んだり蹴ったりして登っている呼人に追いついたのだ。

結局、そのまま僅差で瀬呂がリードしたままゴールした。呼人も健闘はしたが、最後のオールマイトがいる地点を登る所で大きく差をつけられてしまった。最後の壁は高

くうまく使えそうな出っ張りが見当たらなかつたために鉤繩を使ったのだが、結果としてその時間が瀬呂に敗れる原因となつてしまった。

続いて、地面の複雑な細道で若干迷つてしまつた飯田が到着し、尾白、芦戸と続く。尾白は尻尾を利用して適度に高い位置を移動しようとしていたものの、緑谷、呼人、瀬呂ほどの機動力は無く遅れを取るこゝとなつた。芦戸も個性をうまく使つて登ることは上手く出来たのだが、その先を上手く出来ずに最下位となり悔しがっている。

「ふわー、うちあんなに早く動ける気がせん……」

「ウチも。つてか移動向きの個性じゃない人は辛いよね」

「……ええ、そうですわね」

頭を抱えて悲鳴を上げる麗日に耳郎と少し表情の固い八百万が賛同し、周りの者達も頷く。特に上鳴、切島などは本当に移動への活用が難しいために、どうすればいいかと頭を悩ませている様子だ。

呼人がオールマイトのもとに到達すると、先に到達していた瀬呂が話しかけてきた。

「百竜、お前速くね?」

「まあ、ここは結構剥き出しの通路とか手すりとかパイプとか、足場にしやすいものが多かったからな。職場体験じゃあビルの中でこんなことするわけにもいかなくて走るこ
としか出来なかつた」

「あー、たしかにビルとかになるとお前のやり方は掴みどころが無くてきついわな。
じゃあ結構本領発揮だった感じ？ てか個性使ってたか？」

「個性は使ってないぞ。個性使つての練習は結構出来ているしあつちは本当に思う通り
に体が動いてくれるからな。これ以上頑張つてもあんま意味が無いんだ」

呼人の言葉に瀬呂は目を軽く見開いた後、眉をひそめる。

「うお、お前それあんま他のやつに言うなよ？」

「ん、なんでだ？」

「お前悪意無きそうだけど、自慢してるみたいになつちまつてる気がするからな。上手
く出来ないやつがそれ聞いたらい良い気がしないだろ？」

「そういう、もんか？ 俺としては『個性が無くてもこんくらい出来るんだから個性を言
い訳にしないでがんばれよ』ってつもりで個性を使わなかつたりしてるんだけどな」

「まあ言いたいことはわかるけどさ。人間そんなに前向きな向上意欲ばかりじゃな
いってことよ。下手に煽って自信がへし折れちゃつても問題だろ？ ってか俺がもう
折れそうなんだわ」

そうすこしふざけ気味に言う瀬呂に、呼人は少し困ったという表情を見せるが頷いた。

「気をつける」

「おう、気をつけてくれな」

「人とほとんど関わって生きてこなかったからそのあたりかなり疎いんだ。なんかあつたらまた教えてくれると助かる」

「お、そうなの？ わかった俺に任せとけて。けどお前普段障子とか尾白と一緒にいるだろ？ 2人に言われたりしないのか？」

「いや……2人にはちゃんと俺の考えてる事説明してるからかももしれないな。何でこういう個性のいらぬ方法を鍛えてるか、とかどう考えて色んな事を鍛えてるのかとか。後実際の組手とかもやってるし……」

その説明に、瀬呂も少し興味深そうな表情をする。

「ふーん。それは結構大きいかもな。見せつけられるだけ見せつけられてもどうしたら良いかわかんねえってことも多いし。ちゃんと説明してもらえれば好感度も上がるかもな。てか組手とかいつしてるんだ？」

「毎日放課後とか、時間があつたら昼休みにちよこつととかだな」

「マジか放課後もやってんのか。そりゃあ個性を使わなくてもかそういう話が出る

わけだよな」

あーあー俺も遊んでないでそろそろちゃんとしねーとな、と瀬呂がぼやくので、呼人は以前切島にもした話をする。

「前切島とも話したんだが、俺あんまり楽しいこととか知らないんだよ。それでずっと鍛えたり知識頭に入れたりばっかりしてたから、それが当たり前っていうか鍛えるのが当然っていうか……だから自分がやることが普通じゃないのはわかっているんだけど、別にそれで俺が凄いかそういう話では無いと思うんだ。だって遊ぶこと知ってたらそれをするだろ？俺が知ってるのは鍛えたり学んだりってことしかないから、それをずっとやってるってだけで」

「かー、なんか随分と複雑そうな人生送ってんね？」

「まあ、否定はしない」

ははっ、と明るく笑う瀬呂に呼人も笑っていると、遅れて飯田が上がってくる。呼人はわざわざ鉤繩を使って壁を登ったが、反対側には階段があったようだ。

「む、2人とも早いな！」

「おつかれ委員長」

「お疲れ様」

いやこの内容なら勝てると思ったのだがな、後述のために君たちがどういう方法で突

破したか教えてもらえないか、という飯田に、瀬呂と呼人それぞれに自分たちの突破方法を伝える。どこからか取り出したメモ用紙にそれをまとめていた飯田は、その内容を再確認した顔を上げる。

「瀬呂君の方法はともかく、百竜君のやり方は俺も少し参考に出来るかもしれない。百竜君はどうやってその方法を身に付けたんだ？」

「パルクールっていうパフォーマンスみたいな歩行術みたいなのがあつてな。それを動画で繰り返し見て1つ1つどう動くか分析した」

「パルクールか、なるほど俺も調べてみよう。ありがとう」

飯田がメモ帳をしまったところで、気になっていたことがあると瀬呂が口を開く。

「飯田、インゲニウムのことなだけどさ」

「ああ。兄がどうかしたのか？」

「いや、大怪我って聞いてたけど、ちゃんと復帰できたんだな」

その質問を聞いた飯田は、特に表情を変えずに事情を説明する。

「ああ、個性で治療してもらったようだ。本当はまだ療養のはずだったんだが、あの時の事件でたまらず飛び出してきたらしい。体を大事にしてほしいが、兄らしいと思つたよ」

「そうか。それなら良かった。やっぱりショックがでかいのかなと思つたけど、割と委員

長も立ち直れてんだな」

「……難しいところだな。確かにシヨツクは受けたし怖かったさ。ただ、兄はヒーローだし、俺もヒーローを目指してる身だ。職場体験の間も、それこそヒーロー殺しと対峙してからも幾度も頭をよぎったが、それを表に出しすぎるのは良くない。悩んだら兄や母と話して、前を向き直そうと考えてる」

その飯田の言葉に、呼人も瀬呂も少しどころではない驚きを覚える。

高校に入学したばかりの事の飯田は四角四面、非常に真面目な、そしてかなり堅い人物で、今言っていたような柔軟な発想が出来るとは思えない人物だったのだ。それこそ、非常によろしくない方向に思いつめているのではないかと他のクラスメイトも心配していたのだが、どうやら自分で気持ちを整理しようと努力していたらしい。

「そっか。ならなんかあったら俺らにも言ってくれよな。相談に乗るぜ?」

「ん、いや、しかし……」

「なんか言えない事情があるのか?」

「いや、そういうわけではないんだが……」

と言いつつ辛そうにしていた飯田だが、やがて腹をくくって話し始める。

「その、俺は委員長なんだ」

「そりゃ、委員長は委員長だろ?」

「だから皆の前ではリーダーでありたい、というか……あまり弱いところを見せたくない、と思っていて、兄や母に話を聞いてもらっているんだ」

共にヒーロー殺しと戦った轟や緑谷にも言っていない事だ。リーダーであろうとする飯田の心が、クラスメイトの前では強く、頼れるリーダーでありたいと考えてそうしようとしているのである。

それはただ飯田が考えただけでなく、兄と話す中で、強く皆を導く兄ですら悩み、恐れ、足がすくむことすらあると兄自身から聞かされたからである。悩みを弱いものとして切り捨てようとしていた自分に、それは当然のもので、1人ではなく助けてくれるものとともに向き合えば良いと尊敬する兄でありヒーローであるインゲニウムが教えてくれたのである。

ただ、心配してくれている以上はその事を正直に言ったほうが不要に心配をかけないと考えた飯田だが、とは言えそれを言っている時点で結局は心が弱っていると告白しているの心配されることには変わりない。

「そんなこと言うなよな。確かに委員長は委員長だけだよ、俺達はクラスメイトで仲間だろ？ 委員長がリーダーにこだわってんのはわかるけど、俺達も仲間のことは心配ぐらいするし相談には乗るぜ？」

「何も、強く引つ張り続けるだけがリーダーじゃないぞ。俺達は全員未熟だ。だからこ

そ皆とともに成長するという形も取れる」

「……君が言つても説得力が無い気がするよ。だが……そうだな。今度からは、もつと皆を頼ることにする。そして皆に頼つてもらえるようなりダーを目指す」

「違う、と瀬呂が呼人の脇をつつく。そう言われてしまうと少し困る呼人だが、2人とも真剣に指摘しているわけではなくふざけているだけだとわかったので一緒になつて笑つた。」

第36話 上鳴の向上心

「俺やっぱ機動力課題だわ」

「情報収集をして先に動くか即応するしか無いな」

「それだと後手に回るし俺らそういうのも不得手だからな。お前とか瀬呂が羨ましいわ」

「わりいね。結構汎用性高いのよ」

いししつと自慢げな言葉を特に嫌味を感じさせずに言う瀬呂だが、それを隣で聞いていた尾白が突っ込む。

「でも百竜に追いつかれてただろ？」

「いやごもつとも」

それは瀬呂も承知するところだったので特に反目する事無く認める。

すると、それを聞いた尾白が隣で着替えていた百竜に話しかける。百竜は上半身を隠すようにして着替えていた。傷だらけのその体を見せないように心がけているのだ。

「百竜、今日の放課後は屋内の方じゃなくて今日のどこ借りないか？」

「借りれるのか？ 出来るなら俺もそうしたいが」

「放課後相澤先生に聞いてみるよ。障子もそれで良い？」

「望むところだ」

ん、じゃあそういうことで、と3人で話がついたところで、反対側の壁で聞いていた切島が尋ねてくる。

「お前から何の話してんだ？」

「ああ、放課後に3人で組手とかトレーニングをしているんだ。けど今日ので機動力も課題だつてわかったから、今日はそっちにしたいと思つて」

「まじか！ 男らしいぜお前ら！」

「それで3人とも組手強いんだな。武道やつてる尾白はともかく、百竜と障子も最近強いし」

切島と砂藤が感心する中、峰田の歓喜の叫び声更衣室に響く。

「おい緑谷！ やべえもん見つけたぞ！ こっち来い！」

呼びかけた緑谷どころか全員に届く声で叫んだために、全員の視線が峰田に注目する。当の彼は、壁に貼られたプリントが少しだけ剥がれている部分を示して狂気すら感じさせる表情で喜んでいた。

「見ろよこれ！ 多分先輩方が頑張ったんだぜ！ こっちに何かあるか!? 女子更衣室だろ！」

そう言った緑谷は、全員がぼかんとする中そのプリントの裏側に明けられていた穴を覗き込もうとする。

「八百万のヤオヨロオツパイ！ 芦戸のエロい腰！ 葉隠の浮く下着！ 麗日のうららかボデイに蛙吹の意外おっぱ——」

鬼気迫る様子で穴を覗き込もうとした瞬間、その峰田の頭を両側からガシツとつかんだ飯田が峰田を壁から引き離れた。同時、壁の穴から普段上鳴を恐怖させているあのイヤホンジャックの先端が飛び出してくる。

「む、耳郎君か。耳郎君、聞こえているならそちらから穴を塞ぐ手段を講じておいてくれないか。先生にも後で報告しておく」

「な、なんだよ委員長！ 男の夢を邪魔しようつてののか!？」

そう叫ぶ峰田に、飯田は厳しい表情を向ける。

「普段の発言はまだグレーゾーンな部分が多いから見逃しているが、覗きは法に定められた犯罪行為だ。俺が見ている前でやらせるわけにはいかないだろう。未遂だから相澤先生には報告しないが、君のそれは犯罪行為なのだ十分に理解してくれ」

「うおおおっ！ このムッツリめー！」

峰田が全力で叫んでいるが、飯田は静かに剥がされたプリントを丸めて壁の穴を塞ぐように突っ込んでいる。いつものただ言葉だけの突っ込みではなく、友人が犯罪行為を

犯そうとしたために実力行使に出たのだ。リーダーたるものは、ときに毅然としていなければならぬ。特に規律に背くことに対しては。

ひと悶着あつたものの全員着替えて教室へと戻る最中、演習についての反省会を実施している尾白達に、上鳴が声をかけてきた。

「なあ、さっきの放課後訓練してると言ってたやつ、俺もいかせてくれねえか？」
「え？」

「俺もなんかしないといけねえとは思ってたんだけど、何すりやあ良いかわからねえから結局USJの後も何もほとんどしてねえんだ。だからなんかやつてるなら俺も一緒にやってみたい」

上鳴のその言葉に3人が目を見合わせる。と、以前の上鳴との会話を思い出した呼人が口を開く。

「そう言えば、以前相澤先生にあの布の扱い方を学ぶと言っていたのはどうなったんだ？」

「あーそれなー、なんかあれは俺の個性にはあつてないって言われてよ。そんでそのう

ちサポート科のところで新しいサポートアイテムの相談する機会があるからそれまで待ってて言われたんだよ」

「なるほど。まあそんな気はしてたけどな」

「なんだよ百竜わかってたのかよ」

そりゃああの武器は、個性が無くても敵を捕縛するための武器だからな、と呼人があの相談を受けた時に考えた事を伝える。彼にスタンガン機能のある警棒などを見せたのは、それは彼の個性が無くても出来ることであるし、逆に個性が無くても十分に戦力となりうるものであつて個性を活かそうと考えるならもつと電気の性質を利用すべきだと考えたからである。

と、それを呼人が説明し終えた所でずっと黙っていた障子が口を開いた。

「それは、先生に試されたのでは無いのか？」

「試された、つて、俺が？」

自分を指差す上鳴に頷いて、障子は自分の思つた事を説明する。

「強くなりたい、という生徒が来たから、そうしようとする強い意思があるのか試したのではないか？ 自分に断られても自ら強くなろうと努力を重ねるのか、それともそこでやめてしまうのか」

「……………」

「あながちありえない話でも無い気がするね。サポート科の話も今すぐ行ってみる、じゃなくて『そのうち』って言うてるのがひっかかる。普通に考えれば自分は教えられないけどサポート科で相談してみろっていうだろうからね。そうしなかつたと考えると、強くなる事を急いでるか、そのうちで良いって思ってるのか、試されてるのかもしれない」

尾白と障子の話を聞いた上鳴の顔色が青くなつていく中、呼人がその肩を叩く。

「とりあえず上鳴はサポート科に行つてきたらどうだ？ 放課後の訓練は屋内演習場にしろ運動場にしろ、来るならいつでも良いから」

「お、おう。そうする。まじか……きついぜ相澤先生……」

自分の行動を振り返つて顔を悪くする上鳴を励ましながら、4人は教室へと戻つた。

「そろそろ夏休みが近いわけだが、当然ヒーローを目指すお前らが30日間きっちり休めるわけじゃない。夏休み、林間合宿をやるぞ」

『合宿だー！ やつたー!!』

肝試し、花火、風呂、風呂、カレー、e t c。相澤の言葉にそれぞれが歓喜の声を上げて楽しみなことを口にする。ヒーロー科の合宿だから当然楽しいだけですむわけではないのだが、とはいえ彼らのも高校生である。楽しい事は欠かせない。

「ただし」

相澤の言葉でシンと静まり返った教室の中の、数名の生徒に目を向けながら相澤はもう一つ大切な事を口にする。

「期末テストで合格点に満たなかったやつは、残念ながら補習地獄だ」

「ひー!!」

「みんな頑張ろうぜ！」

数名悲鳴を上げる中、林間合宿参加の条件が告げられたのだった。

林間合宿の用件発表から3日後。

「あ、上鳴。今日は来れるのか?」

「まあな。サポート科の方もまだ完全じゃないけど検討してくれることになった。とりあえず向こうも考えたいからまた数日空けて来てくれってよ」

先日の救助レースの後、ようやく運動場Yの使用許可が降りた尾白、呼人、障子が運動場に向かっていると、後ろからコスチュームを持った上鳴が追いついてきた。

屋内演習場と違って各屋外運動場はそれぞれに対応する施設や自然を持ち、当然ながら訓練には危険が伴うので特に条件無しで解放されている屋内演習場と違って特別な許可が必要となる。そのため先日の救助レースの日の放課後すぐに相澤に相談したものの、活動内容をまとめた書類を提出しその承認と必要な安全対策の確認などに時間がかかって今日ようやく使用の許可が降りたのだ。その際上鳴が参加する可能性があったので、上鳴も利用希望者の一人として名前を書いておいた。

「どういうサポートアイテムを作ってもらうんだ？」

「まだ完全に方針が決まったわけじゃねーけど、避雷針みたいなもんが作れねえかなと思ってる」

「避雷針か。それは確かに面白いかもな」

「ちゃんとお前に言われてから電気とか雷のことについて勉強したんだぜ」

相澤に断られて特に訓練はしていなかった上鳴だが、呼人のアドバイスどおりに電気の性質などの知識や自然現象としての雷の性質などについての学習は、あまり自分でも優れているとは思っていない頭を必死に使って頑張っていたのだ。

結果としてだが、細かい理論的なことについてはむしろサポート科が要望に合わせて

考えてくれることであり、細かい原理についての理解は不十分なものの、見かけ上の電気の引き起こす現象についての知識がある程度身についたために、割と的確な要望を出すことが出来たのだ。

「やつぱりみんなそれぞれがんばってるんだな。俺も頑張らないと」

「そう、かはわかんねえよ。俺だって百竜に相談に乗ってもらってなかつたらやつてたかわかんねえし」

意気込みを新たにする尾白の言葉に、みんなやつてんのかなあ、と上鳴はクラスメイ卜の事を思い浮かべる。ヒーロー科では他の科と違って、普段の授業でもヒーローとしての訓練の他に組手の訓練や、体育の授業も体力トレーニングなど訓練じみたものが多い。

その他に何もしていないとは言わないが、大半がせいぜい筋トレやジョギングといった体力面のトレーニングであり、この3人のように実力を高めるような訓練をしているとは思えない。

「まあ学年が上がったらやるんだろうけど、まだみんなそこまでやつてねえんじゃないかね。それに家じゃあ個性なんて使えないってやつも多いだろうし」

「確かに……今の所演習場を使っても1年生と当たったことは無い。上級生がいたとしても大概どこかのブロックは空いてるからそれほど熱心な者が多いわけでも無さ

「そうだ」

「ヒーロー科って言うからもつとがながん訓練してるかと思つてただけだな」

あまり上級生と交流のないメンバーだけに、ヒーロー科の生徒が例年どれぐらい努力をしてどれぐらい訓練をしているのかは把握出来ていない。そのため、自分たちの訓練の仕方が普通よりはかなりしつかりしたものだとわかつていないのだ。

また上級生に関しては、学年が上がるごとに訓練の内容も濃くなつていくために、個人のトレーニングをしなくてもかなり疲れるということもあつてあまり自主訓練を大々的にしているものはいないのである。

やがて、運動場の更衣室に到着しコスチュームに着替え始める。校舎内にも更衣室はあるのだが、放課後などの訓練においてはこうしてそれぞれの運動場などの更衣室を利用する事もできるのだ。

「そう言えば、上鳴は期末試験は大丈夫そうなのか？」

「う……………」

「上鳴？」

「全然大丈夫じゃないです……………勉強まじでわからねえよ……………林間学校行けるかな俺……………」

痛いところをつかれたと泣きそうな顔になる上鳴。何を隠そう、彼はクラスでも一、

2を争う勉強ができない人間なのである。期末試験もやばいのはわかっているのだが、わかっているだけに目を逸していたのだ。だが、そこに尾白が救いの手を差し伸べる。

「なら、訓練の後勉強してるんだけど上鳴も来る?」

「まじ? 俺もいいなら行きてえけど、全く出来ねえから教えてもらうことしか出来ないんだけど」

「それなら大丈夫だ。どうせ尾白にも俺が教えてるし」

話に参加していなかった呼人がさらっと言った言葉に、尾白が恥ずかしそうに顔を振り向ける。

「俺は全部聞いてるわけじゃないだろ!? そりゃ百竜の方が頭良いけどさ……」

「俺もところどころ聞いている。百竜も、問題ないだろう?」

「まあな」

「そういうことだ。上鳴もちゃんとするなら来ると良い」

「お、お願いします! まじ助かる!」

地面に頭を打ち付けるぐらいの勢いで頭を下げる上鳴。勉強を特に苦手とする彼にとって、教えてくる相手は文字通りの救世主なのだ。

「上鳴……お前……やばくないか？」

「そんなの俺もわかってるよおお！」

上鳴の悲鳴が響く。そしてそのまま、助けに来てよおお！　と言いながら机に突っ伏してしまった。

今現在4人がいるのは1年A組の教室である。機動力を高めるための訓練をした後、制服に着替えて戻ってきたのだ。上鳴を除いた3人は先日からここで勉強している。雄英の最終下校時刻はかなり遅く、訓練を2時間ほどした後でも勉強する時間が十分にある。そして最終下校時刻になればちょうど高校生が帰るには少し遅い程度の良い時間なので、ちょうどよく利用しているのだ。

ちなみにこの時間に教室に残っている生徒は基本的にいない。

機動力強化のための実践訓練以前に体力が全く足りないことが露見した上鳴は、今度は学力がまったく足りることを露見させていた。応用出来ないどころか、基礎的な知識が頭に入っていないのである。

「よし、お前は1から勉強し直しだな。それと！」

「は、はい！」

「わからないなら授業中に爆睡するな！」

「はい！ いや、わかってるけどよ。眠くなっちゃうんだよな」

「俺も眠たくはなるよ。けど、そしたらその分のノートも取れないし置いてかれちゃうんだよね」

むう。と呼人は腕を組んでうなる。呼人自身は子供の頃からの生活の結果とんでもないショートスリーパーな上に眠気をかなりコントロールでき、更に体力も化け物じみているので授業中に眠気に襲われた事は無い。だが、普通授業中に眠気に襲われないような高校生はほとんどいないのだ。

「なら……仕方ないからわからなくなつたところは後で他のやつにノート見せてもらうとかしたほうが良いな。わからないままに放置するのは駄目だ」

「気をつける……」

「よし、なら全教科最初からやってやる」

「サンキュー百竜！」

「帰ってから遊ぶなどは言わないけどちょっとはやる癖つけろよ」

「うん！」

満面の笑みで頷く上鳴に呼人は小さくため息をつく。あまりにも元気が良すぎて、むしろわかっているのか心配だ。

そうして、確認した所本当に基礎的などころからわかっていない様子の上鳴に少しずつ

つ教えることにする。と言っても一時間半ぐらいしかないので、今日は英語だけ、明日は数学だけといった風にするしかない。

そんな勉強を苦しむ上鳴に教えていると、障子と尾白が勉強の手を休めて2人でスマホを覗き込んでいた。

「何見てんの……？」

文法を叩き込まれて半分グロッキーになってた上鳴が、半分キャパシティオーバーのアホ面になりかけている顔をゆっくりと上げる。

「改めてパルクールって凄いよなって思っただけ。俺みたいにパワーのある尻尾があるわけでもないのに、凄い自由に動き回るからさ」

「うむ。参考になるのもそうだが、見ているだけで楽しいものだ」

「あー……俺にも、見せて」

ふらりと立ち上がった上鳴が2人の座っている席へと近づいていく。尾白と障子がちらりと呼人の方を見るが、これ以上を今詰め込むとパンクしかねないと判断した呼人は軽く頷いた。家に帰ってから完璧に覚えて貰う予定で、覚える前に知識をノートにまとめながら叩き込んだのだ。

その後、帰るまでの時間も少ないということで4人で揃ってネットに上がっている動画を参照することにする。

「こういう人らつてあんまムキムキに見えないけど、結構スルスル登ったり跳んだりするよな」

「これは筋肉でやってるっていうよりは瞬発力と技術だからな。お前は体も軽いし、少し鍛えれば筋力的には十分だろ」

「むしろ鍛えすぎてない方が有利かもね」

「……俺はむしろ大変だ」

4人の中でも特に大柄で個性の関係もあつて体重が重たい障子のボヤキに、他の3人が明るく笑う。その後の鑑賞会は、相澤が戸締まりをしにくるまで続いた。

「おい、お前らもう下校時刻だぞ」

「やべっ時間見てなかった」

「……もうそんな時間か」

教室の入口から呆れた表情で告げる相澤に、4人は慌てて勉強道具を鞆に詰め込む。雄英の夜が遅いとはいえ、生徒はよほどの理由がない限り定められた下校時刻までに帰らないといけない。この場合のよほどの理由というのは、教師であるプロヒーローとの

特別な訓練や、学内施設を用いた長時間演習の場合のみを指すため、ただ4人で教室に残っていた彼らはそのうちに入らないのだ。

「お疲れさまでした」

「……さようなら」

「はいさようなら。気をつけて帰れよ」

「はい」

やがて教室の入り口で待っていた相澤の隣をそれぞれに挨拶した4人が通り抜ける、と、最後になった上鳴を相澤が呼び止めた。

「上鳴」

「は、はいー」

「もしまだこれを習得したいと思っっているなら——」

そう言いながら相澤は、自分の首の捕縛布を軽く掴む。

「努力と論理的な理由で俺を納得させてみる。今のお前に時間を割くのは時間の無駄だ」

「う、つす。がんばります」

始めはとんでもない罵倒をされたと思ったが、上鳴は先刻の障子や尾白の指摘を思い出した。ただ捕縛布が自分の個性に不適切だというだけでなく、多分自分の中途半端な

やる気は、相澤に自ら教えるには不十分なものでしかない判断されたのだ。だから『今のお前には』『時間の無駄』だと言われた。

自分が、毎日ああして訓練している百竜達や、それをしてないまでもトレーニングをちゃんとしている切島や爆豪、砂藤らほど熱意があるとは思っていない。今日は一緒に訓練をしたが、それも先日の演習での悔しさがあつたからで、積極的に出来ない事を埋めようとしているわけではない。

多分相澤にとっては、その程度のやる気の相手に自らの時間を割くのは無駄なことなのだ。

(見せつけられんな……色々と)

また、先をいく者達との差を見せつけられたような気分になる。それも仕方の無いことかも知れないとわかるぐらいには、今日の放課後の訓練と勉強は新鮮だった。

「じゃあ、気をつけて帰れ」

「はいっすー!」

先程より元気に返事した上鳴は、少し離れたところで待つてくれている3人の後を追う。めちやくちやなやる気を今すぐに出せる気はしないが、とりあえずやらないといけない環境に自分をおいてみれば、少しは変わることが出来るだろうか。

一方教室の戸締まりを終えた相澤は、先程の上鳴との会話を思い出していた。

(案外時間の無駄じゃない、かもしれない……いや、まだわからないか)

現状自分は、彼よりも遥かにやる気のある教え子を一人抱えている。教師としての相澤なら複数人を同時に見ることも出来るが、自らが作り出した捕縛布の扱いを教えるなら、尽きつきりになる必要がある。生徒に序列をつけるわけではないが、その教え子と上鳴を比較した時に、自分が教えるべきはその教え子の方だと断言できる。

だが一方で、上鳴も少し変化を見せているように思う。

サポート科の担当であるパワーローダーから聞いたところによると、先日上鳴がサポート科の開発室を尋ねてきたらしい。その時室内にいた熱心なサポート科の一年生が喜々として相談に応じ、上鳴の要望に合わせたサポートアイテムを開発しているようだ。

話が通ったら、というかサポート科に開発を依頼するということを担任教師である自分に報告しておけとは思いますが、それはサポートアイテムが完成し次第手続きの書類を提出させる際に注意すればいい。生徒たちのコスチュームの情報に関しては、全て学校側が把握しておく必要があるのだ。

ただ今はそれよりも、彼が、自分の『そのうち』という言葉を待ちきれずに行動を始めたということの方が重要だろう。以前相談を受けたときには積極的なやる気があるようには見えなかったが、一応待たずに行動を起こすぐらいのやる気はあったようであ

る。あるいは先程一緒にいた、クラス内でも唯一積極的に施設利用をしている3人に触発されたのかもしれないが、それこそ学校という空間のいいところだ。

(さて、これで勉強の方もやる気を見せてくれると嬉しいんだけどな)

だが、彼の悲惨な成績を思い出すとまた微妙な表情にならざるを得ない。まだまだ、上鳴には成長が必要なのだ。

とはいえ、相澤は今年は特に例年と違って生徒の成長が早いように感じていた。ヒーロー科の生徒とはいえ高校生。例年は1年の間は学校の授業の範疇で演習を行う程度で自らの成長を全力で図ろうとする者は少なく、大抵の生徒は高校生活を謳歌している。それが変化するのは大抵2年にはいって、外に出たの実習が増えてからだ。

だが、今年は少なくとも既に4人、自らを変え始めている。なかなか有望な生徒達だと、少しばかり誇らしく感じる相澤であった。

第37話 期末試験直前

時は流れて6月の最終週。期末テストが残り1週間まで迫っていた。

「勉強全くしてないーい！」

「俺もやべーわそろそろ」

午前最後の授業で期末テストが迫っている事を相澤に告げられ、昼休みに入った途端に叫んだのは芦戸である。それに同意したのが瀬呂だ。上鳴と並んでクラスの2大バカに名を連ねる彼女は、このテスト一週間前まで楽しい楽しい学生生活を謳歌していた。つまり、全く勉強していない。そして瀬呂もその2人には及ばないまでも成績下位者であり、これまた勉強をほとんどしてないのである。

「演習試験もあるんだぜ？ タイヘンだなー」

「なんで峰田が頭良いの！ 絶対おかしいよ！」

棒読みで言うのは峰田である。普段から変態的な発言ばかりで完全にあほなキャラが定着している彼だが、存外勉強的な頭は悪くないのだ。彼にとっては演習だけが心配事項で、勉強の方は大した心配事ではないのだ。

「ふ、2人とも、頑張ろうよ！ みんなで林間合宿行こう！」

「授業普通に受けてりや赤点は無いだろ」

「轟言い方!」

轟の至極当然と言いたげな発言にダメージを受けた2人は頭を抱える。轟のたちが悪いのは、これを嫌味でもなんでも無く素で言っているところである。そこに、緑谷、轟と一緒にいた飯田が助け舟を出す。

「ふむ、しかし学力的に不安ならばどうかしないといけないな。しかし俺は人に教えられるほど出来るわけではない」

どうしたものか、と頭を悩ませる飯田に芦戸が、助けてください飯田様、とすがりついているとそこに救世主がやってきた。

「あの、座学なら力をお貸し出来るかもしれませんが。演習の方は全然駄目ですけど……」
何やら最後に余計な自虐をしては1人で凹んでいる八百万だ。彼女はクラスでもトップの頭脳を持ち、個性に活用するための知識だけでなく高校の勉強に関しても秀でている。中間テストでも飯田や呼人を抑えてクラストップの成績を獲得していた。そんな彼女が力を貸してくれるとなれば、これほど心強いことはない。

飯田もそう判断したようで、彼女に確認を取る。

「む、八百万くん、それはありがたいな。お願いできるか?」

「はい、大丈夫ですわ。人にお教えるのは自分の勉強にもなると言いますし」

「ヤオモモありがとー！」

「ありがとな。ヤオモモ。俺古文が結構やばくて」

2人の感謝の言葉にお任せくださいと答える八百万に、話を聞いていた他の者も近寄ってくる。

「ヤオモモ、2人じゃないけどうちも教えてもらっていい？ 2次関数ちよつとわかんないところがあつて……」

「まあ耳郎さん。はい、大丈夫ですよ！ 他にも困ってる方がいれば……」

上鳴が手を合わせ、尾白が手を挙げる。

「ヤオモモ俺もお願ひ！」

「俺もよろしくお願ひします」

「っ！ お任せください！ 力になって見せますわ！」

プリプリと頬を上気させて意気込む八百万に、彼女に教えてもらう全員がバンザーイと喜ぶ。

上鳴と尾白はこれまで呼人や障子に勉強を見てもらっていたのだが、とある事情で一週間前になったので八百万に教えてもらうことにしたのだ。その事情は、芦戸が悲鳴を上げている時に尾白が呼人に尋ねたことであつた。

「百竜、テスト前一週間になつたけど訓練は続けるのか？」

「続けるつもりだけど、何かあるのか？」

そう答えると、尾白は少し気まずげな表情をする。

「いや、俺ももうちょい勉強したいから、訓練には参加出来ないからね。それを言っておこうと思って」

「む、そうか。それなら上鳴も……」

「呼んだー？」

自分の名前を聞いてやってきた上鳴に、尾白が事情を説明する。

「えー百竜まだ訓練するの!? 俺今週は結構教えてもらえるかなって思ってたのに……」

「体を動かすのはなるべく欠かしたくないからな。今まで通りに訓練の後になら教えられるけど」

「うー、まだぜんぜん大丈夫な気がしないんだけど……! どうすんの尾白!」

お前もこっち側だろー! と詰め寄る上鳴に、尾白は若干引きながらも笑って答える。

「自分で頑張るしか無いね」

「うおー!」

「なら2人も、あつちに参加させてもらったらどうだ？」

そう言つて障子が指す先では、正に八百万が、困っている人がいるなら全員教えることが出来るると宣言していた。

そして放課後。運動場に向かう前に2人は相澤のところへと来ていた。以前上鳴が参加していなかった際に彼の名を訓練の参加者の欄に書いた際には、『用事などで来れないものを念の為に加えておくのは問題無い』と言われていたが、その際は3人いる前提、つまり誰かが怪我をしても救助と報告に分かれることが出来る状況だったので教師無しでの訓練を許可されていた。だが2人外れるとなると危機管理の仕方が変わる可能性があるのだ。

だが、その報告を聞いた相澤は特に問題ないと頷く。

「そのまま実施して良いんですか？」

「お前らなら無理に危ないことはしないだろ。訓練の内容も立体的な移動の練習だけ。レースなどをするなら話は別だがな」

その相澤の問いかけに呼人達は首を振る。使用内容として提出したのには立体的移動の練習とだけ書いているため、レースをするととなると正式にはまた別の書類を出さな

ければならない。勝手にやってもばれないのだが、それを忠告する相澤の言葉だ。

「レースをする予定は無いです」

「なら問題ない。それに、お前らがそのまま訓練をしようとしているなら俺から止めようかと思っていた。お前らはともかく上鳴は学力が心配だ」

「なるほど。了解です」

相澤に礼を言つて職員室を出ると、ちょうど上鳴が向こうから歩いてきた。

「ん、あれ、百竜と障子も呼び出し？」

「いや、運動場の使用人員が減るから報告しに来ていた」

「あーそういうことね。悪いな抜けて」

いや問題ない、学習も大事だと障子が答えている一方で、呼人は上鳴が数枚の用紙を持っているのに気付いた。

「上鳴は何の用事だ？」

「あ、俺はこれ。サポートアイテム完成したんだけどさ、相澤先生にちゃんと報告しろって注意されたんだよ」

「む、ついに完成したのか」

上鳴の話の内容に障子も少し目を輝かせる。上鳴がサポートアイテムをサポート科に開発してもらっているという話は3人も聞いており、訓練の片手間ではあるがその性

能の実験に手を貸していたのだ。

そして4人で意見を出し合い、数回の改良を加えてようやく完成させたのである。もともと上鳴の要望は最初の段階で叶えられていたのだが、他の全く違うスタイル、考え方を持つ3人が意見を出したために完成が遅くなった面もあるが、その分様々な局面で使えるものになったので上鳴も満足している。その分使いこなすのが困難になって後で相澤に色々と注意されることになるのだが、上鳴はまだそれを知らない。

「おう。そしたら相澤先生も話聞いてみたいで、性能をまとめて提出しろってさ」
「なるほど。結局先生には筒抜けだったんだな」

「……良く見ている人だ」
「だよな。じゃあ俺は先生のところ行ってくるわ」

職員室前で上鳴と別れた2人は、運動場へと移動していつもどおりの訓練をこなした。最近はまだ屋根やパイプの上を移動する練習だけでなく、特定の場所までの移動方法を考えたり、一方がある場所からある場所まで運ぶなどといった訓練内容を取り入れられている。

それらが終わって着替えている所で、障子が話を切り出した。この2人だと互いに話を切り出すタイプではないため、訓練の内容の話ばかりで雑談はほとんど無かった。普段なら上鳴が何かしら言い出して尾白がそれに答え、他の2人も混ぜたりするのだ。

「……レースも、そのうちしてみたいものだ」

障子の言葉に、呼人は相澤が言っていたことを思い出す。そうなのだ、レースで課題を見つけたために今はこうして移動の練習をしているが、習熟してきたらもう一度レースをして実力を確かめるのもありだ。

「そだな。みんながもつと走れるようになったら、だけどな。とりあえず障子にはもつと思いい切り良く行けるようになってもらわないと」

「……善処する」

「この施設ならお前の体重でもそうは折れんよ。街中の雨樋とかはたまに折れやすいから注意が必要だけど」

「1つずつ確実に移動する術は少しずつ身に付けている障子だが、呼人のように連続で走って跳び回るといふ段階には至っていない。自分の体が大きく重たいのを知っているために、足場の耐久性を心配したりして慎重になっているのである。」

「期末演習で使うかも知れないだろ」

「む……確か一学期にしたことの総合的内容、だったか?」

「ああ。基本戦闘訓練と救助訓練だが、あのレースもやったことに入るだろ」

「……そう言われると、腰がひけている場合ではないのはわかるのだがな」

反省点を言い合いながら、2人は教室へと戻る。これからは学習の時間。勉強もしな

ければならないのだ。

「とうか思うんだけど」

「ん、なんだ？」

「そろそろ教師との手合わせをするんじゃないのか？」

「演習か？」

「いや期末で。実力見るには適度に力を抑えて戦える生身の人間が一番いいだろ。教師を倒すのか、教師から逃げるのか、攻撃をしのぎながら救助をするのかはわからないけど」

呼人の予想を聞いた障子は無表情のまま唸る。その予想が正しければ、期末の演習は大変なものになる。

「それは、難易度が高いな」

「あくまで可能性だけだな。心構えはしとくべきだ」

「うむ……とりあえずまずは、勉強に集中する」

「そうだな」

呼人のなんとなくの予想が的中し、クラスメイトが悲鳴を上げる中障子が彼の勘の鋭さを恐ろしく思うまで、後——一週間。

「上鳴、勉強はどうだ？」

「んお、百竜。勉強、まじで調子良い。ヤオモモすげーわかりやすい」

組手の授業中、話しかけた呼人に上鳴はそう少し感動気味に答えた。途中で放り出す形になったことを一応気にしていた呼人は、上鳴の答えに少し安心する。

「やっぱりな」

「やっぱりって、百竜わかってたの？」

「いや、俺の教え方はあんまり上手くないと思ってた。ゴリ押しでとりあえずこれとこれはこういうことだからとにかく覚えろとしか言えないからな。それに比べて八百万はそういうのも得意そうだと思うってた」

「あー……」

教えてもらっていただけに素直に領けず微妙な表情をする上鳴だが、呼人が気にしてないのを見て苦笑する。

「でも百竜の教え方は百竜の教え方でなんか良かったぜ？ 自分でやらねえと駄目なんだってわかるっつうか」

「まあ基本は『説明したから後は自分で頑張れ』だったからな。自分でやらんと容赦しな

いぞつていう」

「ヤオモモはなんか、大事な部分を覚えるまで一緒にやってくれたりとか、凄いい丁寧な感じ。お前はなんかオラオラな感じだな」

「その表現はどうなんだよ」

オラオラというわけのわからない感じだと言われてつい笑ってしまう。だが、なんとなく言いたいこともわかってしまうので擬音とは不思議なものだ。

「けどよ、しばらくお前らと放課後訓練してたからやらないとなんか違和感あんだよな。その分疲れてないから家に帰ってからもしばらく保つようになつたけど」

「訓練が習慣化されてるってことだな」

上鳴はこの一ヶ月ちよい、毎日絶対というわけではないが、かなりの頻度で呼人達の放課後訓練に参加していた。それ以外の日は演習で疲れすぎてダウンしているか、サポート科の開発室に行くか、耳郎だったり切島だったり仲良い奴と飯に行くか遊びに行く日ぐらいで、週の半分以上は参加するように心がけていたのだ。

「習慣化？ まあ確かに、放課後の習慣みたいなものではあるよな」

「次からは、わざわざ訓練をやめなくてもいいぐらいに普段から勉強しておこうな」

「うえ、ウエーイ……」

やぶ蛇をつついたと顔をしかめる上鳴から組手をしているペアへと視線を戻す。

クラス内の実力としては、短い間だが一緒に鍛えている尾白や障子はかなり秀でていて、最近一緒に放課後訓練で組手をした上鳴も少しだが上達が見える。他にはもともと鍛えている緑谷や砂藤、天性のセンスを持つ爆豪、それに職場体験で武闘系ヒーローの事務所に行った麗日がそれなりに出来る。

個性を使つた戦闘訓練とは違うためか、普段の戦闘演習で優れてる者も手こずつていたりと様々だ。どうも街中でのヒーローの戦闘を見て思うのだが、個性という強さがあるためにそれ以外の、誰でも出来る肉体的な強さは軽視されがちである気がする。勿論英雄の教師のような優れたヒーローになれば体の使い方も鍛えているのが当然なのだが、個性の使い方とともに肉体も鍛え抜くという考えがそれほど普及している様子はない。

このあたりにも、呼人は疑問を感じていた。

第38話 期末試験・1

「呼人、これ」

「お?」

筆記試験も終わり演習試験の前日。家に帰った呼人が夕食を食べていると、久しぶりに帰ってきた神王寺が1つのUSBを手渡してきた。

「なんだこれ」

「しばらくあちこち回ってな。敵連合に連なる人間に会っちゃあ話聞いてきた」

事も無げに言った神王寺の言葉に呼人は耳を疑うが、彼が冗談を言っている感じはない。

「それで、俺にどうしろと?」

「どうしろってわけじゃねえよ。人間のこと、知りたいんだろ?」

「ヒーローだけじゃなく、それも人間だぜ? と神王寺は言う。」

確かにそうだ。最初呼人が考えていた。知りたかったのは人のために生命をかける人間たち、この国で言えばヒーローのことであつたが、最近よく悩むのは、日々を生きている一般人のことであつたりする。そういう意味で言えば、ヴィランについて知るの

も人間について知る一環なのだ。

「……もらつとく」

「おう。それでよ——……」

「なんだ？」

言い出しづらそうに頭の後ろをガリガリとかく神王寺に、呼人は先を促す。

「まだヒーローになりてえと思ってるか？」

「……さあ？」

「さあつてお前よ……」

呆れたように言う神王寺に、今度は呼人が特に表情を変えずに答える。

「ヒーロー目指すと良いって言ったのはお前だろ？ 俺は人間に関われる場所で見ればそれで満足なんだ。まあでも、今は学校が結構楽しいな」

「あー……そうか。なら、言うことはねえ」

そう言つて神王寺も、呼人の皿から唐揚げをつまみ上げてぽいっと口に放り込む。

「……なんか、言いたいことがあるって顔だな」

「あーいや、あー……まあ、俺の口から言つて良いことじゃねえわ。モンスター達に聞いてみてくれ」

『——！』

「余計な事言うなだつてよ」

「うるせ。あんなもんいきなり教えられるこっちの身にもなれ」

「何の話だ」

わけのわからない事を言い合うモンスター達の長老格の面々と神王寺に痺れを切らした呼人が尋ねると、モンスター達は黙り込み、神王寺は顔をしかめながらガリガリと頭をかく。

「あーくそ、今言えるのはこれだけだ。モンスター達が、個性に関する重要な話を持つてる。お前にもかなり関わる話だ。ただそれはまだ言える時期ではねえし、場合によっては言わねえままでいるつもりだ」

『

「……わかった。まあ竜大戦以前のこととかもほとんど教えてくれねえしな。今更だろ。ただ、神王寺がそんな動揺するってことは結構やばい話なんだろう？」

「……まあな」

ほんとに面倒くせえと神王寺はまた頭をがしがしとかく。普段ほとんど見せないそのくせが、神王寺の動揺を示していた。

その原因は、昨晚呼人が眠った後にあった。夜遅くに帰ってきた神王寺がカップ麺を食べていると、いつもと様子の違う呼人が起きてきて話しかけてきたのだ。その話す内

容が、非常に重大で、神王寺の人生をかけようと思っていた疑問がいきなり解決されただけならともかく、それ以上に頭を悩ませるような内容が沢山含まれていたのである。

「お前らも、そのうちちゃんと教えてくれよな」

『』

「まあ、気長に待つよ」

神王寺の前だけに、彼にも一応モンスター達と会話しているのがわかるように声に出して話す。それが終わるのを待っていた神王寺は、呼人が一つ勘違いしていることについて伝えておくことにした。

「呼人、俺は別にお前にどうしてもヒーローになつてもらいたいわけじゃないからな」

「ん、そうなのか？」

「お前が人間の世界を崩壊させないでいてくれればいいって思っただけだ。そのためには守る側に回ってれば崩壊させようとは思わないだろ。だからああいった。けど学校が楽しいならその心配は無いだろ」

「ああ、そういうことか。どおりでヒーローになれつていうくせにヒーローの素晴らしさとかを教えてくださいなかつたわけだな」

当然だろ、と神王寺は言う。俺も別にヒーローが殊更素晴らしいものだなんて思っていないんだから、と。ただ呼人を人間の世界に縛るのに都合が良かっただけだ。目的はと

もかく利害が一致しただけに、モンスター達も異論を唱えなかつたのである。

そのまま黙っておかず今伝えたのは、ひとえに呼人のための事を思つてのことであり、彼の危険性がまずは一つ削がれたと考えたからである。

もつとも、呼人が何か確固たる決意でもつて世界を終わらせようと思つたりした場合にはそれを止めることは出来ないのだが、それはこの事を伝えていようと伝えていまいが関係ない。

「もともとお前やモンスター達が人間に対して持つてる印象と、この世界、特にこの国の人間のイメージが違いすぎるから、それにキレたお前がやばいことしかささないか気にしてただけだ。俺が拾つたやつので世界が滅びたとかなら目も当てられないからな」

「なるほど?」

「まあつまり、お前が学校楽しいって言ってくれてるならそれで良い」

色々難しい事を言つた上に結論が非常に簡潔になつた神王寺の言葉に呼人は軽く笑うが、彼がそれで良いと言うなら今はそれでいい。自分も、まだ不満はない。

「……そうだな。今はまだ、学校が普通に楽しいよ」

「まあまた、何かあれば俺にも相談しろ」

俺もお前が何思つてるか知らないとちよつと怖いし、と神王寺は言う。本当に呼人の

事を思ってくれている半分、文字通り脅威として見ている半分、と言ったところだろうか。思い余った行動に移る前にちゃんと相談してくれと言っているのだ。

「……学校行つて色々思うところもあるし、夏休みにでもそれを話してみたいな」

「おう」

神王寺の言葉に、呼人も頷く。確かに学校は楽しく、クラスメイトとの交流も今は楽しい事の1つになっている。しかし――。

いや、それはまだ結論を出すべきことではないだろう。今はただ、友人たちと交流を深め、楽しみ、様々な事を知ろう。

「あーあとな」

「ん?」

「よつぼど知りたいことがあったら、俺に言え。知り合いになんでも知ってるやつがいる」

「どういうレベルで何でも、だ?」

「文字通り何でも、だ。ああ、でもさっき言った秘密に関しては知らないかもな。けど、人の過去からヴィランの犯罪計画まで、目に見えるものなら何でもだ」

「そういう個性、か?」

「そういう個性だ」

わかった、覚えておく、と呼人は頷く。人の行動原理には、その過去が大きく関わる。ならば、興味深い考え方、あるいは行動をする人物の過去を知れば、その目的もわかるだろう。例えばヒーロー殺しなど、そのいい例だ。

「まあ色々言ってるが、思い通りに生きろよな。流星に世界ぶっ壊されたら困るけど」
「そうだな。そうする」

そしていよいよ演習試験当日。天気も無事晴れとなり、試験は予定通りに実施されることになった。

「どういう試験になると思う？ みんなが言ってた通りロボットかな」

「……百竜の予想が当たらないことだけを祈っている」

「何百竜の予想って。何か大変なこと予想してるの？」

障子との会話で疑問を持った尾白が呼人の方に視線を向けると、呼人は以前救助レーズで利用していた鉤縄を両腕に巻きつけていた。あの時は両手だったが、今回はどう使うつもりなのだろうか。

視線が自分たちの方に向く様子が無いので、障子は自分の口で呼人が以前ふざけ半分

で言っていた予想を伝える。

「試験の相手が先生方かも知れないという予想だ」

「絶対当たらない事を祈ろう」

ろくでもない予想を立てるなよ！ と尾白が呼人に詰め寄る。

「いやそうは言ってもな。ロボットとやるより実績確かなヒーローとやったほうがちゃんとやれるかどうかわかりやすいだろ？」

「言霊って知ってる？ そんな事言ってるくらいなことにならないんだ」

「おう、気をつける」

尾白の興奮も収まった所で相澤が説明を始めたので話すのをやめてそつちに注目する。その後ろには、大勢のプロヒーローの先生方が揃っていた。

そしてその口から告げられた『ペア、あるいはトリオを組んでの教師との戦闘』という試験内容に、呼人は当たるもんだなと気楽な様子を見せ、障子は腕を組んで黙り込み、尾白が深い深い溜め息をつくのだった。

「ひゃくりゅううう……」

「俺に言うなよ。まさかほんとに言霊なんてことはないだろ」

対戦する教師と生徒のペアの発表が終わりそれぞれの教師と生徒が移動用のバスに乗り込んでいく中で、呼人のふざけた予想が当たったことを尾白が恨みがましい目で見える。本気で恨んでいるわけでもないのだが、こうも的中すると何かあるのではないかと思わずにはいられない。

「はあ……。まあ百竜と飯田と組めたのは良かったけど」

「2人とも、よろしく頼む!」

2人がそう話しているところに、3人目のメンバーである飯田が合流してきた。そう、呼人達のところはクラスでも唯一トリオとなるチームなのだ。その代わり対戦相手もブラドキングとパワーローダーとペアであり、他チームが2対1なのに対して3対2という、人数比であれば少し他より不利なバランスとなっている。

「何を揉めているんだ?」

「百竜が前からこの試験内容を予想していたらしくてさ。揉めてるわけじゃないけどそれを話してた」

「む、予想していたのか百竜君」

「まあな。みんなの言ってたロボット戦つてのは無いだろうと思ってたから、あるとしたら対人戦だと思ってた」

呼人がそう答えている間に対戦相手の2人の教師に早く乗るように急かされ、3人はバスへと乗り込む。試験はそれぞれ雄英内の訓練用の施設で行われるため、距離がかなり遠く移動には時間がかかるのだ。

「よし。全員乗ったな。試験内容は移動してから説明するから、それまではゆっくりしておいてくれ」

教師陣を代表してブラドキングがそう指示するが、それを聞いた飯田と呼人は肩をすくめる。

「2人ともどうしたんだ？」

「もう対戦相手が決まってんのにゆっくりしてくれとかたちが悪いと思ってるな」

「ゆっくりするよりは、今の内に少しでも対応策を詰めておくのが正解だろう。あるいはそこから既に試されているのかも知れないが……」

さすが雄英、ひとときも気が抜けないな、と飯田は感心しきっているが、その目的をしっかりと看破している事を教師陣は見逃さない。

（どんだんだ大局的に場が見えるようになっていくという相澤の情報どおりだな。だが……）

（くけけ……さてどう対策をするか。対策を練るなんてのは当たり前の話だぞ）

「しかし、俺も対人戦というところまでは予想できたが、生徒同士の戦闘訓練ぐらいしか

思いつかなかったな」

「一番課題を突きつけられるのって、ちゃんと分析できて思い通りに戦える実力者だろ？ そう考えると生徒同士より実力の高い教師が相手したほうがあつてるからな」

「確かに……そこまで考えが回らなかつた。俺もまだまだだな」

「反省はそれぐらいにして、対策考えよう。戦闘ってことは先生達を倒さなきゃいけないだろ？」

「そうだな。それじゃあ——」

「これメモ用紙に使ってくれ」

3人の真ん中に座っている飯田に、呼人が腰の後ろに吊っている大型の本から一枚白紙のページを破り取ってペンと一緒に渡す。

「む、用意が良いな」

「このコスチュームは一戦闘だけじゃなくて探索とか色々出来るような装備だからな。戦闘糧食もあるぞ。食べるか？」

「いや、今はやめておこう。これはありがたく借りておく」

エナジーバーやチョコレートを取り出してみせる呼人に断って、飯田はその紙に《ブラドキング先生》と《パワーローダー先生》と2人分の名前を書く。

「確か個性は、ブラドキング先生が血を操る個性で敵を拘束する戦い方で、パワーロー

ダー先生が大きな爪を持つ個性でそれで地面を掘る戦い方をするはずだ」

「確かそうだったね。戦闘ってことは、それぞれどう戦うか、ってことか……」

「どっちも俺達と相性が最悪だな」

2人分の個性と戦い方を頭の中で軽くシミュレートした呼人がそう呟くと、2人が反応する。

「パワーローダー先生は確かに天敵と言っても過言ではないな。場所にもよるが、一方的に足場を奪われることになりかねない」

「ブラドキング先生も体術はかなりのものだろうし、インファイト主体の俺達じゃあ結構つらいね。何より下手に近づくと個性で捕まる可能性が高い」

「む、そうかそれも相性が悪いな。対抗するとすれば……百竜君、君はあの大きな状態にならなくても四足歩行の形態になれるか？ 以前演習で見た覚えがあるのだが」

「あーいけるぞ。全長1.5メートルから最大1.5メートルまで変化できる」

呼人の返答に、飯田が紙にその大きさを簡単な線グラフつきで書き込む。

「では百竜君は、基本的にパワーローダー先生の相手をしてほしい。穴を掘るといこうとは、地中に道が出来るということだ。君なら辿れるだろう？」

「穴の耐久力次第だ。普通に掘っただけだと、パワーローダーが通った直後に道がふさがってる可能性も高い」

「……そうだな。ではとりあえず、それが可能かどうかを最初に確認して欲しい。それと、仮に足場が足りなくなってきたときには最大サイズになって背中を足場にさせてもらっても良いか？」

そう言つて飯田が、下手くそながらに一匹の犬が穴の中に立ち、その背中を2人の人間が通る絵をかく。

「百竜を橋代わりにするのか。まあ確かにあり、なのかな？」

「わかった。確かにそれなら、穴からの脱出も比較的容易だしな。けどパワーローダーに好き勝手動かれてると、どんどん戦えなくなつてくぞ。ブラドキングがいる以上エリア全体を完全に掘り返して足場を無くすようなことはないと思うが……」

「うむ。だから基本的には君がパワーローダー先生を抑えている間に、俺と尾白君でブラドキング先生を制圧したい。基本的には尾白君にインファイトしてもらつて、俺が高速で奇襲をかける」

「俺が捕まつたら終わりだよ、その作戦だと」

「ああ。だが君の方が俺よりは組手の実力は高い。俺は高速で動き回ることには出来るが、そうすると結局半分逃げる形になってしまう。だから君に動きを制限してもらつてその隙をついて俺が戦うというのが一番同時に攻撃しやすい」

飯田の説明に、少し黙考した尾白は頷く。

「わかった。その作戦乗ろう」

「ありがとう。危なくなったらすぐ近くに行くから、なんとか俺の体に尻尾でも腕でも巻きつけてくれ。高速で離脱する」

「……それ、狙って罠にかけられる可能性ないか？ 飯田の方が相手からしたら捕まえずらくてめんどくさいだろ。パワーローダーに足場を取られるのに関しては何人も変わらないだろうし……」

呼人の懸念に、飯田は軽く頷く。

「確かにそうだろうな。だが俺は、仲間を見捨てるようなヒーローにはなりたくない。そのやり方で駄目なら、それだけの実力が俺には無かったということだ」

「それ、飯田は良いかも知れないけど俺達も巻き込まれるからね」

尾白がそう言うと、飯田は立ち上がって2人が見える位置に立つ。

「2人にも迷惑をかける可能性があるのはわかっている。だが、作戦上の囷として危険に陥るのではなく、正にやられそうになった時には、俺のわがままを許して欲しい」

「俺は、別に良いぞ」

「……俺もわかった。でも飯田も俺を信頼してくれ。ブラドキング先生の実力を把握しているわけじゃないけど、俺も簡単にやられるつもりはない。最初に下がり気味に実力をはかるから、俺がどこまでやれるか、どこからは無理なのかをちゃんと見極めて欲しい」

い。そしてもしそのとき俺と引き換えに相手を倒せるなら、そのときは倒す方を狙ってくれ」

「しかし……」

飯田がなおも躊躇うが、今度は呼人が改めて尾白と同じ事を頼む。

「特になにもない所で危険に陥つたら助けてほしいが、相手と交換できる状況ならそつちを狙え。このチームなら、相手1人と味方1人が同時にダウンしたら人数比としては優位になる。この試験の目的を履き違えるなよ」

「……そう、だな。倒せる時はそつちを優先しよう。だが……いや……。すまないが、作戦を変更しても良いだろうか」

飯田はそう言うのと座り直して、2人に考えた事を説明する。

「俺より、百竜君の方が戦局を見る能力は高いように思う。だがこの作戦で行くと、百竜君はパワーローダー先生にかかりきりになるために俺達の動きが見えなくなってしまう。作戦通りに絶対行くというわけではないし、戦闘中に指示を出す人が必要だ」

戦闘中の動きを想像した飯田がそう提案するが、呼人は淡々と返す。

「お前がやればいいだろ」

「うん、それ飯田がすれば良いよね。今の作戦だと、俺がブラドキング先生で百竜がパワーローダー先生とタイマンして飯田は離れた所で見ながら動けるんだから、飯田が指

示を出したほうがいいだろ。離れててもすぐに伝えに行けるわけだし」

「しかし……」

「この中で曲がりなりにパワーローダー先生を止めれる可能性があるとするれば俺だけだろ？ 指示を出す能力とか以前に、そこは前提として外せない。だから俺は絶対パワーローダー先生に張り付く。その上での作戦を、お前が立てればいい」

呼人の言葉に、飯田は目を閉じて深く深呼吸をする。数度、の呼吸の後、尾白と呼人が待っているなか目を開くと、自分の頬を両手で叩いた。

「わかった。俺が戦闘中の指示を出す。基本方針としては俺と尾白君でブラドキング先生を優先的に仕留め、その後3人でパワーローダー先生を狙う。それと、尾白君も俺が指示を出すとはいえ気付いたことがあればすぐに教えてほしい」

「わかった。俺も口に出すようにする」

「コミュニケーションはしっかりな。まあ無線もないから相手にも筒抜けになるだろうけど」

「百竜君も、しっかり抑えておいてくれよ」

「言うようになったじゃないか。そっちが早くしてくれないと、俺の負担が増すんだからな」

互いに突きあうように、お前が頑張れば、いや、そっちが頑張ればと互いを鼓舞しあ

う。誰かが大丈夫だと安心させるよりも、そうして戦友として士気を高めるほうがこのメンバーにはあつていた。

「一つ、思つたことを正直に言つても良いだろうか」

それぞれに士気を高める中、飯田が口を開く。2人が頷いたのを確認して、正直なところを飯田は口にした。

「パワーローダー先生を仕留められるヴィジョンが全く浮かばないのだが」

「だよな」

2人の答えがハモつたことに、また3人に笑いが起こる。士気は十分だ。

「地中に潜つて待機されたらどうしようも無いよね」

「狙えるとしたら息を吸いに飛び出してきたときだろうが、それも地上のどこに俺達がいるか足音や振動でバレてたら距離取られるしな」

「ああ。まあとりあえず、その場で考えよう！ わがままを言いはしたが、やはり赤点は取つてはいけないからな！」

「俺はとつても良いけど、林間合宿行つてみたいからな」

「む、百竜君そんな意気込みでは駄目だぞ」

「俺の課題が引きずり出せれば十分なんだつてば。目指すのは、俺が最終的に満足できること、つて言つただらろ？」

「俺は嫌だからね補習。ちやんとクリアするよ」

第39話 期末試験・2

「む……ここは工事現場か？」

「パワーローダーの独壇場じゃねえかこのフィールド」

「ここ1月の訓練が水の泡だね」

バスに揺られて10数分で到着した試験会場に3人は頭を抱える。まだ街や森のよ
うなフィールドであれば掘り返された後も足場を使って動きまわれるのでそれを期待
していたのだが、たどりついたフィールドは完全に平坦な、掘り返されてしまうとどう
しようもないフィールドであった。

「くけけ……それじゃあ試験内容説明するぞ」

「まず試験時間は30分。そしてその間に君たちには2つの目的の達成を目指してもら
う。その目的とは、『俺達のどちらかにこのハンドカフスをかける』ことと『誰か1人が
このステージから脱出する』というものだ」

「先生、戦わずして逃げることも許されるということですか!」

飯田の質問に、説明していたブラドキングは頷く。

「そうだ。何しろ相手は我々教師2名。こういうのは何だが、君たちにとっては格上の

プロヒーローだ。そして今回我々は、ヒーローとしてではなく、君たちヒーローが相手をする『ヴィラン』として振る舞う。後はわかるな?」

「なるほど。故に拘束をするか撤退をするかはヒーローの判断に委ねると」

「ただし」

そう言つてブラドキングとパワーローダーは、腕輪のようなものを取り出す。

「逃げていいとあつては、君たちも当然逃げる事を狙うだろう。そこで我々はこれを装着する。体重の3分の1の重さのおもりだ。これを装着することで我々の動きは大きく制限される」

「くけけ……それじゃあ、早くスタート地点に移動しろ。開始の合図は放送で行う」

そこで教師2人の説明は終わり、3人はスタート地点に移動する。他のペアであればおもりをつける理由や、逃走と戦闘の2択についてしっかり説明される。だがこの3人に対しては、そこを自分で考えるところからが試験であつた。特に飯田に対して。そして飯田はそれをしっかりと理解していた。

「どうするべきだと思つう?」

「速攻逃げの一手。当然向こうもそう思つてるだろうから、ブラドキングにカフスかけるふりしつつ逃げるのを狙つた方が良い」

「メインはどっちなんだ? それに、フェイントは本気で狙わないとフェイントだとば

れるよ」

「俺も脱出を押ししたいが、このメンバーで直線が一番早いのは俺だ。そして先生方もそれは気付いているはず。とすると、2人のどちらかに上から突破してもらおうことになる」

「俺達のどっちも、飛べないけどね」

「それもそうだが——」

『全員位置についたみたいだね。それじゃあ今から、期末テスト実戦演習を始めるよ！

レディイイ——ゴー!!』

作戦が決まり切る前に試験が始まってしまった。この、作戦を練りきれていない状態をあえて作るために試験会場に到着してから説明を行ったのだ。

臨機応変に、そして現状把握は迅速に。また戦闘中にもコミュニケーションは怠らずに。

単なる戦闘能力だけでなく、そうしたヒーローとしての活動に必要な全ての要素を試し、課題を発見し、また本人たちにも気づかせるための試験である。生徒のほとんどはこの期末試験を突破しなければならないゴールだと捉えているが、ここはあくまで通過点に過ぎないのだ。果たしてそれに何人の生徒が気付いてくれるか。それもまた、生徒の成長に期待したいところなのだ。

「百竜、大きくなって俺と飯田を乗せてくれ！」

「なるほど！ そのままステージの出口に向かって駆け足程度で進んでくれ！」

「あいよ」

2人の指示を聞いた呼人は、すぐさま成体のオドガロンに変身しかがむ。その背中に2人は飛び乗り、以前も乗ったことのある尾白が飯田を手助けして体を固定させる。

そして2人を乗せた呼人がステージの出口を目指して移動する中、3人は簡単な方針を打ち合わせた。

「パワーローダー先生が来たら俺達はすぐに離脱するから、百竜君は足止めを頼む！」
『了解した。パワーローダーがそっちに行つた時には笛を鳴らすから気をつけてくれ』

「百竜、下手に戦うよりお前1人でゴールを目指したほうが足止めになるよ！」

『わかっている』

「尾白君、俺達の方針は状況を見て判断する！ 声を聞いておいてくれ！」

「わかった！」

それからわずか5分もたたない後に、呼人は足元がいきなり不安定になり沈み込んだのを感じた。

『来た！』

「乗ってくれ尾白くん！」

「ああー！」

体育祭時の経験を活かし、人を乗せて走る事を想定していた飯田の背中に尾白が飛び乗り、尻尾を飯田にからめて固定する。そしてそのまま呼人から飛び降りると、ステージの脱出口から斜め方向に向かつて走り始めた。ゴールに直線的に向かうと、恐らくそこからやってきたパワーローダーの掘った跡にはまる可能性があると考えての判断だ。それは尾白には説明されていないが、飯田に指示を委ねると明言した尾白は黙って従う。

一方の呼人は、オドガロンを埋めてしまうには浅い穴から飛び出してパワーローダーの攻撃を警戒するようにランダムに跳び回る。

(やはり地中は空中以上に鬼門だな。全く打てる手がない……)

よく空中を自由に動ける者と地上しか動けない者が戦った場合には空中の者が有利だと言うが、その条件で言うならば地中を自由に動けるものの方が更に有利だ。空中にいるものは、対戦相手からしても常に視界に収めることが出来る。対して地中にいるものの位置を正確に察知する方法は無いと言っても過言ではない。地中への適正が無いものにとつては。

(匂いもだめ……掘ったところが盛り上がりながら動いてるから場所はわかるが、そのうち罠を仕掛けてくる可能性があるな)

曖昧な索敵手段には頼れない為に、足場をいちいち目で確認しながら跳び回る先を整する。と、適度に散らばしてはいるが、数箇所明らかにパワーローダーが掘るのを避けている場所が目についた。足場として確保できているならありがたいが、ブラドキングが来ていない以上明らかにトラップだろう。

(着地した途端に掘る……いや、このサイズをはめる穴を一瞬で掘るのは無理だろう。とすると、踏んだら落ちる……けどこの地面の硬さで作るなら、人間の体重に耐えられない穴は耐久度的に持たない可能性が高い。多分、人間の体重で勢いをつけなければ着地できるはずだ……)

だが、パワーローダーの戦法を見ているということはすなわち常に後手に回っているということである。そしてこの戦い方相手だと、とにかく時間が経つほどに分が悪い。

だからこそ落とし穴の包囲網から飛び出してゴールを目指そうとした所で、呼人はパワーローダーが動いている跡がないことに気づく。

(あつちに向かったか? いや、ありえない……けど悩んでる時間は無駄だ。なら少しでもあいつらと反対方向に——)

半獣形態、最も戦闘能力が高い形態に変身すると、残る少ない足場である場所を思い切り蹴って宙を跳ぶ。案の定と言うべきか、着地点がぼこりと盛り上がった。やはりパワーローダーは狙っていたのだ。それも呼人が離れて行った2人と距離を取るため

に反対側に跳ぶと言うことまで読み切つて。

(と思うよな普通！)

だが、読まれていることは呼人も読めていた。当然ながら足元を捉えられないとなれば、罠をめぐらして自分からはまりに来るように掘るだろう。だから呼人は空中で体を変化させ、黒い皮膜を大きく広げた。

そして進行方向を変化させ、それより更に先の場所へと着地する。

「けけ、やられたな。ブラドキングの方には行かせてくれんらしい」

『条件達成一組目は轟・八百万チームだよ！ 全員頑張りな！』

「イレイザーをやったか、けけけ」

着地した呼人がほとんど地面が崩れていないエリアを走り抜ける中、地中から顔を出してその背中を見つめたパワーローダーは、自分も再び地中に潜つてその後を追いかけた。

「尾白君、後ろだ！」

「うっ！」

飯田の声に反応した尾白が地を這うようにしやがみ込むと、その背中の上をブラドキングの腕から放たれた血が飛び抜けていった。

「らちが明かないなこれは……！」

尾白への攻撃に集中しているブラドキングに奇襲をしかけた飯田だが、フィールドの都合上その姿は完全にブラドキングに捉えられていて蹴りをなんなくガードされてしまう。

「パワーローダー先生の掘った跡が厄介だな」

「最悪あつちに引きつけられても足止め出来るようにしてるんだらうね」

『条件達成一組目は轟・八百万チームだよ！ 全員頑張りな！』

2人が一時ブラドキングから距離を取った所で、一組目がクリアしたという放送が流れる。それをブラドキングは追撃してこない。機動力においては流石に飯田が勝っており、下手に足止め地帯から距離を取ってしまうと強引に抜けられる可能性が高いのだ。

「……尾白君、君、俺の足に捕まる事は出来るか？」

「蹴り飛ばすつもりじゃないだらうね」

「そのつもりだ。君が上手く俺の足から跳び出してくれれば、落とし穴を突破できる。後は俺が先生に手錠をかけるか君が早いかの競争だ」

「……乗った。タイミングを指示してくれたらいつでも跳び乗るよ」

「よし。では先行して先生に飛びかかるふりをしてくれ」

「了解リーダー」

リーダーなどとおこがましい、と嘯く飯田だが、その表情は真剣なものだ。そして尾白が先行して接近しブラドキングが構えをとった瞬間、飯田はエンジンをフル稼働させて尾白の真後ろについた。

「今だー」

飯田の言葉に尾白が大きく跳び下がり、その尻尾を飯田の足に絡める。それを確認した飯田が、尻尾でぶら下がった尾白をまるで投石機のように投げ飛ばした。投げられる側の尾白も遠心力を十分に活かす動きをとって射出される。

この動きは、この一ヶ月運動場Yで呼人と障子とひたすら建物やパイプを登り続けて新しく身に着けた動きだ。

「行かせるか!」

「先生の相手は——!」

咄嗟に手を伸ばして血を射出しようとしたブラドキングだが、その腕めがけて飯田がハンドカフスを投擲し咄嗟にそれを避けてしまう。実際はハンドカフスは手に持って使わなければかかるようなものではないのだが、咄嗟の判断で回避を選んでしまったの

だ。

そのまま尻尾を使って体を守って着地した尾白は、ゴールに向かって走り始める。

「やられたな」

「ふっ——！」

話しかけるブラドキングに答えず蹴りを放った飯田は、ブラドキングが跳び下がった隙にハンドカフスを拾い直すと再び相對する。

「まだ試験は、終わっていないはずです。手合わせ願います！」

「……良い根性だ！」

『2組目の条件達成は飯田、尾白、百竜トリオ！』

結局、尾白がゴールラインを突破し、呼人はゴール間近で落とし穴を跳び回っては、パワーローダーに攻撃をしかけ、そして飯田はブラドキングに拘束された状態で試験を突破した。

「くけけ、全員怪我らしい怪我はねえな」

「だが一応リカバリーガールの所へ連れて行くぞ。全員バスに乗ってくれ」

行きもバスで移動した通り、帰りもバスで移動することになった。試験会場の都合上全員汗まみれの砂まみれではあるが、今汚れてしまうのは仕方ないということでも全員深くシートに座り込んだ。特に飯田と尾白は疲労が深い様子だ。一方呼人は、汗こそかいているものの基礎体力が段違いなので特に疲労を外に見せる様子はない。

「おつかれ」

「ああ、2人ともお疲れ様だ。本当に助かった」

「こっちのセリフだ。結局1人じゃあ突破しきれなかったからな」

「いやそれにしても、パワーローダー先生が来なかったことで本当に助かったよ。もし来ていたら俺達も足場を失っているところだった」

互いに互いのおかげで突破できたと思っただけに、こうして謙遜しあってしまった。が、それを良しとしない呼人が待ったをかけた。

「よし、じゃあそれぞれのこととその結果について反省会をするぞ。本当は映像があるから見ながら反省しやすいんだけどな」

「けど戦ったばかりの今の感覚も大事だろ？」

「まあ、そうだな」

「よし、そういうことなら軽くまとめながら反省会をしようじゃないか！ 百竜君！」

「は、ごや」

再び呼人の本からページを一枚破き、そこにまとめて反省会を始める。

呼人の方は、とにかく捕まらないようにして少しでも前に進む意思を見せておけばパワーローダーが放置できないという、呼人にとつては有利な状況下での戦闘、というよりは鬼ごっこであった。現に呼人の側からはほとんど攻撃を加えていない。それは取りも直さず、尾白と飯田の側で突破してくれなければ試験に合格できていなかった事を意味する。

ただ、フィイルド的にブラドキングよりもパワーローダーの方が遥かに強敵であり、それを抑え込むという意味では、それぐらい突破してくれないと困るという2人への信頼もあつた。

「なるほど、パワーローダー先生の仕掛けたトラップを空中で方向転換して回避したのか」

「パワーローダーはだいたいずっと地中にいたからな。当然あつちからもこつちのことが見えてないわけだし、先読みで狙ってくるとは思ってたんだ」

「でも結局は読み勝つたってことだろ？ それは十分凄いよ」

「まあ、多分パワーローダー先生も加減はしてくれてたんだらうけどな。じゃなかったら、多分連鎖崩壊するように掘られて詰んでたと思う」

呼人の言葉に、2人がどういふことだと首を傾げる。それに呼人は、自分の知つてゐる知識を交えて説明する。

「地中に穴を掘つた場合、まず地上からわからないことつて結構多いんだ。例えばモグラなんてあちこちの地中を潜りまわつてるけど、その跡が見えることはほとんどない。でも今回は地表にも地下を通つた跡が見えるぐらいの位置を掘つてたんだ。もし本気で潰しに来るなら、地下を完全に穴だらけにして、一気に崩して地面を大崩壊させてたと思う。そうすれば確実に巻き込めるしな」

「……確かに、なりふり構わずに先生たちがやつてくるならそうなるのか」

「ただ今回はあくまで試験だから、問題点を自分たちで発見させたり成長させたりつて考えてくれたところが大きいんだと思う。そっちはどうだつたんだ？」

「ん、そうだな。こっちは——」

と今度は、飯田が自分たちの側で起きたことを説明する。ゴールまでそれなりの距離がある地点でブラドキングと戦闘になり、戦闘できるエリア以外が落とし穴だらけで突破しようとしてもブラドキングの血に追いつかれる可能性が高かつたこと。そして最後は、飯田が尾白をぶん投げてそのエリアを突破したこと。

「まじっか」

「うん」

飯田の説明を聞いた呼人は、ニヤリと笑いながらも思わず口を抑える。それは思いつかなかった。確かに飯田の足の振りは早いために、そこに跳び乗って蹴り飛ばしてもらおうというのは考えてみたが飯田のバランスが取れるとは思えなかった。それを、尾白の尻尾という柔軟かつ長い部位を利用して投石機の如く投げられたというのは、面白い。絵面は少し、別の意味で面白いが。

「それは思いつかなかったな。ブラドキング驚いてた？」

「いや、すぐに反応されてたな。やはり先生方は凄い」

「俺は着地の方が必死だったよ。移動訓練での落下練習を思い出して必死で尻尾に丸まって転がったよ」

「()愁傷さまだ」

その後、このペアの問題点はやはり足場の悪い場所ということだろうか、いや、あえて3人にする事でリーダーシップを飯田に発揮させようとしたんじゃないか、むしろ連携力？ などと言い合っている内に、全試験会場から同じ距離の位置に設置された救護所兼放送室に到着する。

怪我といっても、ブラドキングの打撃を数発尾白と飯田が受けたのと、飯田が拘束された時に肩を少し痛めたこと、尾白が着地の時に打撲を数力作ったぐらいで、後から到着してきた緑谷と爆豪ほど派手な傷は負っていない。オールマイトと対決した2人

の傷は、それはそれは派手なものだったのだ。

そして3人がパワーローダーに連れられて校舎につく頃には、全員の試験が終了した。突破できた組がいくつか突破できなかった組がいくつか。上鳴が突破できなかったという話を聞いた時に思わず缶ジュースを握りつぶした呼人の表情は暗く笑っていたと、尾白は後に語った。

第40話 期末試験反省会

「みんな……お土産話つ、楽しみに……うう、やっぱ行きだいよ。」

試験も完全に終わり教室に戻った後、芦戸を始め試験を突破できなかった切島、上嶋、砂藤の4人を暗い空気が覆う。試験の前に、相澤じきじきから『実技試験にも赤点がきつちりある』ということを説明されていたため、試験を突破できなかった彼らは自分たちがその赤点だと落ち込んでいるのだ。主に林間合宿に参加できないことについて。「そんなこと言ったら俺もさ。試験クリアはしたけど俺はずっと寝てただけだからよ。とにかく採点基準がわからない以上……」

「お前が赤点かも知れなくても俺達が合格になることはないだろお!!」

上嶋が叫んでいると、スパアンツと小気味いい音とともに教室の扉が開かれた。教室に入ってくる相澤に、全員一瞬でそれぞれの席につく。予鈴はもう鳴っていた。

「お疲れ様。今回の期末テスト、残念ながら赤点が出た。ので……」

——林間合宿は全員行きます。

『どんでんがえしだあ!!』

「これが『嘘も方便』というものか……!」

安定の相澤節、合理的虚偽に、主に赤点だとうなだれていた4人が歓喜の声を上げる。だが、相澤はじろりとそちらに目を向ける。

「そう喜ぶなよ。当然ながら赤点は赤点。きつい補習時間は用意されてる」

ガンンという文字が見えそうなぐらい落ち込む4人から視線を全体に戻すと、相澤は詳しい試験の結果と意図を説明する。

「筆記は0。実技で切島、上鳴、芦戸、砂藤、瀬呂が赤点だ」

「クリアできなかった人より恥ずい……」

「今回の試験、我々教師は生徒側にある程度の勝ち筋を残しながら、その勝ち筋にたどり着くためにそれぞれの現状の課題にどう対応するかを見ていた。そうでなければ、そもそも課題云々の前に相手にならない奴ばかりだったろうからな」

「先生、本気で叩き潰すとおっしゃっていたのは本当ではなかったと言うことですか？」

相澤の説明に八百万が手を上げて質問する。最速で実技試験をクリアした八百万だが、相澤自身から相澤自身の判断ミスが敗北を招いたという説明を受けたものの試験終盤の相澤の動きが腑に落ちておらず、それを確認する意味合いもあつての質問だった。

「追い込む為だ。俺やマイクなんかはともかく、オールマイトや校長が本気になつたらとても今のお前らが勝てるものじゃないだろう。そもそも林間合宿は強化合宿。赤点取った奴こそ他の奴以上にここで力を身に着けてもらわなきゃならん。ぶっちゃけ、合

宿での訓練に加えて補習、学校に残つてのそれより遙かにきついから覚悟しとけよ」

サーと顔色を悪くする5人を尻目に、合宿のしおりが配布されていく。合宿が行われるのは夏休み中。まだ時間はあるが、それなりの期間の合宿となるため準備が必要だ。

「上鳴い〜」

「ウエ、ウエーイ」

「人がせっかく勉強教えてやったのに実技で赤点取つてどうするんだ。ほら、試験の反省しに行くぞ」

「ウエ？ 今から行くのか？」

「鉄は熱いうちにたたけ」

終業後上鳴のもとに行つた呼人は、がっしりと上鳴の顔面を掴む。俗に言うアイアンクローだ。鉄を叩く前に鉄で顔面を潰されかねない。

「あだだだ！ ギブギブ！」

そしてそのまま上鳴を引きずつて教室を後にした。その間わずか10数秒。林間合宿について話していた他のクラスメイトが一切口を挟めない隙の無い行動だった。

「……百竜は怒っているのか？」

「どうだろ。怒ったふりして遊んでないで振り返れって焚き付けてるんじゃないか？
百竜が怒ってる所見たこと無いし」

「む……それもそうか」

それを見ていた障子と尾白の2人は、今日は訓練の予定も立ててないし俺達は帰ろうかと顔を見合わせた。流石に実技試験の後に体を動かす元気があるとは思わなかったので運動場の使用許可を申請していかないのだ。

「1週間の強化合宿、かなりの大荷物だな」

「うん、結構用意しないと行けないものが多いよ」

「あのさあのさ、みんな持ってないものも多いだろうし明日休みだしもうテスト終わつたし、A組みんなで買い物行かない？」

葉隠の提案に、クラスでも元気の良い数名が顔を輝かせた。『クラスみんなで買い物』。そんな楽しそうなの、乗らない理由がない。

「行く行くー！」

「良いなそれ！ 爆豪、お前も行くだろ！」

「行かんわカス」

「楽しみですわね耳郎さん！」

「え、うん。もしかしてヤオモモ、こういうの初めて？」

「ええと、その恥ずかしながら……」

クラスメイトがそう話している中、先程出ていったばかりの呼人と上鳴について尾白が言及する。

「百竜と上鳴は俺から連絡しとくよ」

「お、頼んだ尾白！ てか詳しい時間はグループに送っとくぜ！」

こうして、クラス総出での買い物が決まった。

「なあおい百竜、どこ行くんだよ」

「試験の映像見せてもらいながら反省会するぞ。先生がああ言ったってことは、お前らの試験もちゃんとクリア出来るようになってたってことだろ？」

「そうだけどよく……いや、逃げてばっかじゃ駄目だよな。俺も頑張らねえと」

上鳴が納得した様子なので掴んでいた腕を離すと、おとなしく呼人に並んでついてきた。

その後相澤のもとに2人で向かい、映像を見る許可をもらう。

「試験の映像、2人でか？」

「そ、そうっす」

「わかった。これがデータだ。視聴覚室で閲覧しろ。下校時刻までには帰るように」

ヒーロー科の生徒には、演習や体育祭などの映像の閲覧が許可されているので、特に問答をすることなく相澤は許可を出した。その後映像記録の番号などがまとめられた用紙をもらい、2人は職員室を後にする。

「H E Y イレイザー!! お前のリスナーは熱心だな!」

「……さあな」

「シヴィー! けど実際お前もわかってんだろ! 何でそんな熱心なやつが多いのかっ

てさー!」

「……何が言いたい」

「生徒の過去は詮索したくねえけどよ、百竜はちよつと異常だぜ。流石に教師連中も気になり始めてる」

プレゼント・マイクの言うとおり、担任である相澤以外のヒーロー科の教師も呼人らの演習の映像の閲覧や運動場、屋内演習場の使用などは把握している。その熱心さはこれまでの1年生どころか、3年生のそれすら越えているほどのもののだが、それには必ずと言っていいほど百竜という生徒が関わっていた。例年個性、センスに優れた生徒

はいるのだが、あそこまで努力する生徒は見たことがない。

そのため、警戒しているとかでは無いが多くの教師が彼のことを気にしていた。

「……本人の許可なく話す事はできないな」

だが、教師の間に疑念を生むのは良くない。そろそろ呼人から預けられた映像を隠しておくのも困難だ。呼人に一言説明し、教師陣の間で共有した方が良いだろう。

視聴覚室に來た呼人と上鳴は、1つのモニターの前に陣取ってまずは上鳴の実技試験の映像を見る。それを見ただけの間の上鳴は、持ち前の明るさがまったくなく途中から下をうつむいてしまっている。

「……どうした？」

「……俺さー、やっぱヒーロー向いてねえのかな」

「あ？」

思わず声が低くなると、上鳴は『いや、なんでもねえ。映像見ようぜ』と空元気で笑ってみせる。それが普通に笑えてないということぐらいは呼人にはわかる。

「お悩み相談なら、ジュース一本で請け負ってやるぞ」

「……やっぱわかる？」

「普段一緒にいるやつならわからないかもな」

「何だよそれ……」

そう言つて少し自嘲気味に笑ったきり上鳴が黙つてしまうので、呼人が立ち上がつて視聴覚室の入り口に向かった。

「ジュース買つてくるから待つとけ」

「あ、え、うん」

自分の分と上鳴の分、2つ買つて戻つてくる頃には上鳴も多少は頭の中を整理できたようで、呼人が手渡したジュースを軽く飲むと、重い口を開いて話し始めた。

「USJのこと覚えてる？」

「忘れるか」

「あの時俺さ、殺されるかもしれないってぐらいには危なくて、めっちゃ怖かつたんだよな」

独白する上鳴の邪魔をしないようにと、呼人はジュースを飲みながらも黙つて聞く。

「それに、あの後耳郎にも俺が死ぬんじゃないかって怖かつたって泣かれちゃって、もう泣かせたくないからって、強くなりてえって思ったんだよ。けど結局相澤先生に言われて『そのうち強くなれるなら今は良いかな』って思ったし、お前とか爆豪とか轟みたい

にセンスがあるわけでもないし……。最近お前らと一緒にやってんのに何も役立てられなかったし……。やっぱ駄目だよなあ俺」

はあ、と上鳴が大きなため息をつく。話して頭の中が整理されれば整理されるほど、自分と百竜達の差が浮き彫りになっていく。それが上鳴には辛かった。

呼人は上鳴の言葉を聞いて話す内容を少し考えた後、ゆつくりと口を開いた。

「まあでも、俺はお前はヒーローになる素質は十分だと思うけどな」

「そうか？ 全然駄目だろ俺なんて……」

「ヒーローってのは誰かの為に頑張る人の事だろ？ 死ぬかも知れないっていう恐怖を感じた後に、自分が死にたくないからじゃなくて誰かを泣かせたくないからって頑張れるやつは凄いやと思うよ」

それに、と呼人は上鳴の目を見ながら続ける。

「俺達はまだ未熟で、ヒーローを目指し始めたばかりの身だぞ。今すぐ全部出来る必要なんて無いだろ。プロのヒーローだって助けられないこともある。今すぐ完璧を求めらんじゃなくて、何をどう頑張れば少しでも上にいけるかって考えたほうが良い」

「でもよ……。お前とか轟とか爆豪みたいに最初から出来るやつもいるし、耳郎とかヤオモモとかみたいに頭が良いやつもいるだろ？ それと比べたら俺なんてさ……」

随分と自身を喪失している様子の上鳴に、呼人は小さくため息をつく。今の上鳴は、

出来ることと出来ないことばかりを考えてしまつて、成長するということを考えることが出来ていない。

だから、見せることにした。

呼人は室内に自分たち以外に誰もいないのを良いことに、制服を脱ぎ始める。

「おまつ、何で脱いでんだよー」

「ちよつと待つてろ」

そう伝えると、絶対着るようになってるインナーも脱ぎ、これまでクラスメイトには絶対に見せないようにしている上半身を裸にする。

それを見た上鳴は、その凄惨な傷跡に息をのむ。

「お前、それ……」

無数の切り傷に皮膚を何か突き破った後や火傷の後、抉れたような後など、呼人の上半身は傷だらけだ。

「俺だつて最初から何だつて出来たわけじゃない。こんだけ怪我するまで無茶してやつと今みたいに戦えるようになったんだ」

説明する呼人の声すら聞こえていないように、上鳴は呆然と傷に見入っている。再び制服を身に着けながら、呼人は彼に語りかける。

「今出来ない事で自分が出来ないからと逃げるのは楽だろうが、血を吐くまでやつてみ

れば見えてくることもある」

「いや……流石にそれは血を吐きすぎだろ」

「それはそうだ。こんなちゃんとした学校で頑張つてればこんな傷だらけにはならないですむ」

「さっきの怪我……何の怪我かとか聞いても良い？」

ためらいがちに尋ねる上鳴に、呼人は特に気にすることでもないので簡単に説明する。

「木の中を跳び回つてる時に枝で切つたり貫通した傷と、刃物で切つた傷、後は火傷とか海に飛び込んだ時に岩に打ち付けた傷、熊にやられた傷、自分の個性で傷つけた傷ぐらいかな」

「満身創痍じゃん！」

「そんな難しい言葉知つたのか」

「知つてるよ！ 知つてるけどそうじゃねえよ！」

お前やべえよ……と上鳴は唸る。確かにこの世界の人間にとつては、とても考えられないような傷なのだろう。だが少しばかり焦っていた昔の呼人にとつては、手も足も残つているしどうということもない傷だ。

「これぐらいやればお前も十分成長できるつてことだ。だいたいなあ、轟とか爆豪とか、

ヤオモモとか言ってるけど、あいつらだつて単独じゃあ教師には勝ててないんだろ？別に万能つてわけじゃないんだぞ」

「うーぬー……言つてることはわかるけどよー……。お前が凄すぎて追いつける気がしねえ……。けど、そうだよな。俺も出来る事やつてみねえと」

「ん、その意気だ。それじゃあ、試験の反省をするぞ」

「ウエーイ。でもやつぱなんも出来なかつたのを見るのはしんどいな」

改めてもう一度、呼人も上鳴のペアはどういう課題を教師が見出していて、どういう形でそれについてこようとしていたのかを考えたかったので映像を再生する。

その途中で、試験の時の無力さを思い出して顔をしかめながら上鳴が呼人に話しかけてきた

「なー俺途中で思つただけだよ」

「ああ」

「俺達の所、めっちゃ厳しくない？」

「なんでそう思つた？」

「いやだつてよ、こんなでかいもんバカスカバカスカ崩されたら、クラスの誰でも厳しくね？　ぶっちゃけ俺と芦戸が駄目だったんじゃないやなくて、校長がきつすぎるっていう感じじゃね？」

上鳴の逃避とも取れる言葉に、呼人は否定するのではなく頷いた。確かに彼の言う通り、校長のやつてるような事をされると例え広範囲の制圧が可能な轟でも万能な個性を持つ八百万でも対応が困難だろう。あるいは爆豪なら全部吹っ飛ばすことも狙えそうだが、現在の彼の火力でこの規模を一掃できるとは思えない。である以上、そもそも真面目に戦うのは無理だという想定 of 試験なのだろう。

「だろうな」

「うえ？　まじ？！」

「多分だけど、お前らのペアの課題って『短絡的過ぎる』ことだったり、『先を見据えて考えてない』ことだったり、要するに『頭が悪い』ってことだったんじゃないか？」

「酷い！　そんなはつきり言わなくてもいいじゃん！」

もー凹むぞー、と上鳴が机に突っ伏すが、その間に呼人はスマホのメモ機能を開く。

「じゃあまず、これ試験始まってから何考えてたか教えてくれるか？」

「そりゃあ……先生見つかる前にいきなり崩されて『やべー！』ってなって逃げて、その後はどうにかしないとって考えたけど俺達の個性じゃどうしようもなくてさ。百竜と

か尾白に教えてもらった移動方法で瓦礫越えていこうかと思ったけどそれも難しかったし……」

上鳴の口にした内容を箇条書きにまとめた呼人は、それをうなだれる上鳴の前に置く。

「どう思う？」

「んー、何も出来てないなって」

「そうだな。何も出来てない。じゃあどうするべきだったと思う？」

そりゃあ、と映像を見直しながら上鳴は考えて答える。

「全力で逃げる、べきだったよなあ。校長先生いるのここだろ？ 絶対届かないわ」

複数のモニターの1つに示されている校長のいる場所を上鳴は指差す。その場所は、2人がボコボコにされていた場所からかなり離れた高台。2人の能力ではとても届く場所ではない。

「それを試験中に考えられてれば、ってというのがお前たちの課題だったんだろ」

「あー……そういう？」

「そういう。まずは校長を狙うか脱出を狙うか。それを決めたらその後はどうやってその達成を狙うか。個性でどうしようも無いってのは、何回か試してから気付いたのか？」

「そうそう。俺も芦戸もなんかしようとしたけど何も出来てなくてさー。……今考えたら、たしかにやる前からやっても意味ないって気づかんといけなかったんだな」

「そのあたりの素早い判断能力を鍛えろってことだな」

「うへー……。鍛えろって言ってもさあ、どうやって鍛えれば良いんだ？」

「今考えたことを、戦闘中に自分で考えるようにすればいいだろ。戦闘演習なら対戦相手の個性と戦い方を考えて、自分達何が出来るか考えて、その中で何をすれば相手を困らせるかとか。救助訓練ならしないといけないことがいくつあって、そのうち何が自分出来るか、何を仲間に任せないといけないといけないかとか」

「うおー、頭パンクしそう」

「まずは考えたぐらいいで頭パンクしないようにしろ」

無理だー！ と頭を抱える上鳴に、呼人はクスリと笑いながら彼のすべきことを伝える。こういう、どんな場所でも明るくすることが出来るのが彼の良いところなのだろう。ただ実力だけでなく、これもヒーローとして役に立つところなのだろうが、それは呼人が教えることではなく、彼が自分で活用するか決めることだ。

「お前、演習でも他の奴と組んだらその人に方針任せたりするだろ？」

「う、まあそうだけど……」

「とりあえず自分でも考えるようにしようか。後はその相手に自分の意見を言ってみる」

とかな。ヤオモモとか爆豪が味方だからって頼ってたら成長せんぞ」

「百竜……お前よく見てるなあ」

「戦う能力なんて見てればわかるから、気にするとしたらそういうところだろ。常に人の2倍、3倍頭を回してれば、それだけ成長できる」

「うえ、ウエイイ……俺も人の1倍になれるように頑張る」

「まあ、まずはそこからだけだな。というかお前普段の会話とかなら気使えるんだからそれをヒーローに使えば良いんだよ」

「うえー使える？ まあ気をつけてみるけどさあ」

よーし大事なメモモしとこ、と上鳴はスマホのメモ帳を開いてタップし始めると、そこに尾白からLINEのメッセージが届いた。届いた先は、放課後訓練組の4人で作っているグループだ。先程2人が教室を去った後に決まった、明日A組全員で出かけることについての連絡である。

「百竜、明日A組のみんなでモールに買い物行くらしいけど、お前も行く？」

「何買いに行くんだ？」

「林間合宿用の色々。足りないものあるだろ？」

「あー多分。まだしおりの中身確認してないからわからないけど。わかった、明日どこ集合だって？」

「モールの中央広場に10時……てかクラスグルに送られてるわ」

「あいあい。迷子にならないように行く」

「迷子なんてなるか？」

「1人であんまり建物が入り組んだ所行ったこと無いんだ」

うえーいマジか、と上鳴は少し驚く。なんでもできそうな呼人が、むしろそう言うごく普通のこと慣れてないというのは少し奇妙で、クラスメイトで言えば八百万や轟も似たような世間知らずな感じがあるが目の前の男がそうであると聞くとより一層不思議な感じがした。

「じゃあ朝一緒に行くか？ てかお前の家ってどのあたりだっけ」

んーこのあたりなんだけど……地名がわからない、と先ほどまでの頼もしさなど欠片もなく言う呼人に、上鳴は妙に微笑ましい気持ちになる。なんでも出来るように思えるこいつらも、出来ないことがあるのだ。勝手に抱いていた劣等感が、少し薄れたような気分だった。

第41話 模擬戦

『もしもし百竜。もうそろそろ10時になるんだけど間に合いそう?』

「いや、上鳴に連れて行ってもらおう約束なんだけど上鳴が間に合いそうにないって連絡してきたから俺も遅れそう」

『あー……駅かどこかで集合してくる予定?』

「うん」

『わかった』

呼人の説明を聞いた尾白は、電話の向こう側の誰かと話すように一旦口を電話から離す。恐らくもう集合している他のクラスメイトと話しているのだろう。やがて、相談が終わったのかまた電話越しに話しかけてきた。

『じゃあ先にみんなで動いとくから、後から2人は合流してきてもらえる?』

「了解——あ、今上鳴来たから今から電車でそっちに行く」

『わかった。じゃあまた後で』

電話を切ってスマホをしまった呼人のところに、息を切らした上鳴が走ってくる。

「ごめん百竜! 寝坊した!」

「あいあい。みんなもう先に買い物始めとくつて」

「はー……ほんとすまん」

「別に良いぞ。今日は特に急いでるわけじゃないし。まあみんなは気にしてるかも知れないけど」

後で謝つとかなないとだな、と言つて息を整えた上鳴は、呼人を案内して電車に乗り込む。職場体験の時は電車に乗った呼人だが、まだまともに使つたのはその一回きりで全くそういうものの利用には慣れていない。雄英高校があるのが東京中心部のような大都会ではないだけ地獄の路線図を見なくても良いのは救いだが、それでもまだ慣れるまでは混乱するだろう。

電車に乗り込んだ上鳴は、呼人の姿を上から下までじーつと眺めてから口を開いた。

「それにしても、なんつーかシンプルな格好だな」

「服か？」

「もち。靴、つてかサンダルも、だけどな。もうちよつとこう、お出かけ用！ みたいな服はねえの？」

いつもこんな感じなんだけどな、と呼人は自分の格好を見下ろす。文字入りの速乾Tシャツに運動用の半ズボン、足元は脱ぎやすいサンダル。明らかに友人と出かけるような服装ではない気の抜けた服装なのだが、呼人はあいにくまともな私服をこれぐらいし

か持っていない。

「無いんだよな。それに俺個性使うと服が弾けるから、この服はコスチュームと同じ特注で変身した時に取り込めるように作ってもらってるんだ」

「街中で個性使うことなんてそんな無いだろ？　せつかく出かけるときぐらい、おしやれしようぜ！」

「んん……おしやれは全くわからないんだよな。そのあたりの人の服見てなんかすごいなって思うぐらいしか……」

「よし、じゃあ俺と一緒に服選ぶわ！　必要なもん買った後に服見に行こうぜ」

「ああ、それじゃよろしく頼む」

そんな、主に呼人が知らない現代の一般的な楽しことについて話しながら電車を降りモール近辺に到達した2人は、そこが騒然としている事に気づいた。

「んあ？　なんかおかしくね？　ヴィランでも出た？」

「……モールが閉鎖されてるみたいだな。人が中からどんどん出てきてる」

「うわまじ？」

モールから流れ出してくる人の波に飲まれない位置に立った2人がその様子を見てみると、クラスメイトからラインでメッセージが来た。緑谷がUSJ襲撃事件の主犯格死柄木弔と接触、というよりは遭遇して一方的に脅されたらしい。それを警察やヒー

ローに通報した結果、モールで騒動が起きたということだ。

「百竜ライン見た？」

「ん、見たぞ。けど閉鎖した所で見つからないだろうな。USJの時の奴ならワープで脱出してる」

「うわ確かに。ワープつてずるいなまじで」

「調べてみたらかなりレアな個性らしいからな。しかもヒーローなら現着が早くなるだけだが、ヴィランが使えば好き勝手に破壊行動が出来る。むしろワープがあるのにこれだけ姿を隠してるっていうのが不思議だ。それこそワープの射程にもよるが、連続であちこち飛び回れば当然ながらヒーローがあちこちに振り回される」

「やべえ結構怖えな、と言う上鳴と話していると、更にモールで買い物をしていたクラスメイトから連絡が来る。内容は、店が再開するのは早くても夕方以降という警察から聞いた内容だった。また直接ヴィランと相對した緑谷は警察で事情聴取を受けることになったという。」

「えーじゃあどうする？ 他のみんなはもう少ししたら出てくるらしいけど」

「今日買い物出来なくてもまあ来週になればまた来れるよな」

「そだなー……来週はいつなら行ける？」

「週末なら大丈夫だ」

「オケ、じゃあ他のやつとも相談してみるわ」

1人での買い物に慣れないだけに、呼人は誰かについてきてもらわないとまともな買い物もままならないのだ。上鳴もそれを知っているのです、今日夕方までまつにしろ来週に延期するにしろ呼人の事を考えてくれている。

結局、買い物は翌週に延期されることとなった。

「———ということとで今年の合宿の行き先は例年から変更、行き先も当日着くまで明かさないうことになった」

翌週明け、緑谷が敵連合のリーダー格の男に目をつけられていたことを受けて、林間合宿の行き先が変更されたことが相澤から通達された。ぶつちやけ行き先の名前を言われても全く知識はないし、呼人にとっては至極どうでもいいことだ。

それよりも今日は、やらなければ行けないことがある。

「上鳴、帰りCDショップ行かない？」

帰りの挨拶が終わり相澤が教室を出た後、耳郎にそう声をかけられた上鳴は両手を合わせて謝る。彼女と一緒にいきたいのはやまやまなのだが、今日の放課後の予定はもう

入っているのだ。

「わり、今日ちよつと予定あるんだ。明日でも良い？」

「そっか、じゃあ明日で良いよ……って何でコスチューム持ってるの？」

予定があるなら仕方ないか、と領いた耳郎だが、上鳴が何故かコスチュームのケースを持つていたために思わずそう尋ねる。今日のヒーロー基礎学は午前中にあつてしかも演習じゃなくて実技試験の講評だったしそもそも放課後なのでコスチュームを持つてる必要がない。だから耳郎の思わずと言った疑問は当然のことだ。

「放課後に百竜達と模擬戦の約束してんのよ。それに結構時間がかかりそうだから今日は耳郎と帰れないな〜って」

「模擬戦？」

「そうぞ。あ、障子ちよつと待つて一緒に行こうぜ」

「……わかった」

上鳴に声をかけられた障子も、上鳴と同じくコスチュームのケースを持つている。教室を見渡すと、百竜は尾白と一緒に教室を出ようとしている所だった。そして2人と一緒に、葉隠も教室を出ようとしている。

「模擬戦って、2人と百竜と尾白の4人ですんの？」

「うん。じゃあ耳郎、また明——」

「うちも、見に行つていいかな」

「う、うえ？」

思わずそう尋ねた耳郎に、上鳴は驚いた表情を見せる。耳郎も、思わずついていきたいと言つてしまつたが、自分が見学をしたいという明確な理由があつたわけではない。ただ、4人がする模擬戦というものを見たいとなんとなく思つたのだ。

「見学、つてことだよな？」

「うん。駄目、かな」

「俺達は良いけど……良いと思う？ 決まりのに」

「……ミッドナイト先生と一緒に見ているのなら良いのではないか？」

上鳴が確認するように視線を向けると、障子は少し考えた後に頷く。今日の模擬戦はいつもの移動訓練や屋内演習場、トレーニングルームなどでの組手と違つてれっきとした『戦闘訓練』であり、互いに個性をぶつけ合つたりして怪我をする可能性が高いので4人が1年生でまだうまく加減が出来るかもわからないため手空きのミッドナイトが見ていてくれることになつたのだ。

上級生になると模擬戦でも時間と内容を申請書に記入して提出し、終了の報告をしつかりすれば教師の目が無くても大丈夫なのだが、あくまで彼らが1年生故の対応である。

「じゃあ耳郎も一緒に行く?」

「……行く」

「……2人を待たせると悪い。そろそろ行くこう」

先に教室を出ていった3人を追うように、上鳴達も教室を後にする。他のクラスメイ
トは林間合宿の事を話していたり、放課後に先日買いそこねたものを少しでも補充して
おく相談をしたりしている。

「何で急に模擬戦することにしたの? てか最近放課後いなかったの、それが理由?」

「あーそうだけ。つっても模擬戦は初めてだけだな。障子と尾白と百竜が放課後に訓練
してるって言うってたから、俺も混ぜてもらってたんだよ」

「……俺はUSJの事件以降尾白と百竜に稽古をつけてもらっていた。最近は職場体験
後の救助レース以降、運動場での移動訓練もしている」

「すごいねあんたたち……自主訓練、毎週してんの?」

「俺は週2か3かな。流石に演習の後に自主練する体力はまだねえし。障子達は毎日、
だよな?」

「……そうだ。演習の日などは軽い組手で済ますことも多い」

2人の返答に、次郎は耳を疑った。耳郎が予想していたのは一週間に一度ぐらいの自
主練だが、2人は週複数回の訓練をしているという。毎日上鳴と一緒に帰っているわけ

ではないし、上鳴も切島や瀬呂らと一緒に帰ることもあるので気づかなかつたが、放課後いかなかったのはほとんどが自主練をしていたためだというのだ。

「え、ちよ、つと待って。毎日って、毎日？」

「耳郎、それでは質問の意味がわからなくなっているぞ」

「いや、ちよ、だって毎日って……そんなにやってるなんて思わなかつたから……」

「……確かに、一年で自主練をここまでしているのは俺達だけかもしれないな。これまで屋内演習場で他の一年生と一緒にやったことはない」

「まー俺も一緒にやらせてもらって毎日って聞いた時にはびっくりしたなー。そんな体力ねえよ！ つって」

「……上鳴は組手や移動の技術以前に体力と筋力をつけるのが先決だろう」

「これでもちゃんと帰ってから走ったり筋トレとか尾白に教えてもらったの頑張ってるだよ」

だいたいお前らの筋肉がおかしいだけで、もうちよつと遊ぼうぜ、などとブツブツ上鳴が言っているが、耳郎はそれを聞いていなかった。

ヒーローを目指すものとして、毎日の学校に手を抜いたつもりはない。勉強も、上鳴と比べると確実に頑張っていると言える。演習でも、飛び抜けた実力者である百竜、爆豪、轟などに戦闘力の面では負けているが、素敵、捜査など自分の得意な分野では負け

ていないし、戦闘でも貢献できるようになっている。

だが、自分が他の女子とカフエやファミレスでお喋りしていたり好きな音楽を聞いて楽しんでいるときに、彼らはヒーローになるための訓練をしていた。純粋に、勝てないと思つてしまった。

「てか耳郎はこんなことに時間使つてよかつたの？ 他の女子と帰つたりとかさ」

「……今日はあんた誘うつもりだったから誰とも約束してない」

「そつか。なんかそれ、……ちよつとうれいしも」

「はあ？」

上鳴の返答に思わずそんな答えを返してしまい、上鳴にそんな怒らないでくれよと謝られてしまう。そういうことが言いたかつたわけではないのだ。ただ、彼らの訓練への熱意を聞いて動揺してしまっているだけで。

「じゃあ俺ら着替えてくるからさ、耳郎先に行つといてくれない？ あの入学して最初に戦闘訓練した建物なんだけど」

「ん、わかつた」

上鳴と障子が運動場の入り口の更衣室に向かい、更衣するの必要のない耳郎は一足先にその建物に向かう。そこは初めて戦闘演習をしたビル。今日の模擬戦は上鳴の新しいサポートアイテムの性能評価の側面も持つため、市街戦を想定したこの場所が選ばれる

事になっている。ちなみにこの模擬戦は上鳴が性能実験をしたいと考えたのもあるが、開発したサポート科の生徒に使ってみて欲しいと言われ、相澤からも性能の報告を上げるようにとレポートの提出を指示されていたりする。

耳郎がその建物の下まで行くと、建物近くの通りでミッドナイトと葉隠が立っているのが目に入る。近づくと気付いた葉隠が駆け寄ってきた。

「あれ、響香ちゃんも模擬戦するの!？」

「違う違う私は見学。透は?」

「私も見学だよ! 尾白くんも百竜くんも秘密で訓練してたんだよ!」

仲良いのに秘密にするなんて酷いよね! と腕を振り回す葉隠をなだめながら耳郎も頷く。

「上鳴から聞いたよ。まあ、見学させてもらえるんだから良いんじゃない? すること全部教えるのが友達ってわけでもないんだしさ」

「そうなんだけどさ……って響香ちゃん、何かあったの?」

でも頑張ってることぐらい教えてくれたら良いのに、とまだ納得出来ない様子の葉隠は、それを微妙な表情で聞いていた耳郎の様子がいつもと少し違うことに気づく。聞かれた耳郎は、凶星ながらもそれを表情に出さないように心がける。

「え? 別に何も無いよ?」

「そう？　なんか元氣無いなんて思つて。ほんとに大丈夫？」

「大丈夫だいじょう——」

「大丈夫つて顔じゃないわよ」

「つ、ミッドナイト先生……」

だが、そのポーカーフエイスも教師の中でも女子生徒の様子を伺うのに長けたミッドナイトには通用しなかつた。葉隠だけでなく、待つ間手持ち無沙汰になつていた彼女も2人の方へと近づいてくる。

「ほら、話してごらんなさい。今なら私達しか聞いてないわよ？」

「う、先生なんでそんなノリノリなんすか……」

「若い女の子の悩みつて青春つぽくていいじゃない？　そういうの好みなのよ」

教師としてのあれとかじゃなく思い切り好奇心というのがどこか心配だが、2人に問い詰められてしまつては無理に隠し通すのも難しい。何よりそれぞれからクラスの他の女子だつたり男子だつたり、あるいは相澤あたりに話が伝わつてしまう方が嫌だつた。

仕方なく耳郎は、4人が自分が放課後みんなと話したり趣味に没頭している中訓練をしていたことが、特に上鳴がそれをしていた事を聞いて衝撃を受けたという事を説明した。どうシヨックだつたかというのは自分でもはつきりとしませんが、何か悔しいという

か、嫌な気持ちになったということも説明した。正直自分でもこの感情とどう向き合えばよいかかわからないのだ。

「わかる！ 私もなんかショックだった！」

「そうねえ、特に仲が良かった上鳴君のことがショックだったって言うなら、置いていかれたっていう気持ち強いんじゃないかしら」

「……でも、ウチ、私じゃあ轟とか爆豪にも勝てないし、もともと置いてかれてるつてもするんですけど……」

「だから上鳴君が訓練してたことがショックだったんでしょね。特に仲がいい人で、無意識に自分と同じぐらいの実力だと思っていたから、その彼が頑張っていて自分がそうじゃないことがショックだった。そんなところじゃないかしら」

「それ、は……」

言われてみれば、何故上鳴が、というのも不思議なところではある。百竜は轟や爆豪と同じく、実力的には抜きん出ているもともと置いていかれたというイメージが強く、彼が訓練を密かにしているも『ああ、だから凄いんだ』と思える。

だが尾白や障子は、その3名と比べて個性が圧倒的に優れているわけでもなく、特に彼らに劣っているとすれば正にこれまでの努力や個性の使い方、ということになる。だが彼らが努力をしているということに対しては、『頑張ってるんだ』という感心以上の感

情は、ほとんど浮かばない。多少『自分も』という思いはあるが、その程度だ。

だけど、上鳴に關しては違う。彼が自主練を他の3人と少しずつだがしていると聞いた時は、何かすごく嫌な気分になった。

自分と上鳴は席が隣でよく話していて。そして一番最初の戦闘演習でもペアを組んで、その後USJで――。

「……そうかも知れない、かも」

「私も響香ちゃんと同じ気がする！ でも仲良い友達が頑張ってるのに嫌なのってなんか変じゃない？」

「だよね……。だから自分でもよくわかんなくって……」

なんでだろう、と悩む2人を見てミッドナイトは、『青春ってやっぱり良いわね』ともうすでに若くない思いを抱いていた。

着替えから戻ってきた4人と模擬戦のルールを確認した後、見学兼監視の3人は地下のモニタールームへと移動した。模擬戦の形式は2対2で、ルールも以前したものと同じく敵とヒーローそれぞれに分かれてターゲットの確保、あるいは防衛。

ただし捕縛用のテープの扱いに関しては、以前のように腕にまいただけで捕縛扱いではなく、胴体、あるいは腕や足であるなら2つ以上まとめ巻いた場合にのみ捕縛扱いとすることになっている。これは、『片手ぐらい持つてかれても相手をぶつ殺すのはわけない（意識）』という呼人の物騒過ぎる主張故のものだったが、上鳴においては腕や足がもげた所で放電能力が制御不能に陥ることはあれど使えなくなることはないため一矢報いることは可能であり、また障子も複製腕は本来の腕と違って再生能力があるため無茶がきくという理由から呼人と同じく片腕程度では止まらないだろうという結論に至った為に採用された。尾白は『俺はみんなと違って腕が持つてかれると辛いんだけどね』と笑っていたが、『お前には5本目があるだろ』という呼人の言葉に苦笑しながらも頷いていた。

2対2の最初のペアは呼人と上鳴が敵サイドで、尾白と障子がヒーローサイド。2戦目を入れ替えて行うことになっている。また時間や消耗具合によつてはペアを組み替えても行う。ただ1つ問題があつて、この4人での模擬戦となると、上鳴の新しいサポートアイテムの性能を試すには戦闘の幅が小さいのだ。上鳴以外の3人全員が戦闘においては肉弾戦のみを得意とするため、例えば轟のような強力な範囲制圧能力や、八百万のような多彩な道具を使用した戦闘、芦戸や耳郎、爆豪のような非接触での攻撃など、他の様々なパターンに対してどれだけ通用するかという事を評価しづらいのだ。

「響香ちゃんはどう勝ちかと思う？」

「んーウチは……百竜と上鳴の方かな。上鳴はアホだけど百竜が同じチームだしね。もともと敵側が有利なルールだし、百竜がちゃんと作戦考えたらそっちが勝つと思う」

「だよなーやつぱり。百竜くんがいるだけで『勝ちだ！』って思っちゃうもん」

「凄い駄目な発言に聞こえるけどチーム戦になったら百竜ほんと強いもんね……」

呼人はクラス内でも轟や爆豪と並びトップクラスの实战能力を持っているが、それと同じぐらい頭の回転が早い。それはクラス一の頭脳を持つ八百万にすら匹敵するもので、更に戦闘演習や救助演習における現場での判断速度においては優れてすらいる。呼人が積極的に指示を出すということは何故か殆どないが、一度だけ3人チームでの演習でリーダーになった時には味方の個性と出来ることをほぼ完全に把握して方針を決め、また相手の個性から出来ることと不意打ちすら予想してのけた。総じて、まさにクラストップの実力者と言える。

「あら、でも百竜くんのペアは上鳴君が指示を出してるみたいよ？」

「え？ うそっ……わ、ほんとだ」

「ええーっ!! 上鳴だよ!!」

インカムをつけて映像を見ていたミッドナイトの言葉に、イヤホンジャックを機器に接続してビル内の音声を拾う。無骨な作りになっているように見えるビルだが、内部の

備品は無い代わりに多数のスピーカーなどが設置されており、どこにいても声を確実に拾えるようになってきているのだ。

「あー響香ちゃんだけずるい！ ミッドナイト先生！ 私にも聞かせてくださいー！」

「あら、そうね。今日は演習つてわけでもないし、スピーカーで流すわね」

多分4人も怒らないわよ、と音声をインカムからスピーカーでの出力に切り替えると、それぞれのペアが話している声が聞こえる。

「えー、設置位置わかんねえよ百竜考えてくんね？」

「お前が使うんだからお前が考えろよ……。アドバイスするとしたら相手の来そうな位置に設置して索敵代わりに使うかな」

「索敵つてType Aの方？ 戦うのはどうすんの？」

「Bの方で割とどうにかなるんじゃないか？ まあそのあたりの使い方も使ってから考えないといけないだろ」

「外から行けそうだね」

「……2人がかりで登るか」

「ターゲットの場所確認したら障子が上から行ってその隙に俺が窓から行こう」

「向こうが分散していたらこちらは2人で当たったほうが良いのではないか？」

「相手によるかな。ターゲットの守りが百竜なら2人で行ったほうが良いけど、上鳴相

手だと範囲で制圧される可能性が高い」

普段のコスチュームに加えて、左腕には円盤状の装置、右腕には細長いアームガードのようなものをつけた上鳴が、その左手の装置から何かを発射して階段や廊下に設置していく。その後それらがある程度視認できる位置に潜伏した。呼人は上鳴がターゲットから離れて捕縛に向かったため、ターゲットのある部屋にとどまっている。

「うわ、完全に障子達の思うつぼじゃん」

「上鳴はなんであんなところにいるの？ 絶対やられちゃうよね」

「ふふふ。丁度いいからあなた達も考えてみなさい。戦闘は訓練もだけど経験した数も大事なのよ」

ミッドナイトに促され、2人は今実際に行われている戦闘について考察する。演習の後や先日の期末試験の後には、映像を見てから反省点を話し合うような授業を行っているが、実際に現在進行中の戦闘を見ながら予想していく、あるいは自分たちならどうするかと考えるということはほとんどない。普段の演習でも実際に行っているメンバー以外は外でモニターを見ているが、それも全力で予想すると言うよりは、何が起きるか『見逃さないようにする』という意味合いの方が強い。

「うわ、壁登ってる……」

映像の中では、開始時間を待っていた障子と尾白がビルの外壁に取り付いて登り始め

ている。尾白が先に勢いをつけて駆け上って高い位置に掴まると、そこから尻尾を垂らす。

そして今後は障子がその尻尾を複製した腕で掴むと尾白の隣あたりまで登り、今度は複製した腕を2つ合わせて手のひらに尾白の足を乗せ、上に向かって力強く押し上げる。その勢いで飛び上がった尾白は更に高い位置に掴まると、今度は監視カメラの根っこにぶら下がって障子を引き上げる。

「これって……普通壁登ってくることなんて予想しないんじゃないの？」

「え？ どゆこと？」

「前に授業でやったときって、みんな中に入らなかった？」

「……確かに、入った」

以前の事を思い出した葉隠の言葉に耳郎も頷く。以前授業の初めての演習としてやったときは、全員がビル内に侵入してから索敵なり戦闘なりを行っており、スタートから壁面を登り始めるという選択を取った者はいなかった。今やっても恐らくビル内に侵入する者の方が多いが、例えば麗日などは、ペアになった相手を浮かして特定の階から侵入させることが出来るかも知れないし、瀬呂なら壁を登ることも出来るはずだ。

「だから上鳴、外から来るって思っていないんじゃないかな？」

「……アホじゃん」

葉隠の予想はまさにそのとおりで、上鳴は2人が登ってくるであろう2つの階段に索敵アイテムを張り、そのうち一方に山を張って潜伏していた。

新しく作ってもらったサポートアイテムのうち、左手の円盤状の装置に搭載されている円盤状のアイテムを壁にはりつけ、それに人が接近した際にわかるようにしているのだ。

そして仮に潜伏している方の階段を登ってきた時には、放電で一網打尽にする。そういう作戦だった。

問題は2人が建物内を直接通らずに侵入しているということ。結局上鳴が物音に気付いたときには障子を呼人が拘束して、その隙に尾白がターゲットを確保していた。

「あれっ!? お前らどこから来たの!」

「窓から2人とも突入してきたぞ」

呼人からの連絡を聞いて慌てて駆け込んできた上鳴に、ほら、と呼人が指し示す先では、一枚の窓が打ち破られていた。

「まじで……」

「外から来るっていう予想が足りてなかったな」

「もーマジ無理だって……」

「ま、いまので覚えただろ。次同じパターンにはめられたら特別トレーニング考えてや

る」

「鬼教官かよー……はあ、よし。相手が自分と同じ動きしか出来ないわけは無い、つてことね」

「ついでに、お前が得意なフィールドを相手は積極的に避けようとするつてことも覚えとけ」

呼人の言葉に、室内で反省点を振り返っていた障子と尾白も頷く。

「このメンバーだと上鳴と戦うのが一番きついからね。なるべく上鳴を避けるつもりだったよ」

「おうまじかー……俺ここから動かない方が良かったと思う？」

上鳴がそうチームメイトの呼人に尋ねると、呼人は少し考えてから首を捻る。

「難しいな。それこそ敵味方のメンバーに状況によりけりだが、この面子で俺かお前かどっちが動き回るかって言われたら俺の方が良いと思う。駆けつけるのも速いし遭遇戦からの単体戦闘に向いてる。お前の場合は、先に索敵して自分のフィールドを用意しないといけない側面が強い」

「え、つと、つまり？」

「考えるより色々やって慣れる、つてことだ」

「ウエ、ウエーイ」

キャパシティではなく考えすぎでアホになりかけている上鳴を画面越しに見る2人は笑うことが出来なかった。4人がしているのは、授業で彼らがすることをより深めたような内容で。更に互いの出来ないことを知っているためそこを狙い合っており弱点の克服につながるうとしてる。

「あ、あはは、なんか自信、無くしちゃうね……」

「透……」

「ご、ごめん！ 凄いやね4人共！」

「ウチも、わかるよ。なんか焦っちゃうよねあんなのを見ると」

空元気を見せる葉隠に、耳郎も唇を噛むことしか出来ない。彼らが成長しようとしてるのに対して自分は、と。そう思わずにはいられない。

そんな2人に、ミッドナイトが教師としてのアドバイスを送る。

「焦っても良いのよ。というか、むしろ焦ってくれないと困るわ」

「え？」

「焦りって本人としては気持ちいい感情じゃないしむしろ嫌なものだけど、その焦りが人を成長させるのよ。前向きな憧れとやる気だけで進み続けられる人なんて本当にごく一部。だいたいの子は、そんな焦りとか劣等感に向き合って成長するの。特にうちなんて飛び抜けた子がたくさん来るからね。耳郎ちゃんみたいに割り切れる子の方が稀

なのよ。本当は劣等感なんか感じないで自分の意思で努力できると良いんだけどね。でもそういう子はたまに、『自分はここまでしか出来なくて当然』って変に達観しちゃうこともあるわ」

「でも、みんなが頑張ってるのに嫌な気持ちになるんですよ？ やだなあ……」

「あなたが嫌になってるのは、友達に、じゃなくて置いていかれてる自分自身。だから、気にするなっていうのは無理かもしれないけど、そういう気分になったら負けなくらい努力しなさい。でも、ちゃんと自分の出来ること、頑張っているんだということは忘れたらだめよ。焦りすぎると周りが見えなくなるし、自分の全てを否定したくなってしまうから。もし本当に辛くなったら、私でもイレイザーでも相談しなさい。私達も通ってきた道よ」

それはきつと、誰もが通る道。例えばあのNo. 2ヒーローのエンデヴァーすらが、オールマイトと自分を比較した劣等感に苛まれて色々とやらかしている。大なり小なりヒーローを真剣に目指すものは誰もが通る道だ。当然ながら個人の實力が評価される求められる世界、そんな焦燥感や劣等感を感じずにいられるのは、よほどの強者かよほどの弱者か。そういう意味では、個性以外の部分を鍛えなければいけなかったイレイザーや個性を活用するすべを考えなければいけなかったミッドナイトは、正に相談相手としては適任だ。

「ほら、まずは見ることに。見て学びなさい。あなたが焦っている相手はどこまで進んでいるのかを」

第42話 それぞれの決意

「ちよつと遅くなつたけど、誕生日おめでとう」

「おめでとう」

「ありがとなー！」

模擬戦を終えた呼人たちは、葉隠と耳郎も加えてマクドナルドに来ていた。模擬戦は最初のペアでの2戦とチームを変えての1戦のみで終えたため、時間的には少し余裕があり、とある事情で珍しくマクドナルドへとやってきたのだ。

それは、模擬戦を終えた男子連中が4人で更衣室にいたとき障子が発した言葉に端を発する。

「そう言えば……」

「どしたの障子」

「お前は先日誕生日だったと聞いているが、祝いを出来なかつた分今から食事に行かないか？」

「お、なら行こうぜ！ でも奢ってくれんならファミレスよりマツクがいい！」

「誕生日おめでとう。俺も初めて聞いたよ」

障子は彼が切島らと話しているのをちらりと耳にしただけだが、上鳴が言うには期末テスト間際だったということもあって彼ら以外のクラスメイトに言うことはなく、また彼らにも祝いらしい祝いはしなくて良いと伝えていたらしい。そのため、実質誕生日会は家で少ししてもらったぐらいでクラスメイトには祝ってもらっていないということだった。

それを受けて、それならこの4人と、もし来てくれるなら見学していた2人を誘って行こうということになったわけだが。ここに1人、状況をよく理解していない男がいた。

「誕生日、つてのは、上鳴が生まれた日つてことか？ それを祝うのが日本の普通？」

「む……百竜は誕生日を祝う風習を知らないのか」

「まあ、ずっと外国にいたしな。後俺自身自分の生まれた日知らん」

実は呼人は、誕生日を祝うことはおろか誕生日という概念すら知らなかったのである。単純な話、小さい頃に両親を失っておりまたそれがわかるような情報すら残っていなかったので拾ってくれた神王寺にも知るすが無かったのだ。そして当然、あんまりそういう方向には頭の回らない神王寺もモンスタ―達も呼人の誕生日を決めたり祝ったりはしていない。

「誕生日知らねえって何か事情がある感じか？」

「まあ……子供の頃に個性事故で両親が死んでな」

呼人の来歴を少し知っていて納得した様子を見せる2人とは違って、まだその話を聞いたことの無い上鳴が疑問の声を上げるので呼人は他のメンバーにも説明したところのある内容を説明する。自分の個性は小さい頃、物心付く前から出力自体は高かった事。そしてそれを何も知らないまま使ってしまった結果、恐らく両親にじゃれついて殺してしまったこと。

最初は驚愕に目を見開いていた上鳴だが、呼人の個性は発現した当初から現在の最大の状態に変身することが可能であり、むしろこれまでの人生をその制御に費やしてきた事を説明されると、納得の表情を見せた。上鳴自身も制御できない個性で人を傷つけたことがあり、呼人の状況を理解出来たのだ。

「なんか色々すげーやつだと思ってたけど、子供るときから大変だったんだな」

「まあ……そうだな。せっかくだから、お前の誕生日を祝わせてくれ」

「よっしゃ！ じゃあ祝ってもらって差し上げよう！」

「なんだそれ」

暗い話を呼人にさせてしまったとあえて明るく振る舞う上鳴に、呼人は突っ込みながらも笑う。彼の気遣いがわかったし、生まれたことを祝うという以上辛気臭い顔はふさわしくない。

「そんじやあ耳郎たちにも連絡してみるぜ」

祝われる上鳴が自分で言うのもどうなのかと思つたが、特に問題なく耳郎と葉隠の2人も賛同してくれたので6人でマクドナルドに行くことになった。上鳴はハンバーガーが好きらしく、そこに行きたがつたのだ。ついでに模擬戦の反省会上鳴のレポートの手伝いもすることになった。

かくして、6人はマクドナルドへと来ることになった。

「にしても、上鳴あんたならテスト前だろうが『祝ってー』って言い出しそうな気がしたんだけどね」

「いや俺も少しは氣遣うのよ？ 流石に試験前だったし言わないって」

「でも誕生日のお祝いみんなでするので学校ほくて良いよね！」

誕生日祝いと言つても特段何かパーティーのようなものを用意しているというわけではないので、上鳴にみんなでハンバーガーを奢つた後、ポテトやドリンクを買つて一緒に話しながら食べているというだけである。

そのため、話の内容もちよつとした思い出話やそれぞれの趣味の話から、次第に学校の話や、訓練の話へと変わっていった。

「あ、そう言えば百竜、模擬戦のことなんだけど」

「ああ。何か気になることか？」

「模擬戦というか授業での演習もなんだけど、百竜って絶対に殴ったり蹴ったりしないよね。何か理由があるのか？」

尾白の言葉を聞いた他の者も、記憶を探って確かにと、尾白の言っていることがあっているのに気づく。授業での戦闘演習や組手でも絶対に打撃を使わず、組技や拘束ばかりを使うのだ。実を言えば、放課後組手をする際の尾白にだけは打撃を使っているが、それも命中させるものではなく防衛できる程度のものしか使っていない。

他の者がただ疑問を持っているだけだが、武術に長けた尾白からすれば、明らかに手を抜いていると言えるものだった。実際U S J襲撃事件の際は、明らかに打撃によって無力化されていた敵もいたのを彼は見ている。

「理由……特段打撃を使う理由が無いし、打撃よりも拘束したほうが相手に怪我させないですむからな」

「……言い方は悪いかもしれないが、手を抜いているということか？」

単刀直入に切り込んだ障子の言葉に、呼人は頷くでも首を振るでもなく説明する。

「そういうことにはなるけどそういうわけでもないぞ。格闘戦に持ち込めば尾白以外に苦勞することはないから打撃を使う必要が無いし、まだ演習で尾白とぶつかってないからな。組手だと結構打ち合ってるだろ？」

「まあそうだけだね。でもそれも本気じゃないだろ？」

「それを言うならお前も顔と急所は狙ってこないだろ」

呼人からしてみれば、別に打撃を使っていないことの積極的理由なんてほとんど無い。最近の戦闘演習では以前使った捕縛扱いとするためのテープを使わないこともあったが、それでも尾白以外の相手は打撃を使わないでも拘束出来たし、実際その自信もあつた。

「ええー！ 百竜くんあんなのでまだ本気出してなかったの!？」

「……まあ、そうではある。怪我させれば勝てる、つて思つたことはないからな」

逆に言えば、例えば今日の模擬戦の一戦目なんかは『怪我させても間に合わない』つて判断したために障子を無傷で拘束したわけだし、本当に『怪我させるつもりで殴れば勝てるが、拘束を狙うだけでは勝てない』という微妙な切羽詰まり方を学校の演習でしたことが無いのだ。

「後これまで本気で殴つたことしか無かつたから、どれぐらいの強さなら打撃を使つても大丈夫か確かめてたんだ。だから2学期以降は普通に使うと思うぞ」

別にいつまでも優しくする必要もないしな、とジュースを飲みながら呼人は言う。実際問題、これまでまともに殴り合つてきたのは擬人化したモンスター達で、当然ながら彼らの強さときたら生半可なものではない。そのため、これまで放つてきた蹴りや拳は文字通り一撃で仕留めるつもりのものでしかなく、どの程度なら人間相手に打つていい

のかと測りかねていたのだ。

「本気でつて、どんぐらいの強さ？」

「顔とか腹に入ったら殺せるぐらいの強さで」

まあそれでも殴り合つてた相手は耐えるんだけど、と内心呼人は呟くが、実際彼らに對して放つていた拳や蹴りをクラスメイト相手に向ければどうなるかは目に見えている。それを聞いた耳郎と葉隠は少し怯える様子を見せたが、既に一緒に訓練をしている3人は呼人の規格外さをあちこちから感じていたので納得の表情を見せる。

「あーだから加減が出来るかわかんなくて怖かつたつて話ね。納得」

「まあそういう事だ。別に手を抜きたくて抜いてたわけじゃないが嫌な気にさせてたら悪いな」

「別にそれは無いよ。実際百竜には勝ててないわけだしね。これで演習とかで負けてたら『本気出せよ』とか思うかもしれないけど……事情も事情だしね。流石に『お前たちには使う価値もない』とか言われたらちんとくるけど」

「……実際、今日も容易く拘束されてしまった。俺達の実力ではお前に全力を出させる事も出来ないのだろうな」

「障子は体術、尾白はもう少しパワーと経験、上鳴は全部つてところだな」

「俺だけ雑なんだけど……」

そう凹む上鳴に、他の2人がドンマイと肩を叩く。この4人の中では上鳴が一番肉体的な強さが弱い。あまり鍛えてきていないというのもあるし、個性上肉体的な強さがあまり必要ないと判断してきていたというのもある。だから、この4人での訓練ではたいてい彼が他の3人に手を借りたり助けられたりしていた。

「そう言えば上鳴、お前相澤先生が言っていたのはどうするつもりなんだ？ あの布？
の奴」

自分の話は終わったと、今度は呼人が上鳴に話を振る。呼人の端的で衝撃的な答えから立ち直った耳郎と葉隠も、相澤の名前を聞いて興味を持ったようだ。

「え、何上鳴あんた相澤先生となんかあんの？」

「ちよ、耳郎さんジャック伸ばすのやめて怖いからー！」

上鳴の目の前に耳郎が伸ばしたプラグは、上鳴の言葉に伝えて下がること無く、良いから言えとばかりにフヨフヨ揺れる。普段からその被害を受けている上鳴はそれに若干オーバーに怯えながらも、以前相澤に彼の武器の扱いを学びたいと伝えたこと、そしてその時は断られたが、後から『本気で学びたいなら』と言われたことなどを説明した。「待つてあんたなんでそんな相澤先生と仲良いの」

「そうだよー！ 私達も話したくても全然話せないのに！」

「相澤先生と仲良くなりたかったんだね……」

「だって担任の先生だし、戦ってる時はかつこいいし！」

相澤と仲良くなりたいと騒ぐ葉隠と若干呆れた尾白の掛け合いを聞きながら、耳郎の問いかけに上鳴は答える。

「別に仲良いってわけじゃねえっていうか今でも小テストとか演習だとよく怒られる」

「小テストも演習で怒られるのもあんたがアホだからでしょ」

「うっ……でも話したのはそんぐらいだぜ。別に仲良いわけでも毎日話してるわけでもねえよ」

「それで、どうするんだ？ 結局、やるなら早いほうが良いだろ？」

それなんだよなー、と上鳴は腕を組み、悩む様子を見せた。いつの間に食べ終えたのか、彼の前に皆が合計3つ奢っていたハンバーガーはなくなっている。ポテトに手を伸ばそうとした彼は、皆の視線を感じるとその手を引つ込めて自分の考えてる事を言った。

「結局、百竜とか尾白みたいな体術か相澤先生のあれみたいな個性なしで戦える方法を持っておきたいなって思ったのよ。実際今日も百竜に電気受け流されて何も出来なかったわけだし、USJのときもそんなことあったし」

上鳴の言葉に、それを思い出した耳郎が顔をしかめる。

今日の模擬戦の3戦目、百竜と尾白、障子と上鳴が組んで上鳴らが敵側として戦った

とき、障子が尾白を迎撃し上鳴は新しいサポートアイテムを活用して百竜に電撃を命中させたのだが、トビカガチの体毛を生成した呼人にそれを全部吸収され無力化されてしまったのだ。

そこでやはり、サポートアイテムを作ってもらったときから考えていた欠点を再確認した。

「結局さー、サポートアイテムも多分相当強いし使いやすいんだけど、放電が通用しない相手には意味ないんだよな」

「あれ、結局あんたの新しいサポートアイテムってどんなもんなの?」

「なんか電気がまっすぐ飛んでるように見えた!」

と、葉隠と耳郎の疑問に、2人には詳細を説明していなかった事を思い出した上鳴は簡単に説明をすることにした。その間、事前にその細かい内容も知っていた残りの残りの3人は食事に勤しむ。特に3人は上鳴よりも食事が多く、呼人に至っては20個ほどのハンバーガーを買っていたのでまだたくさん残っていた。

「俺放電出来るつつても指向性無くて味方も巻き込むしかなかったからさ。サポートアイテムで放電がまっすぐ狙ったところに飛ぶようにしてもらったんだよ」

「あの右手と左手に2つつけてたのは? なんか飛ばしてるように見えたけど」

「違う性能のアイテムを打ち出せんだよ。左の方は円盤状のアイテムで、壁とか床とか

天井とかに貼り付けて放電を誘導してくれる。んでそれを10個まで設置できるから、腕の装置でどの装置に放電誘導するか設定して、視界に入った分の装置が何番かとか射程内にあるかとかをゴーグルに映し出してくれるんだ」

「そう言えば、なんかかっこいいゴーグルみたいなものつけてたね」

「前までの無線に加えて、装置、ってかType—Aって名前なんだけど、Type—Aの場所とか、後は設置してきたType—Aに誰か接近してるかとか教えてくれる高性能な奴。結構ハイテクなんだぜ」

「索敵も出来る、ってこと？」

「設置したのに近づいてるってことしかわからないけどな。それで一戦目はどっちの階段から来るか絞ろうとしたんだけどさー……」

結果その性能を發揮する事無く全く別の方向から突破されてしまった、と。だがその性能は3戦目に置いてはしっかり發揮された。

「それで、右手の方は？」

「右手の方は放電を誘導する性能しか無い小さいのが入ってるのよ。左手の方がリモコンとか誘導装置本体も結構でかくてさ、最初はそれだけにしようかって話になってたんだけど、結局右手に別で使いやすいの装着することにしたんだよ。右手の方は吸着能力はあるけど左ほど高性能じゃないし、放電した時には放電の誘導射程内で一番装置から

まっすぐの先にあるやつに勝手に誘導するだけのやつ。結局発信機とかセンサーとかバッテリーがスペース食ってるらしくて、んじやあそれ取っ払ってシンプルな性能にしたやつも装着しとけばいいじゃんっていう話になった」

その後も、その装置に関しての性能の細かい説明や、実戦での使い方などの話に及んで少しした所で、呼人が話をもとに戻そうと声をかけた。もともと相澤の武器の扱い方を教えてもらうかどうかという話になっていたのだ。

「だからさー……相澤先生に教えてもらうにしろそうじゃないにしろ、電気の通用しない相手に通用するなんかは考えたいんだよな。でそう考えたらさ、前百竜にも言われたけど相澤先生のあれってめっちゃ凄いやななって思ってる」

「まあ……俺も使えるようになりたいぐらいのもんではあるからな」

素直に称賛した呼人の言葉に耳郎と葉隠、障子が驚いて目を向けるが、尾白は賛同するように頷いてその理由を説明した。

「相澤先生の武器は、色んな点で格闘術より優れてるからね。あれ自体が拘束の道具になるし、上鳴みみたいな相手でも接触しないで攻撃できる。直接的な打撃力はないけど、そのあたりのものを振り回したり敵を捕まえて振り回したりも出来る。射程も素手と比べたら明らかに長い。それに、相澤先生はあれを移動にも使ってるみたいだしね」

「だよなー。色々考えて比べてみたんだけどさ、やっぱ素手での格闘よりもあの武器の

方がどう見ても強そうに見えるんだよな。教えてもらって悪いけどさ」

ポテトをつまみながら言う上鳴に、呼人は特に気にすることなく頷いた。それは呼人も理解していたからだ。有史以来、武器が使われるようになって以降人間は武器を主に使うようになった。当たり前の話だが、その方が強いし、素手の方が良ければ武器を放棄すればいいからだ。そしてそれは、相澤の武器についても変わらない。

「全部が使えないってことはないだろ。蹴りとかパンチは相澤先生も使うだろうし」

「じゃあじゃあ、上鳴は相澤先生からあの武器の使い方教わるの？」

「そうしたいとは思ってる、けどよ……相澤先生に本気でやるならって言われたのが気になってんだよな……俺前も先生に中途半端なところ見せちゃったし。また失望させたくねんだよ」

自分が相澤の求めるぐらいまで真剣になりきれるのがわからない、というのが上鳴が悩んでいるところであった。サポートアイテムを作ってもらう際も、呼人達に言われてようやく動き始めたのだ。そんな自分が、相澤の期待に答えられない、という悩みだが、呼人からしてみればそれは『逃げ』だった。だが、それははっきり指摘してやるほど優しくはない。それぐらい、『命を賭して守る者』を指すのなら自分で気付いて欲しい、と。

そう思っていたが、呼人の思っていた事を耳郎が口にした。

「あんた、それ逃げてるだけじゃん」

「え?」

「先生の期待に答えられるかって、それなら答えられるだけ頑張ればいいでしょ。それをしないのって、あんたが本気になることから逃げてるだけじゃん。変わったかと思つたら全然変わつてないじゃん」

「お、おう?」

急に畳み掛ける耳郎の言葉に、上鳴は目を白黒させる。普段も、耳郎が上鳴に対して多少歯に衣着せぬ事を言うことはあるが、それは半ば悪ふざけのような、2人の互いに特に気を使わない関係性を示したものでしかない。けして、今のように思いつめた表情で言うようなことではない。

「つ! ……ごめん、ちよつと言い過ぎた。ウチさき帰る。バイバイみんな」

「あつ、ちよつと耳郎ちゃん!」

最後までで止まること無く言い切つた所で、唾然とした皆の表情に気付いた耳郎は慌てて席を立ち、そのまま店の出口へと向かつてしまう。

「あつ、ちよつと待てよ耳郎!」

そう言つて立ち上がった上鳴が逡巡した様子で他の4人の方を振り返るが、尾白が『追いかけた方がいいんじゃない?』と言ひ、他の3人が頷いたの見て

「わりつ、後よろしく！」

と告げて耳郎の後を追っていった。

「耳郎さん、どうしたんだろ」

「……上鳴の弱気が気にさわったということなのだろうが……そういう人物には思えなかつたがな」

様子のおかしかった耳郎を気にかける尾白と障子。呼人も気にかかりはしたものの、特別自分が何かをしたわけでもないのでもくもくとハンバーガーを頬張っている。呼人は自分の個性やモンスター達と関わって来た育ちの結果、自分と他の人間の間に一線を引いてしまっているところが多分にある。相手側から、例えば障子や尾白のように関わってくる時にはそれに答えるが、積極的に新しい関係を作ろうとはしないし、また手を差し伸べようともしない。そういう意味では、あまりヒーローに相応しい性格ではないと言える。

2人が悩む中、観戦中と観戦前の会話を思い出した葉隠がうーんと唸っているので皆で話し始めるのを待っていると、やがて整理がついたか話し始める。

「さっきの模擬戦見る前なんだけどね」

「うん。確か俺達と葉隠さんが来た後、障子たちと一緒に来たんだよね？」

「ああ、そうだな。上鳴と話している時に耳郎がそれを聞いて見学したいと言っていた」

「まあそれはどうでもいいんだけどー」

状況の確認をしたが、それは関係ないと葉隠は話を続ける。

「それで、ミッドナイト先生と待ってたんだけどその時の耳郎ちゃんの様子がなんかおかしかったの。なんかみんなが訓練してるのにシヨック受けてる感じだった……特に上鳴が訓練してるのがなんか嫌だったって。ミッドナイト先生は上鳴を嫌だと思ってるんじゃないかって、出来る努力をしてない自分を嫌だと思ってるのか、焦りが嫌な気にさせてるんだみたいに言ってたけど……」

「葉隠さんもそんな風に感じてたの？」

「え、うん、まあ……ちよつと、ちよつとだけだよ！」

私は耳郎ちゃんみたいに思いつめてないから！ と腕を振り回して主張する葉隠だが、まあ葉隠さんの話は後で俺が聞くから、と、葉隠の失言を逃さないと尾白に断言されて葉隠が嫌そうな声を出す。

今一緒にいるメンバーはクラスの中でも特に性の違い関係なく仲の良いメンバーだが、その中でも個人個人の親交の深さというものはあり、尾白と葉隠は個人でもよく一緒にいるのだ。普段は葉隠が尾白に絡んでいくのだが尾白も葉隠の事を気にかけている様子である。

呼人や障子も2人のどちらかに声をかけられて一緒にいることは多いのだが、2人が

自分からは話さないタイプなために尾白と葉隠の掛け合いを見せられることが多い。障子曰く『お似合い』だそうだ。呼人はよくは理解していないが、恐らく男性女性としてお似合いという、いわゆる恋愛の話だろうということは理解できた。

「とにかく、そんな感じの事を耳郎ちゃんは気にしてたの！ ミッドナイト先生が向き合って頑張りなさいって言ってくれたけど、そんな簡単に言われても納得できないし……わ、私は大丈夫だよ！ でも耳郎ちゃんは結構気にしてたんだと思う。それで自分でも考えてることがわかんなくなっちゃって、あんな風に言っちゃったんだと思うよ」

説明しているうちに、いつも元気な声を出している葉隠の声に、わずかに無理が混ざったのに呼人は気付いた。彼女は姿が透明で見えないためにその様子は表情や動きからしか見て取れないのだが、非常に上手に元気なように『振る舞う』のだ。

それに気付いているのは、恐らくクラス内では尾白と呼人ぐらいなものである。呼人自身は、昔ずっと練習していたあることのおかげで非常に細かく音を聞き分ける事が出来るようになったために気づくことが出来ている。

「……耳郎の悩みが葉隠さんが言ってたのだとして、俺達に出来る事はあるかな。悩んでるなら相談に乗りたいけど……」

「……どうなのだろうな。相談と言うならミッドナイト先生が既にしてくれているのだろうし、後は時間と……それこそ上鳴ぐらいではないだろうか。それも下手に追い打ち

を掛けるようでは逆効果な気がするが」

「モグモグ」

話に一切参加せずにハンバーガーを頬張り続けている呼人に、3人は少し奇妙なものを見る目を向ける。呼人の前に積み重ねられていた山は、既にその数を残り3つとしていた。

「百竜はどう思う？」

「今すぐどうこうという話ではないんだし、自分で乗り越えるべきだと思うけどな。別に皆が相談に乗るのを止めるわけじゃないが、俺に出来る事は何も無いだろ。そういう経験をしてきたわけでもないしな」

一見薄情とも言える呼人の言葉だが、呼人の基本的な方針はこれである。

呼人自身はモンスター達の力を借りて自分が強くなることに躊躇いはないが、同時にその結果周囲の同年代の人間より成長している自分を半ばずるい存在だとも思っていた。実際問題、例えばヒーローとしての活動に関しても、呼人が本気を出せば大半のヴィランは活動する前に制圧することすら容易いだろう。なにせ、呼人はモンスター達が無作為に奮っていた力を制御し、相当に細かく使うことが出来る。索敵、移動、攻撃、拘束、救助、治療、出来ないことは無いと言っている。加えて、呼人や神王寺がモンスター達の力を『個性かどうかすら怪しい』と思っている原因も相まって、呼人が力尽きる事は基本的でない。

だから、やろうと思えば、本当に全てのヴィランを討伐、そう、捕縛ではなく文字通り消してしまうことも不可能ではない。

だが、それをすべてしてしまふのは、違う、と呼人は思っていた。だからこそ今もこうして制限した、1ヒーローとしては多少スペックがいい程度の個性という扱いで学校に通っているわけであるし。なめていると言われればそうなのかもしれないが、少なくとも『ヒーローになる』という目的にそれ以上の力を使うつもりは無いし、当然ながらモンスター達の力を借りるつもりはない。例えば、戦闘中も彼らの力を借りればもつと良い作戦を立案してくれるだろうし、動きも自分で動かすより指示してもらったほうが的確になる。言ってみれば超優秀な複数の頭脳がついてくることになる。

だから呼人は、自分の実力で出来る事をするが、全ての力は出さない。そう決めているのである。

最低だ。自分が妙に焦っていたのを、特に否の無い上鳴にぶつけてしまった。完全に八つ当たりだ。きつと嫌な気分になってしまった。

上鳴達の模擬戦を見学する事を決めるときからマイナスな気分になってしまふ。

早く家に帰ってベッドに飛び込みたい。上鳴には落ち着いてから謝罪のメッセージを送ろうと道を歩いていると、後ろから呼んでいる声が聞こえた。

「じろー!」

耳郎、ですらなく、最後が長音付になるような呼び方をする知り合いは一人しかいない。今、一番顔を合わせたくない人間。

逃げたい、出来ることなら隠れたい。だが残念ながら、自分も相手も目的地は同じ駅。全力で走って逃げるぐらいしか出来ないし、流石にそれは上鳴に悪い気がする。いつも冷たい態度を取っているが、全力で酷いことをしたいわけじゃない。

そんな事を考えていると、すぐに追いつかれてしまった。

「おおい耳郎、なんで逃げるんだよ」

ふー疲れた、と膝に手をつく上鳴に、『何?』と可愛げのない声をかける。申し訳ない、とか、まだ落ち着いてない、とか以上に、気まずくて今は話したくない。けど上鳴は、そんなこと全く気にしない様子で話しかけてくる。

「なんでって……」

「俺が嫌な気分させちゃったのは謝るからさ、ちゃんと思ってること教えてくれよ」

煮え切らない態度でごめん、俺、ちゃんと頑張ることにする、と上鳴が頭を下げてくる。意味がわからない。八つ当たりをして逃げ出したのは自分だ。上鳴が謝るような

ことじゃない。

そんな事をされると、余計に自分が惨めになってくる。

「あんたさあ……やめてよ、そんな風にあやまんの」

「え？」

「八つ当たりをしたのはウチだよ？ そんな謝り方されたら余計惨めになるじゃん、やめてよ……」

「耳郎……」

ポツリと名前を呼ぶ上鳴に、なんとも言えない感情が湧き上がってきて思わず目をそらす。こんな、自分でもわかっていない感情、ぶつけられても戸惑うだけだ。明日になれば、きっと明日になればいつもの冷めた自分に返ることが出来る。こんなうじうじ悩んでるなんて、ウチらしくない。

そう思うのに、自分を見つめる上鳴の目線は真つすぐで逃してくれない。

「八つ当たりって事は、なんか嫌な事があるんだよな？ 俺でよかつたら相談に乗るぜ？」

「なん、で、そこまで……」

「なんで、って……耳郎がなんか辛そうだからよ。気になるじゃん」

そこまで言っ、上鳴は慌てたように腕を振る。

「いや、別にナンパとかそういうのじゃなくてだな、ただお前が元気が無いとなんか気持ちわりーっつーか——」

かっこいい、まさにヒーローのような事を言っていたかと思えば、いつものアホな上鳴に戻る。ああ、変わらないんだ。そう思った。

どれだけ頑張つても、どれだけアホな事しても、こいつは上鳴なんだ、と。

そう思うと、妙に焦つてムカムカしていて気持ちが悪く、少し落ち着いた気がした。

「そんなに言うなら、相談してあげる」

「だから嫌なら別に——え、相談してくれんの？」

「駅に行くまでだけけどね」

「よっしゃー！　って待てよ俺が相談に乗ってあげる側じゃね!?　って耳郎置いてかないでー!」

とりあえず、今思ってる事は上鳴に聞いてもらう。多分、ミッドナイト先生の言っている通り、さっきまで感じていたのは焦りとか自分に対する嫌な感情でしか無い。だって、仲間が頑張っているのにそれを疎ましく思うことなんて無い。

そして、もし出来るなら自分も頑張ると宣言しよう。上鳴に負けないぐらい全力で。

第43話 それぞれの成長

翌日、上鳴は放課後の訓練に参加できない事をいつもの3人に断りを入れて相澤のもとを訪れていた。

「相澤先生、これサポートアイテムのレポートです。後前先生の言つてた話なんすけど

……」

「……ついでに」

上鳴から提出された書類を受け取って軽く目を通した相澤は、続く上鳴の言葉とその表情に席を立ち、空いていた面談室に移動する。

「それで、どうするつもりだ？」

「俺に、先生の武器を教えて欲しいです」

席についてそうそう、雑談も無く尋ねた相澤に、間髪入れずに上鳴も答える。

その言葉に答えず、相澤は上鳴が提出したレポートに目を通した。拙いながらもどのようにサポートアイテムを使おうとし、どういう問題があったか、またどういう結果をもたらしたか、今後使うとすればどうするか、などがまとめられている。

「これを見る限りは、触らないとどうにも出来ないっていうお前の欠点は改善されてる

ように思えるけどな」

案に、『別にもう俺の武器を使う必要もないだろ?』と問いかける相澤に、軽く頷いて上鳴は話す。ここからは、上鳴が相澤を納得させる番だ。

「サポートアイテムで電気を届かせることは出来るようになったんですけど、それ以外が何も変わってないんですよ。電気のきかない相手には相変わらず無力なままだし、機動力も全然で……。それで素手の体術を鍛えるのと相澤先生の武器を使えるようになるの考えたら、相澤先生の武器の方が機動力も上だと思っし、室内とかだったらあるもの振り回せるし、拘束も早くて使い勝手が良いと思っし。あとあれっす、ミッドナイト先生とかそれこそ俺自身みたいに、近づけない、触れない相手が出てきた時にもちよつと離れて戦えるなつて。これは百竜と尾白と障子と話してる時に聞いたんですけど……あの3人は近づかないと戦えないんで」

相澤の武器を使う利点を上鳴は自分の言葉で説明した。相澤自身は当然自分の武器の特性を理解しており上鳴の言ったことも全て理解していたのだが、それを上鳴がしっかりと説明したことを見てひとまず考えている事を理解した。『なんとなくすごいから』などと言われた日にはどうしようかと思っし、すっかりと考えているらしい。「確かに、そういう事ならこいつはうってつけかもしれないな。だが、前も言った通り、真剣に取り組めないならこいつは教えられない。俺もそんな暇じゃないからな」

「どうだ？」と視線を向ける相澤に上鳴は深呼吸すると、はつきりと答える。

「夏休み返上の覚悟っす」

その言葉に、相澤は表情は変えなかったものの思わず口元を緩めそうになり、慌てて口元に力を込める。

『最高のヒーローになる』とか『一番になってみせる』とかではなく、『夏休み返上』という、なんとも現実じみた回答に、思わず彼らしいと思ってしまった。だが、それゆえに彼の頑張ろうという決意もわかった。

何より、言葉を聞く前から彼の表情が変わっているのには気付いていた。今日の演習でも、動きがいきなり変わるといふわけではないが、いつもより頭を使おうとし、また他の生徒の動きも真剣に見ているのが見て取れた。

「……わかった。この後他に教えてるやつのところに行くから、お前もついてこい。それと、この事は特に親しいクラスの奴にまで隠せとは言わないが積極的に喧伝するな。俺が教えている相手のことは特にだ」

「う、うす」

「それと、夏休みの全てを返上する必要はない。勿論訓練の時間は作らせるが、高校生らしく夏休みは楽しんでおけ。守るべきものがなんなのか、知らずにヒーローにはなれん」

その説明に上鳴が首を傾げているが、相澤は構わず席を立つて部屋を出る。

ヒーローが守るのは何か。普通に生きていく人々か、あるいは平和という抽象的なものか。相澤は、『何気ない日常』だと考えている。だからこそ、高校生である上鳴には高校生らしい楽しみはしてもらわなければならない。その楽しさ、素晴らしさを知るからこそ、守ろうと努力することが出来る。

それを知らない者達がヴィランとなる。ヒーローは誰よりも、日常の素晴らしさを知っておかなければならない。だからこそ何事にも合理性を標榜する相澤が、放課後の訓練や昼休みの映像の閲覧をしない生徒にも何も言わないのだ。

「あれ、えつと……体育祭で緑谷と戦った普通科の人だよな？」

「そういうあなたは……A組の——」

「上鳴電気。なあ、このあたりにヒーロー科の生徒が来てなかった？」

相澤に言われて校舎裏の林のあたりに上鳴が行くと、そこには一人の生徒が居た。紫の髪をした背の高い男子生徒が体操服を着ており、首元には白く細長い布を巻いている。

心操人使。以前体育祭の騎馬戦では呼人、尾白と共闘し、トーナメントでは緑谷と戦つて一回戦で敗退した普通科の生徒だ。

彼もまた、相澤先生ことイレイザーヘッドと約束があつてここに來ていた。約束の間からは少し遅れているが、イレイザーヘッドは教員でありながらヒーローであるため、そちらの緊急の用事で

「いや……見てないな。何かあつたのか？」

「相澤先生がここに先生が直接教えてる人がいるつて言つててき。その人のところに行つとけつて言われたんだけど見当たんないんだよな」

上鳴の説明を聞いて心当たりのあつた心操だが、自分は彼の言つた条件には当てはまらない。ちよつとした悪戯心もあつて、黙つていることにして違う話題を振る。

「そのイレイザーは何をしてるんだ？」

「イレイザー、つて相澤先生のことか。なんか道具取つてくるつて言つてたからすぐ來ると思うけど……」

なんで氣になるの？ と首を傾げる上鳴になんでも無いと首を振つて心操は話を続ける。

「確か、あんた放電する個性じゃなかつたか？ イレイザーに何を教えてもらうんだ？」
「詳しいのな。俺つてただ放電する『だけ』だからさ。味方がいたら巻き込みじゃうし離

れた相手にも対して届かないのよ。そりや騎馬戦のときみたいになぶつ放せるけどあれだとキャパシティーオーバーになっちゃうの。だから出来る事増やしたいと思つて」

そしたら相澤先生の戦い方が個性使わないで出来る凄いやり方で、見たことないだろうけど。と上鳴が続けるのを聞きながら、心操はこころの中で呟く。

そうだ。だから自分は彼に学んでいるのだと。

会話が途切れた中で上鳴がもう一度探しに行こうかと足を動かそうとしたところで、待ち人がやってくる。

「上鳴、と心操もいるな」

「心操、つて？」

自分ともうひとりの名前に上鳴が首を傾げる中、ベンチから立ち上がった心操は相澤に勝手知つたる仲のように話しかける。

「待ちましたよイレイザー」

「悪いな。急用が入つた。こいつが以前言つてたもう一人だ。上鳴」

「は、はい！ 何がどう……」

「こいつが俺が教えているもう一人だ。積極的に喧伝しないように」

え、え？ と上鳴が戸惑う中、相澤が予備の武器、捕縛布を上鳴へと渡す。戸惑っている時間や説明している時間は無駄。情報収集をしたければ後でしろ、と。

見れば、心操と呼ばれた普通科の生徒も首に相澤同様捕縛布を巻いている。ここに至つてようやく、上鳴は『普通科の生徒が相澤に個別の教えを受けている』ということに気付いた。

想像しなかつた状況に戸惑いながらも、上鳴の新しい技術を身に付ける訓練は始まつた。

「だから葉隠さんなんで裸なの!? 俺来るなら体操服でつて言つたよね!」

「えーだつてみんなコスチュームなんでしょ? だつたら私もコスチュームじゃないと!」

放課後、今日はいつもの動きの確認や移動の練習ではなく、本気で組手、すなわち殴り合いを試してみようと呼人たちは屋内演習場に来ていた。これまでではどちらかという動きを反省するための確認だったり、文字通りの組手であつて試合はしてこなかつた。それを今日はやってみようという話しになっている。

理由は単純に、昨日の呼人の話で尾白が触発されて本気の仕合をしたいと言ひ出したからだ。障子も2人の普段のやり合いから格闘戦の強さはわかっているものの、本気に

なったところはまだ見たことがないので是非見たいと言つて見に来ることになった。本気の仕合と言つても何時間もやり合うことはないので、訓練する時間も十分にある。

そこに、昨日、模擬戦を見学していた2人が組手の練習をしたいと言つて参加したいと申し出てきたのである。というより、葉隠が尾白との雑談の中で思いついて言い始め、それに耳郎ものる形になった。もともと自分たちも何か始めようと考えていた2人だが、特別にこれといった訓練を考えているわけではなく、それなら既にしている呼人達と一緒にしようと考えたのだ。

そして現状に至るわけだが。

「耳郎、何故止めなかつたんだ」

「いやーウチも気付いたら脱いでてさ。授業の演習とか模擬戦とかならともかく、流石にまずいかなとは思つたんだけどさ。葉隠の言うことにも一理あるわけだし」

「一理あるのは認めるが……」

男女それぞれに更衣室で着替えて演習場で集合することになったのだが、演習場をやつてきた葉隠が、いつものコスチューム、すなわち靴と手袋だけで後は素っ裸という、あまり組手するには好ましくない格好でやつてきたのである。

まあ耳郎が相手をすればいいだけの話ではあるのだが、残念ながら尾白はそこまで頭が回っていない。

「尾白、気になるなら俺達が相手しなきゃ良いんじゃないか？ 耳郎なら同じ女子なわけだし」

「組手に関してはそうだけどさ……だってこの格好でここまで来てるんだよ？」

「それは……うん、たしかにまずい気はするな」

「えー!? だって私ぶつかったりしないよ!? 見えてないし良いでしょ！」

「いや、でも——」

と、ずつとこの調子である。ワチャワチャやっている2人は、尾白は必死ではあるものの葉隠は楽しそうで、峰田あたりが見たら血涙を流しそうなものではあるのだが残念ながらここにいるメンバーでそれを楽しんでいるものはいない。

「透ー、今度からここに来るまでは体操服着るようにしなよ」

「むー……移動するときだけだよ！ だってヒーローになっても私はこれなんだから——」

「尾白もそれなら納得でしょ？」

「……うん、それなら」

「もー、尾白くんのスケベさん！」

「ちよつ、違つ——」

とりあえず耳郎の介入で一応の決着はついた。ちなみにこの間、口を挟めない障子と

呼人は空気になっていた。特に呼人に関しては、葉隠の状態がまずいらしいのは知っているのだが呼人自身はどうとも思っていないのでなんとも口を挟まなかったのである。女子だと男と違ってむき出しの急所がぶら下がってないから良いな、などとデリカシーの欠片もないことを考えていたりもする。

その後、尾白を落ち着かせて最初に本気の対戦を行う2人が部屋の中央で向かい合った。他の3人はそれを見学しておくことになった。

個性の使用は呼人は禁止。禁じ手は急所を狙う一撃。骨折ぐらいの怪我ならさせても良いというルールだ。リカバリーガールの力で復帰させる程度の怪我に抑えれば何を出来るのもこの学校の優れたところである。呼人ら3人もこれまでの訓練で幾度もお世話になっていた。

「では、俺の合図で開始で良いな？」

「おう」

「ああ」

相対した2人が向かい合い、離れたところに他の3人が集まってそれを見学する。

「……始め」

合図とともに呼人が動き始める。身を低くして突っ込む呼人に対して、尾白は待ちの

体勢だ。様々な武道を学んで基本的な動きを身に着けている尾白に対して、呼人が戦う術を身に付けたのは何百何千にも及ぶモンスター達との殴り合いの中。丁寧な立ち回りよりも思うままの殴り合いを得意とする。

呼人が目の前まで踏み込み、下からえぐるように拳を放とうとした所で尾白も動き始める。拳を放とうとした呼人に向かって自分の方から踏み込み、拳を弾いてそらすとともに呼人の胸に向かって掌底を放つ。

それを手で受け止めた呼人は、足払いからの追撃を狙うものの尻尾に体重をかけて後退した尾白は上から強力な踵落としを放つ。

以前呼人に『動きがわかりやすい』と評価された尾白だが、ここ数ヶ月は放課後の組手や授業での演習などの中でそれを改善し、より実戦的な動きに近づけるように努力していた。

中学時代のように好きに打ち合える相手がいるわけではなかったが、イメージトレーニングによってそれを補っていた。何より、日を重ねることに進歩する尾白の組手に合わせるように少しずつ強くなっていく相手が今は居た。

四肢の扱い、あるいはパワーに関しては呼人が上回るが、そこを尾白は尻尾を使ってうまくカバーする。時に死角を尾によってカバーし、時に蹴りの威力を尻尾を使った踏ん張りや尻尾を振り子のように使って強化する。

十数分の打ち合いの末に、互いに大きな怪我はないものの顔も含めて青あざや切り傷だらけになった所でどちらからともなく距離を取って仕合は終わりとなった。

「終わりか」

障子が声をかけると、尾白は頷いて3人のところに戻ってくるが呼人がその場に立ち尽くしている。

「百竜？」

「ん、ああ、悪い、ちよつと考えてた」

耳郎が再度呼びかけてようやく気を取り直したように動き始めた。

「予想外だった？」

「ああ……仕留められるかと思つてたのに上手く躲された……」

呼人との差に気付いていた尾白は、積極的な攻撃を選ぶのではなく防御を主体にした動きをしていた。そのため呼人も攻めきることが出来ず、むしろカウンターに良いのをもらつてしまつていた。周りで見ていた3人がそれに気づくことが出来なかったのは、尾白が下がらなかつたからだ。呼人の攻撃に押されて下がること無く、その場に立ち止まつて攻撃を捌き切つていた。

「全く、何をしているのかわからなかつたぞ」

「凄かつた！　なんか尾白くんも尾白くんなのに普通じゃない感じだつたね！」

「それは褒められてるの……?」

褒めてるよ! と鼻息を荒くする葉隠に尾白が苦笑している一方で、呼人は耳郎に話しかけられていた。

「す……百竜、あんた全然本気じゃなかったんだね今まで」

「そりゃあまあ、本気出したら殺しかねないから。ちゃんと目的達成のための技術は費やしてるぞ」

「まあ、そうなんだけどさ。なんか複雑っていうか……」

そういう耳郎に、呼人は以前瀬呂に言われたことを思い出す。呼人が意図して、侮る意図ではなく示す為に行ったことでも、ただ見ているだけでは馬鹿にされているようにしか感じない。人は、それほど強くはなれない、と。

「いつもの俺がしていることなら、誰でも訓練次第で出来るんだってことを示したかったんだけどな。瀬呂にも『馬鹿にされてる』みたいに見えるって怒られた」

「まあ、そこまでは言わないけどさ。なんか差を見せつけられてるみたいで頑張らなきゃって気持ちと嫌味かつ、って気持ちがしてなんか変な感じだよ」

「……気をつける」

「良い目標にはなるんだけどさ」

2人がそんな会話をしているところに、そう言えば、と尾白が声をかけてくる。

「百竜、一発良いのが入ったと思っただけど、大丈夫か？」

尾白が言っているのは、呼人の攻撃にカウンターをした時の事だ。呼人が顔を狙った掌底を放った時に、尾白はそれを頬にかすらせつつ正拳を呼人の胸にねじ込んだのだ。

「ん、肋骨が2本折れてるぐらいだな。そのうち治る」

「いや、だからそのうちじゃないからねその傷。行くよ保健室」

尾白の言葉に呼人はめんどくさそうな表情をするが、尾白は無視してその腕をひく。3人で訓練をしているときからそうだが、呼人は他の人の怪我を気にする割に自分の怪我を軽視しがちなのだ。腕が折れた時には流石に動かないと保健室に行っていたが、指の骨折ぐらいなら無視して訓練を続けるのである。

それに気付いた障子と尾白は、呼人の様子を注視して少しでもおかしいところがあれば保健室に連れて行くようになったのだ。

個性で簡単に治るといふのなら放っておくが、呼人の説明によれば回復速度は上げられるものの怪我は怪我に変わりないと言っているので無理をしようとするのを止めているのである。

「え、骨折れてんの？ 保健室行きなよ」

「……俺が連れて行こう。尾白、お前は……2人と先に訓練しておけ」

「あ、うん。わかった」

呼人の怪我を気にしながらも、ワクワクと言いたげな表情（多分）で自分の方を見て
いる葉隠に気付いている尾白は障子の言葉に素直に頷いた。

第44話 本気の発露

時は過ぎ、やがて一学期も終わる。

そして、林間合宿の日がやってきた。

B組の物間がA組に突つかかる一幕があったものの、その他は全く滞りなくバスへと乗り込む。

「乗車中に立ち歩いてはいけません！」

これこそ委員長の役目であると、バスの入口で皆に声をかけていた飯田が最後に乗り込みバスが動き始める。呼人の隣に座るのは常闇だ。

バスに乗ってそうそう、呼人は本を取り出して読書をすると同時に右手で握力用のトレーニング器具を使い始める。数日間の合宿ということでもどおりにトレーニングができるかわからないため、久しぶりに器具を持ち出してきたのだ。

「握力を鍛えているのか？」

「ん？ ああ、これか。握力つか指だな」

隣の常闇と全く会話すること無く自分の世界に入り込んでいた呼人に、常闇は興味を示して話しかけてくる。

それに対して答えた呼人は、ほら、指だけでやってる、と普通は手に握り込んで使うハンドグリップを、親指と人差し指だけで挟んでいる様子を示した。

「凄まじいな。獣を宿していても己の鍛錬を怠らぬということか」

「獣の方は鍛えようが無いしな。それに指だけは特別に鍛えとかなないとすぐ弱つてくる」

人間の体というのは、当然ながら使わなければどんどんなまっていく。だがこれは、動物の世界で言えばかなり不思議なことだ。なぜなら、動物たちは筋トレなどせずただ食べて寝ているだけで、人間のそれとは比較にならないような筋肉を誇る。種が違うと言えばそれまでだが、それだけで済ますことのできない差があるのは確かだ。

「……なるほど。まさしく求道者」

「まあそれに、本読んでる間片手は暇だからな」

小さな文庫本程度であれば片手で保持しページを捲ることも可能で、その間反対の手は手持ち無沙汰になる。せっかく道具を持ってきたなら使おうというのだ。

「それは、なんの書を読んでいる？」

「ベートーヴェンとかモーツァルトとかの偉い？　つてか凄い音楽家の本。音楽にもそれなりに興味があつて曲まとめたりもしてるから、一応見とかないかなと思つて」

「……多才だな」

「人間ってほんと面白いよな。音楽とか創作なんて興味深いものまでゴロゴロと……」

人間の作り出す娯楽に関しては、呼人の中のモンスター達にとっても未知のもが多かった。この世界の人間たちの生み出すそれは、彼らの世界には存在しなかったような多才なものばかりなのだ。

「常闇は、こういう時は何してるんだ？」

「我は……ダークシャドウと戯れたり動画を見たりしている」

『ヨッ！ アソボウゼ！』

常闇が言うと同時に、彼の中から出てきた黒影が呼人の方を向いて声をかけてくる。常闇とは真逆に見えるのその無邪気な性格が可愛らしく、クラスの女子などにも人気だ。

「良いぞ。と言っても遊べるものがない……絵でも書くか？」

「ここで、か？」

「ああ。絵を書ける道具は一通り持ち歩いているからな」

そう言って呼人は、鞆に本を閉まって代わりにタブレットを取り出す。最初の頃はスケッチブックに色鉛筆で絵を描いていた呼人だが、彼の描く枚数が異常に増えるに連れいちいちパソコンに取り込んで保管するのが面倒になった神王寺がタブレットを買ってくれたのだ。

「なるほど、そういうことか」

「そういうことだ。ほら、黒影」

『オウツ！ オレニマカセロ！』

呼人からペンを受け取った黒影は、拙いながらも絵を描いていく。それはひと目で何を描いているかわかるもので、故に呼人も使い方をアドバイスした。

「ほら、そこを押すと色が変わる——違う、それはレイヤーだ。こつちだ」

やがて数分して出来上がった絵の中には、コスチューム姿の常闇と黒影の姿があった。稚拙な、しかし子供らしい絵だ。

「我とダークシャドウを描いたのか」

『ドウダー！ ウマイダー！』

楽しげに言うダークシャドウに、2人とも笑みをこぼす。他のクラスメイトのようにわいわいはしゃいでいるわけではないが、2人もまた、この空間を楽しんでいた。

1時間ほどしてバスが休憩場所に到着し全員が揃ってバスを降りる。呼人もトイレに今すぐ行きたいわけではなかったが、この後しばらくはそのまま走るといふ相澤の説明を聞いていたので一応降りたのだが。

「用を足せる場所があるようには見えないが……」

「あれ？B組はいねえのな？」

「何ここ、パーキングじゃねえな」

降りた場所はただの地面に土がむき出しの狭い広場のような場所で、トイレや休憩所などの施設があるようには見えない。

（なんかある……あの2人はヒーローとして後ろの子供はなんだ？）

鋭い五感でいち早くこの場にいる自分たち以外の人間の存在に気付いた呼人がそちらを振り返ると同時に、その人物らが名乗りをあげた。

『——ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!』

「今回お世話になる『プッシーキャッツ』のお二人だ」

「連盟事務所をそれも4人で構えるヒーロー集団！ 山岳救助を特に得意とするベテランチームだよ！」

ポーズつきで登場したプッシーキャッツの2人に対して相澤は冷めた説明をし、緑谷は鼻息荒く彼女らの情報を並べ立てる。勢いを削がれた形にはなったが、2人のうちの一人、マンダレイが生徒の間を通り抜けて、広場の端、崖に面した柵の前まで話して始める。

「このあたりは全部私たちの所有地なんだよね。そんであんたらの宿泊施設はあの山の

ふもと」

そう言つて彼女が指し示すのは、1キロではきかない距離の向こうにある山。それを聞いた生徒の一部が、顔を強張らせる。

「遠っ!」

「え? じゃあなんでこんなところに……」

「おいおい……なあ、バス戻ろうぜ?」

ザワザワと皆が騒ぎ始める中、マンダレイは続けた。

「今は午前9時半……早ければ12時前後かしら」

「やべえ……おい……」

「戻ろう!」

「バスに戻れ! 早く!」

その不穏な言葉を聞いて何か良くないことが起きると気付いた切島や芦戸が先導して皆がバスに向かって走るが、相手の方が遥かに速かった。

「12時半までに辿り着けなかった子はお昼抜き、よ」

マンダレイの言葉の直後、いつのまにかしゃがみ込んでいたピクシーボブの手元から発生した土の波が、生徒達を飲み込んだ。

何かあるのだろうと察して身構えていた呼人は、土の波が襲いかかると同時に身を

限界まで沈め、変化させた足と手で土の波の中を泳いでバスの屋根の上まで到達する。

モンスターの中には、今のようなほぐれた土どころかガチガチの地面や岩すら砕きながら泳ぐような化け物もいる。彼らの動きを身に付けている呼人にとって、たとえ地中での移動に適正のないオドガロンの力を使っても、波のようにほぐれ動く土の中であれば動くことは朝飯前であった。

「私有地につき個性の使用は自由だよ！ 自分たちの足で施設までおいで！ 魔獣の森”を突破して！」

呼人以外の全員が押し流された後、柵からそう叫ぶマンダレイの背中を呼人が見つめていると、柵のあたりに残っていた土の中から、柵の低い位置に体をひっかけることで崖下までは流されずに耐えていた2人が立ち上がる。

「うっ、と泥だらけだ……」

「手荒い歓迎だ」

障子と尾白だ。バスに向かって動いておらず森を眺めていた2人は、咄嗟に柵を掴んで体を丸め、土流に耐えることを選んだのである。下から掘り起こすように発生していた土に耐えられたのは、それぞれ尻尾と複製した腕を柵に絡みつけて腕以上の力で耐えていたからだろう。

「お前ら……」

「良いのがいるじゃんイレイザー！　くうー逆立ってきたー！」

生徒に林間合宿が始まっていることを示すための奇襲であったというのに、避けてしまった3人にその成長を認めながらも相澤はため息をつく。

「お前らもおとなしく行つて来い。そうでないと始まらない。百竜、お前もだ」

「……へえ、やるじゃない。そんなところまで逃げるなんて」

マンダレイのすぐ近くで立ち上がった2人だけでなく、バスの屋根に呑気に腰掛けている一人の姿を確認してマンダレイは興味深そうに口角を上げる。

「了解です」

「む……耐えてはまずかったか」

呼人が2人のところに合流すると、改めてピクシーボブが土流を発生させて3人を押し流した。今度は3人も避けることなく大人しく流されていく。その様子を、上の3人は見守っていた。

「イレイザー、どれが前言つてた子？」

「屋根の上まで逃げてたやつです。他の2人はそいつと一緒に訓練をしている面子ですよ」

林間合宿の受け入れにあたって、全ての生徒の情報は事前に打ち合わせがすすんでいる。その中で相澤は、イレギュラーとも言える実力を持った生徒のことを伝えていた。

今対応できないだろうと予想していた土流に耐えきった者が複数名いるのを見て、どれがそのイレギュラーかとマンダレイは尋ねたのだ。

「なるほど……。面白くなりそうね」

一方、崖から改めて放り出し直された3人。土流の中で、複製腕で他の2人を確保した障子が2人を背中に載せ、尾白と呼人を背負ったまま土の中に着地しようとする。そんな障子の背中で動くと、呼人は障子が体勢を崩さない方向にその背中を蹴って前へと跳び出した。

「あつ、百竜ー」

「先に行くー」

声を上げる尾白に一言だけ返して、呼人は下にいる何かわからないものに向けて手足を原寸大のオドガロンへと変身して落下していった。

一方の地表、森林の中では、突如として現れた魔獣に対して飯田、緑谷、爆豪、轟の4人が攻撃を始めて打倒し、先に進もうとしていた。そして未だに止まったままの者を襲おうと新たに魔獣が出現したところに、上から巨大な腕と爪を持つ何か落下してき

て、それを叩き潰す。潰された魔獣はもとの土くれへと戻っていった。「何っ!?」って百竜かよビビったー……」

巨大な腕と発達した足で一瞬何かわからなかったが、落下してきたのは呼人であった。先を急ぐ呼人が、敵の正体を確かめる為に早速一体屠つたのだ。そしてそのまま、足をいつもの大きさに戻すと地を蹴り、木の幹を蹴るようにして先に進んでしまった。

「っ！ ウチらも行かないと！」

「そうですね！ 私たちも皆さんに負けてはいられません！」

その姿に鼓舞された他のクラスメイトも、先に行つた5人の後を追うように走りだす。

他のクラスメイトから先を行く呼人は、早い段階で先行していた4人の頭上を飛び抜け、そのまま加速しつつ先を進んでいた。以前瀬呂に言つた通り、モンスター達の力を借りてこういう動きをすることには慣れている。視界はトビカガチのそれを、鼻や耳はオドガロンのそれを借り、肌が空気を感じ取る。

そしてそれに応えるのは、大地を力強くかけるオドガロンと樹上を自由に跳び回るとビカガチの手足。

モンスター達の力を借りた体は、望んだ通りの結果を返してくれる。

空を跳ぶことも水中を泳ぐことも好きだが、こうして無数の壁をギリギリで躲しながら走り抜けるというのも呼人はかなり好きだった。

かなりの高速で宿泊所にたどり着いた呼人を向かえるのは、先についていた相澤だ。

「……荷物を部屋まで運んで着替えてこい。ここには女性もいる」

「了解です」

制服が完全に服の様を為していない呼人を見た相澤の一言目がこれである。下に着ているインナーやパンツ、靴は特注品であるため損傷していないが、他は一切が駄目である。

呼人と入れ替わるように中から出てきたマンダレイが、その後ろ姿をまじまじと見つめる。先程3時間と言ったのは、自分たちがそれぐらいで到着できるから。それを、この高校生は倍以上の速度で突破してきた。これを驚かずに何を驚けと言うのか。

「イレイザー……どういふこと？」

「イレギュラーです」

個人としての実力が高い呼人の存在は、雄英での演習の内容考案などにおいても懸案事項であり、こんな状況にも相澤は慣れたものだ。雄英においては呼人が個人的なこだわりによって力を制限している為にバランスが上手く取れているもの、それはそれで呼人にとってはよろしいものではない。

「訳ありって言うってたけど、どういう訳？ 生半可なものじゃ無さそうだけど」

「……あいつは国外で育っているので、幼少期からプロヒーローにずっと鍛えられています。戦闘力だけで言えば下手なプロヒーローより高いレベルです」

尋ねてくるマンダレイに、相澤は淡々と自分の知っている事実を説明する。実際のところはジ・アドベンチャーの撮影した記録を見ているので呼人がモンスターの力を全開にした時の事もある程度はわかっているが、ヒーローとしての呼人の実力はそれではない。それは、むしろヴィラン寄りのただ破壊するだけの力だ。だから相澤は、呼人の評価は英雄でのごとだけに限ることにしていた。それは他の生徒に関しても同じで、特別扱いをしているわけではない。

「部屋広つ……男子全員一緒ってことか」

部屋まで荷物を運んだ呼人は、その広さに驚いていた。流石に雄英の体育館よりは狭いが、寝泊まりする場所でこれほどの大きさというのを見たことはない。ちなみに呼人は行ったことがないので知らないが、クラスの一部の生徒が期末試験前の勉強で入れてもらった八百万家には、今呼人のいる大部屋ほどではないもののたった数名の家族が使

うには広すぎる部屋が複数ある。

ひとまず相澤の言う通り、一式特注のジャージに着替えて外に出る。当然のことだが、まだ他のクラスメイトは到達していない。呼人のスピードは、現状直線最高速の飯田や緑谷の速度で一切緩めないまま森を駆け抜けたようなものであるため、実力云々以前に真面目に魔獣と戦っている他のクラスメイトが到達するのはまだかなり先になる。更にピクシーボブの妨害も入るのもっと遅くなるだろう。

なぜ普段は個性を全力で使わずにいる呼人がそれほどまでに急いだのか。それはひとえに、食事を取る必要があったからである。ここ最近の訓練、といっても放課後の訓練ではなく一人で夜している個性を制御する訓練において、複数のモンスターの内蔵を損傷した状態であるため、食事を抜くのはなかなか致命傷であり、昼に間に合わずに食事抜きになることは避けたかったのだ。

ということだ。

「昼食を作りたいので食材と調理器具借りても良いですか？」

相澤に昼食の用意はまだと言われた呼人は、マンダレイにそう尋ねた。

「んー他にも到達する子がいるか待っておきたいんだけど……何か急ぐ理由があったりする？」

マンダレイは、少し考えるようにしながらも探るように尋ねる。

「個性の都合でエネルギーを取らないとまずいので、それなりの量を作りたいたので時間がかかります」

「どれぐらい?」

「米でもそれ以外でも良いので5人前は欲しいです」

ちなみに普段朝昼晩と最低5人前、多い時はそれ以上に食べている。

「それは多いわね……じゃあせつかくだから、私たちの分も作ってくれない?」

「……はい?」

思わずと言った風に尋ねた呼人に、マンダレイは楽しそうに笑って頷く。

「借りたいつてことは君料理できるんでしょう? なら私たちの分もお願いしたいと思っ

て。別々に作るのもあれだしさ」

「まあ、良いですけど。何人分ですか?」

「君の分と、私とピクシーボブとイレイザーと、後は……」

そう言つてマンダレイが周囲を見渡すので、探している相手が誰であるか予想がついている呼人は先に声をかけた。

「あの小さい子供ですか?」

「あ、うん、そう。あの子の分もお願い。特に好き嫌いはないから」

「美味しくなるかは保証しませんよ。まずはしないと申しますけど」

「うん、それで良いからよろしくね」

渋る呼人に料理を任せて、マンダレイは相澤の方へと歩いていった。

その子供、今はその姿が見えない少年の顔を思い出した呼人は、その険しい表情を気かけながらも早速料理に取り掛かることにした。

第45話 ヒーローと社会

昼食は適当に中華鍋で大量の野菜と肉を炒めて炒め物を作った。呼人自身は料理の味は美味しい方が良いものの、それほど作り方にこだわるわけではないので、大体が炒めるか煮るかで済ませていた。その例にもれず今日も適当に炒めただけだったが、意外と好評であった。

食事を終え、全員分の食事の後を片付けた後手持ち無沙汰になった呼人は、森を歩いてきて良いかと相澤に尋ねに行った。洗汰とマンダレイに呼ばれた子供が呼人のことを事あるごとに睨み、食事もマンダレイに言われていやいや食べていた事が非常に気にかかったが、いつの間にか居なくなってしまうている。森の奥へ行ったのはわかつていたので訓練ついでに後を追ってみようかと考えたのだ。

「相澤先生、森歩いてきても良いですか？」

「……迷うな。それと大きな怪我はするな。今日は基本自由だ。夕方までには戻れ」

スタートした地点からこの宿泊所まではピクシーボブの個性と地形で誘導されるようになってきているが、勝手に森に入るとなるとその限りではない。通常であれば迷う可能性もあって許可はそう簡単に出せないが、今日のこの後の予定はなく呼人が完全に手隙

であるということもあって許可を出した。

許可を受けた呼人は、先程は樹上を一気に駆け抜けたことでほとんど確認できていない地面の様子を確認しながら森を歩く。地面の凹凸はそれなりにあるものの、下生えが多すぎて通ることすら困難という森ではないようだった。

(にしても……あの子供、キツイ目してたな)

森を歩きながら思い出すのは、今まさにいる場所へと辿っている少年の表情だ。ああいう表情をする人間を見たことは、実を言えばある。と言っても現実世界で出会ったわけではない。モンスター達の生きた世界で、彼らにあんな目を向ける人間が何人もいたのだ。

呼人がモンスター達の記憶をたどるとき、その場面の全てをイメージとして伝えられる。匂い、視覚、音から、空気といったモンスター達が感知できるのが怪しいものまで。つまりは、その場を再体験出来るのだ。その記憶を掘り起こせば、確かに思い当たる節がある。

少し森を歩き、小高い崖のような丘のような場所を一飛びで登ると、目の前にあの少年が居た。突然登ってきた呼人に一瞬目を見開くが、直後に表情を険しくする。

「何のつもりだ」

「話を聞きたいと思ってるな」

「お前に話すことなんてない」

「あつそ。でも俺は聞きたいから」

そう言つて呼人が隣に座ろうとすると、冼汰は勢いよく立ち上がる。

「俺に関わるな……!」

「じゃあ、お前は一体何をなんで恨んでんのかだけ教えてくれよ。まあ何を、つて言つても多分ヒーローだろうとは思うんだが」

核心をついた呼人の問いに、背を向けようとしていた冼汰の動きが止まる。

「誰に聞いた」

「いや、状況的に。別に俺はそれが悪いとかヒーローは素晴らしいとか言つてんじゃねえぞ。俺もヒーローつて存在に疑問を持つてるから興味があるだけだ」

これまででかけられてきた無数の言葉とは全く違う呼人の言葉に少し目を丸くした冼汰は、続いて拒絶を口にする。

「ヒーローに憧れてるなんてやつと話す気はねえよ」

「ん、じゃあ俺とは話せるな。だって俺ヒーローに憧れてなんてないし」

次々と、呼人の口からは信じられない言葉が飛び出す。現代の社会は、ヒーローの存在を肯定する者達ばかりで、否定するのは一部のヴィランぐらいなものだ。特にヒーロー科の人間とあつては、当然ながらヒーロー全肯定であろう。そう考えていた。

「嘘つくな。お前、ヒーローの学校に行ってるんだろ」

「あーそれは簡単な話なんだが……」

そう言った呼人は、洗汰の方を向いている顔を位置の起点として成体のオドガロンへと体を進化させる。一瞬の後には、凶悪なモンスターの顔の先と相對していた洗汰は息をのんだ。

その様子に満足した呼人は、人間の状態に戻ってもう一度座り直す。

「こんな人間が、皆に褒められるヒーローにならないで普通に生きていけると思うか？俺だったら、絶対にビビって逃げるね。それに、俺がもともと人間の良いこと悪い事の常識がわからないから、下手に放つとくとヴィランになりそうだったんだよ。だから今はヒーローの学校に通ってる。興味が無くなるか別のことがしたくなったらやめるさ」

「ヴィラン……!」

「別に俺がヴィランになりたいってわけじゃないぞ。ただ、今の学校に行く前の俺は、『ヒーローでもヴィランでもどっちでもいい』って考えてたんだ。んで、ヴィランになられたら困るからってヒーローにされた」

そこまで言い切ると、呼人は洗汰の反応を待つ。ここに至って、背を向けかけていた洗汰の体は完全に呼人の方を向いていた。

そして、呼人の新しい言葉にさらされた洗汰は、自分の思いの欠片を口にする。

「……ヒーローなんてくそだ」

「……あー、お前ステインと似てるんだ」

「……ステイン？」

どこかで感じたことある感情だと呼人が相槌をうつと、その存在を知らない洗汰はオウム返しに尋ねる。まだ幼い洗汰は、世間に出回っているヒーロー殺しの映像を見たことが無かった。

「ヒーロー殺しってニュースになったのは知ってるか？」

「……」

「あれの本人が名乗ってた偽名がステイン。本名は別だけだな。そいつの主張が、まあ、結構刺さるもんでな。ステインが言うには、この社会には『ヒーロー』とは名ばかりの偽物が多すぎるんだと。本物のヒーローはオールマイトみたいに、『金も名声も求めず、ただ人の為に命を賭して戦う者』だけで、他の金や名声のために戦う奴らは偽物ではない。だから自分が偽物を殺して回って社会に気づかせる、って主張だ」

若干呼人の脚色が混ざっているものの、彼の主張から呼人が理解した内容である。何事も全力な呼人にとって、『命を賭して頑張る』と『頑張る』の間に差はないのだ。

「……何が言いたい」

「お前も、今のヒーローのあり方に納得が行ってないんだろ？　そういう感じがする。だからもし思っているところがあるなら俺に教えてくれ」

呼人の言葉に、マンダレイにすら心を開いていない冴汰は素直に話し始めた。

初めてだったのだ。ヒーローを『おかしい』と言ってくれる相手は。自分を置いて逝った両親を、はつきりおかしいと言ってくれる相手は。

「……俺の親は、ヒーローで、2人とも死んだ……！　周りのやつも、テレビに出てるやつも、ヒーローとしての誇らしい死だとか言いやがって……！」

こみ上げる激情に、思わず滴が頬をつたいそうになり冴汰は顔を背ける。その姿が呼人には、さみしげに、そして痛ましく思えた。

社会にとってヒーローで、命をかけるのが当然でその死が美しいものとして讃えられる2人は、冴汰にとっては、決して死んでほしくない、なんとしても生きていてほしかった両親で。

馬鹿げているなど。呼人は思った。

「そう、か……。悪いな嫌な事聞いて。でも1つだけ言わせてくれ」
「……なんだよ」

「人が、自分の勝手に生きるのは当然だ。そして死ぬのもな。だからお前が嫌わなければいけないのは、お前の両親じゃなくて、この社会全部だと思うぞ」

「……………え……………?」

「後は自分で考えろ。答えを全部もらって——ってほどガキじゃないだろ」

冼汰の誰にも語らなかつた胸の内を聞いた割には短い問答の後、じゃあな、と来た時を巻き戻すように、呼人は冼汰の方を向いたまま崖際に立ち、背中から倒れ込むようにして崖下へと落下する。慌てて冼汰が覗き込むが、既に呼人の姿は無く、ただ木のなる音だけが響いていた。

「名前……………あいつ」

聞きたいことを聞くだけ聞いて消えた呼人に、必ず名乗らせると冼汰は決意した。

『社会が、ヒーローに変な期待を抱いてる。これはなんだ?』

『』

『弱いん、だろうな。多分』

冼汰と会話した直後の呼人は、森の中を歩きながらも先程の会話について考えていた。呼人が求めていたのが、この世界の人間の考え方という情報であり、彼に答えを与

えることではない。だから一人で、いや、こうしてモンスター達と対話している。

『これは……社会形態とか心理学とかの方向からアプローチしないとまずそうだな』

『リストアップでき次第教えてくれ』

頭の中に放り込んでおいた情報の中から有益なものを探しておいてくれるようにモンスター達に伝え、呼人はまた一人思考にふける。たとえ心に別の人格がいるとしても、一人で考える事のできる時間は必要だ。

呼人は、洗汰の両親の選択を責めようとは思わない。単純に自分のしたいことをしただけだ。ただ、洗汰のためと自分のしたいことを比較してしたいことを選ばれてしまったのは、洗汰にとって辛い事かもしれないと思うが。だが基本的にそれは、彼女の勝手である。だから捨てられた本人ではない呼人がどうこう思うわけではない。

ただ、それを讃える社会が、何か気持ち悪いと思った。

大敵に、モンスター達に立ち向かったハンター達が、英雄が死んだとき。人々は嘆き悲しむという。時には、モンスターがまだ生きているにも関わらず、新たにやってきた人間は戦おうとせずに彼らの遺骸を回収し、あるいはその地に弔う。

絶対に、その死を称えたりしない。彼らも、生きたかったのだ。それが奪われたのは、

絶対に喜ばしいことではない。

(歪みはそこか)

「お昼は抜くってレベルじゃ無かったねえ」

夕刻になって、相澤に言われていた集合時間になる前にと呼人が宿泊所に戻ると、ちょうど他のクラスメイトが到着していた。なんというか、全員ズタボロである。かくいう呼人も洗汰のところを離れた後森の中を走り回っていたのでそれなりに汚れているが、全員そういうレベルではない汚れ方をしている。

『3時間』とか冗談じゃないすか……」

「腹減った……」

「私たちなら、って意味よ、あれ。悪いわね」

「実力自慢とかきついっす……」

正に疲労困憊といった様子で言う生徒を微笑ましげに見ながら、個性を使って妨害活動を行っていたピクシーボブが見ていた感想を伝える。

「けど正直、もつとかかかると思ってたよ。私の土魔獣が思ったよりすぐに攻略され

ちやった。いいよ君たち。特に……そつちの4人と、尻尾の子と手がたくさんの2人。躊躇の無さは経験によるものかしら？ 3年後が楽しみね」

「……あの化け物になれるやつはどこに行つた？」

プロヒーローたちと生徒が話していると、洗汰が生徒達にそう尋ねた。化け物になれるやつ、で思い当たつた生徒は居なかつたが、それが誰を指しているのか気付いたマンダレイが森から顔を出したばかりの呼人の方に視線を向ける。

「帰つてきたわね」

「え……？」

クラスメイトが視線を向けると、ちょうど呼人が戻つてくるところである。

「あいつ……」

その姿を認めてそうポツリと呟いた洗汰が不機嫌そうに表情を歪めたのを見て、思い切つて緑谷が彼は一体誰なのかと尋ねた。

「ああ、この子は私の従甥。洗汰！ ほら挨拶しな！ 一週間一緒に過ごすんだよ」

「あ、えと僕は緑谷よろしくね」

マンダレイに紹介された緑谷も、洗汰に向かつて握手を求めて手を差し出した。それを不機嫌そうに睨んだ洗汰は、背を向けながら心を漏らす。

「ヒーローに憧れるなんて連中とつるむ気はねえよ」

ポカんと、緑谷を始めとするクラスメイトが見守る中、背を向けた彼は建物の中に入っていた。

そこでパンパンと相澤が手を叩く。

「バスから荷物降ろして部屋まで運んだら食堂で夕食。その後入浴してから就寝だ。本格的なスタートは明日から。早くしろよ」

女子部屋の方にはマンダレイが案内していき、男子の大部屋へは先に到着していた呼人が案内する。

「ひゃ、百竜くんー！」

「ん?」

声をかけられて振り返ると、緑谷と飯田、轟といったいつもの三人組とも言えるメンバーがすぐ後ろに来ていた。

「百竜くんはどれぐらいでついたのか、聞きたくて」

「……多分一時間ぐらいか」

「はは、相変わらず百竜君は桁違いだな！俺も精進せねば！」

「……速いどころじゃねえぞ。何したらそんな早く着くんだ」

あまりに早いタイムに3人がそれぞれに驚きを示し、轟がそう尋ねてくる。緑谷に至っては足を止めて期待の眼差しで見つめつつ、『百竜くんの個性であれば考えられる

のは——』なんていつもみたいにぶつぶつ言い始めようとしているので慌てて止めた。

「職場体験直後の救助訓練レースでの緑谷の動きは覚えてるか？」

「むっ、それはあの『落ちた』ときの話か？」

「は、はは、僕ももちろん覚えてるよ。あれがどうかしたの？」

「あれを、木の幹と枝でやって魔獣とか妨害を全部無視してここまで直行した」

足場が多いからやりやすかった、と事も無げに言った呼人に、緑谷はそのパターンを考えていなかったと振り返る。魔獣を倒す事はそれなりに容易かったものの、如何せん数と攻めてくるタイミングがいやらしかった。それに対応し、翻弄されているうちに時間がかかりすぎて居た。

戦うことが出来ないなら、避ける。期末試験を経たはずなのに、まだそれが定着していないのだ。

「ここが男子の泊まる大部屋だ」

そう言つて大部屋につづくふすまを明けると、『おおお——！』と数名の歓声が聞こえる。

「やっべー！ これすげー広いぞー！」

「こういうのテンション上がんね」

「道場の合宿がこんなだったな」

「……中学まで行っていたという道場か」

「みんな、荷物は端に寄せて並べておくんだ！ 散らかしては行けないぞ！」

飯田が張り切って指示を出し、全員荷物を端へと寄せていく。どうせ食事の後は風呂に入ることになるので、食事は着替えずに参加することになっている。

大部屋から食堂へと移動中、今度は尾白が声をかけてくる。

「百竜、どれくらいでついた？」

「一時間ぐらいだ」

「早い、な。相変わらず。流石に個性を使ったか」

「飯抜くとちよつとやばかったからな。どうしてもそれは避けたかった」

まあ最悪の場合になれば、モンスターに変身して森の木を食べるか、あるいはエネルギーを無限に増幅できる虫を操るモンスターに変身してエネルギーを直接取り込んでいただろうが。なるべくならそれらはしたくなかったので移動を急いでいた。

「そつちはどうだったんだ？」

「……俺は、あまりこういうのは得意ではなかった」

「俺は木の上からいけるかと思っただけだね。よつぽど上を行かせたくないみたいで
凄い数の魔獣が来ちゃって」

ああ、それ多分俺のせいだと心当たりがありまくりの呼人だったが、そんな事はお首にも出さない。

「なるほど。樹上からつてのは尻尾を使って、つてことか？」

「そうそう。森の中は俺の得意なフィールドだからね」

互いに一言も言わないが、恐らく一部の猿のように尻尾を器用に移動に使うことが出来るのだろう。その片鱗は呼人も運動場Yでの放課後訓練で気付いていた。建物から建物に飛び移る動きに比べて、パイプを登ったり伝ったりする動きの慣れが高かったのだ。

「障子は……」

「正直……何が出来ただろうかという思いはある。おまえたちのような劇的な解決策ではなく、一つ一つの判断を早く、そして正確に、見通しを持って動かなければいけないのだろう」

「難しいね」

「だがこれについては俺だけの課題でもない。同じ課題を持つ皆と協力できれば……」

そんな話をしていると、食堂に到着する。食堂では既に食事が並べられていた。大量の食事に大きな土鍋。ほとんど時を同じくして、恐らく別ルートから到着したB組も食堂にやってくる。彼らもA組の面々と同じく森で汚れた姿をしていた。

「百竜だけ楽そうな格好で浮いてるね」

「うっせ。半袖長ズボンで汚れてるってところは変わらんだろうが」

「赤など着てくるからだ」

「素直に後悔してる」

上に真つ赤な速乾シャツを着ているために、呼人はクラスメイトの中で非常に目立っている。それがB組からも見えていたようで、チラチラと視線を向けられた。

やがて、全員が食卓について食事が始まる。

昼食抜きで一日中森の中をさまよったクラスメイトもそうだが、それと同じ以上に腹ペコな呼人もまた凄い勢いで食べ物をお口に放り込んでいく。

やがてある程度腹が満ちた所で、障子が先に到着した呼人は他の皆が到着するまで何をしていたのかと尋ねる。

「百竜は、先について何をしていたんだ？」

「着替えて昼食作って食べてから森でトレーニングかな」

「トレーニングならそのまま制服でしとけば汚れなかつたんじゃないか？」

「いや、最初の移動で制服はボロボロになった。木の枝に引つ掛けまくってもうボロボロの形しかない。流石にパンツじゃあ他の人の手前まずいから着替えてこいって先生に言われた」

「ああ、なるほど……そう言えば俺達の方はみんな汚れてるけど意外と服は残ってるね」
「飯田がズボンを破ったぐらいか……」

「まあ、普通の人間の耐久力だと布が貫通される威力を受けるとそのまま肌までいかれることが多いからな。その点俺は、速度も耐久力も布がついてこれないレベルにあるから必然全力で突っ走ってれば服がぶっ壊れるわな」

そう会話しながらも、食事を詰め込む呼人の手は止まらない。

「そう言えば、いつも普通に弁当いっぱい食べてるだけだから気にしてなかったけど、何か食べないとまずい事情ってなんなの？」

「ん、そうだな……。俺がモンスターに変えた部分も、当然損傷……まあ簡単に言えば怪我はする。で、それは怪我してない人間の体を表に出しておけば動くのには問題はないけど、怪我自体は残る。それを修復するのにエネルギーを取られるんだ。んで、今は複数のモンスターの内蔵を損傷しているから、特にエネルギーの補給を怠っていると全部回復に吸われてぶっ倒れる可能性が高い」

「それは、また……思ってた以上に切羽詰まってるね」

「そもそも内蔵を損傷することなどめつたにないと思うのだが……」

「まあそこは個性の都合上ってところだな」

「またすぐ秘密にする」

「まだ見せてないのも関わってんだから別に良いだろ。概要だけ説明するなら、例えばオドガロンの肉体にトビカガチのとある器官を合わせて発現させた時に、その器官に他の内蔵が耐えきれなくて損傷する、って感じだ」

例えば。氷属性を苦手とするオドガロンの肉体は、氷を操るモンスターと同時に発現させるのは相性がよろしくない。それを突き詰めてしまうと、発現させるだけで自傷するような組み合わせもある。当然ながらそれだと使い物にならないので、最近はその試そうと夜の度の実験を繰り返しているのだが、特に強力な竜や古龍の力には根本的にオドガロンやトビカガチの体が耐えきれない。

そうなつてくると今度はどこが下限になつてくるのかという実験をして、損傷しては記録を取りまた損傷してとラインを探っていくしかない。その結果が、現状の複数のモンスターへの体を損傷した状態で抱えている状況だ。

「それ、痛かったりはしないのか？ 内蔵なんてちよつと痛いどころじゃない気がするんだけど……」

「……痛みには慣れてる」

「だからそういう問題じゃあ……はあ。ほんと、無理するよね」

「まあ……否定はしない」

ほんと。とんでもないところを見据えている。障子と尾白がそう思いを共有して前

を向いた所で、自分たちの座っている机の上が非常に寂しくなっていることに気づく。呼人の方を見ると、まだまだ満足していないという表情で大きく膨らんだ口を動かしていた。

第46話 呼人の過去と可能性

食事を終えたら風呂。なのだが。

「百竜、それ……」

「ん、古傷」

呼人が以前上鳴に見せたそれ。全身を覆い、時には交差している傷跡が、初めて見たクラスメイトの目についた。

「古傷という量なのか、それは」

「10年も無茶やっているとこうもなるよ。もう大体治ってるしな」

最初に気付いたのは尾白と障子で。それを見て気遣ってくれた。次に気付いたのは、もう一度それを見てみたいと思っていた上鳴だが、その事情を知っている上鳴は特に声をあげないものの、近づいて改めてその詳しい説明を聞きたいと呼人に尋ねてくる。

「どの怪我がどういう理由でしたとか、覚えてたりすんの？」

「ほとんど覚えてない。でかいのは……だいたい覚えてるけどろくでもないのばっかだな」

ことに大きな傷は、大部分が自傷だ。それ以外の理由で怪我する場合は、大抵がモン

スターに変化することでしのげたりするのだが、その力を部分的に扱う練習をしている時に損傷するとどうしようもないのだ。

「うおっ、百竜お前どうしたんだその体！」

「え、まじその傷。ってかよく見ると筋肉やばいのね」

「俺より肩周りとか腕とかでかくないか？」

「ひゃ、百竜くん大丈夫!？」

そうこうしているうちに、それほど広くない着替え部屋のせいでそれを見た他のクラスメイトも集まってきた。

「全部昔の怪我だからな。新しい怪我は……まあ擦り傷ぐらいはあるけどそれだけだ」

「いやそれにしても何したらそうなんだよ……」

「まあ、訓練の為に色々やってたからな。自分の爪でえぐったり岩に打ち付けたり……後は熊にぶん殴られたりとか」

「どどど、どういうこと!？」

「昔は強くなりたくてずっと無茶苦茶やってたんだ。そんなことしてたら怪我もする。それより、早く風呂に入らないと時間無くなるぞ。ってか峰田を先にいかせたのはまづかつたんじゃないのか」

呼人の傷だらけの体を見てほとんどのクラスメイトが興味を示している中、何か最初

から軽く鼻息を荒くしていた峰田だけが先に脱衣所から出ていった。

「え!? そう言えば峰田居ねえぞ! あと爆豪、はいつもどおりだけどー!」

「待てよ、風呂であいつつて……」

「覗きだ!」

やばいやばいと切島や上鳴、事情を緑谷に説明された飯田が温泉へと移動すると、今正に、壁の近くに峰田が立った所だった。

「峰田君! 何をしようとしているんだ!」

足を滑らせないように急ぎ足で移動した飯田がそう声をかける頃には、頭からもいだプニプニを使った峰田は既に扉の3分の2を登り終えていた。ちなみに慌てて浴場に移動した上鳴や切島は、じつは自分たちも多少惹かれていた側だったために積極的に止めようとはしていない。

「いるんすよ、この向こう側に。男女の入浴時間ずらさないなんて、絶対事故……そうこれは事故なんスよ……」

そんなことを言つて、飯田が飛びつく前に扉を登りきろうとしていた峰田が、扉の上に出した瞬間その頭を押されて体勢を崩した。

「お前はヒーロー以前に人間として大事なことを勉強しろ」

そう言つて峰田を突き落としたのは、マンダレイから峰田対策として警戒を頼まれて

いた洗汰である。

落ちた峰田は、なんとか間に合った飯田がキヤツチした。

これにて一件落着、かと思えたものの、直後、女子陣からお礼を言われて後ろを振り返った洗汰が、一切隠そうとしない数名の裸を見てしまい、大きな衝撃を受けて男子側に転落する。

「危ない！」

そして跳び出した緑谷が洗汰をキヤツチして、今度こそ覗き騒動は完結した。

「百竜、ほんと筋肉凄いな。どうやって鍛えてるんだ？」

一方、覗き騒動は遠い出来事と普通に湯に浸かっていた呼人の隣には砂糖がやってきた。

「隣座つてもいいか？」

「ああ」

よいしょ、っと腰を降ろした彼が放った言葉が、最初の言葉である。

「傷跡も確かにやべえけど、それより筋肉の方が凄い、って思つて」

砂藤もまた、パワーを5倍に高めるといふ個性の都合上もとの力が強ければ強いほど効力が増すため、積極的にトレーニングを行っているのだが、それでも呼人の発達した筋肉は見事なものだと感じていた。

「負荷かけて腹筋とか背筋とか、後はスクワットと腕立てと……ああ、あと俺しか出来ないのって言ったらこれだな」

「これ？」

腕を湯から出して水平に保った呼人は、それを曲げるように砂藤に言う。

「俺は何もしないから、この腕曲げてみてもらえるか？」

「曲げるって、普通に？」

「普通に」

「良いけど……え？ 堅くねえか？」

手のひらを上にした呼人の腕を軽く押し肘を曲げさせようとした砂藤だが、その反発が思ってた何倍も強力で戸惑う。

「俺のモンスターに変化するのって、体の一部だけってことも出来るんだ。だから今は腕の裏の筋肉だけモンスターの筋肉に変化させて、腕曲げるだけで負荷がめちゃくちゃかかるようにしてる。これなら授業中とか学校でもずっと出来るし」

「すごい、いな。天然のギブスってことか」

「ギプスがよくわからんけど。後は普通の筋トレのときもバーベルとか使うんじゃないかと、例えばスクワットだったら上半身だけでかいモンスターの状態に変身して、その重量を負荷にしてスクワットとかもしてる」

「おー……筋トレに便利な個性なんだな」

「まあ、否定はできない」

実際人間の体に負荷をかけるにはモンスター達の体を利用するというのが都合がいい。ただ、小さい頃にはそれで幾分苦勞もした。例えば、モンスターの筋肉に変化させるだけで体が動かせなくなる、とか、変化させた筋肉を大きくしすぎて他の骨とか筋肉を圧迫してめっちゃくちや痛くなる、とか。

後は変化させた骨の大きさを失敗して内側から皮膚を貫通されたこともある。痕になっっている傷の一部はそれだ。

「そりゃ、そんな体にもなるか」

「砂藤もかなり鍛えられてると思っけどな」

「俺は筋力が個性に直結するからな。鍛えとかないと」

「増幅する元が大きいと出力が大きくなるってことだな」

「そういうこと。もつと鍛えねえとなあ」

2人でそんな話をしていると、呼人の怪我に興味を持った切島がざぶざぶと湯船の中

を歩いてくる。

「おーい百竜！ 改めて聞くけどお前なんでそんな怪我してんだよ」

「子供の頃からの訓練の痕だよ」

「だから、どんな訓練すればそうなるのか気になると思つて。話したくないなら無理には聞かねえよ」

「別にそういうわけじゃない。ただ覚えてないのも多いし説明がめんどくさいと思つて」

まあそういうことなら、いくつかだけ説明する、と呼人は自分のしてきた訓練について説明する。

「例えばここの森みたいなところを全力疾走したり、木の上を止まらずに飛び移つてく訓練はよくしてた。そういうときは大体、途中ですつ転んで木に衝突するか、木の枝に正面から入つてぎっくりいくつて感じの怪我が多かったな。後は山の険しい斜面での訓練だと、足滑らせて滑落したりとか、斜面そのまま転がり落ちたりとか。流れの早い海で泳ぐ訓練して波にもまれて岩とぶつかったりもした。熊とも戦つたし後は鹿のやかいやつとか猪に角とか牙でやられたこともあるし、鮫とも戦つた。他は個性を制御できなくて自傷したぐらいか」

指折り説明していった呼人に、切島と砂藤はぼかんとした顔をする。

「無茶苦茶にも程があるんじゃないかねえか？」

「まあ、体を怪我した所でモンスターと怪我したところ入れ替えておけば動くのには支障はないし、良い医者も近くにいたからな」

「え、百竜怪我しても問題ないのか？ 変化する個性でも怪我したら影響はあるだろ？」
「いや、なんていうんだろ？ モンスターの体をストックしていてそれを好きなきに入れ替えながら使える感じだ。モンスターの体も怪我したら回復には時間もエネルギーもいるけどな」

「え、じゃあ怪我してもすぐに動けなくなるとかはねえのか？」

「まあ、そうだな。簡単に言えば体を元気なのと怪我したの入れ替えながら動けるわけだから、流石に死んだことはないけど死んでなければストックが切れるまで無茶が出来る」

こう言うのはなんだが、どうあがいても死にようがないのだ。以前神王寺が縁があると言っていた人間に昏倒させる個性をかけてもらったときには、呼人が昏倒し意識を失った代わりに、モンスター達が俺の体を使って動いたのでそういった個性を受けても基本的に問題ないということが判明した。

その時には呼人の意識自体もモンスター達のところに引つ込むのではなく完全に意識が無くなった状態だった。モンスターが表に意識として出ている状態だと、そのモン

スターが昏倒して代わりに呼人が戻ることが出来た。一応その人の個性は人間が対象のようだったが、呼人に宿ったモンスターも人間という判定になるようであった。

またその他にも神王寺の付添で外国のヴィランとかいうかならず者と戦う羽目になったときには、電気系の個性を身に受けて大怪我をしたこともある。当然意識は失ったわけだが、そのときにもモンスター達が勝手に体を入れ替えて、電撃に耐性のあるモンスターを使ってくれたことで大して問題なく、人間の体も時間経過で回復した。

呼人は、呼人であって呼人だけではない。言ってみれば、呼人とモンスター達の意識、肉体が全て一箇所に集約されており、そのうち一つだけが表層へと出ている状態にある。その中で表層に出る力が強いのが呼人であり、また元来体の所有者が呼人であったためにモンスター達は呼人にその権利を与えてくれているわけで。以前のモンスター達複数による乗っ取りの件も、そんな特性に起因する。

だから、ノーマン。人ではない何か。そう呼人は自分を捉えていた。

「男らしいぜ百竜！」

「ん、え、何が？」

「そんな傷だらけになっても頑張つてるところが！」

「ありがとう。まあお前は、どう頑張つても傷だらけにはならないだろうけどな」

「おう！ まあ俺もそうそう怪我はしないけどよ。でも昔はちよつと硬くなれるぐらい

だったし、今は岩とかコンクリート砕いても痣が出来ないぐらいには固くなったけどオールマイイトとかにぶん殴られたら砕けると思うぜ」

「オールマイイト級のパワーにぶん殴られるってよっぼどだろ」

「俺が殴ってもヒビ入るぐらいで割れないもんな」

「まあな。でもホントはヒビすら止めたいぜ」

その後、他のクラスメイトも時々交えて話をしつつ夜はふけていった。

翌朝、3時には目を覚まして宿泊所の周りでランニングを終えた呼人が4時半ごろに大部屋に戻つてくると、ちょうどクラスメイトが起き始めていた。ヒーロー科の林間合宿は当然ながら甘くはなく、朝もとてつもなく早いのだ。

「おはよう百竜。なんでそんな汗かいてんの？」

「走り込みしてきた」

尾白にそう答えながら呼人は絞ったタオルで汗を拭う。クラスの中では尾白や爆豪が特に朝には強いようで、他のクラスメイトが眠そうにしている中普通に起きて布団を畳んだりしている。

「この環境で走り込みって……体力どうなってるんだよ」
「追い込んでおかないとすぐにへたるからな」

そんな言葉を交わしながら呼人も着替えを終え、布団を畳んだ他のクラスメイトと合流して朝食を取る。朝食を取ったらすぐに外に集合だ。

「今日から本格的に強化合宿開始だ。この合宿の目的は、全員を強化し『仮免』取得に足る力をつけること。具体的になりつつある敵意に立ち向かうための用意だ。心して臨め」

というわけで、と相澤はいつぞやのボールを取り出して爆豪の方へと放る。

「こいつを投げてみる。前回の入学直後の記録は705・2メートル。どれだけ伸びているか」

聞いた爆豪はニヤリと笑うと、少し離れた位置でボールを投げる体勢を取る。

「おお、成長してんのか!」

「入学してから色々濃かったからな。1キロぐらい飛ぶんじゃねえの?」

そして爆発。爆豪の手から放たれたボールは、あのとさのように爆風に乗ってはるか彼方まで飛んでいく。『くたばれ!』というとても掛け声に思えないものが聞こえたのは気のせいだと思いたい。

『709・6メートル』

だが、相澤の示した数値は以前とほとんど変わらないものだった。

「え……？ 3メートルぐらいい？」

「思ったより、伸びてねえな」

「入学してから約三ヶ月間。君等は確かに成長している。だがそれは、あくまで技術、あるいは精神、思考面、そして体力面。『個性』そのものは、鍛えていないのだから当然、今見た通り成長していない」

——だから、今日から伸ばすのは個性だ。

相澤の言葉に、生徒の数人がはっとした表情をする。

「死ぬほどキツイが、くれぐれも死なないように、な」

いつかのように怖い顔で笑う相澤に、生徒達の背筋には冷たいものが走った。

「つまり、手とか足の先に顔を生やしたり、あるいは手を複数、尻尾を手から生やす、その他器官でそれが出来るか、つてことですか」

「そういうことだ。それが完全に不可能なようなら他を考える。だが少しでも出来るようなら、それをマスターしておけ。ブレスを使うたびに顔を変化させるのは手間だろ

う」

「確かに……ありがとうございます。やってみます」

相澤は呼人が理解したのを確認すると、他の生徒を確認するために去っていった。

林間合宿の目的は、個性のさらなる成長。発動型の生徒はひたすら個性を酷使することで、例えば上鳴であれば馬鹿になる限度を引き上げる。あるいは轟であれば熱や冷気をもっと大出力で操れるようになるなど様々だ。

そしてその他の異形系、あるいは複合系の個性の場合は、その個性由来の器官や部位の強化。例えば尾白であれば尻尾、障子なら複腕の強化などである。

そして、ここでその複合系だろうと考えられている呼人の訓練は、『より自由にモンスターを呼び出す』というもの。

これまで呼人がモンスター達の力を使い、制御しようとしてきたのは、あくまで『体の一部を変化させるようにして』というもの。

尻尾とて、呼人の考え方としては尾骨の発展型と捉えて変化させていた。当然皮膚や毛、鱗、甲殻は人間の肌や産毛の変化であるし、爪なども人間の数、すなわち5本のままか、あるいはモンスターの形状そのものに変化させる。特に鍛錬しているオドガロンにおいてはその大きさも自由だが、制御する練習をしていないモンスターはそこまで自由にはいかないものも多い。

また以前入試でつかった刃も爪を変化させた延長線上で、あれはオドガロンの爪の特殊な構造からなんとか発展させられたもの。他のモンスターでやるとしたら、刃は作れるにしても手の甲から生やして便利な武器のように扱えるかはわからない。

そんな、あくまで『モンスターと自分を入れ替える』と考えていた呼人にとってはそれは全く新しい提案だった。

「出来る、か。わからんな。けど……よく考えれば形状変化すらモンスターの力としてはおかしい。それなら——」

やってやれないこともないはずだ、と呼人は頷く。こういうところに、モンスター達はあまり力を貸してくれない。というより、彼らも知らないものでどうしようもないらしい。自分たちの体で武器として扱う部位や発達した部位、あるいは体内の特殊な器官と内臓の配置については知っているもの、その程度である。そして、彼らが知っている体の部位の説明については呼人は全て知っていた。

だから、今からする訓練は呼人1人でやるしかない。

「けど、電気袋とか水袋なんかを体内で複製できるとすれば、相当便利だな」

特に大変なのが、体表に出ている組織ではなく内部器官である。特に人間には、属性を扱うための器官なんて備わっていないので、その時は腎臓や肝臓などにかく肺と心臓以外の部位を変化させてなんとか短い時間だが使えるようにしていた。

だが、『無い器官を作る』ことが出来るなら、その問題が一挙に解決する。USJで吐血したような怪我もしなくてすむ可能性が高い。

それに以前クラスメイトにも説明したことがあるが、人間の手というのは動物の様々な形の四肢と比べて非常に自由に扱いやすい。一方で非力さもあるわけだが。

ただ、例えば斬竜なんかは尻尾を振り回すには体ごと振り回すしか出来ないわけで、例えばそれを腕につけてしまえばより自由に扱うことが出来るのだ。

「よし、じゃあやってみるか」

他のクラスメイトから少し離れた岩山の横手で、呼人もその実験を始める。まずは、尻尾を『腕』を変化させて出現させる実験。段階としては、その後尻尾以外も試して、今度は『なにもないところから生やす』ことも試してみたい。

意識を集中し、腕がオドガロンの尻尾に変換することを想像する。すると、普段の変化よりも遥かに遅いものではあるが、尻尾が普段のオドガロンの皮膚ではなく、独特の構造を持つその尻尾に変化した。

と、同時にその重量に耐えかねて呼人は前に向かって膝をついた。

確かに、肘から先はオドガロンのものに変化している。しかし。

「サイズが……これ等倍だな。昔を思い出す」

変化した肘から先は人間の身長よりも長く、そして太いオドガロンの尻尾そのものに

なっていて。とてもではないがバランスが取れない。そのアンバランスさに、呼人は初めてモンスター達に部分的に変化する練習をしたときを思い出した。その時も、突然巨大化した足によつて視界が急に高くなったり、あるいは自分の手に押しつぶされそうになったり。そんなことを繰り返し返して、使えるようになった。その時を思い出せば、今はまた辿っているだけなのだ。

そして、一分近くかかつてようやく手の延長としてようやく使える大きさの尻尾になった。この感じであれば、尻尾が特に強力なモンスター、例えば斬竜や毒怪鳥の尻尾を手から変化させると使い勝手が良さそうである。あるいは、尻尾も含めての三刀流なんて出来るのだろうか。

久方ぶりに、自分の個性の可能性を探ることに、呼人は楽しさを覚えていた。

第47話 黒く蝕み地を染めん

夕方までずっと鍛錬していくつか判明したことがある。

まず、モンスター部位を、同じものを複数生成しようとするとか引つかかる感覚がした上に、エネルギーをこっそり持つていかれる感覚がした。恐らく、これは無い部位を『再生』させたような減少になっているのだろう。つまり、切断された尻尾をいきなり生やしたようなものだ。そして、それを消した後でも虚脱感は抜けなかった。

また、腕を4本生やす、なんてことも出来た。ただし、人間の体も含めてかぶらせようとすると前述のエネルギーの引つかかる感覚がしたので、例えば人間の腕の肩からトビカガチの腕を生やすような事しか出来ない。形状変化で人間のその形にすることはできそうだったが、まだ慣れていないためかずっと集中していても相当に時間がかかり、またどこか思うような形にならない。これは要訓練と言ったところか。しかも生えてきた直後はトビカガチの前足まんまの大きさをしているので、重さがとてつもない。

それと、本来の四肢に加えて尻尾、そして翼、以外の部位を変化ではなく生やして使おうとしたときには、余計にそちらに集中する、というか使ったこと無い部位を動かさうとするのだから当然頭がこんがらがった。

例えば尻尾を腕を変化させて発現させたなら、それは腕として普通に、そして無意識でも扱えたのだが、肘のあたりから尻尾を生やした時には、それは完全に未知の部位として感覚にも違和感が残ったし、操作にもぎこちなさが残った。これは、恐らくモンスタースターの感覚も含めて完全に初めてのものや特に希少なものは呼人も感覚として理解できていないためだと思われる。あるいは、実地で動かす感覚を養うよりもイメージトレーニングの方が重要かもしれないと色々試すことに決めた。

またこれも厄介な話だが、感覚は当然ある。例えば、手をオドガロンの頭に変化させたとき。そこから伝わる嗅覚や聴覚、味覚と自分本来のそれで強い違和感を感じた。ただ、これに関してはそれなら感覚器官を再現しなければ良いとわかっている所以对策は恐らく出来る。またモンスターの中には人間とは違って例えば嗅覚器官を複数持つていたりするようなものもある上に呼人はそれに適応出来ているので、そのままにしても恐らくそのうち慣れることが出来るはずだ。

そしてまた、こうして余分に複製した体、例えば3本目の腕や、2本目の尻尾、あるいは2つ目の頭などは、モンスター達が入って操作することも可能だとわかった。それらは、俺の体の制御圏に外からくつつけたもののような扱いになっているらしい。つまり、3本目の腕はラージャン、4本目の腕はガルルガに任せて共闘なんてことも——
(まあ十中八九俺が痛い目見るだろうけどな)

ただ、そういう事も可能ではある。なんなら、まだ試してはいないが神話のケルベロスのように頭が3つ、とか、あるいは阿修羅のように三面六臂、なんて事も、まあ特に後者は難易度が凄まじく高そうだが出来ないことはないだろうと思っている。

ただ今日はまだ上手く制御が効いていないので、体内器官や細かいところは試せていないものも多い。それらはまた、習熟出来てからということになるのだろう。そして、到底学校や家の近くでは試せないものもある。それらは、また山奥か海の上か、どこか人が全く来ないところに行かないといけない。

とはいえ、高校に入ってから一番呼人にとっては収穫の大きな日であった。やはり、外からアイデアを取り入れるというのは大切なのだ。

そして、昼食を取っていないこともあつて変に早い時間帯に夕食を作ることになったわけだが。

「さあ、昨日言った通り『世話焼くのは昨日だけ』！」

「自分たちの飯くらい自分たちで作れ！　ってことで今日はカレーだよ！」

「い、イエッサー……」

「アハハハ全員へとへとだね！　だからって雑な料理は作っちゃ駄目ね！」

夕食は自分たちで作らないと行けないらしい。体力的な疲労はそれほどない呼人に

とってはむしろ単調な料理は楽だったが、全身ヘトヘトのクラスメイトはそうでも無いらしい。

しかし、料理の重要性を『災害救助の現場や避難先での炊き出しを行う可能性もある』と説いた飯田に従って、全員が料理をするために動き始めた。呼人は野菜を切る担当になり、野菜を適当な大きさにどんどん切っていく。ちなみにカレーは量を作るのが楽なので呼人もよく作る。土日に入る前は一気に大量に作って冷蔵庫に入れておくのかもする。呼人の食事量だとそれをしてもすぐに無くなってしまうのだが。

「わっ、百竜くん切るの早いね!」

「まあ……自分が大量に消費するから大量に作るのは結構慣れてるんだ」

それでもこの人数の、更に大量に食べるだろう人の分を考えた量というのは高校に入ってから作ったことがない、というか普通のマンションでは作れないが。ただカナダにいたころは、カレーではないもののシチューやスープなどはそんな作り方をしていた。

「俺も負けてらんねえぜ!」

「切島ちゃん、そんな急いでると包丁がかけるわ。自分のペースでいいのよ」

一緒に切る担当になっていた切島が自分も急ごうとした結果、硬化した手に当ててしまおうと包丁が欠けると蛙吹に注意されていた。手を切るじゃなく包丁がかけると言わ

れるあたりが切島らしいが、それでも個性を使うのが間に合わなければ指を切ってしまう。気をつけたほうが良いことには違いない。

やがて具材を切り終わったので調理が始まる。火付けやごはん炊きをしてくれているチームも無事進んでおり、一時間も立つ頃にはあたりには美味しそうなカレーのにおいが漂っていた。

「良い匂い！」

「腹減ったね」

「カレーは嗅覚に訴えてくるから腹が余計減る。てか俺が全力で食える量あるかな……」

「どれだけ食べるつもりだ」

「たくさん」

バカな会話を繰り返している間にカレーが出来上がり、全員でテーブルを囲む。夏場なのでまだ薄暗い程度だが、『こういう雰囲気なんか良い！』とはしゃぐクラスメイトを見て、これほど大人数でこんなことをしたこと無かった呼人も笑う。確かに、こういうのは何か楽しくていい。

「うめえ！」

「店とかで出たらあれだけど、こういう状況だとうまいな！」

「言うな言うな」

「ちゃんと美味しく出来たね！」

「葉隠さん口元ついてるよ」

「え!? 尾白くん取って！」

「じ、自分で拭きなよ!?!」

尾白と葉隠が騒ぐ隣では、障子と呼人がもくもくとカレーを口に運んでいる。

「百竜、吸い込むように食べるな」

「量食うからあんまり噛むっていう概念がな。胃袋は頑丈だ」

カレーは飲み物とはよく言ったもので。確かに他の料理、揚げ物なんかと比べて、ご飯と合わせた時の飲み込みやすさはピカイチである。

「……そう言えば今日は百竜の姿が見えないと思ったが……何をしていたんだ?」

「岩山の裏辺りにいたぞ。周りを巻き込まないようにって人のいないところに行ってたんだ。俺がしてたのは、個性の新しい可能性の探求、ってところだな」

「ほう?」

「俺の個性の扱い方って、『体の一部を変化させて対応する部分呼び出す』ってイメージでやってたんだよな。だから例えば手の先からモンスターの頭を生やすとかいうことはしたことが無くて、それが出来るのか、出来るとしてちゃんと変身するときみたい

に制御できるのかつてのを試してた」

「なるほど……それは可能性としては、良いのか？」

あまり状況が想像出来ずに尋ねる障子に、呼人はカレーを運ぶ手を止めないながらも思つたメリツトを応える。

「まあそうだな。握力よりも多分オドガロンの頭の噛む力の方が強いし、後は尻尾を手から生やして使える点とかでも、応用はかなりきくな。後は視界を手足の先から確保できるわけだからお前と似た扱いが出来る。後はあれだ、その応用で、なんも無いところからも生やせるのもわかつた」

「とうとうと？」

「四肢に加えて五本目を生やしたり出来るみたい。ただそつちはさっきのにまして制御出来る感じがないんだよな。生やせるけど使うの難しいし、そもそもまだどつちも元の大ききさでしか使えない」

「……俺の個性みたいだな」

「まあ、たしかに似てるかも。ちなみにその複腕を使う感覚ってなんか特別なこと考えてたりするのか？ それとも感覚でなんとなく？」

「俺はなんとなくだな。というより生まれつきこうだから本能的に操れる。元の大ききさ、というのは以前見せてくれた大ききさか？」

「そんな感じ。だからこう、肘から先が俺の体よりでかくなる」

その絵面を想像した障子は、少しした後おかしそうに目を細めた。

「それは……大変だな」

「ん。ほんと。しばらく訓練しないと使いこなす以前に使える大きさにすら出来ない感じだ」

「まだ俺は安泰だな」

「年季が違いすぎるだろ。俺のは後付けだしな」

自分の個性と似たようなことが出来るとは、と驚きながらも冗談を言う障子に、呼人は笑いながら答える。鍛錬はするが、人間大、あるいは人間の形状に寄せることが出来るにしても、流石に本能に根付いている障子ほど自由に扱えるようになるにはどれほどかかるか。今のように扱えるまででさえ10年以上かかっている。全く新しい道を極めるのだ。

「まあ、しばらく頑張る」

「……俺も、頑張らなければ」

他の騒がしいクラスメイトと違って2人の会話は静かだったが、近くからの叫び声なんかも聞こえて居心地の良い沈黙と言ったところか。

結局呼人は、カレーを10杯食べた所で無くなってしまうので少しばかり物足りな

さを感じながらも諦めた。最後に残った分まで食べたのが足りなかったのだ。他にも大食いが数名いたので仕方ないことであつた。

その晩。風呂も終わり、トレーニングを終えて布団に潜り込んだ呼人は、しばらくしてパチリと目を覚ます。そして起き上がると、足を忍ばせながら廊下に出て空いている窓の近くまで行つた。そして目を閉じると、その頭、髪の中に埋もれていた2本の触覚が立ち上がる。紫に輝くそれで改めて感知を行うと、呼人はそのまま廊下を歩いていった。向かう先は、相澤とブラドキングの寢室のつもりだったが2人はおらず。相澤は、補習組の5人に補習を行っているとところだった。深夜0時までトレーニングをしている呼人も呼人だが、朝早いのにこんな時間まで補習を受けている5人も相当な重労働であろう。

だが、呼人はそれを気にしている暇は無かつた。

扉を開けると、全員の視線がそちらを向く。

「相澤先生、ちよつと至急の用事があるので来てもらえませんか？」

「……わかつた。お前ら、ここまでの確認しとけ」

もう消灯時間は過ぎてはいるはずだ、と言おうかと思つた相澤だが、いずれにしる呼人の話を聞かなければならないのでそれは合理的ではない。何より、呼人が個性を使用している事も用事が真面目な内容なのだと思はせるに十分だった。

廊下に出た相澤は、呼人を連れて少し部屋の入口から離れる。

「なんだ」

「森に、人間の反応を確認しました。一瞬索敵の縁に触れたぐらいですけど、多分2人」
その報告を聞いて、相澤の目の色が変わる。

「距離、方角、索敵方法は」

「距離はおおよそ5キロ。遠くて正確な事は不明ですけど、俺の索敵の最大ラインが5キロぐらいで今はおそらくその外にいると思うので。方角は北。索敵方法はこの鱗粉です」

そう言うって呼人が腕を変化させ軽く逆の手で叩くと、そこから濃紫の粉が舞い上がる。

「視界を持たないためこれを探つてその位置情報などから周囲の状況を探るモンスターがいます。夕食あたりから嫌な空気がする気がして索敵をしました」

「その触覚は？」

「基本的に鱗粉はまきつぱなしですが、これを使えば遠距離でも細かい操作が可能にな

ります。後は感知能力の増大のためです」

呼人の報告を受けた相澤は、少し考えた後口を開く。

「ここで待つていろ。今のをブラドキングとプッシーキャッツにも説明出来るな？」

暗にしているか、というより、秘密にしているだろうがしろ、と言ってくる相澤に呼人は頷く。もともと、絶対的に隠す事は目的ではない。まあ、このモンスターもその基礎状態は危なすぎるものではあるのだが、呼人が使う限りはすぐに消せるので安全だ。

その後、部屋に戻った相澤は生徒達に急用が出来たので補習は中断、部屋に帰って寝るように伝えてから呼人のところへと戻る。突然のことに5人は戸惑っていたが、それよりも眠さが勝ったか大人しくそれぞれの寝室へと引き上げていった。

そして、相澤はその足で別室で補習をしていたブラドキングのところへ行くと緊急事態だから会議室に集まるようにと伝え、唯一B組で補習対象だった物間を部屋に帰させる。

「緊急事態とは？ それに百竜が関係しているのか？」

「プッシーキャッツも含めて話す」

端的にそう返した相澤は、そのままの足で既に就寝しているプッシーキャッツの面々の部屋を尋ね、それぞれに緊急事態だと言って起こしていく。相澤が冗談を言う性格ではないとわかっているので、プッシーキャッツの面々も何も言わずに起きてきた。

その間先にブラドキングと一緒に話し合いをする部屋に移動していた呼人は、ブラドキングに説明を求められていた。

「何があったんだ？ それにその角は……」

「森の中に人間の反応を感じしました。遭難者なのか遊びに来た子供なのか……どつちにしろ問題ですしひよつとするとその可能性もあるので相澤先生に報告に来ました」

「むう……個性の無断使用に関しては、まあこの合宿であるし場所も個性を使つていいと言つていたから何も言わんが……しかしお前の個性はそんなのだったか？」

「俺の個性届けに詳細不明と書いてあつたと思うんですが、これがその不明の一部です」
などと話していると、すぐに相澤がプッシーキャッツの4人を連れてやってきたので、呼人は改めて説明を行った。今使っているモンスター力の力も含めて、である。

「……レイザーが言うのであれば冗談のたぐいでは無いんだろうけど……正直伝えられてる個性に書いてなかったから疑ってる」

最初に口を開いたのはマンダレイである。この合宿の場所や情報が漏れているとは考えづらい。だからこそその、疑い。呼人の人格を疑っているわけではないが、今以上の警戒をするのであれば確証がある。

すると、呼人の顔が変化し始めた。髪を覆うように濃紫、というよりは既に闇色とも言うべき甲殻が出現し、頭部、そして見えている部分の全てを覆う。

その姿にすわヴィランかとプロヒーローたちは身構えたが、イレイザーが黙っているのを見て静観することを選んだ。

「このモンスターは、見ての通り目がありません。そこで感知方法として、この鱗粉をまいて、それに接した生物を感知する方法を持つてゐるんです」

これもまた個性の、そして生態の一部だと呼人は説明する。

「それ、その人間達は今はどうなっているかわかる？」

「いえ。多分ですが、さつきも言った通り索敵圏外にいます。角を出していれば操れると言つても、大まかにどっちの方向に動くか、ぐらいですし、そもそも遠すぎてギリギリのところを一瞬かすただけなので」

リーダーの縁に一瞬写った機影を見た感じですが、と感覚を説明する呼人に、プッシュキヤッツ、そしてブラドキングが黙り込む。

そこで相澤が口を開いた。

「その人間が何を目的としているか、という詮索も必要ですが、その前にこれからどうすべきかも考える必要があります」

「……そのとおりだな。あるいはヴィランであると考えられるなら、より一層警戒態勢を立てるか、合宿そのものを中止する必要がある」

「そのとおりだが……どうしたものか。まだヴィランであるか迷い込んだ民間人である

かもわかってはいない。そのあたりはわからないんだな？」

「人間の反応ということぐらいしか。ただ鹿とか熊じゃないことは確かです。絶対に人間です」

うむむ、と全員が考え込んだ所で相澤は呼人を呼ぶ。

「百竜、お前は部屋に戻れ」

「わかりました」

「それとしつかり寝ておけ。気を張りすぎるな。お前は学生だ」

「了解です」

相澤の指示に軽く頷いて呼人は部屋を出る。とはいえ、変化して眠っておけば疲労はそちらの体が請負う。そこで何かあつたら起こしてもらおうことにして、体の操作をマガラに任せて眠ることにした。以前ミルコとアイリが寝た時のように起きている事も出来たが、それでも精神への疲労はたまるので、今回は体を酷使していたつけもあつて眠ることにした。

第48話 宙を舞うは黒き翼

翌朝。いつものごとく3時に目を覚ました呼人が宿泊所の周りを走り込みをしていると、宿泊所の入り口のあたりで相澤に声をかけられた。時刻は午前3時30分。恐らくあの後も話し合いは紛糾しただろうにいつ寝ているのだろうか、と疑問が浮かんだものの、相澤が自分の体調を管理できないはずもないと呼人はそれを口にしない。

「百竜、昨日の件だが」

「は」

「他言無用だ。そもそもヴィランなのか迷い人なのかすらわかっていない。お前が警戒してくれているのはわかっているが」

「いえ、どのみち確定してないし言えるもんじゃないのはわかっていたので」

呼人がそう言うと、その反応を予想していた相澤は話を続ける。

「それと、昼間は俺達が見える範囲に全員いるから良いが、今日の夜は肝試しがある」

「あーそうですね。確か。肝試しってなんですか？」

「度胸を試すために、脅かされたりしながら一定のルートを歩く、という、まあ催し物だ。

その時は当然ながら、生徒だけになって森の中を歩くことになるし、脅かす側は予め森

の中に潜む」

「なるほど」

「その時だけで良いから、昨晚の能力を使っておいでくれるか？」

「あ、それはもちろん。というか別に体力を使う話じゃないのです。展開したままです。角もしまつてはいますけど感知の為にここに畳んでるだけなので」

そう言つて呼人は自分の頭の前側をコンコンと叩く。元の黒蝕竜の生態だが、角があるモンスターであるにも関わらず、普段は角を畳んでいるという不思議な生態を持つのだ。まあそもそも黒蝕竜の存在も生態も飛び抜けて異様なのであるが。

「そうか。悪いな。だがお前の話がほんとなら、この場にお前以上の感知要員はいない」「はい。大丈夫です。もともとそういう時の為に鍛錬してきたので」

「携帯は持つてるか？」

「部屋に置いてます」

「なら持つてきてくれ。お前と連絡先を登録しておく。何か感じたらすぐに連絡してくれていい。日中ならすぐ来れる距離だけだな」

「わかりました。ちよつと待つてください」

そう告げると、呼人は軽い足取りで宿泊所の中へと入つて行つた。その背中を見送つた相澤は、小さく息を吐く。百竜がどこか他の生徒達と違うというのは普段の授業でも

見ているし、ジ・アドベンチャーからの説明でもある程度はわかっている。ただ、それにしてもここまでやるものかという思いが強い。

昨晚呼人が眠ったのは、早くても午前0時過ぎ。だが午前3時半現在にはもう起きて走り込みを、それも、尋常ならざるペースで、ランニングどころか全力疾走と言つても過言ではないような速度でずっと走っている。本当はもつと早く宿泊所の外には出てきていたものの、呼人の走りを見ていて声をかけそこねたのだ。残念ながら個人面談などはしていないし、2学期にならないとその予定も無い。

やがて戻ってきた呼人とトークアプリの連絡先と電話番号を交換した後、相澤はなんとなしにそのことを尋ねてみた。

「強くなりたかつたからです。勿論戦いもですし、それこそただ戦うだけじゃなくて岸壁をよじ登って大海を泳いで渡って山脈を駆け抜けて。とにかく『出来るようになる』たい』つてのが強いです」

「何故、そう感じたんだ？ やはりモンスター達か？」

原点を尋ねる相澤に、呼人は以前オールマイトにも返した答えを返す。

「俺の個性の元になつてるモンスター達が普通に生きてた世界があるのは知つてると思ふんですけど」

「ああ」

「その世界にも当然人間はいたわけで、その人間たちの中に、ハンターっていう、大自然を巡って生きていくっていう人たちがいたんです。その人達って薬草とかの採取もするんですけど、あの世界ってこっちみたいな科学技術とか個性がないかわりに、色んな特徴を持つモンスターの素材を利用するっていう発展をしてたらしめて。そのためのモンスターを狩るのを、そのハンター達がしてたわけなんですよ。それも化学兵器なんて無いんで、剣とか斧とかハンマーとか、そういう武器と身一つで」

「淡々と語る呼人だが、その口調にわずかに興奮が滲んでいる。」

「素直に憧れました。正直、俺はこんな個性だからモンスターが相手でも戦えると思いませんけど、一般的なレベルの個性だったら絶対戦おうと思わないです。多分。でも、それに個性なしで挑んで、それも少数とか、時には一人で勝つんですよ。俺もそんなに出来るんだって証明されてるし、ならその領域に到達したいなと思って」

「……そうか」

「まあ正直、憧れ先行というか、自分の中でハンターの存在がでかくなりすぎて追えば追うほど遠く感じる状態なのはわかってるんですけど。それでも、出来る限り強くなり続けたいと思ってます」

「そういう呼人の目は、ヒーローを指すというクラスメイトの目よりも更に真っ直ぐで。彼が強さを追い求めているというのは正に真実なのだろう。そう、相澤は理解し

た。

「……わかっているとは思いますが、強いだけじゃあヒーローにはなれない」

「はい」

「まあ、お前はそのあたりも優秀だが……あまり根を詰めすぎるなよ」

「気をつけます。まあ昼間は他のやつよりは体力は取られないことしてるので」

「ああ、そっちは順調そうだな」

「まだ出来るってことが実証出来たレベルですけど。でもどっちも、鍛え続ければ身に付けれそうです」

「……改めて言うが、根を詰めすぎないように。それと、周りをしっかり見渡せよ」

「ありがとうございます」

頷く呼人を見て、相澤は僅かな休息のために宿泊所に戻る。外では再び呼人が走っている足音がかすかに響いていた。

日中はいつもどおりの訓練を終え、夕食、そして肝試しの時間となる。

「というわけで先攻はB組。君たちA組は後攻、つまり脅かされる側ってことね。A組

は2人一組で3分おきに出発して、ルートの本真中の名前を書いた御札を持って帰ること。脅かす側は直接接触は禁止だけど個性を使って脅かしてくるからね」

マンダレイの説明を受けてクラスメイトの中でくじ引きを行いペアが決まる。残念ながら補習組は肝試しの時間を削って補習のため、16人でペアを作って8組。呼人のペアは緑谷となった。

「よろしく、百竜君！」

「よろしく、と言つてもいまいちどんなもんか理解してないけど」

「なんだよ百竜、お前実は怖いの駄目なのか!？」

呼人が緑谷に肩をすくめて見せていると、緑谷目当てで近づいてきた峰田が声をかけてくる。

「駄目というか……全然こういう経験が無いからどうなのかわからん。暗闇とかは全然行けるんだけどな」

「そもそも百竜が個性で索敵してたら脅かされる前に大体気づけるんじゃないやあ……」

「な、それは駄目だろお前！ 無しだ！」

わかってるよ。流石につまらんくするような事はしないって、などと話しているうちにどんどんペアは進み、やがて5組目が出発していった。

「……」まで悲鳴が聞こえてくるって、結構怖いのかな……」

「すぐ近くつて感じじゃないから、真ん中、それこそカードの直前か直後ぐらいに怖い
仕掛けてそうだよね」

「バッカお前ら、脅かされたらむしろ好機だろ?! そんなときことラツキースケベの――」

峰田がまた変態な発言をしようとしている最中。呼人の背中を悪寒が走った。

呼人は凄まじい速度でポケットからスマホを取り出す。その動きを3人はぼかんとした様子で見ている。

3人を尻目に、呼人は「指示通り」相澤に電話をかけると相澤はツーコールで出た。

『どうした』

「急に人間の反応が、9個出現しました。多分ワープです」

『生徒との距離と位置関係は』

「多分接触してます。あ、今しました」

『くそつ、マンダレイにプランBですと伝えろ』

「了解です」

呼人が電話を切ろうとした所で、すぐ近くからも悲鳴が上がる。見ると、ピクシーボブが地に伏せていた。そしてその直ぐ側には、2人の見知らぬ人物。ヴィランだ。

全員が呆然とする中、呼人はマンダレイに叫ぶ。

「マンダレイ、相澤先生がプランBですと言ってます！」

「Bね!? わかった！」

直後、クラスメイト全員の脳内に彼女の個性、テレパスの声が響く。

『ヒーロー科生徒全員へ！ ヴィランの襲撃あり！ 全員プロヒーローイレイザーヘッドとブラドキングの責任で戦闘を許可する！ ただし積極的な交戦は避け宿泊所まで撤退しなさい！』

そのテレパスはヴィランには届いていないようで、ヴィランの前では虎が問答をしているようであった。

さてクラスメイトと一緒に逃げるかと考えた呼人だが、当然ながらそんな事は状況が許さない。まずこの場にいるクラスメイトの大半は、固まってしまっている。それに、ここにいるヴィランの数は2で、残りの7は全て肝試しをしている方から反応がある。そちら側にはB組の生徒もいて現状30近い生徒が森に散らばっている。数の上では勝っているが、ピクシーボブをたやすく制圧した以上相手はかなり気合の入ったヴィランであろう。4対1で制圧できるかどうか。

というより、もう既に森の上を黒煙が多い始めていて、あまり良い状況では――。

そこでまた携帯で相澤に連絡を取る。

「先生宿泊所の直前に反応が！ 10人目です！」

気づかないうちに現れていた10人目の反応がいつのまにか宿泊所の前に現れていた。何故か、反応が薄く感知はしていたのに気づくのが遅れてしまった。しかしその反応はすぐに消滅してしまう。

『ああブラド、片付いた。だが……個性で作られた人形だろう。俺は生徒達の救助に向かう。百竜、状況は!』

「ピクシーボブが昏倒、現在肝試し開始地点にヴィラン2名、生徒6名、マンダレイと虎——今緑谷が跳び出していききました。多分洗汰の救出です。森の方はごちゃごちゃしてますが……恐らく以上のことが言えません。後多分森に火が放たれてます。あるいは火を使える個性」

『わかった。お前らはすぐに避難しろ』

「いえ、こういう状況こそ個性を使ってなんぼなので」

『ツ! おいひやく——!』

相澤とつながっている電話を切る。相澤の足では、間に合わない可能性が高い。それに、こういう使いたい時に使わずして何が力か。幸い交戦は一応は許可されている。

「尾白、ちよつと行ってくる」

「ちよ、行ってくるってどいかに!?!」

「森」

短く返すと、オドガロンの健脚で走り始めた呼人はすぐに地を蹴る。その直後、腕が皮膜を持った翼へと変化し、羽ばたくうちに頭や銅の形状も流線型のものへと変わっていく。そのまま木々の間を突っ切ると、樹上へと跳び出した。おおよその場所は把握している。行ってみてヴィランなら殴り倒す、生徒なら回収する。そう決めた呼人は、エリアの上をまずは火事になっているエリアへと飛んだ。

最初に到達したのは、つい先程出発したばかりの麗日、蛙吹のいる場所である。というより、樹上からの索敵しながらの移動が困難だったために結局地表に戻ったのだ。火が回っているあたりや、後は変な場所が2箇所ほど、何故か鱗粉が回っていないのが感知が届かなくなっている。というよりなんの影響が、エリア全体の鱗粉が揺らがされて状況がつかめなくなってしまうた。2度ほど再度散布したが駄目である。その中で一瞬だけうまく感知できたのが、順路上にいる蛙吹と麗日と、誰か。

だが、呼人が現着する直前に再度散布した鱗粉の中で、一人分の反応が離れていくのを感じる。

2人の姿を確認すると、確かに蛙吹と麗日があった。

「一応無事みたいだな」

「百竜ちゃん、どうしてここに？」

「救助。森に散らばっている生徒は30、それに対してヴィランが7、相澤先生がどう急いでも時間がかかる。歩けそうなら宿泊所を目指してくれ。多分ルート上にヴィランはいないは——」

その直後、反応を感じて呼人が振り返ると同時にその人物たちが声をかけてきた。

「麗日さん！ と百竜くんとか、梅雨ちゃんも！」

障子の背中に背負われた緑谷である。木々の間から順路に出てきた彼らの隣には、轟とその背中に背負われた恐らくB組の生徒がいる。

それを見て麗日が明らかにほっとした表情をして駆け寄り、蛙吹も駆け寄ろうとするが呼人がそれよりも早く行動を起こす。

「ひゃ、百竜くん!？」

頭部を闇色に変化させると、口から鱗粉の塊、もはや砲弾とも言えそうなものを吐き出した。それは直進すると、木の上に居た何者かを掠める。相手はその攻撃を躲して別の枝に飛び移り、トントンとかかかとを杖で叩いた。

「お前、ヴィランだな？」

そう問いかける呼人に、男は洒落たつもりかシルクハットの縁を持って軽く帽子を持

ち上げて話し始める。

「いやいや、君いい動きするね。両手が埋まってなかったら君も閉じ込めちやいたかったよ。まあでも、爆豪君ともう1人はもらえたし、それで十分かな？」

楽しんで言った仮面の男の言葉に、障子と緑谷の背中に悪寒が走る。慌てて周囲を見た2人は、今更ながらに爆豪がいなくなっていることに気づいた。

「かつちや——返せ！」

緑谷の言葉に、飄々とした男は呼人から距離を取るように木の上にびよんと跳び乗る。

「いやいや。彼はどう見てもそちら側の人間じゃないよ。むしろ完全にこっち側と言ってもいいぐらい——」

言葉の途中で男は木の枝から枝へと飛び移る。轟が放った水を避けたのだ。

「返せよ！」

「返せはおかしいだろ。彼は誰のものでもない。俺達は、価値観に道を選ばされてる哀れな少年に『もつと良い道があるよ』と、示したいだけだ」

ひょうひょうと、いかにもらしい、けれどなんとも自分勝手な言葉を男は語る。

「後ろ2人だけって、こいつどういう個性だ……！」

「俺も閉じ込める、しかも手が空いてなかったってことは接触型の発動系だろう。下手

に近づかない方が良さそうだな」

呼人がそう返すと、轟が隣にいた麗日に背負っていた男子生徒を預けて踏み込む。今度は先程のような小手調べではない、大規模な氷壁で。けれど男はそれを避けた。

更に、追撃として合わせた呼人の鱗粉の砲弾も躲してしまふ。

「俺は逃げ足と欺くことだけが取り柄ですよ！ まともには戦うつもりなんざこれっぽっちも無いのよ『開闢行動隊！ 目標回収達成だ！ これにて今日のお題おしまい！』」

そう言うのと、啞然とするクラスメイト達を尻目に木の上をかけて行方をくらます。

「だめだ！ 逃がすな！」

そう轟が声を上げた直後、全員がその後を追おうとする中、呼人だけがルートを外れた方向へと飛び上がった。

「百竜?!」

「そつちは任せる！ 何人かぶつ倒れてるやつがいる！ お前なら追いつけるだろ！」

そのまま返事を待たないまま、羽を広げた呼人は去って行ってしまった。

呼人がその場を離れた理由は単純で、それまで通らなかつた鱗粉による索敵が通るようになったからだ。そしてその中に、先刻と全く位置が変わつていない反応を数名分見つけてしまった。動かない、ということとは。

ヴィランであれば潜伏しているだけですむのだが、それが生徒だった場合、大怪我をしているか、あるいは——最悪の事態もありえる。だが、最悪を防げる可能性もある。だから呼人は、これまで使つてこなかつた翼を使っている。しばらく飛んでたどり着いたそこには、口元を抑えてうずくまる青山と、ガスマスクをして倒れる耳郎と葉隠がいた。

「青山！」

「ぎ、君は、僕は、何も——」

いつものカッコつけの無い、動揺した様子の青山の肩を呼人は強く叩く。

「よく守つた」

ただ一言。その言葉を力強くぶつけると、2人の容態を見る。が、特別な器具があるわけではない。そこで手を銀色のものに変化させると、そこから塵のようなものを大量に放出して2人の様子を探る。幸い2人とも今すぐ命がどうこうというレベルのやられ方ではないようだ。

「青山、2人を宿泊所まで運んでくれ！」

「あ、うん……、わかったよ——」
「よし。頼む」

もう一度肩を強く叩き、呼人は再び宙に舞い上がる。寄り道をしてしまったせいで、緑谷達の反応が他多数の反応に合流してしまっていた。

このとき呼人は、2人の『生命力』だけを見ていた。だが、人間は『ガス』の影響を受けると、そのときは生命力万端のように見えても、その後一気に悪化する可能性がある。そこまで考慮に入っていなかったための、判断ミスだ。自分には通用しないという考えが、呼人の判断を誤らせていた。

一方その頃の緑谷達、爆豪、そして後から判明したが常闇の救出を目指す組は、ヴィランに敵の方が一枚上手であることを見せつけられていた。

Mr. コンプレスが見せつけるようにしていた2つの玉。それを障子がポケットからくすねたように見えたが、それはコンプレスのフェイクで、完全に騙された形になってしまう。そして自慢するようにコンプレスが慇懃無礼な一札をワープゲートの中か
らした瞬間、その顔面を何かが遅い、仮面を大きく弾き飛ばした。

結果、コンプレスが見せびらかすようにベロに載せてみせた2人を閉じ込めた何かが飛び出す。

それに飛びついたのはそれぞれ障子と轟で。だが障子の手は2つのうち1つを掴んだものの、轟はすんでの所でヴィランのリーダーらしき1人にさらわれてしまう。

「確認だ、〃解除〃しろ」

「なんつだよ今の……水？ 俺のショウが台無しじゃねえか！」

そう言ったコンプレスが指をならすと、障子が掴んでいた玉から常闇が、そしてヴィランに奪われた玉からは爆豪が、それぞれ玉が弾けるようにして出現する。

「かつちゃん!!」

「来んな——」デク」

連れ去られようとする爆豪と緑谷が言葉を交わした直後、ワープゲートが爆豪を飲み込み、閉じようとした。そしてその瞬間、後方から高速で飛来した何かが爆豪を押しつけるようにしてゲートの中に飛び込んでいき、ゲートは消滅する。

後に残されたのは絶望に表情を染めた少年達だけだった。

ワープゲートを通過し飛び出した呼人は、その勢いそのまま壁に着地すると室内に向かつて『睡眠属性の』ガスを吐き出した。

耳郎と葉隠の容態の確認で時間を取られ、救出に間に合わないと思った呼人は、射角が取れる高度から高圧縮した水ブレスによつて自慢気に持つてるものを見せびらかした自称エンターテイナーを狙撃し、更に爆豪を見せびらかすことで出来た隙間に飛び込んだのだ。

結果。さして広くない室内には睡眠属性のガスが充満。耐性もガスマスクも無いヴィランたちはほとんどがダウンする。

だが、効かないものもいた。

「脳無、かこいつは」

あー、と、半開きの口から無意味な音を垂れ流している、奇怪な腕の組み合わせをした男。通常の腕だけでなく背中から複数の腕が生えており、更にそれぞれにドリルやチエーンソーと言つた危険な器具がめり込むように生えている。

睡眠が効かないなら麻痺入れるかと体を変化させた呼人だが、どうもその脳無は呼人の方を注目する気配が無い。なんとというか、完全に眼中にないと言うかあるいは興味がない。そんな様子だ。

ひとまず自分から手を出すのをやめた呼人は、部屋の中を見回し、外につながって

そんなドアが本当に外につながっているかと確認する。と、たしかに外につながっているようでアパートなどの外側についている階段が目に入った。

「よし。逃げられるな」

ヴィラン達を全員締め上げたい呼人だが、そんなことをしていると下手すると逃げるチャンスを失う可能性がある。特に爆豪、常闇を閉じ込めていたやつは、どういう個性かわからない以上戦うべきではない。そして、負傷、あるいは殺すことは流石に許可されてはいない。

また先程から、鱗粉を使っていたせいではらく使っていなかった鼻と耳に訴えかけてくる負傷者の存在がある。ヴィラン達ではない。隣の部屋に入ると、一人の人間が病院にあるような寝台の上に寝かされていた。

「確か、ラグドール、だったか」

緑の髪に、片方取れてしまっているが猫のような手袋。そして頭の装置。2日ほどだが、世話になった一人である。何故かここにいる彼女は、見るからに傷が深い血だらけの状態だった。わずかに治療の跡があるのは、ヴィランの誰かが利用価値を見出してきらっていたためか。いずれにしろ、彼女も搬送しないと命に関わる可能性がある。

それを見た時点で呼人の方針は決まった。室内の包帯を手にして元の部屋に戻ると、ヴィラン同様昏倒している爆豪を背負って手早く背中にくくりつける。そしてもう一

度隣の部屋に行き、ラグドールをいわゆるお姫様抱っこ状態にする。ガスが隣室にも回ったようでラグドールも深い眠りについている。

そして2人を背負ってアパートの外へと脱出した。

こうして、ヴィラン達に勝利の女神が微笑んだかに見えた林間合宿襲撃事件は、双方痛み分けという結果に終わった。

第49話 逃避行

「しっかし、知らない街はどんな自然より魔境だな」

なんとか爆豪とラグドールを救出することが出来たわけだが、この男、思い切り迷子になっていた。なんとか大通りに出ることは出来たのだが、ラグドールは裸だったので布を巻いてしまつて顔も髪もほとんど見えない謎の塊と化しているせいで、時折通り過ぎていく車ですら止まつてくれない。そもそも現代の人間は困つていそうな人間がいたからといってそうそう止まつてくれはしないしそもそも車から見ただけで困つていかなどわかりようも無いのだが。

結局、少し酔つた中年男性に道を聞き、病院と警察署の場所が判明するまで30分ほどさまようことになつてしまった。

病院にたどり着いた呼人を見て、事務員の女性は怪訝そうに表情をひそめる。

「すいません、ちよつと手伝つてもらえませんか。布の中に怪我人がいます。一応こつちの男の方は大丈夫なので」

そう声をかけると、一応手を貸そうかと近づいてきた事務員は、本当に布の中に人間が包まれていたことにぎよつとし、更にその女性が全裸であることにぎよつとした表情

を見せる。

「彼女の治療お願いします。治療費は絶対お払いします。後何でも良いので電話貸してもらえますか」

「わ、わかりました。あ、こつちこつち！」

ぎよつとしていた事務員たちだが、医師に連絡してストレッチャーを用意してくれていたようにその上に布ごとラグドールを横たえる。

「そつちの少年は？」

「こつちは寝てるだけです。椅子借ります」

爆豪の方は、怪我をしている様子は無かったので待合室の長椅子の上に寝かせておく。ここに来るまでも時間がかかったが、このガスを受けた場合大きな刺激がなければ1時間以上寝続ける。もつと強力にすると意識に障害が残る可能性が高いため強力には出来なかつたので、恐らく爆豪もしばらくすれば目をさますはずであるが、それでもまだ起きはしない。この場合の大きな刺激とは骨折とか切り傷とか、それなりに痛い状態を指すので無理やり起こすことも出来ない。

そのため、その間に連絡を取っておこうと呼人は事務室の電話を借りれるように頼み込む。

「すみません、電話借りれますか」

「あ、はい、何かわけがありそうなのでどうぞ。携帯で良いですか？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

呼人は受付に置いてある電話を借りれるかと思ったのだが、親切な事務員の一人が携帯を貸してくれた。更に紙コップに水を注いだものまで用意してくれた。礼を言ってからそれを飲み干し、暗記していた雄英の番号を打ち込んで電話をかける。相澤にかけなかったのは、現在避難や生徒の救助で忙しいであろう彼が知らない番号からの連絡に出るとは思えなかったからだ。ちなみに実際は知らない相手から電話がかかってくることで自体が彼にとってはありえないので、電話には出てくれるのだが。

しかし、流石に雄英も夜なせいか電話には出なかった。スマホを森に紛失してきたのが惜しまれるが、愚痴は言っていられない。

(となる……そうか、こういうときは確か警察に頼れば良いのか)

どうしたものかと思案していた呼人は、神王寺の適当な言葉を思い出す。『困った時は警察に電話しとけ』なんて、困ったとき常に使えるわけでもないだろうに。だが、今はその言葉がありがたかった。

『お電話ありがとうございます。こちら警察です。事故ですか、事件ですか？』

「俺は雄英高校の学生です。今多分事件になっていと思うんですが、そこで行方不明になってる生徒です。ヴィランの個性で転移させられたところを脱出して今病院に身

を寄せています。高校への連絡手段が無いのと、こういう時は警察に連絡しろと言われたので連絡しました」

『何県のなんという病院でしょうか』

そう尋ねられた呼人は、自分がとんちんかんなことを言っていたと理解する。病院とは、施設の名前だ。それこそ、学校、とかそういうレベルの大きな区分である。学校、と言っても場所はわからない。雄英高校とちやんと名前を言わなければいけないのだ。

「すいません、ここ何県のなんて病院ですか!」

「あ、えっと〇〇県〇〇市の△△病院です!」

「ありがとうございます!」

業務に戻っていた事務員さんに尋ねて、それを再度警察に伝える。

『わかりました。すぐに警察官が向かいます。現在危険はありますか?』

「いや、危険は無いです。病院にいますので」

『ヴィランから逃げたと聞いていますが、追われていたりはしませんか?』

「大丈夫です」

『わかりました。他にどなたかいらっしゃいますか?』

「プロヒーローが一人怪我をしていて今治療中です。後生徒がもう一人、眠っているの
で意識はないです。怪我はしてません」

『わかりました。すぐに伺いますので、落ち着いてお待ち下さい』

「ありがとうございます」

『では失礼します』

「あ、失礼しました」

ペコリと、呼人は見えない相手に頭を下げる。敬語を使う練習はしているが、こんな風に相手に使われるというのは初めてである。何か酷くむずがゆい気がした。

「すいません、携帯ありがとうございます」

ひとまずの連絡を終えた呼人は、携帯を返しに事務員のところに行った。

「連絡がついて良かったですね。何があったんですか？」

「あー、ヴィランの攻撃でワープさせられちゃって、気がついたらここにいたんですよ。なのでどうしようもなくて」

「そうだったんですね」

椅子は自由に使ってください、と言う事務員にペコリと頭を下げて、呼人はそこに座り込む。ヴィランが隙を見せてくれたのは幸運としか言いようが無い。だが行動を鑑みるに、彼らは壊しに来たのではなくあえてそういう風に見せつけるように行動していたようにも思う。でなければ死者も出ていたのでは無いだろうか。つまり彼らの信条故に隙が出来たのであって、幸運だけとは言えない可能性もある。

「ワープ……ワープか。そればかりはな」

何が厄介と言つて、あのワープという個性だ。それ以外の個性は、正直戦うのであれば遠距離から殺せる。Mr. コンプレスを狙撃した攻撃は高圧縮した水を細く吐き出したのだが、本気で吐き出せば、人間の大きさでは困難だが半獣状態であれば石すら切断するような水圧を出すことが出来る。人間の首などころりと落ちる。

そもそも、森という場もやりづらい場であつたのは確かだ。着火を避けるという発想が働いてしまった。実際呼人はこうして飛ばされていたので消火は出来なかつたわけではあるが、それでも『つけた分全部消す』という覚悟をした上で火を使うことも出来たはずだ。その時は相手を殺していた可能性もあるが……。

とにかく何につけても、殺さないというのが足かせとなる。遠距離に届く攻撃は当然威力が上がるし、速度が高い攻撃もまたしかりだ。他にも足を止めるためには体の一部だけ骨折させたり気絶させることが必要となるが、基本的には『速さ⇨重さ』の関係が成り立つ。相手に捉えられない速度で制圧しようとする、殺す可能性が高い。

これはモンスター達の力というより、やはり呼人自身の技術が原因だ。寸止めという概念がこれまでは無かつた。常に殺す気でモンスター達と戦闘を行つてきた。だからそれに慣れていない。そして慣れというのはそうそう覆されるものでもない。

』

「いや、お前たちは悪くないんだけどな。まあラージャンあたりは荒つぽすぎるからそれもどうかとは思うけど」

『』

「ああ。また今度付き合ってくれ」

「あの圧縮、玉に閉じ込める個性か？ よく分からないが……ああいう個性もあるんだな」

そして、Mr. コンプレスの個性。改めて個性とは、モンスター達ともまた違う、文字通りの超常の力なのだと再確認した。何でもあり得るのだ。あるいは、目を合わせただけで、見ただけで人を殺してしまうような個性が存在する可能性すらある。昏倒、麻痺あたりならば対応出来ると思うが、即死と閉じ込めはどうか。即死に関しては完全に人間の体が消されたとき俺がどうなるのかがわからない。閉じ込めは、内部からぶち破れるかが謎だ。

ひたすらに呼人は考えを巡らせる。より強くなるために。次会った時に殲滅する為に。自分では自覚していないが、このとき呼人は怒っていた。友人を傷つけられたことに。そして上手く対応しきれなかった自分に。

少し座ったまま待っていると、病院の入口が空いて警察官が3名走り込んできた。それを見て呼人が立ち上がると、足早で近づいて来る。

「君が、通報した少年か？」

「そうです」

「名前と所属を改めて教えてくれますか？」

「雄英高校ヒーロー科1年A組百竜呼人です」

呼人が答えると、警察はそれをメモに取ってから呼人の方を向き直る。

「ありがとうございます。とりあえず……学生証なんかは無いね。一旦署まで来てもらいます。保護も兼ねてですので、ついてきてください」

「ありがとうございます。後プロヒーローが一人負傷して今治療を受けてます」

「そ、つか。そう来たか。待兼、容態確認してきて。とりあえず俺と迅影はこの2人を一旦署まで連れて行くから。そっちも行けそうなら来てもらおう」

「ラジャっす」

2人の警官のうち若い方がぴしつと敬礼をして走っていった。

「そっちの子、起こしてもらえるかな？」

「あ、えっと個性で眠ってるので」

「個性？ 大丈夫なのか？」

「大丈夫です寝てるだけです」

そんな話をしていると、ラグドールの容態を確認しに行った待兼が戻ってくる。

「東城さん、まだ目を覚まさないそうで今手術中らしいです」

「わかった。迅影、先にクルマまで連れて行っとけ」

「ラジヤつす」

「お前は詳しい容態を聞けるようにここにいろ。状況が変わったらすぐに俺に報告。それと——」

警察官達が短く打ち合わせを済ませる中、爆豪を再び背負った呼人は警官の一人に案内されてパトカーまで連れて行かれた。パトカーは2台で来ていたようで、そのうち一台の後部座席に乗り込む。そこで呼人は、伝えそこねていたことを思い出して警官に伝える。

「電話で『転移させられた』って言ったんですけど、そこ建物の中で他のヴィランも転移してきてました。病院までかなり迷ったので徒歩20分ぐらいの距離で南南西の方角ってことぐらいしかわからないんですけど」

「建物の特徴は？ 外に出たなら見てませんか？」

「紙と鉛筆を貰えれば絵を描けます。ちよつと言葉でなんといえれば良い建物なのかわか

りません。奇妙な建物だったとかじゃなくて自分の語彙力の問題です」

呼人がそう伝えると、若い警官は少し頷いた後無線でどこかに連絡を取る。それを聞いたのは3人の警官の年長者である最初に話していた人物で、急いだ様子でパトカーに飛び乗ってきた。

「詳しい話は署で聞きます。疲れてるでしょうが、もう少しお付き合ってください」

「大丈夫です。割と元気なので」

「ありがとうございます」

そう短く話した後、年長の警官は今度は別のところへと連絡する。途切れ途切れにしか聞こえ無かったが、『捜査』『本部』『動く用意』という言葉が聞こえた。おそらくは、呼人が言った場所が見つかればすぐにそこに踏み込む用意を固めろと話を通しているのだらう。

「……………あ？」

警察署につき、呼人が爆豪をパトカーから降ろそうとしたところで爆豪が目覚めた。

「あ、起きたか」

「何だ？ お前……なんでいる？ ここはどこだ」

「警察署。〇〇県〇〇市ってとこ」

「は？ 警察？ クソヴィランどもはどーした」

「俺がお前を連れて逃げて、今は警察に保護してもらった」

腑に落ちない様子の爆豪に取り敢えず立つてもらって、呼人は警官の若い方に彼のことを任し年長の警官についていく。

「百竜君は、こういうのに慣れているのか？ 随分と聞き分けが良いように思うが」

「いえ、慣れているわけではないですが……ただ恐らくこういう流れになるだろうなという予想があったのと、話を聞いておけば困ったことにはならないだろうと思っているの」

「なるほど。助かるよ。ああ、それと一応本人確認の為に2人とも後で写真を取らせてもらいたい。恐らく雄英も襲撃の件で忙しくてすぐに人を送ってこれるかわからないから」

「了解です」

一室に案内された呼人は、そこでペンと紙を手渡されて紙にサラサラと自分が脱出した建物の外形を描く。ちらつと見ただけだが、それほど特徴のある建物にも見えなかつ

た。普通の、マンションではなくアパートというのだろうか。改めて絵にしてもそのように思える。

「ふむ……ありがとう。捜査への協力感謝します」

「いえ。あ、あのお願いがあるんですけど」

「何か？」

「雄英の迎えが明日朝までに来れなかった場合なんですけど、俺個性の都合上食事を大量に取らないとエネルギー不足で倒れるので朝食とか大量に用意してもらえませんか？」

呼人がそうお願いすると、警官はサラサラとメモにそれを書きつける。

「わかった。担当のものに回しておく。私はこれから出るので来れないだろうが……せつかく逃げてきた被害者が、警察署内で倒れたとあつては笑い事ではすまないからね」

「俺もそれは避けたいです」

「では最後に写真を」

そう言つて、座っている状態で良いと正面から、そして色々な方向から写真を撮られた。その後呼びに来るまでここで待っていて欲しいと言われて座っていると、ほんの数分で呼びにやってくる。

「おまたせ百竜君。取り敢えずうちには仮眠室ぐらいしか無いけど、そこに案内するからついてきて」

「ありがとうございます。爆豪つて暴れてたりします?」

「いや、そんなことは無いけど。何故だい?」

「いえ、なんとなく暴れるかなって気がしてたので」

意外と、本当に普段の言動からは考えられないのだが、爆豪は冷静な男である。いや、冷静と言うのとは違うのだが、状況はしつかり見えている、というべきか。突っ走りもするし、他のクラスメイトが予想もしないような言動もする。ただそれは無鉄砲なのはなく、見えた上で無視しているだけのことなのだ。そして現在いる場所はれっきとした警察署であり、流石にここで暴れるのは違うとわかつているのだろう。

案内された呼人を置いて、何か飲み物買ってくるから、と警官は去っていく。そして室内には、呼人と爆豪だけが残された。

「……状況を説明しやがれ」

「あ、い、よ」

いつになく不機嫌そうな爆豪に、呼人は簡潔に状況を説明する。ゲートが閉じる寸前に自分も飛び込んで、突入直後にヴィランを全部眠らし、爆豪とラグドールを担いで逃げたこと。

「……来んなつたらうが」

「……悪い、遠距離から高速で飛び込んだから直前の会話とか一切聞こえてない」

「……クソが。眠らせるってなんだ。全員叩きのめしたつーことか」

「いや、睡眠ガスで眠らせた。お前もそれに巻き込んだせいで今まで眠ってたんだけどな」

呼人の答えに、爆豪は怪訝そうな表情をする。

「睡眠ガス？ んなもん持ってたのか？」

「いや、個性で」

「てめーの個性は赤いのと黒いのだろうが」

「俺の個性は、『モンスターの体を操る』だからな。それが2種類だけなんて言っていないし、当然3種類だけでもねえよ」

「……んだその個性は。あるなら普段から使えや」

舐めプ野郎より舐めプかお前は、と爆豪は吐き出す。

「確かに使いわければ便利だけどな」

そう言つて呼人は、右手の人差指だけを伸ばし、それを変質させる。その瞬間、爆豪は押しつぶすようなプレッシャーを感じた。プレッシャーというよりは、あるいは存在感とも呼べる。何かやばい。百竜の指から放たれているだろうそれが、室内を覆い尽く

しているかのような錯覚を覚える。

それを元に戻した呼人は静かに話始める。

「こういうモンスターにも俺はなれる。今は指先だけ変化しただけなんだけどな。基本的に、個性を全部外に出そうとは思ってない。適度にヒーローになればそれで十分だと俺は思ってる」

例えば、モンスター達の力を全て使えば全員が救えていたとか。そうすれば犠牲を減らせていたとか。そこまでヒーローというものに熱意はなく、人を救うということにやる気はない。むしろそういう意味で言えば、今日の方が、本気を出していたように思う。「舐めプだと言うなら結構だが、俺は自分で決めた力の中でヒーローになる。それ以外の力は自分が使うと決めた時にしか使わない」

「……はっ。勝手にしやがれ」

「勝手にするさ」

不機嫌そうな爆豪は、壁にもたれて目を閉じる。仮眠室で休んでいていいとはいえず、出来る事はほとんどない。スマホも森に捨ててきたし、手元には本も無い。こういうときこそモンスター達との訓練をしておこうと、呼人は深く自分の思考の中に沈んでいた。

第50話 帰還

翌日。一通りの事情聴取を終え、大量の惣菜パンと弁当の朝食を終えて更にしばらく待機していると、昨夜世話になった警官が仮眠室にやってきた。

「やっと雄英の教師に話を通ったよ。向こうも忙しいみたいで。取り敢えず電話に出て欲しいらしいから2人とも来てくれ」

大人しくついていき、電話で会話している警官に案内してくれた人が合図をすると、一言二言交わしてから呼人と爆豪に受話器を差し出してくる。爆豪が不機嫌そうに目を逸しているのので先に呼人が電話を受け取った。

「もしもし」

『百竜か』

「はい」

通話の相手は相澤であった。今回の事件の事後報告などで彼がいた警察署に話が周り、報告中の彼とこうして連絡が繋がっている状態にある。

『はあ……。よくやったとは言わない。お前の行動は立派な命令無視だ』

「わかっています」

『学生である以上、俺達の指示には従え』

「……」

『……ともあれ無事で良かった。爆豪はいるか』

「います。代わりますよ」

そう言つて呼人が爆豪を振り返ると、不機嫌そうながらも呼人の手から受話器を奪い取ると相澤と何か言葉を交わしている。爆豪の方からはほとんど頷くだけだが。

そして再度呼人に受話器を突き出してくる。

『百竜。お前から預かっている映像は教師の間で共有させてもらおう』

「わかりました。特に問題ないです」

『ああ。それと……ラグドールの救助も含めて、助かった』

「やりたくてやったことですので」

『……それを好き勝手されると困るんだ。迎えはじきに行くが、すぐにはいけないと思つてくれ。雄英の方も忙しくしている』

「わかりました」

『警察に代わつてくれ』

警察に受話機を渡すと、ここまで案内してくれた警官に連れられて再び仮眠室まで戻る。

「……百竜」

部屋に戻って再び椅子に座り込んだ呼人の前に、不機嫌そうな表情で爆豪が立つ。

「てめえの秘密がなんだか知らねえし興味もねえ。てめえの個性もだ。てめえがどんな化け物になろうが、俺が勝つ」

「俺も、あれになるつもりは無いがそれでも負けるつもりは無いぞ。体育祭では俺が勝ったしな」

そう煽るように返すと、爆豪の額にいつもの青筋がピキピキと走る。

「てめえ……いい度胸しとるな」

「まあな。けど、俺はお前がクラスで俺の次に強いとは思ってるぞ」

「次とかざけんな一番強えわ」

「ただ緑谷と轟が関わった時には冷静さを失う」

ちらりと爆豪の表情を伺うが、早く先を言えお前の処遇はそれからと言わんばかりの表情で呼人を睨んでいる。

「お前が強くあろうとしてるのは何のためだって話だ。競う相手がいないと最強を目指さないのか。俺は。競う相手がいないようがいなからうが。この世界で俺が最後の一人になろうが自分を鍛え続ける。俺とお前の差は、そこにあると思う。センスはお前の方が上だろうけどな」

強さというものに求めるところ。志が高ければ、強くなれるなど盲信である。逆に嫉妬や劣等感が人を強くすることもある。だが少なくとも爆豪は、それで時々己を見失っている時があると、呼人はそう感じていた。

「……それがあのばかみてえな量の傷かよ」

「あれは……まああれもそうだな」

「てめえが個性を使おうとしやがらねえのはなんでだ。本気を出せばいつでも森を突っ走ったときぐらいのことが出来るんだろうが」

「俺の個性は、お前みたいな爆発とか、轟の氷と炎みたいな立ち回りを完全に変えてしまふものじゃなくて、例えば筋力の強化とか耐久力のアップとか、とにかく体に由来する部分が強いの。だからこの体を動かす感覚があつてなんぼで、その中で何が一番弱いかつて言ったらこの人間の体だ。だからそれを満足に動かせるようになれば、後はイメージトレーニングをひたすらすればすむ。それに、変身した時の扱いは高校に入るまでにもうかなり習熟してるんだ」

「だからあんな器用に森の中突っ込んでったんか」

「カナダの森は楽しいぞ。でももつと楽しかったのはアマゾンだな。あそこの10倍はスリリングだ。あとな」

「あ？」

本当に珍しく、憂うような表情になった呼人に、爆豪はいくらか険のとれた顔で聞き返す。

「個性を使うことに躊躇いは無いが、俺の個性は個性の域をはみ出している、というかこの世界にとつてずるい気がする。だから高校の演習なんかで使いたくないし、ヒーローになってからも今の以上はほとんど使うつもりがない」

「ずりいつてどういうことだ。てめえのも個性の1つだろうが」

そう言われて、呼人はためらったものの自分の個性の来歴やその出力について少しだけ説明することにする。

「モンスターって言ってる時点でわかると思うが、明らかにこの世のものじゃないだろう？ しかも俺のなれるモンスターの中には、地震、嵐、寒冷化、砂漠化、気温上昇、落雷——天変地異を引き起こすようなモンスターも普通にいる。街中で使ったらヴィランの被害より確実に影響がある。積極的にぶっ壊したいわけでもないのにそんな力を使いたくはないし、使うべきでもない。そう考えてたら、高校にいる間は素の人間でいけるところまでは行こうと思うようになってた。それに、言い訳みたいだが人間は凄いいんだ。俺がなれるモンスターに、個性無しで剣だけで立ち向かって仕留めるようなやつもいたりする。だから俺は個性を使わない人間としての性能を高めたいと思ってるし、それを信頼もしてる」

「……なげえ」

珍しく、いつもの『モンスターに立ち向かった人間』の話に加えて自分の個性、『モンスター達』を人間の社会の中で使うことについて思うところを呼人は説明したが、爆豪にとつては長過ぎて聞く気が失せるものだったらしい。確かに長かったかもしれない。だが、続けて爆豪は言った。

「つかずりいつてなんだ。俺だつて個性ぶつ放したら街がぶつ壊れるわ。てめえが全部使わねえのは勝手だがなくなくらねえこと考えてんじやねえよ」

くしくも、呼人が体育祭の時に爆豪に言った『それぞれがそれぞれの個性にセーブを欠けて使うのは当たり前の話だ』という言葉を、そのまま返された形になる。それにポカンとした呼人だが、すぐに笑って答える。

「そうだな。悪い忘れてくれ」

ああは言ったものの、実際呼人が言った言葉はどちらも心の中にあつたものである。他人にはああ言いつつ、自分にはそれが当てはまらないとずつと考え続けてきた。だが、それは違うだろうと。違うのが当たり前前の個性で、少しばかり影響力が強いぐらいでくだらないことを考えるなど爆豪は言った。

それで行動が変わるといっわけでもないが、考え方を変えたほうが良いのかもしれない。

「礼なんざ気色わりい。あとてめえは個性特異点つてもんを調べやがれ」

「なんだそれ」

「調べろつったろうが。てめえのくだらねえ悩みを解決してくれるわ」

それは、まだ呼人の知らない個性に関する知識で。そして、呼人の未来を確定するものとなる。

ヴィランの襲撃によってワープさせられるという目にはあつたが、呼人は初めて爆豪と真剣に話し、そして爆豪は、自分以上に強さにストイックな人間の言葉を、その実力を含めて体感した。それが、不幸中の幸いとも言えるものであつた。

「ヘイリスナー！　アューオーケー!？」

「マイク静かに。秘密裏につて話、わかってる?」

「生徒の無事を祝うぐらいは良いだろ?」

迎えのプレゼント・マイクとミッドナイトがやってきたのは、相澤と電話した翌日の夕刻であつた。その間にも雄英から伝言が警察経由で来ており、雄英までの移動の概要の説明が伝えられた。それに従つて今の爆豪と呼人の格好は、それぞれに異なる色の

フードつきの薄手のパーカーにマスクとなっている。

ヴィランの襲撃のターゲットとなった爆豪が、懐である雄英に戻るまでその姿を隠して移動するための変装である。それに合わせて、マイクとミッドナイトもコスチュームでなく私服を纏い、マイクに至っては髪型すら変えている。

「マイク先生、髪下ろしてサングラス外しただけで随分印象変わりますね。だいぶ地味に」

「おっと、それ以上はナンセンスだぜ？ てか目立たねえようにしてんだからそうもなるって」

「2人とも、準備は良さそうね」

「……おう」

「じゃあ行くわよ」

移動の手段は新幹線と電車の乗り換え。ヴィランにとっても、そして現在世間から注目を集めている雄英にとっては世間の目も避けなければならぬものとなる。そのため雄英の車両も使うことが出来ず、またこの地域にいる有力な外部のヒーローは現在とある作戦の為に集められている。従って、公共交通機関を利用して移動することになった。

駅について目的駅までの切符を買い、新幹線に乗り込む。所要時間はせいぜい一時間

もない程度。その間身バレを防ぐ意味もあって誰も口を開くことはなかった。

地元駅に到着し、ミッドナイトが爆豪を雄英まで引率していく。ターゲツトとなつて
いる爆豪は、直近の危険が去るまでは雄英敷地内に匿われることが決まっていた。そし
て一方の呼人とマイクであるが。

「どーするリスナー、クラスメイトの見舞いに行くか？ つつても面会時間もギリギリ
だと思ふが」

「誰が入院してるんですか？」

「A組だと、葉隠と耳郎と八百万、あと緑谷が入院してるぜ。よし、気になんなら見舞い
に行こう！」

自身もまだそういう情報を受け取っただけであり、雄英での会議潰けで外に出られて
いないマイクは、これをいい機会とばかりに呼人を連れて病院へと向かう。

道すがら、自分が確かめた状況があつていたのか違和感を感じた呼人は、そのことを
マイクに尋ねた。

「マイク先生、耳郎と葉隠は入院しないといけないほど負傷してましたか？ 俺が確認
した時には大丈夫のように思えましたが」

「ガスを吸つちまつてな。2人はまだ意識が戻つてねえらしいぜ」

その答えに呼人が黙り込むと、マイクはそつちにちらりと視線を向けた後、再び進行

方向を見ながら話し出す。

「百竜、お前の個性のビデオは見せてもらったぜ。うまく使えば便利な個性だと思う。てか便利すぎて腹立つぐらいだけだな。それで耳郎と葉隠の体調も確認したんだろ？」

「生命力を感じ出来るモンスターがいるので、それを使って。後は脈拍が少し速いものと呼吸が荒いのは確認しました。多少弱ってる感じはしましたけど入院するほどだとは感じませんでした」

「だろうな。けどよ、モンスターと違って人間つてのは弱えんだよ。特に毒とかガスつてのは、後からどんどん弱つてく。出血とか怪我もそうだな。一概に体調なんてわからねえし、たとえ医療従事者でもぱつと見でわかるもんじゃねえ。そのあたりは、まだ勉強しねえとな。少なくとも毒ガスの症状とか勉強しときゃあ、何かしら出来たかもしれねえぜ」

「……毒ガスや薬物関係は勉強しておきます」

呼人の個性、モンスター達の映像を見た後の教師たちの認識としては、まず人間としての常識とモンスターの常識を混同させないようにすること、特に救助訓練において怪我人の対応に気をつけさせることが重要であると考えられた。本人が気にしている感じはあったが、それでも染み付いたものというのは強い。特に小さい頃からそちらの常識にばかり触れていた呼人にとっては、そちらの方が大きいのだと、考えられているの

だ。

「けどまあ、全員ちゃんと帰ってきてよかつたぜ。勝手に突っ込んだのはいただけねえけど、よくやったな。入院してる3人も命に別状は無いらしいしよ」

「ありがとうございます」

「ここ数日はまったく言っていないほど情報が入手できず。せいぜいが、負傷者が数名いるということぐらいしかニュースでも伝えられていなかった。だから命に別状のある人間が悪いと聞いて、呼人はひとまず息をはく。

しばらく雑談したり、モンスター達についての話をしながら歩いていると、やがて病院に到達する。と。病院の前で何やら揉め事が起きているのが聞こえる。そして、人を殴る鈍い音が響いた。それを聞いたマイクは、慌てて病院の正面まで走る。

「ヘイ！ ワッタユードウイン!？」

そこに5人の人間がいるのを見て思いっきり英語で問いかけたマイクに、呼人は『この人素で英語と日本語混ざるんだな』と呑気なことを考えていた。そりやあ英語の教師にもなるだろう、と。プライベートでも割と騒がしかったりするマイクであった。

「っ！ マイク先生！ こんにちは！」

「はい、こんにちは！」

5人のうち1人である飯田がマイクに挨拶をする。他の4人はどこことなく気まずげ、

というか切島に至っては明らかに表情が強張ってる。

「なんか揉めてるみてえだけどどーしたのよ？ 言い合ってるぐらいなら何も言わねえけどよ。誰か殴っただろ？」

「俺が、緑谷君を殴りました。言い合いをしてかつとなつてしまい……」

それを聞いたマイクは、頭をかきながら大きなため息をつく。

「委員長、どんなときでも手は出しちゃ駄目だぜ？ 特にお前は、委員長だろ？」

「……はい」

飯田とマイクが話している間、他の4人はそれを、というよりは飯田の方をじつと緊張した眼差しで見ている。

「オーケー。これからはちゃんと話し合うこと。後今日はもう遅えからすぐ帰れよ」

「はい」

「あーでももうちよつとここにいてくれ」

それで話しが終わったような空気が漂い、飯田以外の4人からは安心した空気が漂う。が、ここにいろいろという言葉に不安げな空気が漂った。自分たちの目的がばれて、マイクに時間稼ぎをされているのではないかと。

「あの、マイク先生、俺ら用事があるんすけど——」

そこでマイクのスマホの着信音がなり、それを見たマイクがニヤリと笑う。

「オーケー。後携帯持つてるやつは、クラスの奴らに爆豪と百竜が帰ってきたって教えてやってくれ。今は雄英で保護されてるつてよ。一年のヒーロー科以外には他言無用だぜ?」

「え……?」

虚をつかれた表情の5人、その間に、マイクが後ろにいた呼人に合図をするので呼人はフードを降ろし、マスクを外す。

「百竜!」

「え、なんだよその驚き様は。もつと喜べよ」

喜びよりも驚愕と、あるいは後悔するような表情を見せる4人にマイクも自慢するよな表情から一点、困惑した様子を見せる。

と、そこでようやく彼らが何故ここにいるのか、こうして揉めていたのかに気づき、マイクは表情を険しくした。

「まさか……お前ら自分たちで助けに行こうなんて思ってたんじゃねえよな?」
ビクリと。肩が震えたのを見てマイクは改めて大きなため息をついた。

病院の前では邪魔になるということで、場所を病院近くの公園に移し5人の事情聴取を行う。完全に蚊帳の外にされてしまった呼人はついていって良いものかと悩んだが、怒り心頭な様子のマイクに帰りますとも言えず黙って脇で話しを聞いておくことにした。

普段のふざけた様子の欠片も無いマイクに、切島達も正直に自分たちのしようとしたこと、そして考えた事まで話す。

「はあ……。まあ後悔したとか何も出来なくて悔しかったとか、そういうのはお前らが勝手にすればいいと思うぜ？」

話を聞き終えたマイクは、少し考えこんだあとに話し始めた。

「けどな、それでどういふ影響があるかを考えろよ。雄英が叩かれるとか、まあ勘弁してほしいけどどうせ矢面に立つのはイレイザーだしそれはまあ良いわ」

相澤に聞かれたら睨まれそうなことを平気で言うマイクだが、たしかにそれはその程度のことなのだ。

「仮に爆豪と百竜がまだ捕まっていたとして、プロヒーローが動かねえと思うか？ 動くに決まってるんだろ。それも綿密な作戦立ててな。それを横から割って入ったお前らがぶっ壊すんだぜ？ 下手しなくても状況は悪化する。相手はそこらのチンピラどころじゃないヴィランばっかだ。当然守らなきゃいけねえもんが2つから7つに増えりゃ

あヒーローの手も足りねえわ。普通に死人も出かねえ」

「けど——！」

「実際お前らは知らなかつたろうがよ。あと二時間もすれば、爆豪と百竜が飛ばされたところと、別の場所にある拠点の3箇所、ヒーローが踏み込む作戦立ててるんだわ。そんなときに市民を避難させたはずなのにお前らがいたり、人質にされてたらどうなると思うよ。無茶すんとかかそういう話じゃねえのよ、これは」

古来軍隊では、命令の遵守というのが義務付けられている。それは組織として当然のことだとも言えるが、それでも軍隊のそれは、一般企業なんかのそれよりも遥かに厳しい。命令違反をすれば最悪銃殺もありえるほどのものだ。

なぜか。

簡単な話だ。組織の意思統一が出来ていないと、作戦において致命的な事故が起きかねないからだ。

例えば。敵の基地を爆破する作戦を立て、実行したとする。当然スパイにもばれないように軍隊内でも情報の秘匿された作戦だ。

そんな中、先走った兵士が勝手に基地に忍び込んで戦闘を開始したらどうなるか。

その兵士たちの救助を行うにしろ、見捨てるにしろ確実に死人が出る。状況が好転しないのではない。確実に悪化する。

「お前らを巻き込まないように攻撃を控える、あるいは気づかずに巻き込んだ結果救助しなけりゃいけない。どっちにしろろくなことにならねえわ。しかも実際行つて侵入してみたらどうよ、助けに来たはずの相手はいませんでしたっつてか？ 見たとこ情報収集に長けたメンバーでもない見てえだしよ」

淡々と、いつもは明るく優しいマイク先生が厳しい現実を突きつける。この場にいるのは、陽気なラジオのDJでも、雄英高校の教師マイク先生でもない。厳しい、ヒーローとしての現実を見てきた、プレゼント・マイクという一人のヒーローだった。

「百竜はともかく爆豪は狙われてんだよ。発見されたからつて保護が完璧じゃねえのにほいほい『救助した』なんて発表できるかよ。もう一回狙われたら今度は街中で被害が出る。だからこうして俺達がいけるまでは存在を隠して俺らと警察と警備してくれてるヒーローだけの話にした。そんなことも考えなかつただろ？ お前ら、そんな甘い認識じゃあヒーローにはなれねえぞ」

マイクの言葉に、切島は唇を噛み、八百万はうつむく。毅然と前を向いているのは飯田と、相変わらず何を考えているかわからない無表情の轟だけだ。

「今日は家に帰つて、俺の言ったことをよく考えやがれ。改めて言うが、爆豪は雄英で保護されている。このことはヒーロー科以外に教えるのは禁止だ。もちろん親も。それとヴィランの拠点の制圧作戦はヒーロー科にも他言無用。わかつたか」

「……うす」

「は、はい！」

「……わかりました」

「申し訳ありませんでした」

「自省します」

全員が言葉を返すのを確認してからマイクは公園を出る。どうすべきかと判断に困った呼人は、ひとまずマイクについていくことにした。

「マイク先生、俺は帰って良いんですか？　まだ病院の面会時間があるなら行きたいんですけど」

そこでようやく呼人の存在を思い出したのか、マイクは罰の悪そうな表情をした。

「あー悪い、話聞いている間に時間過ぎちまった……」

それだけマイクも頭に血が昇っていたのだ。

「まあ、話が話だったんで……じゃあ俺も帰ってもいいですか？」

「送ってくぜ。確かこっからそんな遠くねえだろ？」

「まあそうですね」

マイクに言われて、2人は夜の道を歩く。と、その途中でマイクがスマホを取り出した。

「そーいや、そろそろ雄英の会見が始まるぜ。お前も、ヒーロー目指すなら見といた方が
良い。これも、ヒーローの現実だ」

そう言っつてマイクは、スマホを操作した。

第51話 神王寺という男

その晩、事件は起き、そして夜が明ける前に終わった。そして1つの時代も終わり、新しい時代が訪れる。

『ありがとう。それも候補にあげとく』

『いや、それは無い。そつちは違う。そもそも、何故ここまですがらないといけなくなつたかの方が——』

『……なるほど。確かにその可能性はあるか。社会が大きすぎるから——』

『その可能性もあるから断言は出来ないな』

『』
『』
『』

『ありがとうみんな』

茫洋と、救助活動の行われている映像をスマホで見ながらモンスター達との思索にふけていた呼人の肩が軽く叩かれた。神王寺だ。

「どうした珍しいな。飯を食いかけなんて」

「……考え事してた」

「そうか。ま相当にでかい事件だったからな。そりや仕方ねえよ」

「神王寺は、呼ばれなかったのか？」

「俺は裏方だからな。それに俺の本当の個性なんて知ってるのは公安の一部の人間と外国の裏社会のやつらぐらいだ。呼ばれることはまずねえよ」

「そうか」

そう答えた呼人が相変わらず茫洋とした瞳のまま考え事にふけているので、神王寺は呼人の目の前から唐揚げを一欠取ろうとする。と、その瞬間呼人が勢いよく顔を上げたので神王寺はビクリと肩を揺らした。

「神王寺」

「唐揚げの一欠ぐらい良いだろ」

「ああ、いや、それはどうでもいい。以前言ってた『何でも見える人』の力を借りたい」
食事をどうでも良いと言い切り、凧いだ目で自分を見つめる呼人に神王寺も表情を引

き締める。

「会うのはわけはねえが、力を借りたいなら相応の時間がかかる。まずは聞きたいことを伝えて見る時間を空けねえと。見るつてのはそんな簡単なことじゃないんだぜ」

「わかった。すぐに紙に出力して渡す」

「んなにあるのかよ」

「ああ」

そう言って呼人は、今度こそスマホをスリープモードにして机に置き、食事を再開した。

「心境の変化、つてとこか？」

「気になることが出来たぐらいだがな。今すぐぶっ壊したいとかそういう話じゃない」

そう。今すぐ、という話ではない。ただ——そう。

多分自分はヒーローにはならないのだろうな、というぐらいの心づもりは、出来ていた。

あの事件。オールマイトを始めとするプロヒーロー達がヴィランの拠点を襲撃し、そ

こからヴィランの親玉らしき人物との戦闘によつてオールマイトの現状が明るみに出た事件、通称「神野事件」から一週間ほど。

呼人と神王寺のすんでいるアパートには、相澤とオールマイトが訪問していた。ヴィランによる相次ぐ襲撃に対抗するための寮制移行に関する説明のための家庭訪問である。

型通りの挨拶、というほどの挨拶も無く、2人を部屋に招き入れる。

そして寮制に関する細かい説明を受けた神王寺は一言。

「特に異論は無いですよ。そもそも俺がこいつの保護者になつてんのは法手続き上の問題だけなんで」

「ありがとうございます。信頼に応えられるように努めていきます」

そう相澤が丁寧に頭を下げる横で、オールマイトはニコニコと笑っている。実は神王寺とオールマイト、友人というほどではないが、まだ神王寺が呼人を拾う以前、日本でヒーロー兼研究者をしていた頃に縁があるのだ。

「にしても、オールマイトはそんなことになつても変わらん」

「そういう君こそ、年の割には若いよほんとに」

「個性の都合上、老いるのが止まつてるみたいでな」

「……オールマイト、お知り合いですか？」

その2人の会話に、相澤が思わず尋ねた。そんな話は聞いていない。

「本当に知り合い程度だよ。共にヒーローとして活動したものとしてね。もつとも彼は表に出てこなかったし、研究者としての成果の方が大きかったと思うけど」

「まあ、あんま公に個性を使いたくも無かったんでね」

「今もそんな感じかい？」

オールマイトに尋ねられて神王寺はかぶりを振る。

「今は研究もあの頃ほど熱心ではないね。まあ各地から声がかかったら行ったりするぐらいで。ヒーローの方はぼちぼち、むちやしすぎないようにしてる」

そう答えた神王寺に、オールマイトは表情から笑顔を消して真剣な口調で尋ねる。

「まだ個性を使うのは、嫌かい？」

何のことだと相澤がオールマイトの方をちらりと見るが、オールマイトはじつと神王寺の方をじつと見てる。

「そーだな。一般人に使うのは、嫌だな。今は公安の一部の部署から依頼されて、ヒーロー専門で治してる。もつともよっぽど優秀なヒーロー相手でおかつ再起不能レベルの大怪我をしてるときぐらいだけどな」

「一般人にも使わないのは、と聞くのは野暮かな。確かあのときも聞いた気がするね」

「流石に便利なもの扱いされるのはきついわ。それにヒーローを選びすぐりしてんの

も、ここで終わるのはもったいないと思える相手にだけしか使わないってつもりなだけだ。傷や死を忘れるのは、絶対にやっちゃいけないことなんだよ」

「……変わらないな、君も」

「あんたもな」

2人だけで、呼人と相澤がついていけない会話をする2人。十年以上前に、ともにヒーローとして生きた2人だけの会話。

「失礼ながら、ジ・アドベンチャーの個性はなんでしようか。気になって調べたのですがどうもはつきりとしませんでした」

相澤が神王寺に尋ね、オールマイトが神王寺の方をちらりと見る。神王寺はご自由にと言いたげな表情で肩をすくめた。それを見たオールマイトは、自分に説明して良いと言っているのだと判断して説明する。

「彼の個性は、のこぎりや斧など、サバイバル用の道具を体から作り出したり、体をそれに変形させる個性、ということになってる」

「どういうことですか？」

「彼の個性は『サバイバル』と名付けられてるんだけど、実は公表されてた個性の他にも一つの能力があるんだ」

そこまで言って、神王寺が口を挟んでくるかとオールマイトはためを作るが、神王寺

は口を閉じたままである。

「その能力の名前は『適応再生』。自分についた傷とその原因に適応してすぐに再生し、そして血を媒介にして人にもその能力を与える。もつとも人に使う時には効果は一度きりだしデメリットもあるようだけどね」

「サバイバルと言つて、これほど『生き残る』ための個性も無いよ、とオールマイトは続ける。

「それは……デメリットとは？」

「そこで初めて神王寺が口を開く。

「個性の成長限界の引き下げと、老衰寿命の減少。老衰が若干早まるのと、個性がそれ以上成長しなくなる、つてとこだ」

「彼は、その個性のせいで一時期は事情を知るヒーロー全員に自分のところに来て欲しいと声をかけられていたんだよ」

「怪我の治療、ですか。どれぐらいの怪我が対象ですか？」

「『どんな怪我、病気で』だったよね？」

「オールマイトに尋ねられて、神王寺は首を横にふる。

「駄目なときがあつたのかい？」

「どんな怪我人でも、助けようと思えば助けることが出来る。それが神王寺が引く手あ

まただった理由。

神王寺は、オールマイトの言葉に再度首を振った。

「……死者も、だ」

「え……？」

神王寺の言葉に、オールマイトと相澤、そしてそこまでは聞いていなかった呼人も目を剥く。

死者を治す？ そんな禁忌に両手を突っ込んだような能力があるのか、と。

「以前外国の災害救助やつてるときに、明らかに事切れてる人間に使ったことがある。つつても胸から下がすり潰されて無くなってたが。ばつちり生き返ったぜ。そんなわり60ぐらいの爺さんだったせいから5年後に老衰で死んだつつう連絡が来たがな」

もともとは、そばに倒れていたもうひとりの大怪我を負った人間に使うつもりだった血が、斧で手首から先を落として血を流そうとした時に飛び散り、その明らかに死んでいた人間にかかった。結果、両名とも復活した。使おうと意識しなければ効果は発揮されないが、その時は別の怪我人を見ていたため『治そう』と意識して流した血が死者にもかかることになった。

「死後は聞いたところによると恐らく3時間ぐらい。それで老衰寿命は最低15年か？ それぐらい持つてかれてるってのはわかった。その後は流石にそんなことが二度と

無いように最新の注意を払ってたが」

「それは……私も素直に喜べないね」

「だから、みだりに使わねえって決めてるし、特に日本で使う時は必ず他言無用の誓約書も書かせてる。そんなことが出来るってわかったら、世界中のやつが押し寄せてくるだろうしな。あれだ、雄英の飯田って子も知ってるが、そんな話は一度もしてねえだろ？」

「飯田が？ いえ、話してないと思いますが……どういう縁が？」

「インゲニウムが怪我のせいで再起不能らしかったから治した。その時に立ち会ったのが飯田天哉だった」

俺もそんな話は聞いていないんだが、と首を振る呼人を相澤はちらりと見た後、神王寺の方を見る。

「ま、オールマイトもイレイザーヘッドも、これは秘密に、な」

「私はまだ、納得してないんだけどね」

オールマイトは自身を平和の象徴として人生を費やすほど人々の平和に心を砕いている。そのため、ヴィラン達の怪我ならまだしも、災害に巻き込まれた怪我人や重傷者、そしてヴィランの被害にあった人すら治そうとしなくなっていくたジ・アドベンチャーの態度にはずっと不満を抱いていた。

だが、神王寺にも言い分がある。まず、自分はヒーローを仕事としているが本職は研

究職だと思っており、ヒーローの資格は1つの手段に過ぎない。そしてもう一つ、自分の人生全てを他人に吸い取られるつもりはない。その2つの理由と、もう一つ実益などではなく完全に信条由来の理由から、神王寺は以前日本に居たころも個性を隠して活動していた。

「こればかりは、変えるつもりはない。人が傷も死も恐れなくなったら、人は人じゃなくなる。それに恐らく、人間は死者が生き返ることには耐えられない。だから俺は、これからもその覚悟を持って見殺しにしていくな。お前が人々の柱となり、人々の平和を願うように、俺は人々がただ強く生きることが願ってる。嫌だったら、ヒーロー達で守ると良い」

「……そうだね。そうさせてもらうよ」

その後、取り留めもない会話を交わし、とある連絡事項を呼人に伝えて確認を取った後相澤とオールマイトは呼人と神王寺の家を出る。

「彼の、あの『見殺しにする』というのは、以前からですか？」

「ずっと、だよ。私も何回か説得しようとしたんだけどね。『人間は傷ついて生きていくものだ』って。彼はあるいは、自分の個性を嫌ってるようにすら思えた。当時からうまく折り合いをつけて使おうとしてたんだけどね。個性に関する実験なんかは、基本的に自分の体を研究材料に個性を使わせて記録するってことを繰り返してたよ」

「それは……難しい、話です」

目の前の命が救えるなら、救おうとするのが人の常だ。それを神王寺はあえて見捨てようとする。何故なら自分が救おうとすれば、『全てを救うしか無い』のだから。そしてそんな個性を、気分で使い分けたりしてはならない。だから、『優秀なヒーローだけ』という縛りを設けた。実際、交通事故にあつた友人を彼は——救わなかった。

オールマイトもそれを知っているからこそ、強く言えないのだ。

「神王寺、さっきの話だが」

「本当だぜ？ 俺は死者もいけるらしい。お前の両親も助けようと思えば出来たがしなかった」

「いや、そつちの話じゃない。人が傷や死を忘れてはならない、っていう方だが」

その言葉が、呼人には気になっていた。傷や、死なんて無いほうが良いというのは誰もが思うことで。呼人すら、それらが無いのであればヴィランも気にならないし皆が文字通り自由に生きられる可能性もあるのではないかと、考えていた。

「傷や死を忘れると、命が軽くなる。そして命が軽くなると、今度は精神的な傷すらが軽

視され始める。『だってどうやっても死なないのだろう？』ってな。どんだけ辛くても死で終わらない。そして、楽しい時は永遠に続くなんて思いはじめて、大切なものがどうでもいいものになる。失われる可能性があるから美しいんだよ。大切に思えるんだ」

——当たり前前に存在し続けるとわかっているものをありがたがるように、人間は出来てない。

それほど長くない、神王寺の言葉。だがそれは、呼人にとっては新しい観点で。死と、傷、命というものにそんな価値があるとは思ったことがない。社会構造や政治などの話ばかりで、人間の精神に関わる内容を軽視していた。

また1つ、呼人の道の鍵が開いた。

第52話 入寮

その後時は立って8月中旬。まだ学校は始まっていないが、ヒーロー科の生徒が雄英敷地内の寮に入寮する日がやってきた。

これまでの間、呼人は新しく開いた個性の扱い方への習熟と、神王寺とモンスタ―達との議論、そして『すべてを見る』人物に会いに行ったり、プツシーキャッツの面々と会って礼を言われたりと忙しくしていた。

ちなみに相澤に家庭訪問の際に言われた用事というのが、このプツシーキャッツの件である。雄英を通す以外の呼人との連絡手段を持たなかった彼女らだが、ラグドールが呼人に救われたということと直接礼を言いたいと言っていたのだ。ただ本人はまだ怪我と、そして何らかの薬物を使われていてその効果が抜けきっていないとかで来れなかったが、残りの3人が礼を言いに来てくれた。

そのため時間を設定して会ったのである。礼や、勝手をしたことへのちよつとしたお説教、それと呼人の個性に関してなど改めて聞かれた。個性に関しては、一応お世話になったということと相澤に渡したのと同じ映像を彼女らにも渡した。こうしてヒーローの中に呼人の個性を浸透させる、というのも、呼人が人間社会で生きていくための

当初の方針ではあった。それが今なお意味を持つているかは甚だ怪しいところではあるが。

「とりあえず、1年A組。無事に集まれて何よりだ」

「それは先生もだと思うわ。会見を見た時はいなくなってしまうと思つて悲しかったものの」

「ま、色々あるんだろう」

しんみりとした空気が漂いかけるが、相澤が軽く手を叩いて空気を変える。

「さて。寮について説明する前にまずは。当面の予定だが、合宿で取る予定だった仮免の取得を目指す」

「そーいやそんな話だったな！」

「完全に忘れてたわ」

「それと」

短く言つてから黙る相澤に、自然に生徒も黙つていく。

「轟、切島、緑谷、八百万。この4人はあの晩、百竜と爆豪救出のためにあの場所へ赴こうとした」

相澤の言葉に、クラスメイトの表情が強張る。『まさか』と。皆がそう思つていたそれは、現実になつていた。自分たちが知らない間に。

飯田の名前が無いのは、彼があの場合に完全に止めるつもりでいたからだ。事更に主張したわけではなくむしろ他の4人を庇おうともしていたのだが、『殴り倒してでも止めるつもりだった』という飯田の短い説明をすっかり覚えていたマイクが相澤に伝えていたのである。

「その様子だと、行く素振りは皆も把握していたわけだ。直前でマイクが止めたおかげで未遂ですんだが、もし行っていた場合」

—— 耳郎、葉隠、百竜、爆豪を除く全員を俺は除籍処分にしてた。

「直前まで止められなかった13人も含めて、俺達の信頼を裏切っていたことに変わりはない。正規の手続きを踏んだ上で正規の活躍をして、信頼を取り戻してくれるとありがたい」

そう言つて相澤がじろりとクラスを見渡すと、ほとんどのものがうつむいている。マイクが呼人を迎えに行き、そして病院に立ち寄るといふ気まぐれを起さなければ。彼らは行つてしまっていた。実際は飯田が殴り倒してでも止める覚悟でその場にいたわけだが、その4人相手では一人で止めきれたかどうか。

「そして爆豪、百竜」

これまでの話では当事者ではなかった2人に話が飛び、クラスの目がそちらに向く。「お前らがいなくなったことで、心配してこういうことをしようとするやつがいるわけ

だ。他の者も、自分が危ない目に陥ることで仲間まで危険に晒すということをもう一度認識して、以降努力しろ」

その言葉に、爆豪、呼人ともに苦い表情である。爆豪自身は抵抗出来ずにさらわれてしまったわけだし、呼人も何も言わずに姿をくらしめていたことになっている。それがクラスメイトに与えた心配は、想像に難くない。呼人においてはさらわれたということでは当初は認識されておらず、捜査の結果発見されなかったことから恐らくさらわれたのではないかという結論に至っていたが、まあ同じである。

「以上！ さつ、寮の説明に移るぞ元氣に行こう」

空気を变えるように相澤は明るく言うが、生徒は動くことが出来ない。相澤の言葉が、全員に重くのしかかっていた。

と。爆豪が手近にいた上鳴を引きずって植木の影に消える。そしてすぐに放電の光が走り、今度はアホになった上鳴だけが植木の影から放り出される。クラスメイトは最初はポカンとした様子であったが、そのアホ面に数名が口元を緩め、上鳴がウエイウエイ言いながら何か始めた時には多くの者が笑っていた。

そして植木の影から出てきた爆豪は、切島を爆破する。

「おまつ、何すん!?!」

「いつもみてーに馬鹿晒せや。礼は言わねえぞ」

爆豪だけは、ミッドナイトと一緒にいる段階で4人の行動を聞いていた。そして思った通り切島が爆豪いわくクソみてえにシケた面をしていたので、爆破するという凶行に至ったのである。

やがて、上鳴から広がった笑いがクラスを飲み込む。少なくともこの茶番で、暗い雰囲気は払拭された。

「1クラス一棟。A組は右が女子棟左が男子棟だ。ただし一階は共有スペース。食堂、風呂、洗濯なんかは基本ここだ」

「おおおおお！」

「ソファすごってかめつちや広いしキレー!!!」

「中庭もあんのね、良いじゃん」

なかなか豪華なその内装に、生徒はそれぞれ感嘆の声を上げる。その後『共用』と聞いた峰田が暴走しかけて相澤にストップをかけられたり、あまりの豪華さに麗日が卒倒しそうになりながらも、説明は2階以上の個室スペースに移っていく。

「個人部屋は1フロアに男女各4部屋の5階建て。男子側と女子側はつながってない。

エアコン、トイレ、冷蔵庫にクローゼット付きだ」

かなりの贅沢空間である。呼人には自前のキッチンが無いのが少しばかり気がかりであったが、恐らくそれに関しては下を使えばいいだろう。見たところコンロも複数あるようであったし、流石に四六時中埋まっているということはあるまい。

「部屋割りはこちらで決めた通りだ。各自、事前に送ってもらった荷物が届いてるから部屋へ運んどけ。取り敢えず今日は部屋作り。今後の説明はまた明日だ。以上解散」

そう言つて相澤は去つていこうとする。クラスメイトはそれぞれ自分の部屋へと移動していくが、呼人は相澤に声をかけた。

「なんだ」

「ランニングをしたいんですけど、外出つてどこまで許可されてるんですか。雄英敷地内なら自由でしょうか」

「そのあたりの説明を書いた紙が室内に置いてある。昼間は基本自由、21時以降は外出許可証を提出する必要がある」

「わかりました」

相変わらず呼人が考えているのは、如何に鍛えられるかというのと、食事のことばかりであった。

部屋に移動した呼人は、早速用意を始める。運び込んだもので主なものと言えば、本とファイル、本棚。パソコン、そしてスピーカー。それと音楽を外に出すために利用しているシンセサイザーが一台。後は大きなクッション。それに薄い板と筋トレ用の道具。後は細々とした日常品ぐらいで。それが呼人の部屋に置く全てで、実はベッドも布団も無い。

まずは部屋の床に、机やクローゼットの下も含めて板をしいていく。この板は表面は若干スポンジのような柔らかい素材になっているのだが中に芯が通っており、上からかかった圧を部屋全体の床に逃してくれるものになっている。以前個性を使って筋トレをしていた呼人がカナダで床をぶち抜いた為に神王寺が考案したものだ。これのおかげで普通の筋トレも、そして持ってきた筋トレ器具も心置きなく使うことが出来る。

次に本棚を並べる。これでも本は減らしてきているしそもそも頭に入っているものばかりなのだが。それでも他のクラスメイトに読ませる可能性もあるということ。全部置いていこうとした呼人を神王寺が制して本をもたせた。本だけで棚1つ分はある。

本と同じぐらいに多いのがファイルだ。こつちには呼人の書いてきた絵が入っている。一枚一枚クリアファイルに入れるタイプのファイルだ。がつつり業務用である。

呼人がこれまで書いてきた絵は、正直とてつもなく多い。最初は時間もかかっていたし下手くそだったし、それにモンスター達の絵ばっかりだったが。やがて彼らの見てきた大自然の絵や、そこに生きる彼らの絵、そして彼らの目から見た人間など、様々なものを描いている。当然モンスター達の姿も単体のただ立っている姿ではなく、寝ている絵や捕食中の絵など様々だ。それこそ、外から見れば絵が大好きなのだと思うぐらいには描いている。

そして神王寺が以前用意してくれた額縁に、ファイルから適当に数枚の絵を選んで入れ、壁や勉強机の上に展示しておく。インテリアだかなんだかと言っていたが、要するに部屋を飾るものらしい。そのために、今まで描いた中でも飛び抜けて巨大な、縦1メートル、横3メートルある絵も持つてきている。こっちは額縁には入れられないので、そのまま壁一面に貼っておいた。

正直呼人も、この絵を壁に展示するというのは好きである。確かに頭の中に潜り込んでモンスター達を見たり、彼らにイメージを見せてもらえば見れる景色ばかりだが。それでもそれがふと視界に入るといのは、何か気分が良い。

続いてケーブルを壁伝いに伸ばし、部屋の四隅にスピーカーを設置する。これも自然を感じるため、と言えば聞こえは良いが、要するにモンスター達と一緒に作った彼らの世界を表現する音楽のうち穏やかなものを常に流して聞いていたりするものだ。BG

Mとも言う。実は呼人、この音楽がかなり好きなのである。

楽しいことを知らない、と以前呼人は言ったが、『楽しいことである』ということを知らないだけで、好きなことと言うのはあるのである。たとえばモンスタースター達をこっちの世界に表現するための手段であつたとしても、である。そしてシンセサイザーは棚の一角に布をかけて。

後は衣類をタンスとクローゼットにわけて放り込んで完成である。クローゼットには、以前上鳴と一緒に買いにでかけた私服を丁寧に入れておく。ちなみに出番はまだ数回程度だ。

「ん、こんなもんか」

ベッドや布団の類は、家では全く使っていないかった。いつも何らかのモンスター。例えばウルグやアイルー、あるいはジャギイなどに変身して、適当にクツションや床の上で寝ていた。そのため寝具は基本使っていなかったの、実家に置いてきたのである。ついでに人間に戻る際に回収すれば毛などは残らないので、部屋を汚す心配もない。板も敷いているので、床を傷つける心配もだ。人間の体で同じことをすると体の節々が痛んで仕方ない。つくづく人間は、もろい生き物である。

ちなみに呼人の部屋は4階の端、隣は爆豪である。爆豪には興味無さそうな目をされた。

「後は……あれか、細かい話を書いてるのは」

机の上に置かれた寮生活のマニュアルに目を通す。日中の外出は雄英敷地内に限っては自由。学外に出る場合には出る先の申請が必要である。また夜間、21時以降の外出は学外は禁止。学内においては申請があつた場合は許可するが、最大24時まで。また学外への外出に許可がいるということで学内には小規模なコンビニ寄りの売店が設置されている。ちなみに生の食材は売っていないのでそれらは学外に買いにいかねればいけない。

また朝、夕食が和食洋食から選べる。また理由付きで申請すれば量の相談にも乗るということであつた。

(先に言ってくれ)

そんな相談であれば是非させてもらいたい。早速ランチラッシュに連絡しようと決意した呼人であつた。

その他確認。連絡を終えた所で時刻は午後5時。まだ門限にはなっていないが、それでも走り込みは1時間程度で終わるものではないので動ける服装に着替えた呼人は外に出る。このあたりの規則もあつて、学校関係の行事であれば体操服か制服だが、休日、あるいは放課後などは自由であるらしい。

走り込み、更に森で個性の訓練と終えて寮に戻る頃には門限ギリギリとなっていた。新しい個性の使い方は、体を別の部位に変化させる方はある程度習熟してきた。一方で新しく部位を生やす方については、まだほとんど上手くいかない。いずれにしろまだまだ訓練が必要だ。

夕食の時間は午後10時までにということだったので、一旦部屋に戻って着替えてから食事を取りに行くことにする。と。4階に上がった所で何故かクラスメイトが集まっているところに遭遇する。

「あ、百竜、どこにいたんだ？　今みんな部屋のお披露目大会してるんだけど」

「走ってた。見るなら見ていいけど、俺夕飯まだ食べてないから一緒に行く時間はないぞ」

「あ、じゃあ先に見せてもらっても良い？」

「え、なに!?　百竜君の部屋!?　見たい!」

「なんだ百竜いたのか。ノックしても返事無いから寝てんのかと」

そう言って、ちょうど4階の切島、障子の部屋も見終えたということとで全員で呼人の部屋へと移動する。呼人と切島の部屋の間には爆豪の部屋があるが、彼は始まる前に寝る

と言っていないようになっていたらしい。

扉を開けると、あまり物の無い部屋に郷愁を感じさせる音楽が流れている。今流れている曲のタイトルは、日本語で言えば『星に駆られて』というものであり、かなり珍しい、もともとモンスター達の世界で演奏されていた曲である。新大陸という、人の住まなかった地に息づき、モンスター達の生態を調査したハンターの一団と、彼らの出会ったモンスター達を描いた曲だ。

「音楽……」

「あれ、あれなんだっけ耳郎、お前音楽詳しくかったよな？」

「あーあれはシンセサイザーだね。え、シンセって、百竜音楽やんの？」

「演奏するんじゃないやなくて作る方だけだな。今流れてるのも俺が出力した曲だ。もともと外国で聞いたことのある曲を再現したただけだけだな」

「かっこいいぜ百竜！」

そんな話をしていると、障子がとんとんと呼人の肩を叩いてくる。

「……あの絵は、モンスターを描いたものか？」

「ああ、そうだな」

「……いつか見れるのを楽しみにしている」

「興味があるなら柵のファイル見てて良いぞ。昔から描いてるから絵は大量にあるん

だ」

ほとんど表情を変えない障子の目の色が少し変わったように見えた。

「……後で見せてもらいたい」

「ん。了解」

「ねー百竜君！ このおっきい絵何?!」

「それは新大陸を一枚の絵に集めて書いたもんだな」

「新大陸って何？」

「秘密だ」

「むー！ なんでそこで秘密なの！」

「ファンタジーのイラストとか興味あったんだね百竜も」

「まあそんなとこだ」

わちやわちやと物珍しそうに見学しているクラスメイトを良い所で追い出して、サツと着替えて食事に降りる。昼間に申請しておいたおかげで、料理は取り敢えず3人前の量を届けてもらうことが出来た。多少物足りないが、今は怪我している部分も無いので明日食べれば保つだろう。

食事を手早く済ませた後は共用の浴場で汗を流して部屋に戻る。途中で部屋の見学を終えたクラスメイトが何やら投票をしているのが見えたが、呼人はそれに参加するわ

けでもないので一足先に部屋に戻る。

と、部屋に戻つてすぐに障子が尋ねてきた。

「……今、時間はあるか？」

「見に来たのか。良いぞ、特に忙しくもしてない」

「……ありがとう」

出せる茶などがあるわけでもないので冷蔵庫から2Lの茶を出して紙コップとともに障子に手渡すが、小さな机すらもない。そのことを障子に断り、呼人は椅子に座る。

「そう言えば、ベッドや布団の類が無いが……」

「使つてないからな」

「眠れるのか？」

「いや、寝る時はモンスターになつて寝てる。あれなら岩の上だろうが眠れるからな」

呼人がそう言つて、実際に小さなトビカガチに変身して床の上で寝る姿勢を作ると障子は納得したといった表情を見せる。

「なるほど。それならベッドは必要なのか」

「そういうことだ」

「だが、折りたたみの机ぐらいはあつても良いのではないか？」

「そうだな。人が遊びに来るとは思つてなかつたから考えてなかつたけど今度買つてお

く

その後呼人はしばらくパソコンやタブレットで音楽を編集したり、神王寺から言われていつか作ってみようと思っていたMADやMVについて調べたりしており、障子は絵を見ては目を輝かせていた。

MADやMVについて神王寺が触れたのは、呼人が絵に続いて3DCGで動くモンスター達を映像にしようかと考えていたからである。そんな手間なことをするぐらいなら、山奥などの場所を使ってモンスターになつて映像を撮り、それを編集すれば良いのではないかと言われたのだ。それも1つのアイデアとして呼人は調べてみているのである。

やがて夜も遅くなつて障子は自分の部屋へと帰つていった。じっくり見ていたからか、ほとんど見れていないようでもまた来ると言うことを言っていた。

第53話 必殺技とは

「昨日も言ったが直近の目標は『仮免』の取得だ」

「はい！」

「ヒーロー免許は人命に直接関わる重大な資格だ。たとえ仮免であろうとな。当然取得の為の試験は厳しく、仮免ですら合格率は5割を切っている」

「まじか……」

ボソリと誰かがもらした所で、相澤は教室の外に手招きをする。

「そこで君らには一人2つ以上」

——必殺技を、作ってもらう!!

『学校ぼくてヒーローっぽいの来たあ!!』

相澤の言葉に合わせるように、ミッドナイト、セメントス、エクトプラズムの3人の教師が教室に入ってくる。

「必殺トハスナワチ必勝ノ型テアル！」

「徹底的に染み付かせた技・型は他の追隨を許さない。戦闘は、どれだけ自分の得意なことを押し付けるか、だよ」

「技はヒーローの象徴！ 必殺技がないヒーローなんて一般的に見ても少ないよ！」
「詳しいことは体育館γで説明する。コスチュームに着替えて集合だ」

体育館γ。通称TDL。セメントス考案の、生徒一人ひとりに合わせて地形や物を生成できる施設である。セメントスの個性によつて操作できるようになっている。

「ヒーローは、ヴィラン、事故、天災……あらゆるトラブルから人々を救うのが仕事だ。資格試験では当然その適正が審査される」

必要とされるのはただの強さだけではなく。

情報力、判断力、機動力に戦闘力、更に直接は現れないが、コミュニケーション能力に人気につながる魅力。そして仲間のヒーローや人々をまとめる統率力。それらが、毎年試験では違った形で試験され、その形を予想するのは困難であるため地力を高めることが求められる。

だが、強さが重要ではないというわけでは断じて無い。

「その中でも、ここからのヒーローにとつて戦闘力というのは特に重視されるものになるよ。自分の得意を押し付けられる技の有無は、合否に大きく影響する」

「状況や相手に左右されること無く安定した行動ができれば、それは高い戦闘力を持っていることの裏付けになるよね」

「必殺技ハ何モ攻撃ダケデハナイ。例エバ飯田クンノ『レシプロバースト』。超速移動ソノモノガ脅威デアル為、攻撃スル如何ニ関ワラズ必殺技デアルト言エル」

「なるほど……！ 攻撃に活用するか移動に活用するかは関係ない、ということか！」

「『これをやれば有利になる』っていうのを作っておこうってことか」

自分のそれを必殺技と言われて感動する飯田を見て砂藤が呟くと、ミッドナイトがそれを肯定する。

「そー！ 先日活躍したシンリンカムイの『ウルシ鎖牢』なんか模範的な必殺技ね。わかりやすいしあれをしたら勝ちだってわかるわ」

「合宿での『個性』伸ばし』は、この必殺技に向けてのプロセスだった。これから後期始業までの10日あまりで、『個性伸ばし』と『必殺技開発』を合わせた圧縮訓練を行う本来であれば『個性伸ばし』↓必殺技開発』であったところを、時間が無くなったので同時並行で行うということだ。当然ハードワークになる。

「それと。個性の伸びや開発する技の性質に合わせてコスチュームを改良することも並行して考えるように。サポートアイテムの開発も視野に入れておけ」

——プルスウルトラの精神だ。乗り越えてこい。

必殺技開発と、個性を伸ばすための訓練が始まる。ちなみに正直呼人は必殺技という概念がわかっていないので、そこから学ばなければいけなかった。

皆が必殺技の開発に励む中、呼人はそれを眺めながらぼうつと考えていた。

(尾白ほんと立ち回り上手くなったな。怪我させないで仕留めるのは絶対無理だ。上鳴はもうサポートアイテムは一式完成してるみたいだし……障子は複腕で更に複製量を増やして戦闘か。慣れてるなら死角なんて無いもんな)

そんなことを考えていると、頭をこづかれる。すつとそれを躲して、呼人は叩いてきた相手を振り返った。

「何ヲボウツトシテイル？」

「必殺技っていう概念がよくわからなくてどうしたものかと」

「何ガワカラナイカ話シテミロ」

「俺の中では、全ての行動を組み合わせて相手を仕留めるつもりで動いているので、必殺技とは考え方が間違なんですよ。相手、状況に合わせて止めを刺す技がただの陽動にも

なるし、その逆もある、っていうつもりで鍛えてきたので。だからどういふのを必殺技として扱うのかと見てました」

「ナルホド。全テノ行動ヲ必殺レベルマデ高メルノツモリデ動イテイルト」

「あ、そんな感じですよ。モンスターの力も当然のものを利用して戦っているつもりなので」

モンスター達の行動もそうだが、それはあくまで彼らの生態を利用しての戦い方であり、人間が殴る蹴ると攻撃をするのと何ら変わらず、彼らとイメージを交わしている呼人にとっては必殺技でもなんでもない、ただの行動なのだ。確かに一部の強力なモンスター達には、そういうのが相応しいのではないかと言うような攻撃もある。ただそれは、もう相手を制圧するとかそういうのではなくて、街を消し飛ばすとかそういうレベルの話になる。とてもではないが使えるものではない。

「必殺技ハ、戦闘力ヲ強化スル面モアルガ、象徴スルトイウ面モアル。例エバオールマイトハ、ソノ強力ナパンチヲ必殺技トシテ名前ヲツケテイル。他二モ、百竜クンガ職場体験ヲシタミルコハ、踵落トシナド一部ノ蹴リ技ヲ必殺技トシテ名前ヲツケテイル。特殊ナ個性ノ扱イダケテナク、攻撃ノ型ナドモ必殺技ト呼ベル。君ノ場合ハ、変身スル事自体ガ必殺技ト呼ベルナ」

「なるほど……」

「個性伸バシテ行オウトシテイタ新シイ使イ方モ、習熟スレバ十分必殺技トナリウルダロウ」

例えば、手首から先をオドガロンの口に変化させて噛みつかせ、『アームフアング』などと言った必殺技として扱う事もできるのだ。何もド派手な、一撃で仕留めるものだけが必殺技ではない。得意とする行動に名前をつけるのもまた必殺技である。

エクトプラズムの説明に呼人が考え込んでいると、セメントスの作った岩山の上の方で大きな爆発音がし、叫び声が聞こえる。

「百竜！ てめえ暇なら相手しろや！」

「あいよ！ すいません、行つてきます」

「ム、シカシ分身ヲ使エバ良イダロウ」

「体育祭のときにあいつの全力を受けきつたので、多分それを破る方法を考えたいんだと思います。俺は変身する事自体が必殺技なので」

「……マタ後デ話ソウ」

「わかりました」

エクトプラズムに断つて呼人は爆豪の待つ岩山の上へと跳び上がる。エクトプラズムの分身は、数自体は出せるもののそれぞれの強さは、本人の力量を抜きにすれば人間の範疇を出ず爆豪の爆破であれば十分に仕留めきれぬ。それよりも最大火力である

『榴弾砲着弾』ハウザーインパクトを受けきった呼人と戦った方が見えてくる物もあるだろう。

エクトプラズムも、爆破された分身に変わって見張り用に新しい分身を送ってくる。「怪我させるから端から化けもんになっとけや」

「俺ならいくら怪我させてくれても構わんぞ。人間に戻れば怪我はなくなるからな」
「端から遠慮するつもりはねえわ」

鼻を鳴らしながら言う爆豪に、殺すつもりかよと呼人はぼやく。獣化系の個性でも中には怪我がそのまま肉体に反映されるものもいるのだ。

だが爆豪はそれ以上何も言わず、いきなり腕を後ろに向けて爆破で加速すると、呼人に向かって飛びかかってくる。応えるように呼人も空中に向かって飛び出した。そして爆豪の高さまで跳び上がると空中で迎撃する。

蹴ろうと大きく振り上げた足は、爆豪が空中でもう一度爆破を行って方向転換したところで躲された。

このあたりが、呼人が爆豪を強いと言う所以である。天性のセンスか思考で組み立てたものか知らないが、呼人が戦闘中に考えていることと同じようなことをやってくる。尾白とはまた違うタイプでやつかいだ。

そして、斜め上からの爆発。その爆風に耐えきるために、呼人は足を振り上げて爆豪に両足を向ける。以前体育祭での戦闘終盤でもやったことだが、爆発をなるべく狭い面

積、あるいは尖った面で受け、絶対に胴体などの平らな面では受けない。平らな面で受けても一撃でやられはしないが、体勢は確実に崩れるし動きも数瞬とはいえ止まる。体育祭の時には爆煙の中にのまれることで爆豪からの追撃は回避されていたのだが、今はそんなことは無いだろう。

更に、呼人が着地する前にもう一度爆風が放たれる。が、今度は爆煙の中に目測を誤ったようで、若干呼人の体より上に放たれてくる。それを受け始めた直後に呼人は体勢を整え、その爆風で地面に押し付けられる形で着地する。

そして爆風の中から飛び出して爆豪に殴りかかった。

「くそ耐久がー！」

「離れたところからぶっ放して俺がやれるかよー！」

もちろん数発連続で胴にもらったり、数十発もらったりすれば話は別だが。だが1、2発、ぶっ放された程度で仕留められるほどやわではない。

それは爆豪も承知の上なのか、数度の爆発の後呼人の顔に向かって手を伸ばしてきた。左手の派手な爆発の影から右手が伸びてきたが、呼人はそれにも反応して手を弾こうとする。

そこで爆豪はニヤリと笑った。呼人が気づき、防ごうとするとところまで読んでいたのかその防ごうと伸ばした腕を掴み取る。掴まれたと認識した瞬間、一步横へと踏み込ん

だ呼人は掴まれた腕を更の上に上から掴み直し、思い切り引ききって投げ飛ばす。

結果。呼人の腕はゼロ距離の爆発によって焼け、爆豪は空中に放り出された後爆風で勢いを殺して下に着地する。

その後、爆豪は何を思ったか少しの間飛び上がってこなかった。

一方騒がしいのは、いつのまにか始まったクラストップレベルのやり合いに目を奪われていたクラスメイト達だ。

「爆豪荒れてんな相変わらず」

「あれを耐えられるようになりてえぜ！」

いつもどおり爆破マシマシの爆豪に瀬呂や切島が戦々恐々とする一方で、放課後訓練組は冷静にその動きを分析する。

「……真つ向から殴り合うか」

「やっぱ強いな百竜。耐久力だけじゃないよあれは」

そして他のクラスメイトも、負けないと意気を高めるものばかりだ。

「おー爆豪と百竜激しすぎ！ 私も負けないし！」

「芦戸さん、自分のペースを守らないといけませんわ」

「わかってるよヤオモモー！ やる気の問題！」

なかなか戻ってこない爆豪にどこか痛めたかと呼人が見ていると、やがて険しい顔つ

きで戻ってくる。

「……てめえ、1回的になりやがれ」

「戦闘じゃなくて、か？」

「……くそが黙ってのになつとけつつんだよ！」

不機嫌そうにキレているが、いつものような凶悪な目つきではなく少し目を逸し気味なのは、流石に申し訳ない依頼だと思っっているからだろう。

「いくらでも。言っただ通り、この状態で怪我した所で人間の体には反映されないからな」
その後、平らな部分の中心付近に突っ立った呼人に向かって爆豪が数発の爆発を放つ。流石に飛ばされそうになるので呼人は体勢を低くして耐えようとするが、爆豪はそれが気に入らないようだ。

「避けんてめえ！」

「その威力をまともにくらつてると飛ばされる」

「あ、!? てめえ効いとつたんか！」

「そりゃ物理的には飛ばされるわ。体にダメージがあんのと飛ばされるのは話が違うだろ」

例えば金属板などが、爆風で飛ばされても表面があぶられるだけで折れ曲がったり割れたりしないのと同じで。むしろその軽さがダメージを軽減してすらいふこともある。

「……もういい大体わかった。セメントスー！」

不機嫌そうな爆豪がセメントスに向かって叫び、岩山から飛び降りていく。何かヒントを見つけたらしいが、はぶられた呼人は放置である。お役御免と言ったところか。

呼人としては、爆破を使うならば直付けで爆破したほうが良いのではないかと思う。爆発が起きる地点が接触していたほうが良いとも言える。離れたところからの爆風だと拡散するし、備える余裕が出てくる。そもそもモンスタースター達の中でも爆発を操る者達には、爆発そのものではなく爆発性の物質を相手に叩きつけてゼロ距離の爆発を発生させる方が多い。

その点爆豪の爆発地点は、必ず彼の手元となる。であれば、呼人のように頑丈な相手であればたぶつ放すだけでなく何らかの手段を取らなければいけない。

「手ハ空イタカ？」

「エクトプラズム」

そして、置いていかれた呼人のところにも、エクトプラズムの分身がやってくる。

「必殺技ハヒーローノ象徴トモナル。気ニ入ラナクトモ、既存ノ行動ニ名ヲ付ケルダケデモシテ後ハ個性ヲ伸バスコトニ専念シヨウ」

相澤や他の教師とも相談した結果、そもそも変身系の個性を持つヒーローには『変身すること』そのものを必殺技とみなす者もいるということ、それを必殺技として扱え

ば良いのではないかという話が出た。

「なるほど。じゃあ例えばこの状態をビースト、でその一段階上のこれをハイビースト、完全に変身する状態をフルビーストとか名付ければ良い感じですか？」

「モウ少シ名前ハ捻ツタ方ガ良イト思ウガソノ通りダ。後ハ、入試デ見セテイタ様ナ特殊ナ変身ニモ名前ヲ付ケルト良イ」

「入試……？」

「爪ヲ刃ノヨウニ発達サセテイタダロウ」

「ああ、これのことか」

右手を変身させた呼人は、その爪を変化させて爪の形状から完全に刃と言える形状に変化させる。これも、技と言えば技だ。そういう意味で言えば、呼人の個性の使い方は様々な必殺技となりうる。

「じゃあ新しい個性の使い方、一箇所に鱗を重ねて防御力をあげようと考えているんですけどそれも必殺技として扱っていいという事ですか？」

「何モ、君ノ言ツテイル通り全テノ行動ヲ高メルノデアレバ全テニ名前ヲ付ケル必要ハ無い。特ニ一部ノ、頻繁ニ使ウモノニダケ名前ヲ付ケテオケバ良イ」

「なるほど」

必殺技は性能もそうだが、その見た目も重要となる。// 象徴// の文字の通り、あの

ヒーローならばこの必殺技、という図式を成り立たせるからだ。そういう意味では、あまり目立たない鱗を重ねて防御力を高めるような方法よりも、コスチュームを着た人間の状態から一気に変身する方を必殺技として扱ったほうが良い。

ひとまず必殺技の目処も立ったということで、呼人は腕をオドガロンの頭に変化させる。半月ほどの訓練もあって、変化させた瞬間に原寸大ではなく4分の1ほどの大きさまで縮めることが出来ている。それでもまだ少し大きすぎるのであるが、そこは要練習で調整が必要だ。

「器用ナ使イ方ヲスル」

「相澤先生が発想をくれたので。もともとこういう発想は全然無かったんですよ」

多様性もそうだが、していることがばれないというのは良い。例えば変身してしまえば簡単にばれるが、普段は体の前面にある器官を背中に生成して敵に気づかれないうちに攻めるということも出来る。まだ全然身につけていないので『使う』という意識が先行してしまうが、もっと、それこそ今までやってきた『変化』と同じように使えるようになれば、自然に戦闘にも組み込んでいけるはずだ。

「ソウ言エバ」

「何か？」

「翼毛扱エルトラシイガ、飛バナイノカ？」

「空は誰も届かない領域なので。戦闘演習とかでは飛ぶつもりは無いです。救助演習もイメージトレーニングで十分なので」

「周リカラスレバ、貴重ナ経験ニナルト思ウガナ」

「まあ、まだ変身しなくても追い込まれない程度なので。飛ぶ必要性に駆られれば使うかもしれないです」

もうすでに、雄英の教師には呼人の使える力の事は知れている。そして、なるべくなら出し切りたくはないという呼人の意思も。そのため、呼人も状況次第という答えを返していた。

「B組ニハ空ヲ移動出来ル生徒ガ複数イル。手合ワセスルノガ待チ遠シイカ」

「取り敢えず対空、対高速移動も兼ねてロープを使った戦闘も鍛えてます」

コスチュームの両手には、以前は無かった先端に小さな金属の器具がついたロープが手首から肘にかけて巻きつけられている。戦闘の際には拳や蹴りに加えてロープで拘束する事も出来るし、先端を軽く解いて持つて投げれば、ロープを腕から外しておかなくても自然と飛び出していくような構造になっている。まだ連続で扱える領域には達していないし最近はその扱いの方に注力しているが、それなりに練習もしている。参考にしたのはやはり、期末試験などではつきりと見ることの出来た相澤の戦い方だ。

「……頑ナダナ」

「出来る事は増やしたいので」

「本筋ハ見失ワナイヨウニナ」

本筋と言えは、彼らの領域に達したい。あるいは、人間の形を取ったモンスター達に負けたくない。だが、まだ戦闘に長けたモンスターたちには一対一では勝てないし、もともと草食性だったモンスター達も人間の形を取れるようになってから鍛えたようにいい勝負をさせられている。恐らく呼人に才と言えるものはあまり無いのだろう。それを、ひたすら訓練と試行回数で補っているだけなのだ。

第54話 自主訓練

「百竜ー!」

圧縮訓練が始まって数日。呼人がいつものように走り込みに出ようとしていると、上鳴に声をかけられた。

「どうした?」

「あ、もしかして今から走りに行く予定だった?」

近くまで来てようやく呼人の服装に気付いた上鳴が申し訳無さそうにそう言うてる。

「まあそうだが。用事があるなら聞くぞ?」

「あー、えつと手が空いてるなら訓練付き合ってくんねえかなって思つて。悪い忙しかつたよな」

他の人に頼んでみるかーと上鳴が離れていこうとするので、呼人はそれを引き止める。

「良いぞ。別に」

「うえー、え? 良いの?」

「訓練だろ？ 走り込み以外に鍛える方法が無いわけじゃないからな」

「マジか助かる！ んじゃTDLに集合な！」

「使用許可はもらってるのか？」

現在の時刻は午後5時。A組のTDLでの訓練は基本午前中であり、午後はB組が使っている。ただ午前が5時間程度の使用と考えると、午後のB組ももうそろそろ終わるのだろうかということは予想できた。

「バツチリ！ 模擬戦は駄目だって言われたけど個性の訓練ならありだつてよ」

「そうか。ならコスチューム持っていつて向こうで着替えるか」

「俺もそうする！」

その後一旦それぞれ部屋に戻り、寮の入り口で合流して外に出る。自主訓練も午後間に終わった他のクラスメイトは談話スペースなどでだべっていた。圧縮訓練というだけあって体力も個性もかなり酷使するものであり、皆疲労を感じているようだ。

「訓練なら、他のやつも誘った方が良かったんじゃないか？」

「あー、いやー、驚かせてえなつて思つてよ」

まだ戦闘演習でもまともにサポートアイテム使ったこと無いし、と上鳴は言う。確かに彼が新しいサポートアイテムを開発してもらつてから学校は3週間も無く、その間救助演習や個性なしでの戦闘訓練、あるいは様々な状況に合わせた演習が多かつたため、

サポートアイテムを万全の状態で使うことはなかったのだ。

「なるほど。それならまあ知ってる俺達だけになるか」

「それにお前なら放電くらつてもダウンしねえだろ？」

「確かにターゲットにするにはいい相手だわな。てことは狙う練習か？」

「そゆこと」

他の奴に放電当てたらしびれるし疲れさせちまうからなあ。そう言う上鳴は、やはりいつもどおりのおちやらけた様子ながらも、クラスメイトのことをよく考えている。

「そう言えば、あっちの方は？ やってるんだろ？」

あっち、相澤先生の方、と呼人が尋ねると、上鳴は自慢げに頷く。

「へへっ、そっちも練習中。でも相澤先生に『どっちを優先すべきかは自分で考えろ』って言われてたからこっちは優先。あっちはあくまで、＋アルファ枠だからな」

「まあ、たしかに個性を生かした戦闘力で言えばサポートアイテムを使えるようになるのが先か」

「そゆことー！」

TDLについた2人は、TDLの更衣室で着替えた後TDLにはいる。B組は午後訓練を行っているためか、まだ半数以上が残っており教師陣も訓練を手伝っている。

「おお、まだいっぱいいいんね」

「巻き込むなよ」

「あたりめーよ。そんなためのサポートアイテム」

セメントスに一言声をかけて、適当にちよっとした障害物から高い壁までが乱立したエリアを作ってもらおう。

「よし、んじや百竜、とにかく避けてくれよな。俺が当てる練習すつから。それに見てから意見ももらいてえしよ」

「了解」

ヨーイ始め、とエクトプラズムの分身が言うと同時に、上鳴は左右に動きながら複数のType-Bを右手から打ち出す。そのうちの1つに向かって指向性の放電を放ち、呼人がそれを回避すると更に連続で放電して行く先行く先を狙ってき、呼人をそれを回避し続ける。そして呼人が回避に移って目線が切れたと同時に、左手のType-Aを打ち出して隙を狙ってきた。

呼人は基本的に、上鳴の右腕が示す先から逃げるように動いている。そこで左手の、『腕を向けなくても誘導する』という性能を利用しようとしたわけだが。

「やっぱ当たらんね」

「精密な狙いはまだきつい感じか？」

「そうなんだよなあ。後やっぱバレてる相手には、手を向けるだけで警戒されるからB

の方は避けられるわ」

「そもそも右手の方、直進するって時点で突っ立ってる相手に当てれないよな？」

「ああ、それ。それ俺も思ってた。だから最初も動きながらばらまいたんだしさ」

「勢い殺して曲射出来るようにしてもらうか、自力で投げるかするか？」

「ちよつと相談してみるつもり。自力で投げるのは練習がいるよな」

「まあ打ち出すよりは難しいわな。でも投げられるようになったら、フリスビーみたいに曲げて投げて空中にある間に放電して狙うみたいな——」

「俺にそんな曲芸は無理じゃー！」

難しいことを言っているのはわかるが、1人で当てに行くとなるとそれしかないのではないだろうか。放物線を描くように飛ばせばある程度は出来るだろうが、やはり相手の後ろに自力で設置できないと話にならないし、普通危険だと考えれば相手は避けてしまおうだろう。

「後は、殴り合いしながらうまく設置したやつを使って戦うとか？」

「だよな、設置しといて俺が移動するってのも考えた方が良い気がする」

「じゃあ結局近接戦か？」

「うーん……」

「まあ『人間スタンガン』から追撃するのは結構ありな気がするけど、相手が増強系とか

だと痺れさせる前にお前がぶっ飛ばされるよな」

「うえー……攻めが苦手だな結局」

「あのBの方で狙う先を勘違いさせてくるのは結構ありだとは思ったぞ」

「だろ！ あれは結構自信あつたんだよ！ お前ならAだと手の動きで逃げると思ったしや」

その後、見ていたエクトプラズムも含めて少しの間動きの確認や狙う方針の確認などをして。気がつけばB組の生徒に注目されていた。

「なんか、見られてね？」

「さあな。そろそろ次やるぞ」

「うえーい」

2回目も、呼人が被弾したら終わりというルールで行うこととなる。そして今度は上鳴は、適当に3個ほどType Aを設置した後、呼人に向かって突っ込んでくる。そしてほとんど周囲に向かわない小規模な放電。呼人はトビカガチの体毛を全身にめぐらして電気は一切効かない状態にはなっているが、被弾したら負けなので回避する。上鳴は放電の扱いになれたのか突き出した右手や蹴った足などだけからの確に放電してくる。放課後の訓練に加えて相澤との訓練で体をよく動かしているからか、近接戦での立ち回りのも以前の比にならないほど速い。

そして呼人の背中に悪寒。咄嗟に勢いよくしゃがみ込むと、体は全く違う方向を向いたまま右手を肩越しに呼人の方に向けた上鳴の手から放たれた電撃が髪の毛を掠めていく。

「当た、った？」

「掠った」

「やりに！」

掠めたと言っても、しつかり呼人の体毛には蓄電が行われている。当たっていたのだ。直前に伸ばされた左手によつて、ターゲットとの直線上まで誘導されていたらしい。

「体を向けてこないのは上手かったな」

「だろ!? 肘から先で狙えるからよー、それ狙ってみた！」

「やっぱり踏み込んできた方が何かとめんどくさいかもな」

「うーん、だよな……よし！」

何か決意を秘めた表情で上鳴が拳を握る。

「どした？」

「やっぱり捕縛布の練習ちゃんとしてくる」

「おお、頑張れ」

「あっさり！ もうちよつとなんかねーの!? なんで? とかさー!」

「だいたいわかる」

「頑張るよ!」

ともあれ、上鳴が厄介な相手になったことに変わりはない。非接触でダメージを出せる上に、爆豪のそれとも違って本人には反動が無いので好きな位置から狙ってくる。更に捕縛布を使えるようになり、捕縛布を通しての放電や捕縛布にくっつけたターゲットを狙つての放電を自由に使えるようになられると、半径10メートルほどのテリトリーを完全に支配されてしまう。まあその領域に至るにはかなりの時間がかかるのだろう。

そんな茶番騒ぎをしていると、上鳴と多少仲の良いB組のクラス委員長が話かけてきた。

「上鳴、あんたも自主練?」

「お、拳藤。そそ、自主練自主練。必殺技の開発中よ」

B組の委員長の拳藤一佳。個性は手を大きくすること。他にも彼女と一緒に自主練をしていた鉄哲やB組の女子陣も興味深そうに2人の方を見ている。

「熱心だね」

「まーなー。そつちももう全体での訓練は終わってるんだろ?」

「うん。こっちは全体の後そのまま自主練が出来るからね。先生たちも付き合ってくれ
るし」

2人の会話が弾んでいるようなので、呼人は少し離れた所で1人上鳴の戦法について
考えていた。呼人の想定であれば、上鳴の戦い方は非常に厄介かつ一方的ものになる。
自分にも似たことが出来るだろうか、と。

放電を誘導するという意味で言えば、一部モンスター、例えば針纏竜の辿異個体なん
かが、その特性を持つ針を有しており呼人も扱うことが出来る。ただそれは『飛ばす』と
いうのが精一杯で、捕縛布を使ってターゲットを振り回す上鳴のように自由に扱えるわ
けではない。他の使い方例えば風や竜巻を操ってそれに針をのせ周囲を飛ばすとい
うことも出来るだろうが、それはそれでまどろっこしい。風そのもので打倒すればいい
からだ。まあ室内であれば複数針の設置は有効であるし、周囲への影響を考慮するとい
う意味であれば十分検討に値する。

(今度試してみよう)

せつかく思いついたことなので、それも試してみようと呼人は頭の中にメモをしてお
く。針纏竜の針に、鋼龍その他の風、そして雷撃を操る竜の電気。それらを自在に組み
合わせる事が出来るのも呼人の強みだ。

そんなことを考えていると、上鳴に呼ばれたので意識を現実に戻す。

「百竜ちよいこつち来て」

「ん、ああ」

言われるままに行くと、拳藤と対峙させられる。

「拳藤、こいつが百竜呼人、うちで一番のやつね」

「何の話だ？」

「で、こつちがB組の拳藤一佳ね」

「よろしくね」

「ああ、よろしく」

突然紹介されて困惑する呼人に対して拳藤は朗らかに握手を求めてくる。それに応じながらも呼人が上鳴の方に目を向けると、ぐつと親指を立ててサムズアップされた。いや、何なのかを教えてほしい。

「ごめんごめん。私が百竜くん？ と話してみたかったからさ」

「そう言うことなら、別に呼び捨てで良いぞ」

「ありがとね。改めてよろしく、百竜」

「よろしく」

彼女が話しかけてきた理由は100%好奇心というか興味である。この場で話しかけてきたのも周りのクラスメイトにせっつかれたからであり、半ばクラスを代表してい

るようなものだ。

爆豪は、良くも悪くも粗暴な様子が人目をひき、ヒーロー科どころか一年全体で有名である。轟も、その強個性とイケメンっぷりで話題によく上がる。そんな中呼人は、体育祭では優勝したし入試でも一番だったわけだが、なぜか全然話題に上がらない。個性に派手さが無いから、あるいは轟、爆豪のような容姿、言動に特筆すべきところが無いから。

どちらにしろ、同じヒーロー科として興味を持つB組にとつては、むしろ興味を掻き立てられるものだった。特に、騒がしい生徒やB組と親しい生徒から『凄い』という伝聞が伝わっていれば。

「なるほど。そんなことが」

「そんなことがつてお前のことだからな」

「俺にどうしろと」

「この機会にお話したら？」

残念ながらなんとなくの雑談は苦手である。戦い方とか、勉強とか、話題が無いとそれほどこしゃべれないのだがそこはヒーロー科。共通の話す話題なんて山ほどある。

特に当たり障りのない話し、例えば体育祭の話とか、職場体験の話とか。そんなことをチラチラと話した後、話はコスチュームの話へと移る。

「そのコスチュームは、どういう目的で作ってるの？　なんか、不思議なデザインしてるけど」

「見た目はどうでも良かったから昔見たことのあるデザインをそのまま持ってきたんだけどな。若干浮いてて後悔してる」

「え、お前そんな事思ってたの？」

「流石にデザインの方向性がなんか違うなってのはわかるぞ。まあ一応ヒーローとはわかる？　から良いが。わかるよな？」

「流石に私服でそれ着てるやつは居ないだろ」

「うん、いないと思う」

そう言つて笑う拳藤のコスチュームは、武術家というか拳法家のようなコスチュームである。尾白が和だとすれば、中と言ったところだ。

「まあ、素材さえ同じなら何でも良いから今度デザイン引きなおして事務所依頼しとく」「自分でデザインしてるんだ？」

「知り合いが懇意にしている事務所があつてそこに依頼してるんだ。でもそうか、絶対欲しいところだけ箇条書きにしてデザインは押し付ければ良いのか」

「まあ『こんな感じの見た目』とかはみんな書いてると思うけど。でも全部自分で決めるって珍しいよね」

「見た目はほんと何でも良かったしこれがちょうどポーチとか含めて都合が良かったから全部真似したんだよ」

「ちなみにお前が絶対欲しいものってなんなの?」

「ポーチは一式ほしいな。容量的にも今のでちょうど良いし。後はあちこちのホルダーとか……そう考えると、上鳴とか拳藤みたいにシンプルな見た目だと多分困るんだよな」

「なんだかんだ適当に決めたコスチュームのデザインだが、もともとの用途が様々な小道具を付けての探索などとあってかなり呼人の嗜好に合致しているのだ。」

「使いやすいならそれで良いんじゃない?」

「そうだな。まだしばらくはそのまま使うか」

個性を使うという観点であれば、普段ランニングしている半袖半ズボンでも何も問題はない。ただコスチュームになりえないよねという話で。

「ところでヤ」

そこで拳藤が話題を変えるように切り出す。

「模擬戦やってみない?」

「はっ。」

「いやみんながA組一の実力者とやってみたって言っさ。私も結構興味あるしどう

かなって」

どうと言われてもと。呼人は視線を上鳴に向ける。その上鳴は、B組の可愛い女子たちに興味津々の様子でそっちに行ってしまった。

「一応この時間での模擬戦は見れないからやめておけて相澤先生に言われてる」
「他の先生方に見てもらったら良いんでしょ？」

「……多分、良いんじゃないか？ まあ突発的にやったりすると相澤先生に怒られそうな気がするけど」

そんなことを言っていると、ちょうど良く相澤がやってくる。プレゼント・マイクと一緒に自主練の様子を見に来たらしいが、上鳴が用事があったようで話しかけていた。

と。拳藤と呼人の会話を見守っていたB組の1人、取蔭が相澤に声をかけた。

「相澤せんせい、百竜と模擬戦してもいいですか？」

「……俺はすぐに戻るから見れない」

「デハ私が見テオコウ」

「俺が開始の合図してやるぜ——！」

取蔭になつと笑われマイクに大声で言われてしまえば、断る道理も無い。

「まあそういうことなら」

よつしやとガッツポーズする取蔭を呆れ半分微笑み半分で拳藤が見る。と、相澤と話

し終えた上鳴がやってきた。

「なに、百竜模擬戦すんの？ 俺駄目って言われたのに！」

「見てくれる相手がいらないからってことじゃないか？」

「でも他の先生がいるけど百竜とって言ったら駄目って言われたぜ？」

「んー……わからん。まあなんかあるんだろ」

「えー。まあ相手になれるとは思えねえけどさ」

「相澤先生とは何話してたんだ？」

「訓練の話。また後で話すわ」

大方相澤と話していたということは捕縛布関係の話なのだろう。

「ごめんね百竜、こっちの都合で」

一方クラスメイトの世話を見るタイプの姉御肌な拳藤は、クラスメイトのちよつとした暴走に申し訳無さそうに笑う。

「俺も試したいことがあるから別に良いよ」

「そう言ってくれると助かる。つても、どう模擬戦する？ ここだと運動場とかみたいに障害物ないし……」

「何でも。任せるよ」

かくして、臨時ではあるがB組との交流会が始まる。

第55話 対B組個人戦

B組との模擬戦が決まり、セメントスにステージを作ってもらおう。TDLにはもともとは障害物が存在しないということで、体育祭のときと同じように平らなステージでの模擬戦となった。

「準備良いよ。地面が硬いからそれだけ気をつけてね」

『アナウンスはいるかあ!』

「いないです」

『いるいるー!』

『んじや張り切つていくぜ——!』

プレゼント・マイクが来てしまったことで半分お祭り騒ぎのようになってしまった。相変わらず騒がしいというか、エンターテイメントを忘れない教師だ。

「おし、なら最初は俺が行く!」

基本のルールはタイムマン。勝利条件は体育祭に準拠、ただし故意に大きな怪我をさせた場合は反則負け。また一応のステージは設置してあるが、ヒーロー科の模擬戦ということで場外での負けは無し。ただし飛び出したら一度止めて仕切り直しということに

なっている。

そもそも相手は拳藤じゃないのかとか、お前はたしか鉄哲だったなとか思うことは色々あるが、特段そのことに興味があるわけではないので呼人も黙ってステージに上る。『頑張れー』なんて呑気なことを言っている上鳴は取り敢えず後でしばいておく。

「A組には負けねえぞ！」

そう言われてなんと答えれば良いのか。クラスメイト相手ならば軽く煽るような軽口も言えるのだが。『よろしく』と短く返しておく。ステージのすぐ外では、体育祭の時よりも遥かに近い距離で上鳴とB組の面々が見学している。ぶっ飛ばしてカチ当てないようにしなければと、呼人は最新の注意を払うことを決める。

『YEEEAH!! 準備は良いかあ!! READY——STAAAAARTOO!!』

始めの合図と共に鉄哲が呼人に向かって突っ込んでくる。確か呼人が覚えている限りでは彼の個性は切島のそれに類似していて体を硬化化させるものであったはず。体育祭では切島と殴り合って相打ちになっていたもので、硬度も恐らくそれほど変わらず、また耐久限界も何らかの形であるはず。

そもそも硬化系の個性は、呼人の予想では体内は硬化していない。血まで硬化すると大変なことになるからだ。そのため打撃の衝撃自体は内部にも通るはず。あるいは超常の個性らしく『血などまで固まった』上で『問題ない』という超常現象になっている

可能性もあるが。いずれにしろ、殴ってみればわかる。

「おおおらああああ!!!」

叫び声を上げた鉄哲の拳をするりと躲して懐に潜り込み、硬化して耐えるであろう相手に対してその顔面にはぼ真下からフルスイングのアッパを当てる。やはり当たった顎部分だけでなく首や体全体まで硬化しているようで、大きくのけぞったりするのはなくそのままの姿勢で数メートル宙に浮いた。

切島もそうであるが、この硬化系二人組は無意識のこわばりに対して全身が固くなってしまうという特徴を持つ。その分消費も激しくなってはしまいが、こういう、本人が反応しきれない攻撃から身を守るのには役立つ。

だが、宙に浮いた相手はかっこうの追撃対象になる。鉄哲が体を固めて呼人の方を見ていない間に後を追うように跳び上がった呼人は、その腕とコスチュームを掴むと着地の勢いそのまま地面に叩きつける。普通の相手ならしないが、彼ならば大した怪我にはならないだろうという予想が出来ていた。

案の定、叩きつけられた勢いで地面を砕きながらも鉄哲は普通に立ち上がった。地面に思い切り叩きつけられたことであまり良い気分では無さそうではあるが。

「強え……けど負けねえぞ!」

そして再び自分を鼓舞すると呼人に向かって突っ込んでくる。切島もいたく気にし

ていたが、2人の個性はただ硬くなるだけ故に、自分よりも動きが上の相手とやるのはめつぼう不得意だ。そもそもが動きについてこれない可能性すらある。

現在もそうで、鉄哲の本気に固めた腕や拳を呼人は受けきり、良い所で両手を跳ね上げて上体をフリーにさせる。そして半ば万歳するような姿勢で上体の起き上がったその胸の部分、平らに広がっていると思い切り回し蹴りを叩き込んだ。それはもう面白いぐらい飛んだ。呼人は個性を使っておらず素の状態だったのだが、それでも鉄哲の側に一切の抵抗がないタイミングでの渾身の蹴りに、吹き飛ばされた鉄哲は地面にいた後もゴロゴロと転がっていく。

尾白など手練と戦っていると、ここまで綺麗に力を伝えきるというのはなかなかに出来ないのだが、鉄哲がそこまで格闘術に優れていたわけではないので綺麗に決まった。

それでも鉄哲はけろりとした表情で戻ってくるのだが。硬化するというのは、呼人が思っていた以上に高い防御力を獲得するものであったらしい。少なくとも個性を使わない状態の打撃で割り切るのは手間だと感じるぐらいには。

「効かねえぞ！ 俺は切島と同じぐれえ硬いからな！」

「俺の方が、とは言わないんだな」

「あいつはすげえやつだ！」

「そうか」

だから呼人は、両腕に巻いてあつたロープを少し解いて垂らす。その先端には、特殊な形状をした小さな金属の金具がそれぞれ取り付けてある。半分はアタツチメントとして鉤縄やカラビナなどを取り付けるための器具であり、そしてもう半分の用途は――

――ロープを自由に操るための、おもり。

懲りずに突っ込んでくる鉄哲に対して、呼人は左右の手それぞれに持った金具を交互に投擲した。それぞれ手首のひねりを受けて投げられた金具は、そのアシンメトリーな形もあつて空気抵抗を受け空中で曲がる。それに合わせてロープの放出を止めて曲げた呼人は、それを操って突っ込んでくる鉄哲の右手と左足にそのロープを巻き付ける。その動きはまるで――

「あれ？　なんで百竜あの動き……」

さながら相澤の操る捕縛布のように。布の動きとは違って見えるが、所々に似た動きが見受けられる。それに気付いたのは、上鳴とマイク、そして教師陣。

適切なタイミングを見計らってかけられる力によってロープはあつという間に鉄哲に巻き付き、その手足の動きを阻む。ロープによる拘束術というのは面白く、ただ結ぶのではなく人間の体が動く時に同時に動いてしまう部位を互いに結び合わせることで『動く』と『そのものを出来なくしたり、人間の力がかからない向きに固定してしまうよ

うな技術がある。相澤の捕縛布のように伸縮性に富んでいて拘束力が高いわけではないが、ロープ一本あれば人間など簡単に拘束できてしまう。

ロープを操るだけで、というわけにはいかないが、格闘戦に来てくれるなら避けながら縛ってしまえば良いのだ。

「鉄哲君動ける?」

「動きたいけど動けねえっす!」

体育祭同様審判役を買って出たミッドナイトが鉄哲を確認を取り、呼人の下で縛られて拘束された鉄哲は悔しそうに応える。

「鉄哲君戦闘不能! よって勝者百竜君!」

そうミッドナイトの言葉があつてはじめて、呼人は鉄哲を拘束しているロープを緩めた。ほどこいたロープは再び腕の周りに巻きつけていく。ここをしっかりとっていないと投げた時に飛び出していかないので丁寧に巻いていく。

「百竜、お前強いな。いやすげー奴だつてのは知つてたんだけだよ」

「ありがとう。鉄哲は体術をもつと学んだ方が良いな。切島もそうだが体を自由に固められる利点が生きてない。あくまで対人戦の話だけだな。体を固められる利点を上手く使えばもつと戦える」

「お、おう。頑張るぜ」

初対面の相手に丁寧な呼人の言葉に鉄哲は驚くが、呼人にとってこれぐらいの分析は普通のことだ。どうやれば勝てるか、どう戦うか、どう有利にことを運ぶか。その基本は丁寧な分析にある。もはや意識してするというよりはその場、あるいはその相手ごとに自然と考えが浮かんでしまう病気のようなものではあるが。

鉄哲と呼人がステージを降りた後、鉄哲の体で削られた部分を含めてセメントスによつて修復される。

「なんかいつも以上に容赦なくね？ 殴つて大丈夫な感覚つかめたつて言つてたけどそれ？」

「いや、鉄哲ならどう殴つても怪我しないだろうと思つたから結構本気でいった。アツパーとかも他の相手にあんな勢いで打つと首痛めるだろうし」

「ああ……浮いてたよな結構」

試合開始早々に呼人が放つた一撃。鉄哲の腕をすり抜けて真下から鉄哲の顎を打ち抜き、何か柔らかいものを殴つたかのような音がした。実際は柔らかいもので硬い物を殴つたのだが。結果鉄哲がそれなりに宙に浮き、上鳴以外のB組の面々は若干表情が引きつっていたように思う。

「後叩きつけるのとか蹴りとかも全然容赦無かつたし」

「鉄哲がどれぐらいで抜けるかつてのは気になつてたからな。結果素手じゃあ厳しいの

はわかったわけだし」

「そういや、あのロープの奴……」

上鳴の言いたいことを察した呼人は、首を横に振る。

「便利なところをなんとか真似してみようと思っただけだ。実際相澤先生みたいに遠距離で捕縛するのはまだ時間がかかるし、あそこまで自由にも使えない。まあ俺は格闘戦に入り込めるからそういう意味では俺流の扱いではあるけどな」

「……やっぱ百竜に手伝ってもらった方が良いみたい」

「何を言ってるんだ？」

呼人が首をかしげていると、拳藤から声をかけられる。次の相手が決まったらしい。このままでは何戦すれば良いかわからなくなりそうだが、上鳴が特に何も言い出さない以上呼人に断る理由は『めんどくさい』以外にない。そして別に戦えるのであればそれほど時間の無駄とも感じない。

「てことで次は私ね、よろしく」

「よろしく、何さん？」

「私は取蔭切奈。呼び捨てで良いよ」

「ああ、じゃあよろしく取蔭」

二人目の対戦相手は取蔭というB組の推薦組の生徒。ただ呼人はその名前も知らな

かった。だから個性もわからない。コスチュームを見るに爬虫類系の体表のような見た目をしているので、その手の変身系か異形系だろうか。

「でき、ちよつとルール変えても良い？」

「良いぞ」

「ありがと」

呼人が特に考えずに頷くと、取蔭がニヤリと一瞬笑い、彼女のクラスメイトからも一瞬笑いと呆れたような表情が漏れる。彼女の容赦の無さを知っているだけに、頷いてしまった呼人の軽率な行動を見て憐れみ半分知らない相手にも容赦の無い取蔭への呆れ半分と言った様子だ。

「じゃあ勝利条件はこのタグの奪取ね。それぞれ一個ずつ好きなどころに付けておく。ただし見えない位置はだめ」

「わかった」

「言つとくけど、これめっちゃ私に有利なルールだよ。やめとくなら今だけど？」

「別に……負けるなら負けるで反省が出来る。面白い方が良い」

そう応えると、取蔭は気に入らないと言った表情を見せるがすぐにニコリと笑ってみせる。なんというか、素が怖そうな女性の典型とでも言えば良いのだろうか。上鳴なんかは『怖え』とふざけている。自分が相手しないでいいからと気楽そうだ。

それぞれに呼人が赤、取蔭が青のタグをつけ、2人ともセメントスが新しく作ったステージにあまり相対する。マイクと上鳴、B組の他の生徒なんかがはしゃいでいるが、呼人はそれらを感じながら、得意げな取蔭の表情やB組生徒の表情について考えていた。先程呼人が鉄哲を倒した直後は少し雰囲気が強くなっていたが、取蔭が持ちかけてきた内容に呼人が頷くと一気に安堵した空気が漂った。

このルールで圧倒的に有利であるとすれば、体の一部分を自由にワープさせられるとかだろつか。例えば呼人がタグを吊るしている場所、腰の前だが、そこに手のひらだけワープしてきて奪うとか。それであれば非常にめんどくさい。ただ相手本体がワープできないのであれば本体をぶん殴ってから考えれば良い。後はそのワープによってタグを届かない場所に飛ばしてしまうとかだろつか。流石にTDLの外まで出されると呼人もイラつく。

他にあるとすれば、空気を操ってタグが自然に外れて飛んでいってしまうなどだろうか。タグとりと言えば少し違うが、まだ幼い頃に精神世界でだが『タグ取り』ならぬ『虫取り』合戦ならしたことがある。特殊な虫をそれぞれ服の胸のところにつけてそれを奪い合うのだ。一番ずるかかったのは、そもそもその虫を操れるモンスターが何もしないまま勝つことだろうか。流石にあれを超える理不尽さは無いと思いたい。なにせタグが呼人の手を自分で避けて飛んでいってしまうのだ。一体どうしろと。

ついつい思い出にふけていたからだろうか、気がつけばマイクがスタートの合図を叫び始めていた。そして直後、取蔭の体が数十個に分裂し宙へと舞い上がる。

「そーいう……！」

予想していなかったパターンに呼人は思わず笑いながら、右手からわずかにロープを垂らす。分裂した小ささとしては腕、とかそういう大きさではなく、それこそ肘から手のひらまでが3個以上に分裂しているようなレベルでの小ささだ。

そして呼人は、睨み合った顔のまま下からこつそり近づいてきていた手のひらをタグにふれる直前でつかみ取り、その手のひらと互いにつかみ合う形にして捕獲する。

算段はわかった。であれば、タグを『取る』必要がある以上何かで挟まなければならぬ。そして当然ながら手が一番効率が良い。上に浮き上がって更に左右に展開して視線を引きつけたあたりまでは良かった。更に止まるのではなくふわふわと動き、更に胴体部分と合体したり離れたりと目を引く行動をしているところは褒めていい。

だが一番有用であろう手を最初に使ったのはいかかなものだろうか。

そう考えながら呼人は、更に頭上から忍び寄っていたもう一方の手を捕まえる。

今度こそ、取蔭の表情が明らかに強張った。二段構え。初手を防いだことで安心、あるいは慢心させての一撃。基本的に頭が回るのだろう。おそらくは『呼人が下から来たほうを捕まえる』ことだけでなく、『手の重要性に気付いている』ことまで想定した上で

の作戦。

さてお返しと呼人は両手につかみ合う形になっている取蔭の手のひらを思い切り握り込む。それほど鍛えているようには思えない手のひらは、ガチガチに固まっている呼人や男性人格を持つモンスター達のそれとは違って、女性特有の柔らかさを持っている。呼人の握力で握り込まれば、悲鳴はあげないまでも顔をしかめるぐらいはするはず。

そう考えたのだが、取蔭は再び不敵な表情に戻ってこんどは宙に漂っていた手のひら以外のパーツを飛ばしてくる。それなりに速い。そして数が多い。

それが、呼人に向かって交互に体当たりをしかけてきた。1つ1つの威力は高くはないが、その衝撃はかなり鬱陶しい。呼人はそれを、手のひらは埋まっているので足と肘、肩、頭などを使って器用に弾いていく。特に腰前に来る分は膝を使って弾いておく。むしろ背中や頭にちよっかいをかけてくる分はどうせ手を取り返したいか腰前から気を逸したいだけだろうからどうでも良い。のだが。

(暇だな。そもそもハルドの方が遥かに速くて重いし数も多い。やり方を変えるか)

残念ながら似たようなものは既に経験した事がある。だから呼人は、握り込んでいた手のひらを適当に空中に向かってリリースすると大きく飛び下がる。そして飛び下がりがながら手にしたロープを鞭のように思い切り振り回した。それにひっかかって複数

のパーツの動きが止まる。

「なあ、これ怪我させても大丈夫か？」

「そんなの教えるわけないじゃん」

「あそう」

怪我させても良いのであれば思い切りロープを振り回して全てはたき落とすのだが。恐らく彼女は体のパーツをかなりの精度で自由に操っているのだと思う。実際こうしている間も、顔のうち片目だけがどこかに行っている。そちらで索敵も出来るのだろう。あるいは耳や鼻も飛ばせるとすれば、障子とは別系統だが同等かあるいは以上の索敵能力を持つ。

だがだからといって、超高速で振り回される鞭のようなロープの動きに反応できるわけではない。反射神経なんかはあくまで彼女のものだ。実際ぶつかってくるのも手を狙ってきたりするのではなく『ぶつかる』という程度のもだった。

ぶつ壊せないのであればちようど良いと呼人はしばらく様子見をしながら結界でも作るかのように右手のロープを縦横無尽に振り回す。一定の射程内は、入ってきたら基本的に叩くぞと。それでも体当たりを仕掛けてくるパーツの一部は突破してくるが、2本の手は手を拱いている様子だ。

（叩けば止まるのもありがたいな。流星に液体金属とは話が違うか）

馬鹿げているかもしれないが、呼人の変身できる司銀龍というモンスターは、彼女の体のパーツを飛ばしているのと同じように流体金属を自由に、自由な規模で飛ばす。そして、それをハルドという人格を持ったモンスターが自由に扱うともはや手のつけられない結界のようになる。ちなみに結界の射程は自由自在だ。そんな相手と、本気で手合せた事はあまり多くはないが、小さい頃は精神世界で遊ぶにはちょうど良いとよく遊んでもらっていた。それを考えれば――。

とはいえ、こうしているままだと呼人にも勝利する術がない。個性を使わないという縛りで勝手にやっているのだが、さてどうしたものかと考えていると。

「ヒャクリューー！　そろそろ本気出せよー！」

そう外から上鳴が声をかけてきた。

騒がしく外で騒いでいた上鳴だが、いざ試合が始まればいつものへらへらした顔を貼り付けたまま真剣に試合を見ている。他のクラスメイトの動きをよく見ろとは相澤にも言われているし、何より呼人はクラス1、個としての動きがうまい、らしい。上鳴もなんとなくはわかるのだが、大体は八百万や緑谷など他のクラスメイトからの受け売り

だ。

故に百竜が戦うというのは、彼にとつては格好の見学材料であるし、なんなら室内の映像をもらうことまでエクストラプラズムと約束している。自分一人だけで見るのはもつたない、他のもつと分析のうまいクラスメイトと一緒に見たいと考えたのだ。

だから、鉄哲と戦ったときも呼人の細かい体術や攻撃の本気具合に気付いていたし、今こうして取蔭と戦っているときも、呼人が何をしようとしているかに気づき、そしてさつきからまた個性を使おうとしない前の呼人に戻っていることにも気付いていた。

まだ本気の呼人が見れないかと残念がる上鳴に拳藤が話しかけてくる。

「うちの取蔭もなかなかやるでしょ？」

「すげーな。個性もそうだけど、うまく相手のしたいことさせないつつうか。俺なら適当に近づいちゃうだろうけど、目とかはちゃんとよく見えるところから見てる感じ」

「取蔭は頭良いからね。特に演習とかでの頭の回転が凄い。まあたまに嫌らしいんだけどさ」

ステージの上では、呼人が体当たりをしかけるトカゲのパーツに防戦一方になっているのが見て取れる。最初の奇襲こそしのいだが、その後は如何とも出来ないようだ。

やがて見えているうちに、百竜は鉄哲を拘束したロープを手から垂らしてそれを振り回して取蔭の攻撃を避け始めた。避けきれないからこそ無理やり払いのけようとしてい

る。

上鳴にはそうは見えなかった。だってあいつは、これまでもずっとこうして個性を使わないでも強く戦ってきて。

だが個性を使えば、もっと強いのだ。

「ヒャクリューー！ そろそろ本気出せよー！」

拳藤や他のB組の生徒が不思議そうな目で見ているが構うものか。あいつの本気が見たいし、何よりあいつがずっとやられているのは見ていたくない。

上鳴に言われた直後に個性を使って勝ちを狙うことを決めた呼人は、少しの後にしゃがみ込み、上に向かって発射される。ジャンプ、ではない。ちよつと裏技的な個性の使い方だ。

基本的に呼人が『変身』するとき、あるいは手足を変化させるとき、これまでは『実際にある部位が大きくなったり変質したりする』ように考えてきたというのは、以前も言った通り。だが新しい個性の使い方において、『変化させる』のではなく『瞬間的に入れ替える』という動きが出来るようになっていた。つまり、手を頭に変化させるとき、手

が成長して頭の形になるのではなく、その瞬間に人間の手とモンスタアの頭が入れ替わるのだ。そのためにいきなり巨大な状態で出現していた。

だから発想を逆にすれば、普通に手足を使う場合でも『成長、変化』させるのではなく、『瞬間的に入れ替える』事もできるのだ。

そしてこの『入れ替えた』とき。例えば手を壁に当たった状態でより大きなモンスタアの頭に変化させたとき。

位置的には頭が壁にうまる形になるのだが、物理的にそれはありえない。従ってそうなったときには、体の方が重ならない位置まで押し出されることになる。

そしてこの押し出されるの動き。重なる体積が大きいほど、だと今のところは推測しているが、大きければ大きいほど呼人の体が動く速度が上がる。

よって今、思い切りしゃがみ込み、それ以前から頭の中で練っていたイメージを使つて腰から下に原寸大のオドガロンの足を、それも2本ではなくより多数、むしろ腰の下からオドガロンの下半身が生えるイメージをしたため、はじき出される勢いはオドガロンの力を使って自力で跳んだ時よりも速い。そして通常であれば重ならない位置まで移動したところで止まるのだが、重ならなくなった地点からモンスタアのパーツを無くす。それによってかかる力に対して質量が小さくなり、その分押し出される力のまま射出されるようになる。

「はあっ!？」

呼人がいきなり消滅したことに取蔭も驚愕の声を上げる。

高速で跳び上がった呼人は、目処を付けていた空中の、体当たりをしているブーツよりも更に上方に漂っていたブーツに向かって手を伸ばす。匂いでわかっていた。そこにだけは、試合前にタグに触れたミッドナイトの匂いが残っていたのだ。

だが取蔭もさるもので、流星に手を伸ばしただけでは避けられてしまう。だから呼人は、最初に左手でロープ先端の金具を。そして右手で続けて同じものを投擲する。左手で投げたものが取蔭のもとへと逃げていく。ブーツを掠め、続いてより高速で飛んだ右手の金具が左手で投げたそれにぶつかり方向を転換させる。

そしてそれを狙っていた呼人は左手のロープをタイミングを見計らってぴんと張り、そのまま『取蔭のパーツを起点として』巻き付くようにする。

結果、タグのついた取蔭のパーツは呼人の手から伸びたロープが巻き付き、そつちへと引つ張られる。1パーツで人間を引つ張り上げる力は無いようで、呼人が思い切り引くと手元に向かつてすつ飛んできた。

そしてタグを確保。この間跳び上がってから2秒も経っていない。

「やべえよあいつまじで」

トンと軽い足音で着地した呼人を見てB組の生徒が啞然とする中、上鳴はポツリと漏

らす。取蔭も、あの個性と拳藤が言うにはクレバーな性格もあつてB組ではかなりの実力者なのだろう。実際2人の推薦組のうち1人ということは、タイプは違うが八百万や轟と同じレベルなのだ。

自分が戦うとしてもあそこまで小さくなられると今は適当に放電して退けるしか出来ないだろうし、索敵能力ではとてもではないがかなわない。それらを十全に使えるのであれば、A組の誰が相手でも手こずるだろう。

だが多分、呼人だけは違う。自分がその個性を持つていればどう扱うかということ突き詰めたレベルで考える。例えば取蔭の個性では、上鳴では予想もつかないが、完全に一つ一つのパーツに意思を通しての操作だろうか。

そしてそんな予想を立てるものだから、当然それに対する対策は、本来の取蔭の使い方に対する対策よりも更に先を見据えている。その個性で出来る事の見極めも行う。だがそれと同時に最大限に活用した場合も常に想定している。

戦闘能力、個性の使い方、頭の回転、個性の強さ、そして強さへの執着。全てトツプクラス。クラスではそのナンバーワンへの渴望とストイックさが尊敬の目を集めている爆豪ですら、呼人には敵わないだろう。

「ヒャクリューお疲れ！ お前やっぱすげえのな！」

そう声をかけると、事も無げに呼人は頷く。もうどこにも個性を使っていた跡は無

い。

「ん、ああ。飛ばれるとどうもな」

「でも勝ったじゃん」

「勝ちパターンがそれしか思いつかなかった」

「いや十分じゃん飛べる相手に」

「エクトプラズムに飛べる相手でもどうにか出来るようになるって宣言したからな」

もう少しなんとか出来たと思うんだが。そう言つて頭を悩ませる様子は、とても勝つた人間とは思えない。

「さっきの最後の……」

拳藤に声をかけられて呼人はそちらを振り返る。

「さっきの最後のつてき、百竜の個性、だよね？」

「ああ」

「じゃあそれまでは使つてなかった、つてこと？」

「ああいう動きが出来るつてわかったら警戒されるからな」

だからそれまでは個性を使つていない、と。暗に告げる呼人に拳藤含めB組の面々は息を呑む。

「なあ、じゃあ俺とやった時も使つて無かつたんか？」

「使つてないぞ」

「お前、本気出さねえなんて男らしくねえぞ！」

そう嘯み付いた鉄哲に、上鳴は懐かしい物を感じる。自分たちも最初はそんな鬱憤をためて、呼人にぶつけたことがあるのだ。今でも爆豪や尾白などそれが気に入らないというものはいるが。ただそれは呼人に嘯み付く方向ではなく、自分たちが如何に全開を使わせるかという方向に向かつていた。林間合宿では更にその上のレベルを見せつけられたのだが。

「個性の出力を制限するのは誰でもすることだろ？ それに俺の個性は俺にとっては体の延長にあるから体術を鍛えるっていうのが一番強くなる近道なんだよ」

「これは試合だぞー！」

「実戦じゃないだろ」

試合の時は本気を出せという鉄哲に、呼人は実戦以外は鍛える場ではか無いと返す。価値観の相違。以前体育祭前、轟に声をかけられたときにもあった。何を目指しているのか、どこを目指しているのか、それがはつきりと、どれくらいの明度で見えているのかという話だ。呼人の鍛える理由は、ただ強くなる事ではない。だからそれ以外の、例えば模擬戦で勝つとか、トーナメントで優勝するとか、そういうのは正直どうでもいい。

「お前、嫌な奴だな！」

「どうも」

ドストレートに言った鉄哲にさして気にもせず呼人は返す。そんな2人を見かねて、上鳴が間に入ってくれた。他のB組の生徒がかたずをのんで見ているのを見かねての行動だ。

「もー百竜お前はちゃんと説明しろって。そういうのは」

「話すと長くなる。せつかく見たことない相手とやれるのに時間がもつたないだろ」

「話さないから揉め事になってんでしようが」

上鳴の言葉に呼人は言葉に詰まる。確かに今、それで文句を言われているところなのだ。

「説明出来ないなら電気くんが代わりにしてあげましょうか？」

「頼む」

「待って頼まないで。お前なんで煽られてんのに簡単に頼むの」

爆豪ならばチギレてやってくれんのに、と上鳴は言うが、呼人はあそこまで負けず嫌いではない。とはいえ、任せるようなことでは無いので呼人は短く説明することにする。

「今、この試合に勝つかどうかは俺にはどうでも良い。試合の中で、自分の今できること

を確認して、今できないことを確認する事の方が大事だ。鉄哲の試合では鉄哲の硬度は自分の力じゃ貫けないけど拘束なら出来るのがわかったし、取蔭の試合なら上からの攻撃への対応は出来るけど自分の側からも有効打が打てないのがわかった。それが手抜きに見えたなら謝るが、これからもそのスタンスは変えるつもりはない」

個性を使つて模擬戦をするときもあるだろうが、それだつてどれくらいの強さで使えばどれくらい体が諸処の動作についてきて、それで相手にどれくらい対応、あるいは有利に立てるのか、ということを確認する意味合いしか無い。勝ちたいから、なんてのは、少なくとも個人のレベルではほとんど考えない。チーム戦になれば仲間への配慮はするが。

体育祭で個性を使つてみせたのは、A組で多少とも受け入れられるような下準備として、本気で来るといふ相手に対して自分も向き合おうとしたためである。また特にあの2人に関しては、多少なりとも使わないと厳しいと感じていたのもある。上鳴なんかもその枠になるが、人間の基本性能だどうしても無理なところがある相手には個性を使うのだ。

呼人の説明を聞いた鉄哲は、何を思ったか勢いよく頭を下げてきた。

「すまねえ！ 勘違いしてた！」

「あゝ。」

「あん時の爆豪みたいに見て本気じゃなかったのかと思つてた！ 本当にすまねえ！」

「あん時……ああ、前廊下に人が集まつてた時の」

そう言えば、何か爆豪が暴言を吐いていたと思ひ出す。その時のことを鉄哲は言っている。

「なんかわびさせてくれ！」

「わび？」

「ちよつと鉄哲、百竜困つてるよ。いきなりあんたの熱血で言われてもわかんないでしょ」

「でもよ拳藤！ 俺百竜にひでえこと——！」

「まずはちやんと謝つときなつて。あんたからそれ押し付けても駄目だからさ」

思い切りわびなどと言つていた鉄哲だが、拳藤に諭されて改めて呼人に謝る。呼人も別にどうとも思つていないし、めんどくさがつたのは自分の方なので特にわびを求めようとも思つていなかった。

「俺の方もA組相手のつもりで適当になつてた。悪かつた」

呼人も謝つて一件落着、となつた所で、今度は遠巻きにしていた他のクラスメイトも交えてちよつとした歓談タイムとなる。

最初にするのはちよつとした自己紹介。呼人の方の話は上鳴が楽しく話していられたのであまり聞かれなかったが、B組の生徒にはそれぞれ名前を聞いた。見学したのは、小森、小大、角取という名の3人の女子生徒と、鱗、円場という名前の2人の男子生徒だった。それぞれ女子の方は女子で仲良く、そして男子の方もものは違えど何か固めた物を使う者どうし自主練をしていたらしい。

そして話は当然ながら呼人の個性の話へと移っていく。というかやはり皆そればかり興味津津らしい。派手な轟や爆豪、わかりやすい上鳴なんかと違い、体育祭でもわずかに片鱗しか見せていない呼人の個性は当然ながら興味の対象となった。

「それで、百竜の個性は結局何ノコ？ 上鳴に聞いても教えてくれなかったノコ」

「あーまあA組でもしばらくは秘密にしてたし気をつかってくれたんだな」

「さっきのハイジャンプを見るにパワーアップの個性デスカ？」

主に勢いの良い女性陣の勢いに呼人もタジタジである。

「はー……あのルールなら勝てると思ったのに結構シヨック」

「お疲れ切奈」

「お疲れー。なああれってさ、ブーツが一個でも感電したらダメージある？」

「え、どしたの上鳴。熱でも出た？」

「ちげーよ！ 俺ならどう戦うかなと思ってさ——」

上鳴の方は上鳴の方で楽しく話しているようで助け舟は来そうもない。腹をくくつた呼人は取り敢えず言葉で説明する。

「個性は『モンスターになる』っていう個性だ。さっきの動きはその応用」

「モンスター、って何ノコ？」

「オー小森サーン、モンスターと言えばゴジラ！　後はカイジユウもモンスターですよ！」

「良くわからないノコ。なってほしいノコ」

「私も見たいデース！」

「……怖がるなよ」

ため息をついた呼人は一歩飛び下がると、オドガロンの姿へと変身する。鉄哲含めた男子陣や拳藤、取蔭もその姿には視線を吸い寄せられていた。

やがて呼人はトビカガチの姿にも変身し、その後人間の姿に戻る。

「結構大きかったノコ」

「ソービーツグ！　ほんとにモンスターデース！」

事のほか好評である。この個性社会において、異形の存在というのはそれほど珍しいものではない。呼人が気にしているような事は、意外と大丈夫なことなのであった。

第56話 轟・awaking

B組と個人的な模擬戦をした翌日。今日も呼人は上鳴に呼び出されて夕方にTDLを訪れたのだが、今日は上鳴と一緒に轟も来ていた。上鳴が昨晩夕食後に呼人との自主練の話をした結果、轟も手伝って欲しいことがあると来たのだ。他にも毎晩のようにやってくる障子とともに自室に引きこもっていた呼人は知らないが、他のクラスメイトも一部訓練を手伝ってもらおう話をしていたらしい。

ただ、一緒に訓練する、というよりは手伝ってもらおうという形になるため、全員ためらっているようだ。

「で、お前は飯を奢ってくれと」

「おう！ 仮免試験の後の週末な！」

「俺も、空いてる日があれば」

「別に気にしないでも良いんだけどな」

「まあそう言うなって。世話になってんだから礼ぐらいさせろって」

そう言われては、呼人の側に断る理由は特にない。轟も言ってくれているが、彼に關しては手伝うだけになるのか戦うことになるのかわからないので今言われても困るの

だが。

そして当の轟の手伝って欲しい内容だが。

「俺の攻撃を受けてくれ」

「是非奢られてやろうじゃないか」

「轟言い方！」

その後言葉足らずな轟に改めて説明してもらおう。それによると、『火と氷をぶつける』必殺技については着々と開発が進んでいるものの、それが効かなそうな相手に対してはどうするかということについて悩んでいるようだ。

「体育祭の時に、お前に氷から脱出されただろう？ あれを思い出した。もしあれを出来るヴィランが現れたら氷じゃどうしようもねえ。それ考えると火でもどうしようもねえ相手もいるんじゃないかって気がしてきた」

「なるほど。それで、効かなそうな俺相手に考えてみたいってことか」

「ああ。一方的に相談する形になっちゃって悪い」

「いや、俺もお前の個性でただぶつけるだけじゃもったいないって思ってたしちようど良い」

「そうなのか？」

「まあ、取り敢えずセメントスに攻撃の余波がもれないブロック作ってもらおうか」

セメントス超過労働。そのためか入れ替わりに見てくれている他の教師陣とは違って早めに帰ってくれているが、それでも一番付き合ってくれていることに変わりはない。セメントスに礼を言つて、3人でTDLの端の方の周囲を囲まれたエリアに入る。

「上鳴は良いのか？」

「待つてる間見学しとく。なんか参考になるかもしんねえし。個性が効かねえ相手つて言つたら俺も百竜はそうなるしよ」

「悪い」

「言うなつて。俺は昨日付き合つてもらつたしよ」

残念ながら、A組で人間を超える耐久力を持つのは呼人だけである。砂藤は個性によつてパワーは上がるが、物理以外の攻撃に対する耐久力はあまり高くない。そして常闇や八百万はそうしたものにも耐久性をあるものや個性を使えるが、本体の耐久力ではないので判断が難しいのだ。

「それで、体育祭の時はどうやって脱出したんだ？」

「凍結された腕を膨張させた」

そう言つて呼人は、腕を人間大のままオドガロンのそれにした後、本来のサイズへと肥大させる。

「腕の体積の膨張で氷が中から圧迫されて割れるんだ。昔から岩とか砕くのに使われて

きた技術だな」

「それか。じゃああそこで全身拘束しても意味無かつたってことか」

「いや、あれをされると最悪体操服が破れる羽目になつてた。まあ足、手、顔あたりの末端からやってみようとは思つてたが。それにあの規模は試したことがないから実際どうなるか」

とはいえ、コスチュームを着ていれば通じない。

「そう言えば、お前火は効くのか？」

「火の方が得意だな。半端な火力じゃ継続的に焼かないと火傷しないし、そもそも人間よりも耐久力が高いからちよつと焼けたぐらいじゃ何も困らん。氷は実を言えばオドガロン、赤い方は冷えるとすぐに運動能力が低下する。黒い方もそれほど得意じゃない。まあと言つても人間よりは全然耐えるがな」

「そうか……。ならこつちも意味ねえか」

そう言つて轟は左手を見る。体育祭の時にはまだ全然扱えなかつたそちらがのだが、それでもあの時よりは使えるようになってる。と言つても拘束などは右手だよりな部分が多いのでまだまだ制御も練習時間も足りていないのだが。

「映像でエンデヴァーの戦闘を見たんだが、お前は真似はしないのか？」

「……まだ自分の心に整理がついてねえ部分がある。だからあんまり積極的に真似して

えとは思ってねえ。けど他の全部で足りなくなったら真似するつもりだ」

「そうか。まあエンデヴァアのやってたことの更に応用ではあるけどやったら使えそうだと思う事があつたんだが」

「……聞くだけ聞かせてくれねえか」

そう言う轟に、呼人はエンデヴァアのやっている事の中で見たことと、そこから発展させた自分のアイデアを説明する。

「俺が見た映像だと、エンデヴァアが足の裏から炎を噴出させて飛んでたんだよ。やっていることはロケットなんかと同じなんだが。で、それが出来るなら何も足の裏からじゃなくても、それこそ飯田みたいにふくらはぎから踵にかけてとかむしろ脛から放出して高速で蹴り技はなったり、肘から放出して高速パンチみたいな事も出来るんじゃないかと思つて」

エンデヴァアの扱い方を見るに、放出する炎を圧縮しながら放つことで推力を生み出しているのだろう。その生み出す被害故に地上付近では多用しかねると思うが、一瞬の噴射ですむ蹴り技やパンチであれば周囲への被害も抑えられる。

「前から思つてたけど、百竜つて肉弾戦つてか物理戦結構好きだよな」

「これが俺の持ち物だからな。借り物だけに頼るのは好きじゃない」

「借り物つて？」

「比喩だ。異形系なんかと違つて完全に人間から変身出来るのがちよつと違和感があつたつてただけだ」

モンスター達の能力を使えば、それこそ轟のように接触しなくても相手を倒すことなんて容易い。ただ何故か、呼人は肉弾戦を好む傾向にあつた。あるいは、鍛えているという実感がより湧くそつちの方が好みだからかもしれない。だから必然発想も、物理的に相手を殴り倒すという方向に傾きがちでなのである。

「……ちよつと試してみても良いか?」

「壁の方に向けとけよ。後いきなり足とかから使おうとするな。手のひらで良い」
「わかつてる」

頷いた轟は、早速壁に向かつてその左の手のひらを向ける。しばらくそのまま向けている様子を見て、嫌な予感がした呼人は捕縛布の扱いについて話していた上鳴を離れた位置まで避難させる。

「え、なんで?」

「良いから離れとけ。後B組のやつも近づけるな」

短い呼人の指示に首を傾げてながらも上鳴が離れていった直後。

轟の手のひらから放たれた炎が一気に拡散し、周囲の空気を大膨張させる。もはやそれは爆発とも言える、というより『圧力の急激な発生、もしくは解放によって生じる熱・

光・音を伴う破壊現象』という爆発の定義からすれば、正に爆発とも言えるものであった。

いくら炎の扱いに長けてるとはいえ流石に轟がまずいと考えた呼人は、咄嗟に彼と壁の間に走り込む。そして半人半獣の状態へと体を巨大化し、跳ね返る爆風と熱を受け止める。かなり長時間ためていたから嫌な予感がしていたが当たっていたらしく、その熱量は相当なもので、膨張した空気によって巨大な破裂音が響きTDLの窓ガラスが吹き飛んだ。ちなみにこの窓ガラス、当然ながらただのそれではなく耐久性の高いものではあるが、特に轟がいた付近のものは跡形もなく吹き飛んでいる。

「大丈夫か？」

「いや……お前の方こそ大丈夫か？ 俺は取り敢えず水で防いだが」

呼人の後ろにいる轟の前後には氷の壁が築かれており、吹き飛ばされないように、そして爆風の直撃を受けないようになっていた。のだが。

「お前熱風に氷なんてぶつけたらもつと取り返しつかないだろうが。水蒸気爆発って知ってるか？」

水蒸気爆発自体は、水がマグマなど高温の物質に接した際に水蒸気化し、その体積膨張によつて発生する爆発現象である。だからこの場合は厳密に言えば違うし、氷が融点を越えて水に状態変化する際にもエネルギーを消費するのでそれほど大規模にならない

い可能性もあるが、それでも膨張する要素になるものを追加するのはどうかと思う。熱量を吸ってくれるという意味ではありなのだが、炎の熱量がわからない以上は空気が冷えて体積が小さくなる期待よりも『氷↓水蒸気』の体積増加の方が怖い。

「どういうことだ？」

「氷が溶けて水蒸気まで状態変化すると余計体積が膨張して大変なことになるってことだ。出すならもつとばかでかい氷を複雑な形状で出して一気に熱量吸い取るぐらいしねえと」

呼人もそれで正解なのかはわからないが、自分が氷を出すなら絶対にそうする。つまり、水蒸気化させない。表面積を増やすのは、それだけ熱に同時に触れる面積を増やすためだ。

「そこまで考えが回らなかった。悪い。なんかお前、八百万みたいだな」

「あそこまで博識じゃないが、自然現象に関しては何とも興味があつてな」

どちらかと言えばモンスター達の興味だが。彼らがモンスターだったころは彼らの出来ることを当然のこととして捉えていたのだが、人間になり、呼人の訓練を見ていてそれらをもう一度原理から見つめ直したのだという。その知識もまた、書物の知識と合わせて呼人の中に蓄積されているのだ。

「で、できそうなのか？」

慌ててやってきたセメントスラ教師陣とB組生徒に頭を下げ、その後TDLの修理をすぐにしないといけないということでB組の生徒含めて追い出される羽目になった。そのためB組の生徒に再度3人で頭を下げ、寮までの道のりを歩く。上鳴にも簡単に事情は説明した。

「……出来ない事はないと思う。けどまだ溜めると威力がよくわからなくなる」

「それであの爆発ってことね。でもさ、それを調整できれば意外と使える感じなのな」
「ああ。調整できれば使えると思う」

「じゃあ後は、コスチュームの改良案でノズルとアーマーをつけてもらうぐらいか」

普通に今後の方針を確認するのりで呼人がそう言うのと、2人が疑問符を頭の上に浮かべるので呼人も固まる。それぐらい考えているかと思つてなんとなく言つたのだが、思いついていなかったらしい。

「何ノズルって。後アーマー?」

「ノズルはロケットなんかの吹き出す部分についてる下に広がった筒みたいなやつだ」

「あーなんとなくわかる」

「それがいるのか?」

「その個性の使い方はやってることがロケットと同じだって言つただろ。だつたら吹き出す時もその方向を調整するためのものがあつたほうが良い。飯田だつてふくらはぎ

の裏に筒付いてるだろ？」

筒という飯田からしてみれば不本意な言い方をしてしまったが、伝えるにはそれが一番早い。

「なるほど。それを百竜の言ってた肘の裏とか足につけておけば意識もしやすいし実際に吹き出す方向を調整してくれるってことか」

「そういうこと。まあ後は実際に試行錯誤してどこにどんな形状でつければ良いかは試すしか無い」

取り敢えずできそうだという事はわかったが、轟はそれを半身にしか使えない。だからバランスの調整なんかは使いながらしないと振り回されるだけになってしまうだろう。

「それで、アーマーって言ってたのはもしかして緑谷みたいなやつ？」

「正解。いくらロケットみたいに速いパンチが打てても、轟の腕がそれに耐えられない。だから拳をガードするのとは後は肘とか肩の保護のためのサポーターも欲しい。後は素手よりもガントレットがついてたほうが殴った時の威力もあがるだろうし」

「また威力の話しとる」

「好きなんだそう言うの。でも実際緑谷だって、確かブーツのつま先が飛び出してシヨックを与える構造になってるんだろ？ 発想は一緒だ。柔らかいものよりも堅い

ものでぶん殴ったほうが効くし、衝撃を増幅できればなお効く」

まあ相手次第では過剰な可能性もあるが、それこそ轟がそれを使うのは氷での拘束が通じない相手だろう。例えば、クラスで言えば切島や砂藤は期末試験の映像からすれば轟の氷も砕いてくる。後はもちろん呼人。このあたりは、素手で殴っても効果は0に等しい。

「緑谷と飯田にも聞いてみる。ありがとな、一緒に考えてくれて」

「戦い方を考えるのは好きなんだ。氷の方だって、格闘戦になってももつと上手く使えるはずだ」

「ああ。それも考えてみる」

「後いつも言ってるけど、普通の組手な」

「……百竜と話すとき悩んでいる時間が馬鹿らしくなるな」

「ほんとそーだよな。自分もなんかしねえとって気がすげえしてくる」

轟と上鳴の言葉に、呼人は小さく笑う。

当たり前ではないか。人の寿命は、たった100年も無い。その中で元気に自分を高め続けられる時間なんて、せいぜい40年。悩んでいる時間など無いのだ。

そして圧縮訓練の日々は過ぎ、仮免試験当日がやってくる。

「さて、特に話すことがあるわけじゃないが……仮免取ってこい。以上だ」

『短ッ!』

「今更どうのこうの言って変わるわけじゃない。だがこの試験に合格して仮免を取得できれば、お前たちはただのヒーロー志望者からヒーロー見習いになることが出来る。頑張ってこい」

相澤の短い激励に、ムードメーカーである切島らが中心となつていつもの『プルス・ウルトラ』を叫ぼうとしたところで、呼人は弾かれたように後ろを振り返る。クラスメイと達と、後何か他所から混ざり込んできた大柄な高校生が混ざつた叫びが耳に響くが、それも気にならない。

以前、感じたことのある匂い。それをわずかに感じた呼人は、再度感覚器官を変化させてその元を確認した後相澤の所へと静かに近寄る。

「相澤先生」

「ん、なんだ」

「ちよつとお耳にいいたいことが」

いきなり騒いで揉め事になるのも嫌なので、取り敢えず相澤の耳を借りて報告をす

る。

「林間合宿に襲ってきたヴィランがいるかもしれません。あのととき蛙吹と麗日と戦ってたやつの匂いです。俺の感覚が正しければさつきうちと一緒に叫んでた坊主頭と同じ学校の長い金髪の女子生徒です」

「……わかった。お前はそれ以上動かず他の奴らと一緒に試験を受けてこい。そっちは俺で確認しておく」

そう言うのと会場に向かって歩いていくクラスメイトを指し示すと、自分はおそらくはその高校の引率らしき教師のところへと歩いていった。呼人の言葉を全面的に信頼するわけではないが、懸念があるのであれば確認をしなければならぬ。教師として、そしてヒーローとしての行動だ。

一方送り出された呼人は、他のクラスメイトと一緒にコスチュームに着替えて試験の説明を受けていた。非常に眠たそうな人物からの説明を要約すると、試験はたった100人の勝ち抜け。ルールは体に3つの的をそれぞれ取り付け、それに対して1人6個のボールを使つて的を狙つて当て合うというもの。

勝ち抜けの基準は、『2人倒す』こと。そしてボールを3つの全てにぶつけられると失格となるため、実質1人で勝ち抜け目標を突破するにはボール6つ全てを使わなければいけない。ただしボール自体には個々人のものなんて判定はないので、他者のボールを奪うことも可能。そのあたりはボールと的それぞれに送受信機があつて情報が逐一更新されているため、正確に判定することが出来るらしい。

「1500人中1000人か。厳しいね」

「比率はな。うちのクラスは20しかないし対して問題ないだろ」

ボールとターゲットを受け取つてあちこちへと散つていく、のは爆豪や轟、それに爆豪と一緒に上鳴や切島ぐらいで、敵が1480人、実際は1540人の受験者なので1520人だが、相手が多数でありクラスみんなで仮免試験を突破したため残りの全員が一箇所に集合している。

「百竜は離れとか無くて良いのか？ 1人で動いた方が動きやすいだろ？」
「どうせどこにいても的は集まってくるだろ」

一緒にいてもいなくても関係ないと事も無げに呼人は応える。こここの相手に、優しく手加減をしたり欠点を指摘するような親切心は持ち合わせていない。速攻で2人倒してクリアすると、そう決めていた。

第57話 仮免試験

目標達成者が集まる部屋に、一番に入った呼人は暇を持て余していた。それはもう、とても暇で、モンスター達と精神世界で訓練を始めるぐらいには暇であった。

設備の不調ということで開始時間が遅れたものの、一時間ほどで試験が始まった直後。周囲にいた他校の生徒達がこぞって呼人達を、いや、雄英の生徒をめぐめて攻撃をしかけてきた。中には、他校どうしで一時的に停戦状態として手を組んでいる者も多い。

仮免試験恒例、『雄英つぶし』だ。

西の士傑と合わせて特に名前の知れ渡っている雄英高校が警戒されるのは当然のこととで、更に雄英「だけ」が体育祭という衆人監視の環境下で個性や戦闘スタイルを發揮している。つまり、他所の高校に情報が漏れている状態にある。

そんな、合格枠を確実に潰してくるような相手が手札を開けて戦ってくれるのであれ

ば、真つ先に潰そうとしないわけがない。

それが、英雄つぶし。英雄にとってはいつものことなのだが、A組にはそのことは一切伝えられていなかった。

だって。

——その程度の障害を乗り越えられないようでは、人々を救うヒーローになんてなれはしないのだから。

そもそもが、少なくともここにいるのは1年生。体育祭で見せた実力なんて、まだ方針もスタイルも洗練どころか開拓すら出来ていないようなもので、それを見て実力がわかっているなどと笑い話も良いところである。

頭部の防具にターゲットを横並べに3つ貼り付けた呼人は、敵の攻撃に対して耳郎が地面を割ったのと同時に両足を変化させて空高く跳び上がった。そして空中で皮膜を広げるとしばし滑空、地上の様子を観察する。

案の定というかなんというか、やはり他校もそれほど練度は無いようで地面が割られたことにばかり目が行っていて彼らの頭上にいる呼人に気付いていない。

皮膜を消して飛び降りた呼人が両腕のロープで2人を速攻で拘束し、それぞれのターゲットにボールを3つずつ当てるのに一分もいらなかった。

『えー現在どこも膠着……あ一人目通過しました。脱落者2名。あ、状況は私の方から

放送することになってるので、えーまあ頑張ってください』

きつちり2人だけ失格させた呼人は、その後もう一度足を変化させると大きくジャンプを繰り返して離脱し、突破者が集められる小屋へと向かった。その後の事は、小屋では映像が受信できないのでわからない。まあつまりずっとぼうつとしてなければならぬという状態になるわけだ。

やがて2度目の放送がなり、二人目の達成者は100人以上を脱落させて突破したという情報が伝えられる。2人倒した時点でクリアであるルールにおいて100人以上を倒すということは、それをほぼ同時に達成したということであり、更に少なくとも100個のボールを一度に扱ったということも示す。

存外面白そうな相手もいるものだと考えていると、その達成したという人物が待機所へとやってきた。

「おっ、はやいっすね！ 確か雄英の人っすよね！」

「そっちこそ。同時に100人とは恐れ入る」

「自分熱い戦い大好きなんす！ だから先輩方の戦い見ると俺もやるぞー！ って頑張ったっす！」

騒がしい大柄な男ではあるが、それらを特に不快に感じない呼人にとつてはちようど良い話し相手だ。少なくとも相手も、表面上はフレンドリーというか暑苦しくコミユニ

ケーションを取ろうとしているので話すのが嫌いというわけではないのだろう。試験が終わるまでの暇つぶしが出来ると内心喜ぶ呼人であった。

その頃、戦場はまた大きく様相を変えていた。傑物学園高校の真堂が地面を大きく割ったことで集まっていたA組も離散したが、それは同時に共同戦線を張っていた他校もバラバラに散り、より乱戦模様へと近づく。戦況は混迷を極めていた。

が。外からそれを眺める相澤の視線には何の色もない。至って平静な、あるいは授業を受けている彼らを見ているかのような目線。少なくとも、「心配している」目ではなかった。

「どう動いているのか見えないのはもどかしいな」

「真堂が割ったからもともと見づらいのが全く見えなくなつたよな。え、てかあんなこと言つて心配してんの？」

「後々振り返らせる為だ。この試験じゃあ後から映像記録ももらえない」

試験内容の秘匿だかなんだか知らないが、非合理的だと相澤はこぼす。こういう、知らない相手との戦闘だからこそ見えてくるものというのはたくさんある。むしろ、普段

学校でやっている手の内を互いに知っている演習というのはヒーローになってみればありえない状況なのだ。ヒーローが相對するのは、大抵が手の内がはつきりしていないか、はつきりしていてもせいぜい個性と前科がわかつているぐらいのヴィラン。この、初対面の相手と戦うという環境は実戦演習として正に最適である。

「……今年のA組というクラスを見ていてわかったことがある」

先程から事あるごとに話しかけてきていたM.S. ジョークに、相澤は今度は自分から話し始める。

「連中は気付いてないだろうが、A組には3人の存在が大きな影響を与えている」

どいつもクラスの中心にいるわけでもまとめているわけでもない。うち2人に至っては仲は最悪。クラスで何か揉めていたら半分以上はそいつらだ。

「だが、2人の熱は自然とクラスに伝播していく。何の因果か大事の渦中には必ずどちらか、あるいは両方が関わっている」

そして、そこにもう1人が術を与える。

「もう1人は事件を起こすわけでもないし基本的に優等生。クラスの端っこにいるタイプだ。ただ、努力を病的なまでに重ねる。そして他のやつにもそれを自然に求める。必然、2人の熱に煽られた生徒に進む道をそいつが示し、熱を絶やさせない」

俺はな、ジョーク。心配してるんじゃない。このステージでの奴らの成長に期待して

いるんだ。

「ベタぼれかよー！」

「……ふん。なんとでも言え」

惚れていると言えば、惚れているのかも知れない。A組の成長は、例年の生徒と比較しても遥かに速い。この、本来なら2年生次に取得を目指し、それでも脱落者が出ることのある仮免试試験で脱落者0のまま善戦し、生徒によつては周囲を気にかける余裕すらある。

そんな彼らに、期待するなと言う方が無理なのだ。

「百竜、いなくなってるかと思つたらいつの間」

「耳郎が地面割つた時に突破した」

「第一突破者つてことか」

「まあ、俺は個性の全部なんて見せた覚えはないしな」

雄英勢は、最後の11人の枠に9人が滑り込み全員が勝ち抜き戦を突破した。最後に残ったのはクラスメイトのために奔走していた飯田やそれをカバーするために残つて

いた尾白、障子などだったが、最終盤に全員が集結して突破することが出来た。

流石に夜嵐イサナとの会話の内容もつきてぼうつとしていた呼人が戻ってきた尾白とそんな話をしていると、再度放送が入る。

『えー突破した皆さん、これを御覧ください』

そう放送が入ると同時に、今まで消えていたモニターに映像が入る。そして直後、待機所の外から聞こえた爆音とともに映像内の試験場で大規模な爆発が発生する。複数箇所が発生したそれによってビルや倒れ、地面は砕け。街並みを想定していたであろう会場は見るかげもない。

『皆さんには、この被災現場のバイスタンダーとして救助演習を行ってもらいます。ここでは仮免許を取得した者として、適切な救助活動が行えるかどうか。それを見させて頂きます』

画面を見ているうちに、映像内に複数な人影が現れて被災現場となった試験会場を歩いていき、瓦礫の間など明らかに危険な場所へと入り込んでいく。受験者は一様に驚いているが、彼らは要救助者のプロ。すなわち、こういった試験、あるいはヒーロー事務所での演習において要救助者役を演じることを生業としている者達であり、その意味では被災現場を歩いていても自分たちの身の安全はある程度は確保している。

『現在、被災者に扮した『HUC』がエリア全域にスタンバイしています。みなさんには

これから彼らの救出を行ってもらいます。尚試験は、この救助演習での活動をポイント制で採点し、演習終了後に集計して合格者を決めます。10分後に始まりますので今の内にトイレなどに行っておくように――」

放送が終わると同時に、ガヤガヤと周囲が騒がしくなる。そんな中、一部の雄英生徒は早くも方針を話し始めていた。

「俺は要救助者を運ぶよ。障子は探知出来るだろ?」

「……そうだな。俺と耳郎、八百万、後は百竜が探せる」

「俺と障子のコンビなら同時に複数人でも運べるぞ? 俺がでかい状態になって障子が一緒に乗って支える感じで」

「……状況次第で考えたほうが良い」

「お茶子瓦礫撤去出来るよね?」

「うん! うちこういうのめっちゃ得意! 耳郎ちゃんが探してくれたらうちが助けるよー!」

「私はその場で足りないことに対応しますわ」

そして、サイレンと事件の概要の放送とともに救助演習が始まる。

救助活動なんて、やることは限られている。いる人間を助けて、治療するか治療できない場所まで連れて行く。それだけだ。それぞれにどの順番で対処するかとか、何を気を

つけないといけなかなんて考えなくてはいけないこともあるが、基本相手が『死ぬか死なないか』を基準に考えれば良い。呼人はそう考えていた。

だから、相手が泣いている人間だろうが傷を確認した後容赦なく抱き上げて仲間のところへ運び、後方、あるいは別の学校の生徒が作った発着場へと運ばせる。今相手が泣いているかとか、怯えているかとか、そういうのは優先事項ではない。目の前の瓦礫の下に埋まっているであろう人間を何人回収できるか。

「その長い黒髪のおんた！ 10時の瓦礫の下1メートルに1人入ってる！ そつちのおんた、その岩の裏側に1人いる！ それ崩すなよ！」

雄英のところから飛び出して、更に広範囲、あるいは手が及んでいないところまで尾白や障子ら救助要員を運んでは放り出してくる。一体どうやって入り込んだのかと聞きたくなるような場所までHUCの人間が入り込んでいる現状では、一番必要になるのはどこに要救助者がいるかという情報であり、そしてそれを与えられる人間というのは他少ない。翻って、傷病者を運んだり救助するのなんて、場所にもよるが誰にでも出来る。様々なことが出来る呼人や八百万は、足りないものを埋めていくのが正解なのだ。

そして、再び破壊音が響き渡る。

『ヴィランが出現！ 追撃を開始しています。現場のヒーロー候補生はヴィランの制圧

と救助を並行して行ってください』

それを聞いた直後、呼人は周囲を見渡して手空きの人間がないことを確認すると、先程尾白、障子らを放り出したあたりに戻る。途中で直近の救助者に向かつてない切島、上鳴を見つけたのでそれにも声をかけた。

「切島上鳴乗れ！」

「乗れって、どうすんの!？」

「お前ら救助じゃ実力発揮できないんだろう！ とつととヴィラン制圧してこい！」

呼人が端的に説明すると、2人は顔を見合わせて頷く。自分たちの個性が救助においては、場は大して、というかほとんど役立たないのはわかっていたのだ。上鳴においては、場合によってはAEDになることも出来るがその出力の練習はまだしていない。いきなり人間にぶちかまして試す事も出来ないので当然の判断だ。

「速え！ つてちよ落ちる！」

「捕まってる。ナイフでも爪でも突き立てて良いぞ」

「んじや遠慮なく！」

捕縛布はまだ扱いきれないので装備していないものの、レーザーヘッドにならつてナイフを装備している上鳴が背中 of 突起に引っ掛ける形で体を支える。流石に突き立てるのは躊躇われたからだ。

「障子、そっちは」

「まだ数名残っている。尾白の手も残しておきたい」

「わかった」

当初の目的であつた尾白と障子のいる場所にはまだ要救助者が残っており、更に他校の生徒を含めても手が足りていない。そこから引き抜いていくことは出来ないのも、更に切島をその場に降ろして上鳴を載せたままヴィランの出現した地点に向かう。

「逆だったな」

「え、何が？」

「状況的にヴィランを足止めできるやつがいる。後轟とあの士傑の奴に巻き込まれて大丈夫なやつ。そう考えると、お前じゃなくて切島だった」

「待つて俺あそこに置いてかれるの!？」

「取り敢えずあの喧嘩してるバカどもの尻拭いしてこい!」

行つて来い! と急ブレーキをかけて背中から上鳴を放り出す。ひよわー! なんて情けない声をあげていたが、ちゃんと受け身を取つて着地していたので心配は無いだろう。更に見事なことに、空中にいる間にギャングオルカの周辺に向かつて複数のタワーゲットを設置していた。そして着地と同時に放電。複数のタワーゲットの間を駆け巡つた電撃が、ヴィラン役を引き受けたギャングオルカに直撃し、更にその周囲に電気の檻

を形成する。

呼人が見ていれば見事と感心していただろう。残念ながら既に背を向けていたが。

そして電撃で足を止めたギャングオルカの体を、轟が放った炎を巻き上げた夜嵐の風が包み込む。戦場で半目していた2人だが、互いに危機的状況に陥ってようやく協力することが出来た。

一方ヴィランの現場から離れた呼人は、最後に残っているであろう障子らの所に向かった。

そしてそこで最後の3人とそれを支える障子、尾白を背中に載せて救護所へと走る。背中に固定することさえできれば、完全にモンスターになった呼人はトラックのように荷物を運ぶことが出来る。今回はそれが人間になっただけの話だ。

そして、その3人が救助されると同時に試験終了のアナウンス。仮免試験が終了した。

『———というところで取り敢えず合格点の方がこちらです。五十音順になってるのでそのつもりで見てください。今の説明を踏まえた上でどうぞ』

全員がコスチュームから制服に着替えて再度一番最初の説明を受けた場所に戻ってきた後、目良から採点方式の細かい説明がされた。そして合格者の好評が行われる。

呼人も無事合格していた。正直出来ることは取り敢えず全部やったつもりなので、あれで落ちていればどうしようもないし感慨はそれほど無い。

クラスでは、残念ながら轟、爆豪の名前が無い。実力者である2人だが、この救助演習に関しては減点基準を満たしてしまい合格点に達しなかったのだ。轟の方は、呼人も見た夜嵐との揉め事で大減点をくらっていきそうだからわかるとして、爆豪の方はどうしたのだろうか、と少し思ったが、上鳴と切島が爆豪にかける『暴言駄目よ』という言葉で大体のことはわかった。大方、要救助者相手に『てめで助かれや！』などと無茶を言ったのだろう。まあ呼人も自分で歩ける負傷者には『自分で歩け』と言いかけて他校の生徒に引き継がれた事があったので人の事はあまり言えないのだが。

『えー全員確認してただけましたかね。続いてプリントを各人にお配りします。採点内容が記載されているのでしっかり確認しておいてください』

「百竜くん」

「はー」

ヒーロー公安委員会の人間が配って回っている中で、呼人の名前も呼ばれてそれを受け取る。さらりと確認すると、点数は96点。減点された内容は、泣いている要救助者

に対して励ます声掛けが出来ていなかったことと、説明をする前に他の者を移動させていたこと、そして要救助者を不安にさせたこと。状況の判断が不的確という減点はなかったのだ、恐らくはちゃんと自分以外にも分かる状況にしておかないといけないということなのだろう。実際には、尾白や障子のように一言でわかってくれる相手だけではないのだ。

「百竜どうだった？」

「まあぼちぼちだ。そっちは？」

「俺は79点。全体的に何すれば良いかおろおろしてたときが多かったからみたいだ」

「……尾白は救助においては索敵の指示が無いと下手に動けない。その間に、他の学校の生徒との意思疎通を図ったりしなければならなかったということだろう」

「うん、そんな感じみたい。百竜のも見せてよ」

互いに採点用紙を見せあっている障子と尾白に求められて、呼人もプリントを見せる。

「うわっ、これむしろ何で減点されたの……」

「む……ぼちぼちではないぞこれは」

周りの声を聞く限り90点台というのは非常に稀のようだ。それもそのはずで、この減点基準には行動の直前の躊躇いや足が止まっていることなども含まれている。終始

必要なことを考え続けて走り続けた呼人は、少なくともそれには当てはまらなかったのだ。そのため減点が相当に少ないのである。

「百竜、自分の判断は正確なのに周りに伝わってない感じだね」

「あんま伝える気も無かったからな。お前なら何も言わなくても勝手にやってくれるだろうし、他の学校のやつもそれぐらい出来ると思ってた」

だから、『そこに要救助者がいる』という短い指示しかしなかったわけで。そこからの救助は各自でやってくれという意思の現れだった。ただそれがいくらか適当さを感じさせるものであったこと、特に要救助者と接する場面においては、要救助者を運ぶのではなくヒーローを連れてその場を離れたりと不安にさせるような行動があった。

やがて全員にプリントが配られ、説明が終わる。合格したもののだけではなく、不合格であった轟、爆豪らにも配られていたのは、今後のためだろうか。

『合格した皆さんは、仮免許要項に従って緊急時に限ってヒーローと同等の権限を行使することが許可されます。つまり、ヴィランの制圧、事件事故現場における救助活動など、ヒーローの指示無しで自己の判断で個性を使用して動けるようになるということです』

——しかしそれは同時に、皆さんの行動に大きな社会的責任が生じるということでもあります。

元來、個性出現以降の超常社会においては『個性の自由な使用を禁ずる』という形で個性が社会に大きな影響を与えないようにと社会を作ってきた。その中で、それでも有用な個性の使用を許可されたヒーローには、当然ながらその使用とその影響に対して大きな責任が課せられる。

旧時代で言えば、火薬や麻酔薬、その他医療用の薬など、その危険性が認識されながらも有用性を求められて資格制かつ申請制など制限された状況においてのみ使用されてきたものとなら変わらない。現代でも使用されている麻酔なんかも、使い方を間違えれば依存性のある薬物となるのだ。

『皆さんもご存知の通り、オールマイトという史上^グ最も^{レイ}偉大^{ステ}なヒーローが引退しました。彼は存在そのものが犯罪を抑制するほどの人物でした。そのブレーキが消え去り、これからは増長するものが必ず現れる。正義と悪の均衡が崩れ、世の中が大きく変化していく中、みなさんが社会の中心となっていく時代が訪れます。次の世代は、みなさんがヒーローとして、規範となり暴走を抑制できる存在となります必要があります』

呼人は以前までは軽視していたが、オールマイトという抑止力は巨大なものである。それこそ、犯罪を犯せば必ず捕まる、とわかっていて犯罪をポコポコ犯すようなヴィランはいない。もちろんオールマイト以外のヒーローもヴィランを捕らえてはいたが、彼

はその圧倒的な実力とスマイル、そしてカリスマ性で世界中のヴィラン予備軍達に伝えていたのだ。

『たとえばここで犯罪を起こそうと、私は行くよヴィランの諸君』、と。

そう伝える力が他のどんなヒーローよりも圧倒的に強かったのがオールマイトという、文字通り存在そのものが「平和を生み出す」存在だったのだ。

『今回みなさんが取得したのはあくまで「仮の」ヒーロー活動認可資格免許。まだ半人前程度に考え、各々の学舎でさらなる精進に励んでください。そして、えー不合格となった方々』

目良の言葉に、不機嫌そうに表情を歪めていた爆豪や、他校で不合格となった生徒たちが顔を上げる。

『今回は点数は足りませんが、君たちにもチャンスはまだ残っています。3ヶ月の特別講習を受講した後、個別テストで結果を出していただければ君たちにも仮免許は発行されます』

『今私がお伝えした「こらからの脅威」に対応するためには、より「質の高い」ヒーローがほしいのは当然ですが、そうしたヒーローが「なるべく多く」ほしいのも事実です。一次試験は『落とすための試験』でしたが、そこで残った100名はなるべく実力のあるヒーローまで育てていきたい。そういうわけで救助演習では途中で失格とせず

最後まで全員を見ていました。事実、不合格となった者達は見込みがないわけではなく、むしろ今回減点された点を修正すれば合格者以上の実力者足り得る者ばかりです。学業との並行で忙しくなるとは思いますし、無理にとはいいません。次回の試験は来年の4月、後半年と少しでもう一度機会があるわけですから——」

「やります!! お願います!」

目良の説明を遮って叫んだのは夜嵐だ。それに触発されたように頷く他の不合格者に、目良は表情筋を一切動かさないながらも満足する。向上心のない者は、今後のより苛烈を極めていくヒーローという世界では生き抜いていけないのだ。

全てが終わり、バスに戻っている最中。談笑するクラスメイトから離れて呼人は相澤のところへと行った。

「相澤先生、試験前の件は」

「プロで対処した。その件については他言無用だ。それと、何度も言うが個性の無断使用は認められていない。たとえお前がそれを証拠として言い出しても信用させることは困難だ。外に全く見えない形である以上お前が言い張れば罰されることもない。だ

が学校に戻ったら補習を3時間受けてもらう」

「了解です」

全くもって堪えた様子がない呼人に、相澤は小さくため息をはく。法というのは、たしかに行動に対して後から制裁を貸すものではあるのだが、その本質は制裁を事前に示すことで法に反する行動を抑制するところにある。だから、その制裁を意に介さない人物がいる時点でその効力は失われてしまう。法の遵守と自分の重視する行動を天秤にかけたとき、たやすく傾いてしまうというのは呼人の悪癖とも言えるものであった。

当該ヴィランは、相澤を始めとする各校のプロヒーローによって捕らえられたが、その事実も動揺をもたらすだけとして受験者たちには一切伝えられていない。ただ、再度、ヒーロー科の学生が狙われたということと土傑、そしてその他の高校でも雄英ほど金があるわけではないが寮制への移行などが議論されることとなる。

第58話 ビツグ3

「おい。後で表出る。テメーの個性の話だ」

仮免試験直後の夜。珍しく自室から出て、というかクラスメイトに引きずり出されてお疲れ様会に参加していた呼人の耳にそんな言葉が響く。人より鋭い聴覚が拾ったその声は、緑谷の隣に立つ爆豪から発せられたものだった。

呼人はさり気なく席を立ち、爆豪の後を追う。揉め事なんて割り込むものではないと思うしよほど拗れ過ぎない限りは勝手にやれば良いとは思っているが、それでもやり過ぎることだけは釘を指しておく必要がある。

「やりすぎるなよ」

自室に戻ろうとするその後を追って声をかけた呼人に、振り返らずに爆豪は答える。

「……わかつとるわ一々口出すなクソが」

「ならしい」

「止めんのかてめえは」

「どうせいつか爆発するなら適当な所で爆発させとけば良い。退学ならん程度にな」

それ以上答えることなく爆豪は部屋へと戻っていく。大方、夜のうちにまた彼は何か

変わっているのだろう。

誰よりも強さに執着しているように見えて、彼は常に何かしら悩みを抱えているといふのにクラスで気付いているのはおそらく呼人ぐらいだ。あの爆ギレ具合になれているからこそその、その中に潜むものに気づくことが出来た。積極的に手を差し伸べたりなんてしないし、あのタイプにはそれは逆効果なのはわかつていてる。本人が吐き出した形で吐き出させるのが一番良いのだ。大方話は緑谷とオールマイトから同じ気配を感じることに関わっているのだろう。

翌朝。朝のランニングから戻った呼人が見たのは互いに傷だらけの緑谷と爆豪。ちらりと視線を向けた呼人に爆豪が

「やり過ぎではねえ」

と言ったのが妙に印象的だった。

それだけ傷をこさえていれば、呼人の常識ならともかく一般の常識に照らし合わせればやりすぎなのではないかと。そこまで考えて『お前が言ったように』と言っているのであれば大したもののである。

「前も思ったが、なんで式なんてものが存在するんだ？」

「なんでつて……意思統一をするためとか？」

「前みたいに前で話すだけならプリントでも配ってくれば目を通すのに。調べてみるか」

退屈な式にぼやく呼人を尾白がなだめる。どうせ精神世界で殴り合いでもしているので問題は無いのだが、不思議なのだ。聞けば、どこの学校でもやることだという。それもまた人間であるが故のことなのだろうと、呼人は自分を納得させた。

ついでに後方で切島達と騒いでいるB組の一部の生徒から鋭い目が向けられた気がするが、何を言ってくるわけでも無さそうなので無視をする。逆に隣を素通りしようとする心算には手を振ってやると、心底嫌そうな表情をされた。

つつがなく、というか話をほとんど右から左に流して始業式が終わり、後期始めのホームルームが始まる。

「——今日は座学だけだが、明日からはより一層厳しい訓練を行っていく。各自準備を怠らないように」

「先生、一つ良いかしら」

「なんだ」

相澤の話が途切れたところで蛙吹が挙手する。

「さつき始業式で校長先生のおっしゃっていた“ヒーローインターン”ってどんなものなのかしら」

「それについてはまた後日やるつもりだったが……概要だけ先に説明しておこう。一言で言えば『郊外でのヒーロー活動』。以前行った職場体験とは違って本格的にヒーローとしての活動を体験する活動だ」

「はあー、そんな制度が……あれ？」

そこで何を思ったか麗日が勢いよく挙手しながら立ち上がる。

「先生！ じゃあ体育祭で頑張って職場体験のスカウトもらったのは意味なかったんですか!？」

「インターンは体育祭で得た指名をコネクションとして使うんだ。簡単な話、職場体験ではお客様として受け入れてもらえたがインターンでは戦力として数えられることになる。使えるかどうかわからない相手を受け入れるほどプロヒーローも暇じゃない。だから体育祭で指名をもらえなかったものは、そもそもインターンの受け入れ先が無いんだよ。わかったら座れ」

「は、は、は、めんなさい」

麗日を座らせた相澤は、改めて今後の方針を説明する。

「インターンは生徒の任意で行う活動だが、仮免を取得しているおかげで個人の選択で

より本格的かつ長期的に活動に参加することが出来る。ただ1年生での仮免取得自体はあまり例がないし、仮免試験でもわかったと思うがお前らには時間の都合上まだ足りないことが多い。本来なら後1年学んだ上で参加する活動だからな。だからこつちとしても慎重になつてるのが現状だ」

ヒーローとして活動する以上責任が伴う。仮免試験の突破はその責任を果たす能力があると認められた証ではあるが、それと雄英での評価はまた別の話だ。

「まあ、上級生の体験談なども含めて後日ちゃんとした説明や今後の方針について話す機会を設ける。以上。マイク」

『YEAHHHHH！ 1限は久々の英語だぜー！』

相澤が話を切り上げると同時にマイクが教室に入ってきて、考えている暇もない。また、慌ただしい日常が始まるのだ。

始業式から3日後。謹慎明けの緑谷が復帰してはじめての授業で、インターンに関する説明が改めて行われることになった。

「入ってきてくれ」

相澤の言葉とともに教室の扉が開き、3人の生徒が入ってくる。そのうちの1人に、呼人は見覚えがあった。相手も呼人に気付いたのか明らかに表情が明るくなり目がラランと光っている。

「職場体験とどう違うのか、実際に経験している人間から話してもらおう。それぞれ多忙な中都合を合わせてくれている。ちゃんと話を聞いておけよ。現雄英生の中でもトップに君臨する3年生3名——通称、ビッグ3だ」

相澤の説明に、クラスがざわめく。ヒーロー科はそれぞれの訓練などが忙しく、またクラス内での仲が高まりやすいのもあつて上級生どころか同学年でもクラスが違ふと関係が希薄になることが多い。そんな中において学年が2つも離れている3年生のことを知っているものはいないが、それでも名前が響くぐらいには彼らは有名であった。

「じゃ、手短に自己紹介してくれ。まずは天喰から」

そう相澤が言うと同時に、1年生から見て右端に立っている黒髪の男子生徒の視線が鋭くなる。その迫力に皆が気圧される中、ポツリと漏らす。

「……駄目だ、ミリオ、波動さん……じゃがいもだと思つても全然そう見えない。何を話せば良いんだ……もう辛い……帰りたい」

そう言うその後ろを向いてしまう。天喰環。彼は極度の人見知りかつネガティブな人間であつた。それにクラスがざわつく中、隣の少女、呼人もよく、というほどではない

が知っている少女がフォローする。

「あ、天喰くん私知ってるよそういうのノミの心臓って言うんだよね！ 人間なのにノミって不思議！」

そうフォローなのか止めを刺しにいつているのかわからない言葉を天喰に投げかけると、1年生の方を向き直る。

「彼は『天喰環』くん。私は『波動ねじれ』。今日はインターンについて皆に話してほし
いつて頼まれて話に来ました」

職場体験ではなかなかの不思議ちゃんっぷりを見せつけてくれた波動だが、こういう場では一応ちゃんとできるのだ。

と思いきや。

「ヒヤクリューくん後でまた猫ちゃんになってね！ また見たいから！ 私楽しみにしてたんだよ、知ってた？」

「知りません。お断りします」

場の状況を無視してぶっこんでくるのは変わっていない。

「なんでー！」

「……合理性に欠くな」

まともな説明を始めるはずが呼人に向かって話しかけまくって波動に、相澤はポツリ

と呟く。自由人が多いとは聞いていたが、なかなかの自由人っぷりにその表情も引きつり気味だ。

「大トリはおれなんだよね！ 前途—!!?」

3人目の通形に至っては1年生の応えを待っているのだが、何を答えれば良いのかわからない彼らからは答えが帰ってこない。

「多難—！ よしツカミは大失敗だ—！」

その威厳の欠片もない様子にクラスメイトも怪訝そうな様子だが、呼人は珍しく頬を緩めていた。

通形という男から感じる気配は、なかなか心地よい。あるいは、彼らの足元に及んでいるような。そんな気配。

「まあ何が何やらって話だよね。俺もそう思う。いきなり現れた面識の無い三年生ってわけだしね。にしても、一年から仮免取得、って今年の1年生、良いよね。とても元気がある」

そうだねえ、と楽しそうに言う通形に、はつとした表情のビッグ3の残り2人がはつと顔を上げる。

「君たちまとめて、俺と戦ってみようよ—！」

やはりビッグ3などと呼ばれる人間は、どこか頭のネジの指し方を間違えているらし

い。

まさかの通形の案が相澤にも認められ、全員着替えてTDLを訪れることになった。

「あの、まじでやるんすか」

「マジだよね！」

困惑する1年生を他所に、通形は準備運動をしている。そんな通形に、黒板の代わりに壁に貼っ付いている天喰が声をかける。

「やめておいた方が良いミリオ。話すだけで十分だ。ミリオみたいに全員が上昇志向に満ちてるわけじゃない。立ち直れなくなる子が出るかもしれない」

「私知ってるよ！ 昔ヒーロー諦めてから問題起こしちゃった人がいるんだよね！ 大変だよ通形そんなことになっちゃったら。ね、ヒヤクリューくん！」

自由人に絡まれている呼人は、彼女の伸ばしてくる手を遠ざけながらも答える。

「まあ、大丈夫じゃないですか。ここまで俺相手に折れてないので」

「！ 言うよね君！ 何君だっけ！」

「ヒヤクリューくんって言うんだよ！」

「最後を伸ばさないでください」

「ヒヤクリユくん？」

「いえそうではなく」

事も無げに返した呼人にクラスメイトらは驚くが、同時に一部の者達は納得もした。呼人がずっと本気になつていなかったのは、通形の言うような事も懸念してくれていたのではないかと。実際演習においては自分たちの課題を明らかにしてくれるような動きをするし、その後そのことについてしっかりと指摘してくれる。個性の強化においても思いつかなかったようなアイデアを与えてくれた。思えば、ずっと身近にそういう相手があったのだ。

「通形先輩。我々はハンデありとはいえプロとも戦っている」

「それにヴィランとも戦ったことがあります！ そんな心配されるほど俺ら弱そうに見えるますか？」

「うん、いつかかかってきても良いよね。1人ずつじゃなくてもいいよー！」

あくまでお前たちは格下だという態度に、喧嘩っ早い数名は表情を歪ませ、そうでないものもかちんと来ている様子だ。そこまで全て通形の策略であるわけだが、それに気づくものはいない。

緑谷が一番手として前に出ると同時に、他のクラスメイトも動き始める。

「近接隊は一気に囲むぜ！ んじゃ先輩、ご指導のほど——」

——よろしくおねがいます！

切島が叫んだ直後。一番手の緑谷が動き出す。それを呼人は一番うしろ、少し離れたところで見ていた。

「ヒヤクリューくんは行かないの？ みんな集まつてるのに不思議！」

「いや、俺は一人で戦ったほうがおもしろそうだなと思つて。通形先輩強そうですし」「わかるの？ 凄いなだよ！ 通形！」

視線の先では、緑谷の攻撃を躲し、更に他のクラスメイトの攻撃も躲した通形が姿を消していた。

（服が落ちた、とすれば透過系、あるいは本体だけ瞬間的に別の場所にワープする類か、別空間に収納される類……）

そして直後、後方から攻撃していた数名がその攻撃にやられて倒れる。

（あの移動速度、ワープ……じゃないな、やっぱりすり抜けてる方の説明がつかない。明らかに姿が残っているし、芦戸の酸なんかは不定形だから形に完全に合わせて体を消すのは不可能だ。となると——俺と一緒に可能性があるな）

「お前らしい機会だしっかりもんでもらえ。通形ミリオは俺の知っている限り、最もN.O. 1に近い男だぞ。俺達プロも含めてな」

相澤の言葉が響き終わる頃には、半数近くが無力化されていた。大体のクラスメイトが近接に弱いメンバーだったのでまあわかるが、しばらく呼人と尾白が鍛えていた障子も僅かな抵抗の後に瞬殺されたのは通形の実力の高さ故のことだろう。

「凄いですね通形先輩。透過するだけの個性であそこまで自由に動けるとは。防御だけじゃなくて攻撃、移動にまで上手く転化してる」

ポツリと漏らした呼人の言葉に、近くで戦いを見学していた波動がびつくりした顔を向ける。

「ヒャクリューくん詳しいね！　なんで？　不思議！　通形見たことあるの？」

「いえ、見てたら大体わかりました。透過して物体に重なった後、おそらく弾き出される。そしてその先をなんらかの方法で誘導している。にしても、随分と怖い、というか命がけというか、危ない使い方しますね。まあ俺も人のこと言えませんが」

普段の基礎訓練から内蔵を危険に晒し続けている呼人が言えたことではないが、通形の使い方も呼人の推測が当たっていればなかなかクレイジーだ。

「どうゆうこと？」

「あれ透過してるとき——」

「百竜、見学してないでお前も行ってきたらどうだ」

波動に呼人が答えようとしたとき、近くで不参加の轟と共に見学していた相澤が呼人

に声をかける。

「行つたほうが良いですか」

「体験しておかなくて良いのか？ トップに近い男だぞ」

「それじゃあ、まあ」

一通り見たの後は頭の中で戦い方を組み立てて実際に動かしてみ、ということイメージでしたかったのだが、たしかに呼人の組み立てた最善と通形のやっている最善は違う可能性があるし、踏み込みなどの呼吸とも言えるものは実戦の中でしか見えてこない。

他のクラスメイトが倒された中、呼人は通形の前に歩み出る。

「通形先輩、遅くなりましたがお相手よろしくおねがいします」

「良いよ！ それじゃあ行くんだよね！」

ミリオが立っている場所から地面に沈み始めた直後、呼人は小さく飛び退る。通形の拳の射程とそれまで攻撃してきた地点から考えてここに飛び出してくるであろうという場所。直後、地面から飛び出したミリオの体そのまま呼人の体を縦に通り返けて頭上に出現する。

「おつ、やるね君！ でも甘いんだよね！」

呼人の頭から飛び出して状況を瞬時に察したミリオは片足を大きく振り上げて離脱

しようとする。だがその体は彼が思っていたよりも更に上へと運ばれた。呼人が手を變化させて伸ばしてその足と重なる部分を作り続け、より上方へとはじき出したのだ。空中に打ち出されたミリオに向かつて呼人は飛び上がり拳を放つが、当然ながらそれは透過される。だが狙っていたのはそれではない。勢いを調整していた呼人は通形とともに落下を始め、更に手を巨大化させて通形の胴体と常に被らせるように勢いよく振る。その移動の速度は相当のもので腕を一回転させる頃には呼人の動きも追いつかなくなり、通形は凄まじい速度で射出されていった。普通ですら高速で弾き出されるが、超高速の物体から弾き出されたのだからその速度は推して知るべし。コンクリートの柱に埋まって消えた通形は再び出現すると、いそいそとズボンを履く。

「君結構やるんだよね！ 今のはちよつと肝が冷えたかな！」

「あの見えてない状況からよく反応しましたね。それとも重なってない部分は感覚が戻ってきてるんですか？」

「戻ってきてるんだよね！ いきなり振り回されるからどうしたものかと思つたよ！でもよく気付いたよね！」

そこで相澤が声をかけて、呼人と通形の戦闘は終わりとなった。呼人も否やはない。彼の個性は、究極的に言えばほとんど不死身だ。仕留めるとすれば周辺一帯超広範囲を毒ガスで埋めるか、人間の知覚外からの攻撃で不意打ちするか。いずれにしろ、気づか

れていれば全て透過し、別の場所に弾き出されることで無効化されてしまう。仕留める
すがほとんど無い。本当に面白い個性の使い方だ。あれが出来る者はモンスタ―達
の中にもいない。おかげで血気盛んな連中が自分もやりたいとハッスルしはじめてい
て精神世界が大変である。

うづくまつていたクラスメイトが立ち上がり集まった所でミリオが声をかける。

「とまーこんな感じなんだよね！ ちんちん見えないように頑張ったけどごめんね女性
陣！」

「わけも分からず全員腹パンされたんですが……」

呼人以外は綺麗に全員腹へのパンチ一発で仕留めていたようで、揃って腹を抑えてい
る。だから鍛えておけと言うのに。少なくとも殴ったら相手の拳が痛いぐらいまで鍛
えておけば良いのだ。そんな脳筋なことを呼人が考えていると、通形が話を振ってく
る。

「じゃあ百竜くん！」

「はい」

「戦ってみて俺の個性とか戦い方について気付いていたみだいだよね！ わかったこと
を言ってみてもらえるかな！」

他のクラスメイトの、通形の個性をずるだ、強個性だという発言を受けての質問であ

る。

「個性は『透過すること』ですよ。高速でワープしてるように見えたのは、地中に重なって実体化することで弾き出されたから。透過するとわかっていれば狙ってくる実体化する瞬間への対策もできて。個人的に凄いなと思ったのは透過直後の位置の予想でしょうか。みていて目が泳ぐことが全く無かったので、位置を完全に予想しきれないんだらうなと感じました。後地中から弾き出されるのに空気中では弾き出されないのは少し疑問です。物質と重なっているという状況は同じだと思うので差はなんだろうかと」

「うん！　じゃあそこまでわかってるなら俺の個性のデメリットも当然わかってるんだよね！」

「透過している間、全ての物質を透過する以上光、後は酸素、それに匂い、音、触覚全て透過してしまうので、多分何も無い真つ暗闇ですよ」

「その通りなんだよね！」

「すらすらと答えた呼人にクラスメイトが奇異の目を向けるが、再度通形が話し始めたので視線がそっちに向かう。」

「今聞いたのを考えれば分かる通り、俺の個性つとつても使いにくいんだよね。例えば壁一つ通り抜けるにしても片足だけ実体化させたまま残して体を壁を通り抜けさせ

た後、最後に残った足を引き抜く。簡単な動きでもいくつか工程があるんだから戦闘で相手の体を通り抜けるときなんてもつと大変だよ。しかも透過するところによって息ができなくなったり何も感じなくなったりするわけだしね」

「まじ……急いできるときほどミスりそう……」

「何も感じなくなつて動けるもんなのか？」

「当然！ 出遅れたよ！ ビリッけつまであつという間に落ちたしついでに服も落ちた」

そう言う通形は自分の額を指差す。正確にはその先にある頭脳を。

「だから、俺は誰よりも早くないといけなかつたんだよ！ 他の人が見てから考える間に予測して動く！ そして時に見せて欺く！ とにかく『予測』だけが頼りなんだよね！ そしてその予測は経験によって生み出される！」

長くなつたけどこれが理由さ！ と力強く言う通形の言葉に、皆が引きつけられる。

「インターンにおいて俺達は『歓迎されるお客様』じゃなくて一人のサイドキックなんだよね！ プロと同列に扱われるのさ！ それは時にとても恐ろしい。ヴィランと一人で対峙するのは当たり前だし時には人の死にも自分の死にも立ち合うこともある！ でもそうやって得た全部が、学校じゃ絶対手に入らない『経験』なんだよね！」

「だからやってみようって話さ！ 俺はインターンで得た経験を力に変えてトップを掴

んだ！ ので！ 恐くても、恐いからこそやったほうが良いと思うよ！ 年生！

———そこで得た経験こそ、何物にも代え難い宝だからね！

そう言つて通形はしめくくる。自然と拍手が沸き起る。それだけ、彼の発言は力強く、そしてヒーローのものだった。

「百竜は通形先輩を知っていたのか？ 随分詳しいようだったが」

「大体推測と自分の個性に照らし合わせただけだ。動きを見てたらわかる」

「わからないから困ってるんだよ。ちなみにどういふところから推測したの？」

教室に戻る道中、一人通形に抗して見せたといふことで呼人はクラスメイトから質問攻めにされていた。

「そう言えばよ、百竜が言つてた『俺相手に折れてないので』つてどういう意味だったんだ？」

切島の質問に、そう言えばそんなことを言つていたとその場にいる全員が注目する。

「自分で言うのもなんだが、俺はみんなよりも強いし、それだけの努力をしている姿を見せている。でも皆は折れなかつたし、追いつこうとしている。だから実力差を見せつけ

られたぐらいで精神的に折れるのはありえないって話だ。そもそもここではオールマイトを見てたわけだしな」

実力的にクラスメイト達が抗しうるとは、正直思っていなかった。個性を使わない人でも、まだおそらく制圧出来る。だが少なくとも、危機感や憧れに由来する向上心は十分に持っているのを呼人は知っていた。

第59話 計画

『ちよつと思つてたのと状況が違ふことになった。お前、週末出てこれるか?』

呼人がそんな連絡を受けたのは、インターンの説明会があつた夜だった。

夏休み、『全てを見る』個性の持ち主と出会つて話した呼人は、神王寺やモンスター達と激しい議論を躲していくつかの今後の方針と、当面の活動について話し合つていた。その中のいくらかについて早速というのはなんだが方針が狂い始めていた。

そして週末、外出許可を取つた呼人は、久々に実家とも言えるかわからないマンションを訪れていた。

「まず一個目は例の組長だが……どうも再起不能になつてゐるらしい」

「まだ歳は大丈夫じゃなかったのか?」

「いや俺もそう思つてたんだが、『星詠み』に見させたところ、どうも何回やつても目的の人間が見えないつてことでおかしな話しだと思つてたんだが、潜つて探つてみたところ姿が変わつてた。後は植物状態だな。裏であの状態で生きてるつてことはまだ権力は持つてゐるみたいだが」

「実質動けない、と。いきなり詰まつたな」

神王寺の前に置かれたタブレットに移っているのは初老の男性の写真。古くからの神王寺の縁故のある人間であり、神王寺曰くかなりの実力者。今回の件でちょうど良いと連絡を取ろうとしていたのだが、どうもそうでは無かったようだ。

「後は周辺の間人を締め上げて吐かせたんだが、どうも後継者と方針の違いで揉めてたらしい。で、この後継者が先日ヴィラン連合と接触した」

「……方針が逆つてことは、ヴィラン連合と手を組むつてことか？」

「そんなところだ。一応揉めて一旦別れたみたいだが。で、後はそこを怪しんだヒーロー事務所が調査してる。言っても裏の組織だからな。やくざ者なんてのは」

「……」

「そいつらとコンタクトを取れないわけじゃねえが、どうする？」

「いや……ヴィラン連合ともめて大丈夫なぐらいの勢力があるなら何しようとしてるか探っておいてくれ。後はできればそれを当のヒーロー事務所に垂れ込め、でおくともう使えなくなる可能性が高いんだよな……」

困ったもんだと呼人は頭を悩ませる。ここに至ってはモンスター達も頭の中で議論を始めるが、いきなり名案というものは浮かばない。

「その後継者に関する情報は？ 何かあるか？」

「組長もそいつを大切にしていたし、そいつも相当慕ってたらしい。揉めたと言ってもそ

「いつが手を出した感じじゃなさそうだ。後は個性だが、どうも触れるだけで相手を殺したり、後はよくわからないことが出来るらしい。このあたりは多分深いところまで踏み込まないと駄目だな。今『星詠み』にそいつの過去を見てもらってる」

「組長を慕ってたからこそ、つてのはありえないか？ カタギに迷惑かけないタイプの人なら、もめたのはカタギと組織の拡大の天稔な可能性がある」

モンスターからのアイデアを伝えると、神王寺は難しそうな顔を一瞬するが、タブレットを机の上に投げ出して椅子にもたれかかる。

「どつちにしろ、見た情報がねえとどうしようもねえ。あいつあんな山奥なんかに住みやがって。もうちよつと行きやすい場所に住んで欲しいぜ全く」

「人の存在がうるさくてたまらないんだろう？ 仕方ないだろ」
「お前と違って俺は足回りもよくねえんだわ。あ、でもよ」

そう言つて今度は神王寺は机の上に乗れ出す。

「取り敢えず何人か呼べた。モーメントとリザード、後はモーメントの連れ子でまだ8歳のやつだが、その3人がもう日本入りしてて、後はまだ準備中だけど前向きなやつが何人か。あ一応メンバーこれな」

「なんで子供を連れてくるんだ」

「モーメントが知り合いで母親の虐待から助けたらしい。結構個性が使えるみたいだな。それを母親に良いように利用されてたんだとよ。放っておけないんだと」

そう言つてタブレットのページを切り替えると、そこに一人分のデータが表示される。それを読み込んだ呼人は全てを記憶すると、神王寺に突き返した。

アメリカはヒーローの活動こそ日本よりも更に活発であるが同時にヴィランの活動も活発であり、更にその社会性故か落ちぶれたものに救いの手があまり差し伸べられない環境にあるらしく、そこに小さな子供を身寄りなしに放つてということだろう。

「絶対表にいさせたほうが良い人間だな」

「けどモーメントから離れたがらないらしくてよ。俺に恩義があるってんでしばらくは手伝つてくれるが妹は裏に引き込まないで、なるべくなら光の当たる場所に出してやりたいと言つてたな」

「妹つて……まあそういう関係性か。となるとやつぱ、前言つてた表側の教育出来る人間がいるよな……」

「俺じゃ駄目か？」

「お前は俺の計画に乗つてる時点でだめ。特に表に帰すことを考えれば、環境も環境になるだろうし相当なヒーローに来てほしいんだけどな……」

「ヒーローさらつて来いってか」

「いや、事情話したら見せてくれそうな奴。なんなら『エネルギー理論』まで教えても良い」

「お前それ理解じゃなくて脅しじゃねえか。『手貸さなかつたらどうなつても知らないぜ』ってなもんで」

「まだ俺がそっち側に入り込むとは決めて無いからな。まあ、最悪お前が治したヒーローからその恩にひっかけてまともなやつを……インゲニウムとか確か人格者だったよな。てか死体になった後に盗めば良いんじゃないやねえのか」

呼人がそう言うと、神王寺はこれまた嫌そうな顔をする。

「あのな、俺が協力するって言つても個性の安売りはしねえからな？ それにどっちにしろ現役のヒーロー勧誘するのは上手くねえつて。まだ記憶弄れるやつも来てないしよ。逃げられて調査されたらことだって」

「目処は？ ドリームイーターかナイトメアが勧誘できそうなんじゃなかつたか？」

「どっちも今の組織との関係がまだ断ち切れないらしくてなあ。俺がちよつと行つてくることがなりそ。下手に揉めると向こうで立ち上げ時に苦労しそうだしよ」

「アメリカのアンチルーラーズと後はスペインのレーバテイン、エジプトのアツラー・アクバルとは一応連絡は取れてんだよな？」

「他にも何箇所か。連絡自体は取れてるがどこもそんな慈善事業に手を出せるほど余裕

はねえって話ばっかだな。結局はヴィランであることに変わりはない。今お前が言ったところはこつちから手さえ貸せば前向きだけどよ。アクバルなんて半どころか全宗教団体だぜ」

裏側にいる人間というのは誰もがそれぞれに目的を抱えているわけで。中には目的なんて大層なものはないただ暴力を解放したいという相手も多いが、当然ながらうまく使うのなんてそうそうは出来ない。

「後は……あれだな。ビルドメイクはまだ情報収集するからつつてしばらく手が離せないらしい。とつとと潰されてくれねえかなあの組織」

「確か、異能解放軍だったな、そいつがいるのは」

「そ。正直ヴィラン連合より大事だぜあつちは」

「そこまで膨れた根気と努力に敬意を評したいけど思想がな」

「お前とは真逆、つてな。困った話だ」

はあ、と2人は揃ってため息を吐く。

「お前、暇なら裏闘技場に潜っていい人材探してくりやあ良いじゃねえか」

「んー……お前は？」

「万が一殺された時に生き返ると事だ」

「それも1つの手ではあるが、歩兵にしかならねえだろそれじゃあ」

「手が足りてない人間の言うことじゃねえな。俺のつてが無けりやあそもそも勧誘だって出来てねえぜ？」

「それは素直に感謝している」

呼人が考えていることを話した後。色々な方針や社会に存在する様々な組織のこと。それらを教えてくれたのはずっと海外や日本で裏に潜っていた神王寺だった。呼人もそこで初めて知らされたのだが、特に海外においては神王寺のヴィラン名というのは影響力が高いらしい。それこそオール・フォー・ワンと比べれば小さいが、それでも名前を聞けば動いてくれる人間はいるぐらいの。ヴィランと言っても実際はそういう人間と交流があっただけで本人が悪事を積極的に働いていたわけではないのだが。それでもヒーローとしての知己よりも暗い部分の知己の方が多そうさ。

だから計画を立てた後も、実際に動き続けてくれているのは神王寺なのである。

「まあ、後は他の奴らの返事待ちだな。何人かは答えてくれるとは思うが」

「まあ方針が完全に固まるまでの時間稼ぎは任せる」

「お前もやるってんならいつまでもそっちにいないでこっちに来いや」

そう言われてはじめて、呼人は罰の悪そうな顔をした。

「せめて今年までは、行っておきたいな。結構楽しいんだよ今」

「知つとるわ。つたく、こんな馬鹿みたいこと考えねえで普通にヒーローになつとけば

良いのによ」

「それで救われない人間も、救われたのに恨む人間もいるってのはどうしても気持ち悪いんだよ。だからこれは、ちゃんと俺の意思だ」

「そうかよ」

自分が楽しいことよりも、自己に課した指名を優先する。基本的に自己中心なのはずの百竜呼人という男は、何故かそう出来ているのだ。

「あーそれと個性特異点の方はどうにかできそうか？」

「理論的には、出来るらしい。ただまだ俺が扱いきれないな。やるにしてもルーツの力を借りないといけないし場所を考えないと」

「そーか」

しばし沈黙が降りた後、どちらからともなく席を立って料理を始める。適当に野菜を切って肉と炒め、そこに米を放り込む。炒飯を作りながら、神王寺はもう一つの件について話始めた。

「後ヴィラン連合の方だが、こつちで繋がってた奴が切られた。多分あの義爛って名のブローカーの仕業だとは思うが……あいつぶつ殺しときや良かったかな」

「短気か。結局まだヴィラン連合は存続してるんだろ？」

「今も裏での影響力は上がり続ける一方だ。名前ばかり先行してる状態だけどな」

オール・フォー・ワンが死んだ後にここまで成長するとは正直思ってたわ」

「お前ももうちよつと日本に寄り付いとけばよかったのにな」

「こつちの裏にはずつとあいつがいたからなあ。どこに手を出しても追手が来やがるし、めんどくさくなくなって逃げちまった」

『星詠み』さんには迷惑をかけるな」

「あいつの容量も小せえからなあ。あんまり情報収集がはかどらねえのが辛いとこだ」

「俺からもよろしく言っておいてくれ」

「お前が来てくれれば喜ぶぜ。見ようとしても見えない相手は初めてだっていつも言ってるよ」

「そうだな」

軽口のように交わされるのは、ヒーロー達が血眼になって追い求めている情報だ。だが彼らは、それを明かすつもりは今はない。裏側にも、道理があるとわかっているから。救われなかった人間がそれを恨むのは当然の権利であるし、救おうと活動したところで救いきれないものも、人の世界で行きていけないものも現実存在する。

それらをすべて打倒し、一般の人たちに幸せと平和を享受させようというのが、オールライト、そして現代のヒーロー達のやり方だ。

だが、残念ながら呼人はそれには賛同出来なかった。確かに、人がこの数で社会を形

成して生きていくためには制限されなければいけないものは多々ある。例えば人を傷つけることを趣味として楽しんでいるとか、そういうのは呼人も叩きのめせば良いと思う。

だが例えば。多くの人間が夢をいだき、大切にするといい恋心。それが歪んでしまい、それを持つこと自体が罪になる人間が居たとき、彼女は一生自分を抑え込んで生きなければならぬのだろうか。社会一般の常識で言えばイエスだ。

だが呼人から言わせれば、ノーだ。だってそれは、公平じゃない。人の抱く感情を制限されなければいけないというのは。

あるいは、誰も助けしてくれない中救われて、色々と教えられた相手を大切にするといいのは？

そんなの、人間であれば当然のことだ。

だが同時に、過去のオール・フォー・ワンのようにヒーローすら及ばないほど強力で大規模な被害を及ぼす存在が出てこられては困る。

ただ力を持て余したヴィランは適度な脅威として暴れさせ、本来はそちらに染まらなくても済んだ子どもたちを救い出して光の当たる場所へ返す。そして人の世界ではみ出す者達は、ヴィランとして生きていく。そして生きる人々は、今よりも生きることによって価値を見出すように、なってくれれば嬉しい。方針もぐちゃぐちゃで、何より根底から

矛盾しているような計画が、呼人の理想なのだ。

第60話 異国の少女とモンスター

休日に呼ばれてから更に数日後。インターン先を神王寺の所と決めた呼人は、日を空けずに彼のところに入り浸っては議論を重ねていた。

「あーそーいやこの間の件取り敢えず『星詠み』に聞いてまとめといたぜ。一応これ資料な」

実家とは別に新しく神王寺が借りた拠点で情報の整理と媒体への書き込みを行っていた呼人は、神王寺から手渡されたタブレットにすらすらと目を通す。そこには、当該ヤクザ組織『死穢八斎會』の幹部クラスの構成員と植物状態の組長に関する情報、そしてそれに関するヒーローの調査の状況、そして一人の少女について事細かに記録されていた。この量の情報を書き出してくれたのは『星詠み』も神王寺も努力してくれたのはわかるのだが。

それに目を通すほどに、呼人の額に深い皺が刻まれていく。

「乗り込むか？」

「…………いや。ナイトアイ事務所に匿名で情報回しておいてくれ。後モーメントは、今日合流出来るんだよな？」

「そろそろ来るはずだ」

神王寺の答えに、呼人は大きく息を吐いて脳内を整理する。

「八齋會が制圧されたら鉄砲玉と若頭、組長を回収しておいてくれ。その後は組長を若頭に起こさせて処遇は組長次第、で良いか？」

「治崎が組長を助けなかつたら？」

「ぶん殴つて意地でも治させ——」

言葉の途中で弾かれたように呼人は壁の方を向く。突如としてそこに気配が3人分出現したのだ。

「治させ、がなんだつて？ 俺の妹のことなら聞きづてならんなあ」

そのうち一人の、フードつきの長いコートを纏った男がそのフードを降ろしながらそう呟く。フードの下から現れたのは、陽気な外国人の顔で、とても「イイ」顔で笑っていた。

「お前の話じゃねえぞモーメント。お前の大事な妹が怖がつてんじゃねえか」

そう言われて慌てて彼は自分のズボンを掴んでいる少女の方を振り返る。

「『悪いアーニヤ！ 怖がらせちまった！』」

「『おじさん、もうそんな怒らないで。私なら大丈夫だから』」

2人の会話に、呼人は無粋だと思いつつも割り込む。英語で話していた2人だが、

呼人も簡単に話すぐらいはわからない。

『大丈夫じゃないぞ』

そう言つて少女の前にしゃがみ込むと、その閉じた目と視線を合わせる。

『お前が望んでないのに、治せつて言うのはおかしなことなんだ。嫌な事はちゃんと嫌だと言えばいい。俺は百竜つていう。よろしくな』

『よ、よろしくおねがいます』

良い子だ、と呼人がアーニヤと呼ばれたモーメントの妹の頭を撫でるのをモーメントは険しい目つきで、そしてもうひとりの、何故か白のスーツを着た男は微笑ましそうな表情で見ている。

「僕の新しいリーダーさんは、随分紳士なようだね」

「あんたがりザードか。あんたもよろしく頼む。それにしてもそのスーツはなんだ」

「美しい女性と出会う時はちゃんとした服装にしないと。『チャオ、かわいいお嬢さん』
しゃがみ込んだ呼人と違って、あくまでスマーフトに腰を曲げ、リザードはアーニヤと顔を合わせる。スペイン人は情熱的な人間が多いと聞くが、彼はどちらかと言えばイタリア人よりであろうか。

そしてそんなりザードを、モーメントは表情を険しくして睨んでいる。

キャラの濃いクラスメイト達よりも更にキャラの濃い新メンバーに、呼人は深い深い

溜め息を吐いた。

ちょうど昼時ということでアーニヤの好きなようにピザやハンバーガーなどをデリバリー注文した後、呼人がアーニヤと別室で遊んでいる間に神王寺に細かいことを説明してもらったことになり、呼人は自分が考えた方針を細かく伝えた後、3人で議論してもらおうようにとタブレットも残してきた。まだ、積極的に関われない自分が決めて良い段階ではない。それに人数も多くない。だから力を貸してくれるメンバーで、という判断だ。

そして別室に移動した呼人は、並べられたソファアーにアーニヤと隣り合って座っていた。

『何して遊ぶ？ アーニヤ』

『え、えっと、百竜、さん？』

『なんだ？』

『遊ぶって、何すれば良いの？』

その質問に、呼人は一瞬言葉を失う。だがすぐに、モンスター達の提案を受けて笑う。

『じゃあ、そうだな。俺と、俺の仲間たちと一緒にまずは遊ぶってことを覚えようか。ほら、両手を出して』

『こう？』

アーニヤが困惑しながらも差し出した両手を、呼人はそつと握る。モーメントから軽く知らされた話で、彼女の個性と、それ故に彼女が受けてきた扱いは知っていた。とても強力で、人の為になる個性。それでも、それを持っているために人に使われ、笑えない子供というのはいる。そんな子を助けるのもまた、呼人の望みだった。

『ほら、じゃあおいで、俺の仲間達のいる世界へ。俺の手に集中して』

言われて、やり方がわからないのか眉を少ししかめていたアーニヤの体から力が抜け、呼人の方へと倒れ込む。その手を呼人は、しっかりと握っていた。

『(ハハ)はど？』

『ここは俺の心の中。そして、俺の仲間達がすんでる場所。』おい、キリアとキリン、あとケルビと……とにかく小さい子と遊べる奴ら来て』

呼人の呼びかけに応じて、心の奥底からモンスター達がそれぞれに姿を表す。その気

配に怯えたのか、アーニヤが呼人の後ろに隠れる。

「人？ でも変……」

「アーニヤ、この人達は元は人じゃない。でも、今は人として動けるんだ。そうだな。例えば犬、わかる？」

アーニヤが頷いたの確認して、呼人は説明を続ける。

「犬が、人間みたいに話して、一緒に考えたり遊んだり出来るんだ」

「動物さんと話せるの？」

「まあ、そんな感じだ。ほら、行っておいで、皆も待つてくれてるよ」

「でも……」

何か訳のわからない状況に怯えるアーニヤだが、キリンとキリアが暖かな、草原の上を走り回ったり、一緒に川で遊んでいるイメージを送ると、それに惹かれたのか少し呼人の背中から顔をだした。その手をそっとケルビが掴み、更にポポがその頭を撫でて連れて行く。

その背中を見送った呼人は、大人の女性人格を持つモンスターたちから性急過ぎると怒られていた。そもそもこの精神世界に引き入れるというのは、夏休み中、モンスター達から秘密を明かされたようやく使えるようになった力であるし、まだ引き入れたことがあるのは神王寺と、『星詠み』の2人だけ。それに怯えている少女を更に別の場所に連

れてくるのはいかなものかと。

そんな説教を受けながら、呼人は草原の花畑で遊んでいる子どもたち（に見えるし人格もそうだが経験は一人を除いて不老不死級）の姿を眺めていた。

やがて、説明が終わったと神王寺が呼びに来たので呼人は意識を失ったままのアーニヤの両手を握ったまま複製した腕で抱えあげ、元の部屋へと戻る。最初からこうしていれば話も聞こえないし良かったのではないかと。

そのアーニヤを見たモーメントがガタリと大きな音を立てて立ち上がるが、別に複製した腕で彼も精神世界に案内して楽しそうにしているアーニヤの姿を見せて納得してもらった。

「で、モーメントは取り敢えず計画は良いか？」

「問題ない。そこまでアーニヤに優しくしてもらったら手貸さんと男が立たないだろ」

「モーメント君は随分妹さんが大事みたいだね」

「当たり前だろうが」

ふふつ、と不機嫌そうに照れるという器用な真似をするモーメントを見たりザードは

笑う。

「リザードは取り敢えず当初の計画通り……」

「救われない子の目処立て、でしょ。わかつてる。ついでに美味しいもの食べさせてあげるぐらいは許してほしいけどね」

「まだ助けた後迎え入れる体勢が整ってない。場所の選定と建築物作れる人間が来たらとつとつ作りたいがそれも人員がな……」

「うーん、じゃあ僕が優しいレディを連れてきて上げれば良いのかな？」

「だからそういう人材がいるなら先に教えてくれと——」

情報を後出しにするリザードに神王寺が苦言を呈するが、彼の表情は変わらない。

「言っておくけど、彼女は裏の人間なんかじゃないからね。とても優しい、一人の女性さ。君たちのことを信用してない段階で教えるなんて出来ないよ」

「じゃあ取り敢えず信用はしてくれた、と」

「子供を大切にしてくれるのは良かったよ。と、言うことで僕は一旦帰国するから」

そう言つて立ち上がったリザードは、他の3人が止める暇も無い中部屋から出ていってしまう。なんとというか、会話のあちこちから気障さの感じられる人間だった。

「あー……まあじゃあ俺の方もまた何かあつたら連絡してくれよ。アーニヤと住める家も探しとかないとな」

「ここは一応そのつもりで借りたんだぜ。俺達の議論場所にもなってるが、そのために部屋が複数あるんだ」

「まじで！」と驚くモーメントからは、その容姿以外ではとても外国人という様子は感じられない。言葉の通じ無さで言えば、ラージャンとかガルルガとかの方がもつと異邦人感激しいのだ。

「けど、見て思ったんだがこの治崎って組の頭、結構やばくないか？ トレイターとか百竜なら——」

「モーメント、この国では神王寺かジ・アドベンチャーで通してるんだ。裏に完全に潜るまではその呼び方はやめてくれ」

「まあお前ら2人なら死ぬような事はねえけどよ。ヒーローも多数死ぬぜ？ これ相手じゃあ」

『星詠み』が見る映像は細部に渡り、更に繰り返し、あるいは減速しながらみることも出来る。だから、特に脅威たりうる戦闘能力の部分に関しては丁寧に見て報告をくれている。それによれば、死穢八斎會の若頭、現在の実質の頭領の個性は、触れただけで相手を殺すことが可能で、更に素の戦闘能力ですらずば抜けていると来ている。ヒーローの1人や2人、簡単に血溜まりに変えることが出来てしまう。

「お前らもヒーロー死なすつもりはないんだろ？」

モーメントが懸念しているのはそこだ。自分は悪事にも手を染めろと言われれば染める。だが少なくとも現行の彼らの活動方針では、人が死ぬことを積極的に目指しているわけではないはずだ。

「そこは俺達が出せるところじゃない。ヒーローの作戦が成功するかどうかって話はない。俺達が狙ってるのは作戦終了後のメンバーの奪回。その過程で死者を出す気こそ無いが、それ以外で死ぬ分にはどうしようもない」

「なーんてことを言ってるけど、怪我人に関して死にかけてるのは俺が後でちゃんと治しに行くさ。ヒーローも端から殺されるだけの相手を向かわせないだろ。せつかく確保した容疑者を奪うわけだしそれぐらいのお礼はせんとな。それに、まあ……」

なあ？ と目線で尋ねる神王寺に、呼人は頷く。

「この程度の相手を倒せないヒーローばかりじゃあ、そもそも俺達の計画の一個が若干怪しくなる。そういう意味でも、試させてもらうよ」

さいですか、とモーメントは頭をかく。そう言うことであれば自分が口を出すことでもないだろう。どうせモーメントは、半分雇われて、そしてあの国、自由を謳い、傷つけることまでもが自由だと言わんばかりの国にアーニヤをあれ以上いさせたくなかったのだ。それが住む場所と食料、ついでに給料も出してもらえるとなれば願ったりだ。この国なら、すぐにちゃんとした学校には行かせてやれないまでも勉強は出来るし、こ

の集団を抜けた後はそれこそ学校に通える。

そんな、あくまで損得勘定でモーメントは呼人達の元へとやってきたのだ。

「我々ナイトアイ事務所は、およそ2週間ほど前から死穢八齋會という指定敵団体について——」

一方こちらは、裏側であんな計画が進行しているとは思ってもよらないナイトアイが集めたヒーロー達が、死穢八齋會についての説明を受けていた。

死穢八齋會という組織について調べたきっかけ、そして現在裏でどのような活動をしているかなど、淡々とした説明を行っていく。更に、当該団体がヴィラン連合と接触していることが説明されると僅かに部屋がざわついた。

そしてその後説明が続き、最後にサー・ナイトアイが口を開く。

「そして先日ですが、この件に関して匿名の情報提供がありました。匿名のメールで送られてきたので送信元はわかりませんが、死穢八齋會の主力人員の個性、来歴、そして拠点などについての詳細な情報が書かれていました。そして最後に、『子供を泣かせたらぶっ殺す』という一文が付け加えられていました」

サー・ナイトアイの発言に、それほど広くない会議室がざわめく。一体誰がそんなことをしたのかと。あるいは、当然ながらそのヒーローもこの部屋に呼ばれているのだろうと。

そんな考えに、ナイトアイは釘を刺す。

「あらかじめ言っておきますが、ここにお呼びしたヒーローの中にその情報の提供者はいません、というよりは、その情報は真偽のほどは置いておいて、精度で言えばとても外部の人間と思えるものではなく、そして内容で言えば、内部の人間が書くとは思えないほど重要な秘密に触れています。よって、その内容を精査、再調査して信頼できる情報を獲得するというのも、先程述べた調査の目的となります」

そう説明したナイトアイにロツクロツクが異論を唱える。

「そんな情報危なくて使えるわけねえだろうが。そもそも毘だつたらどうするって話だ」

「そうです。ですからあくまで調査はフラットに。ですが、場所の調査が進むほど情報の信憑性が増します。そしてその情報には、救助対象の少女の個性、加えて調査で判明していなかった幹部の事も記載されました。これらが事前に確認できていれば、対策を立てることが可能です」

救助対象の少女の個性。その言葉に、緑谷たちは、つい先程述べられた少女に対する

ヴィランの仕打ちについて思い出す。

『少女の血や組織を使って作られた弾丸』

それが事実であれば、一体その個性はどんなものなのか。それを思わずと言ったように緑谷が尋ねる。

「あの、ナイトアイ、そのエリちゃん個性って、なんなんですか？」

「……情報を信じるとすれば、巻き戻す個性だ。怪我人を怪我直前の状態まで巻き戻す。そして、この情報のせいで情報の信頼度が大きく下がるが、初めて個性が発現した時には人間を一人、おそらく精子と卵子以前の無の段階まで巻き戻して消してしまっているようです。また治崎は、この個性の巻き戻す対象を限定し、人間の中の個性因子だけを巻き戻すことで、世界から個性という存在を消そうとしているようです。詳細は後ほどお配りします。信憑性の判断も含めて皆さんには目を通していただきたい」

あまりに細かすぎる、そして壮大過ぎる話に、誰もが流石に適当なネタだろうとため息を吐く。だが同時に、それを匿名で、そして当たっている部分もあるというのがおかしな話だ。

「可能な限りの早期解決を目指します。ご協力よろしくおねがいします」

とはいえ、その情報の信憑性に関わらず情報の裏を取って少女を救い出すことには変わらない。

ヒーロー達が動き出す。一人の少女を救うために。

第61話 死穢八齋會

そこから数日。ジ・アドベンチャーについて日本中を巡っていることになっている呼人は、たしかに手空きの時間は神王寺とともに県内の農村部などに赴いてはちよつとしたパトロールなどをしながら日を過ごし、拠点に戻った後はアーニヤとモンスター達を遊ばせながら神王寺や星詠みからもたらされる情報や、リザード、モーメントからのちよつとした報告を聞く日を過ごしていた。

この間インターンということで長期の公欠はおかしくないのだが流石にクラスメイトに心配されたものの、休み無く日本中を巡っていると云っておいた。はつきりと嘘をつくのは初めてだが、あまり心地の良いものではないのだなと、初めてそれを実感した。が目的が変わるわけではない。

そして見張っていたモーメントからヒーロー達が勢揃いしていると連絡が来た。早朝。呼人も彼に連れられてそれが見える場所に、と言つてもはるかなるモンスターの視力なので距離にして一キロ以上離れているが、現場が見える場所まで行く。

「んじゃあ、俺は全部終わった後に犯人の奪取、つと」

「ああ。病院まで搬送された後で構わないからな。あまり早い段階では無しだ」

「そこまで気を使うならやらなけりやあ良いと思うんだが」

「歪んだ理想なのは理解してる。じゃあ、よろしく頼んだぞ」

はいはい、とモーメントは首を軽く鳴らすと姿を消す。呼人ほどの視力が無い彼は、もつと近くで見えていないと状況がわからないのだ。

そして戦闘が始まる。死穢八齋會の人間も抵抗はしているようだが、さすがヒーロー達と言わなければならない制圧し邸内に侵入していく。

そこから先は外から見えているだけの呼人には正確には計れない。何故なら、死穢八齋會の拠点である建物は地下に広大に広がっているからだ。若頭である治崎と、鉄砲玉と呼ばれる実力者連中の一人がそういう物を自由に改変できる個性を持っているので、それを使えばそうした構造を秘密裏に作ることも容易い。

やがて、しばらく見ていると地上の方で動きがある。

「蛙吹と、麗日。ちゃんとやれてるな。にしても、あれが例のドラッグか。いびつだな」
ポツリと漏らした言葉は、風に溶けて消えていく。

呼人は、モンスター達から個性に関する重大な秘密について聞いた時に、それに関する知識として神王寺の知っている個性に関する薬などについても聞いていた。そしてそういうものは、撲滅すべきものだと考えていたので、現物の効果をその目で見るこ
とが出来たのは大きい。

『エネルギー理論』と呼人たちは名付けているが、個性にはちゃんと来歴があり、その源を、仮にエネルギーと呼ぶとする。それが個性を使える原因なのだが、それが物理的に見える場所に因子として出ているのを良いことに好き勝手にそれをいじろうとする人間が多いのだ。特に裏の人間に多いのは、彼らが倫理を平気で踏みにじるから。そして、個性なんて強い方が暴れやすいから。いずれはそれらも制圧したいとは考えているが、できそうにない。とすればそうしたものは、特に危険な物を裏から排除すべきだとそれに関する情報収集も呼人は神王寺を介して行つてもらっている。

その活動はヒーローのようなもので、実際にヒーローとして活動すれば良いかも知れない。だが、呼人はそうした歪みと自分が考えたものは消しつつも、一般的なヴィランを捕まえるつもりは全く無かった。だから、ヒーローではない。文字通り個性を勝手に使つて暴れるヴィランとして、勝手に気に入らない物を叩き潰していくのだ。

やがて戦闘は更に移行し、地面を突き破る形で何かが地面から生えてくる。そこにいるのは、少女と、死穢八齋會の首領であろう男と、そして緑谷。

「おいおい……」

まさかあの治崎を相手にまだ学生の緑谷が先行しているのかと呼人は思わず言葉を漏らす。動きを見れば、技術的には拙いものの少なくともパワーアップの出力的に十分なものがあるように見える。おそらくは、更に四肢を壊さないまま個性の出力を高め

ることに成功したか。

そしてその後、少女は緑谷の手によつて奪還され、戦闘は死穢八齋會の敗北で終わる。死者は、少なくとも見える範囲に消し飛ばされた人間はいないし、死の気配はない。数名重傷者や疲労困憊の人間がいる様子だが、

「満足かリーダー」

「ああ。奪還は？」

「しばらく空けてからつて言ったのはお前だろ。先にあんたを運んどこうかと思つて」

奪還した後は、全員を郊外の廃墟、と言つても神王寺の手で内装がかなり修繕されているところへ運び、そこで事を済ませる算段になっている。運搬は基本モーメントと個性持ちの対策の為に神王寺が向かうことになっている。久しぶりに裏の衣装を切ると神王寺が柄にも無く感慨深そうにしていたのは見ていて奇妙な気分だった。

「わかった」

「そんじやま失礼して」

モーメントが呼人の背中に手を当てる直後、視界が二転三転する。幾度かの変化を経た後、そこはそれなりの広さがある部屋だった。

「ほんとに希少な個性持ちを引き入れられてありがたい限りだ」

「礼ならアドベンチャーに言っておけ」

「そうする」

じゃ、と短く言うと、モーメントは再び姿を消す。

モーメントの個性は『瞬間移動』。文字通り想像した先に移動する。色々と移動先の条件はあるらしいが、訓練によって最大射程1キロ以内であればいつでも移動できるとのことだった。そしてクールタイムは最大射程でも1秒程度。また触れたものを最大人間3人程度の重量で運ぶことが出来る。まあなんとするか、彼も何故表にいないのかと聞きたくなるような人材だ。事件現場への移動なんかも考えて、彼も引く手あまたの人材であつたらうに。

しばらく待っていると、次々と、担架に似た拘束具で拘束された死穢八斎會のメンバー達が運ばれてくる。対面の時は近い。

「お前、なにもんだ」

「oops。なんか良くねえとこに来ちまつたみたいだなこりゃ」

幹部連中の運搬を終え、最後に残った若頭治崎のところへとワープしたモーメントは、そこでめんどくさいものを見てしまった。ヒーローらしき人間が、ヴィランらしき

人間の個性によって閉じ込められる瞬間だ。別に知らない人間の犠牲はどうでもいい、とてもどうでも良いのだが、さてヒーローが犠牲になるとはリーダーも考えていなかったなと首を捻る。結果。その圧縮された空間へと飛び込んでヒーローを回収して外に飛び出した。

「あつづ!! 燃えてんなら先に言えや」

回収したヒーローは、下半身が焼けているものの一命を取り留めている様子で取り敢えずそのへんに放り出しておいた。そして改めてヴィランらしき連中、いや、ヴィラン連合へと向き直る。

「あー俺は取り敢えず治崎を一発ぶん殴りてえからって連れてこいって言われたんだが、お兄さん方もしかして治崎君に用があつた感じ?」

「……用はあるが連れて行くつもりはない。こつちの用がすむまで待つてくれるならこつちも手出しはしない」

「あ、じゃあそういうことで。でも殺すのは勘弁な。死体殴つても楽しくないから」

そう言つてモーメントは、壁の花ですよとでも言いたげに倒れたトラックにもたれかかる。胡散臭そうな表情で見ていた死柄木だが、本気でモーメントが邪魔しようとしなさいのを見て取り死柄木へと近づいていく。コンプレスの拘束をたやすく突破し、かつ目にも止まらぬ速度でヒーローを救出した相手をすぐに相手したくないというのもあつ

た。死柄木は、いきなり喧嘩を売らないということを学んでいるのだ。

だが、当然興味は抱く。その個性にも、実力にも。

治崎を散々煽りその手を破壊した後、死柄木は改めてモーメントを振り返った。

「あんた、どういう個性か知らないがヴィラン連合って知ってるか？」

「あー一応。つつても俺アメリカンなもんであんま詳しくないんだわ。すまんね」

「そうか……。あんたなら思想次第じゃあ受け入れてもいいかと思っただが、興味が無いんじゃない。帰るぞお前ら」

すぐに勧誘を諦めて、死柄木は去っていく。個性も得体も知れない人間と同乗するつもりも、連絡先を渡すつもりもない。そんな愚は犯さない。場面が悪かった。ただそれだけのことである。

ヴィラン連合が去った後、モーメントは拘束された治崎に近寄る。

「何者だ、お前は。……ヴィラン連合じゃないのか」

「ちよつと訳あり。取り敢えず失礼するぞ」

死柄木らによつて切断された手を避けて腹に手を当てたモーメントは、個性を使用して彼を運ぶ。生きていれば、というか最悪肉体があればどうつてことないのに、ほとんど五体満足で回収できたのは運が良かった。後は、アドベンチャーとリーダーの仕事である。

個性で顔を変質させて隠した呼人は、次々と運ばれてくる死穢八齋會の人間にお前らは何者かと問い詰められていた。中には、クロノや窈野など暴れようとする人間もいたので、個性を無力化した上で穩便にぶん殴って黙らせておいた。神王寺はニヤニヤと面白そうに眺めているし、殴った相手も何のつもりで連れてきたのかとごねてめんどくさい。

そうこうしているうちにモーメントが治崎を連れて戻ってきて、後は寝たきりの組長だけとなった。

「若頭ー」

両腕を弾け飛ばされた治崎の姿に、鉄砲玉の面々がざわめく、というか数名は駆け寄っているし、個性が使えなくなったということにわずかに驚きの声を漏らすものもある。そんな中、神王寺が彼のの前へと歩み出た。

「腕を治してやる」

「は？」

「俺なら腕を治してやれる。だからお前は、組長を治してくれや。知り合いなんだよ、古

「い」

神王寺の言葉の後、しばらく黙っていた治崎は絞り出すように答える。

「……治せ」

まだ、組長に返せるだけのものが出来ていない、どころか全てを失ってしまった。だが、腕はこのままでは絶対に治らない。であれば、治させてしまえばどうとでもなるという判断での返答だ。

「じゃあ両手を揃えて手を前に出せ」

「……どうやって治すつもりだ」

「俺の血をぶっかける。そうすれば見事治る。そういう個性だ俺は」

血をかける。その言葉に、治崎は顔をしかめる、どころか思い切り聞こえるほどの音で歯を食いしばりながらも、その腕を差し出した。潔癖症の治崎にとつて、他人の血なんておぞましくて仕方がない。だが、そうしなければ手が返ってこない。

治崎の差し出した両手に、手のひらをナイフで切り裂いた神王寺がその血をかける。直後、ドクンと治崎の体が揺れると同時にその手先が光始め、そのまま光が欠損した腕を形作っていく。2分程の後には光も収まり、完全に回復した治崎がそこにいた。

「おお……！」

「治りやがった！」

他がざわめく中、静かに手を動かして感覚を確かめた治崎は静かに立ち上がる。

「礼は言わないが、目的ぐらいなら聞いてやる。組長を治させてどうするつもりだ」

「治崎！ やはり貴様……！」

声を荒げる者も約1名いたが、他の者に制圧された。治崎の問いに、神王寺に変わって呼人が説明する。声は、声帯模写の技術で全く違うものに変えていた。

「裏社会に顔が効く、そして一般人に積極的に害を与えない人間に一大組織を作ってもらう。オール・フォー・ワンみたいな巨悪や、ヴィラン連合なんて無法者の集団はいらん。必要なのは、社会からあぶれた人間が生きていける、適度に統制された悪だ。組長には、その一角を担ってもらうつもりだ」

「……オール・フォー・ワン亡き後の裏社会は俺が支配する。親父には、それを手にしてから捧げる」

「お前は、今の思想ではオール・フォー・ワンに変わる巨悪になりうるから駄目だ。一度組長に徹底的に叱ってもらえ」

「言葉には気をつけろ」

呼人の言葉に、治崎の額に青筋が走る。普段は穏やかな人物を演じている治崎だが、今はヒーローに対する敗北で気が立っていた。だから目の前に立つ神王寺と、その後ろの呼人に向かって手を伸ばす。そしてそれぞれの体に触れ、破壊した。

結果。神王寺の体は粉微塵になった端から一瞬で再集合するかのように再生し、呼人はそもそも破壊されなかった。

「言葉には、何だ？」

そう言った呼人は、治崎ですら反応できない速度でその腹を殴って壁に叩きつける。

「お前は確かに実力も、知性も高水準にあるが、俺の計画には不向きだ。少なくとも組長の管理下に入らない限りは生かしておくつもりはない。それとも、俺に従う奴以外はここで死んでおくか」

ゾクリと。やくざ者達の背中に悪寒が走った。治崎の個性で死なない、どころか最強である治崎が反応できない速度で殴った。明らかな、強者である。乱波だけは楽しそうに表情を輝かせたのが気配で伝わってきたが。

「それとな治崎。お前の目的を1つ削げそうだから教えておくが、この世界から個性を駆逐するのはお前のやり方じゃ不可能だ」

「ガハツ……何の話だ……」

呼人が自己の目的まで知っているとは知らない治崎はそう返すが、われ関せずには話し始めようとする。と、そこで。

「リーダー、ちよつと治療に行つてくる」

「ああ。モーメント、送ってくれ」

「はいはい」

連絡を受けた神王寺と、それを送るためにモーメントが部屋から消えた。

そして呼人は改めて彼の方を見つめる者達の方に視線を向ける。治崎以外は満身創痍であるし、その治崎も自分の傷は一瞬で修復したが大人しく呼人の話を聞こうとしていた。

「個性は、とあるモノ、仮にエネルギーというが、それが人間に宿り変質したものだ。それが物理的に一部分だけ見えるようになったのが個性因子。そして、お前が作っていたのはその個性因子から逆探して機能しない状態を『上書きしてしまう』モノだ。当然、個性がない状態を上書きされてしまえば個性は使えなくなる。個性因子が消えるのもそのせいだ。だが、エネルギー自体は人体に残っているし、世界に今も溢れ出している。言ってみれば、お前がやろうとしていたのは無駄なあがきという奴だ。弾丸を受けた当人の個性は消滅したように見えるが、実際は子には普通に受け継がれるし、このまま個性特異点を迎えてもエネルギーの総量が増えていけば、やがて個性が人間の扱える領域を越えていく」

「……お前の言葉を信用する理由がどこにある」

「少なくとも、この世界の誰よりも個性というモノの本質に迫っていると思うが?」

「隠していることがあるなら全部話せ」

そう言つて治崎が呼人をにらみ、それに合わせて音本が『素直にさせる』という個性を使うが、呼人は話さない。

「見ていればわかると思うが、俺には個性は通用しない。クロノはもうわかっているだろう?」

「どういう個性だ」

「そもそも、個性じゃない。この世界に突然溢れ出したエネルギーが別の形で存在していた世界から、エネルギーの流れに乗つてやってきたものが俺に乗つかっているだけだ」

それが、呼人の個性、否、力の秘密。夏休み中、モンスター達に教えられた重大な個性に関する情報の1つだ。実質個性として定着しているが、個性ではない。そんな、異端の力。

「だがまあ、お前がきっちり組長に謝つて、社会をぶつ壊さない程度に裏をまとめてくれると言ふなら重要な事は教えてやる」

選べ。

そう呼人は言う。死穢八斎會の組長は、正直惜しい人材だ。裏側の人間で、表の人々に害を与える事を避ける人物というのは、人格者でもある。だが、いないのであればいい。自分がそうなければいい。どちらにしろ、いずれは自

分の別の形でそちらに関わるつもりなのだ。

「……組長は」

「隣の部屋で寝てる」

呼人の返答に一睨みした治崎は、その足で部屋から出ていった。後に残された鉄砲玉たちは、しばらく何も口にすることが出来ずにいたが、やがてクロノが口を開く。

「お前は、何が目的なんだ。統制された悪が必要だと言うなら、何故私たちを助けた。お前の目的とは遠いだろう」

「1つは組長の修理だ。言った通り、あれは俺の持てる駒では治崎にしか治せない。2つ目は使えそうな人材がいるか探るためだ。どうせ俺に嘘を吐いても反逆の意思を持って俺はすぐわかる。なら使える人間はこちらに引き入れておきたい」

「引き入れて、どうする。それだけの力があるなら、巨悪なんて簡単に片付けられるだろう。オール・フォー・ワンですら、若頭を倒したお前なら」

「ヴィラン、なんて社会じゃ言われてるが、中には積極的に人を傷つけない人間もいれば。それしか生き方を持っていないという人間もいる。知っているか？ 既に逮捕されたが元ヴィラン連合の渡我被身子。彼女の恋愛観は、最後には相手を血だらけにして殺したくなる、というものだ。恨んで、とかじゃない。好きだから殺したくなるんだ。そんな人間はいつの時代もあるし、必ず生まれてくる。うまく生きていけなかった人間

というのとはな。そして今の社会は、そういうやつはヒーローが助けるからと、見殺しにする。制度も、人間もな。だから、常に一定数の脅威が必要なんだ。適度に平和を享受する人間たちに身近に脅威があると悟らせ、見えている範囲の人間をそちらに沈ませまといと気を配るための脅威がな。何より、何もそういうヴィランだけじゃない。実際治崎だつて子供の頃は誰にも助けてもらえず組長に拾われているし、ヴィラン連合の死柄木も個性を暴走させた結果家族を失い、周囲の人間に助けてもらえなかつた結果オール・フォー・ワンに拾われた。そういう人間を脅威だと言いながら、そう至る前に救おうとはしない。だから、救わせるために。そして常に脅威が身近にあると示し続ける為に、手駒が必要だ」

酷く矛盾した、歪な理想だ。平和を感じさせるために、脅威を与え続ける。平和を維持するために、脅威を提供し続ける。

「馬鹿げた目標だ」

「俺もそう思う。が、これが諸処の目的を合わせた結果至つた結論だ。裏で動けるのであればやりようはある。例えば、各地のチンピラを先導して適度なヴィラン災害を起こさせ、ついでに逮捕させる。あるいは、時たま力を貸して大規模な被害を引き起こす。まあ他にもやりようは考えてるが、そんなところだ」

「そんな事をして何になる」

「さあな。だが俺の想像では、少なくとも人間は今よりありきたりな平和に感謝し、そして守られることに感謝する。そしてヴィランは、少なくとも救ってくれる相手がいらない状態ではなく、もたれかかれる裏組織が存在する。それだけで救われる人間もいるだろうさ。言っておくが、ただ個性を持て余しただけのチンピラになんて興味はない。本当にはみ出した人間たち、そう生きるしか無い奴らの話を俺はしている。そういう奴らが生きていける場所も必要だろうし、そしてそれから一般人を守る為の壁も必要だ」

そもそもが、両方を助けるなんてとても無理な話なのだ。なにせ一方は秩序で、一方はカオス。だが、カオスではなく秩序ある悪意にすることは出来る。そしてそれを適度に吐き出させることさえできれば、あるいははみ出しても行き着く先があれば、人は絶望しないですむ。

後は単純に、ただすがって生きる人間が気に入らないのだ。日々に重みがあれば。あるいは明日を知れぬ命であれば。それらがかけがえないものになる。だから呼人は、脅威がこの世界には必要だと思っているのだ。

「馬鹿なのは俺も自覚してる。だが俺は、人間が必死に生きない世界も、生きていくことが出来ない世界も嫌いだな」

全ての人間は、平等に厳しい現実の中を生きる。そうあるべきだと、呼人は思う。

第62話 その男、生命を踏みにじり

サー・ナイトアイの病室には、重い空気が漂っていた。ナイトアイの傷は重く、治療力促進の個性を持つリカバリーガールでも、傷が大きすぎて体力を消費してしまっている状況では促進する元手が無い。つまり、もう助からない。

そんなナイトアイの死地に、喧嘩別れの形になってしまっていたオールマイルトも駆けつけていた。そしてオールマイルト、緑谷に語りかけ終えたナイトアイが、遅れて病室に駆け込んできた通形と話し、笑いかけた所で新しい来客が訪れる。

「サー・ナイトアイの病室は……ここであつてみたいだな」

その声に、オールマイルトと、そしてイレイザー・ヘッドが弾かれたように振り返る。

「アドベンチャー……！」

その男の姿は2人が待ちわびたもので。けれど来ることは無いだろうと諦めていた人物だった。個人的な連絡手段はなく、公安委員会の連絡に対しても気分次第。更にヒーローネットワーク上でも一切反応しない男だ。無闇に期待は持てない。

だが、彼は来た。ヒーローを救うために。

オールマイルトとイレイザーの2人だけが注目する中、アドベンチャーはオールマイルト

の隣まで歩いてくる。

「オールマイトの涙が見れるとは、珍しいこともある」

「来てくれたのか……!」

「悪いが、オールマイト以外は席を外してもらえるか」

簡潔にそう告げたアドベンチャーに、たまらず通形や緑谷、それにサイドキック達が反発する。

「何故ですか! サーは……もう……! 最後なんですよ……!」

「誰、なんですか……? でも……!」

泣きながら言うバブルガールに、通形や緑谷達も口々に神王寺の指示を拒絶する。が、その指示は、当のオールマイトから再度出された。

「悪いけど、彼と私以外は席を外してもらえるかな。お願いだ」

そう言つてオールマイトは、深々と頭を下げる。おそらく、衆人環視の状況下ではアドベンチャーは個性を使わない。だから、彼らに席を外してもらえなければ、ナイトアイを救えない。この男は、見捨てる時は躊躇なく命を見捨てると知っているオールマイトだからこそその言葉だ。

「オールマイト……! なんて——!」

「お願いだ。今すぐに、部屋から出て欲しい。時間が、無い」

そしてその言葉を、イレイザー・ヘッドも支持する。

「出ておきましょう。緑谷、通形」

「先生?!」

「イレイザー!?! なんで!」

「出るぞ。バブルガールとセンチピーダーも」

有無を言わせぬ相澤の言葉と頭を下げたままのオールマイトの間で視線をさまよわせた後、未だに状況が飲み込みめないながらも全員が部屋を後にし扉が閉じる。既に意識が混濁しているナイトアイは、そんな室内の状況に気づくことはなく静かに目を閉じたままだ。

「オールマイト、酸素マスクを外して口を開けておいてくれ」

「……助かるのか」

「助かるな。よほどおかしな個性を受けてなければ。急がないと、代償が大きくなる一方だぞ」

「……ありがとう」

アドベンチャーに指示されるままに、オールマイトがナイトアイの口元から酸素マスクを外し、その後その顎を引いて口を開かせる。

その直上に手を差し出した神王寺は、その上で手のひらを切り裂き、血をナイトアイ

の口の中に垂らした。

直後。ナイトアイの体が2度ほど跳ね、白い光のような稲妻のようなものがその体を駆け巡る。

それは、適応と再生の象徴。彼らの世界では純粹に白いエネルギーというのは、実はほとんど無いらしい。様々な色を持つエネルギーはあれど、ただ白は無し。そう。その色こそが、この世界の。個性の色。

そして、何者にも染まる、原始の輝き。

オールマイトがその様子を息を呑んで見つめている中、アドベンチャーは腹に刺さったままの機器を引き抜いていく。機器を加えこんだまま適応されると事だ。以前も、同じことをやってしまったことがある。自分の体でやったときだったが、その時は完全に組織と結合してしまつて外すのが大変だった。

当然引き抜かれた機器はナイトアイの体に繋がつていたので血や肉が付着しているが、雑な引き抜きで損傷した部分も迸る光に吞まれて修復されていく。全てが治るのだ。全身が、適応再生を終えるまでその光は止まらない。そして、それは即ちその最中の傷はいくらでも治り続けることを意味する。

やがて、5分もする頃。静かにナイトアイの目が開いた。

「オールマイト……私は……」

寝ているのは、さつきまでの、既に命の火が幾ばくも残っていないナイトアイではない。完全に無傷の、まだ未来のある一人の人間だ。

「良かった……ううっ……」

珍しくオールマイトが嗚咽をこぼして涙を流す。

「あー感動のご対面悪いが、これにサインしてもらえるか？ やっぱりちゃんと本人にしてもらいたいんだが……」

「あなたは？」

「あんたを治療した人間、ってところだ。ほら、体は治ってんだろ。起き上がって書いてくれ」

傷一つ無い自分の体に、一体何が起きたのかと不思議そうなナイトアイだが、体を起こし、書類に目を通すうちに表情が驚愕に染まっていく。

「これは……」

「まあ書いてる事以上に俺が言えることはない。治す代わりに秘密にするってのは、アンフェアな約束じゃないだろう？」

「後で何か悪影響……も書かれているのか。私はこれでどれぐらい？」

「4年つてところだろうな。瀕死だったから」

「……わかりました。ペンを」

神王寺がペンを渡すと、ナイトアイはさらさらと署名をする。こんな個性を何故秘密にしているのか、など言いたいことはあったが、命を救われている。それを追求するというのは、しないほうがいいことなのだろう。

「はい、OK。じゃあそういうことで。じゃあなオールマイト」
「本当にありがとう、アドベンチャー」

深く頭を下げるオールマイトに軽く手を挙げると、神王寺は部屋を後にする。

その背中を見送り、再度自分の体を確かめるようにあちこちを触ったり腰を捻ったりしていたナイトアイは、オールマイトの方を見上げる。

「オールマイト、あれは一体何だったんですか？ 私は本当に治ってるようですが」
「んー……」

素直に話すことは出来ない。そう唸った後、オールマイトはニコリと笑う。
「とても気難し屋な妖精かな？」

そんな冗談を彼に言えるのが、とても嬉しかった。

部屋から出た神王寺は、外で待機していたイレイザーヘッドに声をかけられる。他の

インターン生やサイドキックたちは、一旦休ませるために座れる場所に行かせていた。「治したんですか？」

「おう。他言無用、な。まあ気づくかもしれないけどあくまであんたは何も知らない、つてことで」

「わかりました。感謝します。ジ・アドベンチャー。それと、通形ミリオについてはご存知ですか？」

「個性が使えるなくなったヒーロー候補生だろ？　ここに来るまで軽くだが耳に挟んだ。それも俺に治してほしいって？」

「そうです」

頷くイレイザーに、アドベンチャーはメモ用紙を一枚ちぎるとそこにサラサラと書き綴る。

「今から半日以内に本人の個性と何故使えなくなったか、原因が個性であるなら個性の詳細、それと本人が何故治すに値するか書いて送ってくれ」

「感謝します」

検討する、というアドベンチャーの言葉に、イレイザーは頭を下げる。先達のヒーローとして、そして教師として。生徒を助けられるなら助けてやりたい。

ただ、残念ながらアドベンチャーは自分には不可能なのを知っていた。彼の個性は、

異常と認識されるものに対して適応し、修復する。だが『巻き戻し』の個性は状態を固定してしまう上に、そもそも『ある段階での正常な状態』を上書きしているに過ぎず、異常ではないのだ。そう推察されるので、下手に状況をさらに固定して不可逆にしてしまってもまずいため、何も出来ないのである。

アドベンチャーが去った後、イレイザーは緑谷や通形、そしてナイトアイのサイドキックら呼びに行つた。喜びを表に出すような事はしない。ただ端的に、ナイトアイが待っていると伝えるだけ。

だから、彼らが死んだであろう、オールマイトが最後の別れを交わしたであろうナイトアイの病室に駆け込み、その奇跡の生還を涙で喜ぶとき、彼は一人、壁にもたれて心の中に沸き起こる熱と戦うのだ。不器用なイレイザーは、人の前で泣けるようには出来ていなかった。

「サーが退院で俺がまだ退院出来ないっておかしくないですか？」

「私は、もう治ったからな」

「たはー！ でもなんで治ったんでしょうね！ そんな個性があったら、とてもた

くさんの人が救えますよ！」

「……そうだな」

翌日。一足先に退院となったナイトアイは、通形の病室を訪れていた。アドベンチャーの個性によつて傷が全快したナイトアイに対して、通形はまだ個性の消失から復活していない。昨日の謎の人物についても、オールマイルからも重ねて禁止されたので話すことはしない。

昨日は、あの後大変だった。

沈痛な面持ちで部屋に入ってきたサイドキックやインターン生達は、元気に起きたナイトアイが珍しく照れた様子で手をあげるのを見て目を疑い、涙を流し、それが真実だと確認すると、今度こそ勢いよく飛びついてきたのだ。緑谷は遠慮し、センチピーダーは冷静に歩いて近づいてきただけだったが、バブルガールと通形の体当たりは座つていられるだけのナイトアイは受けきれず思い切り後ろに倒れてしまい、更に医療機器を破壊しかけるといふ危ない状態になった。

その後オールマイルと2人がかりで彼らをなだめ、自分が回復したことを伝えたが、今度は通形の番である。ナイトアイの最期だと気合で怪我を押しつけて病室を抜け出して来たが、気が抜けたのか話している最中にいきなり倒れたのだ。慌てて彼を病室に運び直し、そこで改めて生還を祝った。

その後笑い泣きしながら談笑していた5人の元に、ヴィラン連合に護送車が襲撃されて治崎ら死穢八齋會のメンバーの身柄が奪われたと連絡があった。そこから情報収集を開始し、高速道路で待ち伏せを受けたこと、護衛についていたヒーローも大やけどを負った事、そして奪われたのは死穢八齋會の幹部連中の身柄だったことなどの情報が確認され、ドライブレコーダーからの映像も回してもらって確認した。

見る限りでは確かにヴィラン連合の面々であり、更に見たことのない人間もいた。その人物が治崎を連れて去っていったというが、治崎に対してはトラックを止めての襲撃であったのにたいして、その他の人物に対しては気がつけば消えていた、という報告であった。

「治崎は……死穢八齋會はどうなったんでしょうね」

「治崎を連れ去った人物は全くの第三勢力だというのが一般的な見解だが、そうであるなら推測以上の事は言えない」

「ですよ。また新しいヴィラン組織、かー。大変ですね」

あはは、と明るく通形は笑う。彼の個性は未だ失われたままで。ヒーローとしてこれ以上に絶望的なことは無いと言っても良い。だが、彼は笑う。

笑わないヒーローに、人々を心の底から笑顔になど出来ないと知っているから。

「……死穢八齋會にヴィラン連合、そして新しい勢力。まだヒーローの力が必要だ」

「はい」

無表情に語りかけるナイトアイに、通形は笑顔を絶やさずに答える。

「私はルミリオンの帰還を信じているぞ」

「絶対に！　また帰ってきます！　ちよつとだけ待っててくださいよサー！」

ヒーローは、けして足を止めない。ただ、時々羽を休めるぐらいは、許されるのではないだろうか。

第63話 可能性の獣

呼人が寮に戻ったのは、死穢八斎會とヒーローの戦闘が終わった翌日の夜であった。

あの後。治崎の個性によつて修復された組長が治崎を殴り倒し。出てきたのははるか6時間以上が経過した後だった。その間呼人は、乱波に殴り合いを申し込まれて外の森で殴り倒したり、あるいは天蓋に治崎とはまた違った意味でだが惚れ込まれたりしたが、特に鉄砲玉の面々が逃げ出そうとするようなこともなく、途中で弁当を買い込んで戻ってきたモーメントや鉄砲玉の面々と一緒に飯を食べたりと、割とまったり過ごしていた。

また、治崎にはああは言ったものの、その瞬間は頭に血が昇っていたというのもあつて落ち着いた後は改めて八斎會の幹部達に認めかねる点、勝手にやつてほしい点などについての説明を行った。

認めかねる点は、やはり子供を利用したということ。積極的に協力するように洗脳するような事も避けて欲しいということ。

まず呼人の思想の中では、純粹無垢な子供は自分で傾いていくものであり、それを大人が引つ張つてはならない、と考えている。そしてたとえ利用する形でも子供達に気付

かれないようにし、せめて笑えるように。少なくとも、泣かせ、怯えさせるやり方は認めない、と。

とはいえ、難しいところだ。呼人が全てのヴィランを管理するつもりは無いし、出来もしない。あくまで、支配下に置いた場所の方針の話だ。少なくとも組長が再び指導者に戻れば、子供をただただ泣かせるような事は起きないだろう。

また、してほしいこととしては、やはり裏を取りまとめ勢力を作つて欲しい事。勢力と言つてもヒーローと直接対決をするものではなく、はみだした人間たちに生きる道を与え、また受け入れる組織である。その過程での犯罪行為は容認するが、積極的に社会を壊すための行動は取らないで欲しいことなどを伝えた。反社組織と言つても、革命家とヤクザ者は別なのだ。

その後神王寺、そして治崎と組長が戻つたので、改めて組長に挨拶をし、その後神王寺や呼人から話をし取り敢えずは再び組織を立ち上げてくれることとなつたが、それはまた、別のお話。今語るべきことでも無いだろう。

学校に戻つてきた呼人が寮に入ると、ちょうどインターン組の他のメンバーが戻つて

きてすぐだったのか寮の一階は大騒ぎになっていた。

ひとまず全員無事に戻ってきたことに、呼人は改めて安堵の息を吐く。自分が手を出すわけには行かないだの、最近では社会的にだの考えている呼人だが、それでも友人には無事でいて欲しいのだ。

既に彼らの事件の事はネットニュースにもなっており、クラスメイトからも心配していたのだろう。

「あー！ 百竜も帰ってきた！」

「え。あ、ほんとだ帰ってきたる！ ってか何部屋に行こうとしてんの！」

八齋會と戦った4人を皆がねぎらっている様子だったので呼人はそそくさと自室に引きこもろうとしていたのだが、芦戸と上鳴に気づかれてしまった。

「百竜も戦ってたんでしょ！ 大丈夫だった!？」

「いや、俺は全然別の場所に——」

「あれ？」

「え？」

興奮した様子のクラスメイト達をなだめて話を聞くと、彼女たちの中では呼人は緑谷たちよりも更に深く死穢八齋會の事件に関わっていることになっていたらしい。その調査の為にずっと学校を休んでいたことになっていたそうだ。

「俺はインターン先のヒーロー一人と僻地ばかり回ってたな。今でも100人以下の少数の集落はあるし、そういうところはヒーローが駐在してない。ヴィランに襲われても、ヴィランの温床になっても大変だからってことでずつとあちこち行ってた」

「ほあー。じゃあ緑谷達の方とは関係ないってことか」

「まあニュースで見るぐらいはしたが、それぐらいだな」

実際モーメントが来てからは空いた時間やアーニヤが眠った後を利用して僻地を見て回っていた。ヴィラン集団の情報収集と、空いている土地などを探したりだ。こういうのは悪いかもしれないが、モーメントの個性は非常に有益だ。なにせ移動速度が呼人の最高速より速い上に、目立たない。これをオール・フォー・ワンに取られていたらと思うと呼人でも厄介だという思いが強い。

適度に歓談をした後、遅い夕食をインターン組の4人と一緒に取る。その間もクラスメイトも一階に残っていて、大きな事件だったために緑谷達に遠慮したのかあまり激しく聞いてはないが、ちょこちょこ話をしていた。

「そう言えば、百竜君は誰のところにインターンで行ってるのかな。聞いた事なかった気がして」

「確かに、インターン始まってからほとんど学校来れて無かったから話してないな。と言っても知らないと思うが、俺は育ての親のジ・アドベンチャーというヒーローの所

でインターンやつてる。まあ、あんまり大きな事件には関わられてないし、ひたすら見て回って方が多いけどな」

「ジ・アドベンチャー……うちは聞いたこと無いなあ」

「私も無いわ——緑谷ちゃん、知ってるの？」

他の3人が首を捻る様子を示す中、緑谷だけが何かを思い出すかのような表情をしていた。だが、他の3人に声をかけられると慌てて首を横に振る。

「う、ううん！ ちょっとと事件の事思い出しちゃっただけだよ！ でも、僕も聞いたこと無いよ、そのヒーローの名前は。どんな個性かとか、教えてもらえないかな？」

笑顔を見せようとしている緑谷だが、その表情は強張っている。それを見て、呼人は神王寺がナイトアイを治しに行った時にまだ若いヒーローもいたということを聞いたのを思い出した。ナイトアイと言えば、緑谷のインターン先。おそらくそのとき病室にいた緑谷は、彼の名前を聞いたのだろう。

「あんまりヒーローっぽくないやつだな。普段もわかりやすいコスチュームみたいなを着てないし、そもそも本人は研究者をメインでやってた人間だからな。カナダとか他の国に行つてるときも、まあ災害救助とかは手伝うけどヴィランと戦うつてことはあんまり無かった。今もパトロールとか避難誘導ばかりやつてるらしい。個性は体中から斧とかのこぎりとか、その場所でサバイバルするためのものに体を変化させられるぐら

いだ」

「そ、そっか。 僕も調べてみるよ！」

少し様子のおかしい緑谷に、他の3人が怪訝そうな表情をする。だから呼人は、緑谷に言っておくことにする。

「緑谷」

「な、なにかな？」

「あいつに関するそれ以上の事は、知っていても俺は言わない。お前が何も知らされなかったのは、あいつがそれを広めるのを望んでいないからだ。わかるな？」

「えっ、と、百竜くんどういうこと？」

突然身緑谷に対してだけ話しかけた呼人に、麗日たちは困惑した表情をする。

「まあつまり、ジ・アドベンチャーは俺が知ってる表のヒーローとしての仕事以外に秘密の仕事も持つてるってことだ。けどその内容は、秘密なんだから表に出るものじゃない。だから詮索はするな。八斎會のことも、調査段階では箝口令が敷かれていただろ？」

ヒーローとして、秘密を何らかの形で抱えているというのはおかしな話ではない。潜入捜査なんてのはその最たる例だ。

だが、基本となる個性やスタイルまで秘密になっているというのは、普通ではない。

「……うん、わかった」

「みんなも、そういう秘密があるってこと自体秘密にしておいてくれよ」

「う、うん。わかった。けど百竜くん、そんな人の所でインターンしてて大丈夫なん？」

「そうね、少し心配だわ」

「でも百竜はもうその人とずっと生活してたんだろ？　じゃあ今更じゃねえか？」

切島の指摘に、それもそうかと他の2人も頷く。緑谷だけは、起きたことが起きたことだけに納得していない様子だったがそれ以上の詮索も出来ずに頷いていた。

「にしても、そつちは結構大変だったみたいだな。ヴィラン連合は何をしたかったのかよくわからないが」

「うん……手を組んでるのかって思ったけど、やっぱりそうだとするとおかしなことが多いんだ。多分一応の同盟関係で、仲があんまり良くない感じだったんじゃないかな。それで八斎會はもうダメだったから一度潰れた後に奪いに来たとか」

「でもオール・フォー・ワンはまだタルタロスだろ？　連れて行っても個性を奪えないと思うんだが」

「そうなんだ。だからよくわからなくて……」

呼人と緑谷の間で交わされる議論に、他の3人は感心した様子で聞いているが途中で蛙吹が口を挟む。

「2人とも、あまり考えすぎるのは良くないわ。そう言うことはプロの人達や警察が考えているはずよ」

「……うん、それもそうだね」

「そだな。ここで話しても結論は出ないか」

「私たちは、今は力をつけるときよ」

「ああ……。俺ももつと強くならねえと」

「うちも。がんばらんとね」

嘘をつき続けるというのは、存外にしんどい。今度からは関わる話はなるべく避けようと思う呼人であった。

それから数日。ヴィラン連合の動きが活発になっていくともあり、インターンが一時的に中止されることとなり、当面のことも神王寺達に任せることが出来た呼人は、放課後補習を終えた後に自主練で演習場を訪れていた。今日はいつも一緒に訓練していた尾白や障子たちとは別行動である。

やろうとしているのは、個性のさらなる探求。夏休みに開拓した方もまだ全然体に染

み付いていないのだが、モンスター達の話を聞いた後他にもできそうなことがいくつかあると言われたのだ。

そのいくつかを、今日は試そうとしているのである。

(オドガロンに変身……ただのオドガロンじゃない。高エネルギー下で生育し、栄養も豊富、更に歴戦の傷を克服した——)

そもそも、呼人が変身するモンスターとは何なのか。

生物である。

では呼人が普段変身しているのは何か。

そのモンスターという生物の、一例である。

つまり。

普段変身するそれ以外にも、まだまだ個体は存在する。何も、オーソドックスなサイズにオーソドックスな体格、オーソドックスな栄養状態 e t c. に変身する必要はない。

そもそも呼人の中にいるモンスター達は、種の区別すらが怪しいのだ。元来生物というのは、分岐し、進化し、生き残った種のみが存続するものである。そしてモンスター

達の中には、祖先と子孫の関係にある者たちもいる。

では、それを分ける基準はどこなのだろうか。進化過程にあるモンスターは、どちらに含まれるのだろうか。

また、彼らの世界にはモンスターの亜種という存在もいる。これは、姿形が非常に似通っているが、食性や住処、進化の過程での選択などによつて差異があるモンスターの事を示す。例を上げるのであれば、鎧竜と黒鎧竜。呼人の中には、それぞれがちゃんと人格を持つて存在している。

だが彼らの差異は、幼体、岩竜と呼ばれる時期に排熱能力に優れていたか否か、という点だけだ。そして、その差異によつて種が区別されるわけだが、であれば。呼人はその両方、あるいはその中間に変身する事も可能なはずである。

では、ここで考え方を変えてみよう。

鎧竜と黒鎧竜を比較したとき、竜人たちによれば彼らの世界では黒鎧竜の方が遥かに危険な存在として認識されるらしい。何故ならその排熱能力故に発する熱量が鎧竜のそれを遥かに上回り、またその熱量、そしてその強力さ故の高エネルギーの環境下で生育が可能な結果、身体能力、そして体組織も遥かに強靱な物となっているからだ。

生物としての基本的な能力の違いで、そうした身体、能力の差が生まれる。

ならば、それを極限まで強力な方向に振った時にはどうなるのだろうか。黒鎧竜の甲

殻は、強大なエネルギーと熱量にさらされた結果、鎧竜のそれより遥かに堅牢となる。ならば、彼らの歴史上もつとも排熱能力に優れた個体は、どれだけの堅牢な甲殻を持っていたのだろうか。そして、どれだけのエネルギーにさらされ、どれだけの力に成長したのだろうか。

それを想像し、探し、再現すればいい。

もともと、呼人の中にいるモンスター達は全ての個体の記憶を持っているのだ。ならば、その力を借りている呼人が、ただの平均的な個体に変身しなければならない理由はない。

強大なエネルギーの存在する環境下で生育し。生まれつき他の個体よりも頑強であり。更に栄養に恵まれ。されど驕ること無く、より強大な他種族との闘争を生き抜き。日々ただ生きるのではなく険しい環境下を走り続け。他種族の放つ電撃や炎、冷気、その他毒や属性エネルギーにさらされ。それでも生き抜いた個体。

そんな個体が存在した可能性も、あるのではないだろうか。

呼人の力について、ここで一つ訂正しておこう。彼は、モンスターに変身するのでは

ない。

『モンスター達の可能性を引き出し、それを再現する』。そういう力だったのだ。

ならば、大きさも、筋肉量も、骨の太さも視力の良さも、種としての最低値と最大値はあれど、自由自在。

結果。呼人が想像し変身したオドガロン、体格は以前まで変身していた個体の優に2回り以上上。全長19メートル。体高6メートル。そして、常時食事後のみオドガロンが発揮する強化状態である赤熱状態。筋肉の付き方も、以前の個体と比べてガツシリとしている。

これには、呼人の脳内にいるオドガロンも協力してくれた。というより、限界サイズや能力の探求は、モンスター達の協力がなければ不可能だ。彼らが記憶を探り、その最大サイズや環境下など、様々な情報を与えてくれ、そこから呼人と共に想像する。それによつて初めて、その状態をイメージすることが出来る。

更に。

例えば、オドガロンというのは彼らの世界においてはごく一部の、瘴気の谷と呼ばれるエリアにのみ生息している種である。そのため、そのエリアに適した生態を持つてお

り、例えばそこに漂う瘴気という微生物から目を保護するために目を覆うように半透明の鱗が発達してまぶたのようになっており、視力は非常に悪い。そしてその代わりに嗅覚や聴覚が発達している。

ではこの種族が、別のエリアで進化を遂げていけば、視力を失わなかった代わりに、嗅覚はこれほどまでに発達していなかったのだろうか。

その可能性もありうる。

(ま、流石に進化を辿るのは時間がかかるか)

ただ、そこまでの“可能性”を再現しようとするのは、ただ適当に想像するだけでは駄目だ。再度、最初の時代から時間をかけて思考し、到達点を探らなければならないらしい。

それは今実際に、一部のモンスター達と、そしてこれまでは呼人に一切語りかけず、精神世界でも一切姿を表してこなかった竜人達、そしてそれ以前の古代人達が探求してくれている。

さて、そしてここでもう一つ。

「次は……粘菌……いけるかどうか」

呼人の中に人格を持って存在しているのは、確かにモンスター達だけであり、微生物や、魚類、小型の爬虫類や鳥類は存在していない。

だが、待つて欲しい。モンスター達が生物である以上そうしたものを食してきたわけであるし、中にはそれらの生物を利用してゐるモンスターもいる。

例えば、砕竜。屈強な体格にパワーと、頑強な甲殻、そして粘菌という爆発する微生物を利用して戦闘する強力なモンスター。そして呼人が砕竜に変身した時には、当然、その爆発する粘菌を操作し、操る事も出来る。

わかるだろうか。

呼人は、モンスター達以外のものを再現してゐるのだ。

他にも泡狐竜。泡を吐き出し操るモンスターだが、その泡は、泡狐竜が食べた魚類によつてその性質が異なり、爆発性のもから、癒やしを与えるものまである。そして呼人は、それを使うことが出来る。

加えて先程の鎧竜。膨大な熱量を放出すると言つたが、あくまで『排熱器官』しか持つてゐない。そう、彼らの熱量の大部分は、彼らが好んで潜行する溶岩や食べた爆発性の鉱石などから獲得したものなのだ。

他にも、自分で毒を生成するのではなく、食した毒虫や毒キノコの毒を混合、熟成して戦闘に用ゐるモンスターも存在し、その全てを、呼人は使うことが出来る。

ならば、その性質、あるいはモンスター達でない微生物、物体すら再現できてもおかしくないはず。

「いづつ！ まあ、そうなるか。けど、出来ないことはない、と」

結果。オドガロンの皮膚の上に、呼人が再現しようとした粘菌は確かに現れ、そして出現した直後に爆発した。もともと、砕竜のみが粘菌を操る能力を持ち、また本体も焼かれる事があるのでそれに備えた屈強な甲殻を持つ。

加えて、今呼人が想像・再現したのは、普段砕竜が使っている粘菌、すなわち『活性化した』粘菌である。これを非活性化したものを再現すれば、爆発することはないはずだ。ただ活性化できるのもまた砕竜だけであり、それを他のモンスターで再現するには、その成分をもつよだれを再現しなければならない。出来ないことはないのだろうが。

他にも、例を上げるとすれば屍套龍が操る瘴気なんかも、屍套龍とは全く別の微生物である。一方黒蝕竜が操るウイルスでもある鱗粉はその皮膚や角質が剥がれ落ちたものであるため、他の生物ではない。そんなものを、全て呼人は扱えるのだ。まだ全て再現できるわけではないし、出来ないものもあるだろう。例えば既に食された後の魚類を再現できるかは不明だ。だが。

呼人の中に眠っているのは、モンスターではない。

1つの世界が、眠っているのだ。

それらを操るためには、より詳細に、モンスター達の生態について、それこそ細胞レ

ベルで知らなければならぬ。やっていることはある種、八百万と似たようなものである。それをこれから、呼人はやっていくのだ。

第64話 文化祭へ

数日後。10月に入った所で、相澤からあることがクラスに向かつて告げられた。そのあること、とは。

「一ヶ月後に文化祭があります」

『久々に学校っぽい!!』

「何するかみんなで決めようー!」

文化祭。出し物や展示など、学生が主体となってやるお祭り騒ぎ。非常に学校っぽいものである。それにクラスメイトの興奮も高まるが、懸念の声も上がる。

「でも先生いいんすかこのご時世!?! また体育祭みたいにセキユリティーを示すつつつても状況が違うでしょう!?!」

「何だよ切島良いじゃん!」

「でもよ!」

切島の声に上鳴らお祭り騒ぎ大好き組が不満の声を漏らす。切島の懸念も当然であり、それに委員長である飯田も賛同の声を示す。

「確かに……先生、何か開催を決めた理由があるなら説明いただけるとありがたいです」

ただし飯田においては、学校がやると決めた以上そのあたりを考えているのは当然であり、むしろその理由を聞きたいという質問だ。

「もつともな話だ。ただ雄英は、お前らヒーロー科だけじゃない。体育祭がヒーロー科の活躍する舞台だとすれば、文化祭の主役は基本的に他科。注目度は比にならないが彼らにとつては楽しみなイベントであるし、何より経営化、サポート科においてはヒーロー科が体育祭でスカウトされるのと同様に文化祭での学科プレゼン次第では企業や事務所なんかから声がかかることもある。加えて、現状ヒーロー科を主体として様々な改革や制限が行われていることにストレスを感じているものもいる」

「そう、か……そう考えると、申し訳なくて何も言えないっすね……」

「そういうことだ。だから簡単に自粛というわけにもいかない。だから今年はごく一部の関係者を除いて学内だけという形での文化祭になる。主役じゃないとは言ったが、決まりとしてクラスで一つ出し物をする必要がある。今日はそれを決めてくれ。委員長」

「はいー」

意気揚々と飯田が前に出て、司会を始める。リーダーとしての風格と落ち着きを獲得してきた飯田だが、こういう場面になると張り切ってしまうのはもはや性分とも言えるものだろう。

「まずは候補を上げてほしいと思う！ アイデアのあるものは挙手を！ 一人一つとは

言わないが、あまり増えると大変だから自分の中でも絞ってくれ！」

飯田がそう言うと同時に、勢いよくクラスメイト達が手を突き上げる。皆文化祭となればやってみたいことは当然存在する。そんなクラスメイト達を、呼人は楽しみに眺めていた。正直、文化祭がどんなものか想像がつかない。小説などで読んだものでは、演劇をしたり、後は音楽を演奏したり。他にも何か食べ物を提供するというアイデアもあったように思う。

ただ、呼人自身には何がどう楽しいものなのかあまりわかっていない。だからクラスメイトの意見を見ているのだ。

「メイド喫茶が良い！」

「腕相撲大会！」

「クレープ屋なんてどうだ？」

「触れ合い動物園……」

見ている間にも、着々と意見は出ていく。一部意味不明なものを言っているものもあるが、呼人を除く全員がアイデアを発表した。

「百竜君は良いのか？」

飯田にそう訪ねられて、呼人は首を振る。

「あまり思いつかない。どれも楽しそうだし、みんなの意見から決めてくれ」

「わかった。ではこの中から決めたいと思うが——」

「まずは不適切なものを消させてもらいました」

「はなから聞くなや！」

結局、議論と言う名の各々が勝手に意見を言い合う会は無駄に白熱し、飯田が途中で近くの人と冷静に話し合った上で意見を発表して欲しいなどと場を収めようとしたものうまくまとまることはなかった。

翌日。放課後予習を切り上げた呼人は、一緒に補習を受けていた4人と一緒に寮へと帰還する。訓練に行こうかと思っていたが、事前に尾白達に『文化祭までは』と言われていたのだ。楽しいとは半ば不合理的なものなのだなど、呼人は少し不思議な気分がしたが、そういうことであればと納得した。

「百竜君も今日で補習終わり？」

補習は、インターンに行っていた分だけ特別でもらっているのだが、死穢八齋會と戦った4人よりも一人九州にインターンで行っていた常闇は短く、そしてより長期間学校を開けていた呼人はもっと長くなる予定だった。が。

「今日で終わりにしてもらった。もともと自主的な補習だしな。みんなと同じタイミングで」

「あれ？　じゃあなんで今日まで来てたん？　百竜くん勉強できるんやし、途中でやめるなら来んでも大丈夫やったんやない？」

「ちよつと別件で怒られて補習入れられてたからちよつと良いってことで」

「百竜も補習食らうことあるのかよ！　ってか何やったんだ？」

「それは守秘義務があることだから言えないな」

全員首を傾げているが、呼人はそれ以上は説明しない。

その件とは、仮免試験の時に呼人が無断で個性を使用したことである。結局あの時のヴィランは、逃げようとしたものの教師でもある腕利きのヒーロー達が集まっていたことと事前に警戒態勢を張っていたことから無事に捕まえることが出来たらしい。そこからヴィラン連合への捜査の手も伸びているはずだが、それは呼人の預かり知らぬ話だ。

「そーいや百竜、いつつも補習の後いなくなるけどよ、どこ行ってるんだ？」

「演習場借りたりして自主練だな。個性の使い方練習してる」

「まだ毎日続けてんのか。俺も負けてらんねえぜ！」

「しばらく文化祭があるから出来ないけどな」

「それは仕方ねえ！ 筋トレなんかは夜にだって出来るしよ！」
「そうだな」

「百竜くんが普段してるトレーニング僕も興味あるんだけど、何したらそんな筋肉がつけられるのかな」

「ひたすら負荷かけてるだけだけどな。見るなら今夜部屋に来るか？」

「行きます！」

「俺も行くぜ！」

「なんか、熱いつていうか暑苦しいね！」

「ケロケロ。みんなちゃんと鍛えてるのね」

寮につくまで、そんな何気ない、けれどヒーロー科らしい会話が続いた。

寮につくと、早速と言うべきか話し合いが進んでいた。昨日のうちに伝えられたことだが、文化祭での出し物はバンドとダンスに決まったらしく、今日はおそらくそのメンバー決めをしているようだ。そう言えばと、呼人は音楽関連で動画を調べている時にそういうのを見た記憶があるのを思い出す。どちらかと言えば音楽の中身にばかり興味があつた呼人はあまり見ていなかったのだが。

「あ、じゃあまだいくつか決まってるやね！ うたは耳郎ちゃんとして——」

「待ってまだそれも決まってるから」

「あれ、そうなん？」

戻った時には、いくつかの楽器が決まっただけでまだ話し合い中であった。

「お疲れ百竜」

「まああんま疲れてないけどな」

荷物を降ろした呼人は、尾白や障子にどういう話し合いになったのか説明を受ける。爆豪が言ったことには当然そのとおりだと思ったが、やはり人というのは不幸をどこかに押し付けたがるのだなど、柱の必要性を再認識させられた。

「そういえば、百竜の部屋には楽器があつたが、演奏は出来るのか？」

「演奏はしたことないな。あれは音作ってパソコンで記録して曲を作るためのものだから。タイミングとか音を入力しておけば勝手に組み合わせて演奏してくれるんだ」

「なるほど……」

「そう言えば百竜カラオケに来れなかったよね。用事が出来たとかで」

それは夏休みの話だ。夏休みの林間合宿以前、クラスメイトとカラオケなど遊びに行こうと誘われていたのだが、神王寺に用事と声をかけられて行けなくなってしまうのだ。結局用事は午前中ですんだのだが、そこから参加することは思いつかず行くことが出来なかった。

「そうだな。また機会があつたら行ってみたい」

「歌はどんな感じなの?」

「正直……歌ったことがない。まあ元の曲を聞かせてもらえればコピーはできると思うが」

音楽はもつぱら、聴くか作るか専門であった。特にモンスター達の世界の音楽には歌詞が無いが、こちらのどんな言語にも当てはまらないものが多かったため、まともに歌詞がある曲というのは歌詞のない曲と比べて触れる機会が少なかった。

「コピー、って? 真似するってこと?」

「ああ。元の曲があれば真似できる」

「真似って一応みんなするようなことだと思うけど、どんな感じで真似するの?」

「その音の高さとかを記憶して再現するだけだ」

「再現とは……音の高さや質も同じということか? 例えば女性の歌い手ならどうするんだ?」

障子が不思議そうに、と言っても呼人が言っていることだから疑うのではなく、どういう意味で言っているのかと尋ねる。

「真似すればいいだろ。言つとくけどあれだぞ。似せるとかじゃなくて文字通りコピーだからな」

「コピーって、全く同じってこと? そんなことできるもんなの?」

尾白の質問に、呼人は頷いて答える。

「俺なら出来る」

障子の声、話し方で。

「え？ 今の、障子？」

「俺の声、か」

「そうそう、普段から聞いてれば真似できるからね」

今度は尾白の声だ。聞いていた尾白たちは、響いた耳郎のきれいな声そっちのけで呼人に詰め寄る。

「それも個性でやってるのか？」

「まあ使ってるな。喉の構造上どうしても出せない声とか似せれない声ってのはあるんだが、それを喉の形状を変形させて変えられるようにしてるんだ。昔、モンスターの鳴き声を素で真似したくて練習した。まあ結局個性使わないと無理なのが多かつたんだが」

「もう、何が出来ても驚かないな」

「女子の声は？」

そう尋ねられて、今度は麗日の声を真似して答える。人選はなんとなくだ。

「いやーこれでも結構練習したんよ。ほら、昔からうちずっと鍛えとるし、その一環やね！」

今度こそ、障子と尾白は明らかに引いた表情をした。

「正直、気持ち悪いと言うか……」

「目の前で見ると、奇妙に感じるな」

「お前らが言ったんだろ？」

話し合いそつちのけでその事を話していると、ギターを演奏することに決まった上鳴が声をかけてくる。

「なーに話してんの！ 役割決めに参加しろよな」

「あ、上鳴」

そつちを振り返った尾白は、悪戯げな笑みをこぼす。

「ちようど良いや、ちよつとこつち来て」

「なんだよ」

「ちよつと待つてよ」

そう言った後、呼人と障子の耳元で自分の考えているアイデアを説明してくる。呼人の特技とも呼べる声帯模写を使った悪戯に、2人も賛成して早速上鳴をはめることにした。

「ちよつと上鳴、障子が目を塞ぐから声聞いって」

「え、おう、何すんの？」

戸惑いながらも、上鳴は言われるままに障子の前に立って目を塞がれる。そして尾白が出题する。

「今から一言ずつ話すから、どれが誰の声か当ててほしいんだ」

「別に良いけど、それぐらい俺だってわかるぜ？」

上鳴の言葉を聞いた尾白が呼人に頷きかけると、呼人は静かに尾白の隣まで言って声を発する。

『「じゃあ一回目、これは誰の声」？』

「尾白だよな」

その後呼人は少し離れて、自分の声で話す。

「んじゃあこれは？」

「百竜」

そして最期に、障子の隣まで行くと背伸びして障子の声で話す。

「[ではこれは誰だかわかるか?」」

「障子だろ? なあそろそろ何やってんのか教えてくれよ」

そう言われた呼人は、上鳴の前に立つと、3人分の声を交互に入り混ぜて話す。

『「じゃあ、[これは]誰の声?」」

「え? 3人? か?」

戸惑う上鳴に、種明かしとばかりに障子が目元から手を外す。そして呼人が再度。「残念『だけど』『全て俺』でした」

そう、3人の声を混ぜて言った。声だけではない。3人それぞれの話し方の差異や音の上がり下がりを的確に捉えた声に、上鳴は目を疑う。

「え、まじ？ 今のも全部百竜？」

コクリと頷く呼人に、尾白は満足げにドヤ顔で頷いている。

「ちよ、ちよちよ、待って、まじで声真似？ 録音とかじゃなくて？ 似すぎててこえーんだけど」

「百竜君尾白君障子君！ 君たちはまだ役割が決まってないだろうー！」

上鳴が困惑気味に呼人に問いかけるが、3人は呼ばれるままに飯田の方へと行ってしまふ。後には、ただただ困惑した上鳴だけが残された。

第65話 やってみよう

翌日。放課後また、呼人は演習場を訪れていた。ここを選んでいるのは、ここならある程度壊れても大丈夫で、かつ人がいないからだ。毎日練習すると思っていた文化祭へ向けての練習だが、毎日時間が設定されたのでその直前直後には自主練をする時間があった。

今日は先日が続いてオドガロン以外のモンスターの最大出力などを少しずつ確認しているかと考えている。といっても一日では終わらないのでしばらくやることにはないのである。それに一部モンスターは破壊力が大きすぎるためにここでは出来ないのだが、それはまたどこか辺境にでも行つてやればよいのだ。それに今であれば、どこか太平洋にでも島を隆起させてそこで暴れるということも出来る。

まず1つ目に試すのは、鎧竜種の最大出力がどれぐらいの熱量を体内に秘めているのか、という点だ。通常の鎧竜ですら、溶岩などからはるか離れた場所でも数百度にもなる放熱を繰り返せるほどの熱量を誇っている。その強化個体、というよりは可能性。鎧竜には長年の成長の末に黒鎧竜よりも更に高い蓄熱力と排熱能力を持つ特異な成長を遂げた迪異種という個体群も存在しているが、グラビとビモスが言うには今から呼人

がなろうとしているそれはその個体よりも更に高い熱量を有するらしい。

(蓄熱能力、それに排熱能力を最大に……循環系も強化、外殻の発達、生命エネルギー……)

変身する個体を想像し、そして変身するという意思を叩き込む。

直後。呼人の姿が大柄な真つ黒な鎧竜に変身すると同時に、周囲の空気が揺らめき始める。蓄熱能力が高まった結果それが体表に伝播し、周囲に陽炎を立ち上らせ始めていた。

鎧竜は古龍種などとは違ってマグマが完全に平気というわけではなく、あくまで体表の分厚い甲殻や体格の大きさによって内臓器官などにすぐには高熱が浸透しないために溶岩への潜行が可能になっているのであって、熱を貯めればその熱は当然ながら蓄熱器官だけでなく体の中心部に集まっている内臓以外の全ての体表、甲殻へと伝わっていく。それが今、周囲の空気を揺らめかせているのだ。

そして呼人は軽く熱を放出してみるが、全くと言っていいほど体内の熱量が減少していない。迥異個体すら超えるほどの膨大な熱量に対して、通常の鎧竜の形状で為し得る排熱能力や周囲に配慮した、ここで言えばコンクリートが焼け付く程度の排熱では焼け石に水なのだ。

(なるほど、だから迥異個体はあんな構造の排熱器官を持つてるのか。取り敢えず一旦

戻さない……)

通常の鎧竜や黒鎧竜は排熱を行う際、甲殻の隙間からガスを放出して排熱を行う。だが迪異種と区分される個体はそれだけではなく、背中の甲殻が発達変形して火山のような形状になっているのだ。更に尻尾や腹などにも排熱器官が発生している。つまり、正に歩く火山の如き排熱能力を有しているのである。そうまでしなければならぬほどの熱量を、鎧竜の強力な個体は有している。

高すぎる熱量に追いついていない排熱能力では、そのうち内臓まで焼けてしまう可能性が高い。というかもう既に頭とか色々熱がこもっている感覚がある。

一旦集中して熱量を減少させるとともに、それに少し遅らせて十分にマージンを取りながら蓄熱能力を低下。そうやって徐々に低下させていくことでようやく通常の鎧竜の熱量になり、そこから少し離れた呼人は元の人間の状態に戻る。戻ってみると、さっきの場所からは離れたはずなのに確かな暑さを感じた。

(これ、古龍種とはまた違った形でやばいものになってるな)

古龍種というのは、他の生物が操ることの出来ない特殊なエネルギーを用いて、どうか本人たちは半ば無意識ではあるがそれを利用して環境に干渉する。その正確な原理はモンスター達の世界ですら説明されておらず、こちらの世界に精神体という形でやってきた竜人たちやそれ以前の古代人達が研究を行ってある程度のメカニズムを解

明したのだが、言ってみればある種魔法のようなエネルギーの使い方をしていたのだ。

それに対して今呼人が変身した鎧竜は、純然たる熱エネルギーでもって、あるいは環境にすら作用するほどのエネルギー量を誇る。おそらくだが、あれが熱を適度に放出し続ければ街一つぐらいいは冬を夏同然に越すことが出来るだろう。そう言うレベルのやばいものだ。

(他のも、取り敢えずやってみるか)

次にやってみるのは、海竜である。海を基本的な住まいとするが肺呼吸を行い、地上での活動も可能な『大海の王者』。

その中でも長い年月とともにその発電器官を爆発的に発達させた個体は冥海竜とも呼ばれ、通常は『発電↓帯電』という行動を行う海竜種において常に帯電し続け、更に周囲に溢れ出した電気が蓄電器官である背中の外殻以外にも宿っている状態にもなるのだが、呼人が変身するのはそれではない。

冥海竜と呼ばれる個体は、その発電器官が成長するという過程において長い年月とともに当然ながら体格も成長しており、その体格を支えきれない為に、水陸両用の海竜やむしろ陸上が得意な白海竜と呼ばれる個体とは違って完全に水中に生活域を移しているのだ。以前呼人が地上で変身してみた際も、確かに地上では体格故に動きづらさを感じた。

だが、冥海竜と呼ばれる個体よりも更に巨大で、それなのに地上で活動するモンスターは存在する。動きは当然遅く大きくなつてはいるものの、それでもその動きやすさは陸に打ち上げられた冥海竜よりはまともだし、中には体格差が倍以上あるモンスターと遜色ない動きをするモンスターもいる。

ならば、地上で普通に活動できる冥海竜や、あるいは通常の高竜と変わらない大きさで爆発的な発電器官を備え、更に特異な発電器官である雷魂を備えた個体という可能性もあるはずだ。

ちなみにこの『雷魂』という器官だが、竜人達の話によると、あくまで推察だが、高い確率で非常に面白い来歴を持つという。

というのは、個性因子がエネルギーが物理的に見える側に現れた結果だと以前呼人が死穢八斎會のメンバーに説明したが、それと似て非なる現象が起きているのだと。

詳しく説明すれば、もともと『雷魂』というのは海竜種の持つ器官ではないのだ。だが、冥海竜と呼ばれうる個体は、皆得てしてこの器官を持つ。それは、この器官が『後天的に獲得された』ものだからだ。

海竜の物理的な発電能力はモンスターの中でも雷竜とならんでトップクラス、発電器官の規模で言えば雷竜を抑えてトップであると言える。

ここで物理的な、と言っているのは、古龍種の発電能力が大きな部分を非物理的な工

ネルギーに依存しているからであり、純粋な電力量で言えば残念ながら海竜の操る電力は古龍種には及ばないからだ。ただ、通常のモンスターは古龍が操るエネルギーを自発的に操ることが出来ず、その中でこの発電能力は驚嘆に値すると言える。

そしてそんな海竜の発電器官が更に成長したのが冥海竜。その発電能力は常軌を逸し、物理の外側に存在するエネルギーに干渉するといふのだ。そして、膨大な電気エネルギーが古龍などが利用する特殊なエネルギーの無垢な状態に接することで、物理の側へとそれを引きずり込む。

つまり、冥海竜の持つ物理的な電気エネルギーが、非物理のエネルギーに干渉して物理側に持ってきてしまうのである。

実際には完全な物理エネルギーではなく、そこにモンスター達の世界の根幹に流れていて全てに関わるエネルギーは少なからず介在しているのだが、それでも物理が非物理のエネルギーに干渉しているのは驚嘆に値する。個性で言えば、『発電能力を極めた上鳴が、常に莫大な電気を発電できる角を獲得する』というのと同じだからだ。

そうした特徴を持つモンスターは、非常に稀有であるらしい。竜玉、宝玉などと言つた、雷魂を作るエネルギーと近い関係にある『生命エネルギー』の魂を有するモンスターはいるが、それらが直接的になにかの器官として働くモンスターは少ない。

ちなみに呼人は、冥海竜を再現できる都合上この雷魂は問題なく再現できる。なので

そちらは問題なく、むしろ冥海竜すら超えるほどの物理的発電器官、を作れるかどうか、が問題だ。

まず再現を目指すのは、発電器官以外の甲殻、筋肉が極端に発達し、地上での活動にも何の問題もない巨大な海竜。冥海竜が黒く染まっているのはあくまでも長年その膨大な電気エネルギーと、それに物理の側へと引き出された元非物理のエネルギーにさらされているからで、別に再現するつもりが無ければ再現する必要はない。と、思っていたのだが。

(なるほど。体躯の最大サイズは年を経るごとに増加する。そしてそれだけの体躯に育ちうる個体は当然莫大な生命エネルギーにさらされているから、発電器官が発達している。従って冥海竜クラスの個体でこの色にならない個体はありえないのか)

上手く変身することが出来ず、呼人は改めてイメージを練り直す。変身出来ないことは想定内。例えば巨大な体躯を動かすには強靱な心臓が必要のように、可能性と言っても生物としてどれだけアンバランスになることが出来ても満たしていなければならぬ条件はいくつも存在する。

だからこそ、使いたい時に使えるように、こうして呼人は1つずつ確認を行っている。2度目の試行。

今度は取り敢えず変身することが出来た。そして動き。体躯的にイメージするのは、

赤龍や冥灯龍の動き。出来ることならあれ以上に、通常個体のようにアグレッシブに動きたいのだがさせて。

ちなみに、呼人が借りたのは演習場の端の方の空き地、というか駐車をイメージしたエリア。そのため、多少動いて暴れても、すぐにならすことが出来るので壊す可能性があるならできればそちらでするようにと言われた。むろん威力を試すならば街を使ってもいいとも。このあたりの太っ腹さは、雄英故のものだ。

海竜の動きにならない、突進、尻尾で前方を薙ぎ払い。そして前足を残しての下半身での体当たり。かなり自由に動かすことが出来るようになった。が、やはりモンスターというのは、人間の体と比べて不自由に感じてしまう。逆に体重から来る威力や身体構造故の突進能力は高いのだが。

そうであるなら人間の状態でも使える個性の使い方、つまり3本目の腕を生やすとか、違う部位と入れ替える方を練習すれば良いと考えるだろうが、そちらはそちらで夜中などにひっそりと練習している。呼人が自室に寝具を運び込んでいないのにはそういう理由もあるのだ。

それに、制御を高めることはいずれにしろ悪いようにはならない。そう考えての選択である。

その後、通常の体格で雷魂や強力な発電器官を持つ個体に変身してみたが、こちらは

発電器官が強力すぎて体が属性エネルギーに耐えかねているらしく、自傷したので少し強化した状態へと変化させた。

ここで言う属性エネルギーとは、『古龍の操るエネルギー』や『物理的エネルギー』とはまた異なるもので、厳密に言えば『古龍の操るエネルギー』あるいは『生命エネルギー』などとも言われるエネルギーの亜種とも言えるものである。

モンスター達の世界では、この個性の存在する世界よりもより身近に、というより多くのものに『個性の元になったり、古龍が操ったりしている』エネルギーが宿っていた。一方この個性社会においては、モンスター達の世界では自然や生物、物質などに散らばっていたエネルギーが、全て人間の個性という場所にだけ集まっているのだがそれは置いておいて。

つまり、通常の炎や電気、水などにもエネルギーが宿っている。そしてそうしたものは、宿る対象によって少なからず変質したものとなる。だからモンスター達が宿すエネルギーを『生命エネルギー』と呼ぶし、水や火、電気などに由来するエネルギーを『属性エネルギー』と呼ぶのだ。まあ彼らの世界の学者達も正確な事はわからないまま推測で命名していただけなのだが、これが意外と当たっているのである。ただ、そもそもそちらの世界ではこのエネルギーが物理とはそもそも同時に存在しているものであったため、常識がそもそも全く違う世界、という認識が一番正しいようだ。

そして説明は長くなったがこの属性エネルギー、しつかりと物理に干渉する。イメージとすれば、ただの火と属性エネルギー満タンの火を比較すると、物理的には同じ火でももたらす影響が全く違う。

モンスターたちの世界の人間はこれを利用していた。そしてそれは物理に干渉するがゆえに、強すぎるのとただエネルギーがあることだけでモンスターが、というか物質が耐えられない、なんてことも起きうる。今呼人が変身した海竜が自分の秘める属性エネルギーによって自傷したのがいい例だ。

もともとこの属性エネルギーは物理的なものとはあまり切り離せないが故に切り離して考える必要も無かったのだが、呼人が再現する段においてはその限りではなく、これに関しての考慮も必要となってくる。つくづく、世界をまるごと知るといふのは重たいことである。夜中や授業中なども、モンスター達に彼らの生態などについてより詳しく聞いているために、最近の呼人の脳みそはフル稼働中だ。

だが、同時に楽しいとも感じる。出来ることが増えるのはありがたいし、やはり嬉しい。それに、モンスター達の世界について知るのには、正直、こちらの世界で人間について知るのより楽しかったりするのだ。

(次は雷狼竜……火竜種は……)

』

『そうだな。あれはもうちよつと詰めないとそもそも種によつて全く違うからな』

モンスター達の力を引き出し、その可能性を自由に操る。それはもはや、災厄と呼ぶことすら軽く思える力なのではないだろうか。

土曜日の午後。午前中に自主練を終えて寮に戻った呼人は、他のダンス班のメンバーと一緒にダンスの練習をしていた。正直、動きのお手本さえ見ることができればおそらく真似は出来る。だがそれを芦戸に言うのと、それでは駄目なのだと怒られてしまった。

『楽しく！ 思い切つて！ 思いを込めて踊らないと見てる人も自分も楽しくないでしょ！』

そういうのが人に与える印象というのは計り知れないものらしい。なので呼人も、他のメンバーと一緒に基礎から練習を行っていた。

と。練習中にふと視線を感じて後ろを振り返る。

「あれ、バレちゃった？」

そう言つて植木の陰から出てきたのは通形と、白い髪の可愛らしい少女。それに相澤とプレゼント・マイクであつた。少女、エリは通形の後ろに隠れていたが、緑谷を見つ

けるとおずおずと出てくる。

「デクさん」

そう声をかけるも、蛙吹や麗日、そして他のクラスメイトが集まってくると再び通形の影に隠れてしまう。まだ、彼女の中から人間に対する恐怖心は消えていない。

通形は救助の際に最も近くで関わった人間でかつ現在は休学中であるため、こうして時間が出来るごとにエリとともに過ごすようにしている。相澤とマイクは、入院している病院からここまでの護衛要員として。

ヒーローに敗北した死穢八齋會の人間だが、まだ幹部や若頭は捕まっていない、というよりヴィラン連合の手引によって逃げられている。そして死穢八齋會が作ろうとしていたものを考えると、再び狙ってくる可能性がある。というのがヒーローや警察の見解だが。

死穢八齋會の組長を名乗る人物から、ナイトアイ事務所に手紙が届いていたのだ。

内容としては。

- ・ エリには今後死穢八齋會の人間は一切関わらないこと。
- ・ もし組の意思を外れて手を出す組の人間が手を出した場合にはこちらで殺すこと。
- ・ 表の世界で育ててやってほしいこと。
- ・ 泣かせたら泣かせた人間を殺しに行くこと。

などが記載されていたらしい。送り主も完全に不明であり、ヒーロー側はこれをどうとれば良いのか悩んでいるようだ。

これは、呼人には事後報告であったが死穢八齋會組長が神王寺に依頼をし、モーメントが運んだものである。治崎はまだその有効性などについて組長に反発したようだが、それでも己が既に失敗している上に大局的な理想には意味が無いと呼人に明らかにされている以上その反対には力がなかったと言う。

そのため、取り敢えず護衛付きでの外出を認められていた。どちらにしる病院に入っているが、それを雄英が代わっただけである。

(まだ笑えるようにはならないか。まあそれに関しては、俺が出来ることは……：アーニヤと同じことができればまあ出来るかも知れないが、する意味は無いだろうな)

「よーしじゃあ少し休憩にしよー！ ほら緑谷は行ってあげて！」

呼人が少女を観察している間に通形が緑谷に声をかけており、彼が少女とともに学校内の探索に行くということ練習は一旦休憩時間となった。休憩時間は緑谷が要しそうな時間に合わせて30分となっている。

(30分じゃあ演習場に行くのももったいない……また教えてもらおうか)

空いた時間は強くなることに、と寮のロビーに腰掛けてモンスター達に関する知識を

学ぼうとしていた呼人だが、『ティータイムだつてば百竜！ 寝るなー！』と芦戸に引きずられて寮の中へと連れられていく。

「寝ようとしてないぞ」

「じゃあ何してたの？」

「イメージトレーニング」

「ダンスの？」

「いや個性の」

そう言うのと、怒った表情の芦戸は腰に手を当てる。

「百竜！」

「はい」

「楽しむ時は楽しも？ ずっと張り詰めてたら楽しく無くなっちゃうでしょ！」

「善処する」

「だからそれもー！」

その後騒ぎを聞きつけた葉隠や、苦笑している尾白、障子からも似たような事を言われてしまう。熱心なのはお前の良いところだと思いが、もつと『今を』楽しもう、と。

みんなで話して、お茶しておやつを食べて。そんな時間があつても良いのではないかと。

そんな時間を、人は楽しいと呼ぶのだと。

幼いエリが学んでいるようなことを、それなりに年上の呼人もまた同じタイミングで学んでいた。

文化祭練習が始まって一週間ほど。放課後の練習もどんどん時間を増していつて放課後の自主練なんて最大でも1時間ほどしか取れなくなってきた頃の事。

時間ギリギリになって教室へと駆け込んだ呼人は、ちようど良かったとばかりに砂藤に連行された。連れて行かれた先には、緑谷と芦戸、そして同じダンスチームの面々と、機材・小道具チームの切島がいる。

そして芦戸から、用件が告げられる。

「お2人のどちらかには、クビになってもらいます」

趣旨がはつきりとは理解できず改めて説明してもらおうと、演出上の理由で途中で離脱する、つまり踊る時間を短くして演出班を手伝って欲しいということだった。

「あ、でも僕エリちゃんに踊るって言っちゃったよ……」

「じゃあ百竜だね!」

「別に良いが、どういう内容だ？」

「青山がフロア全体に行き渡るように動かしたいんだけど、吊り下げて動かせるような大掛かりな装置は無いし、人力で動かせる人間が欲しいんだって」

「ちよつと待て青山が行き渡るの状況がわからない」

青山が行き渡る。文字にすると首を傾げたくなるものだが、青山は途中からその個性を生かしてミラーボールになるのである。ミラーボールになるってなんだ。

つまりその際青山が高い位置に行くわけだが、その青山を体育館の上からぶら下げて移動させられる人員が必要になるということである。

「それ、移動する時に俺が立つのは天井の梁か？」

「そー！ 体育館の上の方の棒がいっぱいある所！」

「耐荷重次第だな。後どれぐらいの速度で動かすか。それ次第じゃあ個性使うことになるし、個性を使えば体重も上がる」

「だって切島ー！」

「サンキュー百竜！ んじゃあ青山と百竜と俺達で一回試しに行かねえとな！」

「わかった」

取り敢えずロープが用意できていないので、データ上の耐荷重の確認と求める速度などを確認することになった。それに合わせて呼人の体重測定でもある。

第5話 I F (呼人が自重しない性格だった場合)

体力テストの翌日。

意外なことに、前日のガイダンスで言われたとおり通常の授業がすぐに始まった。数
学に現代文に英語。至って普通の高校授業だ。

ちなみに呼人は学問においては高校レベルは全て、一部学問においては大学レベルま
で修めているので、全く苦勞することはなかった。これは呼人の頭がよく回るとい
もあるが、一瞬目を通すぐらいのスピードで読めば知識に飢えた龍連中が記憶し解
釈し、脳内でのイメージで呼人に教えてくれるからである。脳内でのイメージ交換や活
動は速度の束縛を受けないので、そこで学習すれば普通の何倍もの速度で学習が
出来るのである。そういうスピードで思考をしていると呼人には疲勞が早く貯まる
のだが、それも訓練の一環である。

昼食時には、席がすぐ近くの耳郎に驚かれながらも特大の弁当と、学食でのクック
ヒーローの美味な料理を2人前ほど安価で食べた。

ここまでであれば、普通の学校生活。

だが、ヒーロー科はここからが違う。午後からは、ヒーローになるための学びの時間。

「わーたーしーが!! 普通にドアから来た! H A H A H A H!」

このカタカナではなくアルファベットが似合いそうな勢いで笑っているのが、午後の授業、〃ヒーロー基礎学〃の担当講師、オールマイトである。

彼の登場にクラスメイトは大盛り上がり。呼人は彼の伝説を知らないものでそれについていくことはできないが、彼のことは神王寺から聞いていた。曰く

『野生の竜じゃあ、そうは彼には勝てないだろうな。古龍は知らん。あんな災害』

野生の竜。それはオドガロンやトビカガチなど、モンスター達の世界でも強力な生物を指す。そんな竜達に、オールマイトはタイマンで、しかも素手で殴り勝つという。その力は、エネルギーの弱いこの世界では驚異的なものであるといえる。

「オールマイトだ! 本当に先生やってくれるんだ……!!」

「銀時代のコスチュームだ……! やばい鳥肌が……!」

呼人がこっそり体内を変化させてオールマイトを観察している中、オールマイトはどんどん先へと進む。

「ヒーロー基礎学、今日の訓練はこれだ!」

そう言つて彼が突き出した板には、『B A T T L E』と書かれていた。すなわち、戦闘訓練。その文字に皆が目を輝かせながらも身を引き締める。

「ヒーロー基礎学はヒーローになるための様々な訓練を行う課目だ! 今日早速それ

を体感してもらおうぞ！　そして——これ！

オールマイトがそう言うのと、壁際の装置が機動して壁から収納棚が飛び出してくる。
「入学前に送ってもらった「個性届け」と「要望」に沿って作った戦闘服だ！」
小コスチューム

「うおおおおお!!」

戦闘服の登場によって、クラスのボルテージも最高峰に上昇する。

「では、皆着替えてグラウンド・βに集合だ！」

オールマイトの言葉に皆力強くうなずき、それぞれが着替える。コスチュームとは、ヒーローの証、その証明でもある。それを纏ったものは、授業を楽しみにしながらグラウンドへ向かった。

「まあわりと、悪くないか？」

呼人の戦闘服。それは、モンスターたちの世界で『新大陸のレザー装備』と言われた装備と見た目を同じにしていた。

人格を獲得したモンスター達だが、その過程で、彼らの世界の人間側の知識をかなり獲得していたようで、武器や防具に関する知識があるのである。その過程で自分たちが人間からどう認識されていたかを知ったモンスター達の間には波乱合ったのだが、それはまた別の話だ。

呼人のコスチュームは、具体的には茶色のベストに焦げ茶のジャーキン、そして腕甲

にフィンガーレスグローブ、ブーツとそのすべてが呼人から提供されたレザー、すなわちモンスターの革で出来ている。もともとは大自然の中で探索や戦闘、キャンプなど全ての活動をするための装備であるので、戦闘用の重厚な装いではなく行動しやすそうな見た目をしている。

「にしても、ちよつと浮くなこれは」

周りがヒーローチックな、現代的なコスチュームばかりであるのに対し、自分のファンタジーチックなデザインに少し後悔する呼人であった。神王寺と一緒に大自然を巡るには問題の無い装備ではあるのだが、街中でこれは浮く。

(制服着るのもそういう理由かな)

人間の常識を様々教えられた呼人だが、こうしたレベルでの常識は教えられる時間が無かったため、これから学ぶ必要があった。

「百竜くんのコスチューム、ファンタジー風だね！」

「正直見た目はどうでも良かったから適当に決めただけど、ちよつと浮いてるから後悔してる」

「確かに浮いてるっちゃ浮いてるけど、目立って良いんじゃない？」

周りにから浮くコスチュームに否定的な呼人であったが、耳郎は意外と肯定的であった。ヒーローのコスチュームは実用面もそうだが見た目がよくてなんぼということ

もあり、そういう意味では奇抜なものや古風な鎧武者のようなコスチュームを持つプロヒーローもいる。

「……コスチュームは利便性だけでなく、そのヒーローを示すものが求められる」

そう言う障子は、背中部分、彼の触腕が展開する部分が自由に稼働できるようなコスチュームを身にまといている。

耳郎はほとんど軽装だが、靴だけが通常のものとは違って彼女の個性に合わせた能力重視。

葉隠は正直透明なので見ても何がどうなっているのかわからない。裸だが普通にコスチュームを来ているところを見ると、防御力重視だろうか。

「なるほど。その背中のは動きを妨げないためか」

「そういうことだ」

その後互いのコスチュームのこだわりの点や、希望と違った点など話していると、やがてオールマイイトと、何故か相澤がやってきた。

「さあ有精卵共!! 戦闘訓練のお時間だ!」

授業の担当はあいも変わらずオールマイイトのようで、彼が説明を担当する。

生徒の質問に答えて曰く、現代凶悪な敵が出現するのは路上よりも屋内が多く、それを想定してヒーローとヴィランの組にわかれて、2対2の屋内戦を行うとのことだ。

したがってルールは以下の通り。

- ・制限時間内に『核兵器』とされるターゲットを確保すればヒーローの勝ち。
 - ・制限時間までターゲットを守備、あるいはヒーローを全員確保すれば敵の勝ち。
- 要するにターゲットを奪い合いながら敵を叩きのめせという話である。

場所は広大なグラウンドβ内の訓練用のビルで行うとのことだが、メンバー決めの段階になって初めて相澤が口を開いた。

「百竜。お前は一人チームで敵サイドを2回やれ」

そう言った相澤に皆が疑問を浮かべると同時に、オールマイトが相澤を責めるように振り返るが、彼はそれを気にしない様子で呼人の方を見る。

「わかりました」

相澤は非合理的なことが嫌いなたちだ。わけのわからぬ生徒を受け持つぐらいなら、その能力を明らかにしたほうが良いとの判断だろう。そう言ってくれば説明ぐらいはするのに、と呼人はため息をついたが、もう皆の前で決まってしまった。

結局ペア決めにおいて一人になってしまった呼人は皆から遠巻きに見られてしまい、1人で戦闘開始を迎えることになる。

「1試合目はAチームがヒーロー！ Dチームが的だ！ その他の皆はモニター室へ行くぞ！」

第1回戦はAチーム：緑谷&麗日VS Dチーム：爆豪&飯田である。

爆豪は個性把握テストのときから緑谷を過剰に意識していたようであるし、とうの緑谷はあのボール投げでの個性の発揮意向も不安げな様子が見て取れ、非常に安定しない。何か問題になりやしないかと密かに心配する呼人であった。

勝ったのは緑谷のチーム。

緑谷と爆豪がタイマン、というより爆豪の一方的な私怨で緑谷と戦っている間に麗日が核に接近し、核を守っていた飯田と対面。一時膠着するが、爆豪と激しい戦闘を展開していた緑谷が高威力の攻撃で階下から麗日を援護。

その際に麗日が核を確保した。

『爆豪が勝手してなければ、な』

『緑谷達の対応としてはあれしかないだろう。訓練なら、な』

『そうだろうな』

呼人は試合を見ながら、脳内のモンスター達と高速で意思疎通をして分析を行っていた。ちなみに血気盛んな連中は分析するのではなく『そこだ!』『ぶん殴れ!』、なんて言っているのが頼りにならない。ラーとガルガとミドガはもう少し落ち着け。

直後の分析においては、八百万が呼人の分析と同じくあくまで訓練だからこそ出来た戦法であり、それぞれ修正すべき点がたくさんあると指摘した。

「次は場所を変えて……ヒーローサイドがBチーム・敵は百竜くんだ!」

その指示に、周囲がどよめく。呼人の対戦相手は轟と障子。特に轟は推薦組の1人であり、個性把握テストでも高い記録を出していたのだ。

「……負けるつもりはない」

「おう。かかってこい」

複数の腕を持つ彼との格闘戦は少しばかり燃えそうだ。そう考えていた呼人であった。

ピルの最上階にはハリボテの核が置いてあった。こんなわかりやすい核があるもの

かよとも思うし、敵が自爆する可能性もあるのだろうなと考えた呼人だが、まだそこまです求めないということだろう。

訓練開始までには互いに作戦タイムが設けられており、少しばかり呼人は暇である。

そして、戦闘開始。

直後。呼人の体ごと、ビル全体を氷が覆った。

その光景の一部始終を見ていたのが障子、そしてモニター室にいたクラスメイト。その光景は衝撃的すぎて、誰もが轟達の勝利を確信する。

「凄まじい……全てを無傷で確保するとは……！ この中では敵も満足に動けまい……！」

「無茶苦茶じゃねえか！」

「相澤先生があんなこと言うからどんな戦いになるかと思っただけ……これじゃあ勝負にならないね」

ただ、事情を一部知る教師を除いて。

氷によって建物を覆ったが、例え敵の足を凍らせて捕縛していたとしてもターゲットを確保しなければ勝ちにはならない。そう考えて建物に突入した轟と障子は、少し進んだところで違和感に気づく。

「轟、これは……」

「……俺の氷じゃねえ」

2人が異変に気づくと同時に、最上階を移していたカメラの映像が大きく乱れ、やがて映らなくなる。そしてそれは、順に、まるで何かが歩くのに合わせるかのようにカメラの映像が途絶えていった。

「これは……!」

「……」

その途絶えたモニターを相澤は静かに睨んでいる。皆が騒然としている中、少しするとオールマイトのみに聞こえるイヤホンに、呼人からの通信が入った。

『終わりました。恐らくカメラがいかれてると思います。』

「ううむ……! 勝者、ヴィランチーム……!」

その宣言に、第1試合のような勢いは無い。

「え、もう終わったのかよ!」

「先生、何があつたんですか?」

「訓練に使用する機器の故障とはどういうことですか! 説明を求めます!」

やがて、呼人がモニター室に戻ってきた。対戦した2人を背負って。見た目上外傷の無い2人だが、ひどく消耗した様子で震えている。

「凍傷の可能性があります」

それを聞いた相澤はすぐに動き出し、バケツに水を汲んでくると2人の四肢をつけさせてゆつくりと低温で温める。またそれ以外の部分も、水を含んだタオルで摩擦することとでゆつくり温めていった。都市部での活動を主としている相澤だが知識としてその対処は知っていた。

一方2人を背負って連れてきた呼人も、右腕の手先を岩状に変化させた状態で水につけ、少しずつ水を温めていく。これを使えばどうなるのかというのは、呼人も理解していた。理解していて、自分の力を示すためにやったのだ。

と。荒い息を吐いていた轟が、思い出したように自分の左半身から弱い炎を出して自分で自分の体を温めていく。本来は熱を循環する機能のあるラジエーターを背負っているのだが、それが完全にイカれているために左手を体のあちこちにかざして少しずつ温めていった。

クラスメイトたちが満身創痍の轟と障子に息をのみ黙り込む中、障子よりも冷気に耐性のあつて先に回復した轟が先に口を開く。

「百竜……お前、何、した？」

「どういう答えを求めてるんだ？」

「あれは……お前の個性だろ。俺の個性じゃあ、ああはならねえ」

ああ、と。轟の発した言葉。ここにいる誰もがそれを見ていない中、轟と障子だけは

それを体感し。更に自ら氷の個性を扱っている轟だけが、それがどんなものなのかを察していた。

「轟少年、何が起きたのか説明してくれるかい?」

オールマイトの問いかけに、轟はゆっくりと首を横に振る。

「俺にもはつきりとはわからない、です。ただ、寒かった」

「寒かった? 君が作った氷で、かい?」

オールマイトの問いかけに、再び轟は首を横に振る。

ビル全体を氷で覆ったのは、轟自身だ。その彼が寒かったと表現している。自身の個性が氷でも寒いものは寒い、と取ることも出来る。だが。

2人が凍傷の可能性があると云ったのは、2人を運んできた呼人だ。氷がただあるだけで凍傷になるとはとても考えられない。つまり。

「百竜少年の攻撃、ということか」

「百竜、お前の個性なのか、あれは」

「……そうだな。お前が氷を使うのは最初の攻撃でわかった。だから俺も冷気を使った。氷点下50度の冷気。それがお前と障子が晒されたものだ」

氷点下50度。それは人間が生存できるほぼ限界に近い気温。それも、コスチュームのような軽装で晒されて無事でいられるようなものではない。

カメラが一気に途絶えたのも、それを放出しながら呼人が轟達の方向へ向けて歩いてきたからだ。雄英のカメラと言えど、そんなものに晒されることは想定していない。だから、呼人の歩みに合わせてカメラの映像が途切れていった。

「そんなもん、どうやって」

「個性に決まつてるだろ。それが俺の個性だ」

正確に言えばそれもではあるが。言ったところで全てを説明するつもりなど毛頭ない。

皆に見せつけるように、呼人がその右手を変化させる。装備していた籠手が肌に吸い込まれるように消え、代わりにそこから蒼い鱗を持った腕が現れる。そこから放たれる冷気によって周囲の空気は白み、気温はどんどん下がっていく。すぐ近くにいる轟や相澤以外のクラスメイトたちにもそれは確かに感じられた。

「これをもっと本気でやった」

そう言つて呼人は右手を籠手を装備した最初の状態へと戻した。だが、その影響は室内に色濃く残り、地面や壁が結露しているのが明確に見て取れる。

「あれ、冷気を出す、つてこと？」

「おそらく、純粋に周囲の空気を冷やしているのだと思いますわ。空気を放出している」とすると、もつと風が起きるでしょうから」

「いやでも……轟があんななるなんてよ」

クラスメイトらの驚きは最もだろう。この世界の個性というのは、そんなことが簡単に出来るほど自由なものではない。

だが。

天候にすら干渉する古龍の環境干渉作用。建物1つ分の広さなど、ものの数ではないのだ。

第6話 個性とは

放課後の訓練の時間が削られて、更に夜の外出時間も無くなってトレーニングが減った呼人は、短時間で鍛えることが出来るように朝の走り込みを厳しくし、更に通常の道路などを使った走り込みから雄英内に存在する森を使ったものへと変更していた。

普段してなかったのは、寮からの場所が普通に走るのに比べて遠かったのと、負荷をかけていればそれなりに十分に鍛えられていたからだが、これを機会に更にトレーニングの負荷を1段階あげようと思っていたのである。体を変化させて重量をあげた上で、更に足場の悪い森の中を走る。いずれは、雄英敷地内の山にも行ってみたいがそつちは更に遠い。

と。いつもどおり森の中を駆け抜けていると、横手から突風を受け体が浮き上がる。普段は周囲を探っている事の多い呼人だがそれでも場によつては気を抜くことはあるし、トレーニング中は自分の体への負荷などに気を割いているので、直前まで気づくことが出来なかった。

「う、おっ!!」

体重をあげて重心が上に上がっている為に転倒しそうになる体を咄嗟に人間のもの

に戻すとともに地面を踏みしめて耐え、突風の原因の方へと索敵を向ける。ヴィランであればことだと思つたのだが、森の中を高速で走り抜けている呼人をただ狙つてくる理屈がわからないのだ。

と。慌てたような声が聞こえた。

「え、今の声!?!」

「誰かいたのかも知れない。怪我をしているようなら保健室に運ばないと」

その声は呼人も良く知つたもので。ヴィランのものではないとわかつたので安心して木陰から顔を出す。

「今の突風は緑谷か?」

「ひゃ、百竜君!?! やっぱり巻き込んだ!?! ごめん大丈夫!?!」

慌てて緑谷が駆け寄つてこようとするので、呼人もそつちに歩いて近寄る。

「一応いなしたから大丈夫だが……人を巻き込まないように気をつけろよ。まあこんなところ走つてた俺も悪いけど」

「ほんとにごめん!」

「怪我は無いかい百竜少年」

オールマイトも後から近づいてきて呼人の様子を確認してくれる。本当は緑谷と一緒にいるところを見られるのはまずいオールマイトだが、それでも生徒が怪我してない

かの確認が先だと呼人の方を気にする。

「大丈夫です。ふっ飛ばされたわけでもないのだから」

普通に人間の状態で走っていたら確実に飛ばされた、というほどではないが転がされていただろう。だが体重を増加させていたためたたらを踏むだけなんです。」

』

と。そこで呼人の中にいる竜人の一人が呼人に話しかけてくる。

「緑谷、ちよつと手を出してもらっていいか」

「え？ えーと……」

「頼む。そんな時間がかかる話じゃない」

「う、うんわかったよ」

緑谷の出した手を、呼人は上下から自分の手で挟み、目を閉じる。以前アーニヤにしたのとは、違う。これは、ただ呼人のエネルギーを緑谷に触れさせることで、そのエネルギーなどについて探っているだけだ。触れることで精度が上がる、といっても詳細に個性のことがわかるのではなく、ただ蓄積されたエネルギーについてのことがわかっていくだけという話。

だが、それだけでもわかることはある。

例えば。緑谷の個性にためられたエネルギーは膨大で。いつ変質を起こしてもおか

しくないということとか。あるいは、それがある形で出現するのではないだろうか、ということ。

「緑谷」

「う、うん。どうしたの？　急に僕の手を触つて。怪我なら大丈夫だよ？　跡はあるけどもう治つてるし」

「いや、そうじゃない」

どう伝えるべきかと少し悩んで、呼人は彼には求めることだけ短く伝えることにする。

「お前の個性……これ以上個性を持った相手には引き継ぐな。相手の個性次第じゃあ、一人でも大変なことになる」

「え？　引き、継ぐ……つて、どういう、こと？　僕の個性は——」

途端にしどろもどろになり、顔色も青ざめる緑谷。そんな状態だと、呼人でなくてもわかつてしまいそうなものだがまあそれは緑谷の問題だ。

（百竜君は知ってる？　でもなんで——知ってるはず……）

「オールマイトから引き継いだものだろ、それは。それは別にどうでも良いんだ。ただ、それ以上個性を持つてる相手に引き継いだら駄目だ。本当はそれ以上引き継いでいくことすら危ないが、無個性の相手ならどうにかなる。ただ絶対に無個性の相手じゃない

と駄目だ。それと、そのうちお前か、お前が引き継いだ相手から角が生えてくるかもしれない。そうなったら、そこから引き継いでも1代で終わりにしろ」

「待って、待って百竜君！ 何を言ってるかよくわからないんだけど……どういうこと、かな」

それでも緑谷が誤魔化そうとするので、百竜は首を振る。

「わかった。一から説明するから、取り敢えず今日の昼休み。オールマイトも来てください」

「大事な話、なんだね？」

「そうです」

オールマイトの方は、緑谷よりも頭が回っていた。オールマイトの個性について詮索する人間は多い、というより興味を持たない人間はいない。だが、呼人はそれをどうでも良いと良い、それよりも『引き継ぐこと』が問題だと指摘した。それすなわち、オールマイトの個性がどういふものかわかっているということを示す。ならば今更隠すことは無駄であろうという判断だ。

昼休み。よくオールマイト達が話しているという仮眠室で話をしようということになり、呼人は緑谷と連れ立ってそこに向かった。

「あの、百竜くん」

「なんだ？」

「その、本当に知ってるの？ オールマイトの、個性」

「全部は知らない、けどある程度は。それもちゃんと説明する。隠しておきたいことだったんだろ？」

「う、うん、秘密にしておかないと駄目なんだ。僕のことじゃなくてオールマイトのことは」

「なるほど」

呼人は、別にオールマイトの事情を知っているわけではない。ただ、『エネルギー理論』。呼人達がそう呼んでいる個性や古龍の操る力に関する理論において、彼の個性が危険になる可能性が高いのだ。

仮眠室につくと、先にオールマイトが来ていたようでお茶を用意してくれていた。

「ようこそ2人とも。取り敢えず座って」

「失礼します」

呼人がオールマイトの正面に座り、悩んだ様子の緑谷はオールマイトの隣を選んだ。

そして早速、呼人が口火を切る。

「まず、俺は2人の個性がどういう力なのかは正確には把握してません。ただ、入学当初から2人から感じる力を同質のものだと感じてました。そしてさつき改めて確信しましたが、似ているとかじゃなくて同じものです。だから引き継いだものと判断しました。でしよう?」

呼人の問いかけに、緑谷はオールマイトの顔色を伺う。

当のオールマイトは、しばし考え込んだ後あえて質問で返した。

「このことは、他に知ってる人はいるのかい?」

「俺の胸の中にだけ」

「なるほど」

その言い回しに、オールマイトはうなずく。おそらく、モンスター達は知っているのだろうと。それは知っているオールマイトにのみわかる言い回しだった。

「それで、何故引き継いでいくのが駄目なんだい?」

「まず、個性というのは人間の感知できないエネルギーが人間に宿って変質したものです。そしてさつき緑谷に触れてわかりましたが、多分、その個性オールマイトよりもっと前から来てますよね。その過程で、複数の人間の持ってた個性、まあようするに、複数のエネルギーが混ざり合った状態になってます」

「本来は1人1つのはずのエネルギーが、複数宿っている状態が緑谷少年やこれからの者にとつて良くない」

「というわけではないです」

そこで呼人は居住まいを正す。ここから先は、重大な話だ。

「さつきも言った通り、個性の元になっているエネルギーを人間は感知できません。それ即ち、わかっているだけのことです。勝手に法則に当てはめようとしているに過ぎないです」

「はつきり言ってくれて構わないよ」

「これ以上エネルギーの総量が増えるようなことがあったとき、何が起るかわかりません」

「それは……どういふ風に何が起るかわからないんだい？ 緑谷君の体が耐えきれな

い、ということかい？」

「いえ、おそらくそういう方向ではないです。今の個性は見ている感じパワーアップ系なんです。変質して例えば触れたもの全てを水に変えるとか、あるいは視界に入ったものを全て塵にするとか、そういうものになる可能性があるということですよ」

「それも、個性、なのかい？」

「そうです。もともと自然な形でエネルギーが人間に溜まる量はたかが知れています。

だから今も、地球を真つ二つに割ってしまうような個性は無いわけですし、触れた全てを灰燼に帰すようなような個性も存在してません。それは個性の元になったエネルギーの出力上の問題です。まあわかりやすく言えば、轟と耳郎の個性では、その元になつているエネルギーの量が違うんです」

当然変質しているのではつきりと判別できていくわけではないし、そういう個性が特に強大なエネルギーに由来するのかはつきりとしていない。ただ、そういう風にエネルギーの差というのは確かに存在している。

「ただ、ここで問題になつてくるのがエネルギーが集まつていくということです。個性特異点、というのは？」

「個性がどんどん混ざり合つて深化していつて、いつの日か人間の手に負えるものじゃなくなる、つていう終末思想、だよな」

緑谷の言葉に、呼人はうなづく。

「そう言われているが、細かく言えば間違えてる。個性が混ざつていくだけなら問題は無いんだ。もともと人間が10持てるエネルギーが、5と5に分かれれば当然それぞれは減少する。問題なのは、親から10を引き継いだ上に、子供が生まれる時点で外部から更に10を獲得していることだ。だから、世代を追うごとに個性の出力が上がつていつてる。そして全体量が上がっているから、両親から引き継がれる個性もどちらかに

偏るのではなくて混ざったものになる傾向がどんどん強くなっていった」

生物濃縮というものを知っているだろうか。モンスター達の世界でも起きている、とか特定の属性を発動する古龍以外のモンスターは得てしてその原因にこの生物濃縮を持っているのだが、要するに最初は小さなものが、どんどん上の階層にいくに従って溜まっていき、本来のそれとは比べ物にならないほど高濃度になっていく。

それと似た現象として、人間の中にある個性のエネルギーはどんどん高まっていき、やがて、地球、宇宙すら滅ぼすようなものへと変わっていく。

「このままそれが進めば、個性特異点の思想のとおり個性は人間の手に負えるものじゃなくなります。例えば地面に手を触れただけで地球が2つに割れるとか。地球上の大気の全てを毒ガスに変えてしまうと。そういうことが起きる可能性があります」

「……それが本当のことだとして、なんで君はそれを知っているんだい？」

「それについては言えません。彼らが教えてくれたとだけ」

「そうか……それが私や緑谷少年の個性に関わっている、ということだね」

オールマイトの確認に呼人はうなずく。緑谷はもはや話についてこれずに目を回している様子だ。

「まず先に訂正しておくのは、個性特異点と2人の個性はまた別物だということです。個性特異点ではエネルギーが溜まっていき影響力も増していきますが、それでもあくま

で複合された個性に由来する影響力しかありません。それに対して、2人の個性はそれ以上エネルギーの量が増えると突然変異を起こす可能性があります」

「突然変異……それは個性の、ということか」

「そうです。基本、個性がいきなり変化することなんて無いです。もともと形が定まったエネルギーですから。けど2人の個性の場合は、もう器がいっぱいになりかけてるんです。普通は器なんて存在しないんですけど、何故か緑谷のエネルギーは1つのエネルギーが他の全部を包み込んでいます。そしてそれがもう限界まで来ています。これ以上詰め込もうとした場合、無理に押し込まれた個性が変質するか、あるいは外に溢れ出して何かが起きるのかはわかりませんが、少なくとも膨大な量のエネルギーです。ちよつとした影響じゃすみません。もともと人間は世代を追うごとに両親の2人からと外からの3箇所からエネルギーを少しづつ引き継ぎます。さつきはああ言いました。が、両親が10ずつ持っている、子供が引き継ぐのは20ではないです。一部を引き継ぐんです。ですが、多分2人の個性には引き継ぐ過程で全部持つてきてしまったんだと思うんですけど、10世代どころじゃないエネルギーが溜まってしまってるんです」

「なるほど……」

オールマイトは顎に手を当てて話を頭の中で整理する。つまり、本来は自然な形で蓄積されていくはずであったものを、『ワン・フォー・オール』という、力を溜め、譲渡す

る、という個性によつて一気に、それも歪な形で溜めきってしまったのだ。

「それと」

そして呼人はもう一つの情報を伝える。

「個性特異点の方は、あくまで自然なエネルギーの流れなのでどうにかありません。小さい川の流れを変えてしまうようなものです。ですが2人の個性で引き継がれると、それは既に人の手が加わったものになつてしまふので例え自然なエネルギーの蓄積をどうにかしたところでそれを無視できてしまふんです」

「どうにかなるとは、具体的にはどうするんだい?」

「詳しくは言えませんが、アドベンチャー他数名と一緒に手立てを考えています。そもそもこのまま行つて絶望的な状況にまでなるのはまだ何世代も先です。ただ、緑谷の場合はそれがもうすぐそこに迫っている状況です」

そこで、沈黙を守つていた緑谷が口を開く。

「えと、百竜君? つまり、僕が個性を無個性の相手に引き継げば問題ない、つてこと?」
「そういうことだ」

「なら、僕は使い続けても大丈夫なんだね」

「ああ。さつきも言った通り個性の元になつてるエネルギーはあくまで非物理的なもので、お前がどれだけ頑張つてもそれ以上引きつけられてくることはない。ただ、そうだ

な。個性因子を利用した違法な薬物なんかを体内に取り込んだ時には何があるかわからん」

「そ、そんなことしないよ！」

慌てたように手を振る緑谷だが、彼は忘れてしまっている。彼らが先日助けた少女が、どうされていたか。それが、どう扱われていたか。

「どんな形でも、だぞ。お前が意図的に摂取しなくても飲まされたり、あるいはガス状にしてばらまかれたり、銃弾にして打ち込まれたり。まあその程度ちよつとならすぐに影響は無いが、あんまりくらいすぎるとまずい。個性因子はエネルギーが実体化したもので、多少はエネルギーを含んでいるからな」

「それも駄目なんだね。わかった、気をつけるよ」

呼人と緑谷が暢気な会話を繰り返り広げる一方、オールマイトの頭の中は二択で揺れていた。

オール・フォー・ワンについて伝えるべきか否か。

個性の伝承による蓄積がまずいのであれば、それもまずいものであると言えるのではないだろうか。だが、あのヴィランの事は学生に伝えて良いようなものではない。

結局オールマイトは、伝えない事を選んだ。伝えた所で、どうしようも出来ないだろう。彼は今牢獄の中にいる。

そもそも。彼には悪いが話には信憑性が無い。ただ、無個性の人間に引き継いでいきたいという理由はオールマイトの側にもあるので、その話自体はわるいことではない。「教えてくれてありがとう百童少年。だが、そんな重大なことなら然るべき機関に広げた方が良くないかな。君の話の話を聞いていると私もぞつとしたし……」

「まだアドベンチャーが研究している段階なので……もつと詳しく判明したら多分そうすると思います」

嘘だ。広めるつもりなんてない。この件については呼人が、数年のうちに対処してしまおうつもりだ。呼人にはそれが出来る。

モンスター達の世界と違うのは、あちらはエネルギーが充満していたのに対してこちらは人間に集中しているということである。つまり、人間以外の全てが個性に対して脆い状態にあるのだ。モンスター達は莫大な力を持っていようと、星を破壊することは出来なかった。何故ならエネルギーの流れが様々な形でそれを防いできたから。だが、この世界にはストッパーがない。

呼人は1人先に仮眠室を出る。オールマイトと緑谷がまだ話すことがあるらしい。昼食は食べそこねたが、こんなこともあるのかとエナジーバーなどを鞆に持ってきていた。

第67話 文化祭・1

そして時は流れて文化祭前日。練習は文化祭が近づくと共にどんどん激しさを増し、今日も時間ギリギリの午後9時まで練習していた。

「そう、そこで百竜はソデから天井行つて、それで青山をロープで持ち上げる！」

当初懸念されていた青山の移動係だが、それほど激しくないのと流石に体育館の梁だけあって相当に頑丈であるため呼人の体重が多少増加しても耐えきれるということもあり、呼人が担当することになった。ただステージ上での青山と連携した演技や青山を放り投げる係に関しては、呼人が個性を使うと肌が変化して目立つ可能性があるということでも緑谷が担当することになっている。

「オツケーバッチシ！ 移動も出来てたし完璧だぜ！」

「ありがとう」

演出班の面々が力強く親指を立ててくれ、青山も楽しそうにウインクを決めてくれる。練習をした甲斐があつたようだ。

「百竜衣装脱ぐんだよね？ 脱ぐとき表に見えないように気をつけてね！」

「わかった」

個性を使う都合上、オドガロンの体なのであくまで体表は皮膚なので服を破るような心配はほとんどないのだが、それでも上で目立たないようにするためと服が途中で破れるのを避けるためにダンスから演出に移行するタイミングで上着を脱ぐことになっている。

「オツケー！ よしみみんな集まってー！」

「掛け声するよ集まれー！」

それぞれの確認までできつちり終わり、葉隠と芦戸の声に誘われるように全員がステージに集まる。そして、芦戸が声をかけようとしたとき。

「モウ9時ダロ!? 時間は守レエ、エ!!」

勢いよく扉を開いてハウンドドッグが飛び込んでくる。

「やべっ！」

「すみませんつしたあつ！」

「みんな急いで帰るよー！」

掛け声は取りやめになりそれぞれ道具を持って寮へと帰還する。入浴や食事を済ませる頃には既に12時が迫っていた。

クラスメイト達が明日について心意気や心構えを話しながら呼人と青山は機材の点検を行っていた。と、ロープがほつれているを発見する。一部が傷むとそれは全体に

伝播する。小さなほつれも侮れない。

「これ……ロープちよつとまずいかもな」

「僕らの絆の証さ！」

「このままだと絆の証引きちぎれるぞ」

「それは駄目だよ！」

1月近く同じ担当となつて一緒に練習してきて、青山ともそれなりに仲良くなれた、かというかどうかは微妙だが。どちらも互いに積極的に声をかける人間ではない。そのため会話が特段弾むというわけではないのだが、時々言わなくても互いに息があつて次の行動に移っている事を考えると一緒にいることに慣れてきているのは確かだ。

「どうしたの？」

2人が頭を悩ませていると、近くを通りかかった緑谷が声をかけてくる。

「ロープがちよつと傷んでるみたいなんだが流石にこれ使うのはまずいかと思つて」

「うーん……」

「ヤオモモに作ってもらつたらよくね？」

上鳴がそう提案してくるが、残念ながら早寝な八百万はもう寝てしまつている。

「僕で良かったら明日朝買つてくるよ。朝練に出るし」

「んあ？ でもお前担当……」

「百竜君のおかげで僕がエリちゃんの前で踊れるわけだし、お礼だよ」
「まあ、じゃあよろしく頼む」

一応はダンス担当になつてゐる緑谷だが、呼人が体調を崩してしまふことなども考えて青山運搬係の打ち合わせや練習にはきつちり参加していた。おかげで覚えることが増えたが本人はエリちゃんを絶対楽しませてあげたいから、と積極的に参加してくれたのだ。

「けど俺ら明日10時からだぜ？ 間に合う時間に開いてる店なんてあるか？」

「雄英の一番近くのホームセンター朝8時からやつてるんだよ」

「間に合うのかよ」

「8時について買ったなら8時半までには戻つてくれるから……大丈夫だと思う」

緑谷がロープの購入を引き受けてくれることになつたので、他の器具の確認を終えて片付けてしまう。その後部屋に撤退しようとしていると、上鳴に腕を引っ張られた。

「んじゃ一足速いけど徹夜組、明日は頑張るぞー!!」

切島が抑えた声で叫び、全員がそれに小さな声で合わせる。文化祭は、明日。練習してきたものをぶつけて。

爆豪の言葉を借りるなら、『音で殺る』。轟竜かな、とか思つたのは秘密である。そういう意味ではないのは呼人にも理解できるのだ。

翌朝。早くからクラスメイト全員が起き出し、衣装の確認に着付け、それに最終打ち合わせなどを行っていく。呼人もダンサー用の衣装を身に纏ったのだが。

「緑谷は？」

「彼はまだ戻ってないのさ」

「流石に遅いだろ。まだ時間はあるが上鳴じゃなし」

「今なんかデイスられた気がしたぞ！」

「気のせいだ。自分の方に集中しとけ」

演出担当との確認中に轟が漏らした言葉に呼人もうなずく。確かに彼が買いに行ってくれるとは言ったが、それにしても遅い気がする。まだ時間的には間に合うのだが、それでもギリギリになるタイプでも無いだろうに。

と、そこで呼人のスマホに連絡が入る。通話の相手は……モーメント。

「悪い、ちよつと電話だ」

「お。確認は取り敢えず終わったから良いぞ」

「ありがとう」

短く用件を告げて、誰も来ない場所へと移動する。

「なんのつもりだモーメント」

「いやー、文化祭なんて面白いもんがあるっていうからアーニヤと一緒に遊びに来たんだがな」

「いや来るなよ。ばれるだろ」

会話の内容が内容だけに、呼人は植木に近づき風で植木を揺らして会話の音を殺す。

「ライブなら暗くなるだろ？ それに歌ってる瞬間に一人増えたぐらいじゃ気づかなくて。ブラーも連れてきたしな」

「来てたのか」

「思わず呼人はそうこぼす。

ブラー。モーメントやりザード同様神王寺が海外から呼び集めた人材。確かに彼女の個性であれば、基本最初から注目されていなければいけない。

ただこの一ヶ月呼人は外に出れていなかったのだからわかっていなかったが、来ているとは思わなかった。彼女は元所属していた組織と揉めていると聞いていたのだ。それがこの1月の間に神王寺が赴いて解決してきたのである。

「で、なんだ」

「——のあたりの森でお前のところの生徒となんか戦ってるぞ。あれは緑谷だな」

「まじか……」

その報告に呼人は一瞬悩むが、再度モーメントに尋ねる。

「危なそうか？」

「いや、押してる」

「じゃあほっとけ。そんなやわなやつじゃない」

以前の緑谷なら心配もあつたらうが今ではクラス有数の実力者であるし、個性もオールマイトと同じ。もつとも扱いきれてはいないのだから。それでも、死ぬことはあるまい。それに報告の位置ならすぐに教師がかけつける。

「はいはい。リーダーもライブ踊るんだろ？　アーニヤが楽しみにしてるからな」

「……楽しんでいけど、言っちゃってくれ」

「アイサーリーダー」

通話を切り、呼人はため息を吐く。なんというか、あいつは一々何か揉めているなど。そういう運命にでもあるのだろうかなどと益体もないことを考えてしまう。

「百竜、そろそろ移動するぞ」

「ああ、今行く」

まあ取り敢えずは。文化祭が続行されることを切に願うことにしよう。

ちやんと来た。

皆が今からステージに並ぶかという瞬間に、緑谷はやつてきた。本当にギリギリの到着に、皆も言いたいことがあるものの言えず。大急ぎで緑谷を着替えさせてステージに引きずり出す。

と同時にステージの幕が上がる。

「いくぞゴラアアアア!!」

一発目。開幕に爆豪の両手から爆破の炎が上がる。コンセプトは、常に新しい刺激で殴り続ける事。歌も、ダンスも、演出も。その全てで飽きさせず常に魅了し続ける。

爆破を皮切りに、ギター、キーボード、そしてドラムの演奏が始まり、ダンス隊も動き始める。演出班の出番はまだ後だ。

呼人も、クラスメイト達と共に踊る。ただ動きを再現するのではなく、高ぶる思いをぶつけるように。

そして緑谷と青山の演出。2人が中央に集まって僅かな間踊った後、緑谷が青山を上に向かってぶん投げる。

青山の光は、何もない場所でこそ輝く。

(きれいなもんだな。本当に)

暗い中で輝くそれを見るのは、呼人も初めてだった。

そして青山が着地すると同時に舞台袖にはけ、梁へと上がる。ここからは呼人の番。と言つても全く目立たない黒子だが。

演出班が動き始めると同時に、青山を吊るしたロープを引つ張り上げて彼を振り回す。やるなら派手に、という呼人の主張のもと、轟とクラスメイト達が張り巡らした氷の橋の間を、青山は飛びまわる。呼人が上で激しく動き、彼を振り回しているのだ。振り回してもぶつけない、というのは幾度も練習し、またそれを見せたことで青山も納得してくれた。

更に、麗日が観客たちとハイタッチするとともに無重力状態にして浮かしていく。ふわふわと、浮かび上がった観客達もまた、演出の一助となる。見せるのではない。場の全てを呑み込んでいくのだ。

さあ、見ろ観ろ魅ろ。

美しい音楽は。視界に訴えかける光は。

「劇見たかったなあ」

「俺も見てみたかった」

「そっか百竜は劇も見たこと無いんだっけ」

「無い」

「はいはいお二人さん、口よりも手を動かしてくれよ」

舞台の撤去や片付け作業を裏で終えて外に荷物を運び出した時には、既にB組の演劇も終わっていた。ちなみにステージ発表はその2組だけである。

A組は演奏に荷物だけではなく氷なんかも砕いて運ばないと行けなかったのもそれなりに大変な作業になってるが、呼人や尾白、切島など素手でも割れる面々ががっしがっし砕いていったので割りかし短い時間で片付ける事ができた。

「——のはいいい。だが電話には出なさい」

「すみません。携帯寮に置いていってしまいました……焦ってて……」

片付けをしている隣では、緑谷が怒られている。オールマイトだけではなく、警備要員のハウンドドッグにも詰め寄られている。

と。呼人は隣で氷を箱に詰めようとしていた上鳴の腕をぐいと引く。

「うえ!? 何すん——」

「あ、緑谷飛んできた」

ドテツ、と。それなりに痛そうな音がしてハウンドドッグにふっ飛ばされた緑谷が上鳴がさつきまで立っていた位置に落ちてくる。そっちを注視していた呼人は緑谷の落地点に気づき、上鳴の腕を引いたのだ。

「危なかつたな」

「うえ、おつ、サンキュウ？」

「ほら、運ぶぞ」

呼人は、再度巨大な氷の塊に爪を突き立てて持ち上げる。呼人にとっては、下手に碎かれるよりもこっちの方が遥かにやりやすいのだ。

「この次なんだっけ？」

「上鳴ミスコン楽しみにしてただろ」

「あーそつかミスコンだわ。もうさつきので一気に気い抜けてさ」

ミスコン。一番綺麗な女子生徒を決定するイベント、らしい。呼人にはよくわからぬのだが、それを正直に言うとお上鳴や興奮した峰田に長い動画を見せられた。その中には、確かに美しく着飾った女性たちがそれぞれに自分をアピールしていて、その後その中でも特に美しい女性を決める、ということをしていた、と記憶している。正直割とどうでも良いので思い出そうとしないと思いつけない。

雄英でやるそれは、雄英らしく個性の使用であつたり、あるいはサポート科であれば

サポートアイテムの使用であったりと、まあようするにアピールの方法はなんでもありらしい。

「俺は早く何か食べたい」

「ミスコン興味無いんなら先に屋台とか回つとけば良いんでないの？」

「そんなこと出来るのか？」

瀬呂に言われて驚いた呼人はそつちを向く。むしろそつちが驚きだとは、呼人の名誉のために言えない瀬呂であった。

「そりゃ全員が演奏見に来たりするわけじゃないのよ。俺達が演奏してる間とかも、それぞれ展示とかお化け屋敷とかはやってたと思うぜ？」

「じゃあ俺はそつち行く」

呼人がそう言い出すのは予想できていた瀬呂は良いんじゃないやね？ などと勧めてくれたのだが。

「あー……俺もそうしよつかなあ」

上鳴までもがそう言い出すと少し心配するような表情になった。

「上鳴熱でもあんのか？」

「いやちげーよ！ どうせミスコン瀬呂が撮影してきてくれるだろうし、今なんか見る気分になれねえからさあ」

深刻な様子ではないが、何か様子がおかしいのに気付いた瀬呂は、気を回して引き止めるのではなく別の提案をする。こういうときは、下手に心配するのではなく送り出して、さり気なく様子を探ったほうが良いのだ。

「わかったわかった。じゃあ上鳴も百竜と一緒に回って百竜に色々案内したら？ 瀬呂君がミスコンは撮つといてやつからさ。映像荒くても文句言うなよ」

「いーの？」

しつしと、あくまで適当に瀬呂は追い出すようにするが、そういうふりをしているだけでも女子に関する話には必ず食いつく友人の不調に気を使っているのだ。

「じゃあ頼もうかな。俺も何見るのが良いのか全然わからないし」

「オー！ じゃあ俺が案内してやるぜ！」

2人の意向が重なったということもあって、ミスコンを見に行くという大半のクラスメイトからは離脱して、呼人と上鳴は他の展示会場の方へと向かった。

第68話 文化祭・2

「百竜屋台に行きたいんだよな？」

「何か食べれば何でも。確かメイドカフェってのもあったみたいだけど、メイドって人に仕えて世話する仕事する女性のことだよな？ そのカフェって何だ？」

「女子がね、メイドさんの格好して給仕してくれるの。メイド服って可愛いんだぜ？」

「まーでも、なんか好き勝手に食べたいなら屋台かな。メイドカフェは食べるのよりもメイドを楽しむって感じだから」

「じゃあ屋台で」

「オツケー！」

こつちこつち、と先に行く上鳴に案内されて呼人も歩いていく。普段の明るい上鳴と全く変わらない。変わらないというのに、何かいつもは興味を示す女子に全くと言っていいほど興味を示さない。それに時折ぼおつとなにか遠いところを見つめている様子になっている。上の空というやつだ。

これは何かあるなど、呼人も瀬呂が上鳴を自分と一緒に来させるように誘導した理由がわかった。

「ほら、これが屋台。つって夏休みの祭りで行ったよな」

「そうだな」

クラスメイトと一緒に縁日、というのを訪れた時には夜でその中に明るい屋台があるというのとは何かお腹よりも気分が満たされる感じがしたが、今はとにかく食欲をそそられる。

「あつちがポテトと唐揚げで、こつちがクレープ。でこつちがホットドッグ……結構色々あるのな」

「サポート科なんか自由なものを作ってるんだろ。見ろあの竈。ピザ焼いてるぞ」
「うわ、まじじゃん！ 買いに行こうぜ！」

それぞれのクラスが長い期間をかけて、そして本気で準備したのと、とくにサポート科などものづくりが出来る人がいるために設備などもかなりガチである。普段からサポートアイテムとかを作ってるサポート科の人間からすれば、調理器具や保温器具なんてお茶の子さいさいなのだ。

早速駆け出していく上鳴の後を追って、呼人もピザ屋台へと行く。まだミスコンに行っている人が多いのか、長時間並ばなければ行けないほどの人はいない。

「なー百竜どれにする？ つてかお前なら一枚食べるか」

「そうだな。お前が半分にするなら、2枚買って俺が一枚半食べようか？」

「じゃあそうしようぜ。何が良い？ 俺シーフード」

「……マルゲリータで」

「すいません！ シーフードとマルゲリータ一枚ずつお願いしまーす！」

屋台はなかなか本格的なようで、目の前でサツと具材を並べてピザを焼く前の段階から作っていつてくれる。上鳴と屋台の上級生の話を聞いていたところによると、人が増えてくるまえにストックは作って寝かせているが、少ないうちはこうやって目の前で作って焼いてくれるそうだ。更に具材を選んで焼いてもらうことも可能だと教えてくれた。

ただ上鳴の腹は呼人と違って、最近食事が量が増えたとはいえ標準仕様にできているのでこれ以上ピザを頼むと大変なことになる。

竈の高い火力で短時間で焼き上げてもらったピザを、それぞれ紙皿に受け取って屋台の無い隅によってそれを食べる。

「んまー！ やっぱピザはシーフードだな！」

「こつちもうまいぞ」

「マルゲリータもうまいよな！」

「食うか？」

「ん、じゃあ頂きます！ 俺がそれぞれ4分の1ずつで後百竜な！」

支払いの時に互いに自分が払うと譲らなかつたので、食べる分量に合わせて割り勘で払った。

「この量でこの値段つて凄いな。縁日だともっと色々高かつた気がする」

「まああつちは雰囲気代みたいなのもあるからなあ。こういうときの方が意外とやすかつたりするぞ」

「へえ。それは面白いな」

ピザの味の話からいつのまにか屋台の闇の話へと話題はシフトし、気がつけばピザを食べ終えていた。紙皿を近くのゴミ袋に捨てて、再び屋台巡りに繰り出す。

「後何かこれ食べたいとかあんの？」

「全部。縁日の時もそんな食えなかつたし」

「全部かよ……」

腹の容量が桁違いな呼人である。目の前にあるものを全部食べたいと願うのは当然の話だろう。美味しいもの大好きであるし。

その後、取り敢えず唐揚げとポテトをセットで買って食べながら歩いていると、ミスコンが終わったのかミスコンに行かずに屋台や展示巡りに来ているのか、クラスの子数名がクレープの屋台に来ているのを見つけた。

「俺達も次はクレープにするか」

「え？　なんで？」

「いやなんとなく。ほら——」

クラスの子もいるし、と。呼人がそつちを示すと上鳴がピシリと固まる。これもまた新しい反応だ。

（耳郎か八百万か葉隠……もめたわけじゃないだと思っただけだな）

取り敢えず上鳴が生きたく無さそうな感じがしたので、呼人は提案を変えた。

「でも人が増える前に展示とか回つとくか」

「……うん」

何か、おかしな悩みごとでもありそうだ。

うろろうろと色々な展示を見て回った。何かを模した模型だったり、あるいは経営科であれば企業の業績や発展に関する研究発表だったり、他科の人間でわかるものがどれだけいるんだと言いたくなるような展示もあったが、呼人はそれなりに楽しむことが出来た。

「あ、心操久しぶり！」

一年C組はお化け屋敷をやっており、特に呼人は驚かされることもなく、隣の上鳴の甲高い悲鳴を聞きながら通り抜けた。絵面的に、そして精神的に驚かせるもの、というのは理解できるのだが、例えば音もなく天井に張り付いてヌロンと垂れ下がって丸呑みにしてくるやつとか、屍肉を全身に纏ってるやつとかがモンスターの中にはいるのでグロテスクなものや突発的な驚かしには強いのだ。

「上鳴……と百竜」

「忘れられたんのかと思つたぞ。にしても……」

「何？」

ジロジロと、というほどではないがサラリと自分を観察した呼人に、C組の外でお化け屋敷を突破した人に挨拶をしていた心操は怪訝そうな表情を見せる。

「肉ついたな」

「まあ……」

旧知の仲のように話しかける呼人と違って、心操の方はそれほど心穏やかではいられない。自分と、ヒーロー科の間にある差。それも縮まらず、広がり続ける一方のそれ。そして何より。ヒーローらしくない個性だと鬱屈していた自分を、煽った相手。ただ凄うと思うだけではいられない。

「じゃ、じゃあまた今度な心操！ 明日は俺も相澤先生のところ行くから！」

「うん。俺も……じゃあね」

呼人と心操の間が何かおかしいことに気付いた上鳴は、慌てて呼人の背中を押してその場を後にする。

「なんであんな険悪な感じになってんの!？」

「別に険悪な感じじゃなかっただろ。互いに何話したら良いかわからないってだけで」

「ほんとかよ!? 今にも殴り合いが始まるかと……」

「俺を何だと思ってるんだ」

すぐに荒れ始めるのは爆豪の専売特許である。だが、上鳴の発言で心操がどうやってヒーローを目指しているのかということがわかった。

「そうか、あいつも相澤先生に習ってるのか。強くなるな」

「え!?! なんて知ってるの!？」

「え? いやさつきお前が相澤先生のところにつて」

「あー!! 間違えた! 忘れて百竜!」

「別に誰かに言うつもりは無いけど……。それにあいつが何らかの形でヒーローを目指しているのは知ってたしな」

それが相澤先生のところだったってだけだろ、と。軽く言う呼人に上鳴は目を見開く。

「なんで知ってたの!？」

「いや……体育祭のときあいつと話したし、ヒーローになりたいっていう渴望が凄く強かったからな。何らかの形で目指すんだろうなっていうのはそのときに普通に思った」

「まじか……!」

ああいう、何かになりたいという強い思いは人間特有のもので、だからこそ呼人はそれを敏感に感じ取っていた。

「じゃあまあ百竜になら言っていないよな」

「言ってる良いのか」

知ってたとしても秘密にしとけと言われてたんだろうと。呼人が突っ込むが上鳴は止まらない。

「だって誰に言ったら良いかわからなくて困ってたんだぞ俺!」

「そういう事なら」

相澤に捕縛布の扱いについて一緒に教えてもらう関係で心操とそれなりに話したところのある上鳴だが、その事を他のクラスメイトに話すことも出来ずつとモヤモヤしていたのだ。

「あいつほんと強いんだぜ。俺捕縛布使った戦いじゃあ勝てねえもん。相澤先生にもたまに善戦してるし」

「組手は？ 素手の格闘戦ならお前も出来るようになってきたらろ？」

「心操2年からの編入狙ってるらしくてさー。それまでに使えるようにする相澤先生もガチで教えてんの。だからもう素手じゃあ捕縛布でぼっこぼこにされてさ」

「ああ、なるほど。だからお前は3年間かけて自分のやり方を完成させろって言われたんだな」

「そうゆうこと。でも今年中には完成させる！」

当初は相澤の捕縛布の扱いをそのまま教えてもらっていた上鳴だが、基本的な動き、例えば布を投げて巻きつけたり、それを使って木にぶら下がったりする練習を教えられた後は、自分の個性を使った動きを考えるようにと、相澤が面倒を見る回数を減らされていた。

上鳴の個性であれば一番最初に考えたときのように捕縛布を使って個性を通すことも可能であり、何もすべて相澤に準拠して自分の個性を殺すことはないのだ。

「まあ、頑張れ」

「百竜も相手になってくれよな」

以前B組の何名かと模擬戦をした時の上鳴の言葉。それは、自分の戦法の開発を手伝って欲しいというものだった。ロープの扱いを訓練している呼人なら、相手をしたときにか発想があるのではないかと考えたからだ。

「たまにな。ずっと俺とやっても駄目だぞ」

「でもお前色んなパターン出来るじゃん」

「まあそうなんだが……」

色んなパターンと言つても、モンスター達がやるそれぞれ色んな戦い方を分けて再現しているだけだ。モンスター達も人間の形での戦う方法を練習しているのだが、その中でも例えばラーはゴリゴリ力押しで殴ってきたり、ガルルガは早い動きとどの距離からでも有効打になる攻撃で隙を見せてくれなかったりと、戦い方にはそれぞれ差があるのだ。それを学んでいるので、やろうと思えばパターンをわけて再現できるのである。

「でも、そろそろ演習でも試してみてえなって思つて。相澤先生にもオーケーもらったぜ」

「ターゲットとの連携は出来るようになったのか？」

「ちよつとだけ。付けたら付けたで重量変わったからまた感覚掴み直さないといけないてき。電縛布の開発発は結構前にしてもらつてたんだけどそれが全然。でも移動用には使えるし、トラップにも出来るから」

「なるほど。ちよつと使いやすいロープぐらいの感覚か」

「そそ」

電縛布とは、相澤の武器である捕縛布を参考に上鳴の個性に合わせて再開発したサ

ポートアイテムだ。相澤のとは異なる素材が使用されていて、通電性が高く、また上鳴が以前使用していたType-Bのターゲットと同じマイクロチップを組み込んでおり、それに向かって放電を誘導することが可能になっている。もともとType-Bは使い捨てかつ飛ばす事を考えて、適度にまつすぐ飛ぶ重さにするために余計なおもりが加えられており、飛ばすことを布の扱いで制御できるのでそうしたデッドウェイトをすべて排除することに成功したのだ。

ただし本当に基礎的な性能しか無いので、一度電縛布に通電した上でターゲットをゴグルで認識し、そこに向かって放電するという二重の手順を踏む必要がある。また重量自体も相澤のものとは比べると重くなっており、扱いに差が出ていた。

「あとスケボーも出来たって発目から連絡あったから、それ使ったら走り回りながら電縛布でトラップ仕掛けられるじゃん？　それが結構有効かなって思ってる」

「お前サポートアイテム持ちすぎじゃないか？」

「そか？　でもさ、やっぱ電気ってただのエネルギージャン。それ出せるんだったら道具使って別の力に変換したほうが良いよなって。パワーローダー先生も面白いって言うってくれたし」

放電は、それそのものが強い。そう上鳴も、高校に入学するまでは考えていた。実際、対人においては強い。なにせ触れれば勝ちだ。

だがそれしか出来ない。電気とは、シンプルなもの一つのエネルギーであり、人間はそれを活用する術を長い時間をかけて模索してきたのだ。それを活用しなくて何が個性をいかしたことになるのか。呼人に言われて電気の歴史について勉強した上鳴は、そんな考えに目覚めていた。

「まあ、絵面としてはかっこよくて良いかもな。回りのヒーローがダツシユしてる中で一人だけ颯爽とスケボ」

「だろ!!」

「でも荒れ地の走破性とかはどうなってるんだ？ あれ平なところじゃないとキツイだろ」

「取り敢えず車輪でかくした！ んで発電機能を俺が持つてるから小型で馬力のあるモーターにしてもらって上り坂でも結構な速度が出るらしい。後は俺の靴改造して固定出来るようにして、後は通電で右足は通電用で左足は電磁石で固定用って感じにしてる」

上鳴の説明通りの性能を想像して出た感想は唯一つ。

「なんか扱いめっちゃ難しくないか？ スケボ自体は乗れるんだな？」

「それは結構得意よ！ だから使ってみようって思ったわけだし」

「ローラーの付いた靴みたいなのあると思うけどあれじゃ駄目なのか？」

「スケボの方がかつこいいだろ」

「まあそりゃあ」

絵面的には、という話だが。やはりヒーローとしてそれは馬鹿にできないことなのだ。

そんな話をしながら歩いていると、サポート科のエリアに近づいてくる。

「そう言えば今サポート科は展示会やってるんだったな」

「そだな。見てこうぜ」

自分のサポートアイテムの開発を依頼するようになって、上鳴は他の人のサポートアイテムについても興味を持ち始めていた。発想というのはなにもないところから生まれない。逆に何かがあれば必ず生まれる。だからその発想のために、使えるもののために様々なものを見ているのだ。

サポート科の展示会はそれなりに盛況、というか主にサポート科や経営科の面子が実用性や売り込みについて相談しているという、ある種違った空気の漂う場となっていた。

「ほえー……やっぱ全員がガチで作ったもん展示してると壮観だな」

「まあ……俺は来たこと無いからわからないけどな」

「え？ 百竜サポート科のどこ来たこと無いの？」

「どんなサポートアイテム作ってもらっても個性使ったら邪魔になるんだよ。コスチュームもロープも全部俺が提供した素材で作ってるしな」

「そう言えば消毒液とかいっつもポーチに入れてるけどいあれは？」

「あれは完全に変身したときとかもポーチだけはそのままにして腰に貼っ付いてる感じにしてる」

「どんなものを作ってもらおうと、個性を使ってしまうえばそもそも装備していられない。それに、自分の提供したもので作ってもらうのはシンプルな何の機構も持たないものだけにしようと思った。」

「そっかー。でもあの毛てか羽毛とかさ、あったら便利そうなもの作れそうんだけどな」

「カナダにいたときそれで揉めたことがあってな。それから極力俺の個性を他の人が利用できる方法は見せないようにしてる」

「揉めたって何があったの？」

「あつちのヴィランがどっかで俺の事を聞きつけたらしくて狙ってきてな。壊滅させたけどそれなりにデカかったから大変だった」

「知られた理由は本当に取るに足りない。神王寺があつちで懇意にしていた企業の役員がヴィラン組織と繋がっていて、神王寺が呼人の服などを特注で依頼した時にこっそ

り呼人について調査、その利用価値とまだ子供である事をリークしたのだ。

結果、狙われた。力の加減がまだ上手く出来ていなかった頃ということもあり、怪我だけで済ますことは困難だった。まだ戦い慣れない呼人の代わりにとモンスター達が前に出てくれたが、当然彼らも呼人の体では満足に戦えずモンスターに変身して戦ったのだ。

「壊滅て……まじか百竜お前」

「まあ向こうはこつちほど厳しくなくて……加減しなくても許されたからな」

「いやそつちじゃなくて……大変だなほんとに、個性のせいだ」

両親も失つてその上狙われて、と上鳴が気にするのは、呼人が傷つけたことではなく狙われたことである。

「だからそれ以来あんまり外に出さないようにしてるんだ」

「はー……」

「展示見てくんだろ」

「そだな！ 今大丈夫ならよし！」

ヴィランに狙われたのは後にも先にもそれつきりだ。裏を探った神王寺が情報漏洩の源を辿って物理的に断つたのと、コネを回して裏の大物たちに伝えてくれたのだ。『手を出せば滅びるぞ』と。その頃の呼人はまだ人間社会にほとんど接しておらず、手を

出していれば本当に街ぐらいなら滅んでいただろう。なにせ……見える全ては路傍の石だ。

サポート科のプレゼンを見に来ている人の間を縫って一通り展示を見終わったところで、2人は出口へと向かう。

と、入り口から走り込んできた一人の生徒と上鳴が衝突した。

「おっ！ 大丈夫ですか！ あ、えーと電気の人ですね！」

「上鳴！ もう俺何個か作ってもらってるはずなんだけど!? なんで名前覚えてないの!?」

「これは失礼しました！ では私はプレゼンがあるので！」

上鳴を押し倒した形になった女子生徒、発目だが、照れるどころか一切気にする様子を見せずにすつと立ち上がる。ぎりぎりまでサポートアイテムを作っていた彼女は、今になってようやくシャワーを浴びて制服に着替えて戻ってきたのだ。

と、唾然とする2人の方を一瞬だけ振り向いて声をかける。

「そうです上鳴さん。あなたに試してもらいたいサポートアイテムがいくつかあるので

また後で来てください。では」

「え？ いや俺頼んでな……」

今度こそ返事を待たずに発目は行ってしまった。あとに残されたのは、呆然とした男子生徒2名のみ。

「……まだ何か頼んでたのかサポートアイテム」

「いや俺頼んでないからね！ てかそんなポンポン思いつかないから！ 使うのも大変だし！」

起き上がりながら言う上鳴も動揺しているところを見ると、本当に彼も心当たりが無いのだろう。まあなんとくなであればわかる。

「どうせお前が動くバッテリーになるから良さそうなもの片っ端から作ってるんじゃないか？ パワードスーツみたいなのとか色々」

「扱い酷くね俺泣くぞ!？」

「でもお前もそういう扱いしてるんだろ？」

「そうだけどー！」

そうじゃなくて！ そう騒いで回りから睨まれて凹む上鳴は、先程までのおかしな様子は少しも無かった。

サポート科のところを出た後、再びウロウロしながら買い食いを主に呼人がしながら2人で他の展示も巡っていく。きりの良いところで呼人は先程の上鳴の様子がおかしかったことについて切り出してみた。

「上鳴、お前」

「んお、何？」

「何かあったのか？ ミスコンも行かないって言うしさつきも女子見たら固まっていたし」

呼人が問いかけると、上鳴は苦笑いをしながらバレてた？ と返してくる。

「まあおかしいのには気付いたよ。普通に飯食ってる限りはなんとも無いみたいだからなんも言わなかったけど」

「あー、まあなんかあったっつーか自分でもわからないっつーか」

うーん、と頭を悩ませてそれ以上言い出す様子が無いので、呼人もあえて追求しない。困っていたら助ける、というほど愁傷な性格はしていない。

「訓練には引きずらんようにな」

「……………うん。それは気をつける。……………そのさー、じ……………」

「なんだ？」

「——っ！ やっぱなんでもね！」

「なにかあるのはわかったから自分で悩みたいならそれでいいぞ」

「……うん。わり、なんか百竜には相談しづれーや」

「なんだそりゃ」

人によって相談のしやすさもあるのかと思つたが、確かに仲の良い相手や、張り合いたい相手、あるいはさらけ出したい相手などいるのだろう。そして呼人は少なくとも、ほとんどのクラスメイトにとってさらけ出すタイプの相手ではないのだ。

「俺もう一回屋台のところに戻るけど、上鳴どうする？ お、耳郎達だ」

呼人が耳郎の名前を出した瞬間、上鳴の肩がビクリと跳ね上がる。ああ、耳郎となにかあつたんだなど、呼人も理解できた。

「……わり、俺ちよつと行くとこあるから」

「ん、そうか。じゃあここで」

「じゃな、百竜！ また寮で！」

「おう」

外に向かう呼人とは違って上鳴は女子陣の方へと歩いていく。

上鳴はまた、小さな一歩を踏み出そうとしていた。

第69話 New Style

文化祭が終わり、また通常の学校が始まる。そして呼人の個人的な訓練もまた毎日行われていた。のだが。

「放課後手合わせ出来ないか」

本日は、朝轟に声をかけられていた。

「手合わせ……演習場を借りてるがそこで良いか？」

「ああ、それで構わねえ。個性使いたかったからむしろ助かる」

「良いけど先生に見てもらったほうが良いんじゃないか。本気だろ？」

「そうだな。誰か先生に頼んどく」

「オーケー。じゃあ放課後になつたら一緒に行くか」

そんな会話が交わされて放課後。学活が終わると同時に呼人は席を立つて轟のところへ行く。と、ちょうど轟に用があつたのか飯田や緑谷も集まってきた。

「——悪い、今日は百竜と模擬戦の約束してる」

「え、そうなの!? 僕も見に行っても良いかな!？」

「うむ、俺も是非見せてもらいたいものだな」

「良いか？ 百竜」

呼人が近づいているのに気付いた轟が確認を取ってくるので、呼人も頷いて返す。

「良いぞ。別に見られて困るもんじゃなし」

「ありがとう！ 2人の本気の戦いどうなるんだろう。轟くんが最近鍛えてるのは体術でそれは確かに——」

「緑谷君、まずは見たほうが良いのではないか？」

「そ、そうだね。ごめん2人とも」

「じゃあそろそろ行くか。轟、先生は？」

「マイク先生に放課後呼びに行くって言ってる」

「そうか、と轟が準備するのを待っていると、今度は斜め後ろの席で話を聞いていた八百万が話しかけてきた。

「あの、お2人とも、私も模擬戦見せて頂いてもよろしいですか？ 是非今後の参考にさせていたきたいのです」

「別に。今後も特に俺が誰かと訓練してるときは何も言わずに見学していいぞ。一人でしてる時はちよつと困るけど」

「……俺も、問題ねえ」

戦闘者2名、見学3名。更に、話を聞きつけた他のクラスメイトも後で見れるように

と映像記録をもらってきて欲しいと頼んできた。それは見学の3人が率先して引き受けてくれることになった。

『オーケーリスナー!! ルールは先に相手を戦闘不能にした者が勝ち! やり過ぎるのはタブーだぜ!』

「了解です」

「わかりました」

離れた位置の地下にあるモニタールームから映像を見ているマイクからのアナウンスをもらい、2人は共にうなづく。呼人のコスチュームは以前と少しだけ様相を変えたものの、ファンタジー然とした見た目は変わっていない。実際には以前のものを改良したのではなく、新規に作ったものなので以前のコスチュームも残っている。

新しく作ってもらったのは、モンスター達の世界では『シーカー装備』と言われる装備を模したものだ。ただし、まず改良点として両腕の籠手がロープを巻くためにかなり小ぶりになっており、ロープを巻いても腕が太く見えないようになっていた。またそれに合わせて、足、正確には膝下から足首にかけても予備のロープが巻き付けられている。

また体のあちこちに、救助作業の際などに使えるようなカラビナと、ロープを引つ掛けるためのパーツが用意されている。それ以外の基礎性能は全く以前のものと同様でない。

一方の轟もまた、コスチュームが大幅に変更されていた。まず、右腕を肘のあたりまで覆う硬質な籠手が装備されている。そして肘の部分には、ノズルらしき筒のついたサポーター。またそれとは別に、肩のあたりを覆うサポーターが追加されている。右足も同様に膝下あたりから足の先までを硬質なブーツと、ふくらはぎから踵のあたりにかけてノズルが数本装備されており、股関節付近にサポーターを装備している。またそれに合わせてコスチュームのラジエーターが強化されており、熱、冷気を全身に伝導できるようにコスチューム縁などを細いチューブが走っている。総じて、以前のシンプルなおスチュームに比べてかなりいかつくなつたと言えるだろう。

ちなみにこの轟のコスチューム、お披露目は今日が初であり、演習などでお目にかかったことは一切ない。事前に戦闘スタイルでアドバイスをしていた飯田だけが足部分を見たことはあつたが、それでも全身を見るのは初めてだった。

「お2人も随分コスチュームの様子が変わりましたね」

「うん。百竜君の方はマイナーチェンジって感じで大きく変わったところは無いと思う。強いて言うなら足にもロープを巻いてるところだけど多分予備なんじゃないかな。」

けど轟君は多分コンセプトが全く変わってるんだと思う」

「ああ、あれは俺もとても驚いたぞ。なるほど、しかしああするのであれば腕の方も使えるのか」

3人で唯一そのしようとしている事を知っている飯田の呟きに、八百万と緑谷が視線をそちらに向ける。

「飯田君知ってたの？」

「ああ、俺は彼のスタイルについて相談を受けていたからな。全体像を見たのは初めてだが、なるほど納得できるスタイルだ」

「あの、どのようなものか教えて頂けますか？」

「うむそうだな。正直見た方が速いと思うが、一言で言えば炎をそのまま利用するのをやめた、と言ったところだろうか」

炎をそのまま利用するのをやめる、と意味深な飯田の言葉に、2人が顔を見合わせる。正確に言えば、轟は炎の力もまたこれまで以上に正確に制御し、そのまま放つことも可能になっている。だが、それだけでは駄目なのだと、エネルギーとしての炎を利用しようにしているのだ。

「何にせよ、これまでの轟君とは大きく違うだろうな」

飯田がそう言った直後。

『STAAAARTOOOO!!!』

プレゼント・マイクの騒がしいアナウンスとともに、試合が始まる。

試合開始時、2人の位置は100メートルほど離れていた。大規模な能力を持つ轟に対して、近場から始まったのでは自分に有利すぎると呼人が主張したのだ。

先手を打ったのは轟だった。叩きつけた左足から氷を生成し、呼人に向かってぶつける。それを左右に飛んで避けながら距離を詰めてくる呼人に向かって数度氷を放った後、呼人の方に右足を向けて一歩踏み出す。

そして、試合開始から溜め込んでいた炎を解き放った。爆発的な炎の膨張が地をなぞる。

それを見ていたモニタールームでは驚きの声が漏れていた。

「あれ、いつもの炎じゃない！ 爆発みたい、かつちゃんと同じだ……」

「圧縮された熱量の大膨張です——!?!」

「なんだ今のは!?!」

轟の放った氷は、2つに別れていた。1つ目は、呼人を直接狙った氷。これは人の身長を超える大きさまで成長し、まるで壁がいくつも轟を中心に伸びているかのようになっていた。

そしてその氷の壁と壁の間。そこには壁からはみ出した氷が薄っすらと地面を覆っていた。

轟が放った爆発の意図は1つ。直接的に圧縮した熱量をぶつけると、呼人ならば死なないとしても他の相手では危険な可能性が高い。

だから、圧縮した炎の爆発そのものではなく、その熱量によって発生する二次被害、氷から発生した水が蒸発する際の体積膨張を利用した水蒸気爆発を狙った。本来であればいきなり気化することはないのだが、熱量が圧倒的に高いことで熱の伝達よりも早く気化が発生した。

結果。炎の爆発に数瞬遅れて発生した二次爆発がより大きな衝撃を生み出し、地面から発生したものを中心として呼人の体を宙へと巻き上げる。

そしてそれを放った轟は、呼人が巻き上げられるであろう推定の位置まで氷を伸ばしその上を駆け上がっていく。一撃で呼人を仕留めきれないわけがないし、あるいは仕留めていたのならキャッチする必要性があるからだ。この練習をするために、ダミーの人数がかなりの数犠牲になっている。そのため、推測はかなり正確だった。

『呼人が人間の体に爆風を受けていれば』。

「上だ（にいる）!!」

飯田と緑谷が叫んだのは同時だった。

水蒸気爆発を受けた呼人は、直前、炎の爆発に対して利用しようと展開していた皮膚にその爆風を存分に受け、轟の推定した地点よりも遥かに上まで舞い上がっていた。風に煽られるにしても、同じ重さの棒と布では飛び方が全く違う。轟はそれを考慮に入れていなかった。

氷の上に立つ轟のはるか上空、水蒸気にも爆炎にも覆われていない呼人は、上から轟の姿を確認して皮膚を閉じ急襲をしかける。

それに直前で気付いた轟は、氷で作った高台から直接飛び降りると自分の被害が増すため今作った氷の橋に対して足から炎を走らせ、表面を溶かしてすべり台上にしてその場から離脱する。そこに、十分な落下速度とハイビーストの状態で体重を増した呼人が落下し、熱でもろくなつた氷の先端を踏み砕いた。そして今度は一番大きな氷塊を登るのではなく迂回する形で側面を駆け抜け、滑り降りた轟へと迫る。

それに対して轟は目の前に人間大の氷塊を作ると、呼人が迫った瞬間にその側面を炎で溶かして手をつ込み、再度小規模な圧縮した炎を解放した。

今度は先程氷の隙間の通り道を通った炎にも抜け道がなく、膨張した空気は氷塊を砕

き、その欠片を散弾のように吹き飛ばす。人間大でそれを受けた呼人は、たまらず吹き飛ばされて後ろの氷の上に皮膚を一瞬広げた後着地した。

「わ、すごい、轟君炎と氷を組み合わせてる」

「うむ。同時に使うと足が止まってしまうと言っていたが、あれだと止まっても問題ないな」

「もともと強力でしたのに、あんな使い方……」

同時に使うと足が止まると飯田は言ったが、厳密には違う。轟は夏休みからここまで個性訓練で、『炎を一定出力のまま氷を放出する』ことは出来るようになっていた。氷の方の制御はある程度甘くなってしまうが、もともと精密な形は作れなかったので多少甘くなったところで指向性を持ってぶっ放せば問題ない。そしてその間も、右腕や右足には、炎が溜められている。だから、氷で道を作り、炎を届けるといった戦い方が出来る。だが轟の新しい戦闘は、それだけではない。

「近づかせてくれんなこれは」

肩のあたりに突き刺さった氷の破片を抜きながら、呼人はそう感想を漏らす。氷とい

うのはとがればそれなりに鋭利なもので、体表に甲殻を持たず、また可動部故に鱗を展開していかなかった肩や腕、それに胴体などに突き刺さっていた。と言つても動けなくなるほどの怪我ではないが、小さな破片はにおいておいて肩に突き刺さつたものはそれなりに効く。

一旦氷の影に姿を隠した呼人は、可動力の下がった肩の筋肉に意識を集中させ、別の位置の筋肉を創造してそこを補う。

普段呼人が人間形態やあるいはハイビースト、つまり中途半端な状態に変身する時に利用している筋肉は常に同一のものを使っている。だが、オドガロン本来の体の大きさはそれ以上のものであり、成体になればまだ使っていない部分は余っている。それを創造して補ったのだ。

と。敏感な嗅覚が轟の匂いが移動しているのを感じて上を見上げる。そしてその数秒後、呼人の隠れている氷壁の上から轟が飛び降りてきた。

呼人が姿を隠すのを見た轟は、その氷の上を走って迫ってきたのだ。そしてその際にただ走るのではなく、常に右足から放出した炎で上昇気流を引き起こして呼人に匂いが届かないように気をつけていたのだ。音にまで気を配っていれば気づけたのだが、残念ながらオドガロンは耳より鼻の方が遥かに鋭い。そして体のパーツを別の部位で補うという行動には、まだ相当に集中力を持っていかれる。そのため、轟が接近するまで気

づくことが出来なかった。

そして落下してきた轟は、奇妙な右足を下にした体勢で落ちてきた後、一瞬右足から炎を放出して体勢を整えて着地する。轟の匂いを感じできたのは彼が接近してきたからではなく、足からの炎の放出をやめて再度溜めに入っていたからだだった。

匂いというのはこういう時に弱い。まあそれは視覚も聴覚も変わらないのであるが。とにかく、その感覚を伝播する物質を止められると感知ができなくなるのだ。この場合は、発生し拡散するはずの匂い物質がすべて上昇気流に持つていかれていた。事これに關しては、音はそれなりの風なら突き破るし、光に關しては霧などで歪めるか物理的に遮るしか無く、嗅覚に頼るといふのはそういう点で脆さがある。『わからない場所がある』というのは本来ならわかるのだが、残念ながら呼人の集中力は修復に割かれていた。

落下してくる轟が着地の体勢をとっている間に、ハイビーストからビーストまで形態を戻した呼人は殴りかかる。着地と言ってもそれなりの距離が離れた場所で、だからこそ呼人の攻撃は一瞬かかり、その一瞬の間に体勢は入り切らないものの拳を整えた轟はその右手を放ってきた。ただの右手ではない。溜めた爆炎の勢いを載せた拳。

それが呼人の顎に向かって伸び、そして察していた呼人に紙一重で躲される。間に合わないのはわかっていた。だから隙を演出して釣りだしたのだ。でなければ、こんな顎

を開いて手を下げた姿勢で突っ込まない。

「チツ!!」

肩のサポーターのおかげで自分の攻撃の勢いによる脱臼は避けられるが、それでも轟の体勢は大きく揺らぐ。そこに踏み込んだ呼人は足払いをかけようとしてその足が氷で予想以上に強固に覆われていたので中斷、氣絶させようと顎を狙って拳を放つ。それを左手で受けて顎ごと撃ち抜かれ、上体を大きく揺らした轟はそれでも氣を失わず、最期に一撃、無理な体勢から左足に溜めた炎を利用して上段蹴りを放ってきた。

轟が飯田にずっと習ってきたのがこれだけあって、きれいな軌道で離れたそれだが如何せん着地からのわずかな時間で溜めが足りず、地面に足の爪を突き立てた呼人はハイビーストの状態になると上体を揺らすこと無くその足を受け止め、返す拳で顎を打ち抜き、今度こそ轟を昏倒させた。その瞬間には轟の左足から伸びていた氷が呼人の半身を覆うに至っていたが、成体のオドガロン、すなわちフルビーストに移行することでその氷を砕いて脱出する。

『試合シュリーヨ!! 百竜轟担いで一旦カモン!』

模擬戦を再度行うにしろそうでないにしろ、怪我の確認はしておかないといけない。怪我をしている可能性としては、おそらく呼人のパンチから顎を庇った腕にはひびぐらいは入っているだろうし、無理な蹴りで腰かどこかを痛めているだろう。正直、パンチ

の方は良いとして蹴りの方は自爆的な意味で危なかった気がする。確かに爆炎を利用すれば、力の入らない方向にも力を加えられる。だが体がそれについてこれるか別の問題なのだ。

気を失った轟をハイビーストの長い腕でお姫様抱っこし、呼人はモニタールームへと移動する。取り敢えず意識が戻らないことには始まらないだろう。

幸い、床に寝かすと同時に轟は目を覚ました。

「つつ……。俺の負けか」

起き上がろうとして顔を擧め、そのまま呼人の方に顔を向けて聞く。

「俺の勝ちだな。後反省点がいくつかあるから、リカバリーガールの所行った後寮で反省するぞ」

「……わかった。まだ勝てねえか」

そう言って再度顔を擧めながらも起き上がろうとするので、それを呼人と飯田で止める。

「やめとけ、腰痛めてる可能性が高い。あと腕も多分やってる」

「ああ、そうだと轟君！ あんな無茶な体勢で蹴りを放つとは！ 担架を用意するから少し待っていたまえ！」

そう言っている間にも飯田は担架を袋から取り出して用意してくれていて、すぐに担

架が出来上がった。

「……わりい」

「模擬戦をすればそうもなる。百竜君、そっちの足を持つてくれないか。緑谷君と八百万君は映像データを」

「わかりましたわ。轟さん、無理はしないでくださいね」

「わかったよ。先に寮に戻っておくから、ちゃんと治療してもらってから来てね」

「ああ。ありがとうございます」

そこで八百万らと別れ、プレゼント・マイクとともに呼人らは轟を保健室まで運んだ。『グッドバトルだったぜ2人とも！ 1年生とは思えねえな！』

「ありがとうございます」

「うす……。でもまだ……強いな百竜」

「まあやつぱりお前のスタイルが完成してないのがキツイだろうな。俺はどこで殴ってもどこで受けてもいいが、お前は蹴る瞬間と殴る瞬間しか超パワーにならないから如何にそれをねじ込むか、あるいは使わないで済ませるかかってところだろ」

「……そうだな。俺も……正直お前に近づかれたとき殴られたら負けるって焦っちゃまった。俺から狙いに行つたのにな。けどお前なら顎に来るだろうからって受けたんだが……」

「読みは良かったんだけどな。まあそこは後で映像見ながら反省だ」

「うむ。寮に戻ってから反省会を行おう！俺も見ていてなかなか有意義だったように思う」

確かに、今の模擬戦は勝ち負けを決めるもので。だが、重要なのはそこから何を学び、成長に変えるかだ。それに轟は、呼人にロープを使わせなかった。もちろん個性上ロープが通用しないというのもある。だが、仕留めきらないとまずいと思えるぐらいには、今日の轟の頭は冴えていた。特に嗅覚潰しや氷と炎の連携などは、以前のそれぞれをぶつけるものとしてしか認識していた轟と比べて遥かに強く感じた。

「模擬戦でやったのかい。また無茶な攻撃をしたね。あんたこの腰は腕よりひどいよ。下手すると再起不能になるなんてこともあるんだからね」

「うす……気を付けます」

「全く。最近緑谷が自分で怪我しないと思ったら次はあんたかい」

そう言われて、聞いていた飯田と呼人はつい笑ってしまふ。確かに、自爆は緑谷の十八番だったのに気づけば彼は克服し、今度は轟がそれを引き起こしている。

「すいません、俺も治してもらいたいです」

「あああんたもかい。傷は？」

ちよつとまっつてくださいね、とりカバリーガールに告げて、呼人はハイビーストになる。肩には深い傷が残っており、変身するとまだそこから血が流れていた。

「あらまあ。でもこれぐらいなら一回で治るさね。チュー」

リカバリーガールが個性を使うと、その傷がするするとふさがっていく。代わりに、それなりの虚脱感が呼人に押し寄せた。今日はしっかりと食べないと行けないらしい。寮に帰ったら米を炊いて、冷凍しているひき肉とたまねぎと卵を使って大盛り炒飯を夕食とは別に作る。呼人はそう決めた。以前なら自然治癒を待ったが、今の相手は、特に轟や爆豪、常闇、緑谷、砂藤ら出力が高い組はハイビーストが使えないと後手に回る可能性がある。

「細かい傷は自力で治しなさい。それまで治していると体力が足りないからね」

「ありがとうございます」

「あざっす」

保健室を出た後、ここまで運んでくれた事を飯田に礼を言って2人は片付けと着替えに戻る。飯田は先に寮に戻っていることになった。

「百竜、正直あのパンチならお前に通用するか？」

主に氷を轟が溶かし、飛び散った塊を呼人が運んで片付けを終えた後着替えていると、そう轟が話しかけてくる。

「今日のパンチの威力なら普通にくらえば通用するな。ただ俺の場合は脳みそも複数持つてるようなものだから入れ替えがきくし、身構えれてたら首を本来の大きさまで発達させて顎が揺れないようにする」

「そうか……お前ずるいな」

「俺も流石に今のはずるいと思うわ。単純に言つてライフ3つ分だからな。今使つてるのだけでも」

「1つ落とされても、入れ替えれば使えるようになる。正直言つて、落とされることは滅多に無い。ただ模擬戦のときなどはモンスター達の手を借りないと決めているので、仮に不意打ちで意識を刈り取られれば、呼人の負けである。」

「ただまあ、胴にくらつてもあの威力なら十分に効くな。それに足元、そのために氷で固定したんだろ？」

「ああ。力の伝達を考えたらあれの方が良いと思つて」

「あれのおかげで、お前のパンチのエネルギーは当たったものに完璧に伝わるからな。今なら木とか岩でも殴つてへし折つたり余裕なんじゃないか？」

「やつてねえからわからねえ、けど、氷は砕けた」

「まあそれぐらいの出力はあるってことだ。削るじゃなくて砕けたってことは」
「……そうだな。切島にもうってみたい」

「それ砕ける前に吹っ飛んでくかもな。氷でも足を止めないと」
「なるほど」

氷の塊というのは、弱いようできて存外堅い。例えば硬化できる鉄哲や切島でも、削るのは余裕であつても叩き割るというのは至難の業だ。それに關しては硬さ以前に相当の力がある。鉄パイプを持ってばだれでも氷を粉碎できるわけではないのだ。

着替えて教室に荷物を取りに戻った後、2人で寮への道を歩く。口数が多い方ではないが、それでも話す内容があれば話す2人だ。模擬戦でどうすべきだったか、あるいは厄介だった点などを互いに話していると、すぐに寮にたどり着く。

共有スペースに行くと、既に3人と、他に集まってきたクラスメイト達が映像を見ている。
いた。

「あ、2人とも。先に映像見させてもらってるよ」

「ああ、構わねえ」

「ちよつと水飲んでくる」

水飲みついでに、ささつと米を研いで釜のスイッチを入れておく。

席につくと、既に緑谷がノートを取り出し、映像を見ながら何かをまとめているのを

八百万と飯田、それに常闇と瀬呂が覗き込んでいた。轟と芦戸は映像に集中している。

「あ、百竜くん。あの百竜くんが一旦壁裏に隠れたときなんだけどこれは何をしてたの？」

「ああ、あの氷の散弾を受けた後か？」

「そうそのとき」

水の入ったペットボトルをテーブルに置き、コップの水を飲み干してから呼人は答える。

「あれは治療してた」

「治療、ですか？ 一体どうやって？」

「道具なんて持っていないよねこの場面でしょ？」

ちようど映像がそこに行っていて、芦戸がそつちを指し示す。壁の裏に隠れた呼人は、目を閉じて手をだらりと下げて集中していた。

「このとき、肩の筋肉が氷で切断されて動かなくなってたんだ。一部な。けど、これってあくまで中途半端な変身状態で、ホントはもっと大きいからまだ再現してない筋肉があるんだよ。だから損傷した分と入れ替える形でそれを作ってた。ただ損傷した部分を探ると本来こうはならない形の筋肉を変形させてたからかなり集中してた」

「そんな使い方があるのだな」

「医術の類か？」

「自分の体限定でな。ずっと体の一部を変形させてたから、どこがおかしくなってるかとか掴むのが得意になったんだ」

本来人間は、自分の体のどの筋肉が傷ついているかどころか、そもそも体内がどんな構造をしているかすら知らない。だが呼人は、モンスターの体に關しては知っていた。それを常に再現し続けていたのだから当然だ。だからこそ出来た芸当である。

「それって難しいの？ この後全然轟が近づいているの気付いてないでしょ？」

「めちやくちや難しいな。考えてみる。人間がこうしてるときに、自分の筋繊維一本一本、骨、関節の構造なんてわかるか？ 知識として持つてればわかるがあくまで知識だろ。それを自分の個性の感覚から辿って探るわけだからな」

「それは、確かに難しいね。どこが動いているかイメージしてトレーニングするのもある程度の大まかさだし」

「どれくらいの時間で修復は終わる予定だったのですか？」

「あと20秒もあれば完治。そもそも接近に気づけると思ってたから、重要な場所からやってたんだよな。だから動けたわけだけど。これなら総入れ替えしたほうが良かったかも知れん」

そこでまた聞き慣れないワードが出たと皆が首を傾げる。それに気付いた呼人は自

分から説明した。

「この時は切れた部分を消して、代わりにまともなのを生やしてたんだ。けどそうするよりは、もう全部消してしまっただけでも一回まるごと作った方が速かったかもしれないってことだ」

「そんなことも出来るんだね」

「出来るぞ。ただ感覚が崩れるからあまりやりたくないのも事実だ」

「それこそ、やろうと思えば肩だけじゃなく体中あちこちの筋肉を取り寄せることも出来る。だが、その分本来とは違う使い方になるので感覚は変わってくるのだ。」

「ここ轟君の視界から百竜君が遮られてるよね。だから轟君が動いてないんだけど

……」

「うむ、難しいな。氷は自分の視界を遮ってしまうが轟君にとっては生命線だ」

「百竜君からはわかってたんだよね？」

「聴覚嗅覚でな。あれは氷に遮られるものじゃないから。ただその後の轟が近づいてきた時は対策がされてたから気づけなかった」

「ああ、この炎はそういう意味合いだったのですね」

呼人の話を聞いている5人の中で、八百万だけが理解を示す。説明を求める他の4人に八百万は基本的なことから説明した。

「先程の百竜さんが氷の裏から攻めた場面轟さんが気づけなかったのは、視界に捉えられなかったからですわ。それと同じで、どれだけ百竜さんの嗅覚が良くても捉えられないことがあるんです。このときは轟さんの足から出した炎による上昇気流で、匂いが百竜さんまで届いていかなかったのではないのでしょうか」

「そっか、そうやって遮ることも出来るんだ……」

「ですがこれが出来るのは轟さんぐらいですわ。他の方であれば乱すことは出来ても遮断するのは不可能かと」

「うん……でも風で乱すことが出来るつてのはその分隙が出来るつてことになるから……。例えば僕でも風とか……」

相手の感覚を奪うというのは一番小さな情報戦だ。そしてそれが戦局をも左右する。普段は目の前の相手を倒せば良いとあまり考えることがないが、相手に思うようにさせない、というのはいやらしく、されど大事なやり方だ。ちなみに文字通り自由にやらせてくれなくなるフィールドを作るモンスターもいるのもう……：経験は力とはよく言ったものである。

「なーにやってんの？」

「あ、これが今日言つてた模擬戦か。うちも見ていつていい？」

そうこうしていると、他のクラスメイトもちらほらと集まってくる。大体は放課後に

自主練をしたりあるいは勉強をしたりしているのだが、午後7時を過ぎたこれぐらいの時間になってくると共有スペースにも人が集まり始めるのだ。

「そう言えば、耳郎さんも五感の鋭くなる個性だよね」

「え、何の話？」

後から来た上鳴と耳郎に、ここまでの話の経緯を説明する。感覚が鋭くなるという点で言えば、彼女も呼人か、あるいはそれ以上のものを持っている。

「あーそうゆうことか。でもそれ言っちゃったらうちめっちゃこれから不利にならない？」

「確かに……ごめん」

「冗談。別に良いよ。うちもそれされた時の対策を考えないといけないし」

少しだけからかうように言った後、耳郎は笑いながら自分の感覚を狂わす方法について説明する。

「うちに悟られたくないんだったら、やっぱりもつとでつかい音で叩き潰すか、音を一緒にするしか無いと思う。でも心音とか息遣いなんてそんな真似できるもんじゃないし、真似できるとしたら足音ぐらいじゃないかな」

「もつと大きな音というのは……」

「うん、期末試験のときマイク先生にやられたんだけどさ。ずっと大きすぎる音にさら

されてると、地面とかにジャックをさして音をとったりするのもできなくなるんだよね。それ以上に大きい音が直に聞こえるからさ」

「なるほど……かき消してしまいうしかなないということだな」

耳郎の説明にクラスメイト達が頷いているところに、呼人も自分の持っている知識を提供する。

「後は轟なら空気の温度を変えて空気の壁を作れば音の位置を狂わせることが出来るな。それと芦戸は自分を酸で覆ってしまえば多少の音漏れは防げるから勝手が変わるかも知れない。他にはスタングレネードを使うぐらいか」

「待って、一個ずつ説明して。うちも聞きたい」

「なるほど……確かにそれは効果的ですわね」

「ごめんヤオモモ、先に納得されても私たちわからないから」

やはりというべきか、博識な八百万は単純な説明でもすぐに理解してくれるのだが、他のクラスメイトはそうもいかない。もともと個性が近くない分野というのはそれほど詳しくないことも多くあるのだ。

「空気の壁の方は視覚に対しても有効なんだが、音も光も空気の分子の影響をもろに受ける。音はその分子の振動で伝わるわけだし、空気は屈折率が変わるからな。で、例えば轟がある場所の空気をとことん温めて、その隣に氷でとことん冷やした空気を並べる

と、そこを通して見たはずの物の場所がずれてたり、あるいは音が来ている位置をずれて感じたりするわけだ。芦戸の方は粘度の高い酸で体中を覆っておけば直に外に接するより音漏れが減って気づかれにくくなる。スタングレネードに関しては普通の人間の聴覚に大ダメージを与えるものだからな。耳の良すぎる耳郎にとっては多少離れた位置でも鳴ったらきついんじゃないかと思うわけだが？」

「どうだ？」と耳郎に話をふると、耳郎はしばらく考え込んだあとうなずく。

「うん、多分どれもちよつと困るかも。うち一人だったら精度が下がるってことだもんね。特に室内だと壁を隔ててるのかとかがずれる可能性もあるから……でもチーム戦だったらおおよその場所がわかるから見てきてもらえし、そういう意味では音かき消されるよりは困らないかな。スタングレネードって実際に聞いたことがわからないんだけど……ヤオモモ出せる？」

「ええ、出せますわ。お作りしますか？」

「ううん、明日ちよつと訓練手伝って欲しい」

「私も行く！ 耳郎の耳を欺けるなら何でもする！」

女子陣が翌日の放課後の自主練の内容を決める一方で、再度2人の戦闘に目を向けたクラスメイト達も自分たちのすべきことを確認していく。

「うむ、これをされると俺は……どうしたものか、まだ完成していないとはいえ完成すれ

ば蹴りの威力はレシプロバーストに並ぶ可能性もある。打たせてからになるだろうな」

「深淵暗闇であれば抗しきれるか。手合わせ願いたいものだ」

「また轟成長しちやつて。俺どうやつてこれ相手にすれば良いんだろ」

「実力も、個性も関係ない。ここに居るのは、強くなるという意思を持った者達なのだ。」

第70話

11月も下旬に差し掛かったある日。緑谷たち死穢八斎會攻略作戦に参加したメンバーは相澤に呼ばれて職員寮を訪れた。

「つてエリちゃん!？」

「わー! また来てくれたんやねエリちゃん!」

「また会えて嬉しいわ」

訪れた先で待っていたのは、ビッグ3の3人に遊んでもらっているエリちゃんであった。休学中の通形も、私服を来て訪れている。

「雄英^{うち}で預かることになった」

「どういった経緯が!？」

思わず緑谷が声を上げると相澤と通形はシートと口元に人差し指を当てた後、玄關の外に1年生の4人を連れて行く。

「ちよつとややこしい理由があつてな」

「実は、エリちゃんの病室にお手紙が置かれてたんだよね!」

「お手紙、ですか?」

相澤は緑谷の言葉にうなずいた後、短く説明をする。

「差出人は死穢八齋會組長と連名で治崎廻。内容はエリちゃんが本来の両親から捨てられて八齋會にいた事。これ以上彼女を裏の世界にいさせるべきではないこと。養育権一切を両親にも放棄させたので今後の彼女の世話は彼女を救った者達に任せること。今後八齋會のメンバーがエリちゃんに関わることはなく、仮に自分の指示に従わずに手を出した者がいた場合には八齋會の側で処理すること。そしてエリちゃんをこれ以上泣かせるようなことがあれば許さないこと。そういう手紙だった」

「え、ちよ先生それがエリちゃんのところに戻いたつているところがバレてるつてことすか!？」

思わず切島が尋ねると、通形がチツチツと人差し指を左右に振る。

「違うんだよね。彼女の病室の中に置いてあつたんだ。聞いてみたんだけど、看護師さんもお医者さんも誰も届けてないんだよね!」

「それって……」

驚愕の表情で問いかける麗日に頷いて相澤は預かった理由を説明する。

「よつて、エリちゃんの居場所がバレていること、気づかれずに侵入できる人物が八齋會側にいること、それにエリちゃんの両親が本当に彼女の養育権を放棄していることが確認できたからウチで預かることになった。うちの寮ならちゃんとした部屋もあるし教

師も仮免持ちもたくさんいる。セキユリティも病院より高い」

「それに、エリちゃんの間、また大きくなり始めてるみたいなんだよね。だからイレイザーがいると安心なんだって」

「……それもある。正確には俺じゃないと対応できない可能性が高い、だがな。とにかく、今の話はエリちゃんにも他の生徒にも他言無用だ。彼女を預かることになったという事実さえあれば良い」

そこで、何かに気付いた蛙吹が手を挙げる。

「先生良いかしら」

「なんだ」

「エリちゃんの病室に来たのに誰にも気づかれずに来たのに連れて行かなかったってことは、手紙の内容は信頼出来るんじゃないかしら」

「あくまで手紙だ。騙すためのものの可能性もある。それこそ、ヒーローに保護された少女がヒーローの手落ちで奪われたとなつては更にヒーローそのものに対する信頼も歪む。治崎らを奪っていったのが敵連合であればそのための作戦だということも考えられる。あるいは小さなものをワープさせる個性かもしれない。どちらにしろ、どうかしないといけない点だけを見るしか無いんだこの状況じゃあ」

「……そうね。考えが足りなかったわ、ごめんなさい」

「大丈夫なんだよね！俺も最初同じこと思ったから！」

通形が明るく励ますが、空気は暗いまま。だが、相澤の言葉で明るさを取り戻す。

「とにかく、エリちゃんには楽しい、普通の子供達がしているような事を経験させてあげたい。だからお前たちもそのつもりでいてくれ」

「！はいッ！」

「楽しいことかー、やっぱり一緒にお餅食べたいな！」

「妹を思い出すわ」

「任してください！俺らそういうの得意っすから！」

決意を新たにする4人に、通形も笑顔でうなづく。

「取り敢えず俺は暇だから一緒にいるけど、みんなも遊びに来てほしいんだよね！」

「了解っす！」

少女は、また笑うことが出来る。今は、そう。その笑顔を守るのが自分たちの仕事なのだ。

呼人が室内で個性の鍛錬を行っている、部屋の扉がノックされる。

「どうぞ」

「そろそろ来るらしいから降りてきて」

扉を開けて入ってきた尾白は、肩口から生えたオドガロンの足に特に驚くこともなく用事を伝える。よく部屋に来る障子や尾白、それに上鳴などは、呼人の部屋のこの光景に慣れていた。

「ああ、もうそんな時間か」

「百竜一応主役だよな？」

「もう夏休み中に会って礼言われてるんだけどな」

「それ初耳だよ……」

今日はプツシーキヤッツが雄英を訪れるという連絡を受けたので、普段は外に出たりするクラスメイトも全員寮に残っていてその訪問を待っている。待っている間大半のクラスメイトは1階の共有スペースで談笑していたりするのだが、呼人はいつものごとく部屋にこもっていたので尾白が呼びに来てくれた。

冷蔵庫から500mLのカルピスを一本持って1階に降りると、ちようどプツシーキヤッツが玄関を開けて入ってきた所だった。懐かしいポーズ（私服）を披露した後、生徒達に歓迎されて挨拶を交わしている。と、視線をうろつかせていたラグドールが呼人を見つけて駆け寄ってくる。

「直接話すのは初めてだよね」

「そうですね」

「んでも、君のおかげであちきもやつと復帰できることになったから、お礼を言いに来たんだ。ありがとね、あの時は」

ラグドールと呼人が隅の方で話している一方で、他のクラスメイトと話していたピクシーボブが復帰の報告に来たと説明して盛り上がっていた。

「回復おめでとうございます」

「ありがとね。おかげで個性取られずにすんだからね」

ラグドールだけが誘拐されたのはオール・フォー・ワンが個性を奪うためだったと推察されている。だがラグドールはその前段階で救出されたので個性は奪われずにすんだ。ただし怪我が非常に重かった上にその状態で呼人が長時間運んだのと、表では出回らない薬を使われていたらしくそれからの回復に時間がかかったためこんな時期まで復帰が遅れたのだ。

「んじや、君の活躍も楽しみにしてるよ。いつでもサイドキックとして来てくれるの待ってるからね」

「ええ、まあ。はい」

さらっとした勧誘に困った反応を返すと、ラグドールは笑って握手を求めた後、呼人

のところから去っていった。

代わりに呼人のところには、洗汰がやってくる。彼と会うのも林間合宿以来だ。

「久しぶりだな」

「……ああ」

そう言った後、気まずそうに視線をそらしているが話したい内容があつて呼人のところまで来たんだろうと大人しく待っていると、やがて話し始めた。

「あんた、名前は？」

「百竜呼人だ。100匹の竜を呼ぶ人つて書く」

「そうか。……呼人の言つてたこと、あの後考えた」

「ああ」

呼人が言つたこと。それは、彼が恨むべきは両親ではなく社会であるということ。

「お父さんとお母さんが死んだことを、立派だつて言われるのは今も嫌だ。けど、お父さんとお母さんは、悪くないんだと、思う」

「そうだな」

「それに、デクにーちゃんが自分が怪我してるのに守つてくれたから……」

「ヒーローがどういふものかわかった、か？」

コクリと、呼人の問いかけに洗汰はうなづく。その頭を、呼人は優しくポンポンと叩

く。

「そうだな。ヒーローはそういうことがしたい人たちなんだ。けど、俺はやつぱりそれを当たり前だとか思ってる人は良くないと思う。でも、ヒーローは嫌ってやるなよ」

「うん……でも、俺に悪口言われても頑張るデクにーちゃん見たら、かつこいいなって思った、から」

「そうか……。まあ、考え方は人それぞれだ。お前は、お前が思うようにヒーローをかつこいいと思つて、応援してやつてくれ」

再度呼人にうなずくと、洗汰は心配そうにこちらを見ていた緑谷の方へと歩いていった。一体呼人は何だと思われているのだろうか。流石に子供には優しくするし、クラスメイトにも訓練がスパルタな事以外は酷いことはしていないはずなのだが。

プツシーキャッツの訪問から数日後の昼間。珍しく呼人は、木の枝に腰掛けて神王寺と電話していた。いつもの報告ではなく、特に他愛のない日常会話である。

つい先日にはビルボード・チャートが発表された。呼人の知るヒーローで言えば、ミルコが5位とリユーキュウが10位。それに轟の父であるエンデヴァーが1位。他に

も以前調べた上位陣はほとんど面子を変えていない。

なんというか、オールマイト亡き今不安なところはあつた。その辺のヴィランであればたやすく制圧出来るのだろうが、相手がオール・フォー・ワンのような特級の化け物であつた場合、それを制圧できそうな出力を持つ人間がいなのだ。まあそんな出力を持つヴィランというのもオール・フォー・ワンぐらいなものなのだろうが。緑谷が更に成長するのは当然として、戦力的にはまだ欲しい。オール・フォー・ワンは強い。だが一人であつた。海外のヴィランは……また違った意味で比較にならないのだ。

ちなみにジ・アドベンチャーの名前は、一番下の方にちんまりと並んでいた。ニュー・スどころか記事でも取り上げられない下の方に。

「お前はこれで良いのかよ神王寺」

『見えない仕事だからな。仕方ない。それでもインゲニウムにサー・ナイトアイ、他にも優秀なヒーローをそれなりに助けてんのよ』

「そうかい」

『お———』

と。話の途中で神王寺の声が途切れる。後ろで何か揉めているように聞こえるのはテレビの音だろうか。

「何かあつたか？」

『こりやまた……テレビ付けてみるよ。凄いのやってるぜ』

「今外だ。ちようどロードワークで山の上の方まで走ってきたから」

『そうかい。九州でエンデヴァーがヴィランと戦ってるんだが……これあれじゃねえか、個性の感じ的に。脳無だ。しかも相当強い。エンデヴァーが相当押されてる』

「ほう……。モーメントとブラーあたりには記録取らせにいけないか？ エンデヴァーが死にそうになったら介入させていい」

『また大盤振る舞いなこつて』

「エンデヴァーには死なれると困るだろ流石に。それに脳無は場合によつちやあ変異する可能性がある。変異は流石にまずい。ブラーに消させれば目立たないだろ」

『了解了解。モーメントと……イスカandalだな。後ブラーも』

「イスカandalも来てくれたのか。わかった」

『後俺も向かうぜ。最悪生き返らす』

「頼む」

表の人間がいてこそ、裏との釣り合いが取れる。これ以上優秀なヒーローが失われるのは困るのだ。

ちなみにイスカandalというのも、神王寺が海外から呼び寄せた人間であるのだが、これもまた裏の人間である。ただしヴィラン組織ではなく、格闘技の出身だ。あくまで

行ったのは勧誘であり、呼人の戦闘をビデオにしてみせることで興味を持たせることに成功した。呼人は覚えていないのだが、以前一度会ったことがあるらしいのだ。あつたといつても呼人と戦つて生き延びているのだ。その彼だけに、再戦のためにと海を渡ってきた。ので。今年中には一度会つて相手をしなければならぬ。

（さて……俺はまだ訓練しておくか）

大出力の放出はエリア一帯が荒れる。やるとするなら国外の砂漠かアメリカの荒野。とにかくそうした地域に行かなければ、イメージ以上のトレーニングが出来ない。イメージで十分であればいざというときにはぶつ放すが、それだと齟齬が出る可能性がある。ちよつと想定より強いだけで周囲への被害が増してしまふ。そういう個性の制御が、呼人が一番苦心するところであつた。

ひとしきり訓練を終えて、山の木を数本消し炭にした後呼人が寮へと戻っていると、神王寺から連絡が来た。

『治した』。

たつた一言。その一言で、エンデヴァーがそれだけ追い込まれたのだとわかる。帰り

ながらニュース記事を見れば、他にもN.O. 2のホークスに後詰めでミルコもやってきたらしい。また敵連合の茶毘も来ていたらしい。

(とするとこれは脳無で確定か。前はあんなにダサかったのに随分スタイリッシュになって。再生能力は俺以下。消滅したらわからんのは俺も一緒か。出力も単体ならモンスター超えるがEDWよりは下。俺なら消せる。が、オール・フォー・ワンが捕まった後もこんなのがでてるのか。やるな敵連合)

呼人は、敵連合に対して直接的な敵意は持っていないかった。それは構成員の一部の過去に由来するのだが、彼らもまた呼人の考える『救われなかったものたち』なのだ。だから積極的に潰そうとは思わない。まあ治崎は潰したがっていたようだが。ただヒーローで止められないレベルとなると話が変わってくる。

(こつちの報告もほしいな。オール・フォー・ワン回りでやばい奴ら。多分もうまとめられてると思うんだが)

呼人が動き始めるに当たって、『星詠み』にもフル稼働してもらっている。その御礼がモンスター達の世界を見せるという他愛もないものなのだが。すべてが見える彼女には、自分の見えないものというだけで新鮮で心地良いらしい。

(冬休みには一旦出て海外……どこがいいかな。やっぱアメリカかアフリカ……)

ひとまず、このレベルの相手を周囲に被害を出さずに叩き潰す為の力の練習をしなけ

ればならないと、呼人もまた決意を新たにした。

その次の晩。自室で個性を鍛えていた呼人は、強力なエネルギーに反応してビクリと肩を揺らす。

『なんだ？』

『』

『生の人間のエネルギーじゃないだろこれ』

部屋を飛び出し、個性を感じる下の方へと向かう。3階を通り越して2階。気配はエレベーターを降りて2つ目の緑谷の部屋から。急いで駆け寄りドアをノックするが、返事はない。更にラインにも連絡を入れるがこれも返事は無し。その間にも、部屋の中から伝わる気配は続いている。

『どうするか。人を呼ぶわけにもこんなので部屋の扉をぶっ壊すのも——』

そんな事を考えていると、部屋の中から感じるエネルギーが強力なものになっていく。そしてその中に感じるのは、僅かな人の気配。

『これ——』

『個性が肉体を失つても存在し続けた果て……』

ここに至つて扉を破つてでも緑谷を見なければならぬと決めた呼人が扉に正対すると同時。破壊音と同時に扉が勢いよく開く。その扉を手で受け止めた呼人が室内を覗くと、緑谷がベッドの上に四つん這いになっていた。音に気付いて出てきた青山を大丈夫だと言つて部屋に戻らせ、呼人は緑谷のところまで行く。

「おい、緑谷」

「え？ あ、百竜君!? ぐぐぐぐめん起こしちゃった!？」

「いや、起きてた。けどあんなエネルギーを発したら嫌でも気づく」

「そ、つか、あれは百竜君が感じてる話だったんだね」

あれ、と。緑谷が思い出したのは以前の呼人の忠告。エネルギーが、など難しい話をしていたが、それはすべて呼人が探知していたものなのだ。

「まあな。今日はいつもと違う気配を感じたから思わず来たんだが……大丈夫か？」

「う、うん。前もあつたことだから。それにちゃんとオールマイイトにも説明受けてるし」
緑谷の言葉からは嘘は感じられないものの、動揺が感じられる。つまり、嘘はついていないが想定外の事態である、と。ただまあ、それは呼人が手を出すことじゃない。少

なくとも変異するまでは。

「そうか……。ならない。悪かった勝手に入って」

「ううん！ こっちこそごめんね邪魔しちやって！」

慌てて手を振る緑谷に謝罪をして、呼人は緑谷の部屋から出る。確かに大きなエネルギーを感じたが、変異の予兆なんてものが呼人にわかるわけではない。それに関しては経験が無さすぎて一体どれがどういう反応なのかわからないのだ。それでも緑谷は複数抱えていて人と気配が違うのに。

暴走しないでくれるとありがたいと、切に願う呼人であった。

第71話 A組B組対抗訓練

緑谷から異様なエネルギーを感じた翌日の演習は、いつもと様子が違った。

「上鳴君なんか荷物多くない!？」

「おー葉隠! ってやっぱり裸なのね。見てるだけで寒いぞ」

「と思うじゃん!?! 違うんだなこれが!」

「え、葉隠それ裸じゃないの」

「違うよ! 実はね、前に百竜君にアイデアもらってずっと作ってたんだ!」

「何を?」

「このスーツ!」

ほらほら触ってみて! と押し付ける葉隠に耳郎と上鳴が手を伸ばすが上鳴の手は尾白に止められる。そう言われて手を伸ばした尾白は、彼が赤面するようなどころを触ったと葉隠に主張されてそれが嘘なのか本当なのか悩むという状況に陥ったのだ。

「あれ、ほんとかだ。なにこれ、スーツ? 凄いやささら」

「摩擦ほぼ0の特性スーツ! ちなみに主に私の髪の毛で出来てます!」

「髪の毛、うえ!?! まじで!?!」

「そうです！ 私の髪の毛なら透明だからね！ でも透明だからエコロケーションの装
置とかで作ってもらおうの苦労したんだよ！」

以前、まだ入学して間もない頃に葉隠のユニフォームを見て呼人がしたアドバイス。
それは、彼女の体毛を使えば少なくとも透明な服が出来るだろうという発想だった。そ
してそうすれば、靴や手袋でバレなくてもすむし、逆にそこだけが見えるところだと考
えている相手を騙すトラップをはれるとも。

「はー……思いつかなかったな」

「うちも。てか出来るならもっと早くしとけばよかったのに」

「それが個性で髪の毛伸ばせる人の許可取るのが遅れちゃって、時間かかったんだよね。
でも冬は嫌だったからその前になんとか作ってもらったんだ」

「百竜もよくそんなの思いついたなあ。いや言われてみればそうなんだけど凄い盲点
だったわ」

「でもビッグ3の通形先輩も同じ発想だつてさつき緑谷君が言つてたよ。通形先輩のコ
スチュームは体毛で作ってるから透過しても脱げないんだつて」

「あー……なるほど」

体操服をスつぽーんと抜き飛ばしていた通形の事を思い出し、3人が苦笑いをする。
確かに、それを考えると葉隠のコスチュームも普通の事だ。

「ところでそっち！ 上鳴くんは何持つてるの？」

「あーこれ？ これサポートアイテム入ってるんだけど、もう出しておこうかな」
「うちも気になる」

上鳴のサポートアイテム、と言っても以前から使っていたターゲットを打ち出すための装置は既に装備されている。だから一体何を取り出すのかと見ていると、上鳴が取り出したのは大型のスケートボードと適当にまとめられた布の塊のようなもの。

「スケボ？」

「あ、上鳴それもしかして」

「そ。へへへ」

尾白が布の方に反応したのを見た上鳴は、嬉しそうにその布を首の周りに巻く。それを見て耳郎と葉隠も気付いた。

「あー！ それ！」

「相澤先生の！」

耳郎と葉隠の声に、他のクラスメイトもどうしたどうしたと集まってくる。

「うお！ 上鳴それ！ まじか！」

「まあ、相澤先生の……」

「うーなんで上鳴！ ずるい！」

クラスメイト達が興奮しているが、上鳴はちよつと困った様子を見せる。

「つってもまだ全然形だけでまともに使えないんだけどさ。でも演習でも練習したいから持ってきたんだよ」

「えーじゃああのピツてやって捕まえるのは出来るの？」

「あれは一応。でも相手が動いてると外すかな」

上鳴が電縛布に関する受け答えをしていると、轟も興味を持って近づいてくる。

「上鳴、それ……色違いか？」

「素材が違うの！ただなんとなく色変えてるわけじゃないの。つてか轟のコスチューム改めて見るといかついなほんとに」

「ああ。今日は戦闘訓練だからフル装備だ」

轟も以前呼人との模擬戦で見せた新コスチュームをフル装備。更に尾白も尻尾や腕に保護用のスーツを巻いていたり、障子が腰の後ろに警棒やロープなど色々な道具を取り付けてきている。いずれも戦闘の幅を広げたり強化するためのものだ。

だが、その中でやはり一番目を引くのが上鳴のスケートボードだろう。

「で！上鳴そのスケボは何！」

「これもサポータアイテム。俺がバッテリー代わりになれるからバッテリー積まなくていいのよ。でその分強力なモーターを複数つめたから結構なスピードが出るぜ」

「でも今日の演習じゃ平地なんてそんな無いでしょ」

「そこはもちろん練習してきたから！ 段差ぐらいならびよんぴよん超えてくぜ。それに戦闘用の装置も積んでんのよ」

戦闘用の装置は上鳴がどうしても組み込みたいと考えていた装置で、それを組み込んだせいでスケートボードの重量が2割増しになったというゲテモノである。ただもともと安定感が足りていなかったのでデッドウェイトになっていないのが幸いとも言えるべきか。

他にも、興味なさげに話に入ってこない爆豪の両腕のタンクの形状が変化していたり、他の大きな変化がないメンバーも防寒用になっていたりと様々なコスチュームの変化が行われている。

「あー百竜くんやつと来た！ ってコスチューム変わってないね面白くない」

遅れてやってきた百竜に葉隠が話しかけるが、その姿が轟との模擬戦でお目見えしたコスチュームからまったく変わっていないことで落胆する。コスチュームに面白いものも無いだろうと思っても言わないのが呼人の優しさだ。それに意外と皆面白がっているようなので自分が少数派だというのは理解していた。

「だからそんなコスチューム変える意味が無いんだってば。葉隠はちゃんと用意している？ ロープは？」

「バッチシ！ ていうかそれ秘密にしたのに！」

「え、ロープってなに？」

2人の会話に思わずそう尋ねた尾白の両腕が、体にピタリと縛り付けられる。

「え、これ葉隠さん？」

「そうだよ！ 布が作れるならロープをも作れるからね！ ちなみに中に鋼線入ってるから頑丈性もばっちりだよ」

「まだロープで殴る練習は出来てないけどな」

「まあね！」

ロープで殴る練習とは、透明故にばれないがそもそも出来ることが少ない葉隠に対して、呼人がロープを鞭のように使えばいいのではないかとアドバイスして考案された戦法だ。だが、そもそも見えないロープの扱いということ、葉隠も何かを縛るところから苦慮しており、まだそこまで練習が出来ていなかった。だがそれでも、素手以外の戦い方が出来ると本人は満足げである。

「お前もやつと尻尾のガードつけてきたのか」

「まあね。百竜にやられたときは痛かったから」

「許せ」

「怒ってないよ。それに対刃物だったら当然のことだから」

これまで素手での武術によって戦ってきた尾白が手足に軽いプロテクターやグローブ、それに尻尾にカバーをつけてきたのは、呼人との戦闘訓練のときの経験に由来する。その時の呼人はもう尾白相手には個性を使うと言ってビーストを使っていたため、攻撃をガードした尾白の腕や尻尾が爪によって引き裂かれたのだ。強靱な尻尾とはいえ刃物には負ける。その硬さをカバーするために密着したスーツをつけているのである。

また、これまでは尻尾の可動域を狭めたくないからと装備していなかった尻尾のスーツだが、呼人や八百万の発想を受けて特殊な構造をしており、稼働するための関節になる素材とガードするための強靱な素材という2パターンにわけて精密に作られており、よく見ればその細かな模様を見ることが出来る。おかげで十分に動く尻尾も満足し、ようやくつけてきたのだ。更に感覚が鈍ることに関しては尻尾の先端だけ露出しており、外の様子を触れて触るには十分である。

そんな話をしてしていると、B組の物間がやってきて何やら喧嘩を売ってくるが興味の無い呼人は聞き流して嗅いだことのある匂いが近づいてくる方に目を向けていた。そこらには相澤とブラドキング、そしてその他の教師達。その後ろにわずかに見える足が、その匂いの元だろう。

ようやく、同じ舞台上が上がってきた。

「今日はゲストがいるんだからあんまりしよもない姿を見せないでくれ」

相澤がいつまでも騒いでいる物間の首に布を巻き付けて黙らせる。皆はその所業に怯えていたが、近くにいた上鳴が『速っ、てか強っ!』と言っていたのを呼人は見逃さない。やはり参考にしたものというのは、いつ見てもその動きに惚れ惚れしてしまうのだ。

「ヒーロー科編入を希望しているC組の心操人使君だ」

ブラドキングの後ろに隠れていた心操が顔を出すと、皆が思わずと言ったように彼の姿に叫び声を上げる。冷静なのは知っていた呼人と上鳴ぐらいなもので、その実力を知っているはずの尾白も驚愕の声を。そして緑谷は喜びの混じった声をあげていた。

「なんでお前が驚いているんだ？ 食らってただろ」

「いやそうだけどそりやいきなり来たら驚くよ!」

むしろなんでお前そんな平静なの!? と呼人の方が怒られてしまった。なんとも理不尽な話である。

「いつか来るのはわかってただろ」

「いやそれはわかってたけど……」

冷たい呼人の返事に尾白は、『え、俺が悪いの?』と言いたげな様子で涙目になっている。

「にしてもあのマスク……あいつも考えてるなあ」

「何か知ってるのか？」

「いや推測程度。まあ見ればわかるだろ」

心操の首元に巻いている捕縛布の下に隠れているごついマスクの正体を、呼人はものの数瞬で看破した。彼の個性を持つているのが自分ならそういうのを使うからだ。もつともそれをバラすつもりは無いが。そんな話をしていううちに、相澤に促された心操が一言述べる。

「何人かは体育祭でも関わりましたけど……。昨日の敵は今日の友とか。俺はそんなスポーツマンシップ掲げられるような人間じゃないです。もう皆さんから何十歩も出遅れてる。悪いけど必死です」

静かな心操の語り口に、皆が引き寄せられる。この心地の良いプレッシャー。緑谷のようにきらびやかな憧れでも、爆豪のように荒々しいそれでもない。ただ冷静な、冷たい。けれど刺すような闘志。そういうのも呼人は好きだった。

「俺にとつてはこの場の皆が超えるべき壁です。ここの全員を超えて、俺が最高のヒーローになる。そのつもりでいます」

静かな決意表明に、彼の本気を疑うものはいない。

「心操、本気だね」

「俺はあの時から気付いてたぞ」

「知ってるよ」

だが鬼気迫り具合では呼人も負けてはいない。少なくとも、クラスで一番総合的な身体能力に秀でた尾白が一日で悲鳴を上げるようなメニューを呼人は毎日のようにこなしてきている。ただただ強さへ挑戦するために。

「それでは早速始めるぞ。今日は戦闘訓練だ！」

「今回はA組とB組の対抗戦だ。舞台はここ運動場γ。双方4人組を作って一チームずつ戦ってもらおう。A組は一人余るからそこは5人組だ。それと、心操はそれぞれのクラスで一度ずつ、計2回参加してもらおう。つまりB組は心操含めた21人で4人組4つに5人組1つ。A組は4人組3つに5人組2つだ」

「先生！ それでは人数差が不利になるのではないでしょうか！」

「今回の状況設定は『敵グループを包囲し確保に動くヒーロー』だ。お互いがお互いを敵と認識し、先に4人捕まえた方の勝ちとする」

「つまり5人いても捕まえる人数は変わらないってことね」

初めてとなる4人以上でのチーム戦。3人チームでの戦闘訓練ですらこれまでほとんどしていないのだ。連携が重要となるのか、あるいは強力な個が突出するのか。

「双方の陣営には、『激かわプリズン』が設置されている。そこに相手を投獄した時点で捕まえた判定、逆に言えばそれまでは何度でも抵抗が出来る」

「どう思う？」

「全員殴り倒して一回一回放り込みに行く」

「それはパワフルだね」

「冗談だ」

「笑えないから困るんだよ」

尾白と呼人の掛け合いが聞こえていたB組の数名が気にさわったと言いたげな視線を向けてくるので、2人でペコリと頭を下げる。もつともそれすらが煽っているように見えてしまうのだが。

「それじゃあクジだ」

順番にクジを引いていき、チームが決まる。呼人の出番は一番最後の5試合目。チームメイトは緑谷、麗日、芦戸、峰田。普段一緒に訓練しているメンバーがいないがそれはまだいい。

(もうひとりくらい索敵要員が欲しいところだけどな。けどまあ相手も多くて同数。取蔭がいるとめんどくさいな)

結果対戦相手には取蔭はおらず。物間、小大、庄田、柳の4人+B組での出番が5番になった心操の5人となった。心操と物間以外の個性がわからない。

「百竜君、心操君と仲良いの？」

「いや、体育祭の騎馬とその前に一回だけ話したくらいだな」

「そっか。どっちにしろ、頑張ろうね」

「ああ。まあ、あいつのやり方は俺が逆手を取るさ」

「どういうこと？」

「まあ一試合目が始まったら教える。わざわざB組に聞こえる状態で言う必要はないだろ」

そ、そっか、とノートを取り出していた緑谷が引き下がる。そうしているうちに打ち合わせが終わってそれぞれの1組目が移動を始めた。

「もう良いよね？」

「早いな。まあ良いけど。じゃあそうだな、こういうのは知ってるか？」

緑谷に再度詰め寄られた呼人は、喉の形を変形させると麗日の声を模倣して話しかける。

『デク君は久しぶりの再戦やね』

「え？」

「ちよつ、え、今うちなんも言っていないよ!？」

近くで話を聞いていた麗日が耳を疑った様子で近づいてくる。

「うん、麗日さんは何も言っていないよ。だって今のは僕の声だから」

「デク君！ 腹話術？」

「え、僕そんなことやつてないよ！」

騒ぎ出す2人を落ち着かせて、そろそろ試合の始まりそうなモニターを確認して呼人は説明をする。

「声帯模写だ。音をよせて話し方を真似すれば大抵は気づかない。で、心操のごついマスク十中八九それをする機械が入ってる。あれで敵に味方の声と誤認させて引っかけるともりだらうな」

「うわ……心操君よりもそれをあつさり当てる百竜君の方がやばいで」

「想像しろ。自分があの個性持ってたらどうするか。後は俺なら戦闘中に後ろとかから『下だ！』って言って『え？』とか返事させるのを狙うかな。まあそれがかかるかは知らないが」

個性がわかれば、後は自分の中で幾通りもの戦い方を考えるものだ。少なくともそれが呼人のやり方で、その中に敵がやってくる方法があれば儲けものなのである。

「ほら、試合が始まるぞ」

第72話 A組B組対抗訓練・2

一試合目の試合開始前。

「お前が味方ってなんか心強いわ」

「……どうも」

「一応素だからね？　これ。個性とかじゃなくてさ」

「わかってるよ」

チームメイトになった上鳴と心操は、互いにだけわかる会話を交わしていた。短い間だが共に相澤に教えを受けただけに、それぞれ凄いところは把握している。

上鳴から見た心操の凄いところは、その熱意と愚直なところ。そして実はかなり高かった操縛のセンス。自分が全く出来ないことをさらさらと習得してしまう。

一方心操も、正直に言うことはないが上鳴の凄いと思うところはある。まずヒーロー科の訓練がハードだろうに自分と同じメニューにくらいいついている所。そして、個性だけでも強力なのにさらなる術を、それも教えてもらうのではなく開発しようとしているところ。ヒーロー科に対して闘志を燃やしている心操も、上鳴のことは特別認めていた。

「え、上鳴知り合いだったのかよ」

「これ教えてもらおう時にな。まあレベルは天と地だけど」

「どういうことかしら」

「心操が相澤先生のちよつと下位互換で俺が超下位互換ぐらいつてこと」

「そこまで無いだろ」

「まあ、俺はそう感じてる、つてこと。さ、作戦練ろうぜ」

移動を行いながら、心操の個性についての説明を行われる。改めて聞くとえげつない個性だ。

「変声機も合わせてとても強力ね」

「まあ通用するかどうかは……やってみないとな」

そう話しているうちにスタートの合図。歩いて移動しながらも作戦の相談をする。

「相手でやばいつつたら塩崎さんだよな。上鳴の電撃も効かねえし自由自在だし」

「そうね、警戒しないと」

「いや、そうじゃねえ」

蛙吹の指摘に皆が頷いたところに、スケートボードを蹴りながら移動している上鳴が異論を唱える。

「なんでだよ上鳴」

「だからこそ塩崎さんを囮にするだろ、普通。俺だつてこのメンバーなら俺か心操を狙うぜ。だからこそ、囮にするんだろ」

「そ、そうか？」

「でもそこまで考えてくるかしら」

「最悪の想定、だろ。そもそも相手の個性はつきりわかつてねえけど、他のメンバーにも電気が効くかも怪しいぜ。変身した百竜には電気が通用しねえんだし、穴戸だつて通じない可能性もある。それに穴戸に突っ込まれたときまともにパワーで止めれるメンバーが居ない。別に塩崎が来なくてもこっちは普通に詰めるんだつて。後穴戸の個性なら鼻か耳は良くなるはずだ。それこそ百竜と一緒だな」

上鳴のいささか厳しい評価に、全員表情から余裕が消える。笑つていたわけではないが、その顔つきに険しさが現れていた。

「そうね、口田ちゃん、お願いできる？」

蛙吹の指摘に口田はコクコクと頷き、鳥たちを呼び寄せて再度指示を与えている。

「……冴えてるな」

「嫌でもスパルタ男に突っ込んでれば鍛えられますよほんと。心操は……守るとか言わないから。俺より操縛は強えし。でも俺が個性的に前ね」

「わかつてる」

守られるだけのつもりはない。自分は、何のためにこの武器を身に着けたのだ。そう心操は強く自分に問いかける。

1人でもうにかするためだ。

それが、心操の戦い方。個性が通用しないからなんだ、と。今の心操には、そう言えるだけの強さがあった。

と、口田の元に二匹の鳥が慌てた様子で飛んでくる。一匹の方がさえずりが激しい。

「切島くん、そのタンクの裏！」

「っ！ おう！」

口田の珍しく大きな声を聞いた切島が前に飛び出すと同時に、その陰から飛び出した穴戸が切島を壁に叩きつける。それに巻き込まれた蛙吹も一時戦線離脱するが、上鳴はそちらに目を向けずに叫んだ。

「心操穴戸！」

そう叫んだ後、穴戸の体に向かって電縛布を投げつける。これだけ大きな的、上鳴でも外さない。

(そんなでもって触ったら——！)

『『ボルト』！』

電縛布を伝った上鳴の電撃が炸裂すると同時に、穴戸の背中に隠れていた円場が体をの

けぞらせて硬直する。穴戸に触れていたために、電気の通過点となったのだ。それを見
た心操は、即座に彼を利用することにする。

「もらっていくわ!」

切島吹っ飛びの被害からいち早く抜け出した蛙吹が痺れたままの円場を舌で捉えて
引つ張る。舌に引つ張られて円場が穴戸の頭上を超える瞬間、感電したはずの穴戸が動
き始める。

そしてその瞬間、円場が叫んだ。

「助けるな! 暴れろ穴戸!」

「つ! わかりまし!」

正確には、円場の声で心操が叫んだ。もともと痺れた円場は体が痙攣して話せるよう
な状態にない。そして捉えた穴戸は、蛙吹の後を追わせる。これで2人捕獲。

「なんか上鳴めつちや冴えてね? あんなだつたか?」

「なあ……俺も驚いた」

「え、あれほんとにアホの上鳴れ?」

上鳴が驚かせたいと言つて頑張つていることを秘密にしていたクラスメイトたちは、その立ち回りの冷静さと反応、そして成果に驚きの声を上げる。

だが、呼人は当然の成果だと考えていた。呼人は、個人相手の訓練ではいつもの演習のような優しいことはしない。もちろん怪我はさせない。だが、例えば相澤に瞬殺されても怪我はしなくてもその圧倒感は伝わってくる。呼人は上鳴相手にはそれをぶつけていた。

そして休憩時間や戦闘直後の反省時には、様々なシチュエーション、状況判断に関する問題や動きのパターンを。それこそ刷り込んでいった。そして上鳴も、それに応えようとした。

そんな上鳴の成長に驚くクラスメイトに、モニターを見上げたままの相澤が告げる。

「上鳴はUSJ襲撃事件からこつち、ずつと先を見据えた努力をしていた。強力な個性をただ放つのではなくどうかし、足りない部分を補うか。一番最初に俺のところへ捕縛布の教えを請いに来た時も、一足先にサポート科を訪れた時も、2度目に請いに来たときも、あいつは先を見据えていた。評価するのは良いが讃えるなよ。お前らにも当然出来たことだ」

先を見据え、出来る事を探す。簡単なようで難しい。

もちろん、上鳴だけの力ではない。呼人という努力の塊とも言うべき人間を見ていな

ければそこまで自分を追い込めなかっただろうし、師としての呼人も確かに大きかっただろう。組手や移動術、体を鍛えることにおいては尾白や障子との放課後訓練も力になっっている。

だが、呼人も相澤も知っている。夜、文化祭練習中でさえ消灯時間になった後に上鳴が、真つ暗な中庭で捕縛布を振り回していたことを。それで授業中に寝ていれば世話は無いのだが、それだけ上鳴は自分を切り詰めた。だからあの動きを身に着けたのだ。

そしてこれは呼人も知らない。上鳴の机の上には、呼人がその日言ったアドバイスやシチュエーションの問題をうろ覚えにまとめたものがあるということ。汚い、丁寧にまとめられた緑谷のそれとは比べ物にならないノート。だが、確かにそれを残していた。

適当な男だと、軽い男だと笑えばいい。

だが少なくとも、すべきことには努力を示せる男だ。

「速いな」

「役割分担。俺は接触お前は非接触」

「わかつてる。お前にも負けなない」

「うし！ 口田索敵よろしく！ で、どうする心操」

吹き飛ばされた先から復帰してくる切島を待ちながら、上鳴は心操に投げかける。いつも上鳴が貸し出していた、汚いヒーロー科のノート。それを一々付箋で修正しては変換したり『読めない』などと書いて返してきたのは心操だ。上鳴が書いたことを覚えているからすら怪しいことまで。その頭脳は、確実にアホな自分よりも高いところにある。そう上鳴は気付いていた。

「向こうが2人が仕留められたことに気付いているか……多分すぐ気づかれる。穴戸が暴れてれば破壊音が出る」

「切島！ 取り敢えずその辺のタンク殴って壊しておいて！」

「え、いいのかよ！ てかもう2人は捕まえたのかよ！」

「戦ってるって思わせないと残りの2人が攻めてくるって！」

心操が頭を回している間に、その発言を受けた上鳴が切島に指示を出す。聞いた切島は首を傾げながらも腕を硬化させてタンクやパイプをぶん殴っていく。

「相手が減ったから俺の個性は使いづらい。やるなら、上鳴がダツシユで塩崎の方に逃げて、それを追っていく俺が声を出す、か。口田、2人の位置は？」

問いかけられるがまだ鳥たちが戻ってこないことに口田が困っていると、ちょうど偵

察を終えた鳥たちが帰ってくる。

「えと、塩崎さんは左側さつきから動いてないって。鱗君は檻のところからちようどこつちに向かつて歩き始めたみたい」

「鱗を狙う。口田もう一回飛ばしておいて。できれば逐一報告が欲しいけど……」

「鳥たちが少ないから」

「わかった」

切島があたりのものを手当たりしだいにぶん殴っている音の隙間からなんとか口田の小さな声を聞く。そしてすぐさま心操は指示を出した。塩崎は、正直4人で狙っても同時に対応できる可能性の高い強個性だ。それに対して鱗はわからないが、塩崎が無理なのはわかっている。

「あの、逃げておかないの？ 今逃げれば2対0で……」

「それもあたりだと思う。けど……どこまでやれるか試したい」

「俺も心操なら応援するぜ！」

でも、と口田は口ごもる。確かに、逃げるという選択肢はあまりに消極的に過ぎるとしても、守りに入るといえるのは当然だ。今ならそのまま逃げ切れば勝てる。だから攻めるといえるのは、心操と上鳴のわがまま。例えば全員は逃げなくても、機動力のある蛙吹が1人突っ込んで囷を仕切れれば良い。

「口田——」

口田を説得しようとした上鳴を、心操が手で制する。

「俺達がヒーローで相手がヴィランなら、絶対に全員捕縛すると思う。俺は、そういうヒーローになりたい」

それは道理の通らない殺し文句。実際にはヒーローも、一旦撤退して様子を探ることだつて当然のようになる。でも、心操の決意を伝えるには十分だった。

「切島にそのままやって鱗と塩崎を引きつけるように伝えてくれ」

心操に言われた上鳴が、暴れまわり切島のところに言つてその旨を伝える。

「俺は前に出ねえで良いのかよ」

「ここでドツカンドツカンやれるのが切島だけ、つてことじゃね？ 後塩崎は固くなつても拘束されちまつたら関係ないし」

「鱗は？」

「多分、心操の個性で狙うんだと思うぜ。直前まで引きつけて。だから切島はここで待機と、バレた時に前面に出る要員。じゃないかな？ わからんけど」

「お、おう。なんか上鳴、久しぶりの模擬戦だけど冴えがやべえな」

「心操には引きずられるのよほんと。あいつ凄いの」

2人が話していると口田の鳥が再び報告に現れ、心操が上鳴を手招きする。作戦は固

まった。後はやるのみ。

結局、第一試合は4対0でA組が勝利した。鱗はなんなく拘束に成功し、上鳴が塩崎の拘束を受けたものの蛙吹と心操、切島が囹をしている間に口田が鳥に啜えさせた遠隔用のターゲットを塩崎の後方に落とし、それに向かって放電して戦闘終了。終始A組が優位に勝負をすすめることとなった。

「駄目だ。完全に上鳴に引つ張られた」

「そこは俺の活躍と言って頂戴!? てかお前が穴戸と鱗仕留めたんでしょが!」

「穴戸はお前の方が反応早かった。鱗はまあ……」

「俺もよく投げられたと思うよ!」

鱗を捕まえた時の手順は単純で、心操が上鳴を鱗の近くに向かつて投げ、そして『離れるように』伝える。それに鱗が返事してチェックメイト。シンプルが故に、咄嗟に伝えてしまう。鱗がペルソナ・コードに存在を知らなかったがゆえに刺さった攻撃だ。

「でも上鳴ちゃんも心操ちゃんも凄かったわ」

「やっぱ俺は反応が遅れちまって駄目だ！」

「口田が常に索敵し続けてくれたからだ。ありがとう」

「う、ううん！ 2人とも凄かったよ！」

そもそもが、B組の手は呼人からしてみればまずいものだった。5対2に突っ込むなど、呼人ならするが普通はやらない。だって数に押されるのだから。それも相手には心操、上鳴という一瞬で制圧出来るメンバーが居る上に索敵能力も口田が十全に發揮する。少なくとも戦闘中に後から到着した鱗や塩崎が参戦できるタイミングなら良かったものの、まったくそうではなかったのだ。

良く言えば強みを押し付けようとした。だが悪く言えば、個に頼りすぎた。穴戸が暴れることができていれば。違ったかもしれない。だが、実際には上鳴に一瞬の足止めをくらい、そこから更に心操のダブルコンボで落ちた。

全員が戻ってきたところで、それぞれの担当が集めて反省会を行う。

「全員反省点を述べろ」

「気抜いたらまずい前衛なのに気抜きました。後射程の長い相手に対して踏み込めなかつたつす」

「全部心操君と上鳴君に考えてもらって動くだけででした。それともっと細かな指示を

……」

「最初初手で誰が乗ってるのかわかんなかったのと、本当はあの場面なら電縛布投げながら前に入るべきだったつす。後まだ機動力を扱い切れて無いのと、気付いてたのに戦闘前に短く伝えきれなかったつす」

「保護色が使えぬから穴戸ちゃんのように先に行くべきだったわ。取り敢えず集まろうっていうのは逃げね。後咄嗟に反応できなかつたわ」

「全部反応が遅かった。後は教えてもらったことの1割も実践できませんでした。悔しいです」

それぞれが反省を述べた後、相澤はまず心操に評価を伝える。

「俺はそれを使いこなすのに6年かかっている。すぐに出来たら苦労はしない。それと作戦立案は良かった。出来たところは認めて、悔しさも喜びも次の糧にしろ」

「はい」

心操に伝えた後、相澤はクラスの生徒を振り返る。

「切島は正面に誘い込めるセットアップを意識しろ。口田は自覚どおりだ。もつと細かい指示が出せれば索敵の精度も上がるし搦手もうまくなる。上鳴はそこまでの考えがあるなら早い段階で短く的確に伝える。蛙吹は味方を信じろ、そしてチーム内での役割分担も考えろ。一番機動力があるのはお前だった」

それぞれが頷いたのを確認して、集まっていたメンバーを解散させる。それはそれぞれ

れが確かに理解していることだった。

「上鳴君、凄いわつたね」

「ね！ 相澤先生の武器を使ってたし」

「なんだよあのヤローモテそうなことこつそりしやがって！」

「なんやびつくりやわ。文化祭の練習のときとかいつも感じやったのに」

チームごとに座っているのでチームメイトの声が呼人のところに聞こえてくる。

「最初に俺達が訓練してるところに来たのは職場体験後だったな」

だから呼人は、上鳴がこれまでしてきた努力を言う。もう上鳴も隠そうとは思わないだろう。4人の注目を集めながら呼人は続ける。

「その頃にはサポートアイテムの開発を誰よりも先にしていた。夏休みは学校で俺と訓練したこともあるが大方相澤先生のところに行っていたんだろう。圧縮訓練の頃からまた俺個人との訓練を頼み込んできたから叩きのめし続けた。それから時間がある時はずつとな」

成長もするさ、と呼人は言う。その訓練が生んだのは、何も肉体的な強さや格闘戦の強さだけではない。戦闘の中で考える力。そして引き締まった時間を過ごしたこと、時間を引き締めて使うという感覚が身についた。当然そんな上鳴からすれば、だらける時間は無駄なものに感じられる。だから訓練をした。勉強にいかなかったのは苦手

「だったからだ。それでもヒーローに必要な勉強は頑張ったし、それ以外もなんとかついでいこうとした。」

「叩きのめす、つて、文字通り?」

「比喩だ。上鳴に一回も勝たせないどころか惜しいとも思わせてない。そもそも俺は電気が効かないしな」

もちろん訓練の内容には合わせているが。

「まあ、それだけだ。やろうとすれば誰でも出来た。そして上鳴はそれをやったから強くなった。それだけの話だ」

「……くうううううう！ 私たちも負けてられないよ！」

「そうやね！ うちらも頑張らんと！」

「上鳴、絶許ッ！」

チームメイトが意気を高める中、緑谷が呼人に話しかけてくる。

「百竜君、ずっと手伝ってたんだね」

「俺の個性訓練をするようになってからはまちまちだけだな」

「うん、でも百竜君ってそういう感じじゃないのかと思ってたから……」

「そういう感じって?」

「みんなを誘う感じ?」

首を傾げながら言う緑谷に、呼人はうなづく。

「そりゃあそんな事してないからな。上鳴は自分から相手しろって言いに来たから俺も応えた。それだけだ」

「そつか……。じゃあ僕もお願いしに行くよ」

「いつでもどうぞ。相手できるかはわからないけどな」

第73話 圧倒するは竜

第2試合。A組、八百万、常闇、青山、葉隠VS B組拳藤、黒色、小森、吹出の対戦は、B組の勝利となった。序盤の動きでB組の方が一枚上手だったのだ。

呼人からすれば読み切れる手だっただけに、甘さを感じるものだった。

ただ呼人が個人的に訓練に何度か付き合っていた葉隠は、思わぬ活躍を見せていた。遠距離から攻撃をぶつけていた吹出、小森を、後方から回り込んだ葉隠が気絶させた上に透明なロープで拘束したのだ。

そしてそれを知っていた八百万は活用するように動こうとしたのだが一步及ばず。また運搬能力は持たない葉隠では拘束までが精一杯だったので、結局4対0の敗北である。

呼人が葉隠と一緒に考えたのは、透明になることの利点。そしてギャップの大切さ。その他それらの活用方法。

まず透明になることの利点とえば、当然見えない。ただ仲間からも見えない。

“だから彼女は、仲間とともにいる必要はない。もしいるのだとしても、見えないものとしてカバーする動きをすべきで、カバーさせてはいけない”と。

少々酷な言い方であったが、むしろはつきり言ったことで納得がいつてくれたようだった。

だから葉隠は、真つ先に単独行動に出た。靴と手袋を置いて。

そして次に教えたのは、索敵方法。と言つても、何に注意しておくべきかということ。つまりは、拳藤が青山の光を見たように、人がいれば必ず何かが放たれる。特に遠距離系は。それに気付いた葉隠は吹出を先に拘束。そして更に迂回して小森を気絶させたものの、同時に放たれていた肺を攻めるきここで失神した。

もう一つ教えたのがミステイクレクションだ。つまり、彼女は見えない。だから音だけが彼女をしるすべになる。そしてそれならば、関係ない場所で音を立ててしまえば良い。

結果、戦闘中の彼女は一切声を発さなかった。教えておいてこんなことを思うのも何かも知れないが、完全に暗殺者である。そのうち彼女の骨でナイフ、とか。物騒すぎるだろうか。

「負けたー!」

「お帰り暗殺者」

「違うから! つてかこのルールじゃ捕まえても意味ないじゃんね!」

「まあまあ葉隠さん。でも、拘束結構綺麗だったね」

「そりゃあたくさん人形縛る練習したからねー」

褒める褒める、と鼻を伸ばす葉隠の頭を、取り敢えず呼人は叩いておいた。

第3試合。A組轟、障子、尾白、飯田VS B組鉄哲、骨抜、角取、回原。

勝つたのはA組だった。ただし骨抜だけは捕まらず。

まず骨抜の個性対策に、轟が定期的に氷を張り直し足場を確保。その間護衛を障子が受け持つ。そして期末試験の時の動きを再現した飯田と尾白は、尾白をぶん投げて上を取って急襲。遠距離攻撃持ちの角取を一瞬で落とした。

尾白が角取を落とさきっている間に飯田は骨抜と対決。障子が回原と殴り合い、轟は鉄哲と殴り合いになった。特にB組を驚愕させたのは、轟が格闘戦で鉄哲を圧倒したことだ。圧倒と言っても鉄哲の硬度を貫通したわけではない。ただ、近づけなかった。角取をそうそうに失って機動力の無い相手に対して、フルチャージの正拳一発で吹き飛ばして距離を取り、その間に障子回原の方に参戦したのだ。

これは呼人も言ったことだが、効かないのはどう効いていないのかという判断も必要なのである。勢いが逃げているのか、硬度的に通らないのか。では逆に通すには。殴つ

た瞬間のインパクトで倒すのか叩きつけたインパクトで倒すのか。それを考えるだけで大きく立ち回りは変わる。結果轟が選んだのは、ガードを選ぶ鉄哲に対して斜め下からのアッパーではるか彼方へと吹き飛ばすこと。切島と同等の硬度を持つ鉄哲なら死なないだろうという判断である。

ただ回原には回転で弾かれるので氷は通用しない。だから轟が凍結したところを、障子が複製に複製を重ねた腕で拘束する。腕の多い障子の拘束から抜け出すのは呼人や尾白でも至難の技だ。個性をぶん回せるからと言って体術の劣る回原では突破は不可能である。

その後、鉄哲を尾白と障子がタコ殴りにしているのを骨抜きが救出に来たが再度張った凍結で足場を作り、飯田が骨抜きを仕留めにかかる。骨抜きは一気にタンクを柔らかくして崩すことで場を荒らし、同時に気絶した障子を捉えたがそれが精一杯だった。結局鉄哲も拘束され、骨抜は一人最期まで逃げ切ることになった。

「お疲れ」

「ああ！ 百竜君もお疲れ様だ！」

「まだ何もしてないぞ。しかし……あれは上手かったな。レシプロのワンギリっていうのか？」

「む、流石だ百竜君。気づかれるとは思っていなかった。だがそうだ。君の動きから、最

大出力を常に出せることが正解ではないのだと気付いたのだ」

「まあ一番いいのは最大出力を長時間制御することだろ」

「それもそうだ。だが俺は意外と今のを気に入っているのだ。まだこれで轟君にも緑谷君にも負けない。もちろん君にもだぞ」

「望む所。てか保健室行つて来い」

「ああ！」

終始押し気味だったA組チームだが、それでも怪我人は出ている。そのあたりは戦えば当然だとも言えるが、それでも防げたものを防ぐ努力はしなければならない。

4戦目はもう。

A組爆豪、耳郎、瀬呂、砂藤VS B組取蔭、凡戸、鎌切、泡瀬だったのだが。

結果的に言えば、爆豪の一人勝ち。

正確に言えば爆豪と彼に合わせた他の3人のチームワークだったわけだが。

だが以前以上の機動力に反応速度。それに立ち回りの上手さ。あるいは急成長を果たした上鳴以上の目立ち方をしていた。

仲間との強調を大事にし、協力しあおうとするクラスメイトに対して、こういう形もあるのだと。先に立つ1人が引つ張り、他のメンバーがサポートするという形もあるのだと伝える戦闘となった。

呼人が特に面白いと思ったのは、形状が大きく変わった籠手。以前の巨大な手榴弾型から、小さく、そして肘のあたりまでを覆うように出来ている。その性能は以前のようなチャージからの大放射ではなく、手のひらを握って発生させた爆破を伝導して肘の後ろのタンクで爆発を起こし、パンチを加速すること。呼人と殴り合う気満々だろうと思えるようなスタイルだった。ただ使う相手が鎌切に対する一撃のみという惜しさだった。普通は爆破で仕留められるのだ。

戻ってきた爆豪は他のクラスメイトに何か言い返した後、呼人の方を睨んでくる。取り敢えずグーサインを出しておく、彼ははずんと足音荒く近づいてきた。

「てめー今度付き合えや」

「1対1な。申請しとく」

「察し良すぎるわクソが!!」

「お前が俺に話しかけるのなんてそれぐらいだろうに」

「うるせえ!!」

呼人と爆豪の仲は、まだまだのようである。

そして最終戦。

「緑谷」

「作戦会議だよね百竜君」

「いや、それもあるが。お前の個性の事だ」

移動し始める前に呼人がそう伝えたと、緑谷の表情が硬くなる。

「暴走するようなら俺が殴ってでも止める」

「……うん。わかってる。その時は思い切りとめて欲しい」

うなずく緑谷を確認したあと、呼人は相澤のところに行った。

「相澤先生」

「なんだ」

「物間が俺の個性をコピーしたときは警戒しておいてください。理性を失う可能性があります」

「……わかった。だがその判断はこっちでは難しい。できるだけお前が対処しろ」

「わかりました」

相澤にペコリと頭を下げた後、呼人はチームメイトの後を追う。物間に対して注意を促したのは、呼人のが正確には個性ではないと判明したからだ。だが同時に、確かに個性に近いエネルギーを呼人は持つていて。だから一体どこまでがコピーされるのか、そもそもコピーされるのが怪しいのである。あるいは、モンスターになることだけをコピーしたとき、物間がのまれるのではないだろうか。それが、呼人の懸念だった。

後から追いついた呼人には、緑谷から指示が伝えられる。こういうとき呼人は率先して立案をしない。

「百竜君は一人で突っ込んで目立って欲しいんだ」

「誰かを狙うんじゃないかって、か？」

「うん。百竜君が荒らしたところを、僕たちが心操くんから捕まえる。百竜君なら、見えるよね？」

他のチームメイトが何をしているか。つまり、緑谷が他のチームメイトを動かして捕縛を狙うので、呼人は遊撃をしてほしいという指示だ。

「……わかった」

「ありがとう」

「危なくなったら助けてよ百竜！」

「まず助けられる必要がないようにな」

「それはもちろん！」

調子良く言う芦戸に呼人は短く返す。

（荒らす……全員仕留める。いやそれは違うな。目立つ……そうか、空だ）

方針は決まった。

そして作戦開始直後。呼人は一人チームメイトからはなれ、近くのタンクを蹴って高く跳び上がった。そして空中でトピカガチのフルビーストになると同時に皮膜を広げてしばらく滞空。それを繰り返して徐々に距離をつめていく。

そして遊んでいるのだと思っているとところに滞空ではなく滑空を混ぜて、心操に襲いかかる。ただ丸見えな上空からの奇襲だけあって敵全員に丸見えであった。

「最初に来るのは君だったんだね！ 百竜君！ 本当に化け物だね君は！」

それに対して、呼人は空中で喉の形を変形させると、物間に対して「話しかける」。

「『後ろだ物間』！」

その声にビクリと、心操の肩が跳ね上がる。今の声は、素の自分の声だった。咄嗟に後ろを振り返らなかつた物間は褒められても良いだろう。

物間が個性を取りに来ているのを見て取った呼人は心操に襲いかかるのを避けて、トピカガチのフルビーストのまま建物の隙間にすりと潜り込む。狭く見える隙間も、樹上を縦横無尽に駆け回るトピカガチにとっては大したものではない。そして後方のタ

ンクを大木に見立てた動きでその側面を登ると、牙をむき出しにして咆哮をあげた。
『ハアギアアアルル!!』

と、その瞬間。呼人はゾクリとしたものを感じ取りハイビーストに戻ると、タンクを蹴つて駆け出した。身構える心操達を飛び越えてその先。

黒い霧のような何かを吹出している緑谷。昨晚感じたエネルギーのうち一つが、強力な反応になっていた。

「緑谷!!」

「うぐう!! とま、らない……!」

暴走の止まる様子の無い緑谷に飛びかかると、彼の手から溢れた黒い帯のような鞭のようなものがハイビースト状態の呼人に直撃し激しく吹き飛ばす。

(ノーモーションか!)

そして飛ばされた先が悪かった。物間の真横だったのだ。物間にとつては、いきなり仲間割れを起こしたかと思えばその一人が吹き飛ばされてきただけである。

だから、個性を奪おうと動くのも当然のことだった。

そして、呼人の腕に触れる。

物間の意識が、途絶えた。

「何が起きてんのこれ……」

突如、緑谷がこれまで見たことのない力を使い始めた。それを見ていたクラスメイトや教師を、更なる驚愕の事態が襲う。

突然、物間が巨大な何かに変身し、それに耐え切れず足元の建物が崩壊したのだ。そして、その何かは緑に染まったりゼントのような角を振りかざして巨大な咆哮を上げる。それに吹き飛ばされて、更に周囲の建物や崩れかけの建物の倒壊が進む。

「なあ、今物間百竜に触ったよな？」

「緑谷の方見てて見えなかったんだけど……」

「むう……あれは……」

ただ一人、生徒の中でそれを見たことのある障子が顔色が珍しく青くなる。もし呼人の書いた絵が正しければ、あれは一体を更地に変えてしまうほどの。

(なんとかしろ、百竜。お前の個性だろう)

「よりによってお前かブラキ……!」

崩落する建物から伸ばした舌で心操を拾い上げながら呼人は、足元で咆哮を上げたモンスターを見つめる。

全長15メートル。全高5メートル50センチ。大型のモンスター達の中では小柄に思える数値だが、体を覆う筋肉と黒曜石の鎧によつてとても小柄には見えない、黒色の暴君。その豪腕と特徴的な角は、明るい緑に染まっている。

「麗日! 緑谷頼む!」

「え!? うん! わかった!」

後方の麗日に叫ぶと、心操を近くの安全そうな建物の上に降ろした後呼人は元物間現ブラキディオスと相対する。

と。向き直った瞬間には、呼人に向かってジャンピング土下座をぶちかましてくる砕竜の姿が視界に入る。

「飛んでるな!」

そのジャンピング土下座に対して、後ろに跳ね返すわけには行かない。そつちにはB組の残りの面子が。そして呼人の後ろには麗日や緑谷、心操がいる。

だから呼人が選んだ選択肢は、火竜の姿に変身しての変速サマーソルト。斜めに当てることで誰もいない方向へと撃ち落とす。

巨体が地面に倒れるだけで地面が大きくたわみ、周囲の建物を根こそぎえぐつていく。モンスター達の筋肉や甲殻の密度は現実の常識を超えるもので、見た目の体積がかいののに重さは更に重くなる。結果、倒れるだけでこんなことになるのだ。エネルギーに満ちていたモンスター達の世界とは大違いである。

倒れても尚起き上がるとうとするブラキディオスの顔面に大量の睡眠ガスを吹き付け、その後蛇竜に変身してその体を締め上げる。そしてその尻尾の根元に食らいついた。

睡眠、そして牙から出る麻痺毒による麻痺の2段拘束。完全に理性を失っている物間を止めておくにはそれしかない。どうせ5分しか続かない。

と。麻痺に抵抗し続ける物間の体と、それに絡みついていた呼人の体が人間の姿へと一瞬で戻る。

「大丈夫か」

「俺は。物間がどうなってるか……」

「取り敢えず医務室へ運ぶ」

事前に伝えていたことで、イレイザー・ヘッドが消してくれたのだ。彼の個性、そして呼人の個性を。実際あのジャンピング土下座に巻き込まれていた場合、麗日、緑谷、心操は高い確率で死んでいる。それをためらいなくぶっ放したことが、普段は冷静な物間が冷静さを失っていた事を意味する。

「百竜、お前も来い。詳細の説明がいる」
「わかりました」

相澤に連れられるままに、呼人と、救助ロボットに運ばれた物間、それに相澤が本来は試合を見なければいけない立場なので代わりとなるミッドナイトは保健室に運ばれる。後には、呆然としたクラスメイトたちと対戦相手。それに暴走から復帰した緑谷が残されていた。

第74話 竜の息吹く世界

物間の治療に付き添っていた呼人が許可を得て戻ると、ちょうど模擬戦の続き、が行われていた。それぞれのチームから物間、呼人を抜いて。数の上では平等だが、呼人が到着した途端に決着がついたのほとんど見ることが出来なかったが、取り敢えず緑谷の暴走は収まっていたようである。

戻ってきた呼人が若干警戒の目というか、得体の知れない物を見る目で見られてしまうのは、仕方が無いことなのだろう。それは呼人もわかっていたので、心操の評価を教師陣が話し合ったりしている間も端で1人で立っていた。

すべての講評が終わった後、着替えに戻り始めた所でようやく声をかけられた。

「百竜、その、さっきの……」

「ん、ああ。夜に全員にまとめて説明するよ。B組の人にも。他のみんなにもそう言うっておいてくれるか」

「そっか。とにかくお疲れ様」

「……見事に、止めてみせたものだな」

尾白が気を使う様子でいるのに対して、モンスター達のイラストをずっと眺めていた

障子はそれよりは幾分ナチュラルと言うか、落ち着いた様子を見せている。まあ、あれを見ていれば、まだ砕竜でまじだったのかもしれない、とも思えるのだろう。それでも、呼人が止めなければ運動場々ぐらいは更地になっていてもおかしくはなかったのだが。「止めるなら状態異常、ってな。相澤先生には先に言っておいたから、時間を稼げば勝ちだと思ってた」

「……物間が暴走するところまで呼んでいたのか」

「読むも何も俺が子供の頃に暴走したのはあれになつてだからな。それに……モンスターになったときってやつぱり思考の感じが違うんだよ。人間とは脳みそが違うからな。俺は感覚で出来るけど。もともと理性のないモンスターにいきなりなれば飲み込まれるのも当然だ」

「そうか……伝えるというの、口頭で説明するのか？」

「いや、もつと良い方法があるんだ。まあそれも夜に、な」

そして夜。夕食を食べ終えた後もクラスメイトたちは全員共有スペースに残っていた。いつもなら談笑する時間であり、今日は対抗模擬戦があったこともあってB組の人

間も数名訪れていていつもより騒がしい、はずなのだが、今日は少し静かな、緊張した様子が感じられる。

そこで呼人は、口を開いた。

「ちよつと聞いてくれ」

全員が話をやめて呼人の方を見るのに合わせて説明を行う。

「俺の個性についてちゃんと説明したい。だから興味がある人は俺の言うとおりにしてほしい。それと時間が多分1時間はかかる」

「俺達も居てもいいかな？」

B組の骨抜が手を上げて言うのに呼人はうなずく。

「ああ。それと他のB組の人も興味があるなら。来たい人が来次第始めたいと思う」

それを聞いた骨抜と他のB組の生徒が一旦A組の寮から出ていく。呼人はその足を、他の女子と談笑していた八百万の方に向けた。

「八百万」

「なんでしよう百竜さん」

「こういう……手と手を握ったときに外れないように止めるバンドみたいなの作れないか？ みんなで手を繋いで円を作ってもらえば必要があるんだが、力を抜いても離れないようにしたい」

「まあ、そういうことでしたらこういうのはどうでしょうか。百竜さんとどなたか……」
「ん」

耳郎が隣の芦戸の手を取り、それを机越しに八百万の前に差し出す。それを八百万が手から作つたバンドで縛つた。

「こんな感じでどうでしょうか」

「良い。ありがとう。悪いんだが、それを全員が輪になれるぐらいお願いできるか？」

「お安いご用ですわ」

「助かる」

以前アーニヤに使つたときとは違って、今回は呼人も中に入る必要があるし何よりわっかにならなければ全員を一度に誘えない。だからその間手が離れないようにする必要があるので。

やがてB組のメンバーも来て、呼人の指示のままに手をつないで輪を作っていく。共有スペースは非常に広く、40人が手を繋いでも問題なく接続することが出来た。

「じゃあ、全員手に集中してくれ。他の事を考えないように」

全員のエネルギーを、外部から触れられる状態に、手を介した接触で呼人の中に招き入れる。そうして、全員が呼人の中へと入り込んだ。

「爆豪、おい爆豪起きろって！」

クラスメイトの誰かが爆豪を起こそうとしている。他にも数名、ようやく起きたばかりのクラスメイトがいるようだ。

今八百万がいるのは、おそらく森の中の開けたスペース。ただ、ここまで巨大な森なんて聞いたことがない。

「ねえヤオモモ、これなんだと思う？」

「おそらく……百竜さんの個性、でしょうか。ですが……」

「うん、こんな個性じゃないよねあれ。それにうちら、なんかコスチュームだし」

八百万らが戸惑っている間に全員が目をさます。と、耳郎の鋭い聴覚が、上から近づいてくる何かを捉えた。見上げるとそこはただ木が覆っているだけに見えるが、その向こうに何かが見える。

「全員上警戒！」

直後。木の枝をおるバキバキという音が大きくなると同時に、天井となっていた枝葉を突き破って巨大なモンスターが出現した。

「これ百竜の！」

赤い甲殻と2枚の巨大な翼、それに長い尻尾を持つ空の王者。リオレウスである。リオレウスが空中で一吠えすると、そのうるささに数名が思わず耳を塞ぐ。

「避けて！」

「避ける！」

「ぼうつとすんな！」

それを見ていた耳郎は思わず叫んだ。上空から先程のモンスターが勢いよく降下し、クラスメイトの集団の中心めがけて飛び降りてくる。クラスメイトが回避し、あるいは慌てて隣ど茫然としていた仲間を引きずってその狙う先から避難させたので、モンスターは一旦攻撃を透かして上方に再び跳び上がる。

と。そこに横から飛びかかる影があった。そのまま皆からは見えない位置にもつれるように落ちる。

「みんなこつち！ 一旦逃げるよ！」

「俺が殿を務める！ 早く！」

拳藤が率先して指示を出し、後方の、道らしきものが続いている場所を指し示す。拳藤がそつちに率先して走り、飯田が最高峰に残って逃げようとしていない爆豪らを引きずって逃がす。

しばらく森の中の道らしきところを走った先で、ようやく再び開けた場所に到着し

た。

「全員いるな!？」

「飯田、点呼しとこう」

「ああ、そうだ——む?」

逃げ遅れがないかと確認しようとした矢先。足元がわずかに揺れ始める。微弱な地震で言えば震度4は無いような些細な振動。

「地震?」

「くそ、まじで何が起きてんだよ……」

その中で、パワーローダーと対戦した経験を持つ尾白、飯田がはつと表情を固める。

「逃げろ!!」

え、とクラスメイトらが2人の方を向いた瞬間。先頭にいた拳藤、小森らの足元を突き上げるように巨大な何かが地中から飛び出してくる。それに弾き飛ばされた2人を見て、瀬呂と緑谷が動いた。それぞれテープと黒い鞭を動かし、2人の体を引き寄せる。

一方地面を突き破って飛び出してきた何かは、土煙の中からゆっくりと姿を表した。

巨大な一對のねじれた双角。口元はさながら悪魔のような歪さで。体表を覆うのは土気色の甲殻。尻尾の先端は巨大なハンマーのようになっており、地面にそれを叩きつけている。

双角猛る砂漠の暴君。名を、ディアブロスという破壊者である。

そして2度ほど地面を足で引つ掻いた後、その角を前面に突き出す。

「やべえ来るぞー！」

「轟氷！」

言われなくても！、と轟が氷をはろうとした直後、後方から巻き起こった風が生徒達に吹き付ける。追ってきた先程の赤い竜が、双角を持ったモンスターと正対していた。

互いに大声で咆哮を上げる二匹に皆が何が起こるのかを察した瞬間。

「電気……？？」

「ポツリと漏らした上鳴の音が異様に響いた。その手元には一匹の青く光る虫。同じものがあたりの空中を漂っている。」

ズシン、ズシン、と。大きなものが歩くかすかな音が聞こえてきたのはそのときだった。音の方に目を向ければ、先程逃げてきた道を一体のモンスターが歩いていくる。

そのモンスターはちらりと生徒らの方に視線を向けると、すぐに残る2体の方を向き直る。

青と緑の入り混じった甲殻に、狼をより陸戦よりにした体躯。背中には白い毛が生えており、そのあたりが僅かに帯電している。

名をジンオウガという無双の狩人である。

『ア、オ、ーン!!』

という咆哮とともに、その周辺に小規模な落雷が発生する。そのうちの1つを

上鳴は自分が引きつけてクラスメイトに落ちないようにした。

「まじかこの電力……!」

「上鳴!」

「だいいじょーぶ!」

そして2体と1体が相対する。3体がそれぞれに、咆哮を上げた。

気がつけば、いつの間にか目の前から3体のモンスターはいなくなっていて。立っているのは、甲板、らしきどこか?

「なん、だったんださっきの……」

「上鳴、大丈夫?」

クラスメイト達が声をかけてくれるが、上鳴は先程の感覚を思い起こしていた。たった1つの放電が、まるで落雷に匹敵するかのような規模。とても自分では追いつかない

ような出力だ。

「みんないるか！ 点呼取ろう！」

「落ち着いて！ 一旦全員いるか確認！ ここは船の上だから！」

あたりを見渡せば、さっきいた森とは全く違う海の上において。その先には海原と島が見える。

「百竜がいねえぞ！」

「うむ……そういうことか」

何かわかったという様子の障子に、周りのクラスメイトが詰め寄る。

「何が『そういうこと』だよ障子！ なんで命狙われてんにそんな落ち着いてんだよ！」

「……これを俺達に見せているのは百竜だろう」

「根拠は!? 何をもってそう言えるんだよ！」

「落ち着いて峰田ちゃん。障子ちゃん、私も聞きたいわ」

全員が注目する中、障子は話し始める。

「百竜の部屋で、あいつの書いた絵をよく見せてもらっていた。あいつが変身できるモンスターだと言っていた。その中に、さっきのモンスター達も含まれていた。それとおそらく……」

「おそろく？」

「この船は……」

障子がそう言った瞬間、船が大きく揺れた。連続的に発生する振動。誰でもわかる。障子が言えなかったその先。どうせ

『沈む』

なのだろう、と。

「全員近くのものに捕まって！」

「うちが浮かすよ困ってる人！」

「麗日俺が固定するぜ！」

傾いていく船の中で、海に落ちないようにと全員が体勢を整える中。船の下側になりつつある側から1体のモンスターが顔を出す。

トカゲのような蛇のような、そのどちらとも違う巨大な体躯。体表を美しい蒼色の甲殻が多い、背中には赤い突起が生えている。

大海の王者とも呼ばれる海竜、ラギアクルスだ。

巨大な船であったがラギアクルスが乗り上げたことで一気に沈んでいく。

「麗日！ 俺を浮かせてくれ！ 空中に足場を作る！」

円場のお願いに、麗日は即座に反応してそつちに飛びつき、彼を浮かせた。そして円場が空中に足場を作っていき、それに引き上げる事の出来る瀬呂と緑谷がまず跳び乗る。そして次々とクラスメイト達を引き上げた。

船が沈没するまでそれなりの時間があったので、なんとか全員の避難を終えることが出来た。その後上から下を見下ろすと、未だに水面ではラギアクルスが、船に体当たりをして破壊している光景が目に入る。

そして再び、全員の視界が反転した。

再び目を開けるとそこは灼熱の太陽照りつける砂漠の一角の岩場のような場所で。3度目ともなればなんとなく驚きも薄くなる。

「先程障子さんがおっしゃっていた通りかも知れせんわね」

「だね。さっきのもそうだし、危ないように見えるけどこつちに直接危害を加えてこないようになつてる」

「でもさつきすげえ危なかったぞ！ 安全とは言えないんじゃねえのか！」

「それはそうだけど、なんでこんなことになつてるのかって話」

拳藤の説明に、生徒の大半は首を傾げることしか出来ない。そう言われればそうかも知れない、程度の。根拠も無い推測でしかない。誰でもわかる。あんあ質量に体当たりでもされればひとたまりもないことぐらい。だから、身の安全は自分たちで守らないといけないのだ。

と。議論が白熱しそうになったところで足元を再び僅かな振動が襲う。

そちらを見下ろすと見えるのは、地面に起こる土煙と、その側に立つ人影。

「ッ！ おームグッ!?!」

「敵か味方かもわかってないんだぞ！」

その人影に声をかけようとした切島の口を瀬呂が慌ててテープで塞ぐ。そうこうしているうちに人影は彼らの立っている岩の下まで近づいてくる。よく見ると他にも何人かいるようで、何か大きな樽のような物を何箇所かしかけていた。

「あっち、見て！」

耳郎が指差す先には、自分たちと同じぐらいの高さの高台に一人の人間が立って弓を構えている。

と、また別の場所で破壊音。

「あいつさっきの！」

先程地面を突き破って現れた双角を持つモンスターである。サボテンを静かに食む

それを見守っていると、弓を構えた人間が巨大な弓からこれまた矢とは思いたくないような太い棒を放つ。

飛翔したそれはモンスター側の側に置いてあつた樽にあたり、大爆発を引き起こした。

「なんでわざわざ攻撃するんだよ！」

「おいあんた危ねえぞ！」

「待つて誰か追われてる！」

切島の声に、弓を持った人間は反応しない。ただ、次の樽に狙いを定めて放ち、別の人間を追っていたモンスターの頭部付近で爆発を起こす。その大きな角が、爆発によってへし折れた。

「おおっ！」

その光景に生徒達が驚きの声を上げる中、事態は加速する。

更に突進しようとしていた双角のモンスターの横つ面にまた別のモンスターが砂漠から飛び出して体当たりを仕掛けたのだ。そしてそれにそらされた突進が、切島達の隣、弓を放った人間が立っていた足場を崩す。

「危ない！」

咄嗟に飛び出した緑谷がその人間を空中でキャッチし、そのまま一緒に地面を転がる。思っていた以上の弓や装備の重さに、バランスが崩れていた。

その間に2人を狙う後から現れたモンスターに対して巨大な盾だけを背負った一人が何かを投げつけると、モンスターが地中から苦しそうに飛び出し、それを巨大な盾とランスを持った人間が盾で弾き飛ばす。

そして2本の剣を持った人間が、双角の一本を折られたモンスターに果敢に飛びかかっていった。

第75話 竜の力

何度、場所が変わったかは思い出せない。

ただ、強大な物を見せつけられたとだけ。

脅威と感じていた最初の方はまだ優しい方で、そのうちマグマすらそこにいるだけで凍らせるような美しい竜や、あたりの森を一瞬で焼き払ってしまうようなモンスターもいた。

そして気がつけば、石造りの玉座のある広間のような場所に来ていた。

「んだん」

「玉座、だよねこれって」

次は何が飛び出してくるのかと身構えていると、後ろから声が響く。

『楽しんでもらえたかな』

勢いよく振り返ると、杖をついた初老の男性が立っていた。その髭は長く、地に突き
そんな程である。

「失礼ながらあなたはどなたでしょうか！」

『わたしもモンスターの一人じゃよ。呼人から説明役を任されての。どうせならかつこよ

く見せてついでに脅かしたいと、皆が言い出しよつてな』

「皆、つて?」

『ぬんっ』

トンツ、とその男性が地面に杖を突き立てると、壁と天井が消滅しより広い場所へと変わる。そしてその周囲を、これまで彼らを襲ったモンスター達が取り囲んでいた。

「これ……!」

「改めて見るとすさまじい威圧感ですわね……」

『わしらは。今君たちが見てきたようにただ自然に生きていた生物じゃ。ここじゃない世界でな』

「ここじゃない世界、とは?」

『さあの。わしらも個性の無い別の世界としか知らんでな。して、呼人の中にはわしら、その世界のモンスター達が巢食つとる。生きてた頃はただの動物だったんじゃが、何故か全員人間の姿と思考回路を得てな。ほれ』

老人が周囲を示すと、今までモンスターがひしめていた場所に多数の人間が立っている。全員個性的な、呼人のコスチュームと同じ雰囲気を感じる服を纏っている。

『それらすべての力を呼人は扱えるし、あるいはわしらが表にでて体を使うことも出来る』

「具体的には、どんな力なんですかね？　ほら、今日物間が変身して暴れたのとか」

『それがのう、数が多くてじゃな。ざつと万を超えるんじやよ。だからのう、全部を教えるのはそもそも無理な話になるんじや。そこでじゃが』

「喧嘩しようぜ！　思い切り！」

『やめんかラー』

一人のモンスターだった男が歩み出てくる。

「どうせそーいう話だろーが！」

『はあ……まあというわけじゃ。勝手にこいつらが言い出しただけじゃから無視してくれている。それに、この空間では死ぬことがないでな。加減もせん。もつともして欲しければするが』

「死ぬことが無いから死ぬぐらい痛めつけられる……」

『そういうことじゃ。一応それぞれの個性に似た力を持つモンスターもおるでな。勉強になると言えば勉強になるんじやが……どうするな』

そんな事を言われて、黙っていない男が少なくとも一人いる。

「良いぜ、速攻で叩きのめしてやるよ」

「お前が相手してくれんのかバクゴー！」

「なんで名前知つとんだクソが」

「俺はラーだ。まあ楽しませてくれや」

『それじゃあ、場所を変えようか』

再度杖の音がなると、再び場所が変わる。円形の、広い闘技場のような場所。その観客席に生徒らやモンスター達が座り、爆豪とラーだけが闘技場の中に取り残された。

『それでは、始め！』

案内役の男性の合図と共に、爆豪が飛び出す。それを皆固唾を飲んで見守った。と。試合中だと言うのに案内役の男性がまた話始める。

『わしらは、呼人が出来るのと同じことが出来る。ただしそれぞれモンスター1体分じゃがな。呼人はそれを組み合わせる。じゃが』

そう男は続ける。

『あのラー。未だ呼人相手に負け無しじゃ』

その言葉と同時に。一撃で吹き飛ばされた爆豪が客席に着弾した。

「おい爆豪?！」

「まじかよ……!！」

決着は一瞬。一撃で爆豪が弾き飛ばされた。

「おい! 次は誰が相手だ!」

闘技場から叫ぶラーのその言葉に誰も答えられない。性格は悪くて社交性も最低と

も言える爆豪だが、それでも実力は誰もが認めていたし、今日もそれを確かに発揮した。吹き飛ばされた爆豪はすぐに飛び出してくるが、その場にうずくまってしまふ。現実で受けていければ即死の威力だ。

『ブラキ、主が行つて来いや』

「……良いだろう」

案内役の男性がそう言うと、その近くに座つていた別の男が闘技場に飛び降りていく。最初のラーと呼ばれた男が毛皮のような物をわずかに纏つて上半身を露出してゐるのに対して、こちらは黒い硬質な服を着ているように見える。

『ブラキはあれじゃ、今日は主らの仲間が変身して暴れたやつじやな』

「あの黒いやつ……?」

「物間が変身してた……」

「僕は全然覚えてないんだけどね」

ざわつく生徒達に、男性は大事な点を伝える。

『わしらももとはモンスターじゃから変身すると思考回路も人間のそれとは変わるでな。慣れてないと理性を失つて本能で動いてしまふんじや。故にあれば、暴走というよりは当然ではあるんじやよ』

本能に従つたモンスター達に。番と、子を守る以外の発想はない。それ以外はすべて

破壊しても良いものでしか無いのだ。

そうこうしているうちに、飛び降りていったブラキと、待ち受けていたラーが激突する。離れた客席まで響く硬質な音。ただ人間形態で殴り合っているだけなのに、凄まじい音がする。

ラーの一撃がブラキを吹き飛ばし、更に吹き飛んだ先に一瞬で詰めて追撃する。それに対してブラキは右腕から放った爆発でその勢いを殺すと、爆発で加速させた左拳を叩き込んだ。

「かつちゃんの!？」

「あれ爆豪のじゃねえか!？」

『ほーほっほっ。あれはブラキの力だな。あやつは爆発する微生物を飼つとるんじやよ。それを体のあちこちに張り巡らして自由に爆発を起こしとるんじや』

「ラーつつう人の方は、どういいう個性なんすか?」

切島の問いかけに、案内役の男性は首を振る。

『個性ではない。わしらの世界では普通のことじや。動物が爪を持つように、サソリが毒を持つように。そういう生態じや。して、ラーじやが』

うーん、とそこで珍しく案内役の男性が言いよどむ。闘気化とか、気光とか名前はあるのだが、厳密になんなのかと言われるとそういうエネルギーだとしてか言えないの

だ。

『エネルギーを纏って身体能力の強化、それに体表の硬質化、エネルギーを放出しての攻撃じやな。まあ後は見りやあええわ』

適当に投げ出す案内役の男性。なにセラーのそれは他の属性エネルギーとも逸脱した特殊なもので、竜人たちですら解析出来なかつたものなのだ。

闘技場では、周囲を破壊して爆炎を巻き上げながらラーとブラキが暴れまわっている。2人の状態はいわゆるハイビースト。人間と成体の間の状態だ。

以前の、ただ本能に任せて生きていたときのようにただぶつ放すだけの戦い方ではない。当てるために、そして有利な位置に引き込むために。高速で2体は駆け引きをしながら殴り合う。

『主ら、もうそれぐらいで良いじゃろうて』

案内役の話を聞かず、既に自分たちだけの世界に入り込んでしまっている2体は殴り合いを続ける。もともと気性の荒いモンスターだった2人は、人間になってもその気性の荒さを引き継いでいた。

と。3度無視された案内役が静かに立ち上がり、闘技場の中央付近に向かって高く高くジャンプする。

「あ、おいー」

思わず叫んだのは誰だっただろうか。

空中に飛び出した彼は。2体のモンスター達が戦っている上空で、本来の姿へと戻った。

「壁……」

「ではないよ。熔山龍ゾラ・マグダラオス。全長200メートル、全高100メートル。超大型古龍に分類されるモンスターだ。まあ僕らのスケールからすれば動く山だけだね」

「誰だ？」

「え、誰？」

突然出現した巨大な壁を見上げる生徒たちの後ろに立っていたのは、白衣のようなものを纏った一人の若い男である。奇妙なことに丸眼鏡をかけていた。

「おっと失礼。僕はシルフト。竜人と呼ばれる彼らの世界の人間の一種さ。彼は普段は温厚なんだけど、怒らせると恐いからね。それと、いつでもモンスター達の教えを請いたければ来ると良いよ。みんな結構暇してるから相手してくれる。それじゃあ、一旦お

別れの時間だ」

え、と困惑の声を漏らす生徒達に頓着せず、シルフトは指を鳴らす。その合図を受けて、ずっと外の体に残って監視をしていた呼人が手を離れた。

ムクリ、ムクリと。倒れていた、というより精神だけの世界に行っていたクラスメイ卜達が目を覚ます。彼らを送り込んだ呼人だが紹介はモンスター達に任せて、自分だけは外の現実に残って監視をしていたのだ。

「どうだった？」

「……凄かった」

「そりやありがたい」

クラスメイ卜達にとっては驚愕の時間になっただろうが、怪獣やモンスターが大好きな障子にとっては歓喜の時間になったのだろう。少しばかり目元が紅潮して見える。

「今のが俺の個性の全容だ。それに今の紹介で紹介できてない、モンスター達の世界でも触れるのがタブーとされてた奴らもいる。こういう力だから秘密にしてたし、解放もしてなかった」

「うん……確かにこれだったら、制御する、つてことになるよね。僕とおんなじだ」

自身も自傷する、そして周囲に膨大な破壊を生み出す可能性がある緑谷が納得したようにうなずく。

「まあもしモンスター達と手合わせしたいとかただ見たいとかでもあつたら言ってくれ。一応みんなの個性に似たモンスターもそれぞれいたりするから、それなりに良い刺激になったりもすると思う」

じゃあそういうことで、と一足先に呼人は自室に戻った。なんとというか、ああいう空気の場にずっといるのは居心地が良くない。それに彼らにも、整理する時間が必要だろう。その過程で呼人がいると言いつらいこともある。

と思ったのだが。

「……来たぞ」

「お前ら早すぎるだろ」

「む……すまない。気が急いた」

「俺はあの電気の虫が気になるのよ」

「俺は組手の相手を頼めれば。あの空間でも経験値にはなるようだったし、呼人より強い人がいるなら嬉しいしね」

呼人が部屋に戻ってすぐに、上鳴、尾白、障子の3人が呼人の部屋を訪問してきた。

「他の人は？」

「驚きが強いみたいだよ。でも百竜が色々詳しいのはそういうことか、って感じだったよ」

「そうか。じゃあまあ、取り敢えずお前らだけでも来るか」

先ほどと同じように、4人で円を作って輪っかになる。

「じゃあ行くぞ。手に集中しろ」

再び、呼人の中の、モンスター達に出会うために呼人たちは旅立った。

第76話 あくまで訓練

「今回は呼人も来るんだ」

「まあな。大体一時間も外で見張ってるのは相当暇なんだよ」

今回は尾白達と一緒に呼人も精神世界に入っている。

「なあ百竜、さつき見せられたときにも思ったんだけど、これって全部その別の世界のことなのか？」

「そうだな。例えば……ここはあまり良くないな。ちよつと場所を変えるか」

呼人がそう言った直後。森の中に立っていた4人は、背丈の低い雑草が生え、わずかに水が流れる場所に転移する。そして遠方には、巨大な樹木がそびえ立っていた。

「例えばあつちに見える木。全長数百メートル、そしてあちこちにモンスターや人間が乗っても全く問題ないぐらいの規模だ」

「おお……」

「すげえ……」

「なんか、大自然って感じだ」

3人がそれぞれにあたりを見回している中で、呼人はモンスター達を呼び寄せる。

「尾白は取り敢えずオドガとラーとガルルガ、あとはケチャとワチャと……」
「ラーって、さっきの人？」

尾白がびつくりした表情で尋ねてくるので呼人はそれにうなずく。

「そうだ。つってもさっきは本気を見せつけろって指示してたからな。加減は出来る。……多分」

「今とつても不審な言葉が聞こえたんだけど!？」

「気にするな、ちよつと痛いだけだ」

ちよつと痛いだけ。つまり死ぬぐらい痛くても死にはしない。呼人の痛覚への耐性はこのあたりに由来する。それはもう数え切れないぐらい叩き潰され、焼かれ、氷漬けにされ。ありとあらゆる死に方を経験してきたのだ。

「上鳴は電気系統だよな？」

「おう！」

「じゃあジンオウガとラギアと……ゼクスと、レビディと……ヒメとディオにも来てもらうか」

「待ってそんなにいんの？」

「そりゃあ、世界1つ分のモンスターが勢揃いだからな。数も多くなる」

「まじかよ……」

電気を操るモンスターの数は多いが、それぞれに扱い方は異なる。それもまた、参考になるかもしれない。もっとも、破壊力が高すぎて使えないものの方が多いのかもしれないが。

「まあ頑張れ。で、障子は……」

「俺はどちらかと言うと見たい」

「だよな」

と言っている間に、最初に呼人が呼んだ尾白の相手をしてくれるメンバーが集まってくる。

「また殴り合いの相手か!？」

「んでお前はそんな盛つとんだクソゴリラ! 次は俺の番だろうが!」

特に揉めているのはさつきもいたラー、金獅子ラージャンの人格と、ガルルガ、黒狼鳥イャンガルルガの人格である。ちなみにこのガルルガの口調が爆豪に酷似しているのだ。そのため呼人は彼の荒い口調にも何も感じなかったのである。

「やかましいわ! 早いもんがちだろうが!」

「んだとこら!」

「ねえ待ってなんかあの爆豪みたいなんだけど」

「初めて爆豪見た時はやたらと口調が似てたから懐かしく感じたぞ俺は」

二匹が元気よく揉めている一方で、オドガ、それにケチャとワチャが尾白のところへやってくる。

「尾白、だな」

「えと？」

「オドガだ。オドガロン、と言ったほうがわかりやすいか」

「ああ、普段呼人が変身してる」

「そうだ。いっぺん俺がお前とやってみたかった。よろしく頼む」

「よろしくお願いします」

ペコリと尾白が頭を下げたところで、柔らかいものがその頭を撫でる。頭を上げた尾白は、それを見て思わず目を見開いた。残りの2人の人間から生えた尻尾が、尾白の頭をなでているのだ。

「わっ、尻尾がある！」

「ははっ、オイラ達も尻尾があるんだぜ！」

「尻尾の使い方に關しちや一日の長がある！」

「俺達に任せとけ！」

ケチャワチャとケチャワチャ亜種的人格であるケチャとワチャのコンビは、モンスタ―達の中でも軽いお調子ものである。お調子者と言うかももうまるつきりピエロとい

うか。そんな2人だが、尻尾の扱いに関しては確かに一日の長があり、呼人が尾白と一緒に訓練をするときには呼人に尻尾を使った戦いについて叩き込んだのだ。

「そいじゃあ呼人行つてくるぞ！」

「わかった。帰りたいたいと言ったら連れてこい」

「イエッサー！」

3人に連れられて尾白が離れた場所にある森の方へと移動する。ここは心象世界だけに、モンスター達の記憶にある場所ならどんな場所でも再現することが出来る。その中で再現した森の1つだ。

「私を呼んだのは……この少年か。あの時は済まなかったな、少年」

「あ、えと？」

「私の放電を受け止めただろう？ 上鳴君、確か帯電、放電する個性か」

「あ、そうつす。てことはあの時の……」

「名をジンオウガという。よろしく頼むよ」

一方上鳴の方にも、呼人の呼んだモンスター達が集まっていた。

「障子はこつちに一緒にいるか？ こいつらは電気を使うなら変身することもあるだろうし」

「……そうだな。正直誰から見れば良いか……少し昂ぶっている」

「喜んでもらえて何よりだ」

2人が見ている前で、上鳴がモンスター達にそれぞれ自己紹介されて目を白黒させている。

「あそこの紳士的なのがジンオウガ。その隣の海賊っぽいのがラギアクルス、後ろの和装の女性がナルハタタヒメで、隣の金色と鋼色の光つてるのがレビディオラ、でその後ろの青い鎧みたいなのがディオレックスだ。ああ、ライゼクスも来たな」

最後に空から飛んで一人の男が降りてくる。雷竜ライゼクス。電の反逆者とも呼ばれる反骨精神たくましい男だが、意外と人間になった時の気性は穏やかである。というより彼の気性の荒さは生まれてすぐに放り出されて一人で生きていく中で発生したものであり、縄張りが自由な呼人の中にいるときは比較的穏やかなのだ。あくまでも比較的、だが。火竜種など同じ空を戦場とする相手に関してはその限りではない。

「呼人、変身して見せても良いのだろうか？」
「任せる」

ジンオウガに尋ねられて呼人がそう返すと、彼は即座にその場で巨大な体に成長する。そしてイメージでの対話の応用を使って、頭の中に直接話しかけた。

『先程、少年が持っていた虫だ』

「あ、こいつが……」

上鳴の目の前、そして一緒に説明を受けている障子や尾白の目の前にも光る虫が数匹ずつ飛んでくる。

「やっぱり、こいつ帯電してるっすよね」

紳士然とした話し方のジンオウガに、上鳴も下手な敬語が飛び出している。

『それは雷光虫という。蛍という虫が光るように、発電を行う虫だ。そして私はそれを背中に千匹以上は飼っている』

「千匹!?!」

『その電力を受け取って背中の甲殻、そうだな、ラギア、見せてやってくれるか』

「おうともや」

人の状態のまま待っていたラギアが変身し、その頭を地面に下げる。

『乗んな。持ち上げてやんぜ』

顔を輝かせた障子が確認してくるので呼人はうなずく。もともと見せた以上特に隠し立てするつもりはない。

ラギアの頭の上に乗ると呼人、障子がよじ登ると、ラギアは首を持ち上げてその頭をジンオウガの背中よりも高い位置まで持っていく。

「すげ、背中に帯電してる」

『その甲殻で帯電している。そして帯電量が一定を超えると……』

ジンオウガがそう言うのと、いきなり雷光虫達がざわめき、鳴き声のような物をあげ始める。ギチギチ、という小さな音は集まって大きな音となる。

そして、ジンオウガが天高く咆哮を上げた。

周囲に落雷が発生すると同時にジンオウガの全身の毛が逆立ち、背中の中殻がバカリと開く。その体を青い雷光が覆い、もはや生物とは思えないほど神秘的だ。

「やべえ……！ てかかっこよくね!？」

「ああ。楽しい」

それを見た上鳴と障子は大興奮だ。確かに、モンスター達がパワーアップする時の動きの中ではかなりかっこいい部類に入る。後はデイノやガズラもかっこいい類に入らう。

『私はこの蓄電能力と、そして雷光虫を電気を操る道具にすることで自由に動かしている。例えばこういった具合だ』

そう言ってジンオウガは電撃弾を飛ばす。

「なるほど……！ 電気を虫に集めて飛ばしてんのね」

『そうだ。それに対して……ラギア』

『じゃあ次は俺の説明な』

そう言ってラギアは、帯電状態の解けたジンオウガの背中に呼人達3人を放る。

『俺はジンオウガと違って自分で発電出来る。筋肉の振動で発電するんだ。んでそれを背中に溜める。まあここは一緒だわな。ただ俺はジンオウガと違って雷光虫は持ってねえんで——』

そういつたラギアは、口から遠くにめがけて帯電したなにかの塊を吐き出した。それは地面に落ちた後飛散し、周囲に電撃を拡散させている。

『帯電性の粘液を使ってる。これを玉にして帯電させて吐き出す』

「やっぱ電気をそのまま使うのはあんまりねえんだな」

『その点なら後の3人の方がもつと面白いぜ。なあ？』

そう言つてラギアが後ろを振り返ると、3人のうち一人、ヒメの体が光り始める。そしてそれに合わせて、周囲の地面から飛び出した岩が宙に浮き始めた。

『——』

『ヒメ、やはり古龍の想念は上手く通じん。俺が通訳する』

古龍の特殊な意思伝達手段が伝わらないため、デイオが代わりに説明を行うことになる。先程ゾラが話していたが、あれはかなり頑張つて練習しているのだ。

『ヒメや俺は、電力で磁場を発生させて磁力の反発などで岩を浮かせて足場にする。他にはゼクスであれば磁場で周囲のものを吸い寄せるような攻撃もする。レビデイは逆に磁力を操つて、そこから得られる誘導電流を利用する』

「電気で、磁力を……そっかそんなこともできんのか」

『人の体で容易いことではないだろうが、お前の操る布のような物を利用すれば出来ないことはないだろう』

「なるほど……」

『』

『』

そこで再度ヒメとレビデイが何かを言い、それをデイオが通訳する。

『ただし、巨大な磁場はおそらく機械を狂わせる。使い所には注意しろ、とのお二人の言葉だ』

はー、と上鳴はほうけている様子だ。そこで、遠慮していた障子が手を挙げる。

「1つ良いだろうか」

『なんだ？』

「他の4人も、モンスターになった姿を見せてくれないだろうか」

『』

『……良いだろう、と言っている。では、少し離れていろ』

障子の頼みを聞いたモンスター達が、それぞれ本来の姿へと変身する。金色に輝く体表を持ったナルハタタヒメは周囲の磁場に影響を与えて宙を飛び、ライゼクスは羽ばた

いて対空している。他の2体も同様に変身していた。

だが、直後に離れた場所でジンオウガの背中に乗っていた上鳴の体から放電が始まる。それに慌てた上鳴は止めようとするが、出来ない様子だ。

「え？ あれ、なんで、とまんねえ！」

「おーいヒメとレビデイは一旦人型に戻って」

『やはりか。ヒメ、レビデイ、駄目のようだ』

それを見ていたデイオが2人に伝えると、その2人だけ変身を解除した。同時に、上鳴の体から発生していた電気が止まる。

怖がる上鳴に、呼人は事情を説明する。

「モンスター達にも2種類いる。古龍、古の龍とそれ以外。で、この古龍が操るエネルギーは、個性を発生させてるエネルギーと同じなんだ」

「個性を発生させてるエネルギー、ってどゆこと？」

「個性因子のことか？」

「まあとにかく個性に近いエネルギーなんだ。そして古龍はその場にいるだけでそのエネルギーを周囲に放出し続けている。さつきもヒメとレビデイが変身したときに周囲に岩が浮いていたが、あれは2人が意図したものじゃなくて自然に発生したものだ」

「それが、なんか今のと関係あんの？」

「つまり、同じ種類、電気に干渉するタイプのエネルギーを受けた上鳴の個性が、強制的に活性化されて制御不能になった、ということだ」

呼人の説明に上鳴と障子は驚く。個性を強制的に引き出すという個性すら存在は非常に珍しく。それこそ個性を消す相澤の個性と同じぐらい希少なものののだが。

そうではなく、個性に力づくで干渉して制御不能にしてしまう、と呼人は言っているのだ。

「やべえな……」

「ああやばい。そもそもさつきも見せられたと思うが、古龍というのは存在そのものが災害なんだ。寒冷化、砂漠化、嵐、地震、その他色々。だからその力は俺も制御は出来るが使わないようにしてる」

まあ、俺の精神世界の中ならいくらでも荒らしていいから、見たかったら言ってくれ、とこともなげに言う呼人に、障子達は先程とは別の意味で息を飲んだ。

随分遠いところをみすえていると思っていた。だが呼人には、一番身近だったのだ。身近に、自分の中にそんな強力な存在がいて。だから、あそこまで強さに執着出来たのである。それを、ようやく実感として理解した。

しばらく上鳴と電気を利用するモンスター達がその利用法について話したり実践したりして。そろそろ寝るべき時間が近づいたので呼人はモンスター達に軽く声をかけた後現実に戻り、先に手を離す。

それによつて接続が解除され、上鳴、障子、尾白らも現実の世界に戻ってきた。

「あ……そうか、もうおしまいか」

「お疲れ尾白。そつちはどうだったのよ」

「うーん」

そう言った尾白は照れくさそうに頭をかく。

「ボコボコにされた、かな」

「尾白が手も足も出ない、か」

「すげえな百竜の中のモンスター達って」

モンスター達に確認すれば、ラーやガルルガが組手でもんだ後、尻尾を使った機動力を活用して森の中を走り回りながらケチャとワチャ、それにオドガが遊んだようだ。

「体術じゃあ俺も勝てないからな。そんなもんだ」

「うん、でもいい経験になったよ。それに体も怪我しなですむから無茶が出来るしね。またお願いしても良い？」

「良いぞ」

モンスター達も、外の人間と関わるのであれば嫌だとは言わない。言つても彼らは暇なのだ。

一方の上鳴も、完全に新しい事を開発したわけではないが発想は浮かんだようだ。

「上鳴の方は？」

「凄かった。めっちゃかつこよかった」

ただその感想が一番に来てしまうのはやはり上鳴なのだと言った感じだ。

「俺も見てみたかったよ。こっちはモンスター達は皆変身してくれなかったから」

「なあ、百竜！ やっぱり全員見せて欲しんだけど！ あんなかつこいいのが他にもいるんだろー！」

「まあいるが……時間はかかるからな。訓練がおろそかにならないようにしろよ」

「それはもちろん！」

ともあれ、取り敢えず呼人の中のモンスター達について受け入れてくれる相手もある。それが呼人には嬉しかった。たとえあと少ししか共に入れない仲間だとしても。

第77話 組織

『なるほど。だから冬季はずつと外に出れると』

「ああ。また詳しい事は会ってからだ」

『オーライ。こつちも……まああんまりよろしくねえ報告が1つ2つ3つ』

「わかった。じゃあな」

ポチリと。電話を切って呼人は室内に戻る。今日は12月24日。日本では、というよりは世界の割と広い場所においては『クリスマス』というイベントごとをする日だったらしく皆でパーティーもしたがそれももう終わり。共有スペースには数名のみが残るようになっている。

「百竜」

キツチンで水を飲んでいると、ちょうど通りかかった轟が呼人に声をかけてきた。

「なんだ？」

「お前、インターン先は決まってるのか？」

「決まってるぞ」

「そうか」

呼人の答えに、何故か轟は残念そうな表情をする。それが気になった呼人は、理由を尋ねた。

「何かあるのか？」

「いや、決まって無いならエンデヴァーのところに来ないかと思った。今はN o. 1だし学べることもあるんじゃないかねえかと思っただが……」

「そう言うことか。悪いな。俺は行きたい先は決まってるんだ」

「いや、こつちこそ急にわかり。行き先つてのは前も行つてたところか？」

「ああ。ジ・アドベンチャーつていう……まあ今回のビルボードじゃあ一番下の方に並んでたな」

それを思い出して思わず笑いながら言う呼人に、轟は首を傾げる。

「そんなヒーローのどこが良いんだ？」

「あー違う仕事をしてないわけじゃないぞ？　ただ表で評価出来る仕事のパトロールぐらしいしか無いんだよ」

「その、裏の仕事をお前も？」

「いや、そういうわけでもない」

「じゃあなんでその人のところに行くんだ？　あ、いや別にせめてるわけじゃないんだが気になったから」

つい責めるような言い方になってしまったと轟が謝罪する。入学当初は相手の気持ちなんて微塵も考えなかった轟も、クラスメイトとの交流の中でそうした気遣いが出来るようになっていた。

「エンデヴァーとかホークスとか、そういうヒーローがいる場所で大抵の人間が救われるだろ？ けど、例えば限界集落とか、僻地に少数ですんでる人たちとか。そういう『救われない』人達もいる。で、そういう場所はときにヴィランの巣窟になってたりする。インターンに行った時はだいたいそんなところを見て回ってる。言ってみれば、他のヒーローの届かない穴を埋めてる感じだな」

「そ、うか。そんなことまで考えてんだな」

「まあな。誘ってくれてありがとな」

「いや。お前も頑張ってくれ」

轟に礼を言っ、呼人は自室に戻る。

言ったことは真実呼人が考えていることで。けれどそれをヒーローとして達成するつもりはさらさらない。

難しい。未だに正解がなんののかなんてわからない。救われず、結果として壊すことを選んだ人間を自分はどうするのだろうか。あるいは。壊すことにしか生き方を見いだせないとは、どこからを言うのか。

ヴィランが生まれないように全員に救いの手を差し伸べる世界すら、きつと作ること
は不可能だろう。人が生物として争い上を目指す競争の中にある以上。

そしてさらに、人間は本能で生きることが出来るモンスターと違って、なんとも面倒
な感情、思考なんてものを持ってしまった。それがただ、めんどくさく、だからこそ愛
おしい。

つくづく、人とはめんどくさいものなのだ。

冬休みが始まるとともに呼人はインターンのために寮を後にした。他のクラスメイ
トたちは年明けからのインターンを行うものばかりだが、別にしてはならないとは決
まっていない。大晦日もヒーローの護衛ありで帰宅することが許可されていたが、そも
そも自宅なんてものは呼人には無いのだ。

ひとまずの集合場所は、依然アーニヤとモーメントが寝泊まりしている部屋だ。ただ
のアパートの一室に思えるがセキュリティは神王寺が手を出したのでガチガチ。そ
の一室で、久方ぶりにきたアーニヤとキリンたちを遊ばせてやりながら、神王寺がま
めてくれた様々な記録に目を通す。

その中には、先月から行われていたとある地域での敵連合とギガントマキアの戦闘や、そこからのデトラネット、異能解放軍の暗躍、そして新勢力『超常解放戦線』成立までの流れがまとめられていた。

「馬鹿なのか？」

「誰に言っただよ」

「……こんな流れにした誰か？」

思わずそう愚痴りたくもなる。もともと異能解放軍は、それぞれの幹部が表社会でも有数の権力を持つかなり危険な集団で、更にそれ以外にも戦闘面での幹部連中が下手なヒーローでは歯がたたないような武闘派ぞろいな上に頭数もヒーローの総数よりも多いという危険きわまりない集団なのだ。

それが敵連合と手を組んだ。

ただ救いといえば、そもそも敵連合は頭数が少なく、更に異能解放軍という母体を持つてしまったために情報漏洩の観点からそれ以上のヴィランの引き入れが難しくなったことぐらいか。それ以外の脅威で言えば、ギガントマキア、それに脳無製造者とも補足済みで。ただ一つ問題があるとすれば、星詠みの個性はあくまで見ることだけである上に多数の場面を同時に見れるわけではないので、情報は常にリアルタイムから遅れることになることだ。

「あ？ これ変異してねえか」

「だろ？ やつぱそう思うよな。 つつても俺らには観測の方法がねえから取り敢えず記録したんだが」

そんな中呼人が目をつけたのは、敵連合のトップ死柄木弔の個性。以前は触れたものを触れた地点から崩壊させるものだったが。入手してくれた映像を見るにどうも、効果範囲が変わっているような感じがする。

それは、非常にまずい。そもそも個性というのはとても不安定で。おそらくだが人間の感情にすら左右されうるものである。他者を拒絶する禁忌の存在達の住む場所が何者も生存できない死の世界になったように。オール・フォー・ワンがタルタロスにいる以上、死柄木の側で何か心境の変化や感情の強烈な発露があり、それが個性の深化を促したと考えるのが妥当だろう。それに、報告を読む限りではギガントマキアとやらの戦闘で極限に追い込まれている。深化の素地は十分にあった。

ただ問題は、彼の個性が崩壊させるものであるということ。その対象が今は固体にとどまっているが、より自由にエネルギーに関与できるようになったときに、液体、あるいは気体すら伝播する可能性がある。その時は……地球が保たない。

（殺す、か。いや……まだ様子見で大丈夫か。どちらにしろ地球を壊すほどであれば個性量であればエネルギーが足りない。変質したといってもエネルギーの量自体に

爆発的な成長はありえない。とすれば……先にこっちの医者の方に釘を指しておくか……いや、そうするとせっかくヒーローが調査をしているのに——」

「つかこの映像も撮ってきたのか？」

「いや、そろそろ来ると思うんだが……」

「ああ、来てくれた連中か」

いつもの星詠みからの情報を文字でまとめたレポートに添付されていた映像の数と音声などのクリアさに、呼人は首を傾げる。あまりにも精密かつしつかりしすぎた情報にどうやって入手したのかと首を傾げたのだ。モーメントの移動が万能と言ってもここまでいい場面いい場面をいい角度で撮れるものではない。

と。呼人が見ているタブレットにウィンドウが開き、そこに一人の人間の顔が移る。日本人ではない顔つき。おそらく外国人だろう。そして英語で話しかけてきた。

『「へい、お前が呼人か。俺の作った映像を早速見てくれてるんだな。良い出来だろ」』
その声の最後は呼人の正面から響いた。タブレットから視線を上げると、4人の人間が立っているのが目に入る。うち一人は組織の足、モーメントだ。

モーメントに連れられてやってきたのは2人の男性と1人の女性だ。新しく海外からやってきたメンバーである。

「連れてきたぞ。悪いな、来るたび来るたび相手してもらって」

「相手してるのは俺じゃないけどな。ありがとうもうモーメント」

モーメントを労った後、呼人は新しく来た3人の方を向き直る。

「俺が百竜呼人だ。ノーマンと呼んでくれ。詳しい事は後で説明するが、お前らに求める事はたった1つ。俺の言うとおりに動いてくれ。それ以外の事は好きにしてもらっていい」

「『ヘイ！ 俺はいいぜ！ お前がだいぶクールなやつだつてジンノージから聞いたしな！ ヘイジンノージ！ 腕は磨いたか？』」

陽気に大声を出す若い男を、モーメントがジロリと睨む。アーニャが寝ているだろうと言いたげだ。実際は寝ているわけではないので問題は一切ない。男は呼人をスルーすると、天王寺の方に行ってしまった。まず彼の名前も聞いていない。

「私も構わない。どうせどこにいても一緒だし。それに昔から日本には来たかったから。仕事ももらえるならありがたくこなすよ」

「住む場所や都会、田舎の好みなどは？ 後なんて呼べばいい？」

「無い。でも人がいないレベルの田舎は嫌だ。適当に人がいる場所がいい。ブラーと呼んで。名前は忘れた」

「わかった」

ショートカットにボーイッシュな格好をした女性は帽子のつばで顔を隠したまま呼

人の問いかけに答える。

彼女はブラー。認識を阻害する個性を持つ人物だ。神王寺との関係は、彼女の親が神王寺と交流があつたことだけ。ただ、暗い仕事をしていた両親が死んだときに一時神王寺が面倒を見、アメリカの信頼出来る裏組織、それもけて表で大暴れるのではなく、裏の取引を受け持つだけの組織に連絡を取り、彼女を預け、それから時々連絡を取っていたらしい。彼女を裏の世界に入れたのは、明るい世界を生理的に嫌い、また両親と同じ道に進みたいという彼女の意向ゆえだ。大事な相手はいない、と公言してはばからない神王寺だが、付き合いのある相手はそれなりにいるのだ。

そして最後に、呼人は黙つたままの男に話しかける。

『お前がイスカandalだな』

『そうだ。俺はお前が相手をしてくれれば他は従う』

『オーケーだ。明日にでもやろう。今日は彼女がいるから我慢してくれ』

イスカandalは海外の地下格闘技出身の若い男だ。年は18。まだまだこれから稼いでいくという相手だが本人には稼ぐつもりなど一切なく、ただ強者との戦いを望んでいた。そこで神王寺が呼人の映像を見せ、これと戦わせてやると勧誘したのだ。彼もいずれば、呼人の中に招いてモンスター達と殴り合わせれば満足するだろう。

と。そう話していると、玄関が開く音がして2人の人間が入ってくる。一人は以前も

会つたりザードで、もう一人は彼が連れてきた子どもたちの世話係、マドレというあだ名の女性だ。スペイン語で『お母さん』と。2人とは最初に呼人が到着したときに挨拶をしており、食品などを買いにでかけたのだ。もの静かな女性であり、少ない口数よりも行動で子供の相手をしている。

リザードは早速ブラーに目をつけた様子で陽気に話しかける。

「やあ、可愛い女性が増えたのは嬉しいよ。僕はリザード。君は？」

「……そういうのは、苦手」

「おやおや、振られてしまったようだ。あ、リーダー、僕の書いたレポート見てもらえたかな？」

「詳細情報に可愛いか可愛くないかが絶対に書かれている頭の悪そうな報告なら読んだぞ」

「でも良い出来だったでしょ？」

若干とかかかなり引いた様子のブラーはスススとリザードから距離を取り、呼人のアーニヤを挟んだ隣にぼすんと座った。その手がゆらゆらとアーニヤに触れようとしては引き戻され、それが繰り返されるのを見て呼人は彼女に話しかける。

「撫でて大丈夫だぞ。今は撫でて目覚まさないし」

「ハの子は？」

「モーメントの妹だ」

「何をしてるの?」

「後で教える。取り敢えずそれぞれ勝手に自己紹介はしておいてくれ。それと、M r

・ P C」

呼人が声をかけると、神王寺のパソコンを勝手にカタカタといじっていた騒がしい男がグリんと振り返る。

『「へいなんだよノーマン! あ、そうだ俺の作り直した映像見たかよ! カイホーグンの捏造映像をカイホーグンのやったことが見えるように作り直したの! 俺あーゆうセコイのぶつ潰すの大好きなんだよな!」』

『「見た。これからもその調子で頼む。ただし情報の公開は解放軍関連で何か大きな動きがあつてからだ」』

『「その辺は任せる! ジンノージがやってくれるから! 俺は取り敢えずヒーローネットワークに通路ぶつこんでくる!」』

『「お前……絶対逆探されるなよ」』

『「任せとけ!」』

Mr. P C。個性はP C。本人がパソコンの様々な機能からネットへの接続、更にハッキングなどを一切のツール無しで『本人が電脳空間に直接アクセスして』出来ると

いう、パソコンだけでなく回線なども含めて扱える強力な個性なのだが、そんな個性の彼は何故かその個性を使わないハッキングを好む。曰く、自分はスペックが高く自由度が高すぎて使っても面白くない、との事だ。本人の中では自分の使い方が本能に染み付いている部分もあって、そうではない外部のPCとが良いのだという。

取り敢えず新しいメンバーとの顔合わせがすんだところで呼人は次の指示を出す。

『よし。それじゃあ各自解散。ビルドメイクが合流し次第拠点を移動させる。今後の方針について興味のあるやつは残ってくれ。それとここも泊まれるが、部屋数はそれほど多くない。相部屋になるから適当にやってくれ』

異能解放軍に潜入していた、というかもともと所属していたビルドメイクだが、Mr. PCが来たことで情報収集をする必要がなくなったのでこちらに合流することになっている。Mr. PCは既にあちこちのコンピュータやサーバーやサーバーだけでなく、衛星にまでハッキングの手を伸ばしているそうなのでそれらの利用、遮断も出来てしまう。こんな人間が何故在野に眠ってるのかと思つたが、ただただ悪さなどにも興味はなく、かっこいいものに惚れ込んでハッキングで情報収集したり、むしろハッキングすること自体を楽しんだりと愉快犯的なことばかりをしていたらしい。

指示を受けて今後の方針など興味のないイスカandalは部屋から出ていったものの、それなりに広がりピングは既に人でいっぱいだ。なんともアットホームなヴィラン集

団もあつたものだと、呼人は変な気分がしたが、彼らが呼人の手足となつてくれる。大切な仲間達だ。

『オーケー、じゃあMr. PCとブラーはこっちだ。説明をしておこう』

『ヘイ！ お前のクレイジーでクールなアイデアつてのきかせろよ！』
着々と、戦力は整い始めていた。

『かー！ クレイジーな野郎だなほんとに！』

「本気で、言ってる？」

「本気だ」

『ヘイ！ 日本語だと言言ってるかわからねえよ英語で話してくれ！』

方針、目指すところの説明を終えたところでブラーとMr. PCからはそんな答えが帰ってくる。

『だから人材を揃えてる。それに……これから獲得する目処も立ってるだろ』

『言っておきますけど。私はまだ納得してませんからね』

『流石に0になるのは困るが、なら子どもたちを真っ直ぐに育ててやれば良い。基本は

あなたにおまかせするさ』

ふん、と鼻を鳴らすのはマドレだ。彼女が来たのは、他のメンバーと違ってただただ子どもたちの世話をするためである。そのため、『将来的には保護し育てた子どもたちの一部を利用する』という呼人の考えに異論を示しているのだ。

確かに方針と大きく外れる内容だが、呼人の側にも反論はある。まず1つ目は、絶対に強制的には子どもたちをこちら側には引き入れないようにする。これは当然、意思を尊重するためだ。そして2つ目、子どもたちには、社会一般的な善と悪が判別できるような教育をする。フラットにどちらの良い場所も悪い場所も、なんてことはしない。まず最初に善悪の判断を与えた上で、そこから様々な考え方に対する知識を与える。

つまり、基本子どもたちには呼人達の活動が悪に見えるように教えた上で、15を迎えたときに、自分たちの組織の実態を教えてそれでも協力するかという問いかけを行うのだ。そして協力しない、あるいは呼人達に敵意を持った子どもたちは表の世界に返し、それ以外の、積極的に悪になろうと決めた子どもたちをプロパガンダとして、そして戦力として育て上げる。

『お前達社会が見捨てた子どもたちは、これほど立派で凶悪なヴィランになりましたよ』と。

目指すのは、呼人達裏で手を回す人間がいなくても誰かが誰かに自然に手を差し伸

べ、救われない者がいない社会。ただ、それは法律制度その他倫理の観点などからも困難である。だから常に警鐘を鳴らし続けるのだ。

『マドレは……お母さん？』

『私は戦いませんよ。ただ子どもたちにより良い明日を、と。それだけを願っています』

そう言ったマドレは、ささつと机の上に食べ物を並べていく。トルティージャを始めとしたスペイン料理に加えて、唐揚げなどの日本の料理もある。曰く、日本に来到ることになってから勉強したらしい。食事は子育てにおいて、栄養の観点だけでなく精神の成長にとっても重要、だそうだ。

『うまそうじやん！ いただきまーす！』

『どうぞ——！』 パトリックさん。あなた箸やフォークぐらい使いなさい。これから子どもたちを迎えることになるんですよ』

早速いただきますと素手で食べ物に手を伸ばしたMr. PCは、子供の教育に悪いとマドレに怒られていた。当面、人が足りていない以上実働隊のメンバーも子どもたちと関わる必要がある。そのため、お手本となる行動をしなければいけないのだが、まあMr. PCには厳しいだろう。しばらくはマドレのお小言を受ける時間が続きそうだ。

ちなみに彼の名前は本名か偽名か不明だが『パトリック・コールドウエル』である。そ

れと個性をかけ合わせて M r . P C と呼人は呼んでいた。

第78話

「『ヒヤクリューはノーマンに変わったの？　なんで？』」

「『名前が変わるだけだ。モーメントだって本当の名前は違うだろ？』」

「『そうなの？』」

本日は1月3日。世間では三が日と言われる休日の真つ只中だが、呼人たちは忙しい引越しの真つ最中であつた。

昨年の年末に異能解放軍から離脱したビルドメイクが合流し、取り急ぎ呼人達が定めた場所に仮組みの建築物を立てたのでそちらに移動を始めるのだ。実際の子どもたちを受け入れる為の施設などの用意はまだ全くであるが、取り敢えず移動しておくことは出来る。

移動と言っても、荷物などを持った重量のある移動ではモーメントの個性は使えない。まあ時間がまつたくかからないので往復させても良いのだが、せつかくということであーニヤに日本を経験させてあげるためにも、大型車に同乗して向かうことにしている。一台目にはブラーと呼人、アーンニヤ、モーメント、神王寺。二台目にはリザードとマドレ。ちなみに呼人達の車がビルドメイクお手製の車であるのに対してリザードの

車は彼の持ち物である。これから山奥に行くというのにどうするつもりなのだろうか。

「モーメント、お前アーニヤに本名教えてないのか？」

「教えてない。あいつらを思い出すものを教えることもない」

「まあ、そうだが」

『アーニヤを搾取していた奴ら』を思い出せないように。そういうモーメントの配慮なのだろう。モーメントに実際の所どうなのかを確認した後、呼人はアーニヤの方を向き直る。

『人間は、本当の名前以外にも色んな呼び方をされる。その人と仲良いから特別な呼び方をしたいから、とかな。例えばアーニヤのことも、もつと仲良くなったらアニーって特別な名前をつけたりもする』

『……私とひやくり……ノーマンは仲良くないの？』

『そういうことじゃない。仲良くなったら絶対にそういう呼び方をするとは限らないんだ。でも、そうすることもある。じゃあ今度から、アーニヤのことアニーって呼んでもいいか？』

呼人が尋ねると、アーニヤは嬉しそうな顔でうなづく。

『アニーが良い！』

『良い子だ。でもな、他にも本当の名前を隠すために違う名前と呼ばれることもある』

「『なんで隠れるの?』」

「『ばれないようにするためだ。例えば、ヒーローってわかるか?』」

「『う、うん。助けてくれる人。モーメントみたい』」

アーニヤがいきなり炸裂させた爆弾に、反対の隣側に座っていたブラーがブツと吹出し、モーメントが気まずそうに顔をしかめる。

「『そうだな。でも、ヒーローを仕事でしてる人つととても人気なんだ。例えばちよつと歩いてるだけでヒーローを好きな人がいつきを集まってくるみたいにな』」

「『そうなんだ。でも、モーメントはそんなことになってないよね?』」

「『モーメントは、仕事でしてるわけじゃないからな。アーニヤのことが特別大切だから守ってくれたんだ』」

「『おいリーダー好き勝手言ってるじゃねえぞ!』」

呼人の説明に、アーニヤは頬を赤く染めて嬉しそうに口元をニヨニヨと緩ませている。

「『そうなんだ……エヘヘ』」

「『それで、そんな人気なヒーロー達は名前がばれると普通の生活もできなくなる。だから名前を隠してるんだ』」

「『じゃあノーマンも人気なヒーローなの?』」

『違うぞ。でも俺も、名前がばれると困るからつてのは一緒だな』

『ふーん。なんで?』

『それはまだ秘密だ。アニーがもつとたくさん勉強して賢くなったら、教えてやる』

『アーニヤ賢いもん!』

膨れるアーニヤの頭をワシワシと撫でて呼人は笑う。まだ、何故名前を隠すのかを教えるのは早い。

その後アーニヤは、ブラーやモーメント、神王寺にもアニーと呼んでくれと言っていた。クールなように見えて可愛いものが好きらしいブラーはその様子に顔を赤くし、それを帽子を目深に被つてばれないようにしていたが真つ赤になつた耳が見えたのでバレバレである。

アーニヤは、その個性を利用されていたということもあつて保育園や小学校には通っていない。まあ向こうは日本とはまた形態が違うのだが、それでもまともな教育を受けていないのは確かだ。両親もろくでもない人物でまともな生活すらさせてもらえていなかったらしいので仕方無いことだろう。代わりに、日本に来てからはマンシヨンの一室でモーメントや神王寺が買ってきた本やドリルで勉強したり、ちよつとずつだが個性を使う練習をしていた。

この調子であれば、普通の生活に戻るにはそれほど時間はかからないだろう。ただ

モーメントから離れたがらず、また初対面の大人を怖がる以上外に出るのも難しい。最初は神王寺もよく避けられていたものだ。呼人とブラーは若いので大丈夫だったらしいが。

『この山登るの?』

「私こんなところ歩いたこと無い」

『歩いたら日が暮れる。少し山に入ったところからはモーメントの瞬間移動で行く。』

「アニーもちよつと荷物持てるか?」

『うん!』

持ってきた荷物をいるメンバーで手分けして持つ。荷物と言っても、街中に残してきたマンションは解約しておらず普通に使うつもりなのでそのまま残しているので大きなものはない。

車を麓の人気のない駐車場に止めた後、山に入っていく。場所は日本アルプス。過去の荒廃した時代に捨てられた街などは残っているもの、今は人の足が入ることはあまりない。そういった街をいくつかのヴィランが過去に拠点にしていた形跡もあるが、最

近のヴィランは矛盾しているように思えるが社会を必要としているため、そうした完全
に人里離れた場所に潜むということはめつたに無い。彼らが求めているのは、ただ人々
が組み立てた社会を好き勝手に搾取することだけなのだ。

『集まれ。先にブラーと神王寺とマドレからだ。荷物しつかり持つておけよ』

先に場所を確認しているモーメントが、最初の3人を連れてワープしていく。移動先
はそれなりに遠方にあるので、彼の個性でも往復で一分ほどはかかるだろう。むしろ1
分で移動してしまうというのが異常なのだ。子供を抱えて潜むためにはそれぐらい
人里離れた場所でない駄目なのだ。

『遠いの？』

『山の中だよ。そこにこれから家を作るんだ』

『広い？』

『今作つてあるのは狭いよ。でも、これからもっと広い家を俺も手伝つて作る。それ
と、アニーのお友達になれるような子どもたちも連れてくるんだ』

『お友達？ キリンちゃんとかキリアちゃん達みたいな人？』

『そうだね。キリン達も友達だ。でもこれから連れてくる子達は、親にひどい目に合わ
されたりしてる子どもたち何だ。だから、アニーにも仲良くなつて上げて欲しい』

呼人がそう言うのと、アニーは怯えた顔をする。彼女も、親に虐待を受けた一人だ。そ

の頭を安心させるように、呼人は優しく撫でる。

「大丈夫。守るためにここにたつてくるんだ」

「守つてくれる？ ノーマンもモーメントもブラーも、守つてくれる？」

急に自分の名前を呼ばれたブラーが驚いて呼人とアニーの方を見てくる。話は聞いていたがまさか自分の方に回ってくるとは、と。2人の期待の入り混じった視線にブラーは少したじろいた後、おずおずと頷いた。

「私もアニーのこと、守る。あんまり強くないけど」

「な？ 守るから、心配するな。俺はとても強いぞ」

2人に口々に守ると言われて、アニーも満面の笑みを浮かべる。

「うん！ それでみんなが怪我したら私が治す！」

「そうだな。その勉強もしておこうな」

ポンポンと、再度アニーの頭をなでたところでモーメントが再度転移して戻ってくる。

「よし、3人共集まれ」

モーメントの転移は、接触している地点を媒介にして一緒に瞬間移動する物を選択している。そのため、手を繋ぐなど何らかの形にしておかないといけない。モーメントが絶対に離さないようにと片方の手でアニーを抱き上げ、もう片方の手をブラーに伸ば

す。そのブラーの反対の腕を呼人が掴み、全員が連結された。

そして転移。モーメントの転移は、場所の座標を感覚的に捉えることで転移をするのだが、移動先に物があつた場合は転移に失敗する。そこでモーメントが長距離移動を行う際は、まず一旦高高度までワープで移動し、そのまま何もない空の上を移動した後地上を見下ろしながら移動し、着地するという形をとっている。

10回ほどの転移の後、呼人たちは山の中腹あたりに設けられた木の2階建ての家の前に立っていた。周りは木に覆われているが、その家の周り十数メートルだけが木が生えていない。

『わー！ きれいなお家！』

『取り敢えず、な。入るぞ』

繋いでいた手をほどき、真つ先にアニーが家の表にあるポーチの階段を駆け上る。

『転ぶなよ！』

なんていうモーメントの兄バカっぷりは、この数日でもう新しいメンバーにも周知のものとなっている。

建物内の構造は至つてシンプルなログハウスという感じで、1階に大きな部屋が1つと狭い部屋が1つ。それに二階に二部屋という構造になっている。それに部屋の中央に巨大なストープにあかあかと薪が燃えていて。今から作る巨大施設の前段程度のも

のでしか無いので作りも適当だとは作った人間が言っていたが、トイレまで完備なのはなかなか気合が入っていると云っていいだろう。

『あ、柱のおじさん』

「おー、アーニヤちゃんか。元気やな」

室内のこたつに潜り込み鍋をつくつくとつついていた壮年の男が振り返ってニカリと笑う。作業着らしき服を着込み頭を短く刈り上げた、いかにも建築業や土木作業に従事していそうな見た目のこの男がビルドメイク、本名、建造寺柱。神王寺の知人の息子であり、異能解放軍に所属しながらもその信条に深く共感はしていなかった男。

もともと死穢八齋會とは違うがそういう筋の家系であり、今回両親に連絡を取ろうとした神王寺の依頼を受けて解放軍を脱退することを決めたのだ。ちなみに彼の希望はまっとうじゃない仕事をする事、というアバウトなものだったので、取り敢えず表の仕事させないことになっている。どうもそれもなんとなくのことらしく、取り敢えず両親がそうだったのでそれを見て育ったからそれが良いかな、ぐらいの感じらしい。

「柱さん、お疲れ様」

「おう。呼人坊もお疲れや」

「今度からはノーマンと呼んでくれ。ここに移っても来たんでな」

「おおそうか了解や。で、いけるか？ こっちはもう用意出来とるで」

「俺はいつでも」

「ほな飯食うたらやつてまうか。あ、一応そこに茶碗とご飯炊いとるから勝手にしてや」
 ちなみに柱含めて、メンバーにはそれなりの仕事を依頼することが決まっているので、一応給料も出ている。すべて神王寺の溜めに溜めた貯金からだ。呼人も何か金を稼ぐ手段を見つけないといけないが、今はずつと動くことは出来ない。神王寺の金に頼っている。とても使い切れないぐらい溜まってはいるらしく本人も好きにしてくれと言っているが、色々な手段を考えておかないといけないだろう。

「『あ、お鍋！ アーニヤ結構好きだよ』」

「『そうだな。手を洗ってから食べよう』」

ひとまずは腹ごしらえ。それが終わったら、呼人にとつてもそれなりな大仕事をしなければならぬ。

「『イスカandal、調子は？』」

「『順調だ』」

施工予定地点を確保していたのはもうひとりの仲間のイスカandalだ。彼だけは他

のメンバーよりも先にここに来て、ビルドメイクの整地作業などを手伝っていた。その個性の訓練も兼ねて。

呼人の言葉に答えるイスカンドルの周囲にはいくつもの青白い光の塊が飛んでいる。その一つ一つが、呼人が彼に与えた雷光虫だ。

イスカンドルの個性は『モーター』。その能力は、体内に溜め込んだ電気を消費して身体能力を向上させるといふもの。ただし本人は一切発電することが出来ず、すべての電力を外部に頼る必要がある。その個性を使つて呼人に戦いを挑んだが、全く歯が立たず。

というよりも問題点とも言えるものだが、彼はアメリカではかなり貧乏な暮らしをしていたらしく電力の確保に困つていたらしい。そのため、盗んだ電池から得られる電気を地道に溜めるなどしていたため、一気に大出力を使う事をしてこなかったらしくせつかくの個性なのに小出力で上手く利用するという戦い方してこず、完全に呼人に力負けしていた。ただその御蔭で体術にはかなりのものがあるので幸いとも言えるが。

そこで呼人が彼との決闘の後に彼に電力確保の手段として10匹ほどの雷光虫を与え、またより高出力に彼の体が耐えられるように自分を強化する事を指示していた。それを鍛える一環としてここに来て、木を伐採したりと派手な事をしていたとのことだ。

ちなみにこの雷光虫、主食は電気である。また純粋な電力だけでなく、放電する性質

のあるものも食べる雑食性だ。そして食べた以上の電力を発生させる。雷狼竜はこの性質を利用して、与えた電力を更に爆発的に増加させて自己の強化に利用したりしている。

そしてイスカンドルの場合は、乾電池から発生する電力を与え、それをより増幅させるようにして利用している。

その放電を蓄積したイスカンドルは、少なくとも手合わせをした段階でもオドガロンに全身を変化させた呼人と同等以上の能力を持つており、更にかんりの成長の余地を残していたため、呼人も彼は相当に強くなると期待している。

『なら良い。死なない程度にな』

『御意』

地点を確保していたイスカンドルに労いの言葉をかけた後、呼人とビルドメイクはそこを見上げる。山々の間にある小さな谷。そこが2人の立っている場所だ。

「ノーマン坊が掘り出して支えとう間にわしが作つてくけえの。ただ一定区画ごとじゃねえと耐久力ないけえ下が出来たからち崩さんでくれや」

「なら一区画ごと掘り出していこう。上からガンガン固めていって下から掘り出して、最後に下をはればいい」

「ほーん……それで行くか」

地面を掘ることを得意とし、更にフルビーストの状態でも手と同様の器官を持つ怒貌竜の姿に呼人は変身し、岩壁を砕いて山の内部へと侵入していく。そしてその入口の部分を早速ビルドメイクが補強をつけて固定し、自分が侵入するための通路を壁に設計する。

ビルドメイクの個性は『デザイン&ビルド』。自分で引いた図面通りの物を自由に想像するという個性である。系統としては八百万の個性と似ているが、あちらが自由に思考して作れるのに対して、こちらは自分で完璧な設計図を引き、更にその設計図を両手で保持した状態でしか使用することが出来ない。その代わりに八百万と違って建造物のような大きな物を作ることもできる。設計図が使い捨てになってしまいうのでかなり手間だが、非常に強力で有用な個性だ。

一瞬で区画を作りきれない規模になると、怒貌竜の姿で土を掘り最初に侵入した穴から掻き出した呼人が頭部に怒貌竜のものとは違う角と、体の至るところに茜色の器官を生成し、そこから飛び出した流体金属を操って一旦天井部分などを支え、その間にビルドメイクがその上の山を支えるのに十分な柱と屋根部分を作っていく。それなりに時間のかかる作業だが、それでも人の手でやるよりは遥かに早い時間で出来ていく。途中で食事休憩などを挟みつつも、2日ほどで取り敢えずの巨大な空間まで完成させるに至った。

「柱さん生きてる?」

「お、おう……もう死ぬ……」

呼人の始業が迫っているので超特急でやったが、体力の有り余っている呼人はともかく超巨大な建造物を作り続けた柱は瀕死の様相だ。

ひとまずこれで時間をさほど気にする必要がなくなったので、呼人がビルドメイクを背負って木の小屋まで戻る。

小屋まで戻ると、ブラー、イスカンダル、神王寺、リザードは外出していて、モーメントとマドレ、アーニヤだけが残っていた。

呼人の背中におぶさりぐったりした様子の子のビルドメイクにアーニヤが慌てた様子で駆け寄る。

「『柱のおじさん、大丈夫?』」

「おお、嬢ちゃん、か……。ちよつと、疲、れた……。だけ……」

その短い言葉を言うのも一苦労な様子の子のビルドメイクの手に、アーニヤが自分の手で触れる。

「『待つてね、今元気にしてあげるから』」

そう言っつて自分の個性を使おうとするアーニヤを、呼人が止める。

「『アーニー、柱は今とても疲れてる。だからアーニーの元気を分けてあげたぐらいじゃ足り

ないし、アニーも倒れちゃうよ』

『でも……元氣無いから……』

アーニヤは、とても優しい少女である。元氣のない人や動物がいれば助けてあげたいと思うような。ただそれが出来てしまう個性故にそれを両親に売り物にされて酷い扱いを受けていた。それでも助けてあげたいと思うのは、それが彼女の一番素の部分にあるからだ。

『だからアニーの元氣じゃなくて俺の元氣を分けて上げてくれないか？』

『ノーマン、の？ できるの？』

『わからない。でもアニーよりは俺の方が元氣出し力もいっぱいあるよ』

呼人がそうお願いすると、アニーは決心した表情で頷く。これまで、自分の元氣を誰かにわけることしかしてこなかった。だから誰かを元氣にした後は、自分が寝込んでしまっていた。体力が無くなると病氣も発症しやすくなる。そんな無茶を、親は強要するだけでけて労おうとしなかった。

でも、ここの人たちは助けてくれる。だから、自分も彼らの助けになりたい。そんな思いが、アーニヤを動かしていた。

『やってみる。ちよつと待ってね』

そう言つてアニーは目を閉じ、呼人の手とビルドメイクの手に触れる。はつきり言え

ば、彼女の個性であれば近づくだけで十分であり触れる必要はない。だが、今は初めてすることだけに少しでも近づいてやりたかった。

アーニヤの個性は『メデイカルケア』。自分の元氣、とアーニヤは言うが、呼人たちからすれば生命エネルギーのようなものを利用して他人の治療を行ったり、直接その元氣を分け与えて他の人を元氣にしたりする。ただし、彼女の両親はただ他の人間を元氣にするための便利なものとしてしか彼女を扱っていなかった。彼女が手術など知らずただ生命エネルギーを譲渡する術しか知らず、治療の手段や人間の体に関することなど何一つ知らなかった。

それを知ったのは、彼女の個性について神王寺がすっかり調べようと申し出て色々としたからだ。その結果、例えば輸血においては自分の生命エネルギーを血に変換して与えたり、手術においてはエネルギーを使って直接体内に関与して施術をしたりすることもできる可能性があるかと判明した。まだその制御は甘いものでしかなくとても実践できるものではないが。

そして今彼女は、自分の元氣を与えるのではなく、別の人間の元氣を吸って一旦自分のものにし、そしてそれを他の人間に分け与える、という新しい使い方を会得しようとしていた。個性は、思いで新しい扉を開く。彼女の人を助けたいという優しい思いに個性が応えたのだ。

やがて、呼人の身体に虚脱感が発生し、代わりに背中に乗っていた柱が元気にぴよんと飛び降りる。

「おお！ なんやめつちや元氣湧いてきたわ！ じつとしてられん！ 元氣があるうちに作っとける部分作ってくるわ！」

そう足踏みしながら言うと、元氣が溢れんばかりのビルドメイクは玄關を開けて元氣よく飛び出していった。

「『上げすぎ、ちゃった……』」

「『元氣にしすぎたな』」

「『うん……』」

實際的にどんなものかは判明していないが、生命力そのものとも言えるようなアーニヤが操る『元氣』を与えすぎると、元氣が有り余ってしょうがない人間は今のビルドメイクのようになる。体力を消費したら元には戻るが。

「『初めて、だったから。人からもらうの……』」

「『そうだな。また練習しないと。俺とか神王寺なら何をしてでも大丈夫だから』」

呼人の言葉に、アーニヤはコクリと頷く。彼女の個性は、使い方しだいでは命にすら関わるものである。心優しい彼女が積極的に人や動物を傷つけることはないが、それでもミスは発生する。だから普通はそう簡単に練習できないのだが、幸いにも彼女の周り

には神王寺と呼人という、傷つけても死なない人間が2人もいる。彼女は傷つけるのを嫌がっていたが、自分たちは大丈夫で、それよりもそれを練習してもつと助けられるようになったほうが良いのではないか、と言う神王寺に説明に最終的には頷き、その練習を少しずつ始めていた。

本当は、彼女こそ表にいるべき人材である。そうすれば彼女の願いの通り、人々を助けることができる。そして自分の生命力を使ってしまうという彼女の行動も、呼人がイスカンダルに雷光虫を渡したようにまた別の虫を与えれば解決できる。もう年老いたリカバリーガールの次代ともなることも可能だろう。だが、モーメントの個性は今の呼人たちには無くてはならないものだ。

少なくとも、彼女が15になるまで。それまでには、何らかの形で彼女とモーメントの関係に決着がついていてくれれば、と思わずにはいられない呼人であった。

第79話

「言つておくが、うちは慈善団体をやってるわけじゃない」

「わかつてる。その上での依頼だ」

冬休み終了直前。呼人は仲間の元を離れ、最後にとある場所を訪れていた。現在はその拠点を関西に移した地下組織、死穢八齋會の拠点だ。以前は表にはつきりと見える拠点を構えていた八齋會だが、勢力を失い、またやり方を変えた現在となつては路地の奥、小さな一部屋から地下へと続く道を治崎が創造し、そこに居を構えている。

現在は、他組織との折衝で組長が出張つていてということとで治崎が訪問した呼人の応対に当たつていた。治崎の方は呼人に全く良い顔をしておらず、不機嫌そうに眉に皺を寄せている。

「うちのメリットは」

「まず持つて、一斉蜂起というのは明らかに稼ぎが悪い。それはわかるか？」

「当然だ」

「なら話は簡単だろう。そつちの下にいる組織の計画に時間差をつけるように指示すれば稼ぎも上がる」

「二斉蜂起の方が成功率も上がるだろう。順序よく蜂起して一つ一つ潰されたらどうする」

今現在話しているのは、4ヶ月後の春。超常解放戦線が蜂起した際に、あるいはヒーローがそれを防いだ際に発生する大騒動の渦中において、八斎會とその支配下にあるヴィラン達がどう動くか、というものだ。

八斎會は、表の人間から暴利を貪る事業のほとんどから手を引き、現在は裏でヴィラン集団や個人を支配しては場所を自由に使わせるかわりに適度な上納金を収めさせるなど、ヴィランを相手としたヤクザ業にシフトしている。このあたりのバランス感覚は組長が優れていて、支配下のヴィランから不満が出ない程度に金を収めさせ、また計画においてはいわゆるコンサルタントのような事をして犯罪の成功率を高めている。また以前組長がとことん嫌っていたという個性関連の薬物にも参入し、危険、強力過ぎるものを売っている業者を潰す代わりに、自分たちのところで性能の低い薬で独占しようと色々動いているらしい。

またその中でも、ただ暴れたい人間は適当に暴れてヒーローに捕まるように仕向け、繰り返し盗みを働く人間には足がつかない程度に盗ませている。

そして、4ヶ月後、超常解放戦線とヒーローの大戦争。そのとき数から考えて日本中のヒーローがほとんど集まることになり、他の都市からはヒーローの姿が消える。呼人

がそれを直接リークすることはないが、それを聞いている治崎は既にそれぐらいのことに気付いているだろうし、いずれそのときになればわかる。

だからそのときに、社会を崩壊させない程度の蜂起にさせるように抑えるように治崎に頼んでいるのだ。

「その状況で最大効率で稼げる人選を考えれば良い。社会制度が崩壊して寄生する先がなくなれば困るのはお前たちだろう。違うか？」

呼人の問いかけに、治崎は不機嫌そうに眉をしかめる。呼人の言っていることはもつともなこと。少なくとも、今の八斎會にとつては社会制度というのはなくては困るものだ。寄生対象を滅ぼす寄生虫は、いるにはいるが少数派である。

特に今の八斎會にとつては、下部のヴィランが支配対象であると同時に寄生先に近い。いつきに暴れられて共倒れになるのも消えられるのも都合が悪かった。

好き勝手に発揮される暴力ではなく、統制され、意思を持った暴力。それが、彼らの目指す所。

「……お前らがうちに提供できるメリットは」

「海外進出においてはこつちのツテを貸す。それと戦力の要請に関しては柔軟に考える」

「……わかった。絶対に忘れるなよ」

「どつちにしろこつちも戦力は外に欲しいんだ。それとは別に何か手が必要になった時にも優先的にそつちに依頼する。報酬付きでな」

海外進出、と呼人は言った。日本は旧時代から言われていることだが治安がかなりいい方の国にあたり、外国では日本よりも遥かに裏組織などがはびこっている国や地域も多い。むしろ日本が平和すぎるのだ。それはつまり言ってみれば、稼ぎにおいては日本よりも海外の方がやりやすい事を示している。そこに進出する際につてがあるというのは大きい。

今回の件は、あくまで八齋會の事業に口出しをしているだけで仕事の依頼ではない。だからこそ、金以外の形で報酬を払う必要がある。

とにかく、後顧の憂いは多少は断てた。といつても八齋會の勢力も小さなものでむしろその勢力下に無い場所の方が多いが、これを機にその手を伸ばしていくのだろう。そのため時期と多少の情報も漏洩した。どちらにしろ八齋會のメンバーには、呼人本人からの脅しが効いている。グレーゾーンに両足を突っ込むことはあつてもまっとうから逆らうことはないのだ。

冬休みも終わり。始業の日が訪れる。冬季は全員がインターンに出ており、クラスメイトとの再会はそれぞれ久々となるものばかりだった。

「今日の授業は実践報告会をすることになってる。冬休みの間に得た成果、課題などを共有しよう。場所はグラウンドα。スーツを着用して集合してくれ」

入学後からどんどん柔軟さを取り入れ、もはや空回りすることもほとんどなくなった飯田の指示を受けてクラスメイトがそれぞれに移動を始める。遅れてやってきた相澤もその様子を見て教室に入ること無く出ていった。

「百竜改めてあけましておめでとう」

「あけましておめでとう」

「あけましておめでとう百竜」

つい昨日までインターンで出ており今朝も時間の無かった百竜が、クラスメイトと挨拶を交わすのはこれが初めてだった。『あけましておめでとう』とは新年を祝う言葉であり、英語などでは『Happy New Year』などという事を知ったのはつい先日のことだ。人は新しい時期の訪れすらも祝わずにはいられないらしい。

「百竜は、インターンどんな感じだった？」

「特に可もなく不可も無く、だな。特段激しい事をしたわけでもないし。正月でちよつと羽目を外してる相手を捕まえたが個性の使用も派手なものじゃなかったからお咎め

無しだったし」

「やはり、お前こそ有力な事務所に行くべきだと、思うのだがな。ミルコからは声はかかっていないのか？」

「あの人は一応断りの連絡入れたけど、ずっと一人で危ない所探ってるらしくてどつちにしろ無理だったぞ」

クラスメイトのほぼ全員から言われたのは、やはり呼人が例え育ての親で旧知の仲とは言えヒーローランキングの圏外にギリギリ引つかかっているような相手のところインターンに行っているのはもったいないということだった。

ただ呼人からすれば経験自体はモンスター達とのイメージトレーニングで相当に積んでおり、救助なども彼らの強力を得て一通り会得しているので、そう言った経験はもはやあまり意味があるものではないのだ。それは、『例え今もヒーローを目指していても』変わらない。

「それに割とゆつくりしてたから個性の方は磨けたしな」

「へえ……見てみたいな。でもあれだろ？ オドガロンとトビカガチしか使わないんでしょやっぱり」

「俺は、全部使ったほうが良いと思うのだがな」

「まあ……それを使うのはもっと後だな。今はこれだけでできることなんてたくさんあ

るし」

久しぶりのクラスメイトとそんな話をしながら外に出ると、オールマイトだけが待っていた。

「あれ、相澤先生は？」

「彼はつい今さっき、呼び出しを受けて出ていったよ。急用が出来たそうだ」

雑談をしていると、オールマイトがパンパンと手を叩いて雑談をしている場を収める。

「さて、今日何するかは相澤先生から話は？」

「冬季インターンの成果の共有をするようにと伺っています」

「うん、良いね。じゃあ順番にしてくれ」

オールマイトはそれ以上は自分は関わらない、という様子で生徒達を眺めている。すべてを自分たち教師がまとめる段階ではない。ここからは、生徒たちが主体的に動く時間でもある、と。今年の1年生には、厳しい課題が課されている。それを達成するためには、些細なところから躍進が必要なのだ。

飯田が先頭に立って音頭を取り、一箇所ずつ成果を発表していく。インターン先は基本的に実績の高い、つまりはランキング上位のヒーローだと決まっており、そのため受け入れ先が被っていると多い。

一組目に報告をした青山、芦戸、葉隠の三人は具足ヒーローヨロイムシャの元でインターンをしており、その成果を3人で報告していた。

続けて他の生徒もインターンの成果を報告していく。新しい技を開発してきた者達や、新しい判断、思考の手順を習得してきたものなど様々だが、それぞれがそれぞれに成長を果たしてきたようだ。

そして呼人の番が回ってくる。呼人は特にインターンで何かを学んできたわけではないが、個性を磨いてようやく完成した少しばかりネタにも取れる新技を披露した。

両脇から背中にかけて2対の腕が生えると同時に、首の後から斜めに2つの頭部が発生する。

「おおー！ ってあれ頭も3つ有るくね？」

「なんだっけ、ああいうのいるよね」

「おそらく阿修羅、ですわね。三面六臂の鬼神と言われていますが仏法では守護神に当たると思います」

八百万が解説した通り、呼人がしたそのモチーフは阿修羅である。首から斜めに更に2つの頭部が生え、それを更に、モンスターの形をしたものから人間のものに変化させる。

以前目指していたのはモンスターの腕を出して操ること。だが、モンスター達が精神

世界で人間の姿を持つていることに改めて疑問を感じた呼人は、それを実験し、モンスタ―の状態だけでなくその人間の姿まで外に出すことに成功したのだ。つまりそれは、完全に別人になりかわれる事を意味する。

2つの頭には今はモンスタ―達が入っているわけではないので目をつむって項垂れているが、モンスタ―達が入れば動き始める。ただし、完全に内部まで人間のものにした場合、呼人はそれらを操作する事はできない。線引きは、完全に人間であるパーツは人間1体分までしか操作できない、と今の所考えているが、他に何か条件があるかどうかは定かではない。

「百竜君！ もしかしてだけど、その使い方すごく潜入围けなんじゃないかな!？」

「俺もそう思ってる。顔を変え放題だからばれることもないしな」

「でもいきなり別人になられるとビビるよな。演習とかだと意味ないけどさ。寮の中とか歩いてると間違つて先生に言っちゃいそうだわ俺」

上鳴あたりには散々な言われようをしているが、使い道としては結構有効である。そしてこれが出来たゆえにとある疑念が湧いてしまったことが、呼人の学生生活の終わりをはつきりと告げていた。

その晩。インターン反省会、兼あけましておめでとう会。取り敢えず名目はどうでも良いのでみんなでパーティーをやりたいという多数の要望に応えて鍋パーティーが開催されることとなった。対抗模擬戦以降B組とも演習や自主練などで交流は深まっているので最初は一緒にしようかなどの話は出ていたのだが、残念ながら40人で机を囲むのは大変だということとでそれぞれパーティーを終えた後にB組がこちらに合流してくるという話になっていた。

「おい鍋持ってきてー！」

「百竜ニラ切り終わった？」

「終わった。後は？」

「誰か白菜切れる人おる？」

「俺やるわ。白菜頂戴」

ザワザワと騒がしく皆で鍋の用意をしていく。20人分の鍋ともなれば具材の量も鍋の数も多く、用意もそれだけ大事になる。普段はバラバラになっているテーブルを繋げ合わせて大きな机代わりにし、それを囲うようにソファを並べていく。

「()座っていいか？」

「お。ああ、大丈夫だ」

呼人が座つたのは轟と口田の間。大きめのソファに轟、峰田、口田の3人でかけており轟と甲田の間が空いていたので呼人はそこに座らせてもらうことにした。

「お疲れ口田」

「お、お疲れ様。結、百竜君来たよ」

結とは、口田が自室で飼っている兎の名前である。皆に可愛がられているのだが、当の結は何故か呼人の事を意外にも好いていた。呼人は当初、モンスター達を宿している自分は勘の鋭い動物にとっては絶対的な脅威であり、カナダでよく見た大型の熊や鹿ならまだしも小さな兎には逃げられるのではないか、などと考えていたのだが、そういうことも無く普通に接することが出来ていた。

「撫でる?」

「じゃあお言葉に甘えて」

口田から結を受け取って膝の上に載せ、その頭をそつと撫でる。動物の扱いに関して詳しくはないのだが、取り敢えず頭を優しく撫でて嫌う動物はあまりいないそうだ。

「では、インターン意見交換会兼今年も頑張っていきましょう会を始めよー!」

「イエーイ!」

「ウエーイ!」

飯田が音頭を取って会が始まる。事前に軽く腹を満たしておいた呼人は焦って食べ

ることもないので、しばらくのんびりと結の頭をなでていた。そうしているうちに、それが心地よかったのか結もぐっすりと眠ってしまう。

「寝たね」

「寝たな」

両側で見ていた口田と轟がそう声をかけてくる。

「轟は、どうだったんだインターン。親父さんのところに行つたんだろ？」

「ああ。やっぱりヒーローとしてのあいつは……凄かった」

ぼうつと自分の左手を見つめながら轟は答える。インターンでの父親の姿と。家族と向き合おうとする父親の姿。

まだ、父親を許す事はできていない。だが、父が家族を傷つけ、そして今となつては変わつて家族と向き合おうとしているように。自分もまた、周囲が見えていなかった頃にはクラスメイトや試験で出会った人間を傷つけ、そして今は良好な関係を築くことが出来ている。

だからいずれは、父となんのわだかまりもなく話せる日が来るのかも知れない、と。そうほのかな希望を抱いていた。

「それは重畳」

「お前が考えてくれた炎を圧縮する技。俺はまだコスチュームに頼るし溜めるのにも時

間がかかるけどあいつは一瞬でそれをやって移動に使ってた」

「さすがはNo. 1ってところだな。自分の個性でできることを突き詰めてる」

「ああ……お前の、あの手や頭が生えるやつ。あれは自分で操作できるのか?」

話を変えるように轟が切り出す。昼間に呼人が披露した阿修羅スタイルの事を言っているのだろう。

「中身まで全部人間に変えると操作出来ないけど、一定以上モンスターの部分が残っていると操作できるって感じだな」

「なんか……違いがあるのか?」

「外見上は人間そのものにできるけど、耳郎だと音で違和感に気づきそうだし他にも穴戸とか五感が鋭かったり動物系の人は気配の差で気づくと思う」

「なるほど……そういうのもあるのか」

互いに学んできたことやこれからの課題を話したりしながら鍋をつつく。途中で席の移動が起こり、片付けが終わった頃にはB組の面々が小大の個性でソファ一持参で寮を訪問してきた。

八百万が人数分の紅茶を入れてくれ、それをみんなで美味しくいただきながらA組とB組の交流会が行われる。模擬戦まではほとんど交流は無かったのだが、それ以降は少しずつ交流をしていたので特にぎこちない空気が漂うこともなく、話は進んでいた。

隅の方に座ってぼうつと考え事をしていた呼人のところに、取蔭が1人で歩いてきて隣に座っても良いかと尋ねてくる。

「百竜隣空いてる?」

「空いてるぞ」

「じゃ、お邪魔しまーす」

そう言つて隣に座つた取蔭は、しばらく呼人と同じようにワイワイ騒ぐクラスメイト達に視線を向けていた。あまり呼人のように静かにしているようには見えない取蔭の珍しい様子に、呼人は何かあつたかと声をかけた。

「騒いでこないのか?」

「え? ああ、もうさつきうちで騒いだからさ。ちよつと疲れたつて感じ」

「なるほど。ならゆつくりしたいか」

「そそ」

かくいう呼人も、特段食事の際に騒いだわけではないのだが一緒に騒ぐよりも騒いでいるのを見るほうが好きだったので端の方でのんびりとしている。

しばらくそうやって座っていると、取蔭が呼人に話しかけてきた。

「ありがとね、百竜」

「ん?」

「この前、アドバイスくれたでしょ？ 私の個性の使い方」

彼女が言っているのは、対抗戦の後に自分の個性について皆に説明した呼人が、彼女には司銀龍ハルドメルグの人格と引き合わせ、自由に分離するものを飛翔させるという彼女の個性と似通った性質を持つハルドのアドバイスを伝えた時の事だ。彼女はそのアドバイスを受けてから更に発想を変え、色々なアイデアを生み出してはサポート科と一緒に実現したりしていた。

「あれは……俺じゃなくてハルドのものが多いだろ」

「それもそうだけども。でも義手でたくさん手作れないのかとか、教えてくれたのめっちゃ参考になったよ」

「そうか」

「もともと私さ、索敵とか攪乱はできるけど、自分で完結する能力が全然無かったの。見てたらわかるっしょ？」

取蔭の言っていることに、呼人は以前の彼女のやっていた事を思い出す。確かに彼女の個性は自分がやられづらくまた嫌がらせのような事をするのにおいては優秀だったが、一方で一人で相手を止める、捕獲するというのにおいては優れているとは言えなかった。模擬戦のときにも、爆豪に自分のパーツを体当りさせて足止めをしていたが、足止め以上の事は個人では出来ない。

もちろんヒーローは一人で戦うものではないし、出来ないことを仲間のより戦える者に頼る事もできる。そういうヒーローは普通にいる。だが彼女にとっては、それが悔しくて仕方が無かった。

「けど、あんたがああ言ってくれたおかげで面白いこと思いついたんだよね。ちょうど同じインターン先に八百万もいたしき」

「何をしたんだ？」

「パーツとパーツの間にロープ張ってヴィランを捕獲したりとか、網を張って民間人を救助したりとか。後手にスタンガン持たせて近寄せたりとかも。まだパーツで声を聞き分けるのは難しいけど、あちこちに盗聴器は仕込めるしき」

取蔭が思いついたというアイデアに、呼人は思わず笑ってしまふ。なんとも、良い意味でいやらしい戦い方を身に着けているようだ。

「ちよつとなんで笑ってんの」

「いや、いやらしい戦い方を身に着けてると思ってるな。そうか、八百万がいればその場で発想を形にしてくれるもんな」

「いやらしいってそれ私にとつては褒め言葉ね。でもそ。一人で行くなら荷物運ばないといけなくなるけどそれでもできることがめっちゃ増えたし、自分でも一人で戦えるんだと思ってる」

「やっぱり一人で戦えないってのは嫌だったか？」

呼人が尋ねると、取蔭は苦笑いしながら答える。

「そりゃあ、ね。みんなも使い勝手の良い強い個性だつて言ってくれるけどさ。でも宍戸とか拳藤と戦つても絶対に倒せなかつたから。普通にヒーロー目指す分には良いけど、周りがこんなに頑張つてると自分だけ置いてかれてる気がするんだよね」

それは嫌だった、と取蔭は語る。個性が、戦闘や索敵、救護など向き不向きがあるのは確かだ。例えば戦闘に秀でた轟や爆豪、緑谷の個性だが、一方で索敵能力はただの人間程度でしかない。逆に索敵に秀でた耳郎、障子、取蔭などの個性は戦闘における貢献度はあまり高くない。

だが、それも言っていられないのがヒーローというものでもある。いざヴィラン出現ともなれば、例えば戦闘に不向きなヒーローでも市民の盾にならなければいけない。だから、できることが多くて困ることはないのだ。

「思いついたのはお前だろ」

「でもやっぱ発想をもらつたのはあんただだったから。一応お礼言っておこうと思つて。ありがとね」

そう言うのと取蔭は、呼人の返事を待つこと無く夜になつても元気なクラスメイトの方へと去っていく。置いていかれた呼人の方も特に気にせず、再びブーツとした視線をク

ラスメイト達の方に向けながら考え事にふけっていった。

第80話

「ノーマン……?」

「ああ。はじめまして。あかり明」

「は、はじめまして」

2月に入り、雄英ではヒーロー公安委員会からの指示の元生徒たちにインターンを継続させていた。その中で呼人も、正月以降時間をかけてビルドメイクが主となって体裁を整えた山の内側に来た拠点を訪れていた。

そしてそれと同時に、モーメントやりザード達が日本中を回って保護してきた子どもたちも、少しずつだが集まり始めていた。

まだ用意が完全には整っていないこともあり、また子どもたちにとっても本来の家庭があることが何よりも望ましいだろうと呼人が考えていることもあり今連れてくるのは本当に切羽詰まっている子どもたちだけと指示を出していたのだが、それでも3人の子どもたちが2人の手で拠点まで連れてこられているところを見ると、やはりそういう子どもたちは数多くいるのだ。

「明は何をするのが好きだ?」

「え？ 私？」

一人目に呼人が声をかけたのは、拠点内に作られた図書室で静かに本を読んでいた少女だ。図書室といっても本の数も少なく、まだ子供部屋ぐらいの感じしか無いが子供の数が増えるまでには適度に増やして、その後は子どもたちの要望に合わせて揃えていくという話になっている。

呼人の質問に少女の代わりに応えようとしているアーニヤを手で制して、呼人はその少女の応えを待つ。

「……ゲームが好き」

「そっか。なんでゲームが好きなの？ それと、どんなゲームが好き？」

その少女の年齢が9歳であるとマドレから聞いていた呼人は、適度に難しい会話もできらるだろうと話をふくらませる。

「えつとね、ゲームをしているときは私もちゃんといえるの。ゲームしてないといなくなっちゃうんだ。後ね、ゲームだとマリオとマリオカートが好き」

マリオ、というのは、超常以前から長く人気を獲得しているゲームのことだ。赤が特徴のキャラクターが平面のステージを横に向かつてジャンプしたりダッシュしたりしながら進んでいくゲームであり、マリオカートとはそのキャラクター達を使ったレースゲームである。

そして少女の答えから明らかだが、彼女は透明人間である。彼女が言うには昔から、つまり生まれたときから透明だったらしく、異形型だと推測されている。そのためその姿を表に出すことが一切できず、それを心無い父親や祖父母に事あるごとに言われていたらしい。頼りだった母親も数年前に亡くなっており、味方が1人もおらずアパートの階段で倒れ込んでいた彼女をリザードが保護してきたそうだ。

「そっか。じゃあ今度みんなのできるようにゲーム買ってこようかな」

「ほんと!?!」

彼女が表情を明るくした、というのはその声からわかった。つらい生活をしてきたのだろうが、母親が良い育て方をしたのか自分が透明である事を悪いことだと思ふ以外は変にねじれていないようだ。

「それと、明」

「何?」

「明は、ちゃんとここにいるよ。見えなくても、いなくなったりしない」

そう言うのと、明が息をのんだ雰囲気伝わってきた。

「でも……でも、見えないよ。だからいないんだよ私は」

そう言う明の頭を、呼人は優しく撫でる。

「人間は、自分のできる方法でしか周りを判断出来ないんだ。だから、明のお父さんとか

おじいちゃんおばあちゃんは明がないって言うしか出来なかった。でもね。例えば明が最初に助けてもらったおじさん、わかる？」

「う、うん」

透明であることへの処世術が身につけているのか、首を縦に振りながらも声に出して返事をする。

「あの人は実はね、温度を見てるんだ」

「え？ どういう、こと？」

「あの人の個性は『蛇』なんだけど、蛇って、人みたいに目で見るだけじゃなくて、温度を見て周りを探すことができるんだ。ちよつと難しい話になるんだけどね、人の目っていうのは、光を受け止めてる」

「明るいから見えて、暗いと見えない、ってことでしょ？」

明の答えに、呼人は頷く。

「そう。そして明は、その光が通り抜けちゃうから普通の目じゃ見えない。でもさ、明はそこにいるから周りの空気より温かくてあのおじさんはわかつたし、俺は鼻が良いから『明の匂いがする』ってわかるんだ。それにこのアニーも人の『元氣の力』がわかるから、目を閉じてても明がここにいるよ、ってわかってる」

「そ、そうなの？ 私、ちゃんという？」

そう言う明の頭をポンポンと呼人は優しく叩く。

「いるよ。だってそうじゃなかったらこうやって触ることも出来ないし、こうやって撫でることも出来ないよ?」

呼人にそう言われて、ようやく彼女は黙ったままコクリとうなずいた。透明である、ということはおそらく周囲だけでなく自分にまで大きな影響を与えてきたのだろう。それは今すぐには溶けないだろうが、だんだん忘れていってくればありがたい。

「さ、そうしたらゆつくり本読んでて良いから。ご飯の時間になったら食堂に来るんだよ」

「うん。ありがと、ノーマン、さん」

「それと、見えないからって裸になったら駄目だよ」

「なんで? 見えないんだよ?」

「だって裸になったら寒いし、ぶつけたときに怪我するだろ? 別に服っていうのは身体を隠すためだけにあるんじゃないんだ。身体を守ったり暖かくしたりするためもある。だから、『見えなくなりたい』っていうとき以外は裸にならない。かくれんぼとかで使うのは良いかもしれないけどね」

ようやく笑ってくれた明の頭を優しく撫で、呼人はアーニヤの頭をポンポンとした後部屋を出る。言葉が互に通じない2人だが、それでも3人の中で1人だけ女性である

明の事をアーニヤは気にかけてか一緒にいるらしい。互いに何か話すことは無いが、図鑑なんかを一緒に眺めている姿をたまに見かけるとモーメントからは報告を受けた。

部屋を出た呼人は、もうひとりの子供のところへと向かう。もうひとりの子供は、連れてこられた時は何回も逃げ出そうとして、その後森で迷っているところを救助された後は自分の部屋に引きこもって食事も部屋に運ばれたものだけを食べて部屋から出てくることは無いそうだ。顔合わせついでになんとか話してみろと呼人は言われていた。

子どもたちがどういう部屋を求めるかはわからないので、拠点内には大部屋も個室も用意しており、あるいは工事をして2人一部屋、3人一部屋にする用意もある。そのうちの個室の一室に、その少年は引きこもっている。

「入るぞ」

合鍵を使つて室内に侵入した呼人は、少年の姿が見えないのに一瞬眉をひそめそうになるが盛り上がったベッドの上の布団を見てそこに少年が潜り込んでいるのだと理解する。正確な話は聞けていないが、少年が両親や周囲の人間たちから『心を読んで』と気味悪がられていたのは調査でわかっている。

呼人が布団をそつとめくると、うずくまっていた耳を抑えていた少年は険しい表情で呼人を見上げて顔をしかめた。『心が読める』という少年。それなら心の中に招き入れてしまおうと呼人はその耳を抑えている両手の上から自分の手をかぶせる。

そして、ちょうどよく呼人の手に集中している少年を心の中へと招き入れた。

呼人と少年が放り出されたのは、明るく広い、森を見下ろせる小高い丘の上。

精神世界に移ったさいに耳元から外れていた手に少年が慌てて耳を抑えようとするが、直後に先ほどとは別の意味で眉をひそめた。先程までうるさいほどに耳に響いていた声が、一人分しか聞こえない。

「もう聞こえないだろ？」

そう尋ねる呼人を警戒しながらも、少年はコクリとうなずいた。その少年をつれて近くの丸太に腰掛けながら、呼人彼に今いる場所について簡単に説明する。

「ここは俺の心の中の世界だ。俺とお前の身体はさっきの場所にあるまま。だが心だけが、こうやって俺の心の中にいる。だから外の人の心の声は遮断されている。だろ？」

『心を読まれている』という少年の周囲の大人達の発言。それに、先程の布団に隠れて耳を抑えていた動作。少年は、心が読めるのではなく、ただ本人でも意図せずに聞こえてしまっているだけではないのだろうか。

「なんで、わかるんだよ」

「そりゃあお前が『人の心を読める』っていう話は聞いてたし、さつき耳抑えてただろ？だから読んでるんじゃないかって、お前にその気が無いのに聞こえてうるさいんじゃないかと思つてな」

「……なんで俺をこんなところに連れてきた」

「まずはお前が落ち着かないと話すことも説明する事もできないだろ」

そう言った後少年が落ち着いたのを見て、呼人は説明を始める。

「まずは、個性を制御する方法を練習していこうか」

「できるわけないだろそんなこと。生まれてからずっとだぞ」

頑なに拒む少年の心を開かせるために、まずは話すよりも自分の事を見せるべきだと、呼人は少年を抱えて飛び上がる。当然少年は暴れるが、そんなことはお構いなしだ。今2人がいるのは、再現した世界ではなく記憶の世界。区分が難しいが、こちらはまさにモンスター達の記憶をそのまま反映した世界であり、そこに生きる生物、モンスター達の日々をただ繰り返し返すだけの世界になっている。そのため、モンスターに襲われることはないが干渉する事もできない。

「離せー」

「良いから。ちよつと高くなるぞ」

そう言つて呼人は森の木々の間を抜けて空高く飛び上がる。途中から騒いでいた少

年が静かになったので怖くなったかと様子を伺うと、真剣な表情で地面を見つめていて怖がっている様子には見えなかった。

「怖くないみたいだな」

「当たり前だろ。こんなの怖くねえよ。それに……」

「それに？」

「……ちよつと、楽しい、し」

「そうか。ならもうちよつとだけ、飛ぶからな」

そのまま少年をぶら下げて、呼人は空を飛んでいく。目指すのは、その近辺にあるとあるモンスターの巣だ。

呼人の言葉に一応はちゃんと応えてくれる少年だが、それには理由があった。小さい頃から彼が聞いてきたのは、彼を気味悪がる大人や子どもたちの声で、その半分以上は彼を疎ましく思う声を、それも一切のオブラートに包まない本心を聞いてきた。そんな彼にとつて、心の声と言っていることが一致している呼人は珍しく、またそれまでの人間ほど嫌には思えなかったのだ。

「ほら、見えてきたぞ」

指し示す先は、崖の張り出した部分に作られた大きな巣。そこには、一匹の赤い飛竜が眠っていた。その近くに呼人は着地し、少年をその場に下ろす。

「何、これ……」

「竜だ。ワイバーンとも言ふな。心配するな。絶対にこいつは俺たちには気づかない」

そう呼人が言うが、少年はゴクリと息をのみながら一歩後退りする。目の前にいる生物はそれだけ巨大で。その爪のひとかき、あるいは一噛みでたやすく自分を殺せるのだということが少年にはわかったのだ。

「俺の個性なんだけどな。俺はこんなモンスター達に変身できるんだ」

「え？」

困惑した様子の少年に、呼人は目の前で実際に変身してみせる。2人の目の前で眠っている火竜と同様の姿に。

「ほら。変身できるだろ？」

「お前の、心の中だから？」

「いや、普通に現実でも変身できるぞ。俺の個性だ」

意味がわからないという様子の少年に、呼人は自分が伝えたかったことを説明する。「昔はな、それこそ初めて変身したときとかは、この大きい姿になることしか出来なかつたんだよ。でもそれじゃあ不便だろ？ だからその後ずっと、例えばこの小さな翼みたいに大きさを変えたり、身体の一部だけを変化させたりできるように、って練習をしてたら今はこうやって人間の形のまま変身したりもできるようになった」

「だから、俺も練習すればできるかも、つて?」

「そういうことだ」

よく出来ました、と言わんばかりに頭を撫でる呼人の手を少年ははたき落とす。彼の年齢は11歳らしく、生い立ちを考えると精神的に老成している代わりに反抗期も迎えていそうな年頃ではある。

「できるわけ……」

「俺の仲間でな。ここの拠点にはいないけど凄い人がいるんだよ。お前が聞こえるみたいに、全部が見える人。例えばお前の過去とか、俺の過去とか、今あの人はどうしてるかとか。その人も小さい頃、お前と同じで見たくないのにちよつと思っただけで見えたらしくてな。例えば『ヒーロー』って思ったら、勝手にヒーローの色んな映像がブアーって勝手に頭の中に入ってくるんだって。お前ならどれだけしんどいかわかるだろ?」

呼人が話しているのは、星詠みから聞いた彼女が幼い頃の話だ。当時の彼女はそれを自分で抑えることも出来ず。そして、両親がそれぞれに不倫しているという状況を知ってしまったために子供心にそれは言わない方が良いのだと言い出すことも出来ず。そんなところを神王寺が救ったという。

「めちやくちや、しんどい」

「だろ? でもその人は今は、見たいときにしか見えないようにできてるし、見たくない

ものは見ないようにもできてる。ちゃんと訓練をすれば、できるようになるんだよ」

「俺も、なるかな。聞こえないように。本当にうるさいんだ。笑ってるのに、みんな俺を邪魔だと思ってるんだ」

そういう少年の表情が辛そうで。呼人は、再び少年を抱きかかえると空高く飛び上がった。

「そういうときは、俺がこうやって飛んでやるよ。良いだろ？ 空。嫌なこと全部忘れられる」

「……うん。もうちょっと、飛んでて」

少年に言われて、呼人は更に高度を上げて雲の中に突っ込み、しばらくそこを飛んだ後雲の上に飛び上がる。

「俺が変身できる奴らのことも、時間があったら教えてやる。たくさんいて、ちよつと恐いけど面白いぞ」

「……うん」

そうして2人は、少しの間飛行を楽しんだ。

地上に降りた後呼人は、改めて今現実世界で彼のいる場所について説明する。

「お前が現実で連れてこられたのは山の奥にある俺達の拠点だ。図書室も走れる場所もあるし、もう少ししたら外でも遊べるようにする。食べ物もちゃんとする。だから、もし帰りたくないならここで暮らさないか？ 帰りたいなら、家には返す」

もう自分で判断できる年齢だと、そして、その上で彼は帰らないだろうと踏んだ呼人は彼に選択を委ねる。もともとそういう子どもたちしか連れてこない予定だ。

「帰るのは嫌だ。でも……」

「……でも同じだったら嫌、か？」

コクリと頷く少年の頭を呼人は優しく撫でる。

「少なくとも大人は大丈夫だ。お前みたいなやつを助けたくて連れてきたんだからな。子どもたちは、これからお前みたいに家族や周りの人間から酷い事をされていたやつを連れてくる。だからもしかしたら、お前みたいに周りが全部嫌で、お前のことも嫌だっというやつもいるかもしれない。でもそういう奴を俺たちは助けたいと思ってるし、お前も互いに仲良くなってもらいたいと思ってる。それでも無理だったら、会わないように合わせる事もできる」

「仲良く、なる……」

「相手の思っていることが聞こえるお前には難しいかもな。子供なんて特に、何も考えな

いで相手をうざいと思ったりするから。だから、取り敢えず心の声が聞こえないような練習頑張ろうな」

「どうやるんだ？」

「例えば、お前は耳を抑えてるけどその声は頭の中に響いてくるんだろ？ だったら本物の耳じゃなくて、心の耳を抑えるって考えるんだ」

そんなことで？ と言いたげに少年は呼人見上げるが、個性とはそういうものなのだ。特に物理的に発露するのではなく精神に干渉する彼の個性はその傾向が強いだろう。

「他にも色々方法がある。だから一個ずつ試していこう」

呼人が言うと、今度こそ少年が力強くうなずいた。

「お前、名前は？」

「読山心」
よみやま こころ

「俺はノーマンだ。これからよろしくな。他の奴にも会ったときに名前を聞いておくといい。子供はお前の他にも後3人いる。1人は英語しかまだわからないから心の声が聞こえても何言ってるのかわからないだろうけどな」

「……会って、みる」

「おう」

3人目は心に比べて比較的簡単であった。保護された当初は虐待を受けていたらしく傷だらけで、保護されたのがつい昨日ということもあってアーニヤが治療をしてくれたもののまだ医務室で寝ているということであった。組織内で医療の心得があるのは神王寺と看護程度のマドレ、それに野性味溢れる治療程度ならできる呼人とイスカンドルぐらいだが、それでも治療用にとしつかりした設備にベッドが揃えられていた。

そのベッドの1つの上で、3人目の少年はもくもくと本を読んでいた。彼が倒れているときに抱えていたという雑誌で、ボロボロになっているがヒーローについてまとめた雑誌である。

「何の本を読んでいるんだ？」

「ヒーローの雑誌」

「そっか。ちよつとだけ話があるんだけど、良いか？」

呼人がそう言うのと、少年は聞き分けよく雑誌から顔を上げる。

「良いよ」

「じゃあ、まずは自己紹介から。俺の名前はノーマンだ」

「僕は力久火花。よろしくお願いします」

「よろしく。まずこのことだが、お前はこれから俺たちと一緒にここで過ごしてもらう。少なくとも、家には返せない。それは良いか？」

「なんで？ 僕いじめられても平気だよ。だってヒーローは負けないから」

まさに自分はそう思っているのだと言いたげな様子の火花だが、彼の身体に残っていた虐待の跡は酷いもので、中には骨折に至っていたであろうという傷跡もあったそうだ。

「火花はヒーローになりたいのか？」

「絶対になる」

「なんでヒーローになりたいんだ？」

「だってたくさんの人を助けたいから。みんなが危ない目にあっても、僕が助けるんだ」

助ける、と。まさに求められるヒーローとして当然で、そして一番大切な事を火花は言った。

「そうか。火花の個性はどんなのなんだ？」

「力を溜める個性だよ。グーって溜めた分の力を後で好きなときに使えるんだ」

「すごい個性だな」

「うん」

力を溜める、という名前から一瞬違うものを想像したが、彼の個性は発揮した物理的エネルギーを好きなタイミングまで溜めておいて放出できる個性のようだ。蓄積できる量によっては非常に強力である。

「でも個性が強いだけじゃ駄目だぞ。ちゃんといっぱい運動していっばい食べて、身体を大きくしないとな」

「やっぱりそう、かな」

「そうだ。ヒーローはみんな、個性に関わらず身体を鍛えるんだ。俺はヒーローの学校に行ってるから詳しいんだよ」

「そうなの!？」

呼人がヒーローの学校に行っている、と言うと、火花は表情を変えないまま若干キラキラとした目で呼人の方を見つめてくる。本当にヒーローというのが好きなようだ。そしてそれでも笑わない。

「ああ。だからヒーローの先輩から、火花に1つ大事な事を教えてやる」

「ほんと! 何? 早く教えて!」

急かす火花に、呼人はまず一番大事な事を教えることにする。今の彼にとつての、だ。「ヒーローが絶対に負けない、っていうのは、嘘だ。ヒーローは戦いに負けることもある」

「そ、そんなことない！ ヒーローは絶対に——！」

「落ち着いて聞いてくれ」

勢い込む火花を抑えて、呼人は続ける。

「でも、それでも、大事な事があるんだ。それは、絶対に他の人達を守ったり、助けたりすること。逆に言えば、自分がヴィランに負けて倒れたとしても、助けた人たちが逃げれたらヒーローの勝ちなんだ」

「で、でも……」

「だからな。ヒーローが負けちゃ駄目なのは、守る人たちの前で、だけなんだ。他のヒーロー達は、ヒーローが守らないといけない相手じゃないだろう？」

「……うん」

「じゃあ、ここで問題だ」

そう呼人は明るく問いかける。

「ヒーローが辛いとき、倒れそうなとき。心が傷ついてるときに助けしてくれるのは、誰だと思っ？」

「……わかんない。ヒーロー？」

「そうだ。ヒーローを助けてくれるのは、他のヒーローだけなんだ」

「そっか……そうだね。ヒーローは人を助けるんだもんね。同じヒーローでも助けるん

だね」

「そうだ。だから他の人の前じゃあずつと頑張つてるヒーローも、他のヒーローの前ではただの人間に戻ることができる。だからな、火花」

——泣いても良いんだぞ。

呼人は続ける。泣いても良いんだ。お前はまだ、ヒーローになる前の卵だ。これから成長していくんであつて、まだヒーローになるには身長も、筋肉も、力も、心の強さも足りない。だから、ヒーローの先輩の俺の前では、泣いて良いんだぞ。

そう、呼人は優しく語りかけながら火花を優しく抱き寄せる。泣け、と。笑えないぐらいに表情を固めてないといけないなら、いつそ思い切り泣いてしまえ。

そんな呼人の思いが通じたのか、少年は勢いよく泣き始める。彼の両親は、とても粗野で、かつ常識がわからず周囲に迷惑をかけてばかりの人物らしい。そのため例え彼が虐待を受けていることに周りの人間は気付いても、声をかけようとしなかったのだ。君子危うきに近寄らず、とはよく言ったものである。

だからこれまで一度も、心許せる誰かに吐き出すということ覚えてこなかった。信頼しかけた教師すらが、両親の怒声にあてられると火花を見捨てた。

だから、火花が物心ついてから思い切り泣いたのはこれが初めてだった。

泣くことに慣れていないのか下手くそに声を漏らしながら、まだ9歳になったばかり

の少年は声を上げて泣く。

その背中を、呼人は彼が泣き止むまでずっと優しく叩き続けていた。

番外編：モンスターと個性訓練・1

その日の放課後。呼人がいつもどおり放課後の個性の訓練に向かっていると、廊下で声をかけられた。

「おーい百竜」

「取蔭か」

「そそ。今から訓練する感じ?」

コスチュームを持った呼人にそう尋ねる取蔭に呼人は頷く。

「ああ。演習場を借りてる」

「そ、つか。夜とか時間空いてる日とかある?」

「別に時間を空けようと思えばいつでも良いが……。モンスターについて見たいのか?」

先日A組B組対抗戦において呼人の個性が暴露されその晩に精神世界に招き入れて簡単な説明をした後から、A組B組問わず色々な生徒がモンスター達に関して知りた、あるいは呼人の強さの秘訣や何か新しい発想がほしいなどと言った理由で呼人に声をかけてくるようになっていた。

「そうなんだけど……正直に言うとき、夏休みの圧縮訓練のときあんた凄い器用に私の攻撃避けたじゃん？」

「ああ、そうだったな」

「あんたの個性見せてもらったときにさ、『あーこれで慣れてたんだな』って思ったんだよね。だからそういうモンスターがいるならなんかヒントとか、戦ってみたなと思って」

そう言われて、呼人は彼女と模擬戦をした時の事を思い出す。確か身体をバラバラにして飛ばす彼女に対して、呼人はロープを使って一定距離以内への接近を許さなかった。確かにそのとき、モンスター達との経験が生きていたのは確かだ。

「それなら今日の夜でも。6時までには絶対訓練するからそれ以降ならいつでも良い。言ってくれたら俺がそっちに行く」

「え、いや悪いよ。てかこっちに來ると絶対物間絡むし」

「俺は別にどつちでも良いんだが」

「ていうかさ、あのあんたの心の中？　みたいなどころでも戦う練習はできるんでしょ？　演習場いるの？」

「あれはあくまで使えるものが見えるだけだから、力の使い方の制御とかは現実でやらないとできるようにならないんだよ」

「そういうことね。全部できるわけじゃないんだ」

「あくまでめちやくちやリアルなイメーজトレーニングってだけだから。逆に言えば戦闘経験とかはほとんどあそこでやってる」

その後取蔭と連絡先を交換し、『時間は後で連絡するよ』と取蔭と話して呼人は訓練に赴いた。

取り敢えず6時に一旦個性を制御する訓練を終えて携帯の連絡を確認すると、取蔭からメッセージが届いていた。

『他にも見たいって言ってるやついるんだけど良い？ 良いならやつぱりB組の寮に来てほしいんだけど』

おそらく取蔭が女子か誰かとの雑談の中でその話をし、それに丁度いいと他のクラスメイトが乗ったのだろう。B組から来る人間がいると言っても拳藤と鉄哲、それに拳藤に引きずられた物間がやってきて呼人の個性をコピーしたときにどうすれば良いか相談していったぐらいで、他のメンバーは交流があまり無かったのもあって話していかないのだ。

そのメッセージに『良いぞ。何時?』とだけ返信しておいて呼人は訓練を終えて寮への道を歩いた。

そして夜8時。取蔭に言われた時間にB組の寮を訪れると、A組と同様に夜は共有スペースが賑わう様子で多くの生徒が集まっていた。取蔭に招かれるままに共有スペースのソファに座ると、10人近くの生徒が集まってくる。

「これ全員?」

「時間分けても良いんだけど、あの感じでモンスター?　さん達に対応してもらえば同時にいけるんじゃないかと思って。駄目だった?」

「いや……それで良いなら大丈夫だが……。じゃあこの前みたいに円になつてくれるか」

呼人の指示通りに先日と同じように全員が手を繋ぐ。ちなみに今日は、円には参加していない泡瀬が手のひらをつなぎ合わせてくれた。

全員が手に集中し、やがて呼人の精神世界に潜り込む。

「やっぱり変な感じがするノ」

「ん」

「おー！ レイクがアリマース！」

「湖畔……」

「これ思ったんだけどさ、キャンプし放題じゃね!？」

円場の発言に皆はつとした顔を向ける。確かに精神世界に現実と遜色ない物を作れるのでやろうと思えばできることはできるのだが。

「ここで何食べても腹は埋まらないから餓死するぞ」

「なら短時間のピクニックならできるよね！」

「それならできる」

吹出もぜひぜひやってみたいたのことだ。

「さて、取り敢えず取蔭は個性に似た能力を持つモンスター、だな。他に個性に似た能力のモンスター呼んで欲しいやつはいるか」

呼人がそう問いかけると、取蔭の他に小森と鱗、宍戸、小大などが手を上げる。

(取蔭はハルド、小森は……ハザクを呼ぶか。鱗はレギオスで。小大はどうする?)

「小大、どういう能力が良いとかあるか? 小大と全く同じような能力のモンスターはいないんだが」

「ん、いないならなんでも良い、けど、遠距離攻撃ができる相手と模擬戦がしたい」

「わかった」

そこで取り敢えず小大にはレウスを呼んでおくことにする。一方的に殴られることになるが、まあ、遠距離攻撃持ちで適当なやつを他に思いつかないのだ。レギオスのほうが一撃が軽くて良いのだが、残念ながらレギオスは鱗とまったく系統が同じである。

呼人がモンスター達を呼ぶと、まず最初に現れたのはレギオスだった。両手を翼に変身させた状態で空から現れると、地面をひつかくようにして着地する。

「鱗、こいつがレギオス。結構近いと思うから手合わせでもなんでも好きに使ってくれ」
「あ、ああ」

「後で全員顔合わせしたら行くから」

特に紹介をすることなく放り出した呼人に鱗は驚きの目を向けるが、取り敢えず全員分呼んでおかないと始まらない。続いてやってきたハルドに取蔭、レウスに小大を引き合わせる。

「ハルド、お前と似た個性だから相手頼む。レウス、遠距離攻撃相手の練習をしたいそうだから適度に」

そして最後に歩いて現れたのは、フードを深くまで被った男。屍套龍ヴァルハザクの人格、ハザクである。彼はモンスター出会った頃の死体をかぶるといふ生態故か、人間の状態でも長いフードとマントを纏って身体を完全に隠していた。

「小森、グロテスクなのは大丈夫か？」

「ゾンビなら平気ノコ」

「じゃあ大丈夫だと思うが。ちよつと会話の形態が違うやつだから後で俺が通訳に来るから待っててくれるか？」

「会話の形態？　って何ノコ？　普通に話さないノコ？」

「ハザク、話しかけてみて」

呼人に言われたハザクが、その想念、イメージを小森に送りつける。いきなりそれを送りつけられた小森は、どんな内容だったかは呼人にはわからないが頭を抑えた。

「こいつはこういう話し方しか知らないんだ。結構しんどいだろう？　だから待っててくれ」

「わ、わかったノコ」

人間の伝達手段は、音で文字を伝える、というものしかない。そもそも、映像に音、匂い、触覚などを同時に送りつける古龍達の対話方法にいきなりはついていけないのだ。

「後の4人は、取り敢えずなんでも良い感じか？」

「取り敢えずかつこいいので！」

「何でも！　もつと細かく見てみたい！」

「闇の獣であれば何者でも」

「クールなカイジューもつと見たいデース！」

「私も同じですな」

誰でも良い、とのことなので暇を持って余しているモンスター達に取り敢えず適当に声をかけておく。そうすればちゃんと対応してくれるやつも現れるだろう。

取り敢えず全員相手をしてくれるモンスターを呼んだので、呼人はまず話すことが出来ずにぼうつと見ていたハルドと取蔭の方へと行く。ハルドは長い銀髪に片目が隠れている怜悧な美貌をした男性で、服装は裾の長い民族衣装のような、少々重たそうな服を来ている。

「取蔭、こいつはハルド。ハルド、取り敢えずお前からのイメージだと混乱するから、できただけシンプルにするか俺が通訳する」

『』

「え、今返事したの？」

「モンスターの一部の特に強い奴らは、そもそも俺達みたいに言葉で話すっていう概念が無いんだ。人間に姿になってもな。直接イメージを送りつけるっていう感じだから、人間が受けると混乱する」

「イメージ、を送る？」

怪訝そうにする取蔭に、呼人は一度ハルドにイメージを送ってもらおう。すると取蔭は

先程の小森同様に頭を抑えた。

「うわっ……しんど……」

思わずと言った感じに呟く取蔭を支えながら、呼人は続きの説明をする。

「まあそういうことだから。俺が通訳する。ハルドの方には取蔭の声を届いてるから普通に話しかけてくれて大丈夫だ」

呼人がそう伝えると、頭を振りながら体勢を戻した取蔭は、早速ハルドに能力を見せてくれるように頼んだ。

「じゃあさ、ハルドさん、の能力見せてくれない？」

私はこんなんだけど、と個性を使った取蔭が空中に跳び上がる。すると、それを見上げてニヤリと笑ったハルドの額の銀髪を押しつけて赤い核のようなものが露出し、続いてその纏っていた重たそうな服がズリユリと形を変えて浮かび上がる。

そしてハルドの頭上あたりまで上昇すると、一気に四散して飛翔した。

「まじっ!」

完全に自分のものと同じに思える能力に取蔭が驚愕の声を上げる。それを傍で退屈そうに見ていた小森も口元を手で覆って驚愕の表情をしていた。

ハルドのもととなっているモンスター、司銀龍ハルドメルグは、流体金属を自由に操る古龍。この流体金属の成分は分析してもらったことがあるが、水銀とその他色々、本

来なら常温で流体にならないであろう金属すら混ぜているらしくその正体は不明だそう。そしてハルドは、ただぶつけるだけだったモンスターの頃から進歩して自由にそれを操れるようになった。

しばらくその攻撃を避けて反撃しようとしていた取蔭だが、やがて完全には自由になつていない末端のパーツから撃ち落とされ、最後には本体まで捕縛されてしまう。

「ハルド、そこまで」

ハルドが拘束を解くと、圧倒された取蔭が地面に降りてきた。

「そりや……こんなのと戦ってたら私とやっても退屈か」

「まあまだ取蔭は発展途上だからな。こいつはもう何千年分の記憶を蓄積してるから経験も練度も違うだろ」

「そりや、そうだけどき……」

『』

取蔭ががつくしとうなだれると、ハルドが呼人にイメージを送ってくる。

「ハルドからいくつかアドバイスだそうだ」

「うん……よし、聞くよ。何？」

気を取り直した取蔭に呼人はハルドのアドバイスを伝えていく。

「まず、一部しかしつかりとした思考が通つてないのはもったいないから、全部隅々まで

思考を通せ、と言ってる」

「うん、それは課題。でもまだ慣れきってないんだよね」

「それと、パーツをせっかくわけられるのだから組み直して使ってみてはどうか、だって
さ」

「どゆーと？」

取蔭が首をかしげると、再び流体金属の小さな塊をいくつも浮かべたハルドは、それを一箇所に固めると手のような形にして呼人の身体を持ち上げる。

「うおっ、と。つまりばらせるんだから積み木かブロックみたいが好きに組み直して使えば良いんじゃないか、ってことらしい。後それぞれが勝手に浮くんだからつな
がって無くても大丈夫だろ、って」

呼人がハルドの思っていることをそう伝えると、取蔭は少し考える様子を見せる。そして身体を分離して浮かび上がると、それぞれを組み合わせてうまい形を作ったり、または本来つながらないパーツをつなげようと色々試していた。

「……うん。それちよつと試してみる。ありがとハルドさん」

「どういたしまして、だって。後最後もう一個」

「何？」

「模擬戦を見てたら目と耳でだけ索敵してたみたいだけど、音なら身体の他のパーツで

も察知できるんじゃないの、って。出来たら救助で活かせるって言ってる」
「音、って耳以外でどうやって……」

取蔭の疑問の言葉に、呼人は自分が知っているモンスター達の情報を話す。

『』

「例えば、発生させた音の反射を毛に受けて、そのちよつとした振動で獲物の位置を察知するモンスターもいるんだ。だから取蔭もそんな感じで、例えば索敵する時はもつと細かく分裂して小さい音でパーツが振動しやすくとか、後はどの振動はどんな言葉とかか練習したら良いんじゃないか、だつてさ」

「うひー……できるかも知れないけど大変ぞ」

取蔭はそう言っているが、やってみようというつもりはあるのだろうと、その不敵に上がった口角から呼人は悟った。もともと先日の対抗戦でも、爆豪の出力に対して索敵以外出来ずに敗れた彼女だ。何かしらできることはしたいといったところだろう。

「後俺からの発想言ってもいいか？」

「うん、どんどん言っちゃって」

「なら遠慮なく。取蔭の手つてさ、ばらしてとばしてもーつだよな」

「そうだね。増えないから」

「じゃあさ、例えば手首から先をばらして飛ばして、そのあとそこから十センチぐらいを

ばらしたところに義手つけたらどうなるんだ？　で、それをどんどん増やしてく感じ
で」

呼人の質問に、取蔭は目をパチクリさせる。そんな事を聞いたのは初めてだ、と言っ
た具合に。

義手というのは、腕の断面につけるものだ。呼人が言っているのは、腕の断面を増や
せる取蔭なら手の数無限大、というほどにはならないだろうが、手の数10本ぐらいは
できるのでは？　というアイディアだ。

「え、待ってそれめっちゃ面白そうじゃん！　今度サポート科行ってみる！」
「行ってらっしゃい」

取蔭がその後ハルドに細かいことについて尋ねてハルドがうまく流体金属で文字を
書いたりして対応し始めたので、呼人はもうひとりの古龍の相手をしている小森のそこ
ろへ行った。

「やつと来たノコ」

「悪いな待たせて」

「うそノコ。来てくれてありがとノコ」

フードで完全に顔を隠したハザクに先程ハルドに伝えたのと同じ事を伝え、呼人は小
森にどうしてほしいのか尋ねる。

「まず、どういう能力か知りたいノコ」

「そうだな。それは俺から説明するか。まずハザクの1つの能力として、めちゃくちゃ小さな肉食性の微生物を自由に操る。ハザク、出してみて」

呼人がそう言うと、ハザクのフードの隙間から薄茶色の靄のようなものが溢れ出した。

「これがその微生物。この群れをハザクは操って、触れた相手から生命エネルギー、まあわかりやすく言うと元気を吸い取って自分のものにする」

「微生物……どれぐらい飛ばせるのこ？」

「どれぐらい……。詳しく測ったことはないけど、数十キロは余裕じゃないかな。もともとモンスターのいた世界じゃあ森1つを死の世界に変えたりしてたわけだし」

「……やばすぎるノコ」

「後は例えば戦う時にはその微生物をホースから出した水を相手にぶつける感じで物理的にぶつけてふっとばしたりとかもしてる。それと、微生物の他にも特殊な菌類とも共生してて、そっちも何かを生やすって言うよりはそのまま生命エネルギーを吸って繁殖するって感じで周りをとにかく死の世界にしてしまおうって感じだな」

「人間ならどれぐらい堪えられるノコ？」

小森の問いかけに、呼人はハザクに尋ねる。

「本気でハザクが微生物とか孢子をぶつけたら即死。ただ立ってるハザクの半径100メートル以内にいるだけで5分、10メートル以内だと1分。1キロとかだと1日ぐらいいかかるらしい」

「……危ないノコ」

「まあ現実じゃあそうは使わん。それに生命エネルギーを感知する微生物を操るってことは、逆に災害救助とかだと微生物を飛ばして反応を探って場所を当てることとかもできるとことだ。今なら、吸わないようにって命令も出せるしな」

「……そういう使い方もあるノコ」

「……」

「そこでハザクがイメージを伝えてきたので、呼人は先程同様にそれを小森に伝える。

「ハザクからのアドバイスだが、目に見えるきのこよりも、触れているうちに体力が奪われていく菌を使ったほうが良いんじゃないかって。後対抗戦の最後のはなかなか良かったって言うてる」

「見られてたノコ。でも可愛くないからあんまり使いたくないノコ」

きのこが可愛いというのも呼人はあまりよく分からないが、彼女にもこだわりはあるのだろう。それは呼人も否定しない。

「まあじゃあ、なるべく使わないで倒す方法と、後は爆豪、轟あたりの超破壊を相手にしたときに何ができるかって考えるしか無いんじゃないか？」

「かわいく勝つ手段考えるノコ」

その後、胞子を飛ばす時の方法などについてハザクが上手くイメージの情報量を制限して伝え始めたので、呼人はその場を後にする。その後は鱗、小大のところを見に行つたが、それぞれ竜達は普通に意思疎通ができるのでレギオスとレウスがそれぞれ更に別の相手を呼んだりして良い感じにやりあっているように見えたので呼人も口を出さず、最後に見学組のところに行つた。

見学組は湖のほとりでミツネの張つた泡の上を滑つて遊んだり、その他ティガ、ナルガ、デイノ、ジンオウガらかつこいいモンスターたちと主に遊んでいた。中には群長クラスの固体に変身したジャギイの背中に乗つて走つてもらつたりしている者もいる。

吹出あたりは個性的に一度ティガに吠えてもらえば良いんじゃないかとも思うが、彼の場合は破壊力は有り余っているようだったのでまだ別の要素が必要なのだろう。むしろいかに破壊を減らして強力な相手を打ち倒すかという、爆豪に似たような悩みを持つていそだ。